岐阜県文化財保護センター調査報告書　第79集

深　橋　前　遺　跡

（第１分冊）

２００３

財団法人　岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第79集

深橋前遺跡

（第１分冊）

２００３

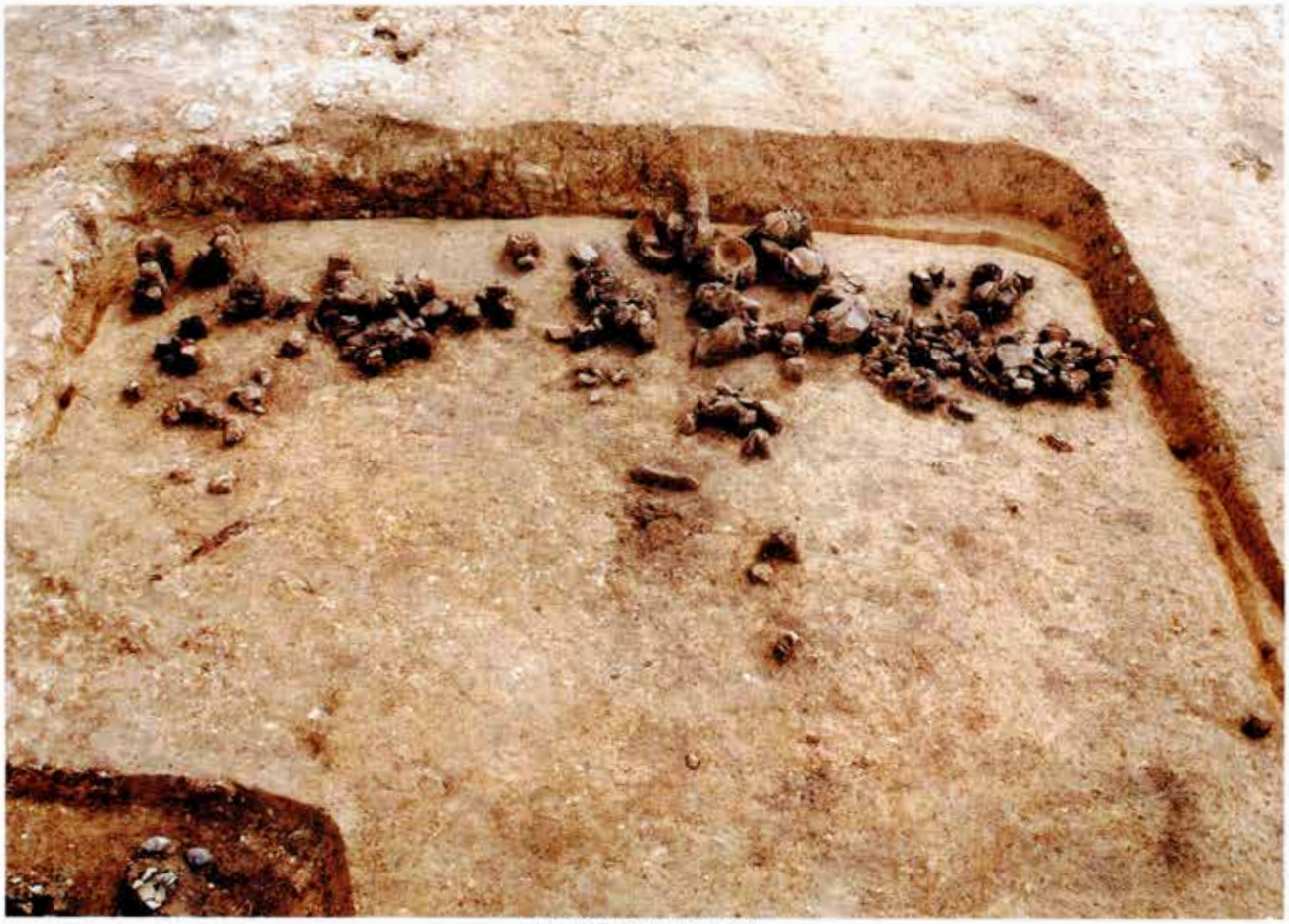
財団法人　岐阜県文化財保護センター

調査区遠景（南西方向より）

調査区近景

深橋前古窯跡

深橋前古墳



竪穴住居跡（SBF02）

銅鏃（SBA05出土）

赤彩は水銀朱

鈕具（1号火葬墓出土）

筒状銅製品（SBF08出土）

筒状銅製品（復元図）

火葬墓出土遺物（上）、深橋前古窯跡出土遺物（下）

序

美濃のほぼ中心部に位置する関市は、古代より武儀郡の中心地として栄えてきました。このたび、関市の豊かな盆地を望む丘陵地に計画された、関テクノハイランド開発事業に伴い、ここに所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本報告書はこのうち、深橋前遺跡・深橋前古墳・深橋前１～６号火葬墓・深橋前古窯跡の発掘成果を記録したものです。

今回の調査では、急傾斜地にあえて造られた弥生時代から古墳時代初頭の竪穴住居跡80軒、後期古墳、土坑墓、奈良時代の火葬墓、この付近で４例目となった平安時代後期の灰釉陶器窯などを確認しました。これにより、深橋前の地が、生活の空間（弥生時代から古墳時代の集落）・聖なる空間（古墳時代から古代に亘る墓所）・生産の空間（古代末期に操業した灰釉陶器窯）として存在していた各時期の様相が明らかになりました。

これらの調査の成果により、弥生時代から古代末期に亘る、当地域の先人の足跡を明らかにすることができました。そして今回の調査をはじめとする記録保存の積み重ねは、埋蔵文化財に対する関心を高めるとともに、地方における歴史研究に寄与することと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、地元地区の皆様に深く感謝いたします。

平成15年３月

(財)岐阜県文化財保護センター
理事長　服部卓郎

例　　言

1　本書は、関市下有知に所在する深橋前遺跡（岐阜県遺跡番号21205-09075）・深橋前古墳（岐阜県遺跡番号21205-09076）・深橋前１～６号火葬墓（岐阜県遺跡番号21205-09077～09079，09245～09247）・深橋前古窯跡（岐阜県遺跡番号21205-09080）の発掘調査報告書である。

2　本調査は関テクノハイランド開発事業に伴うもので、岐阜県土地開発公社から岐阜県が委託をうけた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、平成10・11年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当などは本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆分担は目次に示した。また、編集は松岡千年・安田正枝が行った。

6　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

7　地形測量・空中写真測量は国際航業株式会社に委託して行った。

8　第４章第５節石器・石器観察表については、㈱アルカに委託して行った。

9　竪穴住居跡および火葬墓・古窯跡出土の炭化材の樹種同定、住居跡・古窯跡出土の残留磁化測定、火葬墓・土坑墓のリン・カルシュウム測定、黒色地山の放射線測定、住居跡出土土師器・古窯跡出土灰釉陶器の胎土分析、住居跡出土の筒状銅製品の成分分析、銅鏃の成分分析・付着水銀朱の蛍光Ｘ線測定は、㈱パレオ・ラボに委託して行った。火葬墓の火葬壺内の人骨・竪穴住居跡から出土した人骨の鑑定は、岐阜大学医学部法医学教室の武内康雄助教授に依頼した。

10　巻頭カラーページの筒状銅製品の復元図は、松岡の原図により、河村千寿が作図した。

11　発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の方々からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略　五十音順）

赤澤徳明　赤塚次郎　井川祥子　石黒立人　伊藤秋男　伊藤　聡　伊庭　功　上村安生
内堀信雄　宇野隆夫　黒坂秀樹　齊藤基生　佐藤由紀夫　篠原英政　鈴木　元　鈴木敏則
高木宏和　田中弘志　永井宏幸　西田大輔　早川万年　林原利明　早野浩二　久田正弘
平田定幸　武内康雄　松村恵司　丸山竜平　山中　章　横田　宏　横山太郎　吉田英敏
和気清章　渡辺博人　関市教育委員会　関市下有知地区連合自治会　多気町教育委員会
福井市教育委員会

12　本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。

13　土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1996『新版　標準土色帖』17 版（日本色研事業株式会社）による。

14　調査記録及び出土品は財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

本文目次（第１分冊）

序
例　言

第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯 ……（松岡）　1
　第２節　発掘調査の経過と方法 ……（松岡）　3

第２章　遺跡を取りまく環境
　第１節　深橋前遺跡周辺の遺跡と歴史的環境 ……（松岡）　7
　第２節　深橋前遺跡周辺の地形と地質 ……（笹木）　8

第３章　基本層序と遺構・遺物の概要
　第１節　基本層序 ……（松岡）　10
　第２節　時期区分について ……（松岡）　12
　第３節　遺物の総数と遺物番号 ……（松岡）　13
　第４節　遺構分布図について ……（松岡）　14
　第５節　遺物の概要 ……（松岡・安田）　18

第４章　Ⅰ～Ⅲ期の遺構と遺物
　第１節　Ⅱ・Ⅲ期の遺構と遺物 ……（松岡）　25
　第２節　Ⅰ期の包含層出土土器 ……（松岡）　159
　第３節　Ⅱ・Ⅲ期の包含層出土土器 ……（松岡）　161
　第４節　包含層出土金属製品 ……（松岡）　192
　第５節　包含層出土石器 ……（㈱アルカ・松岡）　193

第５章　Ⅳ～Ⅵ期の遺構と遺物
　第１節　深橋前古墳と遺物 ……（安田）　215
　第２節　土坑墓・小石室・火葬墓 ……（安田・松岡）　221
　第３節　Ⅳ期の包含層出土須恵器 ……（安田）　237
　第４節　深橋前古窯跡 ……（安田）　242
　第５節　９・１０世紀の祭祀遺構 ……（安田）　299
　第６節　その他の遺構 ……（安田）　310
　第７節　Ⅵ期の包含層出土遺物 ……（安田）　311

第２分冊目次
　第６章　科学分析 ……　1
　第７章　考察 ……　69
　遺構観察表 ……　100
　遺物観察表 ……　102
　写真図版

図 版 目 次

図１　関市の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
図２　深橋前遺跡調査前地形測量図（グリット区割図）・・・ 2
図３　深橋前遺跡調査区（調査区割図）・・・・・・・・・・ 3
図４　深橋前遺跡周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・ 9
図５　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図６　Ｂ区基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図７　包含層出土遺物（Ⅱ・Ⅲ期）の状況 ・・・・・・・14
図８　調査区内遺構分布図・・・・・・・・・・・・・・・・15
図９　Ｄ・Ｅ区(・SBA14)遺構分布図 ・・・・・・・・・16
図10　Ａ・Ｂ・Ｆ区遺構分布図 ・・・・・・・・・・・・・17
図11　ＳＢＡ01周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・26
図12　ＳＢＡ01実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図13　ＳＢＡ03・06・09周辺地形図・・・・・・・・・・・28
図14　ＳＢＡ03・09実測図・・・・・・・・・・・・・・・・28
図15　ＳＢＡ03出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図16　ＳＢＡ09出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図17　ＳＢＡ04周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・30
図18　ＳＢＡ04実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図19　ＳＢＡ04出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図20　ＳＢＡ05周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・31
図21　ＳＢＡ05実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図22　ＳＢＡ05出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図23　ＳＢＡ06実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図24　ＳＢＡ06出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・34
図25　ＳＢＡ07周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・34
図26　ＳＢＡ07実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図27　ＳＢＡ07出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・36
図28　ＳＢＡ08・10周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・36
図29　ＳＢＡ08実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図30　ＳＢＡ08出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図31　ＳＢＡ10実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
図32　ＳＢＡ10出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・38
図33　ＳＢＡ14周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・39
図34　ＳＢＡ14実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
図35　ＳＢＡ14出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・40
図36　ＳＢＢ01周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・40
図37　ＳＢＢ01実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図38　ＳＢＢ01出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・42
図39　ＳＢＢ04・05周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・43
図40　ＳＢＢ04実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
図41　ＳＢＢ04出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・45
図42　ＳＢＢ05実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
図43　ＳＢＢ05出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・47
図44　ＳＢＢ06・07・10周辺地形図・・・・・・・・・・・47
図45　ＳＢＢ06実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
図46　ＳＢＢ06出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・48
図47　ＳＢＢ07実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
図48　ＳＢＢ07出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・50
図49　ＳＢＢ08周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・・・・50
図50　ＳＢＢ08実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
図51　ＳＢＢ11周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・51
図52　ＳＢＢ11実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
図53　ＳＢＢ11出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・53
図54　ＳＢＢ12周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・53
図55　ＳＢＢ12実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
図56　ＳＢＢ12出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・54
図57　ＳＢＢ13周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・55
図58　ＳＢＢ13実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
図59　ＳＢＢ13出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・56
図60　ＳＢＤ01周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・56
図61　ＳＢＤ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
図62　ＳＢＤ01出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・57
図63　ＳＢＤ03周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・57
図64　ＳＢＤ03実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
図65　ＳＢＤ03出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・58
図66　ＳＢＤ05周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・59
図67　ＳＢＤ05実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
図68　ＳＢＤ08周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・60
図69　ＳＢＤ08実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
図70　ＳＢＤ08出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・62
図71　ＳＢＤ10周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・62
図72　ＳＢＤ10実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
図73　ＳＢＤ10出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・64
図74　ＳＢＥ01周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・65
図75　ＳＢＥ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
図76　ＳＢＥ01出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・65
図77　ＳＢＥ03・04周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・66
図78　ＳＢＥ03実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
図79　ＳＢＥ03出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・67
図80　ＳＢＥ04実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
図81　ＳＢＥ05・09・10・11周辺地形図・・・・・・・・68
図82　ＳＢＥ05実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
図83　ＳＢＥ05出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・68
図84　ＳＢＥ06・24・25・33・26・34周辺地形図 ・・69
図85　ＳＢＥ06・26実測図・・・・・・・・・・・・・・・・70
図86　ＳＢＥ06出土遺物①・・・・・・・・・・・・・・・・70
図87　ＳＢＥ06出土遺物②・・・・・・・・・・・・・・・・71
図88　ＳＢＥ07・15・16周辺地形図 ・・・・・・・・・・73
図89　ＳＢＥ07実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
図90　ＳＢＥ07出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・73
図91　ＳＢＥ08・19・22・23周辺地形図・・・・・・・・74
図92　ＳＢＥ08実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
図93　ＳＢＥ09・10・11実測図・・・・・・・・・・・・・75
図94　ＳＢＥ09出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・75
図95　ＳＢＥ15・16実測図・・・・・・・・・・・・・・・・76
図96　ＳＢＥ15出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・77
図97　ＳＢＥ16出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・77
図98　ＳＢＥ17・18・21・28・29・32周辺地形図 ・・78
図99　ＳＢＥ17出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図100　ＳＢＥ17・18・21・28・29・32実測図・・・・・79
図101　ＳＢＥ29出土遺物①・・・・・・・・・・・・・・・・81
図102　ＳＢＥ29出土遺物②・・・・・・・・・・・・・・・・82
図103　ＳＢＥ19実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
図104　ＳＢＥ22実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
図105　ＳＢＥ23実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
図106　ＳＢＥ23出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・85

図107 ＳＢＥ24実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
図108 ＳＢＥ24出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
図109 ＳＢＥ25・33・34実測図 ・・・・・・・・・・・・・ 87
図110 ＳＢＥ27周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
図111 ＳＢＥ27実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
図112 ＳＢＥ27出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
図113 ＳＢＦ01・02・04・05・06・08・11・38周辺地形図・・・ 92
図114 ＳＢＦ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
図115 ＳＢＦ01出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
図116 ＳＢＦ02実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
図117 ＳＢＦ02遺物出土状況図 ・・・・・・・・・・・・・ 95
図118 ＳＢＦ02出土遺物① ・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
図119 ＳＢＦ02出土遺物② ・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
図120 ＳＢＦ04実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
図121 ＳＢＦ04出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・100
図122 ＳＢＦ05・06実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・101
図123 ＳＢＦ05出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・102
図124 ＳＢＦ08・11実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・103
図125 ＳＢＦ08出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・104
図126 ＳＢＦ11出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・105
図127 ＳＢＦ13・14・15・16周辺地形図 ・・・・・・・・105
図128 ＳＢＦ13・15・16実測図 ・・・・・・・・・・・・・106
図129 ＳＢＦ13出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・107
図130 ＳＢＦ15出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・107
図131 ＳＢＦ16出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・108
図132 ＳＢＦ14実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
図133 ＳＢＦ14出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・109
図134 ＳＢＦ17実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
図135 ＳＢＦ17・18・19・20・22周辺地形図 ・・・・110
図136 ＳＢＦ18実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
図137 ＳＢＦ19・20実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・111
図138 ＳＢＦ20出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・112
図139 ＳＢＦ22実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
図140 ＳＢＦ23・24・25周辺地形図 ・・・・・・・・・・113
図141 ＳＢＦ23・24実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・114
図142 ＳＢＦ23出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・115
図143 ＳＢＦ24出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・116
図144 ＳＢＦ25実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
図145 ＳＢＦ25出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・118
図146 ＳＢＦ25山側周溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・119
図147 ＳＢＦ27・28周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・120
図148 ＳＢＦ27実測図・出土遺物 ・・・・・・・・・・・・120
図149 ＳＢＦ28実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
図150 ＳＢＦ29・31・33周辺地形図 ・・・・・・・・・・121
図151 ＳＢＦ29実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
図152 ＳＢＦ29出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・123
図153 ＳＢＦ29山側周溝出土遺物① ・・・・・・・・・・124
図154 ＳＢＦ29山側周溝出土遺物② ・・・・・・・・・・125
図155 ＳＢＦ31実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
図156 ＳＢＦ31出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・126
図157 ＳＢＦ33実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
図158 ＳＢＦ34・35周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・128
図159 ＳＢＦ34・35実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・129
図160 ＳＢＦ34出土遺物① ・・・・・・・・・・・・・・・・130
図161 ＳＢＦ34出土遺物② ・・・・・・・・・・・・・・・・131
図162 ＳＢＦ34出土遺物③ ・・・・・・・・・・・・・・・・132
図163 ＳＢＦ35出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・133
図164 ＳＢＦ38実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
図165 ＳＢＦ38出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・136
図166 ＳＢＦ39実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
図167 １号方形周溝墓周辺地形図 ・・・・・・・・・・・137
図168 １号方形周溝墓実測図 ・・・・・・・・・・・・・・138
図169 ２号方形周溝墓周辺地形図 ・・・・・・・・・・・139
図170 ２号方形周溝墓実測図 ・・・・・・・・・・・・・・140
図171 ２号方形周溝墓出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・140
図172 ３号方形周溝墓周辺地形図 ・・・・・・・・・・・141
図173 ３号方形周溝墓実測図 ・・・・・・・・・・・・・・142
図174 ３号方形周溝墓出土遺物① ・・・・・・・・・・・143
図175 ３号方形周溝墓出土遺物② ・・・・・・・・・・・144
図176 ４号方形周溝墓周辺地形図 ・・・・・・・・・・・144
図177 ４号方形周溝墓実測図 ・・・・・・・・・・・・・・145
図178 ４号方形周溝墓出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・146
図179 ３・４号土坑墓周辺地形図 ・・・・・・・・・・・147
図180 ３・４号土坑墓実測図 ・・・・・・・・・・・・・・148
図181 ３・４号土坑墓出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・148
図182 段状遺構周辺地形図 ・・・・・・・・・・・・・・・149
図183 段状遺構実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
図184 段状遺構出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・150
図185 ＳＫＡ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
図186 ＳＫＡ01出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・151
図187 ＳＫＡ02実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
図188 ＳＫＡ03実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
図189 ＳＫＡ03出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・152
図190 ＳＫＢ03出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・153
図191 ＳＫＢ03実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
図192 ＳＫＦ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
図193 ＳＫＦ02実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
図194 ＳＸＢ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
図195 ＳＸＤ02実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
図196 ＳＸＤ02出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・155
図197 ＳＵＡ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・156
図198 ＳＵＡ01出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・156
図199 ＳＵＦ01実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
図200 ＳＵＦ01出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・158
図201 Ⅰ期包含層出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・160
図202 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物①（高坏）・・・・・・168
図203 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物②（高坏）・・・・・・169
図204 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物③（高坏）・・・・・・170
図205 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物④（高坏）・・・・・・171
図206 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑤（高坏）・・・・・・172
図207 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑥（器台）・・・・・・173
図208 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑦（壺）・・・・・・・・174
図209 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑧（壺）・・・・・・・・175
図210 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑨（壺）・・・・・・・・176
図211 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑩（壺）・・・・・・・・177
図212 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑪（壺）・・・・・・・・178
図213 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑫（壺）・・・・・・・・179
図214 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑬（鉢）・・・・・・・・180
図215 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑭（鉢）・・・・・・・・181
図216 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑮（甕）・・・・・・・・182
図217 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑯（甕）・・・・・・・・183
図218 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑰（甕）・・・・・・・・184

図219 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑱（甕）・・・・・・・・185
図220 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑲（甕）・・・・・・・・186
図221 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑳（甕）・・・・・・・・187
図222 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉑（甕）・・・・・・・・188
図223 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉒（甕）・・・・・・・・189
図224 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉓（甕）・・・・・・・・190
図225 Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉔（坏・ミニチュア）・191
図226 包含層出土鑷製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・192
図227 遺構内出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・202
図228 包含層出土石器１（弥生時代の石器）・・・・・203
図229 包含層出土石器２（弥生時代以降の石器）・・204
図230 包含層出土石器３（旧石器）・・・・・・・・・・205
図231 包含層出土石器４（旧石器）・・・・・・・・・・206
図232 包含層出土石器５（縄文時代の石器）・・・・・207
図233 包含層出土石器６（縄文時代の石器）・・・・・208
図234 包含層出土石器７（縄文時代の石器）・・・・・209
図235 包含層出土石器８（縄文時代の石器）・・・・・210
図236 包含層出土石器９（縄文時代の石器）・・・・・211
図237 包含層出土石器10（縄文時代以降の石器）・・212
図238 包含層出土石器11（縄文時代以降の石器）・・213
図239 包含層出土石器12（縄文時代以降の石器）・・214
図240 Ⅳ期深橋前古墳平面図・断面図 ・・・・・・・・216
図241 深橋前古墳石室内再利用面遺物出土状況、石室展開図 ・218
図242 深橋前古墳石室掘形平面図、断面図・・・・・・219
図243 深橋前古墳石室掘形断面図 ・・・・・・・・・・・220
図244 １号土坑墓実測図・出土遺物・・・・・・・・・・222
図245 ２号土坑墓平面図、断面図 ・・・・・・・・・・・224
図246 Ⅳ期２号・10号(SXD15)土坑墓出土須恵器（1)・・225
図247 Ⅳ期２号土坑墓出土須恵器（2）・・・・・・・・226
図248 Ⅳ期小石室(SZ08)石室平面図・展開図・・・・227
図249 SXB01･SXB02平面図、地面図、SXB03平面図 ・228
図250 Ⅳ期１号・５号火葬墓平面図・断面図 ・・・・230
図251 Ⅳ期１号火葬墓出土須恵器、鉸具 ・・・・・・・231
図252 Ⅳ期１号～４号火葬墓平面図・断面図 ・・・・233
図253 Ⅳ期６号火葬墓平面図・断面図 ・・・・・・・・234
図254 Ⅳ期６号火葬墓展開図・・・・・・・・・・・・・235
図255 Ⅳ期深橋前古墳、２号～５号火葬墓出土遺物 ・236
図256 Ⅳ期Ｂ区出土須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・238
図257 Ⅳ期Ｄ区・Ｅ区出土須恵器 ・・・・・・・・・・・239
図258 Ⅳ期Ｄ区出土須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・240
図259 Ⅳ期Ｅ区出土須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・241
図260 Ⅴ期深橋前古窯跡全体図 ・・・・・・・・・・・・243
図261 深橋前古窯跡窯体側面図・平面図 ・・・245・246
図262 深橋前古窯跡窯体側面図・断面図 ・・・247・248
図263 深橋前古窯跡附帯施設ＳＫ1、ＳＫ2、
ＳＫ3、ＳＫ5、ＳＫ8平面図・断面図 ・・・・・・251
図264 深橋前古窯跡灰原断面図 ・・・・・・・・・・・・254
図265 器種別割合グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・・266
図266 碗法量グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・268
図267 碗高台法量グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・・269
図268 皿法量グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・270
図269 皿高台法量グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・・271
図270 瓶法量グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・272
図271 瓶高台法量グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・・273
図272 皿状焼台法量グラフ ・・・・・・・・・・・・・・・274
図273 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物①燃焼室・焼成室・煙道部 ・275
図274 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物②SK1 ・・・・・・・276
図275 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物③SK2 ・・・・・・・277
図276 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物④SK3 ・・・・・・・278
図277 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑤SK3 ・・・・・・・279
図278 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑥SK1、2、3接合、SK4、SK5 ・280
図279 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑦SK4～8周辺・・・281
図280 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑧灰原 碗（1）・・282
図281 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑨灰原 碗（2）・・283
図282 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑩灰原 碗（3）・・284
図283 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑪灰原 小碗･輪花碗･深碗 ・・285
図284 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑫灰原 皿（1）・・286
図285 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑬灰原 皿（2）・・287
図286 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑭灰原 輪花段皿･大皿･有台皿・・288
図287 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑮灰原 長頸瓶（1）・・289
図288 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑯灰原 長頸瓶（2）・・・290
図289 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑰灰原 長頸瓶（3）・・291
図290 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑱灰原 壺･甕･蓋･鉢・・292
図291 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑲灰原 文字・・・・293
図292 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑳灰原 絵・線刻・・・・294
図293 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物㉑灰原 皿状焼台（1）・・・295
図294 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物㉒灰原 皿状焼台（2）・・・296
図295 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物㉓灰原 輪トチ・焼台 ・297
図296 Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物㉔灰原、SK3 碗・皿・・298
図297 Ⅴ期SXD13墓出土遺物・・・・・・・・・・・・・・301
図298 Ⅴ期SXD13平面図・断面図 ・・・・・・・・・・・301
図299 Ⅴ期SXD07、SXD08平面図・断面図・・・・・・302
図300 Ⅴ期深橋前古墳・Ｄ区遺構出土遺物・・・・・・303
図301 Ⅴ期SXD15平面図･断面図、遺物出土状況図 ・304
図302 SXD15平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・305
図303 SXD06、SXD14、SXD16平面図・断面図 ・・・306
図304 Ⅴ期Ｄ区SXD15出土遺物① ・・・・・・・・・・・307
図305 Ⅴ期Ｄ区SXD15出土遺物② ・・・・・・・・・・・308
図306 道路状遺構実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・310
図307 Ⅴ期Ｄ区包含層出土遺物① ・・・・・・・・・・・312
図308 Ⅴ期Ｄ区包含層出土遺物② ・・・・・・・・・・・313
図319 Ⅴ期Ｄ、Ｅ区包含層出土遺物③ ・・・・・・・・・314
図310 Ⅵ期中近世陶器・・・・・・・・・・・・・・・・・・315

表　目　次

表１　深橋前遺跡発掘調査・整理作業の記録 ・・・・　4
表２　深橋前遺跡の時期区分・・・・・・・・・・・・・・　12
表３　実測遺物一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
表４　個体数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・267
表５　遺構計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・309

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

昭和62年関市下有知地区に、関テクノハイランドの開発が計画された。これに伴って実施された遺跡調査までの経過は、『榿ノ木洞遺跡』・『砂行遺跡』・『南青柳遺跡　大平前遺跡』に詳述されている。したがって、本節では深橋前遺跡の調査に至る経緯についてのみ記すこととする。

計画当初、当該地区に、遺跡は確認されていなかった。

平成６年12月６日に、岐阜県教育委員会・関市教育委員会・(財)岐阜県文化財保護センターによって実施した踏査の結果、遺跡が存在する可能性があるとされた地点の内、字深橋前と字小和田の一部の試掘調査を平成９・10年度に行った。

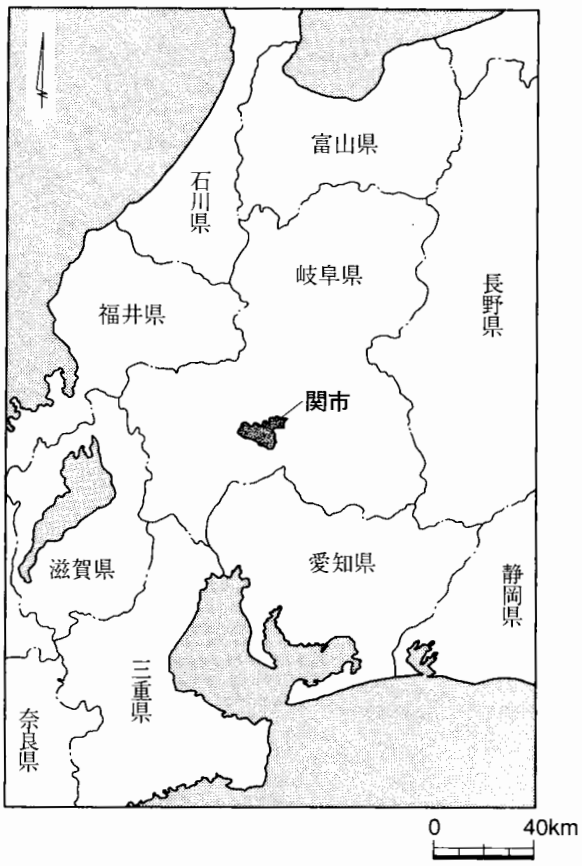


図１　関市の位置

試掘調査は、遺跡の可能性があると考えられたＡ・Ｂ区裾部にトレンチを設けて掘削したが、Ｂ区裾部のトレンチで窯跡の灰原の西端部を確認した。また、Ａ区裾部では多数の土師器が出土した。そのため、後者の範囲を確認するために６本のトレンチを入れた結果、東丘陵の尾根部までは竪穴住居跡が広がっていることがわかった。また、Ｂ区裾部から西丘陵全域にかけて15本のトレンチを入れ、西丘陵にも竪穴住居跡、灰釉陶器の出土する土坑が広がっていることを確認した。

これらの結果を踏まえて、平成10年度第２回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、その結果現在の深橋前遺跡の遺跡範囲の本発掘調査が必要であると決定した。

なお、古窯跡・古墳・６基の火葬墓については文化財保護法第57条の6における遺跡発見の通知を、岐阜県教育委員会に提出し、遺跡名は「深橋前古窯跡」・「深橋前古墳」・「深橋前１～６号火葬墓」と決定した。

また、「深橋前遺跡」については、Ｆ区のすべてが、字小和田にのびているが、そのほかのＡ～Ｅ区は字深橋前に存在することから、同様に岐阜県教育委員会の通知により「深橋前遺跡」とした。

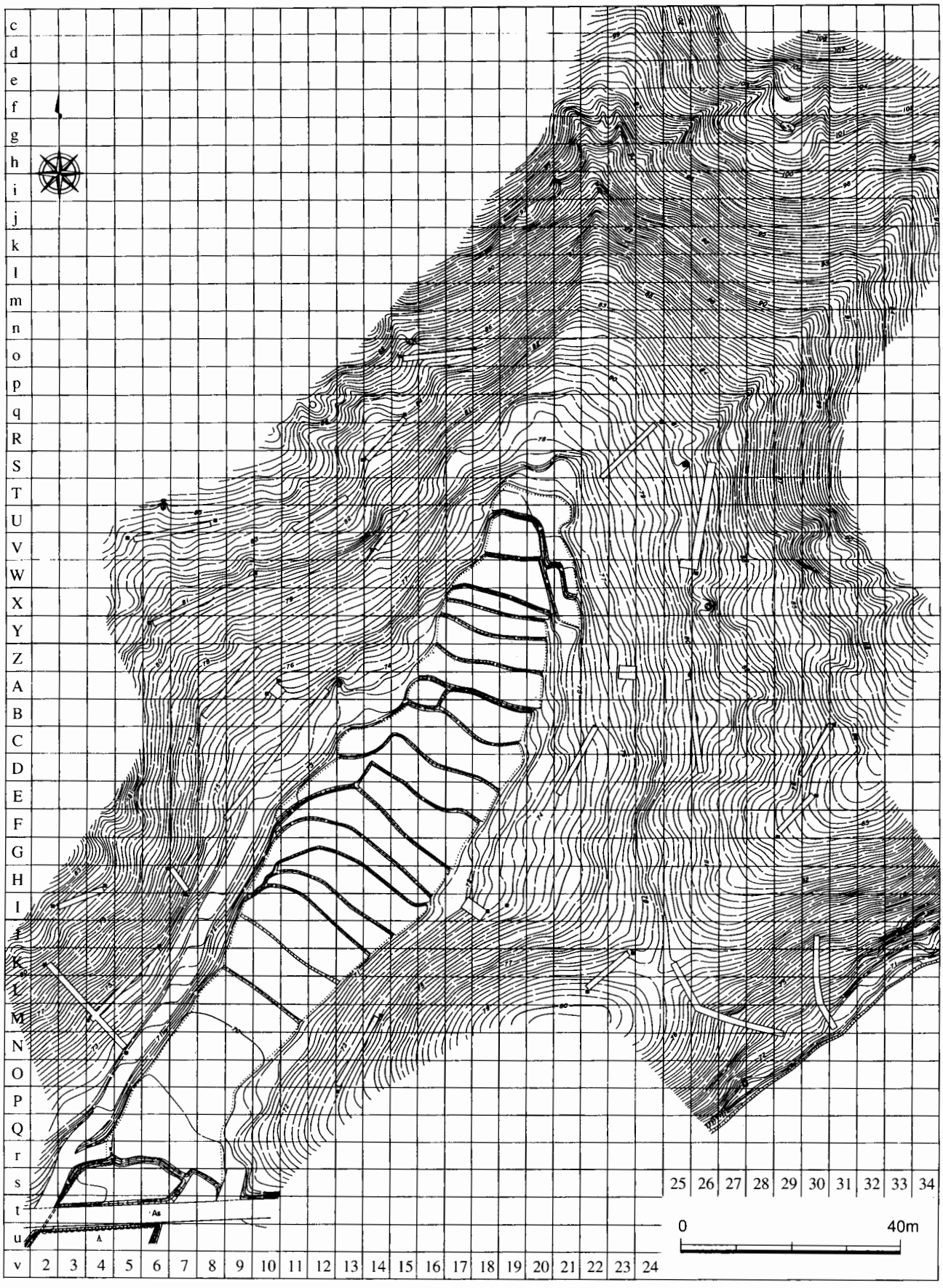


図2　深橋前遺跡調査前地形測量図（グリット区割図）

第２節　発掘調査の経過と方法

第１項　調査期間

平成10年４月24日～平成11年12月10日

第２項　グリッド設定

グリッドの設定にあたっては、調査前に実施した地形測量終了後、座標北を基準として５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。図２がそれであり、西から東に向かって１～34列、北から南に向かってｃ～ｖ（古墳以外の遺構はすべて中央部付近に集中する。そのため、包含層などの遺物のグリッドが混乱しないように中央部Ｒ行からＱ行までを大英字とする。）とした。

第３項　調査区の設定

深橋前遺跡では、発掘調査にあたってＡ～Ｆ区の６区に分けて調査を実施した。（図３参照）、この調査区名は、遺構記号と遺構番号の間に記すなど、本書で多く用いている。（e.g. ＳＢＡ01はＡ区の１号住居跡）なお、各区の区割りは、立地条件に考慮して、原則として調査順に示した。各区の概略は次のとおりである。

Ａ区　東丘陵の西向き斜面、洞の入り口方面。浅い谷状の地形。ＳＢＡ14は調査中に確認された竪穴住居跡。この付近は飛び地。

Ｂ区　東丘陵の西向き斜面、洞の奥側。浅い谷状の地形。

Ｃ区　洞の最奥部、頂上部より少し下った部分。深橋前古墳とその周辺。

Ｄ区　西丘陵の東向き斜面、洞の奥側。浅い谷状の地形。

Ｅ区　西丘陵の東向き斜面、洞の入り口方面。

Ｆ区　東丘陵の東向き斜面。Ａ～Ｅ区とは洞を異にする。

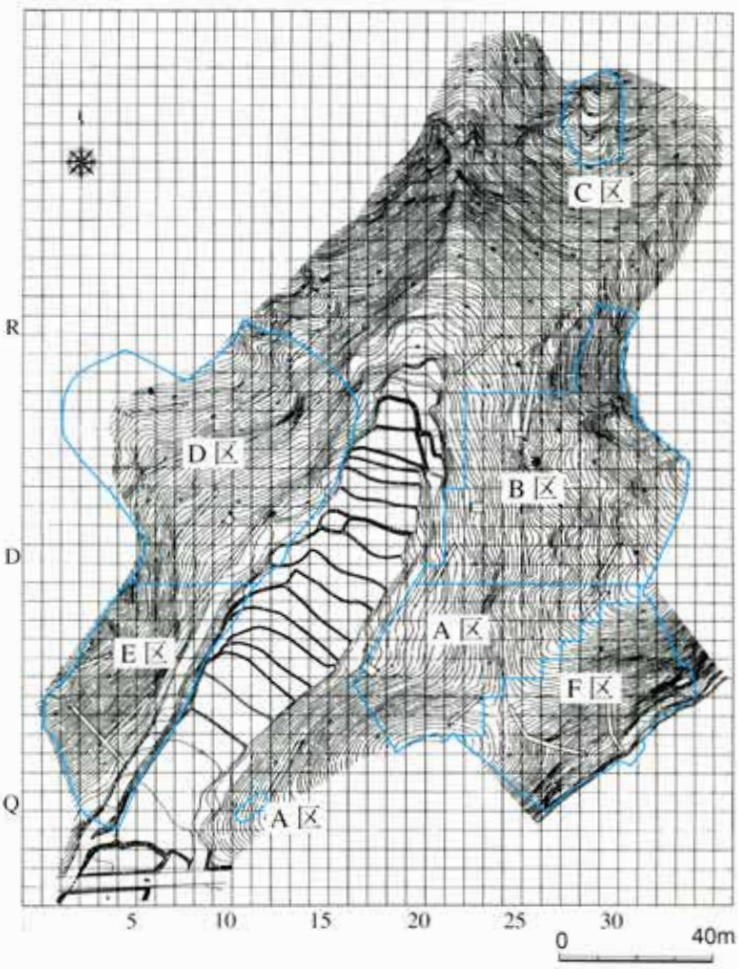


図３　深橋前遺跡調査区（調査区割図）

第４項　調査対象面積

１２，８００㎡

第5項　調査の経過

平成10年度から行った、発掘調査・整理作業の経過は、表1のようである。

表1　深橋前遺跡発掘調査・整理作業の記録

			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
平成10年度	A・B区	機械掘削	―	―	―									
		包含層掘削		―	―	―								
		遺構検出			―	―	―							
		遺構掘削				―	―	―						
		遺構実測					―	―	―					
		遺構精査							―					
		その他(空撮・現説等)							空撮					現説
	C区	機械掘削			―									
		包含層掘削								―	―	―	―	―
		遺構検出								―	―	―	―	―
		遺構掘削								―	―	―	―	―
		遺構実測											―	―
		遺構精査												―
		その他(空撮・現説等)											空撮	現説
	D・E区	機械掘削	―	―	―									
		包含層掘削						―	―	―				
		遺構検出							―	―	―			
		遺構掘削								―	―	―		
		遺構実測									―	―	―	―
		遺構精査											―	―
		その他(空撮・現説等)											空撮	現説
平成11年度	F区	機械掘削	―	―										
		包含層掘削		―	―	―	―							
		遺構検出			―	―	―	―						
		遺構掘削				―	―	―	―	―				
		遺構実測						―	―	―	―			
		遺構精査								―	―			
		その他(空撮・現説等)								空撮	現説			
		一次整理										―	―	―
平成12年度		遺物洗浄・注記	―	―	―									
		分類・台帳記入	―	―	―	―	―	―						
		接合・復元				―	―	―	―	―	―	―	―	―
		計測・一覧表作成									―	―	―	―
		実測・トレース								―	―	―	―	―
		記者発表								発表				
平成13年度		分類・台帳記入	―	―										
		接合・復元	―	―										
		計測・一覧表作成					―	―	―	―	―	―	―	―
		実測・トレース	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
		レイアウト・執筆										―	―	―

第６項　調査方法と主な遺構

（１）現場での調査方針

①掘削と遺構記録

古墳の主体部の表土を除いて、遺跡範囲内の表土、包含層の２／３程度を、重機で除去し、あとは人力によって（遺構の検出までの状況によって、鋤簾・ねじり鎌を使用）遺構の検出を行った。検出した遺構は、写真を撮った後、その中心点である蓋然性が高い点を中心に主軸を設定し、これと直角に十字の畦を設定した。埋土の掘削は、土層を確認しながら慎重に行った。畦の土層は写真を撮り、１／20の縮尺で（重要なものは１／10）記録を残した後除去した。遺物は、出土状況と遺物間の前後関係、また所属層位を理解するために極力その場に残して掘削を進めたが、やむを得ない場合にはサイトシステムで取り上げ、下層を追求した。完掘後は、出土遺物を残して写真を撮り貼り床・柱穴・壁溝を追求し、１／20の縮尺で記録した。（遺物が掘削の妨げとなる場合にはサイトシステムで取り上げた。）なお、埋土の関係で正しい床面が検出できなかった場合や、下層に遺構が残されている場合も想定して、完掘後は最初に設定した十字トレンチに沿って、必ず基盤層までの断ち割りを行った。ＳＢＡ05の下層のＳＢＦ38はこの調査によって検出し得たものである。

②空撮と全体把握

おおよその区ごとに掘削の終了した時点で、実機もしくはラジコンヘリによって、航空写真撮影と航空測量を実施した。図版で使用した航空写真はこの際のものである。また、遺構分布図・遺構の周辺地形図はこの成果によっている。

③科学分析

遺構や遺物などで、年代や材料などが分析の結果はっきりするものについては、サンプルを採取し科学分析を適宜行った。第６章の科学分析はその成果を載せたものである。分析結果の中には、実際の土器の編年観に合わなかったものもあるが、現在の科学分析の状況を示すものとしてすべてを載せてある。

（２）整理作業の方法

基本的な作業は、表１のとおりである。これと併行して、金属製品については保存処理を行った。実測した７点の金属製品は、奈良文化財技術協会においてすべて保存処理済みのものである。

第７項　遺跡遺物の公開

平成11年 3月 6日（土）　Ａ～Ｅ区現地説明会

平成11年12月 4日（土）　Ｆ区現地説明会

平成12年11月28日（火）　筒状銅製品記者発表

平成13年10月 6日（土）　四県土器研究会（深橋前遺跡の土器を検討）

平成13年11月17日（土）～12月16日（日）（財）岐阜県文化財保護センター発掘速報展（岐阜県博物館）において遺物展示

第８項　発掘調査及び整理作業の調査体制

理事長　村木光男（平成10・11年度）、服部卓郎（平成12・13年度）

専務理事　原隆男（平成10～12年度）、成戸宏二（平成13年度）

常務理事　石黒美智雄（平成10年度）、二山晃（平成11・12年度）、福田安昭（平成13年度）

経営部次長　平林哲男（平成10年度）、坂東隆（平成11・12年度）、福田照行（平成13年度）

調査部長　山元敏治（平成10・11年度）、高橋幸仁（平成12年度）、武藤貞昭（平成13年度）

調査部次長　高橋幸仁（平成10・11年度）、武藤貞昭（平成12年度）、片桐隆彦（平成13年度）

担当調査課長　片桐隆彦（平成10年度）、柘植卓伸（平成11年度）、飯沼暢康（平成12年度）、高木徳彦（平成13年度）

担当調査員　笹木幸司（平成10年度）、松岡千年（平成10～13年度）、安田正枝（平成10・12年度）

調査員（研修）　伊藤聡（平成10年度）

発掘作業従事者　杉原麻記（補助調査員）

発掘作業従事者（作業員）

安宅邦子	鐙家義芳	飯尾かをる	石木徳江	石木富士子	五十川港
井上実	今井長治郎	今井つきゑ	岩田稔	宇野京子	遠藤薫
大角孝子	大山敏郎	奥田しげ子	片桐かなえ	片桐とき江	河合多美子
川角ひとみ	北川政子	後藤謙	柴田竜彦	下野昌江	杉山陽子
高井譲	高井芳枝	高岡良夫	高橋妙子	多田千恵子	田中さと子
千田明子	冨田レイ子	長沢秋雄	中根友明	中野青平	中村光嗣
(故)丹羽輝美	樋口百合子	平川節雄	平光進	藤崎工	藤原守
古田真佐代	古田八千代	堀田煌子	松田義博	三島彰	森許良
矢崎久子	藪下烈	山岡孝祐	山田三郎	山田たつ子	吉田隆男

整理作業従事者（作業員）

家岡久美	今津理	春日井典子	後藤悦子	坂本美保子	澤田昌子
竹部泉	谷口美奈子	長柄励子	野尻みどり	林浩美	堀三恵
渡辺泉					

第２章　遺跡を取りまく環境

第１節　深橋前遺跡周辺の遺跡と歴史的環境

深橋前遺跡周辺の遺跡については、近隣の『榿ノ木洞遺跡』・『砂行遺跡』・『南青柳遺跡』で詳述されている。そのため、ここでは深橋前遺跡で検出された遺構に関連する事柄と、今までの各々の報告書において触れ忘れられたことについてのみ記すことにする。記述の参考に、図４を掲げたが、これは関テクノハイランド開発予定地周辺のみに限定したものである。このうち、上の遺跡地図は、旧地形が比較的よくわかる、字界図に遺跡範囲を乗せたものであり、下の遺跡地図は、現在の関テクノハイランドの地形図上に遺跡を乗せたものである。

深橋前遺跡の範囲内で、もっとも古い時代の遺構は、80軒に及ぶ竪穴住居跡であり、ほとんどが、弥生時代末から古墳時代初頭の土器を伴うものである。したがって、この地には同時期の集落の存在した可能性が窺える。また竪穴住居跡のほとんどは、丘陵頂上部から端部にわたる傾斜地につくられている。これは、成瀬正勝氏が「砂行遺跡における住居形態と集落形態」(1) において砂行型急斜面集落と仮称した集落の形態であり、深橋前遺跡に近い砂行遺跡・南青柳遺跡のほか、加茂郡富加町大平賀の後平遺跡においても同様に展開している。近年、これらの中山間地における弥生時代末から古墳時代初頭の集落の形成は、在地諸勢力や広域な文化の境界域を考える上で注目を浴びつつある。さらに出土した土器の特徴などから、日本列島を横に結んだ、東西文化の交流のみならず、南北方向にも繋げる広域な文化のネットワークを考える上で、非常に重要なものとなりつつある。

中期古墳では、変形神獣鏡を出土した砂行遺跡１号古墳があり、また後期古墳では、砂行遺跡内に立地する６基の古墳のほか、寺田古墳がある。

火葬墓については、砂行遺跡範囲内に提瓶を骨蔵器として坏蓋をかぶせた、砂行火葬墓が確認されている。横瓶を骨蔵器として坏蓋をかぶせた、深橋前１号火葬墓と同様、小さな石室の中に骨蔵器を埋納する構造であった。ところで、岐阜県内でこれまでに確認されている火葬墓は深橋前１～６号火葬墓を含めて14例にすぎない。このうちの２例は関市下有地の重竹Ｂ地点で検出されており (2)、現在確認されている火葬墓14例のうち、９例は関市北部に集中していることになる。(3)

灰釉陶器窯跡は、関市北部から美濃市西南部でやや集中して確認されている。深橋前古窯跡の近辺では、榿ノ木洞１号古窯(4)・砂行古窯跡(5) が発掘調査されているほか、末洞２号古窯(6) も試掘調査の結果、灰釉陶器窯跡であることが確認されており、これらは10世紀前半のものと考えている。また美濃市西南部では、桜洞1号窯・大洞窯・松毛窯が発掘されており(7)、関市北部の古窯跡群に続く時期（10世紀末頃）に位置づけられている。

ところで、深橋前遺跡の存在する関市下有知地区は、律令制下における美濃国武義郡有知郷(8) である。この地域は、景行天皇紀(9) に初見する「ムゲツ氏」の跡部郷に続く基盤と考えられる。また、考古学的見地から郡家の存在したとの傍証を固めつつある弥勒寺東遺跡(10) からも長良川を隔てるとはいえ、そう遠くはない位置に存在する。重竹遺跡・榿ノ木洞遺跡、などの古代集落と併せて、灰釉陶器窯の分布は注目されるべきであろう。早川万年氏の示唆されるように、「官営工房」的な要素を

見いだすことも可能かもしれない。(11)

第２節　深橋前遺跡周辺の地形と地質 (12)

深橋前遺跡は、岐阜県の中央部の南寄りに位置する、関市下有知深橋前・小和田地内に所在する。

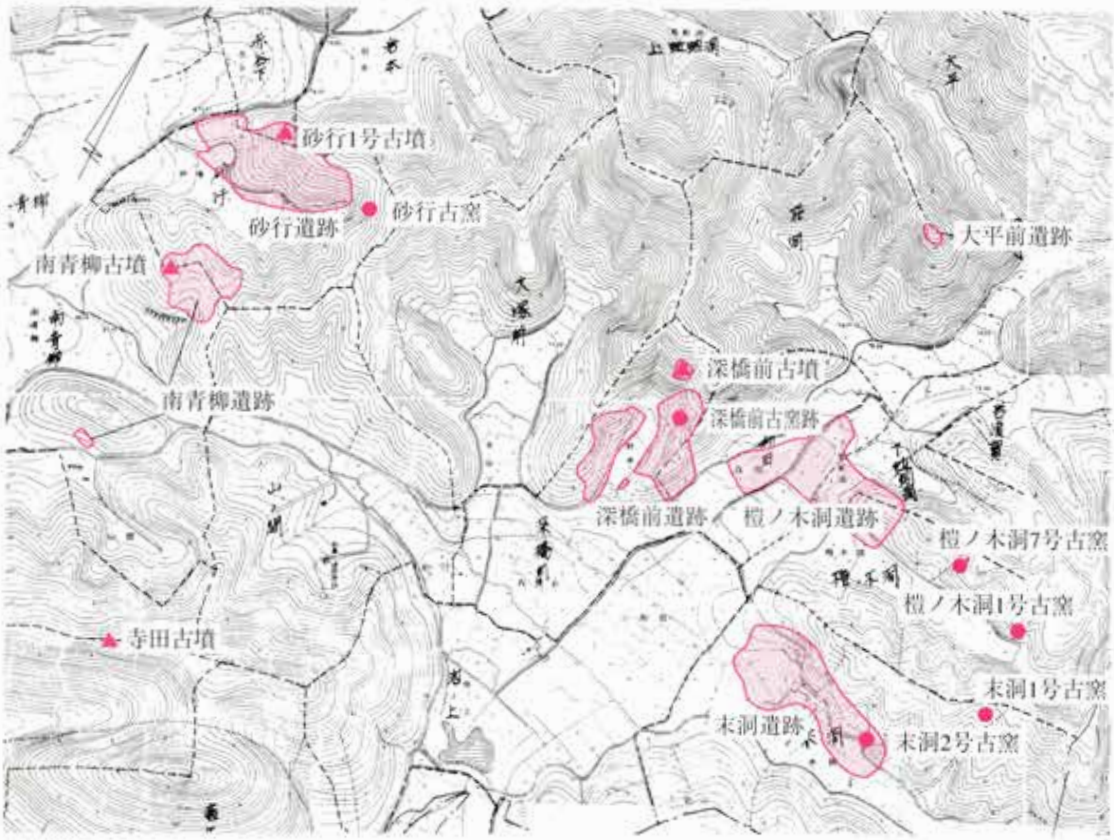
本遺跡周辺の地形には、山地・台地・丘陵がある。北側には能郷白山（1617m）を主峰とする美濃越前山地が広がるが、この美濃越前山地は長良川によって分断され、その東部山塊は郡上・美濃山地と呼ばれ、本遺跡周辺の山地の標高はおよそ600m未満である。西側には、美濃・関台地と呼ばれる、長良川によって形成された数段の河岸段丘からなる砂礫台地が広がる。下有知周辺は、このうちの中・下位面上に位置する。また、南東の方向には、加茂郡富加町を経て美濃加茂市蜂屋に至るまでの丘陵（蜂屋丘陵）が、美濃越前山地の南端部に接して見られる。

本遺跡は、上記の郡上・美濃山地のほぼ南西端に所在し、舌状にのびた尾根上に位置する。遺跡内の斜面は、山地及び丘陵地の傾斜区分によると、一般斜面の中では傾斜が急な傾斜角20～30°の部類に所属する。

先に述べた美濃越前山地のほとんどは、固結堆積物の美濃帯中・古生層であり、チャート・砂岩・泥質岩・礫岩などである。チャート層は急峻な山地形になっているのに対し、砂岩層の分布地域は緩やかな地形をしている。砂岩は本来強固な岩石であるが、風化が進んでもろくなっており浸食を受けやすいため小河川によって開析され洞状の地形を形成することが多い。

本遺跡周辺はその中でも、チャート・砂岩互層の連続が顕著に見られる範囲にあり、遺跡内の大部分に砂岩が分布する。また、本遺跡の北方にはチャートの岩帯が地上に露出しており、深橋前古墳の石室にはこれらチャートの石材が使用されている。

(1)　成瀬正勝　2000『砂行遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書　第59集）（財）岐阜県文化財保護センター
(2)　篠原英政1984『重竹遺跡』（関市教育委員会調査報告書　第8号）関市教育委員会
(3)　調査による出土例ではないが、各務原市伊木山、同市山の前町、同市御坊山、大垣市青墓、垂井町宮代で確認されている。
(4)　篠原英政・吉田英敏 1990『榿ノ木洞1・2号窯』（関市文化財調査報告第17号）関市教育委員会
(5)　篠原英政 1990『砂行古窯』（関市文化財調査報告第20号）関市教育委員会
(6)　関市教育委員会2002「末洞遺跡　現地説明会資料」
(7)　吉田英敏編1989『美濃市西南部古窯址群』（美濃市文化財調査報告第6号）美濃市教育委員会
(8)　『延喜式　中篇』（新訂増補國史大系本　吉川弘文館）
名古屋市博物館1992『和名類聚抄』（名古屋市博物館資料叢書二）
(9)　『日本書紀　前篇』（新訂増補國史大系本）吉川弘文館
(10)　篠原英政・田中弘志2001「弥勒寺遺跡・弥勒寺東遺跡－美濃国武義郡衙と郡寺－」『古代　第110号』早稲田大学考古学会
(11)　早川万年1999「岐阜県出土の文字資料について－七世紀後半から10世紀の墨書・ヘラ書き土器－」（『岐阜大学教育学部 研究報告＝人文科学＝』第47巻第2号）
(12)　岐阜県企画部地域振興課　1992「岐阜県土地分類基本調査『美濃』」



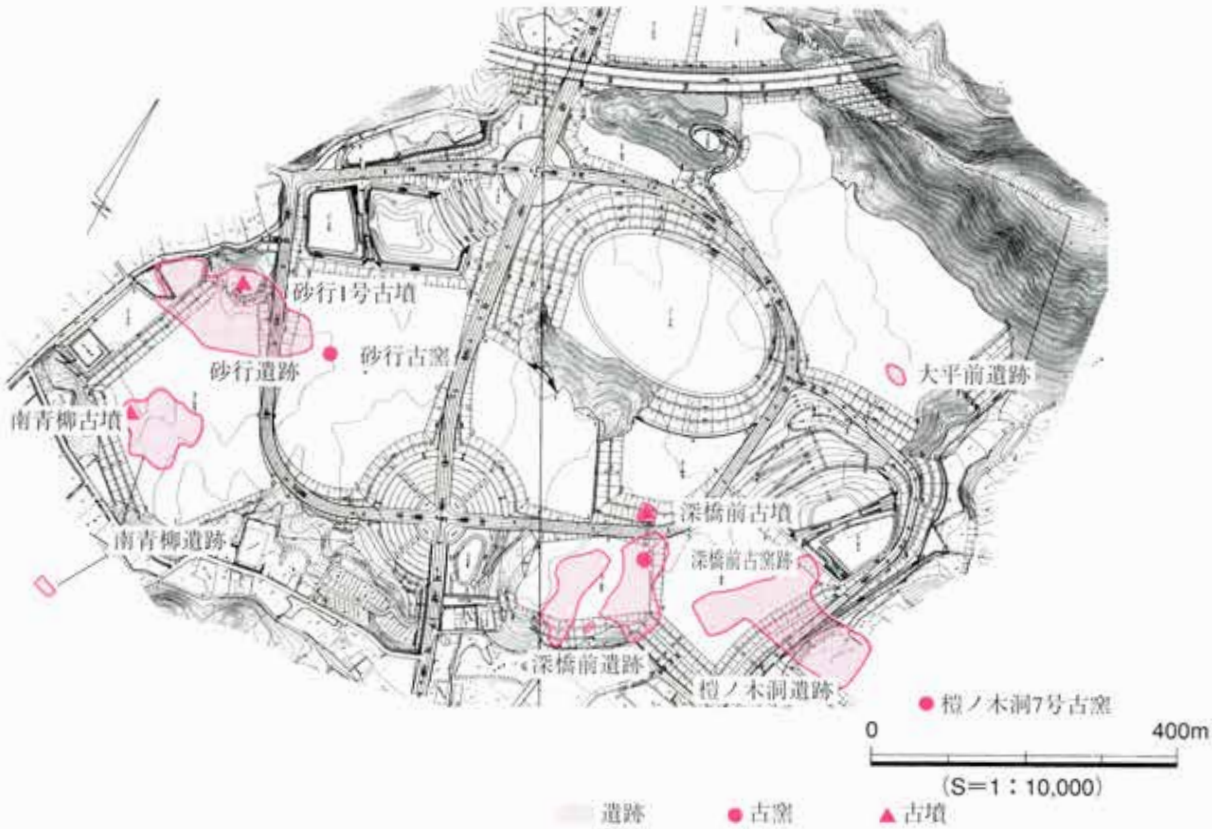


図４　深橋前遺跡周辺の遺跡

第３章　基本層序と遺構・遺物の概要

第１節　基本層序

深橋前遺跡の基本層序は、試掘の成果などをもとに、Ⅰ～Ⅵ層の６層に大別した。また、遺跡の範囲が同一の丘陵の頂上部から裾部までであるため、ほとんどの地点にこの基本層序があてはまると考えてもよい。

Ⅰ層　（腐葉土）

Ⅱ層　（流土）明黄褐色（7.5YR5/8）砂質であまり締まりがない。岩盤の風化によってつくられたものと考えられ、基本的に遺物を含まない。頂上部付近と洞内の谷部中央にはみられないが、遺跡内の斜面に厚く堆積する。深橋前古窯跡の上に堆積し、その灰原を削っているため、少なくとも古代末より新しい時代に堆積したものと考えられる。

Ⅲ層　（遺物包含層）黒褐色土（10YR2/3）一般的に、多くの遺物を包含する、地山直上の土。混入する土の違いによって、締まりや色合いが変化し、また、その層位ごとに遺物の年代が若干変わってくるところもあるため、小英字によって細分したところもある。

Ⅳ層　（地山１　無遺物黒色土）黒色土（10YR1.7/1）斜面の中腹から端部に至るまでに堆積する。放射性炭素年代測定によって、B.C.3,640～B.C.3,500年と示されている堆積と考えられる。（第６章第３節参照）

Ⅴ層　（地山２　粘質土）細かい砂質土に水分を含んだ粘土層。黒色土の下層に堆積する。黄色っぽい砂岩の風化したものと、白っぽいシルト状のものがある。またこの白っぽいシルトについては、灰釉陶器の胎土となる可能性も窺えるものである。（第６章第６節参照）

Ⅵ層　（地山３　岩盤）風化しやすい柔らかい岩盤。斜面の中腹より上方にある基盤層。

遺構は、丘陵の頂上部付近はⅥ層を地山とし、包含層をほとんど持たないものも多い。少し下ると包含層であるⅡ層・Ⅲ層があらわれるが、やはり地山はⅥ層である。中腹部からの地山はⅣ層なり端部まではこの様相が続く。

なお、図５は、Ｂ区の裾部22Ｃ付近と中腹部26Ｃ付近の層序を示した。前述のように、どの斜面の堆積もこれと多くは変わらないと考える。

またＢ区の傾斜を示すためもあって尾根部33Ｃから谷部22Ｃの地山より上層の層序のみを載せた。（図６）本来なら各区の尾根部・谷部ごとに示すのがよいのだが、どの斜面の堆積についても大差がないため、これにとどめることにする。

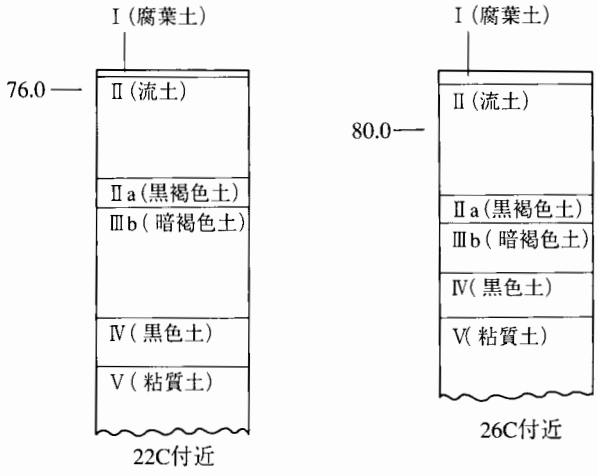
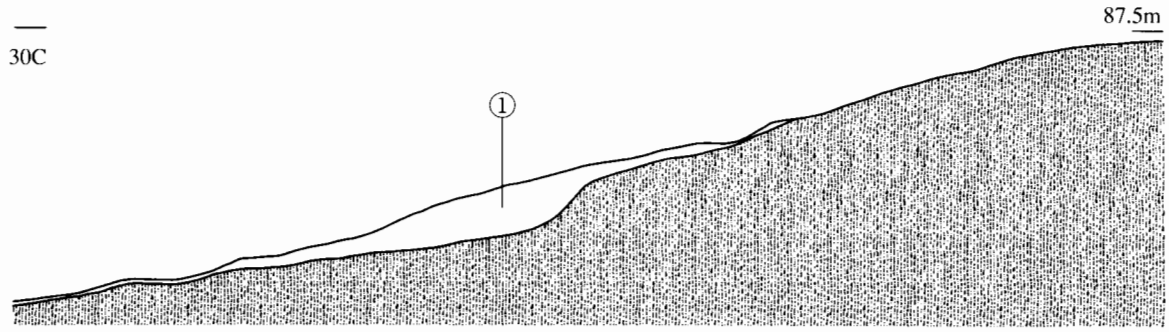
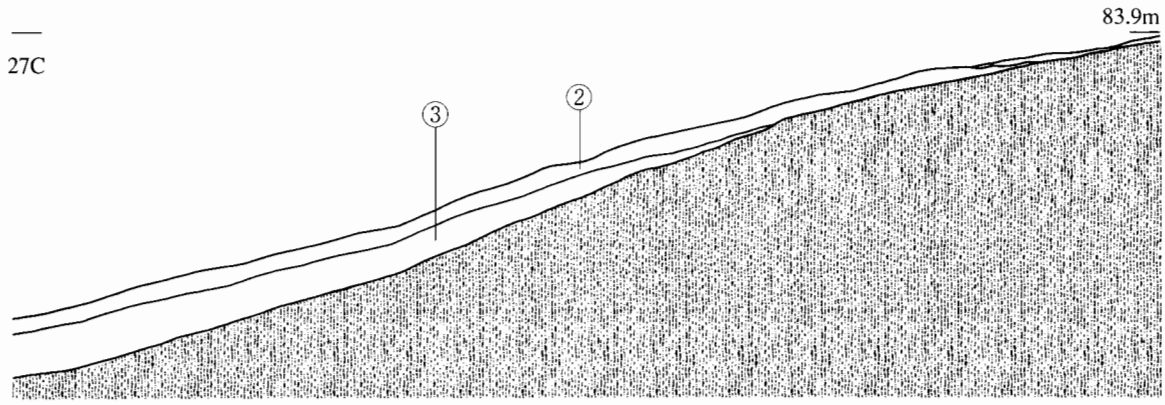
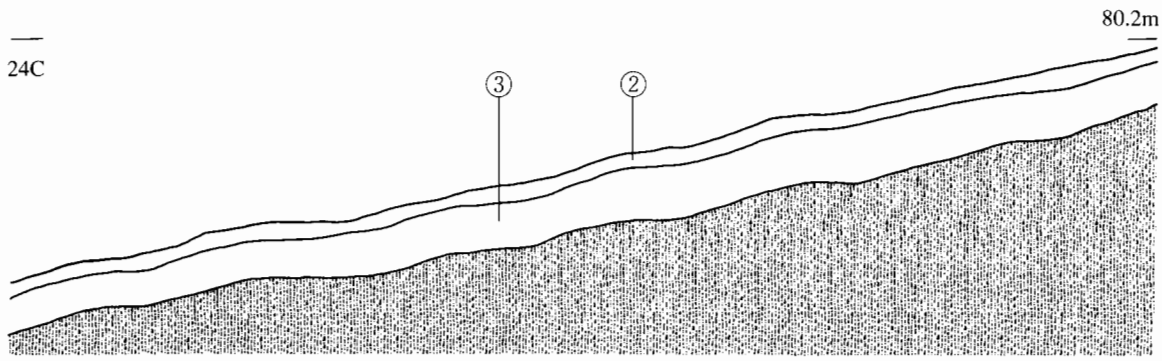


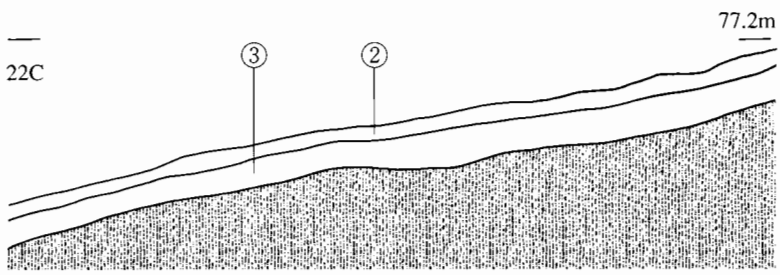
図５　基本層序







①Ⅱ層（表土）
②Ⅲa層（包含層）
③Ⅲb層（包含層）



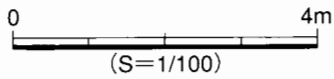


図６　Ｂ区基本層序

第２節　時期区分について

検出された遺構の時期については、遺構を検出した層位と、切り合いによって、原則的には新古関係のみしか確認することしかできないものであるが、出土した遺物の年代観などに並行させ、表２のとおりⅠ期からⅥ期の６時期に大きく区分する。

Ⅰ期は旧石器時代から弥生時代中期までとする。この時期の遺構は認められていないため、かなり時期幅は広いものの小期区分は行わなかった。ただし、この時期の遺物には若干の集中区がみられる。これらについては第７章第１節において述べることにする。

Ⅱ期は弥生時代末から古墳時代初頭、多くの竪穴住居跡がつくられた時期の遺物である。（いわゆる山中様式から廻間Ⅰ様式までの時期）先行の研究の成果をもとに、器形の変化を捉えやすい高坏を基本として、さらに４期に小期区分を行った。（土器の分類については、本章第４節を参照のこと。）

Ⅲ期は松河戸、宇田期の遺物であるが、３軒の住居と１つの土器集積しかみられなかった。

Ⅳ期は古墳時代から古代の土坑墓・火葬墓の造られた時期である。これらからは、いわゆる伊勢型甕・東濃型甕や須恵器が出土している。遺構数がわずかであり、小期区分は行わず、文章中におおよその年代を示した。

Ⅴ期は深橋前古窯跡が操業していた時期で、この窯で生産していたと考えられる、黒笹90号窯式から折戸53号窯式の灰釉陶器の年代観によった。窯のほかに、付属した施設から出土した遺物も同時期のものである。

Ⅵ期は灰釉陶器窯の廃絶後の時期すべてであるが、この時期の遺物としては、中世の山茶碗が包含層からみられるのみであえて小期区分をするには至らなかった。

なお、年代については、研究者によって見解の相違はあろうが、Ⅱ期は２世紀後半～３世紀中葉、Ⅲ期は４世紀中葉～５世紀初頭、Ⅴ期は10世紀を目安とする。（Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ期については時期幅が大きいため特に示さない。）

表２　深橋前遺跡の時期区分

時　期		時　代　区　分	土器編年への対応
Ⅰ期		弥生時代中期以前	
Ⅱ期	１期	高坏Ａ類を主体とする時期	山中後半期から廻間Ⅰ－０
	２期	高坏Ａ類と高坏Ｂ類が共伴する時期	廻間Ⅰ－１
	３期	高坏Ｂ類と高坏Ｃ類が共伴する時期	廻間Ⅰ－２
	４期	短脚で坏部の深い高坏Ｃ類を主体とする時期	廻間Ⅰ－３・４
Ⅲ期		高坏Ｆ類を主体とする時期	松河戸様式、宇田様式
Ⅳ期		古墳時代後期～奈良時代	
Ⅴ期		平安時代　灰釉陶器	黒笹90号窯式～東山72号窯式
Ⅵ期		鎌倉時代　山茶碗以降	

第３節　遺物の総数と遺物番号

深橋前遺跡から出土した遺物のうち、口径もしくは底径が復元でき、そのプロポーションを窺うことができるものを中心に、表３のとおり実測し掲載した。また、記述や図版の掲載のために、便宜上、４桁の遺物番号をつけた。

深橋前遺跡から出土した遺物のうち、本書で掲載し得たのは、1,509点である。このほかに、小片のため、実測し得なかった遺物が数多く存在する。

特に深橋前遺跡で検出されたの遺構のうち、Ⅱ・Ⅲの遺構のほとんどは、標高の高いところや急傾斜地に造られている。そのため、遺構内やその周辺は、岩盤などの地山がむき出しで、土砂の堆積もみられない場合が多い。一方、裾部や傾斜変換点には、各遺構から崩落した遺物が多くみられる。これらは、山側の住居跡などの遺物と断定できるが、どの遺構に帰属するのかを判断することは困難であり、包含層遺物として取り扱わざるを得なかった。実測し得なかったⅡ・Ⅲ期の遺物のうち、遺構内から出土した遺物は11,545点、包含層から出土した遺物は17,523点である。（共に接合後の個体数）そのため、包含層遺物の分布と濃密を図７に示し、この状況出土状況を表した。しかし、調査期間等の関係で、包含層の上層２／３程度は重機で取り除いている。したがって、今回発掘調査によって出土した遺物がこの遺跡内に包含・散布する遺物のすべてではない。

表３　実測遺物一覧

適　　用	実測遺物点数	遺　物　番　号
Ⅰ期の土器（縄文・弥生時代）	２３点	１００１～１０２３
Ⅱ・Ⅲ期の土器（弥生時代末から古墳時代初頭）	８７２点	２００１～２８７２
Ⅳ期の土器（古墳時代後期～古代）	５９点	３００１～３０５９
Ⅴ期の土器（灰釉陶器窯に関連するもの）	３７６点	４００１～４３７６
Ⅵ期の土器（中近世陶磁器）	１３点	５００１～５０１３
石器を一括する	１６１点	６００１～６１６１
金属器を一括する	７点	７００１～７００７
総　実　測　点　数	１，５１１点	

第４節　遺構分布図について

遺構分布図については、調査面積が大きいために１枚の遺構分布図に遺構名を記すことはできなかった。そのため、調査区の全体の遺構分布は図８に、各地区の遺構名は図９・10に載せた。ただし、深橋前古墳については、図８にのみ示したのみである。使用した実例図のうち、図９・10は１／500の空撮実測図（0.25mコンタ）、図７・８は1/1000の空撮実測図（0.5mコンタ）である。

なお、Ⅱ・Ⅲ期の遺構周辺の地形については、この遺構分布図のみで示すのは不十分と考えたので、各遺構のはじめに１／200の「遺構周辺地形図」を載せてこれを補った。

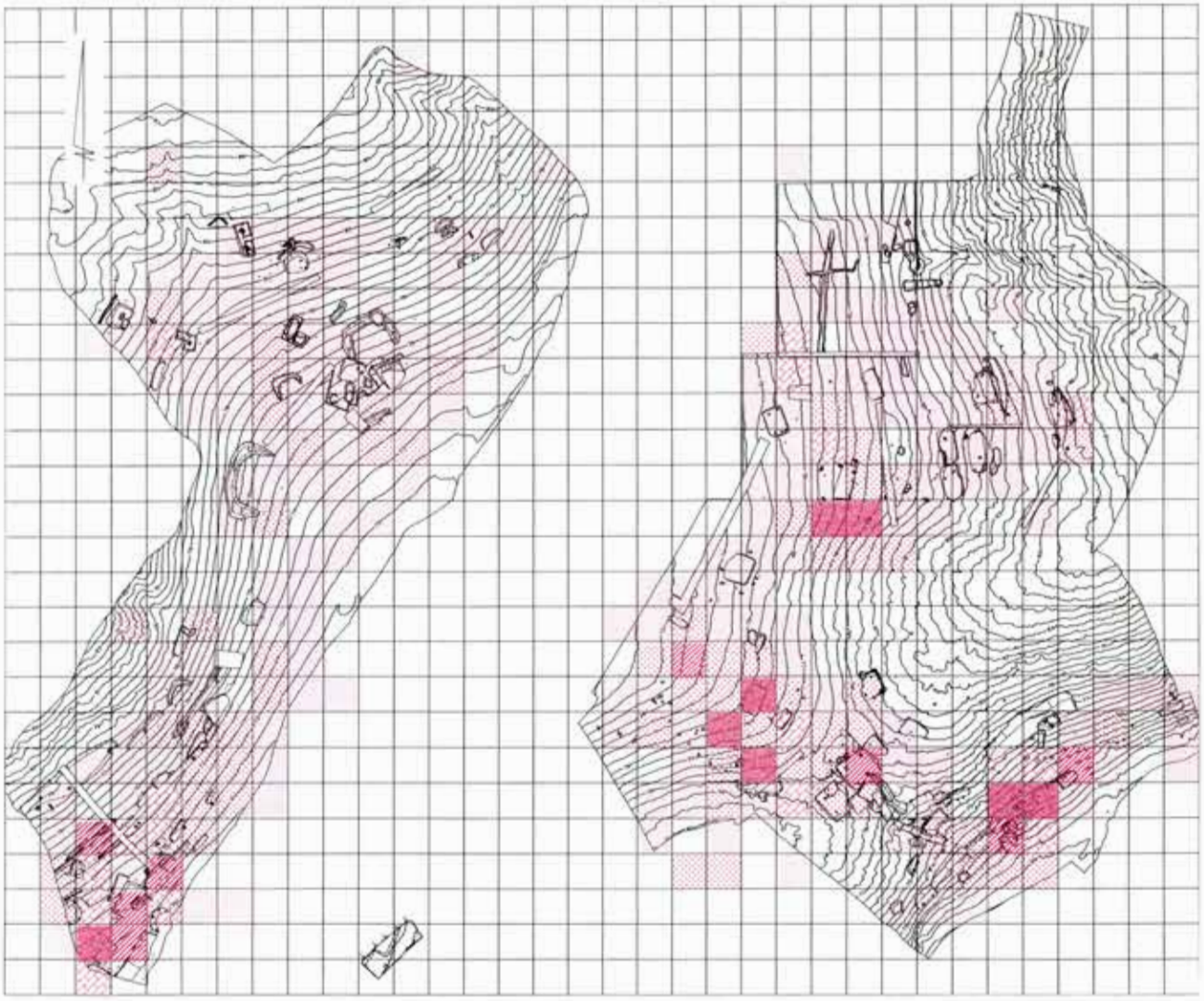


図７　包含層出土遺物（Ⅱ・Ⅲ期）の状況

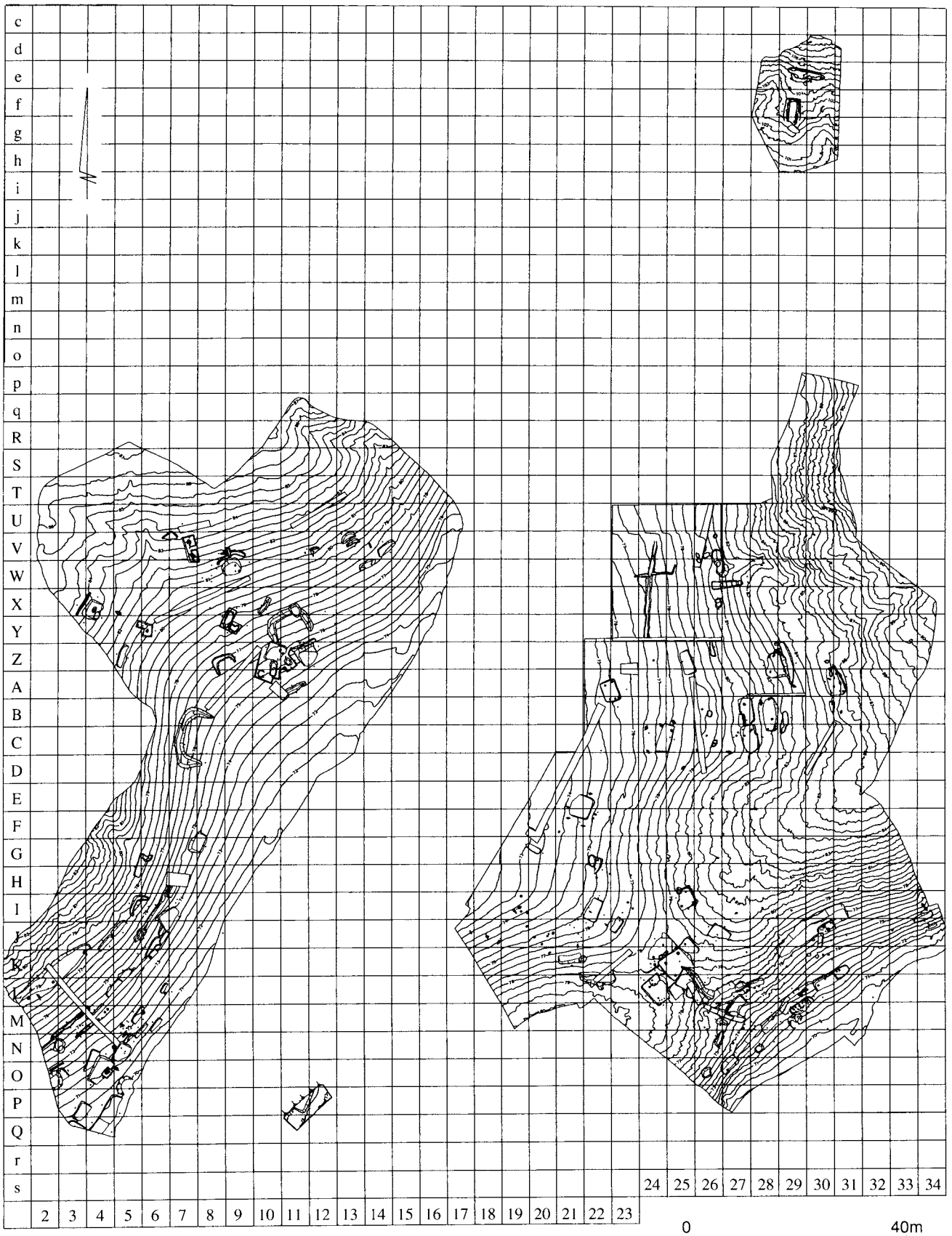


図８　調査区内遺構分布図

(S＝1/1,000)

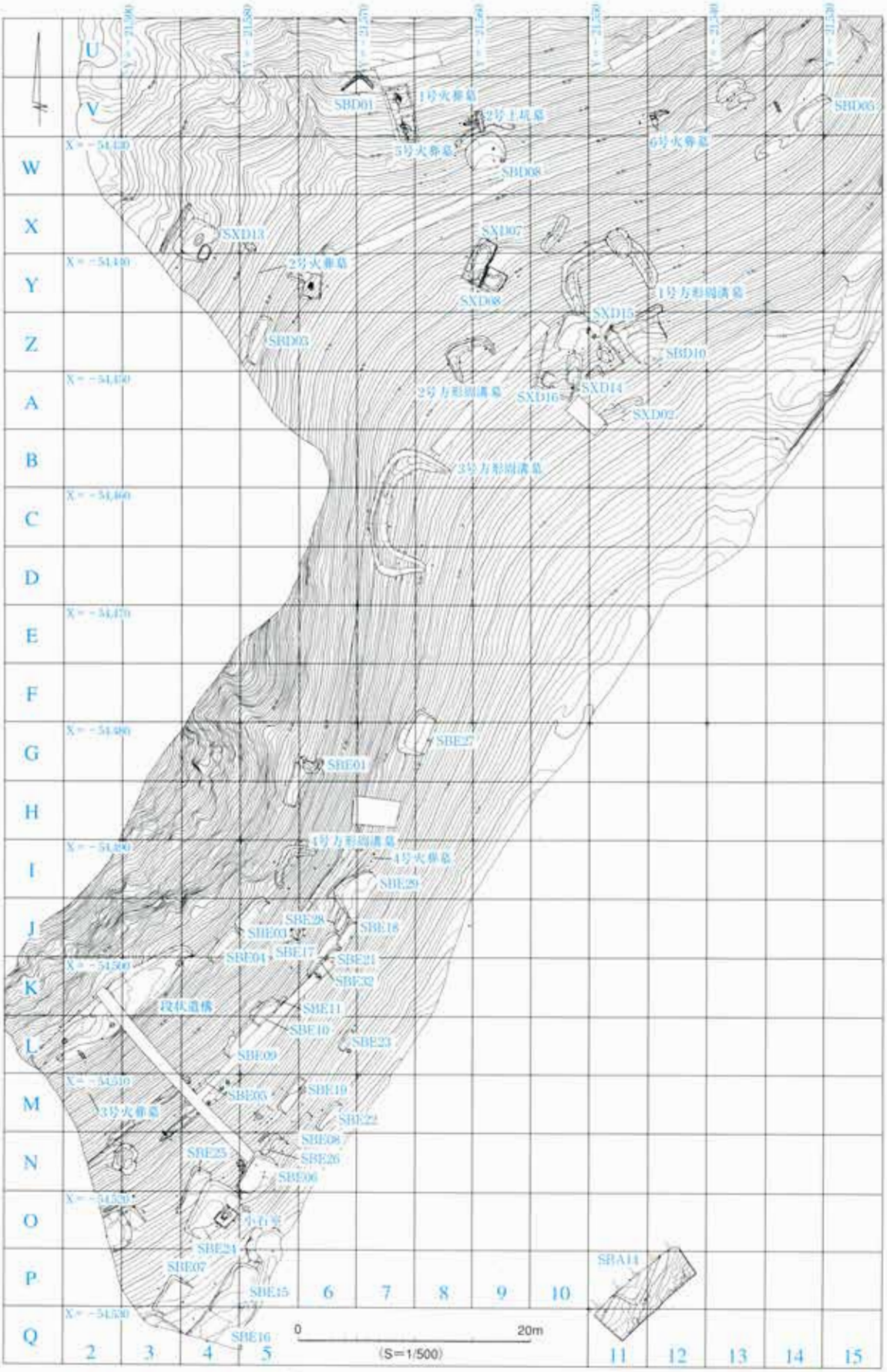


図９　Ｄ・Ｅ区（・SBA14）遺構分布図

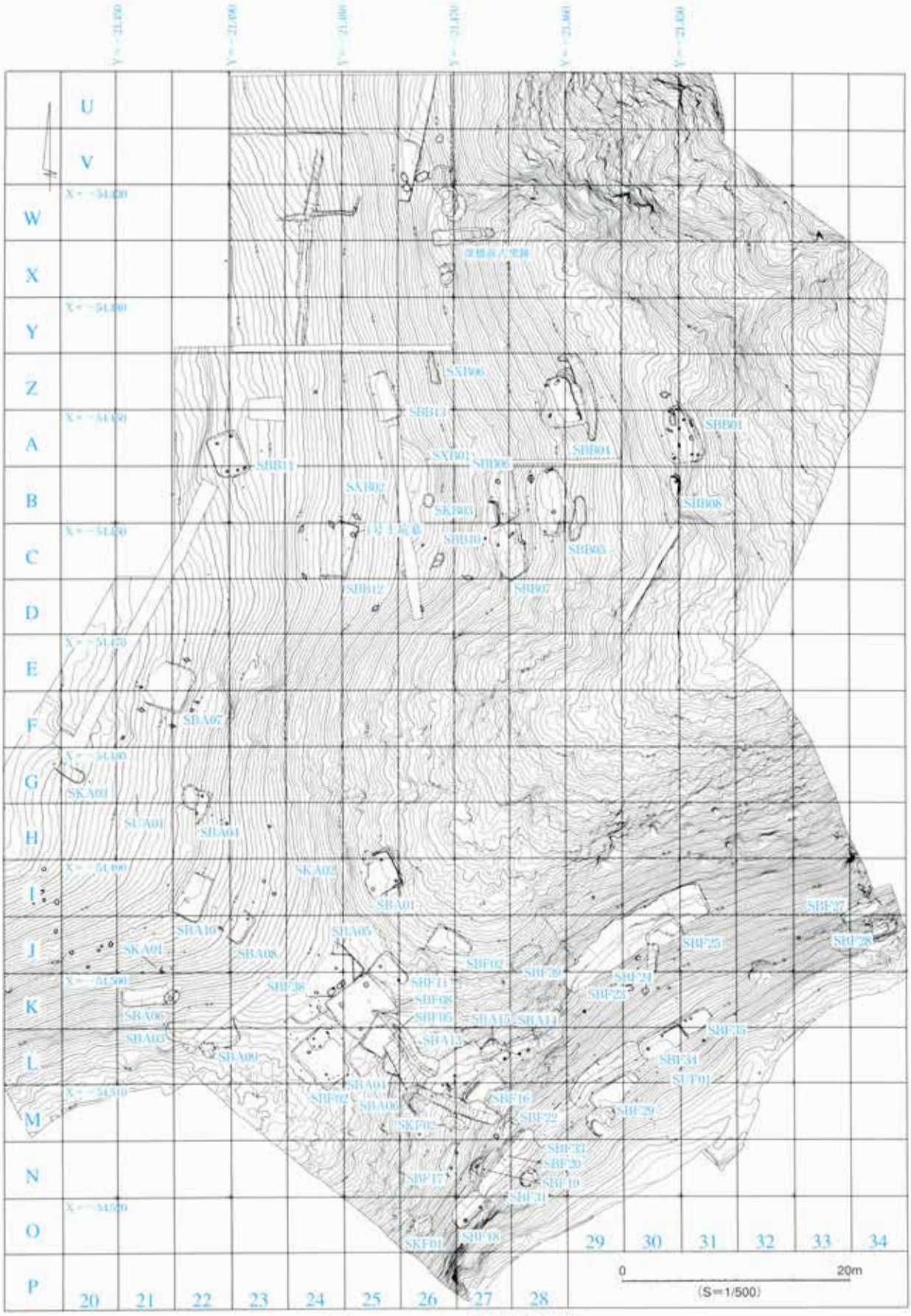


図10　A・B・F区遺構分布図

第５節　遺物の概要

（１）Ⅰ期の縄文土器

この時期の遺構は確認されておらず、包含層から出土した遺物のみである。また、小破片が多く図示に耐えないものがほとんどであるため、先行の編年・様式にあてはまるものだけを参考に示した。

（２）Ⅰ期の弥生土器（弥生時代前期・中期の土器）

この時期の遺構は確認されておらず、包含層から出土した遺物のみである。また、小破片が多く図示に耐えないものがほとんどであるため、時期区分をするにとどめる。

前期の土器：条痕文系の土器。いわゆる樫王期の土器が数点出土した。

中期の土器：条痕文系の土器。いわゆる貝田町期の土器が数点出土した。

（３）Ⅱ・Ⅲ期の土器（弥生時代後期の弥生土器・古墳時代初頭の土師器）

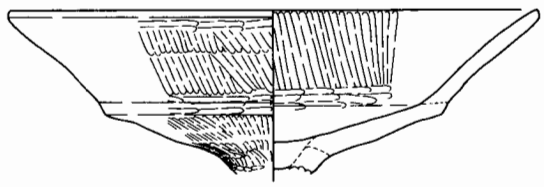
この時期には、80軒におよぶ竪穴住居跡を中心とする遺構が確認されており、それに伴う遺物が数多く出土した。先行の研究結果をもとに、以下のように分類を行った。

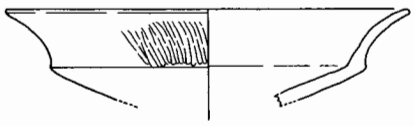
①高坏

坏部の形態からＡ～Ｆの６類に分類した。

高坏Ａ類：坏部に段を持ち、その上段が外彎するもの。

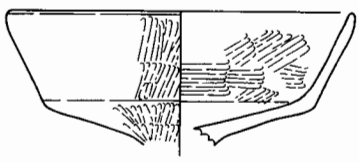
（山中分類高坏Ａ２類）





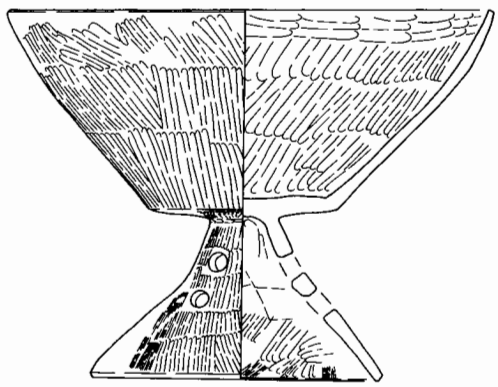
高坏Ｂ類：口径と稜径の差が比較的小さく、坏部が浅いもので、その上段が直線的なもの。そのほとんどの脚部は内彎しない。

（廻間分類高坏Ａ１類）



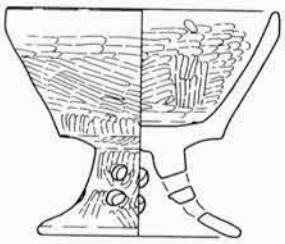
高坏Ｃ類：口径と稜径の差が比較的小さく、坏部が深いもので、その上段が内彎するもの。脚部は内彎する。

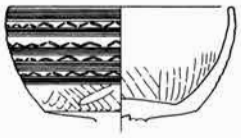
（廻間分類高坏Ａ２類）



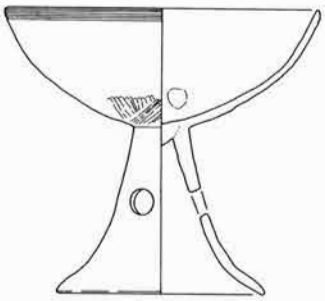
高坏Ｄ類：高坏Ｃ類の内、小型で短脚のもの。

（廻間分類高坏Ｃ類＜有稜高坏＞）

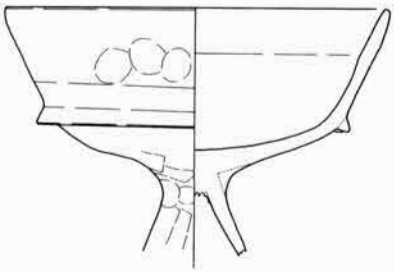




高坏Ｅ類：坏部が碗形の高坏。



高坏Ｆ類：屈折脚を持つもの。

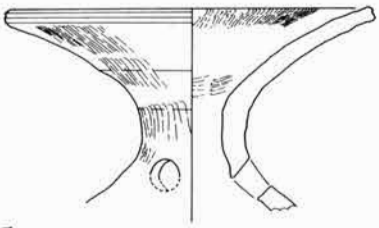


②器台

脚部の形態からＡ・Ｂの２類に分類し、更に脚裾部の志向によってＢ類を１・２に細分した。

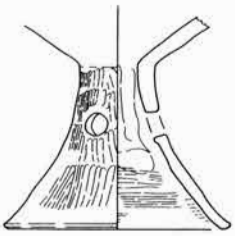
器台Ａ類：柱状の中空脚を持つもの。

（山中分類器台Ａ類）



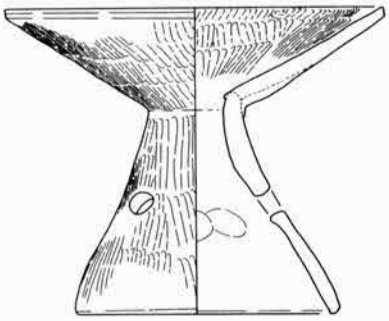
器台Ｂ１類：円錐脚部の裾部が外反するもの。

（廻間分類器台Ｂ類）



器台Ｂ２類：円錐脚部の裾部が内彎するもの。

（廻間分類器台Ｃ類）

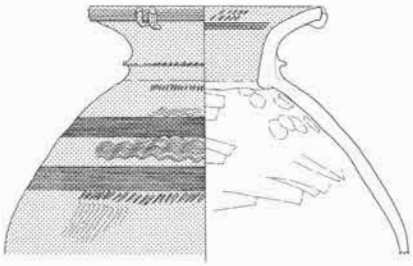


③壺

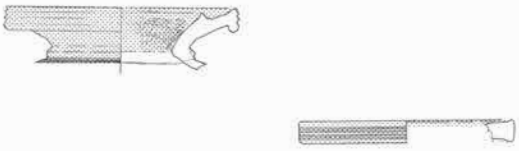
体部と口縁部の形態及び大きさから、A～Eの５類に分類し、A・B・C・D類は細分した。

壺A類：いわゆるパレススタイル壺（赤彩されているもの）を一括する。口縁の形態により３つに細分する。

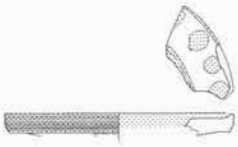
壺A１類：口縁部が外反して、内面に平坦面をもたないもの。



壺A２類：口縁部が外反して、内面に平坦面をもつもの。



壺A３類：口縁部が内彎するもの。

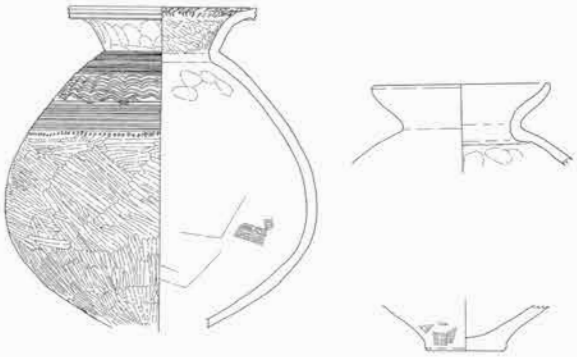


壺B類：壺Aの概念に相当しない大型の壺。口縁部の形態から３つに細分した。

壺B１類：口縁部が外反する広口壺。

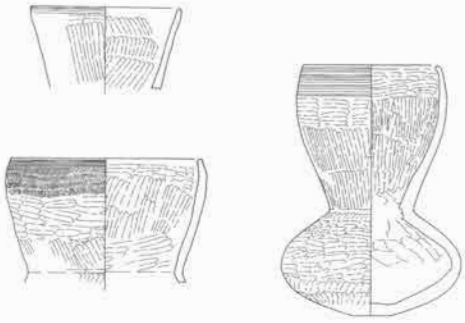
壺B２類：口縁部が内彎する広口壺。

壺B３類：その他の広口壺。



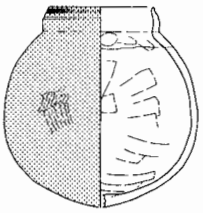
壺C類：頸部が体部より長い壺。もしくは短い壺。口縁部・その他の形態から３つに細分した。

壺C１類：口縁部が直行または外反する長頸壺。

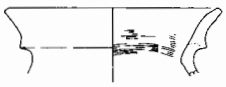


壺C２類：口縁部が内彎する長頸壺。

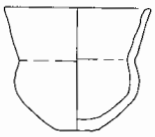
壺Ｃ３類：長頸壺・短頸壺の区別のできないもの。（長頸壺の可能性の高い ものも多い。）



壺Ｄ類：いわゆる二重口縁壺を一括する。



壺Ｅ類：小型壺を一括する。

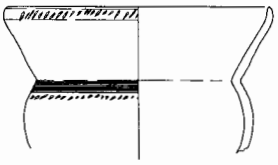


④鉢

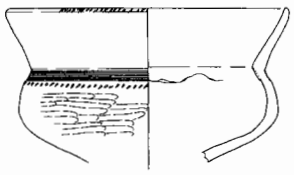
口縁部の形態によってＡ～Ｄの４類に分類した。

鉢Ａ類：口縁部が短く外傾し、段を持つもの。

鉢Ｂ類：口縁部が長く外傾し、端部にわずかな段を持つもの。



鉢Ｃ類：口縁部が長く外傾し、ゆるやかに内彎するもの。



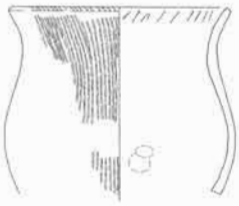
鉢Ｄ類：その他のもの。

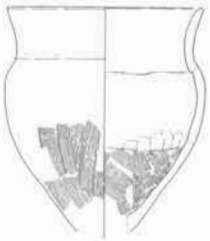
⑤甕

口縁部から頸部にかけての形態からＡ～Ｈ類の８類に分類した。

甕Ａ類：いわゆる、条痕風の調整甕。

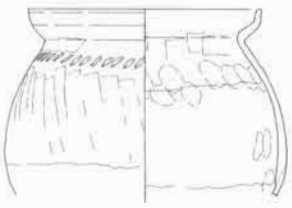
甕Ａ１類：頸部が緩やかにくびれ、口縁は長く外反するもの。口縁端部には面を持ち、条痕で刻みを入れる。口縁内面には条痕によって列点、もしくは波状文を入れる。器壁の外面は、全面に亘り縦方向の整った条痕で調整し、布目圧痕が残るものも多い。



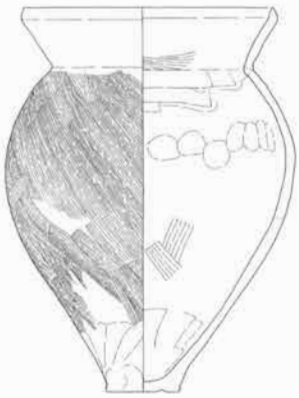


甕Ａ２類：甕Ａ１類と同様の形態であるが、調整・文様等に変化のあるもの。たとえば、ハケ調整であったり、横線文や列点文を入れるもの。

甕Ｂ類：口縁部が短く外傾して段をもつもの。いわゆる受口状の口縁をもつもの。



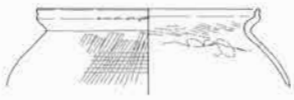
甕Ｃ類：口縁部が長く外反し、わずかな段をもつもの。



甕Ｄ類：口縁部が緩やかに長く外反するもの。

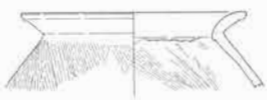
甕Ｅ類：Ｓ字状口縁台付甕を一括する。なお、本遺跡では廻間分類Ｓ字状口縁台付甕Ａ類以外は出土していない。(本書ではＳ字甕と略して使用する。)

甕Ｆ類：直立口縁（北陸系）の口縁をもつ甕。凹線文をもつものともたないものがある。



甕Ｇ類：短く外傾する、くの字状の口縁をもつもの。

甕Ｈ類：その他のもの



⑥その他のもの

松河戸式の坏や、ミニチュア製品など、①～⑥までの分類に該当しないもの。

（４）Ⅳ期の土器

①土師器

１号土坑墓、小石室、ＳＸＢ01、ＳＸＤ15から出土している。

②須恵器

２号土坑墓、小石室、深橋前１～６号火葬墓、ＳＸＤ13から出土しており、７世紀後半～９世紀前半のものである。遺構に伴わず包含層からも出土しており、Ｂ区からは５世紀の広口壺の他に７世紀末～９世紀前半のもの、Ｄ区からは６世紀の高坏の他に８世紀～９世紀のもの、Ｅ区からは６世紀末～８世紀末のものが出土している。Ｂ区出土の広口壷は湧水地点にも近く砂行遺跡のような水辺の祭祀に伴う遺構があったとも考えられる。これを除けばＢ・Ｄ区は新しい時期のもの、Ｅ区からは古い時期のものが出土している。小石室、火葬墓はＤ・Ｅ区の東南向き斜面に集中しており須恵器の分布からその基盤となるものが周辺に存在していた可能性が考えられる。器種名は既存の名称を用い、細分は行わない。坏身、坏蓋、高坏、横瓶、平瓶、壺、鉢、甑、甕がある。

（５）Ⅴ期の灰釉陶器

深橋前古窯跡、窯附帯施設（SK１～SK８）、深橋前古墳、ＳＸＤ06，07，08，14，15，16から出土している他、Ｄ区の包含層から出土している。古窯の灰原と，谷向かいのＤ区を中心に出土しており Ｄ区，深橋前古墳から出土したものは深橋前古窯跡で生産されたものと考える。時期は黒笹90号窯式の終わりから折戸53号窯式の間の時期（10世紀前半）と考える。

碗類（碗Ａ，碗Ｂ，碗Ｃ，小碗，輪花碗，深碗）、皿類（皿Ａ，皿Ｂ，輪花段皿，大皿，有台皿）、瓶類（長頸瓶，小瓶，平瓶）、壺類、甕類、鉢類、蓋類、とち類、焼台類、土師甕がある。細分についての詳細は第５章に記載する。

（６）Ⅵ期の中近世陶器

Ａ、Ｂ、Ｄ、Ｅ区の包含層から出土している。13世紀前半～15世紀の山茶碗と、鎌倉時代の土師器皿、15世紀後半・幕末の陶器である。遺物量は少なく器種名は既存のものにしたがい細分もしない。

第４章　Ⅰ～Ⅲ期の遺構と遺物

第１節　Ⅱ・Ⅲ期の遺構と遺物

本節では、Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区の丘陵頂部、及びここから裾部にいたる急斜面に展開する、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡・方形周溝墓・段状遺構及び不明遺構について記述する。

竪穴住居跡・不明遺構については、現地調査で用いた遺構略号をそのまま用いた。たとえば、ＳＢＡ01とは、Ａ区の１号住居跡という意味である。検出はしたものの、発掘途中に竪穴住居跡と認定できなかったもや、他の遺構となったものもあり、これは欠番とした。また、ＳＫ・ＳＸ・ＳＵについては略号を振り直し、方形周溝墓・土坑墓・段状遺構については、番号を振り直し、略号を用いなかった。

竪穴住居跡の中には複数の遺構が切り合っているものも多くあり。必ずしも遺構番号順に記述できないことをあらかじめお断りしておく。

竪穴住居跡等の記述にあたっては、1/200の周辺位置図を掲げたが、この位置図の中には複数の遺構がはいることもある。この場合、対象の遺構のみをゴチックで示し、各々の位置図の下に明示し、更に各遺構の冒頭にも示したので参照願いたい。

竪穴住居跡等の当該期の遺構の観察表は、第２分冊の遺構・遺物観察表　表29、出土した土器・金属器・石器の観察表はそれぞれ表30・33・34に示した。また、遺物写真は、器種ごとにまとめてあるため、この観察表に掲げた図版欄により検索されたい。

記述にあたって、便宜的に用いた用語について、あらかじめ若干の定義を加えておく。基本的には『砂行遺跡』『南青柳遺跡　南青柳古墳』を踏襲するが、一部修正したものもある。

○「傾斜度」：住居の主軸の長さに、現況の住居の床部から谷側へ１ｍ、住居の立ち上がりから山側へ１ｍ加えた平面に対する斜面の平均傾斜度を角度で示す。（空撮図面の値を$\tan\theta$にあてはめて計測した）

○「隅角」：深橋前の竪穴住居跡は、ほとんど方形と考えられる。この４隅が角張っているものと丸くなっているものを丸・角で示した。

○「壁溝」：住居跡内床部の壁際に、壁の土砂崩落防止のために並べられた板材の痕跡を示す浅い溝。床面を精査してからしか確認できない上、非常に浅いので、セクションに書けないものも多い。

○「ピット」：いわゆる穴、柱穴と考えられないものも含む。

○住居跡の「幅」「奥行き」：谷側から見た住居跡床面の左右の長さを「幅」・それに直行する床面の長さを「奥行き」とする。

○「山側周溝」：住居の山側をめぐる周溝。水除けのためのものか、山側に平坦面を造ろうとしたものなのかわからないものも多い。

○「遺物と所属時期」：「……Ⅱ期の範疇としておきたい。とあるのは、図示できなかった遺物を含めた観察から、所属時期を限定したものである。

ＳＢＡ01

遺構（地形図11，図12，図版４）25Ｈグリッド

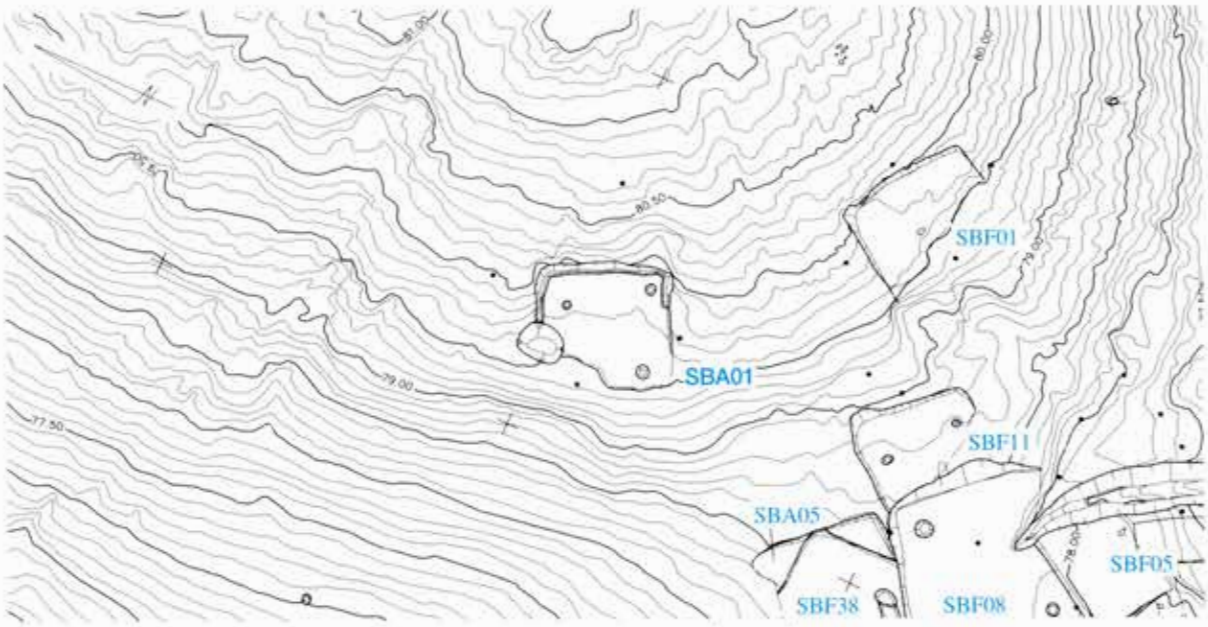


図11　SBA01周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向斜面、尾根から少し下った斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅3.05m・奥行き（現存長）3.1mの方形で、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。現在は崩落しているが、掘り抜いた土砂を谷側に盛って、平坦な床面を延ばしていたと考えられる。床面の壁際には、5cm～10cm程の深さの壁溝が巡っている。これは壁の土砂の崩落を防止するために並べた板材の痕跡を示している。住居の中央部から少し谷側の部分に焼土があり、地床炉の痕跡と考えられる。炉石は確認できなかった。また、地床炉を中心に比較的混入の少ない砂質土が平坦に締まっており、貼り床の痕跡と考えられる。柱穴は浅いが、３基確認できた。

この竪穴住居跡の埋土は、最初に砂質土が両壁に三角状に堆積し（セクション④）その後、同様の砂質土が床面を覆うように堆積している。これは、土砂の風化から考えると納得できることであり、この竪穴住居跡以外でも同様の堆積をしているものも多くみられる。（両壁の下部に三角状に堆積した砂質土をこの後、三角堆積と呼ぶ）また、住居跡の片が途中から少し角度を変えて開いているが、これは住居跡をつくる際か、使用中に崩落したものと考えられる。山側のセクションの三角堆積の外側には、岩盤が粉砕されたようにみられる、礫の混ざった黄褐色土の堆積は、（セクション⑤・⑥）おそらく、住居の掘形から壁の板材までの空間を人為的に埋めた、充填土と考えてもよいのかもしれない。

このような、岩盤を掘り込んだ竪穴住居跡の床面は石製の掘り具では容易には掘り抜けない。鉄製の工具を用いていた可能性も考えられよう。

遺物と所属時期

谷側の埋土が薄かったため、遺物の出土は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

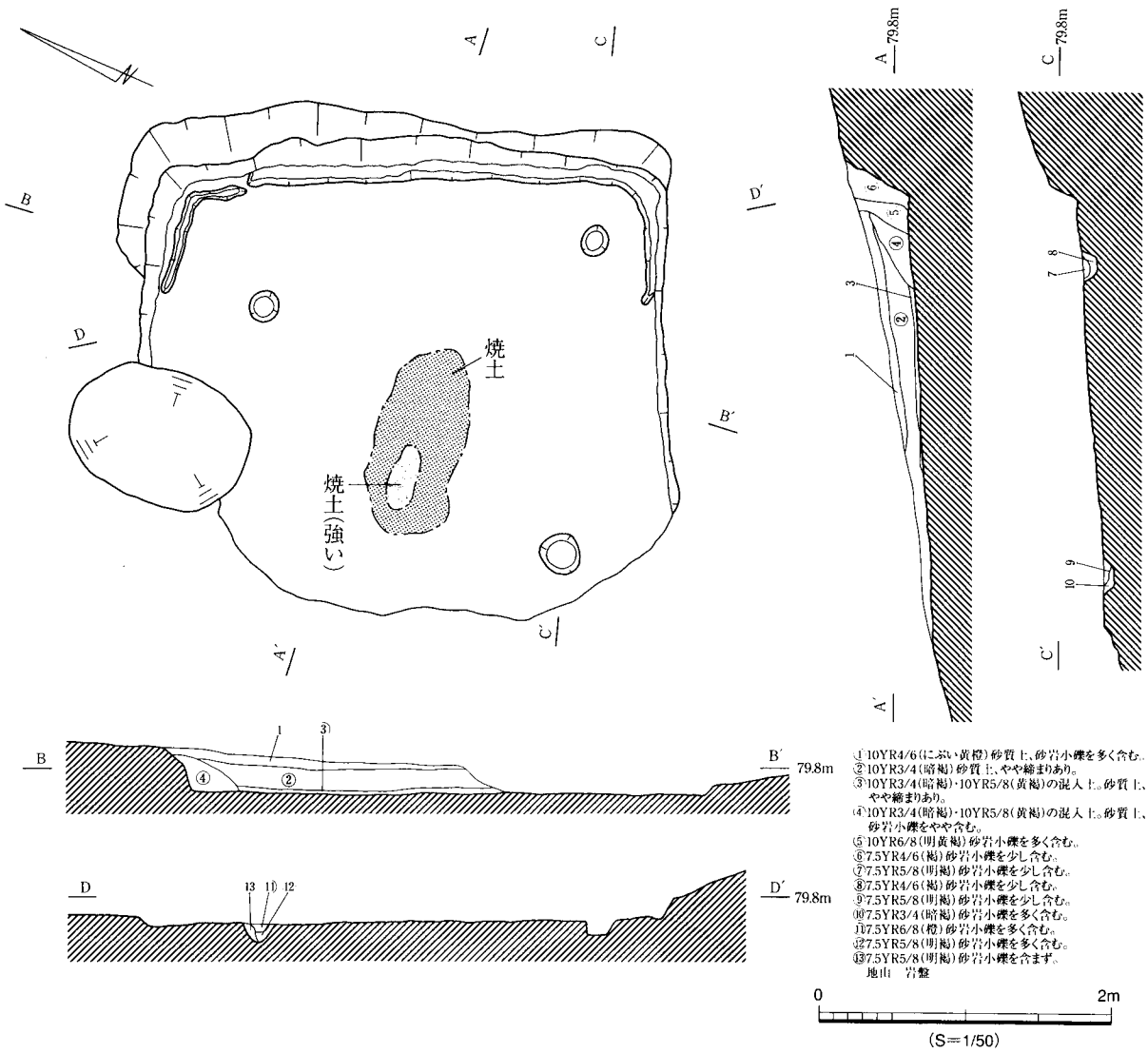


図12　SBA01実測図

ＳＢＡ03

遺構（地形図13，図14，図版４）21Ｋグリッド

東丘陵の西向き斜面、尾根から少し下った斜面に立地する。西側はＳＢＡ09と切り合っている。植生による攪乱や試掘坑などによって２つの遺構の切り合いは不明である。また、いずれの遺構からも遺物の出土は乏しく、遺物からみた時期関係も不明である。幅3.00m・奥行き1.95m（共に現存長）の方形で、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。周囲には、壁の土砂の崩落を防止するために並べた板材の痕跡を示す、浅い壁溝が巡っている。炉・貼り床は確認できなかった。また、柱穴も確認できなかった。この竪穴住居跡の埋土は黄褐色系の土砂で、地山とほとんど変わらなかった。これは急傾斜地であるために有機質の多い土砂が溜まりにくかったからではなかろうか。

遺物と所属時期（図15）

遺物の出土が多いわりには、小片が多く、図示し得たのは５点のみである。2001は高坏Ｃの坏部であり、内彎傾向が強くタテ方向のミガキを施している。段部の径は小さく、脚は比較的短いものと考

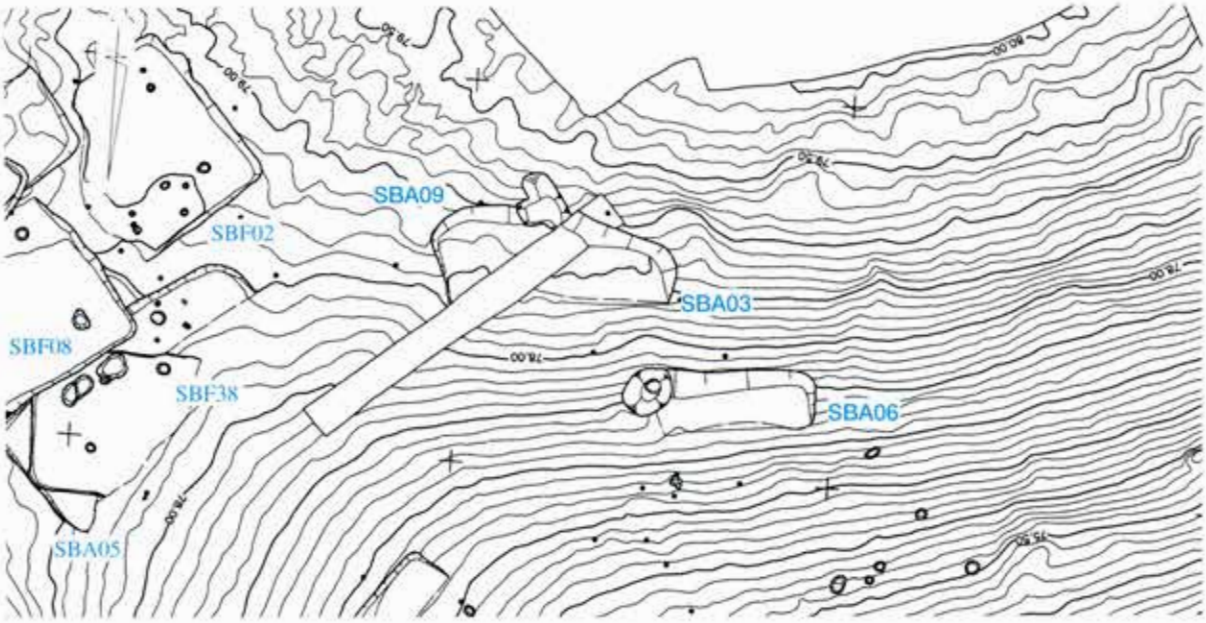


図13　SBA03・06・09周辺地形図（1/200）

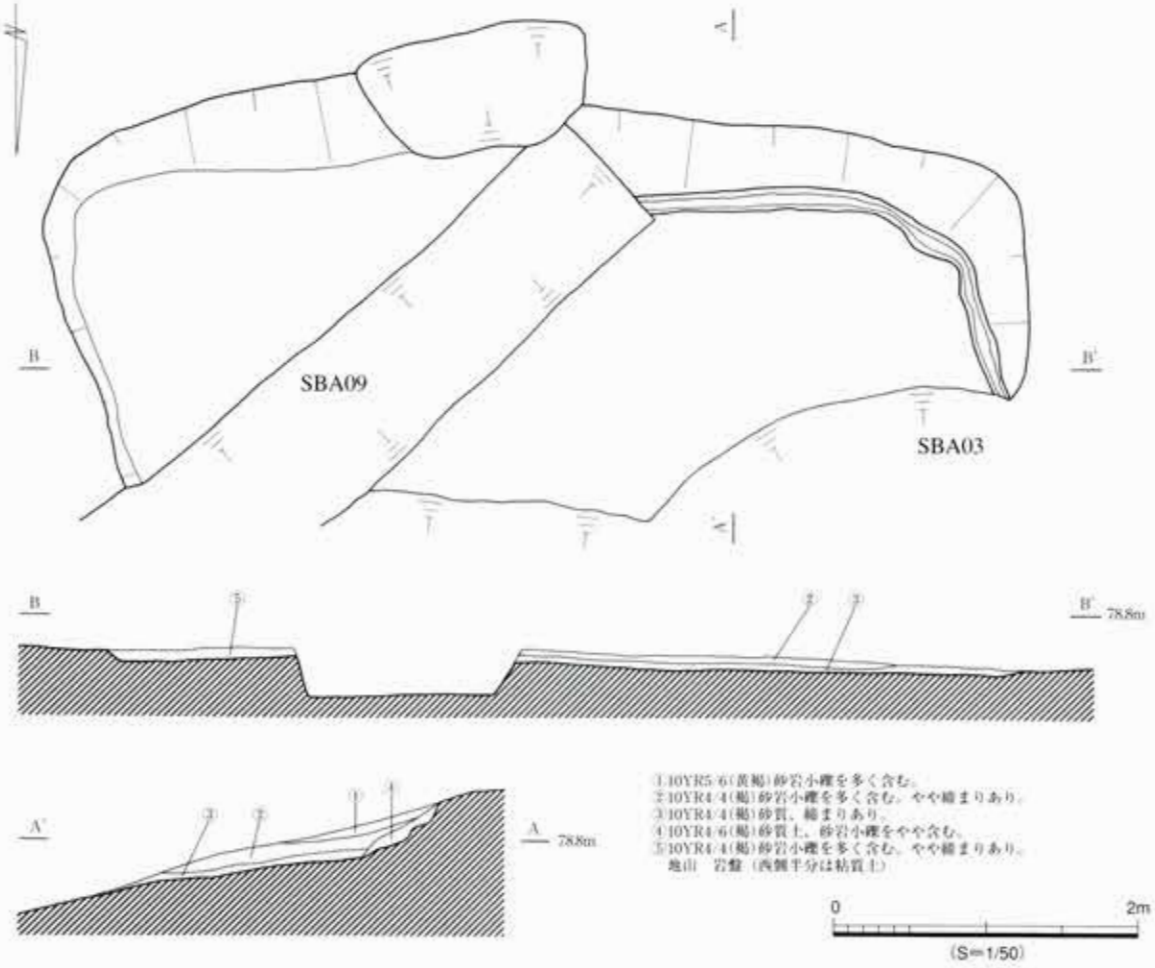


図14　SBA03・09実測図

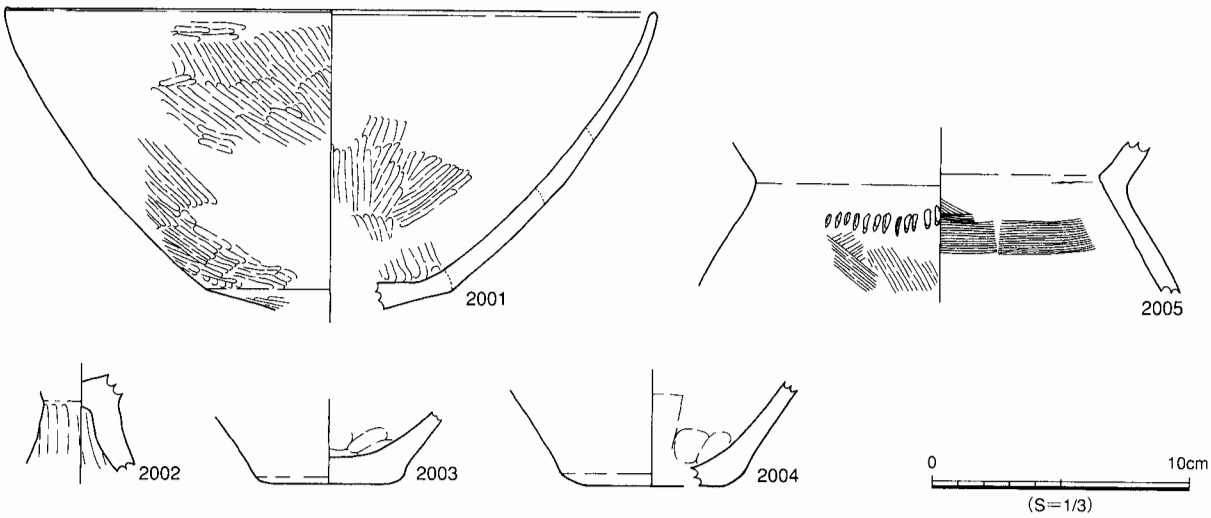


図15　SBA03出土遺物

えられる。2002は大きさなどから高坏Ｄの脚部と考えられる。2005は甕頸部で内面には横ハケ・外面には斜め方向のハケ調整を行った後、列点を入れている。また、2003は壺の底部、2004は平底甕の底部である。

内彎傾向が強くて段部の径が小さく、比較的深い坏部を持つ、高坏Ｃの存在から、Ⅱ－４期に属するものと考えられる。

ＳＢＡ09

遺構（地形図13，図14，図版４）22Ｋグリッド

東丘陵の西向き斜面、尾根から少し下った急斜面に立地する。東側はＳＢＡ03と切り合っているが、前述のように、前後関係は不明である。

幅2.30m・奥行き2.03m（共に現存長）の方形で、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。地床炉・貼り床・柱穴は確認できなかった。

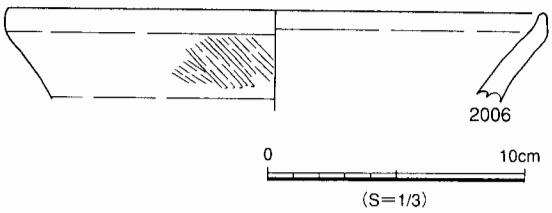


図16　SBA09出土遺物

遺物と所属時期（図16）

小片が多く、図示に耐えうる遺物は１点のみであった。2006は甕Ｃ類の口縁であり、斜め方向のハケ調整を行っている。 所属時期は、不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

ＳＢＡ04

遺構（地形図17，図18，図版４）22Ｇグリッド

東丘陵の西向斜面中腹の、急斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅2.50m・奥行き1.08m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。崩落が激しく、山側の北コーナーしか残っていない。柱痕跡がセクションで確認できる、しっかりとした山側の柱穴が、２基確認できた。壁溝・炉・貼り床は確認できなかった。

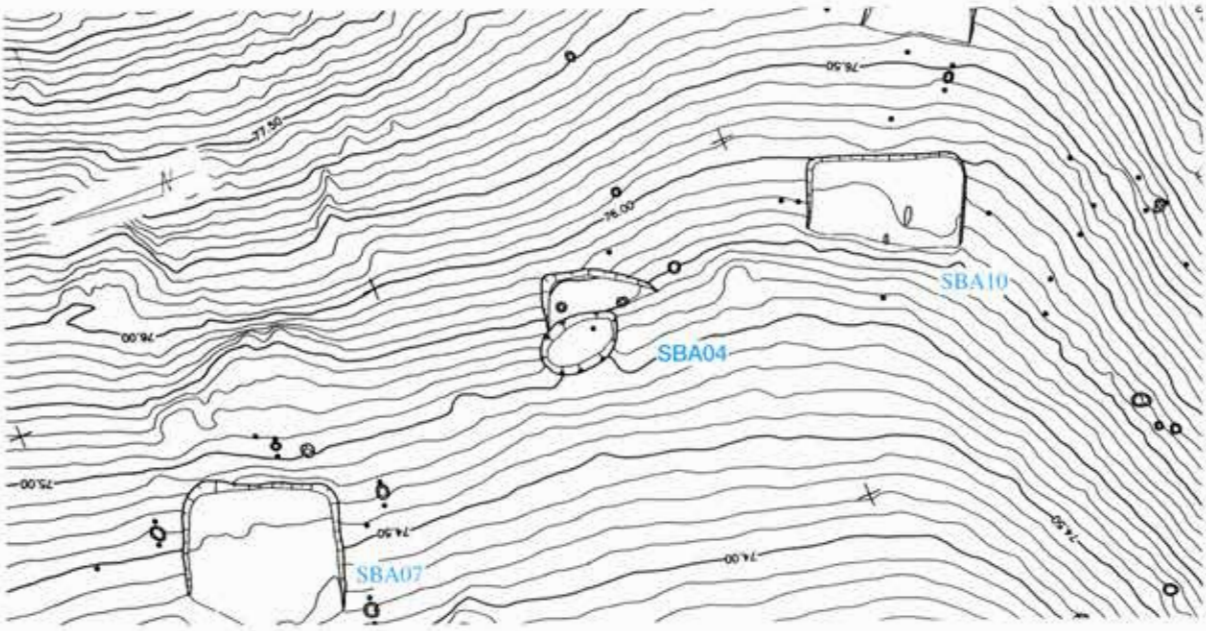


図17　SBA04周辺地形図（1/200）

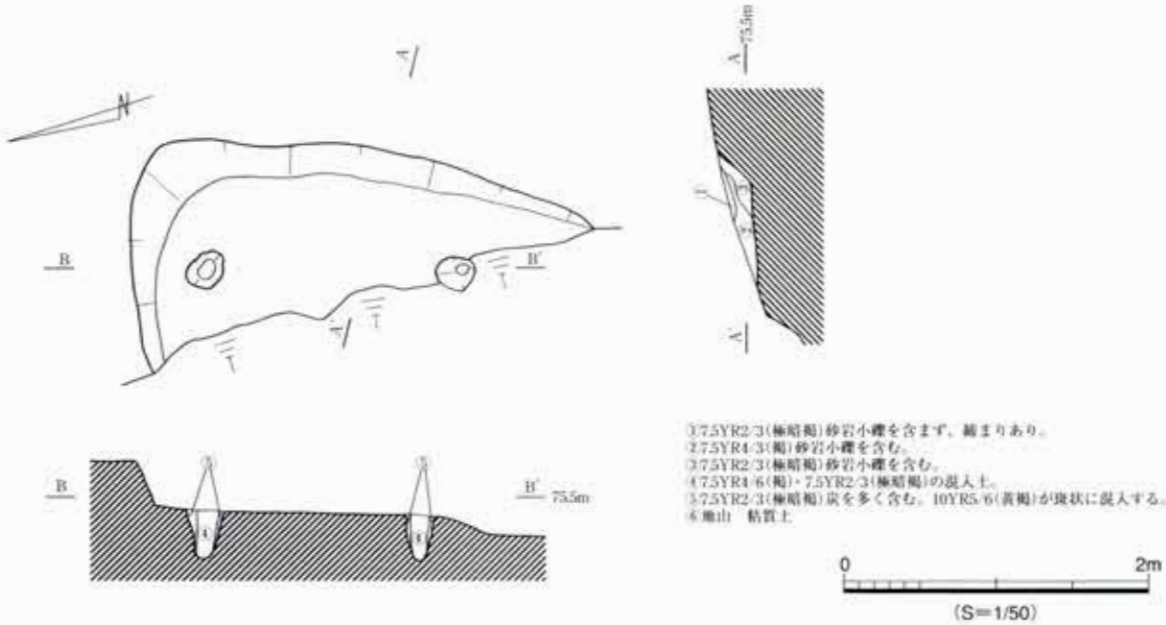


図18　SBA04実測図

遺物と所属時期（図19）

谷側の損壊が大きかったためか、遺物の出土は少なく、図示に耐えうる遺物は２点のみである。2007は高坏の受け部で、2008は壺の胴部片である。所属時期は不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

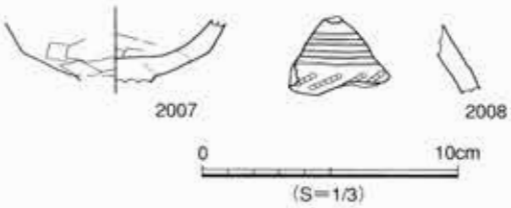


図19　SBA04出土遺物

ＳＢＡ05

遺構（地形図20，図21，図版４）24Ｊグリッド

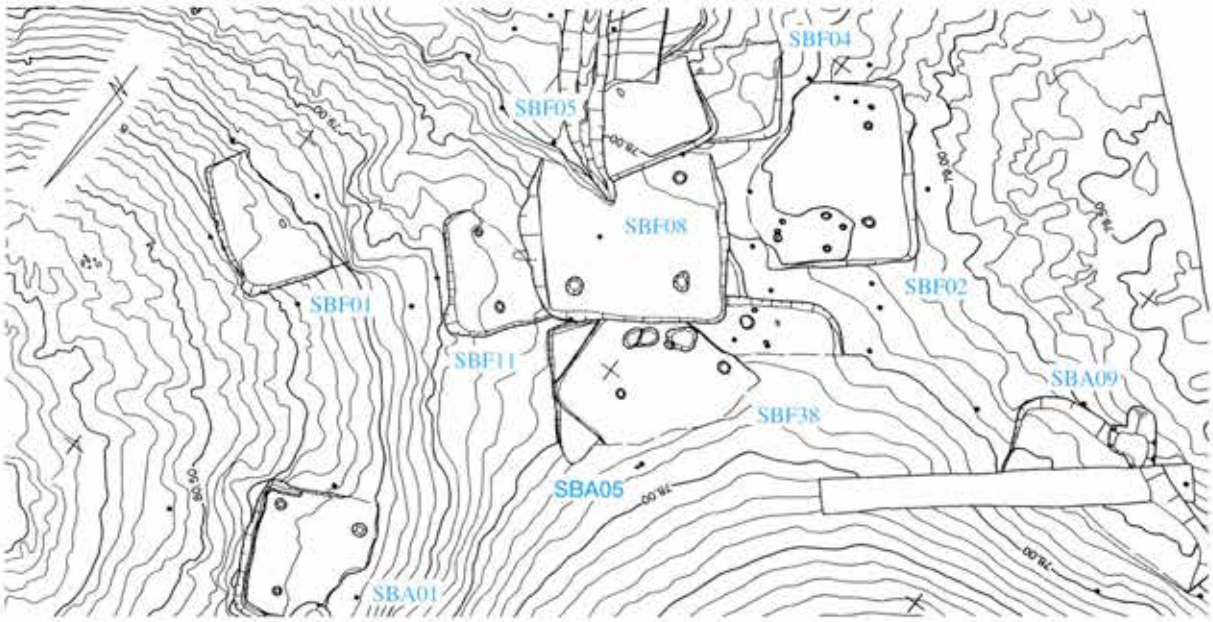


図20　SBA05周辺地形図（1/200）

東丘陵の尾根頂上部付近の平坦地に立地する。この下層にはＳＢＦ38があり、南東側はＳＢＦ08に切られる。この住居の床面は、ＳＢＦ38の埋土上に造られており、ＳＢＦ08はこの両者を切っている。このことから、ＳＢＦ38が最も古く、その後にＳＢＡ05・ＳＢＦ08の順につくられたものと考えられる。幅4.35m・奥行き3.30m（現存長）の方形で、粘質土を掘って床面を造っている。谷側の傾斜は緩やかであるが、立ち上がりは崩落のために確認できない。

東側コーナー付近には周囲には壁溝が残り、浅い３本の柱穴が確認できたが、炉は確認できなかった。この竪穴住居跡の床は窯跡の床面のように赤色に硬く焼き締まり、この上には多くの炭化材が散乱していた。

炭化材の散乱の様子や形状から、これらの炭化材は燃料材の燃え残りではなく、建築部材の一部と考えられる。また、覆土も熱を帯びて赤色化し、所々に炭化材の欠片が混入していた。住居跡が、このように熱をうける原因としては、火災にあったか、恒常的に火を使う家屋であったことなどが考えられるが、１度の火災にあっただけにしては、床の被熱が強すぎるため、何かの目的で長期間にわたって火を用いていた家屋が、火災にあって焼け落ちたものと考えるのが穏当かと思う。しかしながら、その目的を窺うことのできる出土遺物等は確認できなかった。

なお、この竪穴住居跡の下層のセクションの注記については、ＳＢＦ38において述べる。また、炭化材の分析については、第６章第４節で述べる。

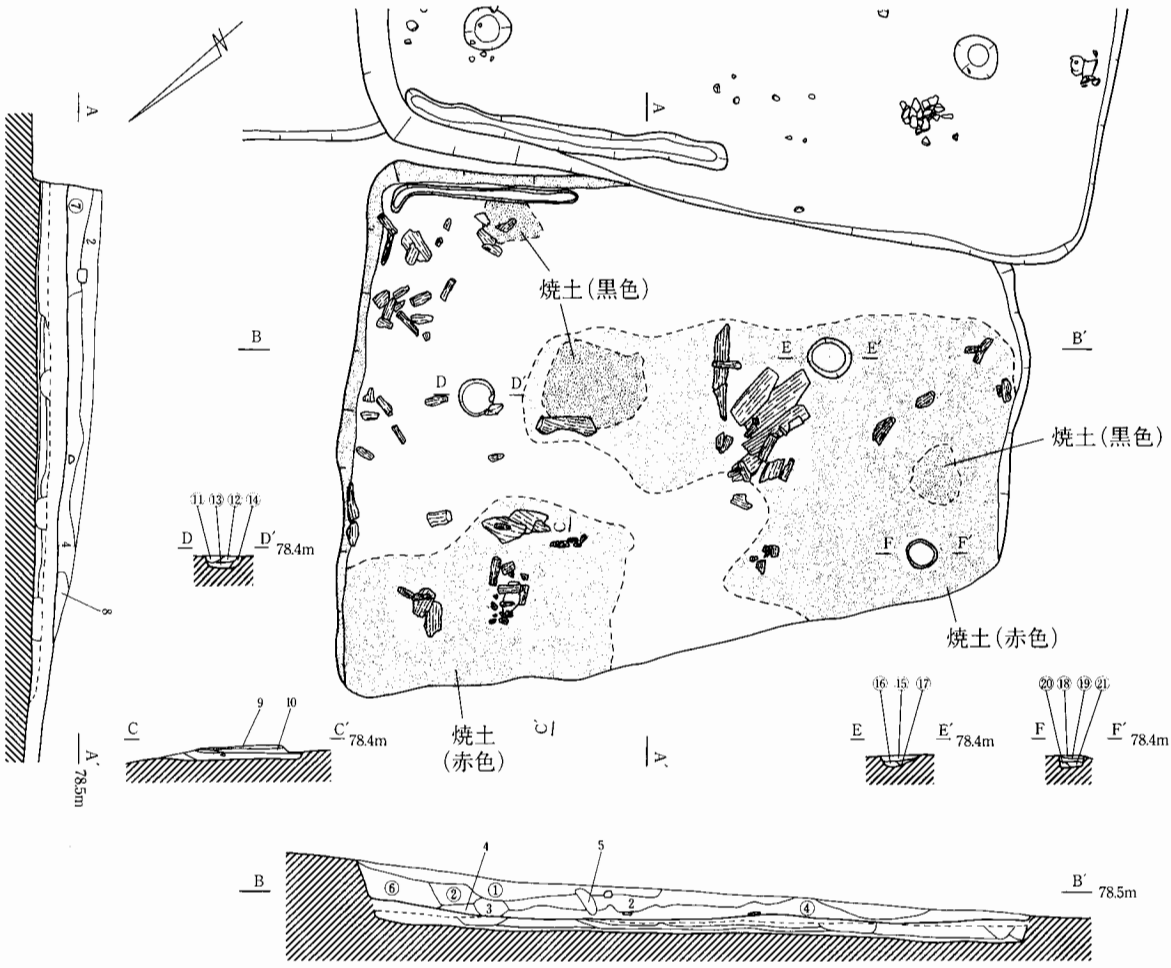
遺物と所属時期（図22）

銅鏃１点を含む、７点の遺物を図示した。7001は無茎の銅鏃である。黒っぽい良質の銅で、刃部がところどころ欠損はしているが、全体的に残存状況は良好である。中央の挟み込みの部分には、矢柄の痕跡と考えられる木質が附着していた。（乾燥によって剥離）また、この木質と鏃身との間の目地に赤彩が残存していた。銅鏃の主な成分は銅・鉛・スズから構成される青銅で、赤彩に用いられた顔料

は、水銀であることがわかっている。またこの銅鏃は、竪穴住居跡の床面の直上ではないが、住居跡の廃絶後はじめて堆積した、三角堆積の中から出土したことから、この住居跡の遺物である蓋然性は高いと考える。なお、第６章第８節に科学分析を、第７章第２節に若干の考察を述べる。

2009は高坏Ｃ類で、内彎傾向を持つ坏部内面をわずかに広く肥厚し、多条沈線を入れている。2010は甕Ｃ類で口縁部には横線、胴部に横線とやや丸みを持つ列点を入れる。横線と列点の組み合せは、深橋前遺跡とその付近で出土する甕の典型的な施文構成である。2011は高坏Ｄ類の坏部である。2013は甕Ｂ類、2012・2014は壺の底部である。

なお、この竪穴住居跡は、多条沈線を持つ高坏Ｃ類の存在から、Ⅲ－４期の可能性が高い。



①7.5YR4/4(褐色)砂質シルト。砂岩小礫を含む。
②7.5YR4/6(褐色)粘質シルト。砂岩小礫を含む。炭混入。
③7.5YR4/4(褐色)砂質シルト砂岩小礫を含む。炭混入。
④7.5YR3/4(暗褐色)砂質シルト。粘性あり。焼土・炭混入。
⑤7.5YR2/2(黒褐色)砂質シルト。植生。
⑥焼土
⑦7.5YR3/4(暗褐色)砂質シルト。炭・砂岩小礫を含む。
⑧7.5YR3/4(暗褐色)砂質シルト。炭入る。下部は焼土。
⑨2.5YR5/8(暗赤褐色)熱によって硬化した面。
⑩N1.5/0(黒色)
⑪7.5YR3/3(暗褐色)に7.5YR5/6(明褐色)が混入。
細かい炭の混入。
⑬7.5YR5/6(明褐色)に7.5YR3/3(暗褐色)が混入。
⑭7.5YR4/6(褐色)砂岩土。
⑮10YR3/4(暗褐色)砂岩小礫、炭の混入少しあり。
⑯10YR3/4(暗褐色)砂岩。
⑰10YR3/4(暗褐色)砂質土。
⑱10YR4/3(にぶい黄褐色)焼土・炭の混入多い。
⑲10YR4/3(にぶい黄褐色)粘質土。
⑳10YR4/3(にぶい黄褐色)炭の混入なし。砂質土。
㉑10YR4/3(にぶい黄褐色)炭の混入なし。粘質土。
地山　粘質土

0　2m
(S=1/50)

図21　SBA05実測図

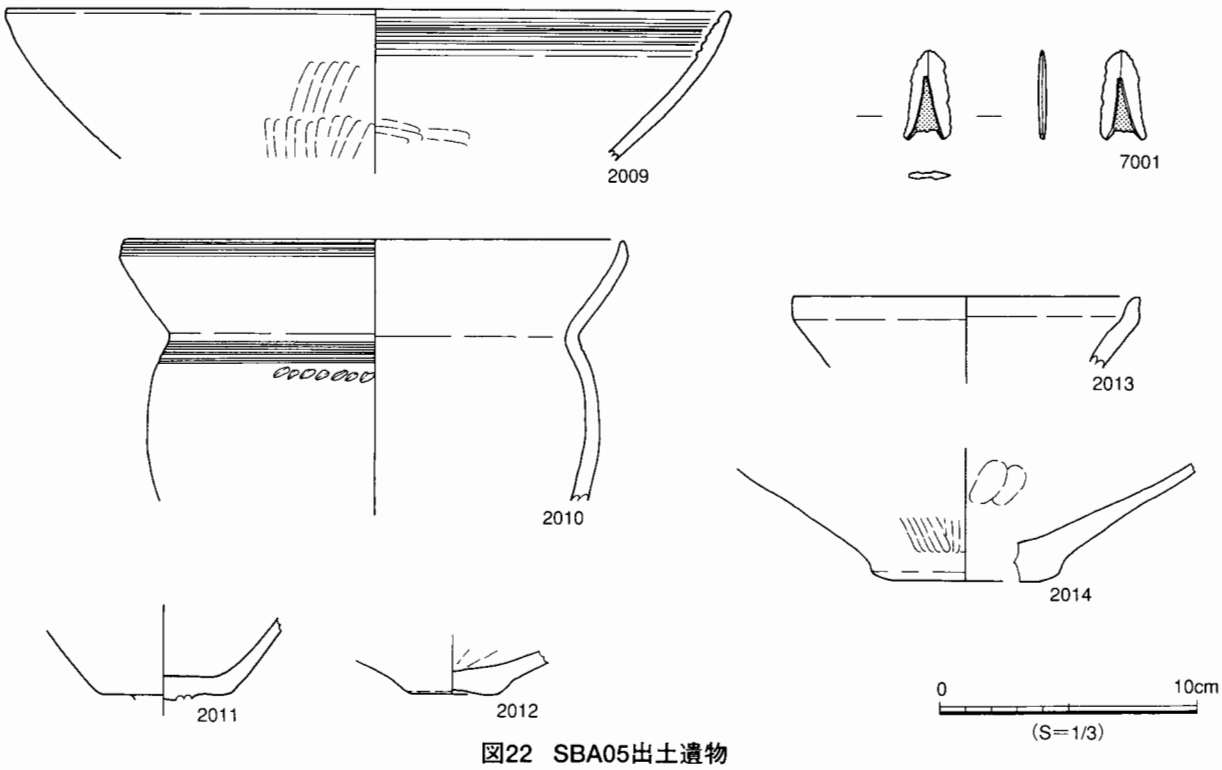
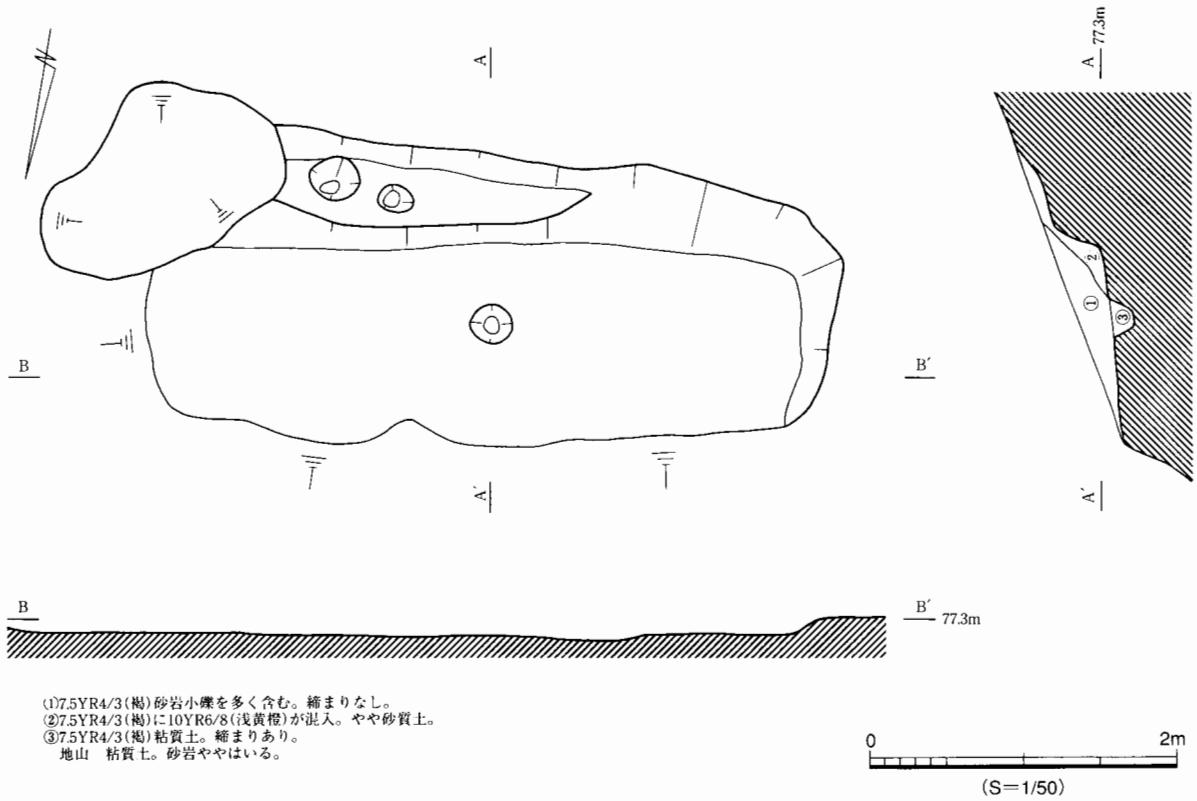


図22　SBA05出土遺物

ＳＢＡ06

遺構（地形図13，図23，図版４）21Ｋグリッド



(1)7.5YR4/3(褐)砂岩小礫を多く含む。締まりなし。
(2)7.5YR4/3(褐)に10YR6/8(浅黄橙)が混入。やや砂質土。
(3)7.5YR4/3(褐)粘質土。締まりあり。
地山　粘質土。砂岩ややはいる。

図23　SBA06実測図

東丘陵の西向斜面、中腹の急斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅3.85m・奥行き1.28m（現存長）の方形で、岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。位置的に柱穴とするには問題はあるが、山側の床面中央部付近には1基のピットがある。また、山側には狭いテラス状の平坦面があり、ここにも柱穴かと考えられる2基のピットがある。深さなどから、いずれも建築部材を立てた痕跡と考えられる。壁溝・炉・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図24）

遺物の出土が多いわりには、小片が多く、図示に耐えうる遺物は2点のみである。2015・2016は、山間部には珍しい甕E類の頸部片である。口縁外面には押引刺突文が入れられ、頸部内面には横方向のハケがしっかりと残されている。これらの特徴から、小片ながらもS字甕A類に属するものと考えられる。

なおこの竪穴住居跡は、出土したS字甕の年代観から、小期区分はできないものの、Ⅱ期の範疇に属すると考えられる。

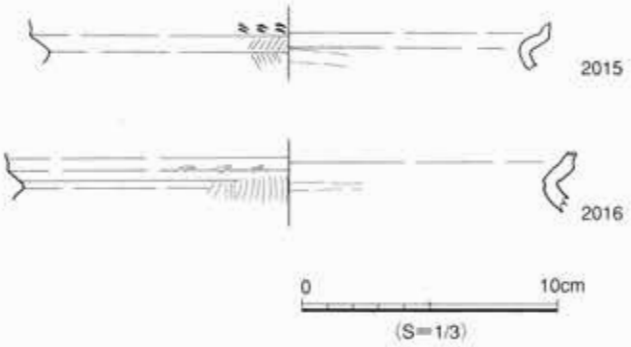


図24　SBA06出土遺物

ＳＢＡ07

遺構（地形図25，図26，図版4）21Eグリッド

東丘陵の西斜面、谷の裾部付近のなだらかな斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅3.40m・奥行き3.63m（現存長）の方形で、粘質土を掘って床面を造っている。大きさと立地から南側の床面がやや崩落しているものの、その床面はほぼ残存しているものと考えられる。山側の壁はきつく立ち上がった後、長く緩やかに造られている。土色からは崩落の確認はできなかったので、人為的なものと考えられる。柱穴はそれほど深くはないが4基ある。壁溝・炉・貼り床は確認できなか

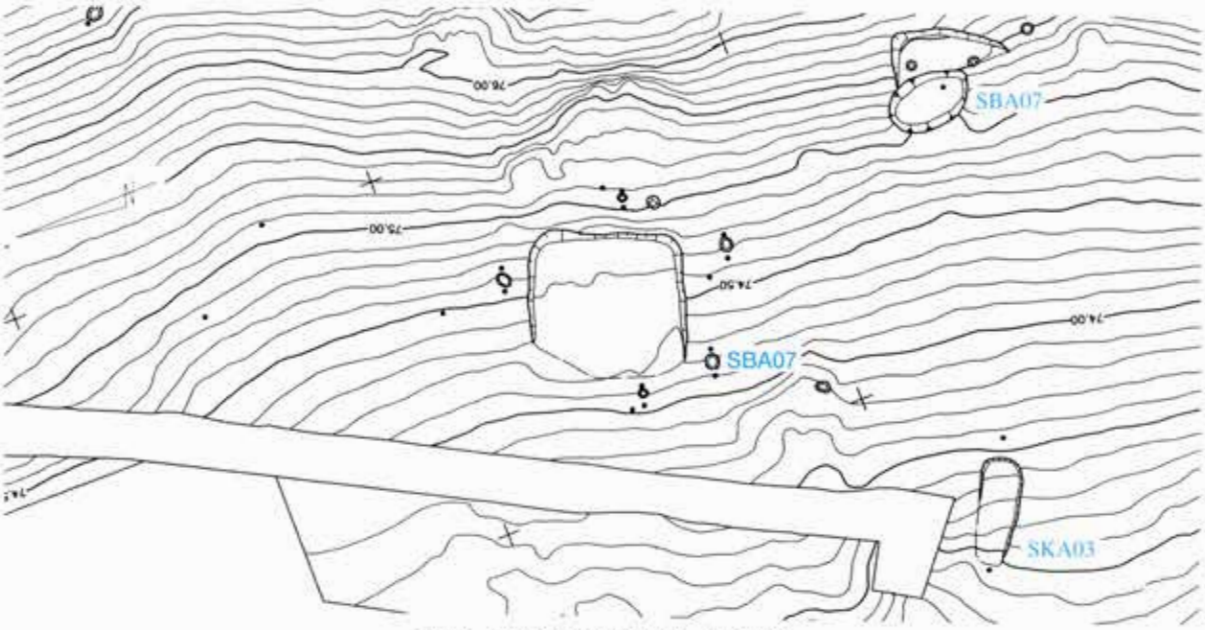


図25　SBA07周辺地形図（1/200）

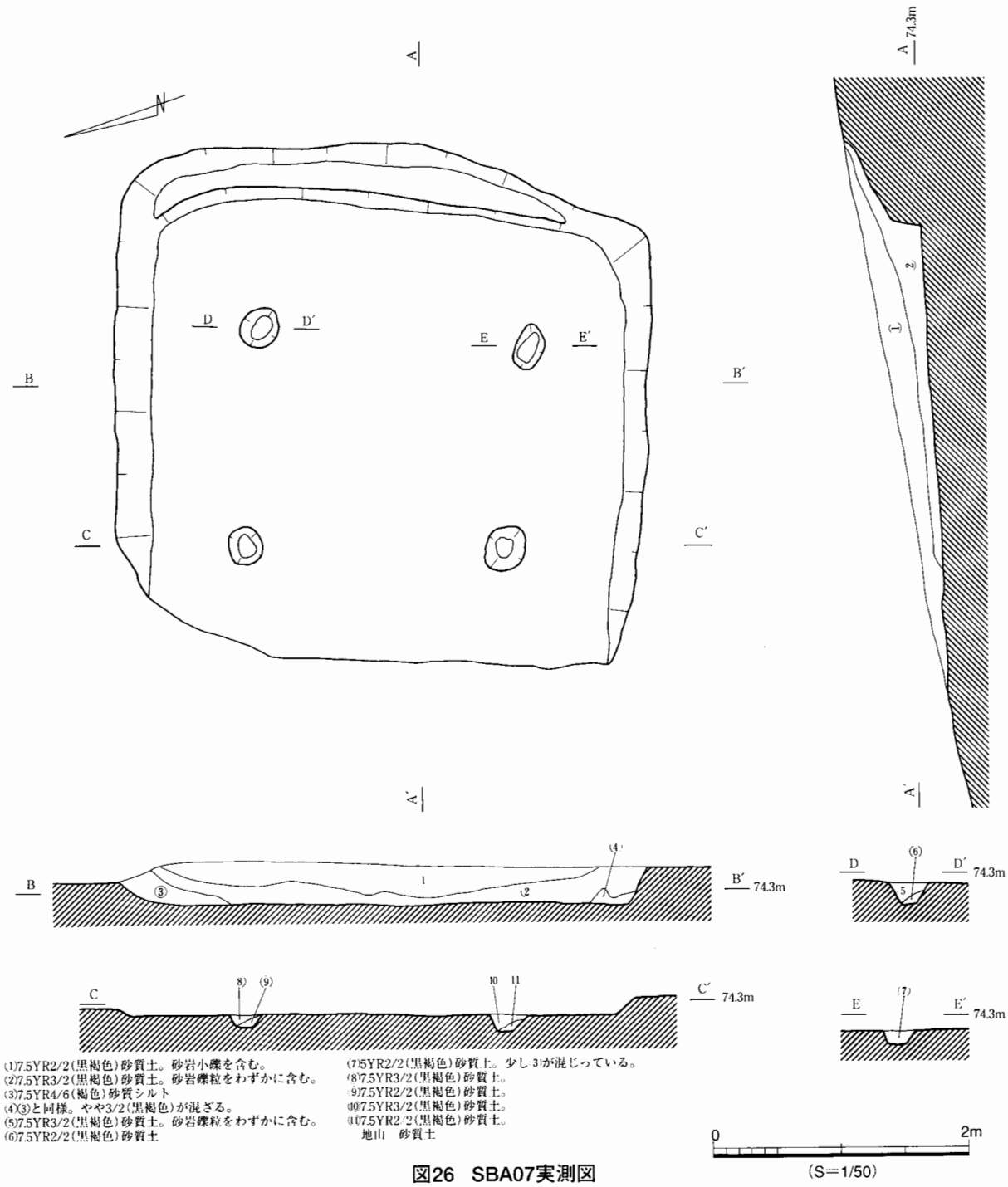


図26　SBA07実測図

った。また、埋土に細かい変化はないことから、比較的短時間に埋没したものと考えられる。これは多量の流土がたまり易い、谷裾部に立地していることから考えて、不自然なことではなかろう。

遺物と所属時期（図27）

遺物の出土が多いわりには小片が多く、図示に耐えうる遺物は土器６点・石器３点である。2019は高坏の脚部で粘土を充填して接合している、2017は器台の口縁部、2018は壺Ａ2類の口縁部であり、口縁部上面には平坦面を持たないが、３条の列点を、横面には横線を入れ、下部を肥厚させている。また、2022は小片でよくわからないが鉢Ｃ類の口縁と考えられる。2021は口縁にキザミ・胴部に列点

を入れた甕H類、2020は縦方向に掻き上げる条痕を持つ甕A１類の底部であり、底部には布目圧痕を残す。この土器は、成瀬正勝氏が「砂行遺跡における甕の在地色」（成瀬2000）で指摘したところの、廻間Ⅰ－２～３段階にまで存続する、櫛条痕による条痕文系甕である。

6001は磨製石矛、6002は磨製石剣の断片、6003は打製石斧である。どれも床面の直上から出土した。

なお、この竪穴住居跡は時期決定の根拠となる遺物に薄いが、条痕系の甕とともに口縁部にミガキを施す鉢の存在することから、Ⅲ－３期の可能性が考えられる。

図27　SBA07出土遺物

ＳＢＡ08

遺構（地形図28，図29，図版５）23Ｊグリッド

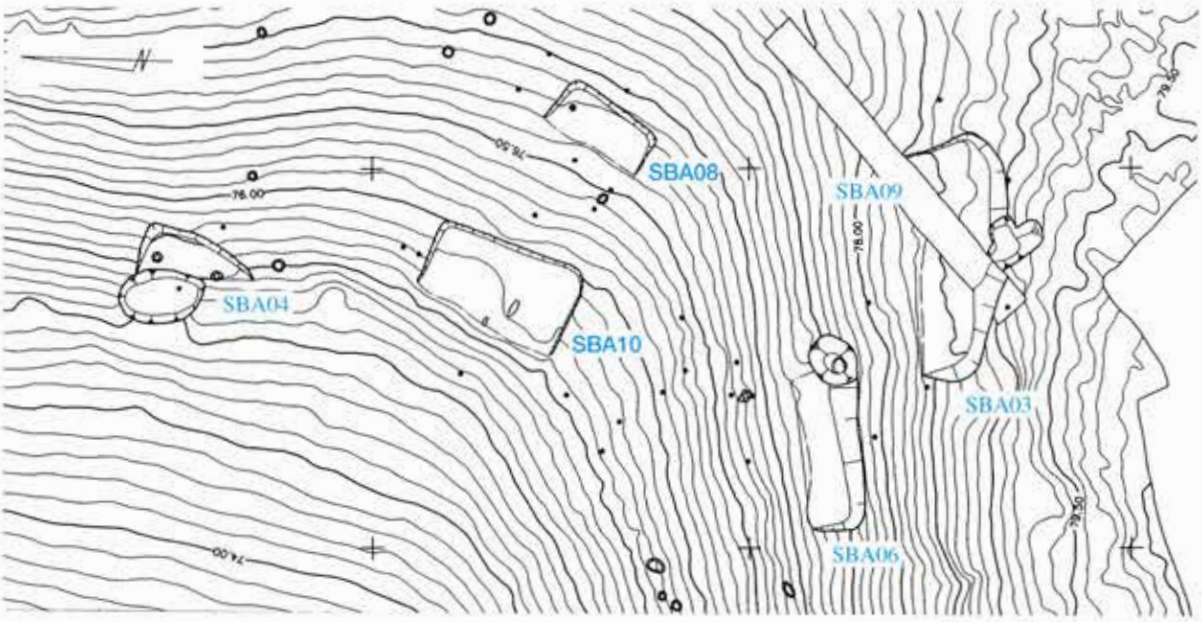


図28　SBA08・10周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向き斜面、尾根から少し下った斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅2.65m・奥行き1.55m（現存長）の方形で、粘質土を掘って山側の床面を造っている。谷側の床は一部喪失している。柱穴は浅いものの１基確認できた。壁溝・炉・貼り床は確認できなかった。非常に小規模な住居である。この住居は、他の住居と違って、緩やかではあるが谷の中央部に造られている。これは後述のＳＢＡ10も同じであるが、雨水が流入しやすい場所に山側の周溝も設けずに竪穴住居跡を造ることは不合理であり、選地の理由は不明といわざるをえない。

遺物と所属時期（図30）

遺物の出土が多いわりには小片が多く、図示に耐えうる遺物は３点のみである。2023は内外面にミガキを施し、粘土を充填して坏部と脚部を接合した、高坏Ｂ類の受け部である。2024は平底の甕の底部で、底部の接合痕から擬口縁の可能性がみられる。2025は甕Ｂ類の口縁部から胴部である。この口縁部にはハケの小口を用いて入れたとみられる列点があり、胴部には横線、その下に列点が入れられている。これらはすべて同じ工具が使われたと考えられる。

なおこの竪穴住居跡は高坏Ｂ類の存在からⅢ－２期の可能性が高い。

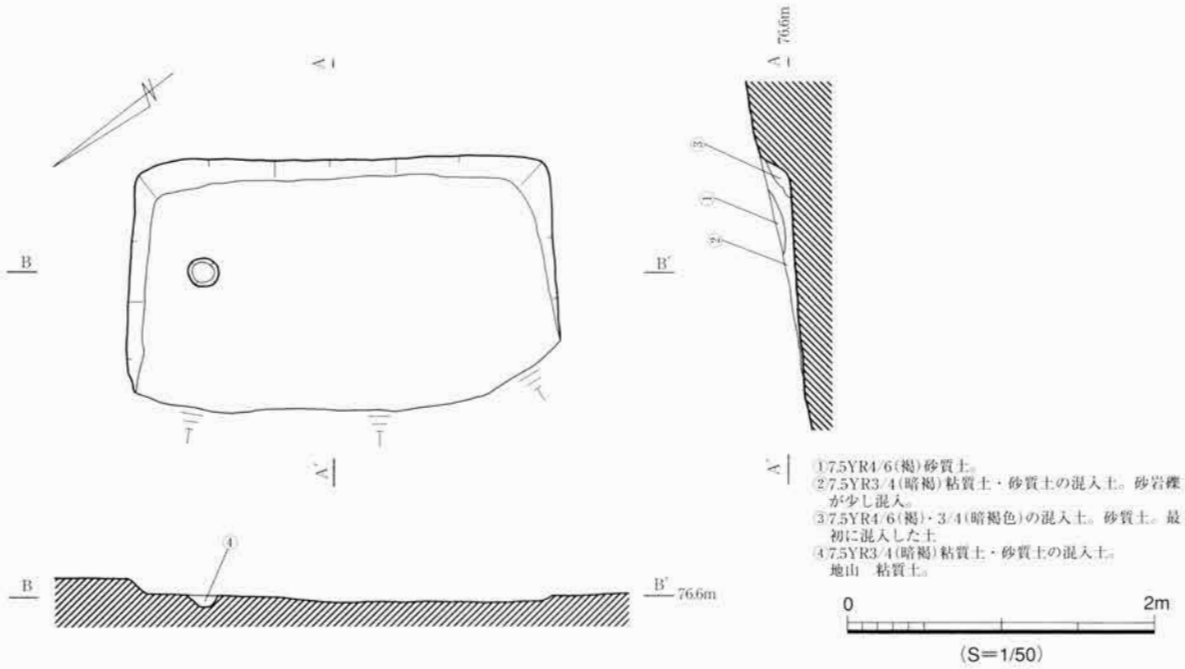


図29　SBA08実測図

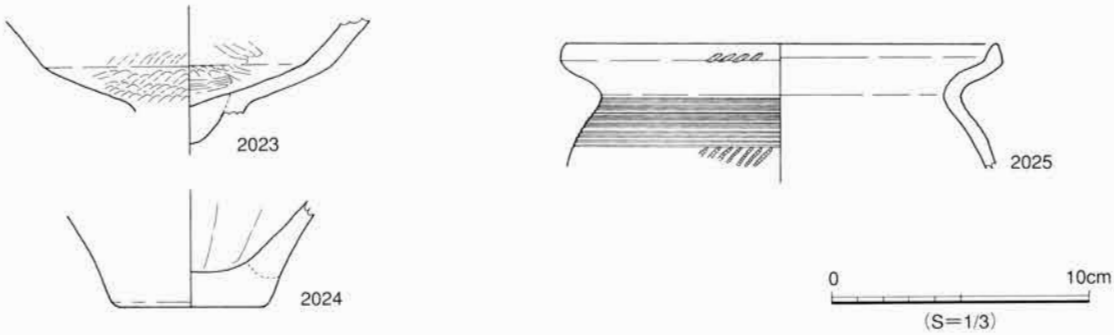


図30　SBA08出土遺物

ＳＢＡ10

遺構（地形図28，図31，図版５）22Ⅰグリッド

東丘陵の西向斜面、尾根から少し下った斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅2.70m・奥行き1.95m（現存長）の方形で、ＳＢＡ08と同じように粘質土を掘って山側の床面を造っており、緩い谷のほぼ中央部に造られている。谷側の床は一部喪失している。比較的に小規模な住居である。柱穴・壁溝・貼り床は確認できなかった。谷側の床面残存部の端部中央付近に、川原石を炉石とする炉跡があり、炉石の周辺は赤く焼き締まっていた。なお、埋土の状況や選地の理由はＳＢＡ08と同様である。

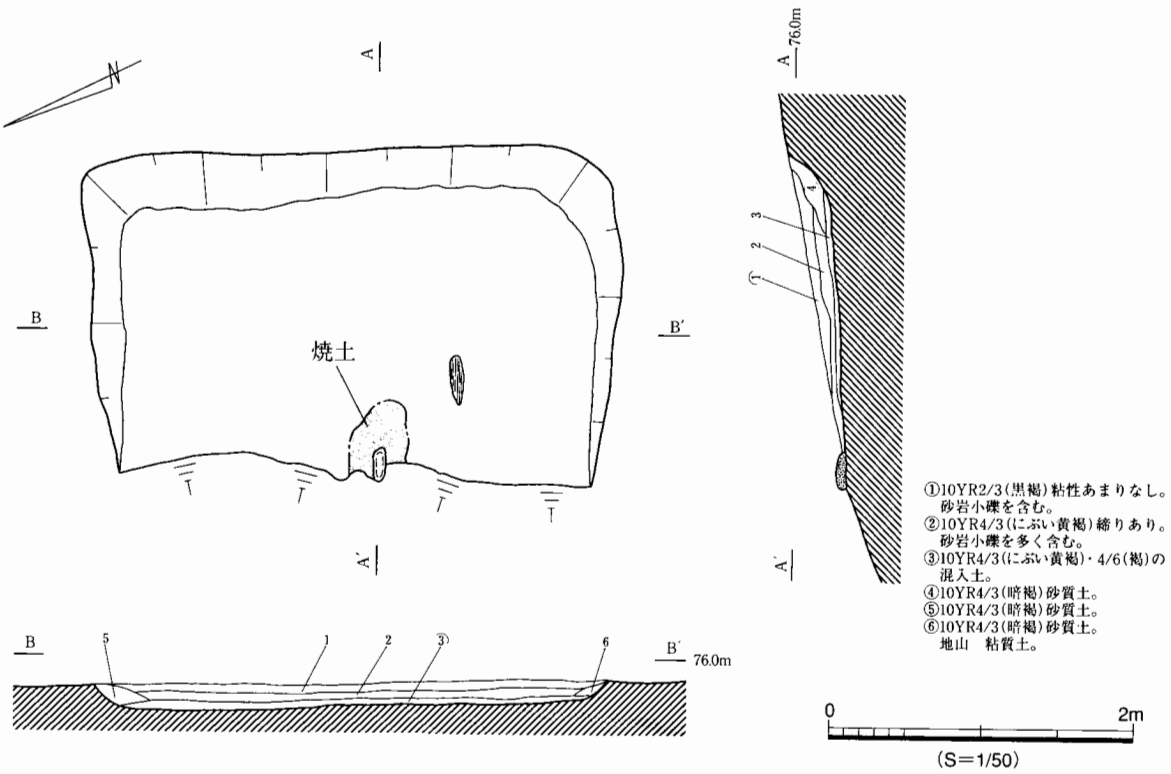


図31　SBA10実測図

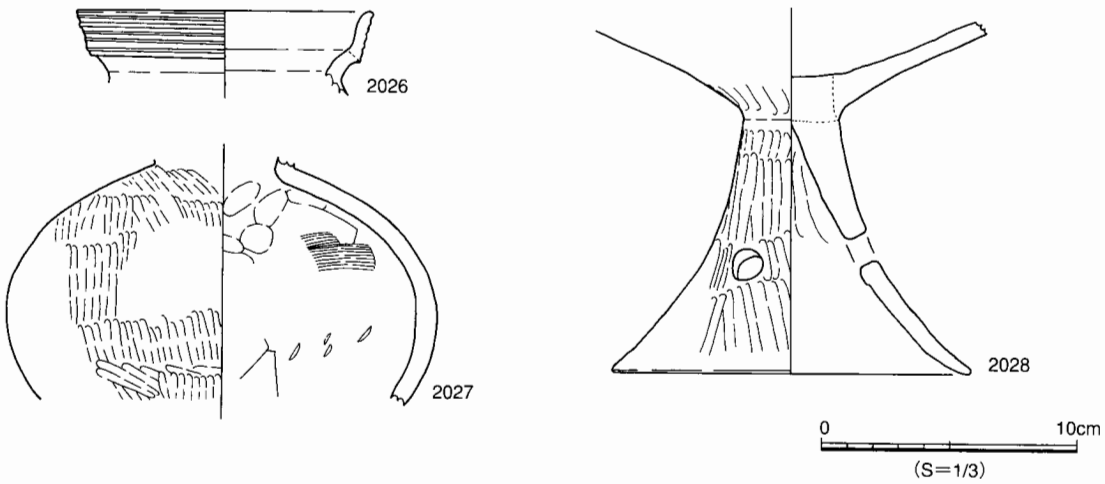


図32　SBA10出土遺物

遺物と所属時期（図32）

遺物のうち、図示に耐えうる遺物は３点のみである。2028は高坏Ｂ類の脚部と考えられ、脚部は撥形に開いている。2027は長頸壺と考えられる壺であり、赤っぽい胎土を持つ。2026甕Ｆ類で北陸系の有段口縁を持ち、立ち上がり部分に擬凹線を５条入れている。プロポーションは北陸系のうちでも月影式の様相を見せているが、口縁部・頸部の接合方法や擬凹線の入れ方、また、胎土などはそれとは異なる部分もあり、直接に搬入されたものではないと考えられる。

なおこの竪穴住居跡は高坏Ｂ類の存在からⅡ－３期の可能性が高い。

ＳＢＡ14

遺構（地形図33，図34，図版５）11Ｐグリッド

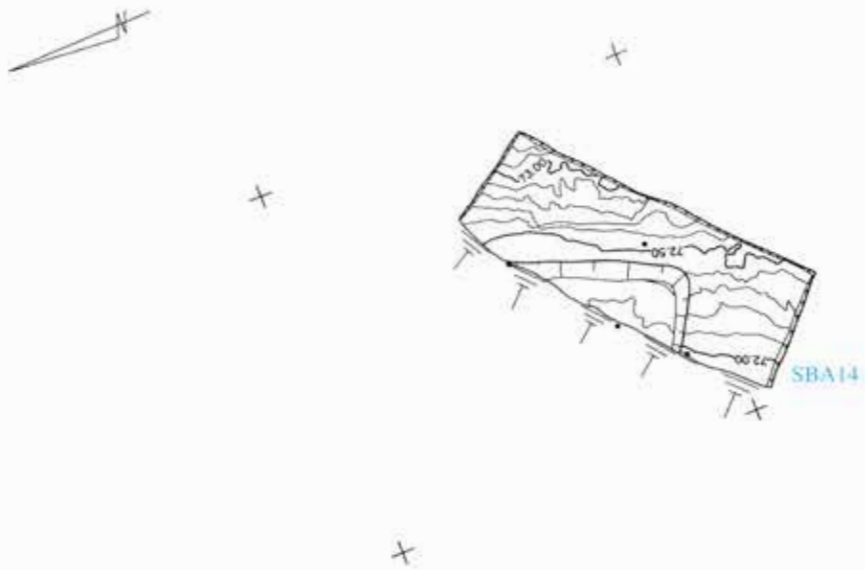


図33　SBA14周辺地形図（1/200）

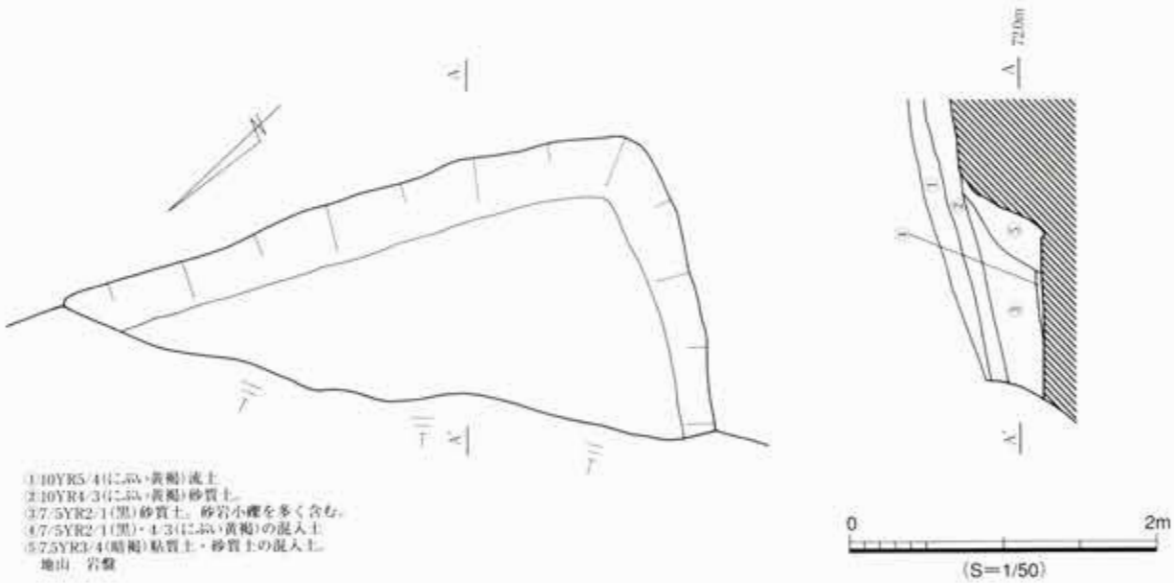


図34　SBA14実測図

東丘陵の西向斜面、裾部付近に立地する。南のコーナーがわずかに残っているのみで、規模などはよくわからないが、現状では切り合い関係は無く単独で存在する。幅3.28m・奥行き1.68m（共に現存幅）の方形で、岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。谷側の床はほとんどを喪失している。柱穴・壁溝・貼り床は確認できなかった。現状のセクションから類推して、竪穴は深くしっかりとした肩を持っている。また、洞状の尾根の入り口に存在することから、特別な住居である可能性も類推できるが、残存状況が悪いため深く追求することは不可能である。

遺物と所属時期（図35）

遺物の出土は少なく、図示に耐えうる遺物は1点のみである。1029は、甕D類で比較的大型品である。

所属時期は不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

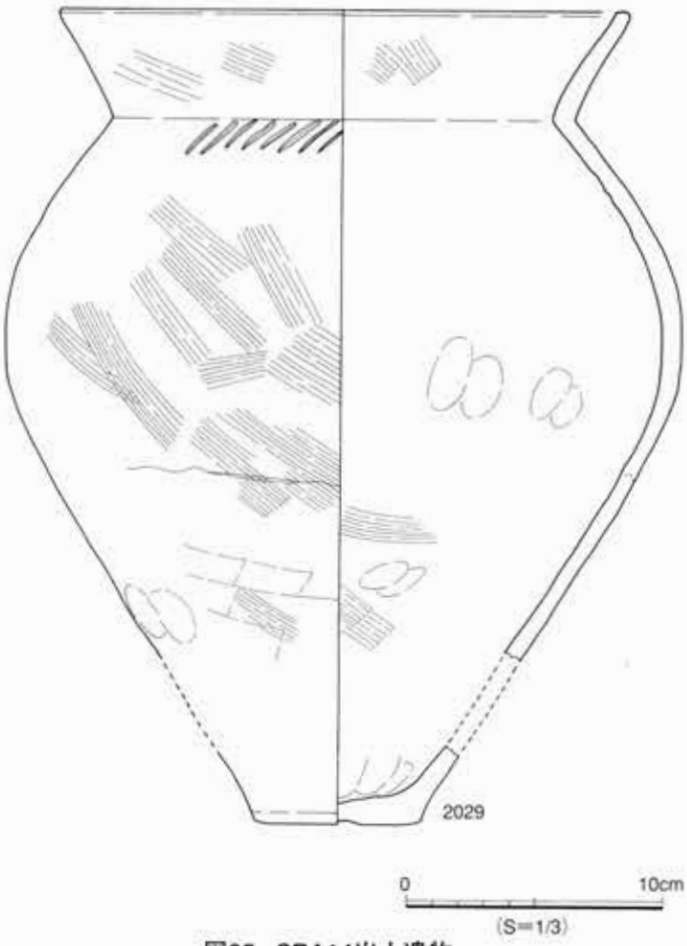


図35　SBA14出土遺物

ＳＢＢ01

遺構（地形図36，図37，図版６）31Ｚグリッド

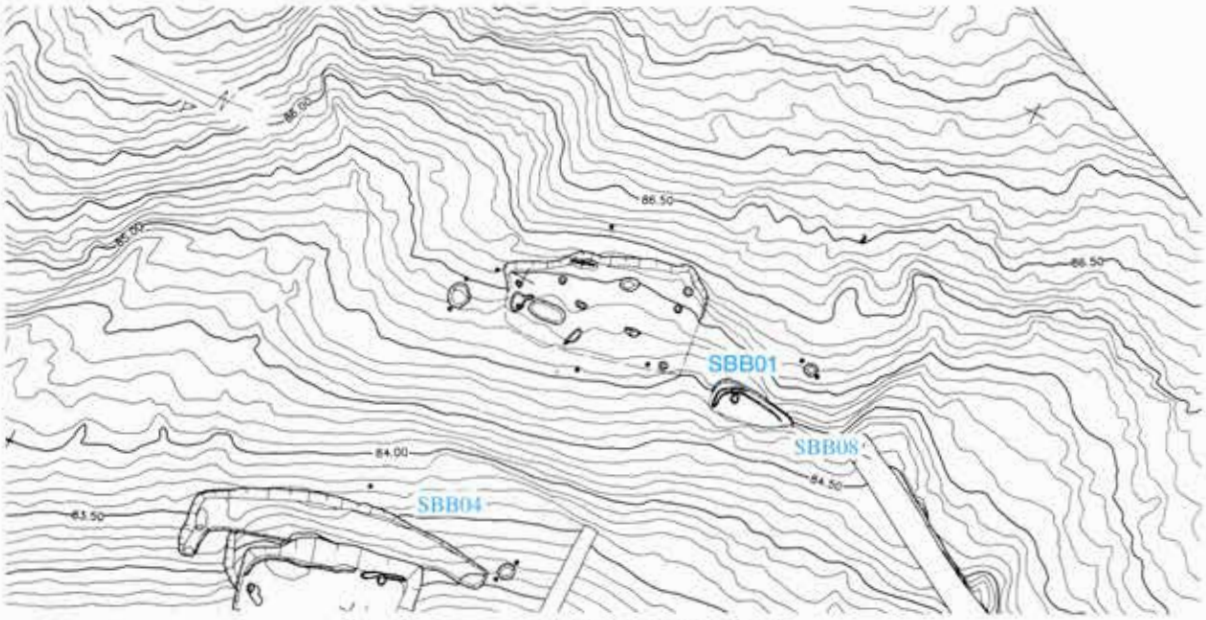


図36　SBB01周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向斜面、尾根頂部から少し下った急傾斜地に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅4.65m・奥行き3.23m（現存長）の方形で、岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。谷側の床面は比較的よく残っている。床面の中央部付近に赤く締まった部分と、黒く焦げた部分がみられる。位置的には地床炉と考えてよいものもあるが、炉石がみられない上に、他の住居跡と比べるとその広がりが大きいことから少し不自然な感が否めない。しかしながら、焼失家屋にしては柱材や垂木などの炭化材がみられないほか、焼き締まり方もそう堅くないため、一応は地床炉の痕跡と考えてよいのではなかろうか。柱穴らしきピットが７基みつかったが、どれも浅く決め手に欠けることから一応図示しておくにとどめる。壁溝・貼り床は確認できなかった。Ｂ区斜面に立地する住居跡の中でもっとも高い位置にあり、出土した土器は比較的古い要素を持っている。

遺物と所属時期（図38）

７点の土器を図示した。2030は高坏Ｃ類で、坏部は内彎傾向を持ちながらも直立気味で、脚部は柱状を呈し、比較的長脚の要素を持っている。2031は器台受け部。2032は器台Ｂ１類で、坏部・脚部共に多少内彎傾向を持っており、坏部下部は接合の後に粘土をつぎ足して肥厚させた、比較的厚めで重量感のある器台である。2033・2034は鉢で、前者は口縁部が長くのび端部にわずかな段を持つ、鉢Ｂ

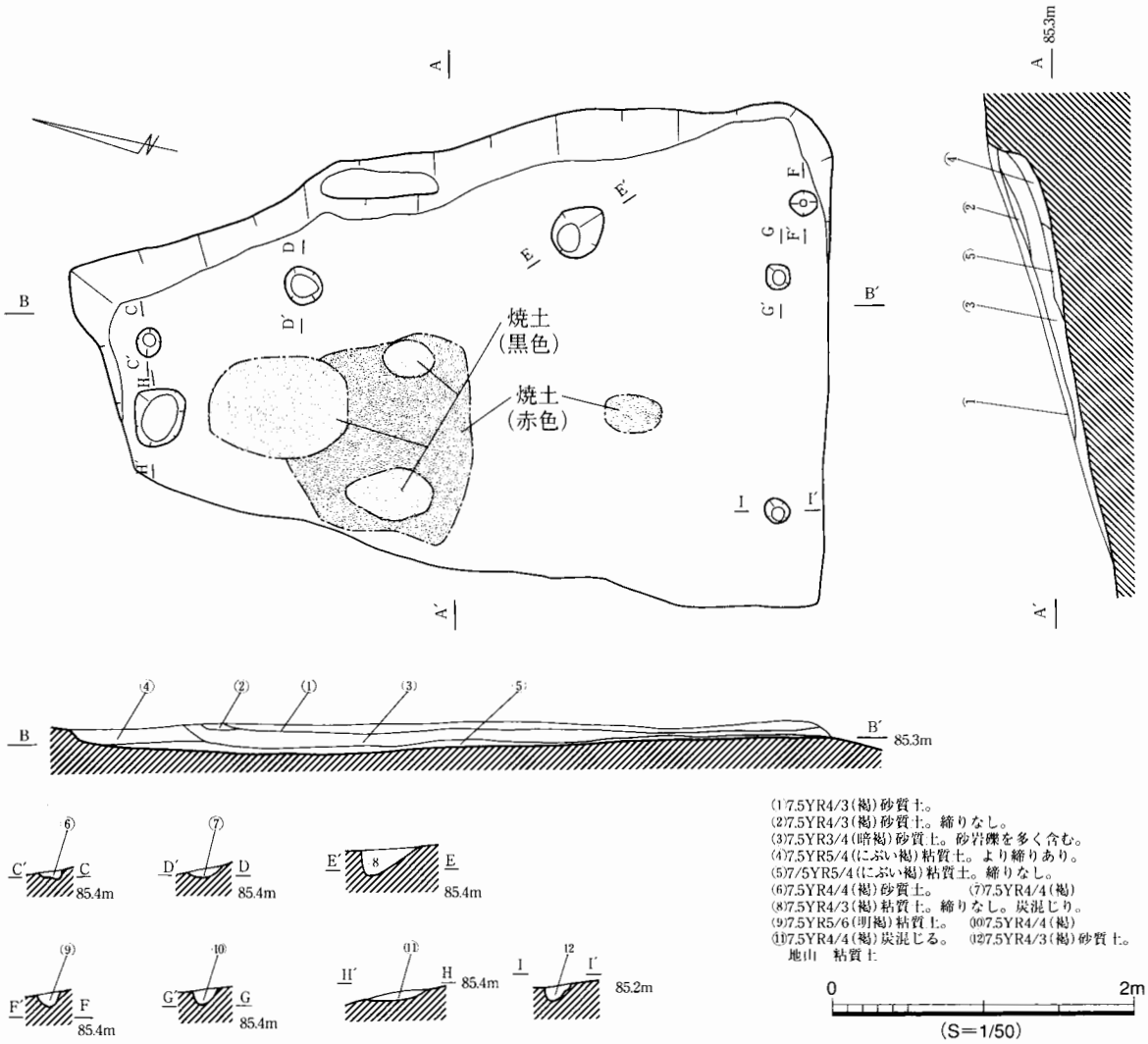


図37　SBB01実測図

類である。2035・2036は甕の口縁、2037・2038は壺の底部である。

なおこの竪穴住居跡は、長脚の高坏Ｃ類と、坏部がやや深くなるもの、比較的長脚の要素を残している器台Ｂ２類の存在からⅡ－３期の可能性が窺える。

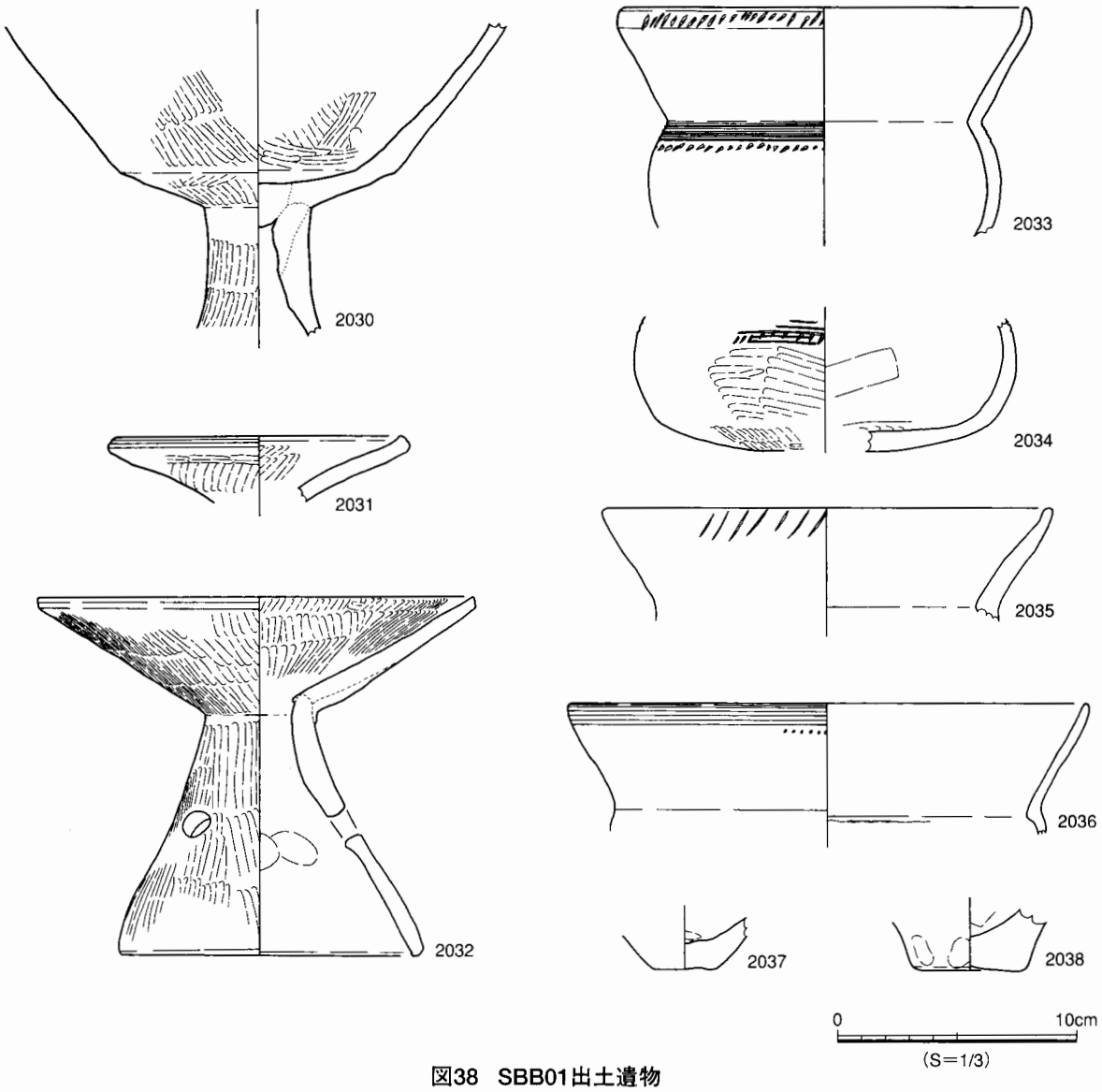


図38　SBB01出土遺物

ＳＢＢ04

遺構（地形図39，図40，図版５）28Ｚグリッド

東丘陵の西向斜面中腹の急傾斜地に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅4.00m・奥行き3.63m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて床面を造っている。比較的残りが良く、山側周溝を持つほか、床面も大部分は残っている。床面の中央部より若干谷側に、赤く焼き締まった部分と炉石がみられる。被熱範囲が多少不自然ではあるが、地床炉と考えられる。柱穴らしきピットが４基あり、このうちの南側の２基は深く柱穴として問題ないが、北側の２基はいずれも浅く、柱穴の可能性は低い。一応図示しておく。床面の山側には壁溝が断続的に巡る。貼り床は確認できなかった。この住居跡の埋土は、地山との判断がつきにくく、Ａ－Ａ'セクションを見てもわかるように、上層の１

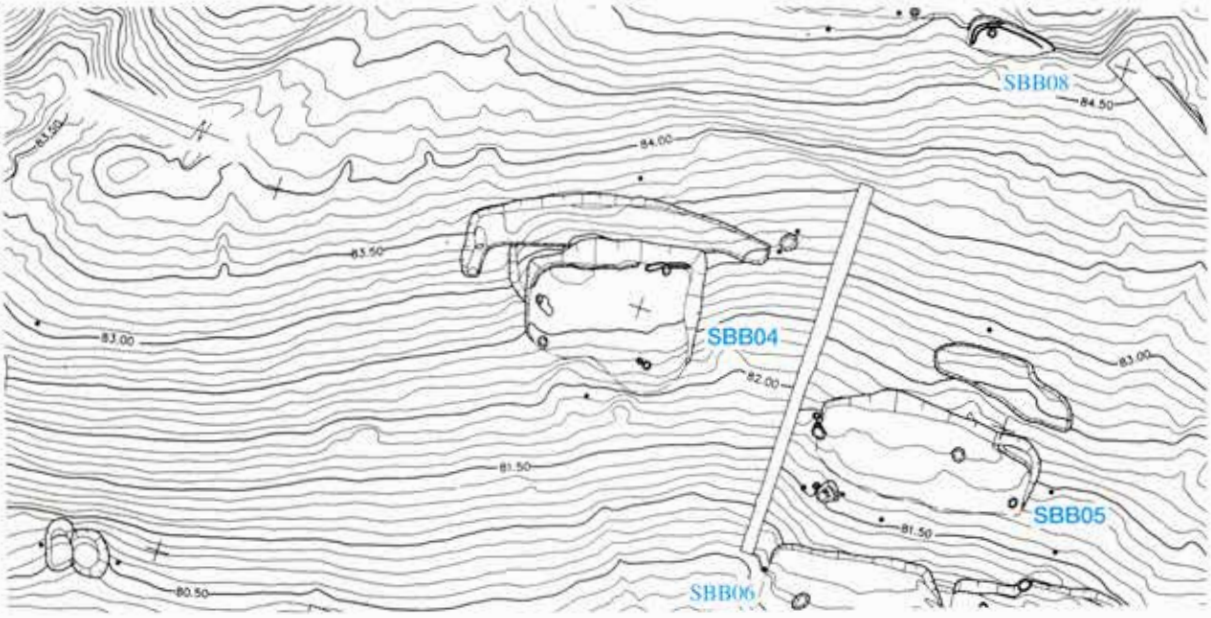


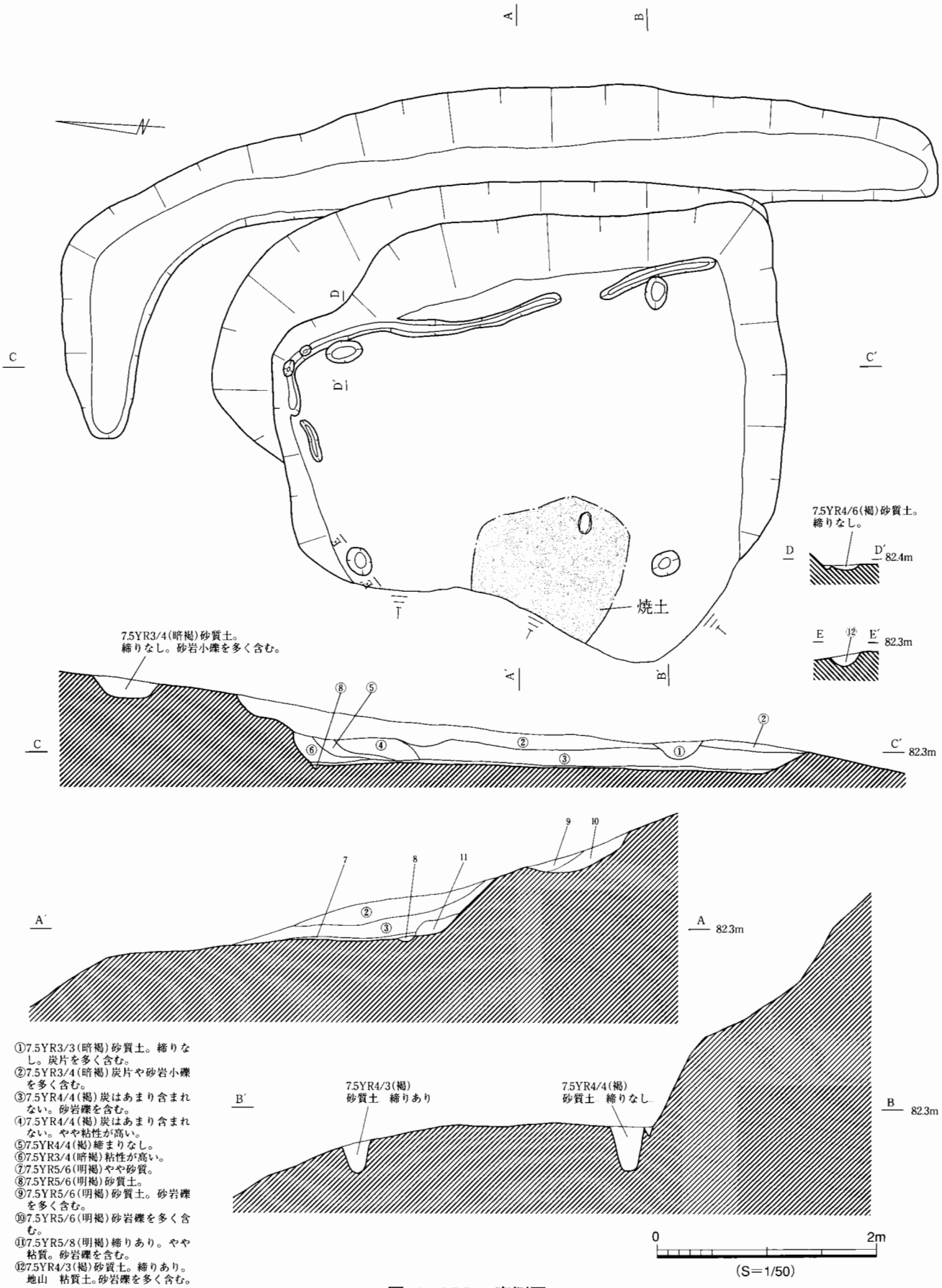
図39　SBB04・05周辺地形図（1/200）

層ないしは２層を残せなかった。そのため、住居跡の山側が山側周溝と接していたかどうかについては、現場において確認することはできなかった。深橋前遺跡には山側に周溝を持つ竪穴住居跡が何軒か存在するが、この中には、掘り込みに近接して周溝が掘られているものがある。竪穴住居を建てる際には主柱穴を組んだ後に、垂木を放射状に並べることを想像すると排水を目的とする周溝としては不合理である感が否めない。また傾斜地であることを考慮にいれると、周溝を掘るよりも本来その内側に盛られた土塁状の堤の方が重要なのではなかろうか。もっとも土塁状の土盛りを確認していないため、推測の域はでないけれども、この周溝の外側に土盛りを造り、このための土を採るために掘った平坦な周溝で、ここに垂木を立てたと考えることはできないであろうか。

遺物と所属時期（図41）

７点の土器と１点の石器を図示した。2039は高坏Ｂ類で、坏部は直立気味で外反傾向をやや残しており、脚部もやや外反している。全体的に厚く、重量感のある高坏である。2040は比較的浅い器台。9041は器台Ｂ１類で口縁端部には２条の横線を入れ、器部の内面はタテ及び斜め方向のミガキを上から下に、外面は縦方向のミガキを下から上に施している。また、脚部にはタテ方向のミガキを施し、比較的上部に２孔一組の穿孔がある。2045は壺Ａ１類で、口縁部には３条の横線を入れた上で、２本一組の棒状浮文を貼り付け、頸部は粘土を貼り付けて突帯にした上に棒状工具でキザミを入れている。胴部には列点文・波状文・横線を上から順番に入れている。このうち、波状文の返りはぎこちなく、間隔も揃ってはいない。また列点文・横線も同様に不揃いである。2042は口縁の内面に斜め方向のミガキを持つ壺Ｂ１類、2043は甕Ｂ類、2044は口縁部がやや直立気味ではあるが甕Ｃ類と考えられる。6004は、磨製石鏃の未製品である。

なおこの竪穴住居跡は、高坏Ｂ類・柱状部が比較的しっかりとして古相を示す器台Ｂ１類、棒状浮文を貼りつけた壺Ａ１類の存在から、Ⅱ－２期の可能性が窺える。



①7.5YR3/3(暗褐)砂質土。締りなし。炭片を多く含む。
②7.5YR3/4(暗褐)炭片や砂岩小礫を多く含む。
③7.5YR4/4(褐)炭はあまり含まれない。砂岩礫を含む。
④7.5YR4/4(褐)炭はあまり含まれない。やや粘性が高い。
⑤7.5YR4/4(褐)締まりなし。
⑥7.5YR3/4(暗褐)粘性が高い。
⑦7.5YR5/6(明褐)やや砂質。
⑧7.5YR5/6(明褐)砂質土。
⑨7.5YR5/6(明褐)砂質土。砂岩礫を多く含む。
⑩7.5YR5/6(明褐)砂岩礫を多く含む。
⑪7.5YR5/8(明褐)締りあり。やや粘質。砂岩礫を含む。
⑫7.5YR4/3(褐)砂質土。締りあり。
地山　粘質土。砂岩礫を多く含む。

図40　SBB04実測図

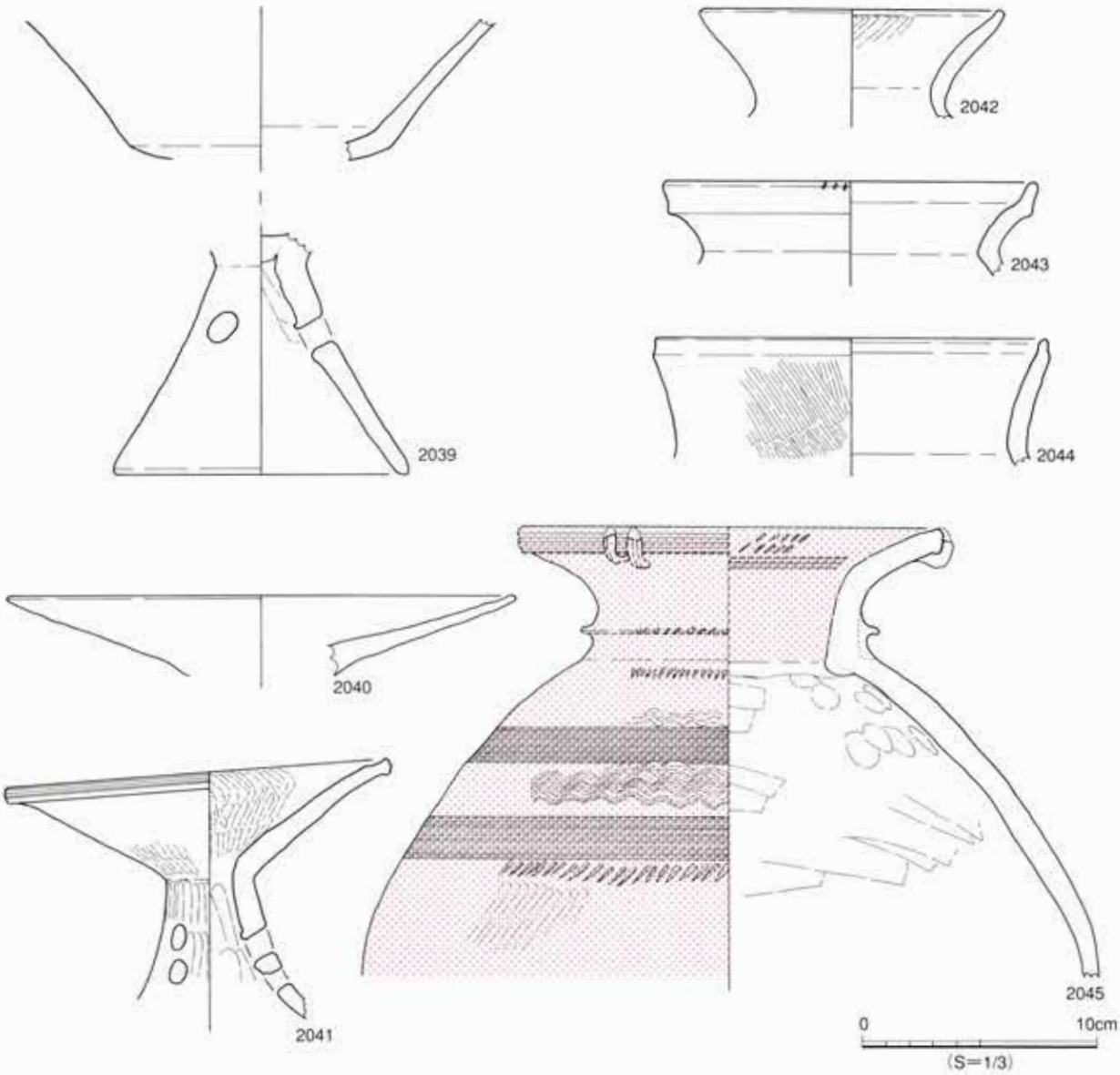


図41　SBB04出土遺物

ＳＢＢ05

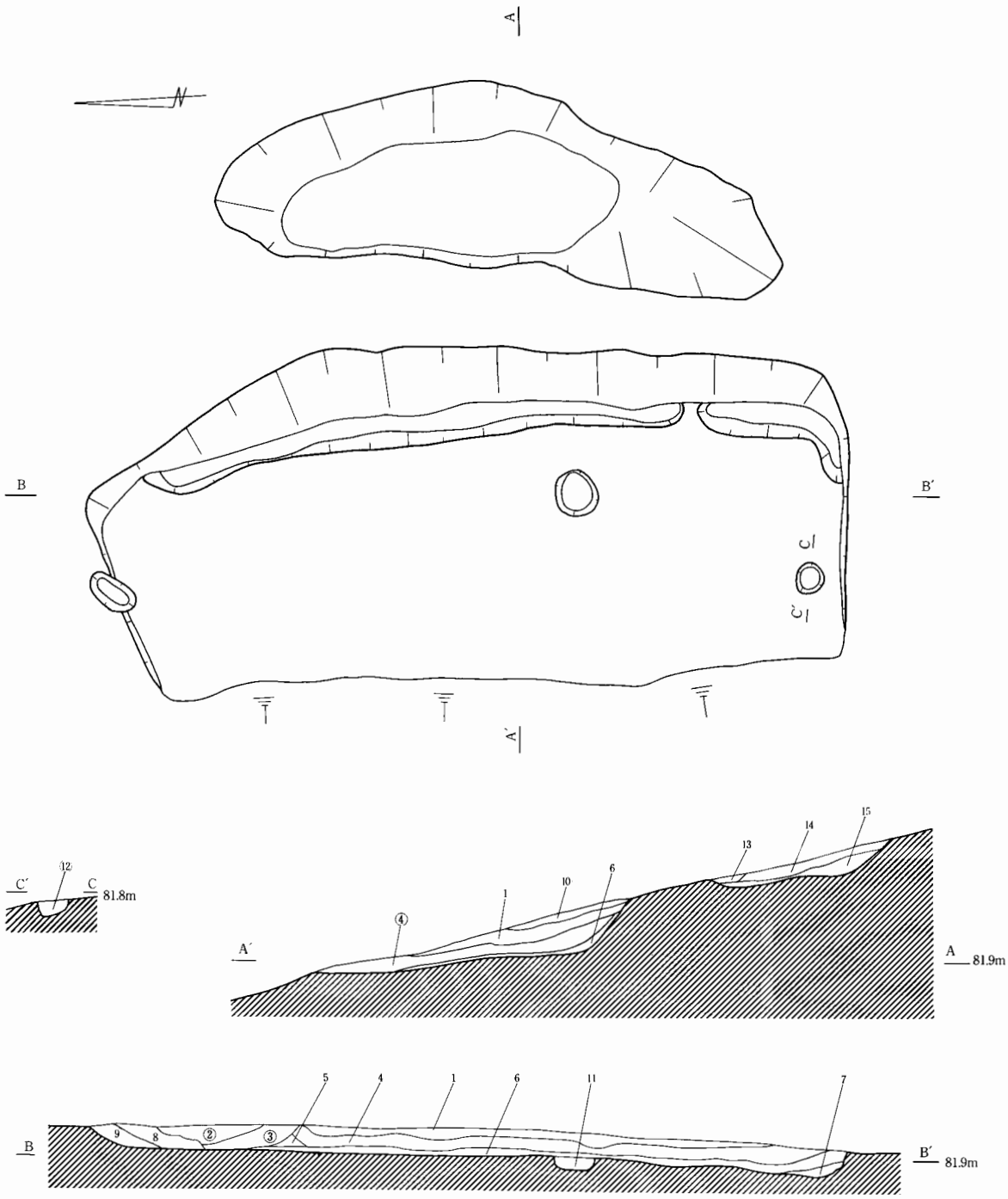
遺構（地形図39，図42，図版６）28Ｂグリッド

東丘陵の西向斜面、尾根頂部から少し下った急傾斜地に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅5.53m・奥行き2.18m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。山側には、断続的に壁溝が残っている。地床炉・貼り床は確認できなかった。ピットは浅く、柱穴とするには、位置的にも問題が残るため、図示するにとどめる。

遺物と所属時期（図43）

遺物は小片が多いため、図示に耐えうるのは３点のみである。2046は高坏C類で口縁部が内彎している、2047は甕Ｃ２類、2048は甕の底部である。

なお、この竪穴住居跡の時期は遺物の出土が少ないのではっきりとはしないが、高杯Ｃ類の存在からⅡ－４期の可能性が窺える。



①7.5YR4/3（褐）砂質土。締りあり。炭片を含む。
②7.5YR3/4（暗褐）砂質土。締りなし。砂礫を含む。
③7.5YR3/4（暗褐）砂質土。締りあり。
④7.5YR4/4（褐）砂礫を含む。
⑤7.5YR4/6（褐）砂質土。締りなし。
⑥7.5YR4/6（褐）粘質土。締りあり。
⑦7.5YR4/6（褐）砂質土。締りなし。粘質土塊を含む。
⑧7.5YR4/4（褐）砂質土。締りあり。
⑨7.5YR4/4（褐）砂礫を含む。
⑩7.5YR4/4（褐）砂質土。締まりあり。砂礫を含む。
⑪7.5YR4/4（褐）締まりあり。
⑫7.5YR4/4（褐）砂質土。締りあり。
⑬7.5YR4/4（褐）砂質土。締りあり。
⑭7.5YR5/6（明褐）砂質土。締りあり。砂礫を含む。
⑮7.5YR4/4（褐）粘質土。締りあり。

0　2m
（S＝1/50）

図42　SBB05実測図

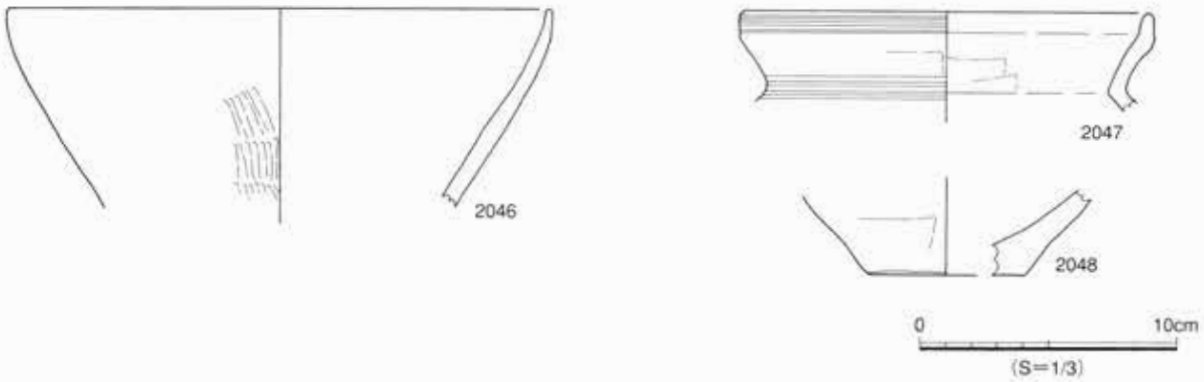


図43　SBB05出土遺物

ＳＢＢ06

遺構（地形図44，図45，図版６）27Ｂグリッド

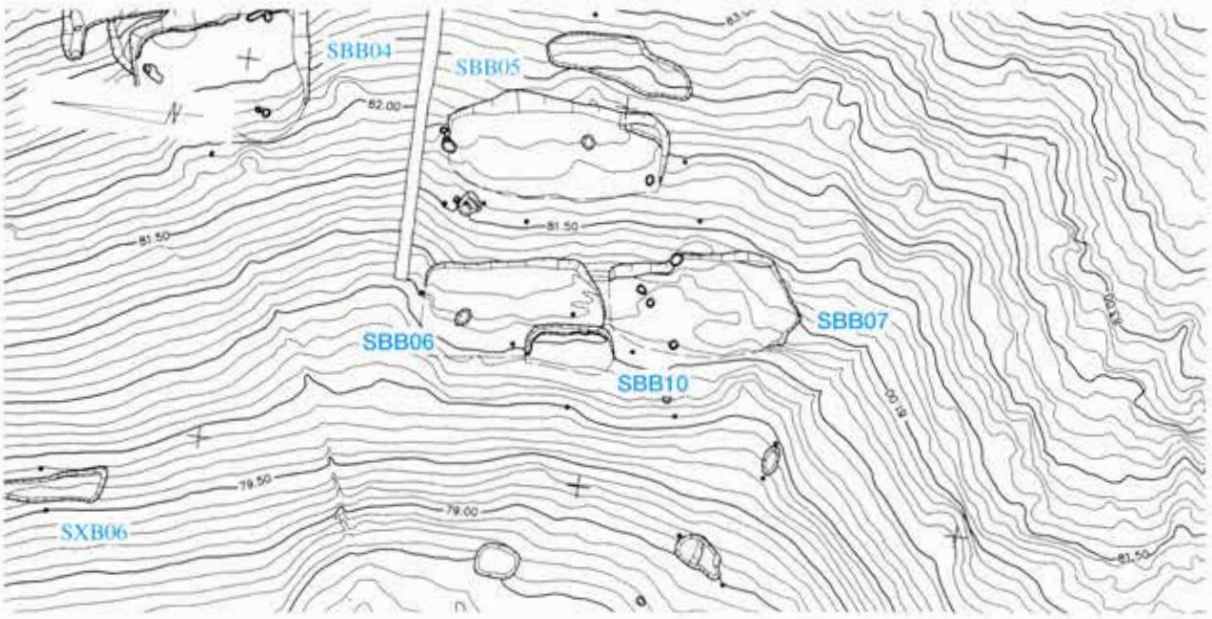


図44　SBB06・07・10周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向斜面、中腹部付近の傾斜地に立地する。谷側はＳＢＢ10に切られ、ＳＢＢ07の北西側に近接する。このことから、この竪穴住居跡はＳＢＢ10より古いことが断定でき、またこれらの３軒は同時期に存在しなかったものと考えられる。幅3.75m・奥行き2.55m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。西側の竪穴の立ち上がりは確認できなかった。山側には断続的に壁溝がめぐっており、その中には大小３カ所のピットが掘られている。柱穴・貼り床は確認できなかった。床面の中央部の西よりには、熱を帯びて赤く締まった硬化面がみられる。炉石も無く位置的には多少問題を残すが、地床炉と考えられる。セクションＡ－Ａ’の４層は、谷側の上面に一部床面が残っているため、掘り抜いた後に埋め戻し、壁溝（浅いピット）を掘削したものと考えられる。

遺物と所属時期（図46）

遺物の出土は少なく、実測に耐えうるものは２点のみである。2049は充填接合の高坏脚部、2050は坏である。坏の外面はナデ調整でナデ消しきれなかった指押圧痕を残し、内面には板ナデを残す。

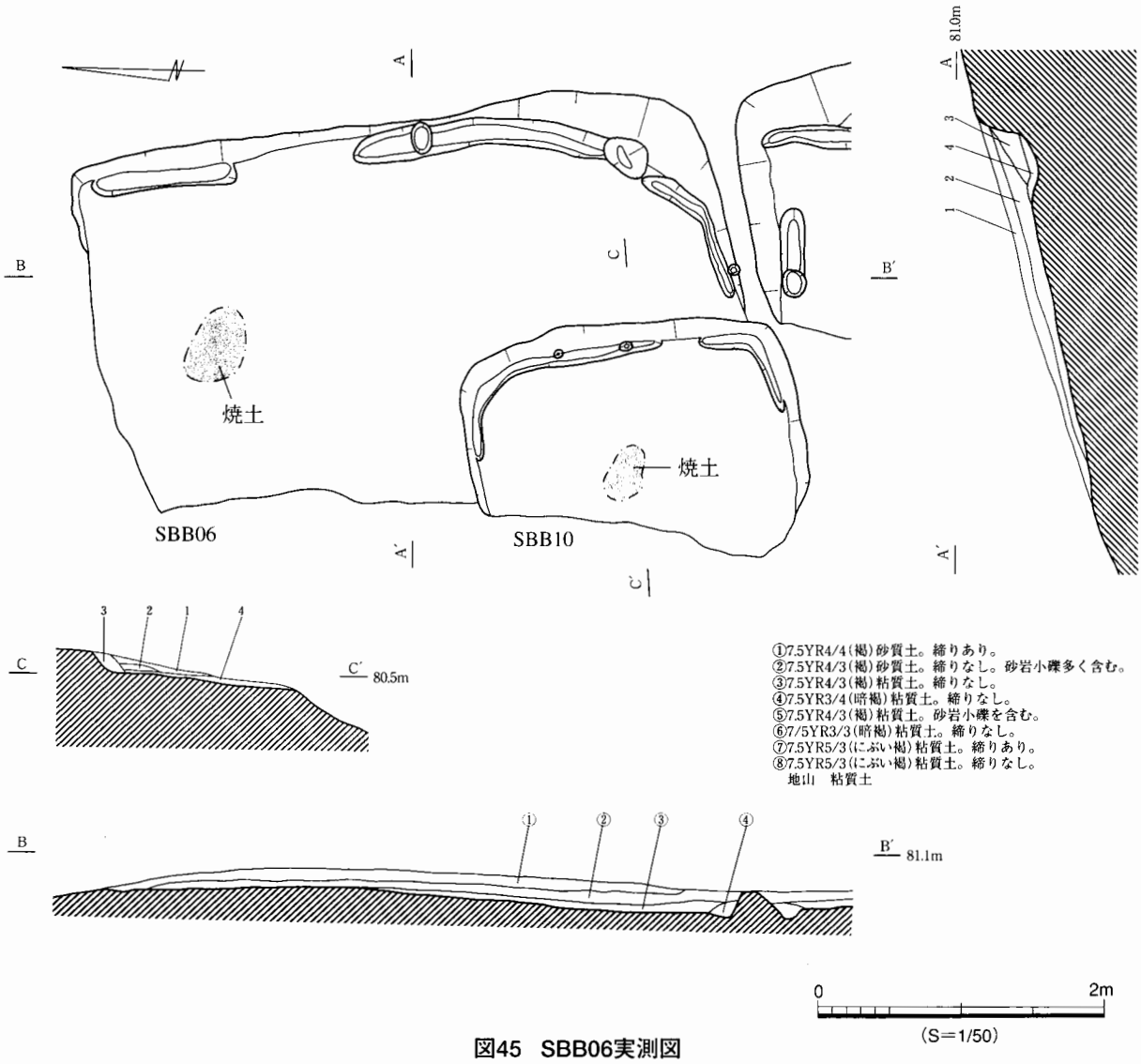


図45　SBB06実測図

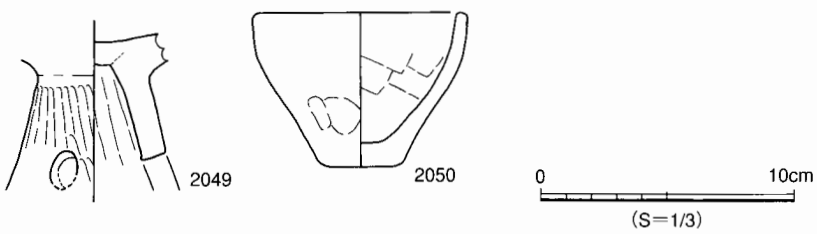


図46　SBB06出土遺物

なおこの竪穴住居跡からの遺物の出土は少なく、小片が多かったため、所属時期は不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

ＳＢＢ10

遺構（地形図44，図45，図版６）27Ｂグリッド

ＳＢＢ06を切って造られた、かなり小さな住居跡である。幅2.25m・奥行き1.52m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。谷側の床部は比較的よく残っている。床面の中央部付近に赤く焼き締まった部分がみられる。炉石はみられないものの地床炉と考えられる。柱穴・貼り床は確認できなかった。山側の床を囲むように壁溝がめぐり、２基の小さなピットがみられる。非常に小規模であるが、炉跡があることから竪穴住居跡とした。

遺物と所属時期（図46）

規模も小さく、出土遺物も小片のみで、実測に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

ＳＢＢ07

遺構（地形図44，図47，図版６）27Ｃグリッド

ＳＢＢ06の東側に近接する。幅4.28ｍ・奥行き2.38ｍ（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。谷側の床部は比較的よく残っている。南側の肩は、不自然に開いているが、これはこの方向に小さな尾根が有るために、土砂が崩落し、崩れたものと考えられる。床面の中央部付近に赤く焼き締まった部分がみられる。炉石はないものの、位置的にみて地床炉と考えられる。ピットが住居内に３基・谷側に３基みつかったが、浅いものが多く、位置的にも決め手に欠けるため、図示するにとどめる。壁溝は北東隅のわずかに残っている。貼り床は確認できなかった。

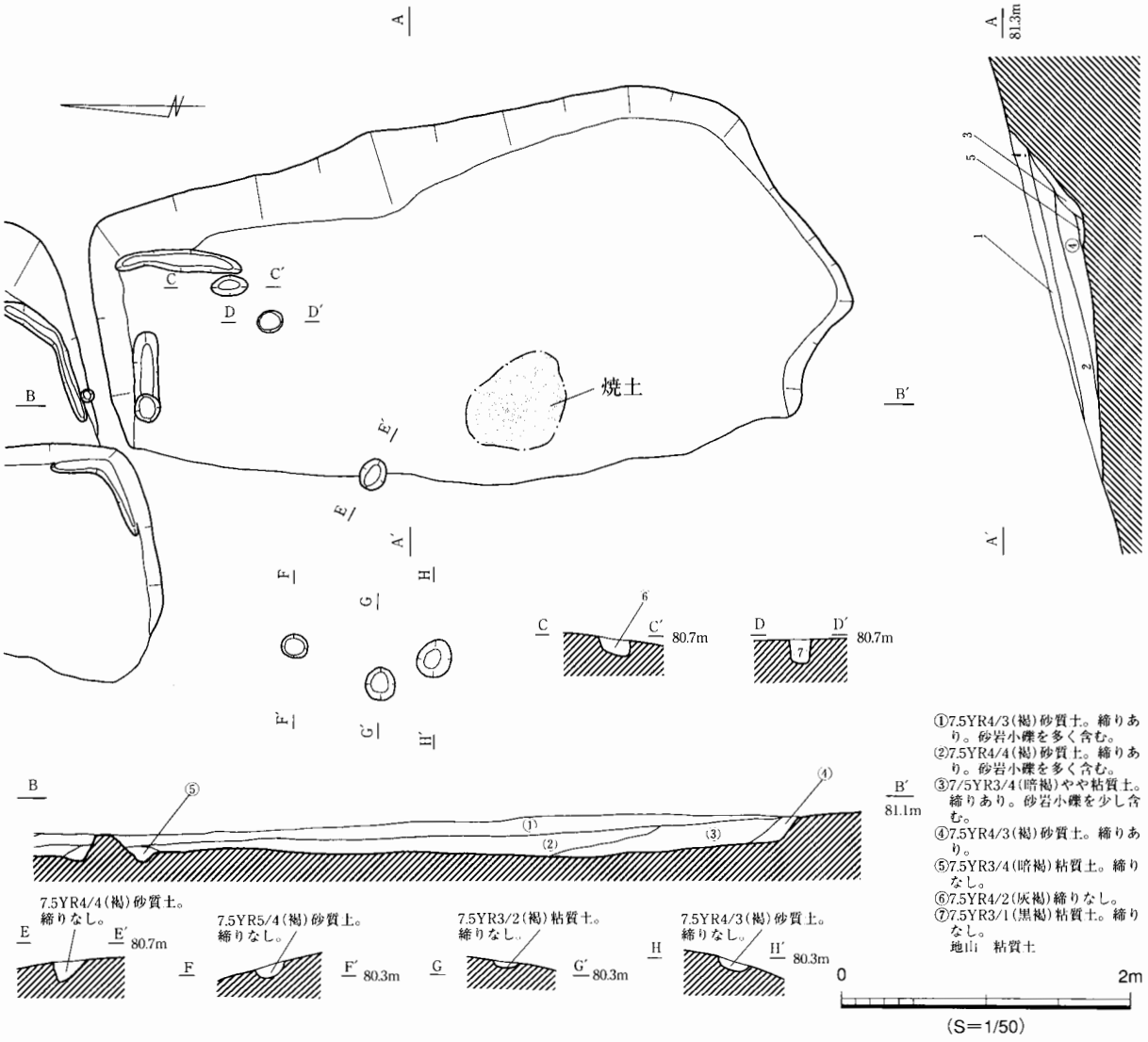


図47　SBB07実測図

遺物と所属時期（図48）

６点の土器を図示した。2052は高坏C類で、坏部も脚部と同様に内彎傾向が強いものと考えられ、器壁は非常に薄く胎土も細かい。2051は壺の頸部、2054は壺の底部である。2055は甕Ｃ２類で口縁部の直線文の下部に列点が入れられている。2053は甕蓋で、小型品ながらも外面は不定方向にミガキを施している。なお深橋前遺跡内では壺蓋を含め蓋の類はこの１点のみである。2056は甕Ｄ類で口縁部と、胴部の直線文の下部にハケ状の同じ工具の小口を用いて施した列点を有する。

なおこの竪穴住居跡は、比較的長脚の様相を残す高坏Ｃ類の存在からⅡ－３期の可能性が窺える。

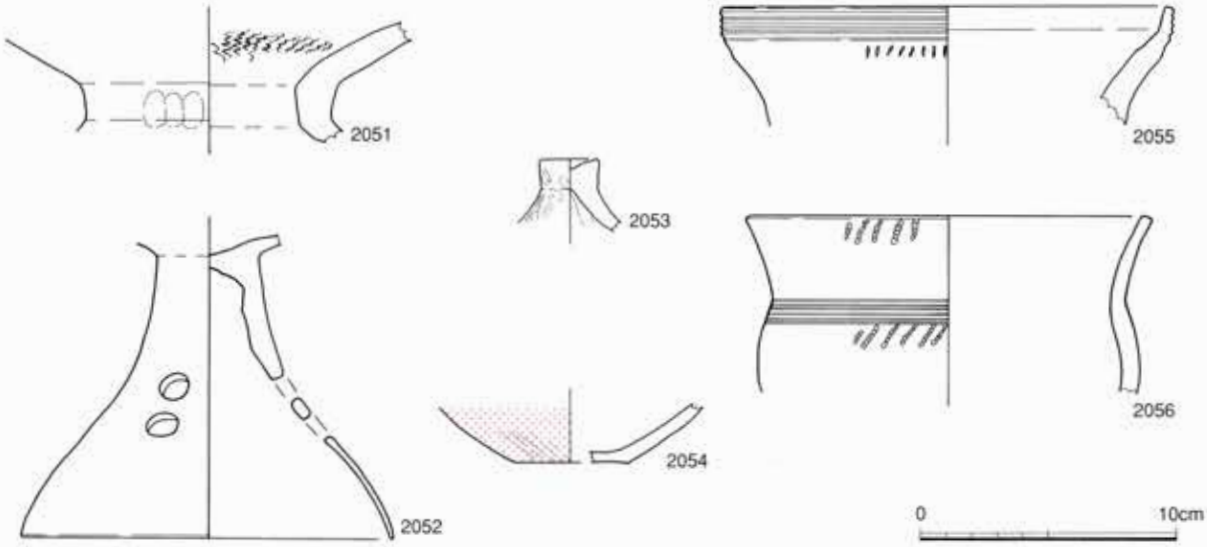


図48　SBB07出土遺物

ＳＢＢ08

遺構（地形図49，図50，図版６）30Ｂグリッド

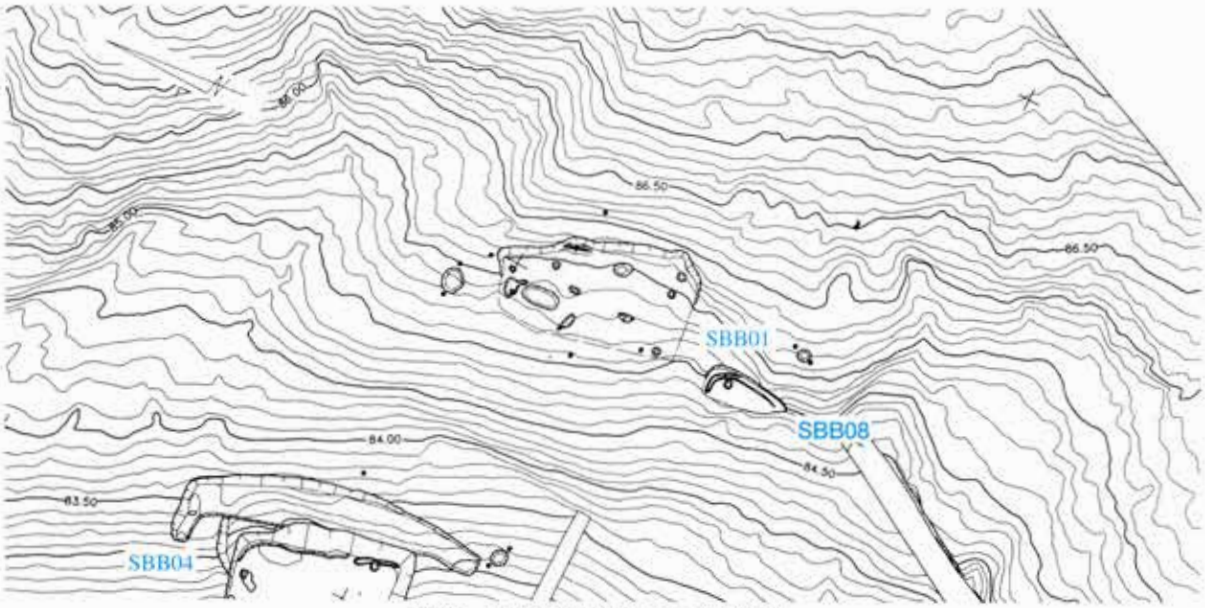


図49　SBB08周辺地形図（1/200）

ＳＢＢ01の東側の急斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅2.10m・奥行き0.93m（共に現存長）の方形と考えられ、岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。住居跡のほとんどは崩落し、床面の残存もわずかである。少し壁際に近いが、柱穴と考えられるピットが１基ある。床面の山側には壁溝が巡る。地床炉・貼り床は確認できなかった。包含層と埋土の様相が似ていたため、セクションを残して掘削することができなかった。そのため、セクションは柱穴のみしか図示してない。

遺物と所属時期

遺物は、少なく小片であったため所属時期は不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

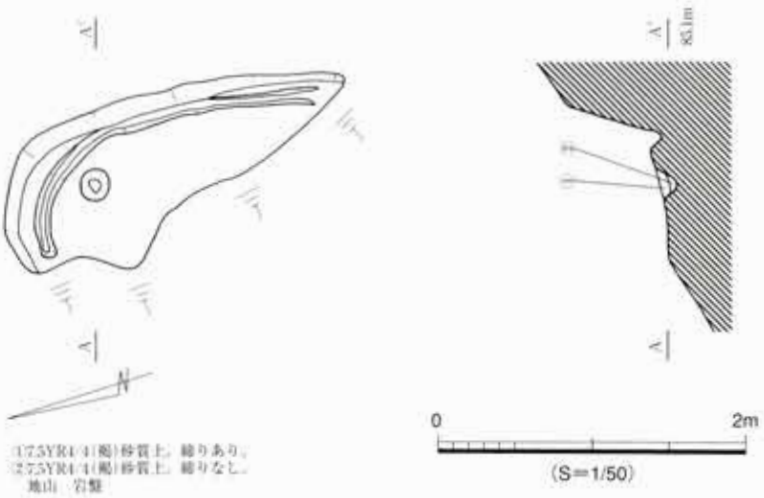


図50　SBB08実測図

ＳＢＢ11

遺構（地形図，図52，図版６）22Ａグリッド

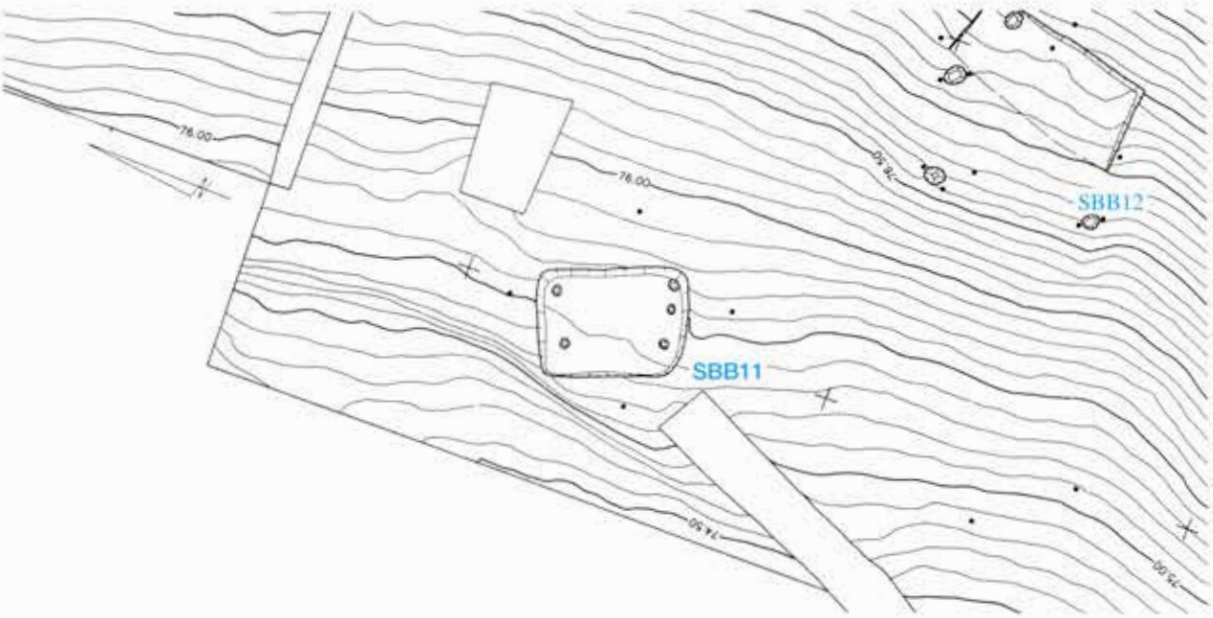


図51　SBB11周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向斜面の端部付近、緩斜面上に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅3.18m・奥行き2.63mの長方形で、基本層序第Ⅳ層（黒色土）を掘り抜いて床面を造っている。竪穴の四方立ち上がりが完璧に残っており、比較的深い。山側の床面中央部付近に川原石を用いた炉石があり、この付近に硬化面がみられる。これは地床炉と考えられるが、深橋前遺跡では検出された地床炉はこ

の竪穴住居跡のもの以外はすべて中央より谷側に造られている。柱穴らしきピットが５基あり、このうちの４基は主柱穴となったと考えられるが、南側のものは断定できない。貼り床・壁溝は確認できなかった。これは、深橋前遺跡で４隅の残った唯一の住居跡であるが、山から谷の長さの方が短い長方形に造られている。成瀬正勝氏は、急斜面に長方形、緩斜面に正方形の住居が多いことから「砂行遺跡における住居形態と集落形態」（成瀬2000）で「立地が急斜面であればそれだけ住居の奥行きが取りづらくなり、床面積確保のために平面形は等高線の方向に長い長方形を取らざるを得ない・・・必ずしも長方形を志向したのでなく、立地による制約がなければより床面積が広い正方形にするようである。」とされている。この住居の斜面は8.3°で深橋前遺跡の中では緩斜面に造られている部類に属する。谷側が崩落している竪穴住居跡が多いので断定はできないが、ＳＢＦ02・08以外の住居跡以外はすべて長方形を呈する。そのため、深橋前遺跡においては、前述の定義について、緩斜面においても長方形の志向が無いとも言い難い。これについては、第7章第5節であらためて述べることにする。

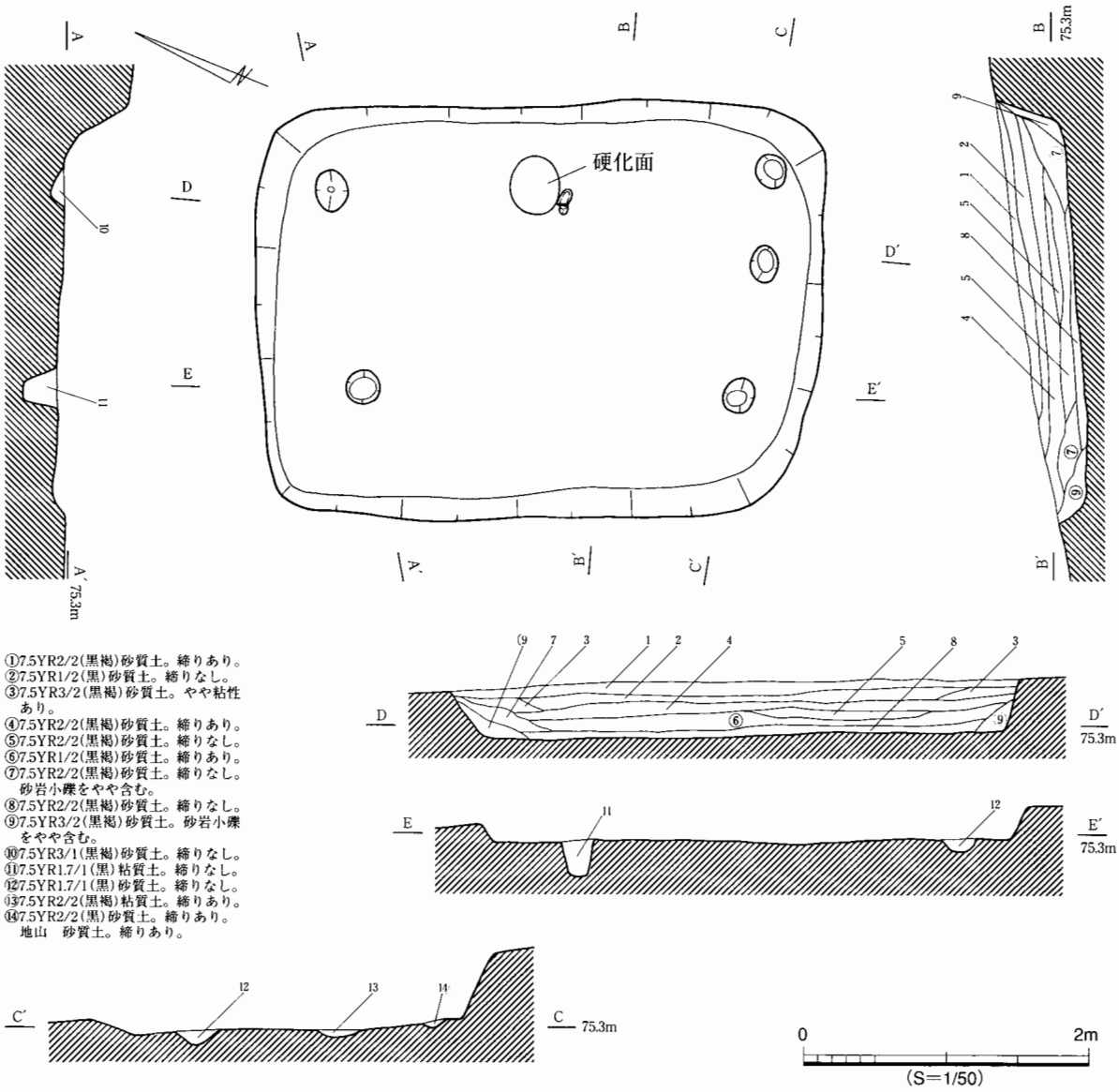


図52　SBB11実測図

遺物と所属時期（図53）

５点の土器を図示した。2057は甕Ｇ類で、外面の口縁部はナデ、胴部は板ナデ調整を行っている。1058は壺Ｃ２類の長頸部、2060は壺底部、2059は高坏脚中部、2061は台付甕底部である。

なおこの竪穴住居跡は、甕の様相が新しいことからⅡ－４期の可能性が窺える。

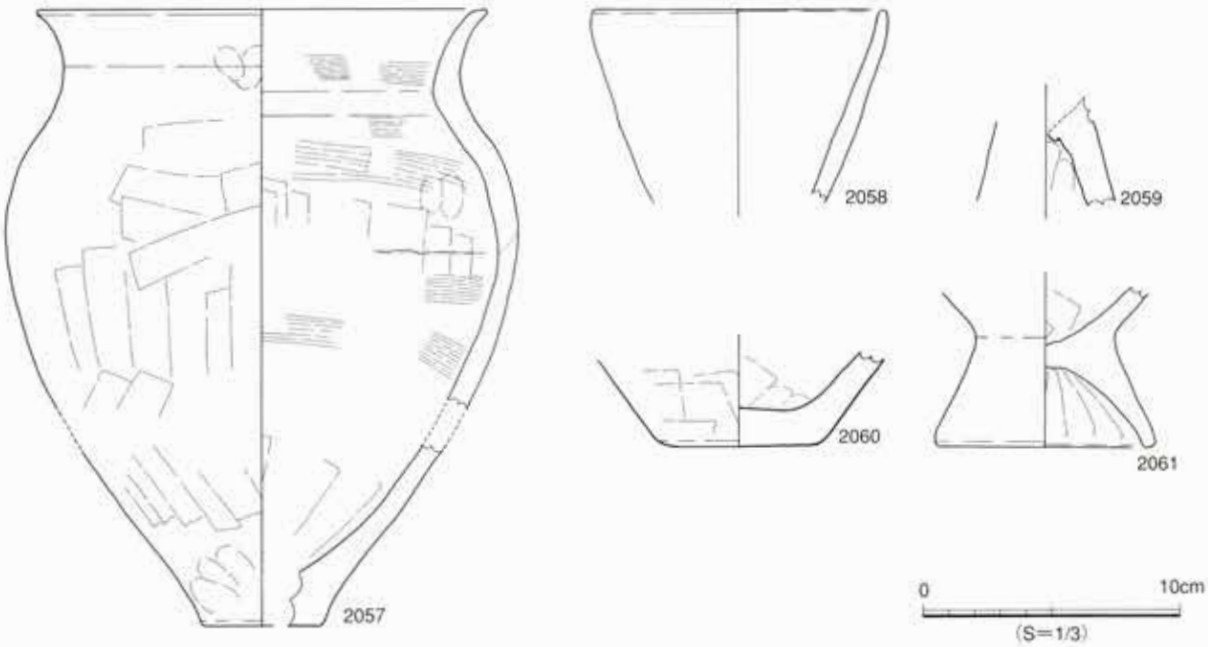


図53　SBB11出土遺物

ＳＢＢ12

遺構（地形図54，図55，図版６）24Ｃグリッド

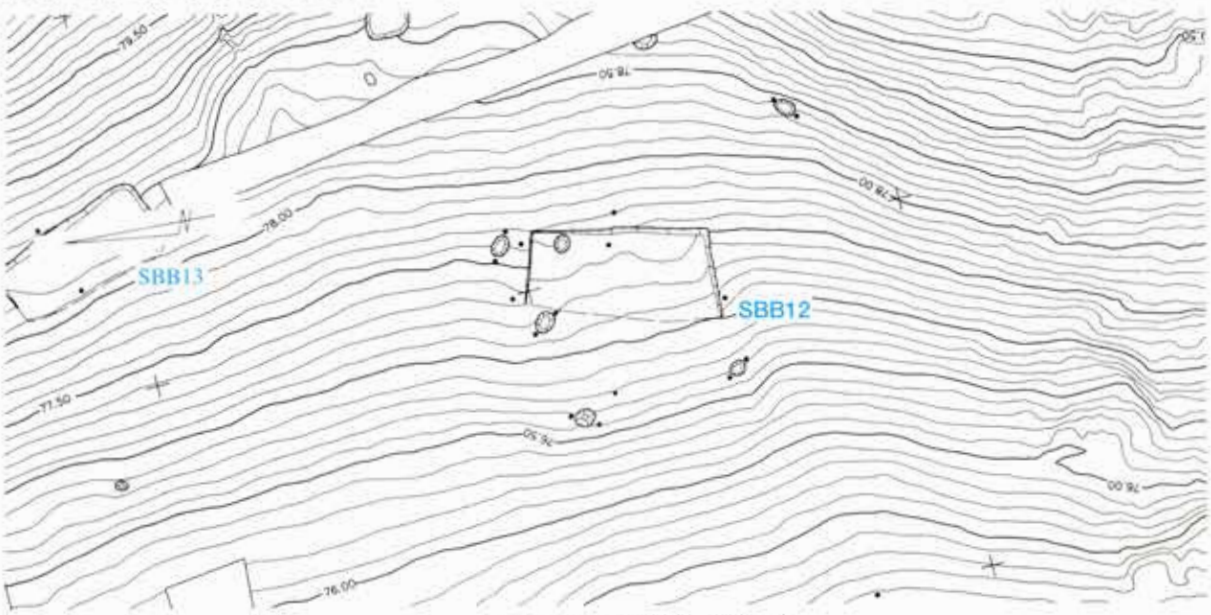


図54　SBB12周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向斜面中腹のやや急な傾斜地に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅4.75m・奥行き2.28m（現存長）の方形で、第Ⅳ層（黒色土）を掘り抜いて床面を造っている。床面の残りはかなりよいが、立ち上がり部分は流れ、プランが確認しにくかったこともあるが、埋土は非常に浅かった。地床炉・貼り床・壁溝・柱穴は確認できなかった。伊勢型甕を埋納した１号土坑墓は、この埋土の上層に造られていた。

遺物と所属時期（図56）

遺物は小片が多く、図示に耐えうる遺物は２点のみである。2062は壺Ａ１類で、口縁部には２条の横線を入れ、頸部から胴部には直線文・波状文を上から順番に入れている。この波状文もＳＢＢ04の

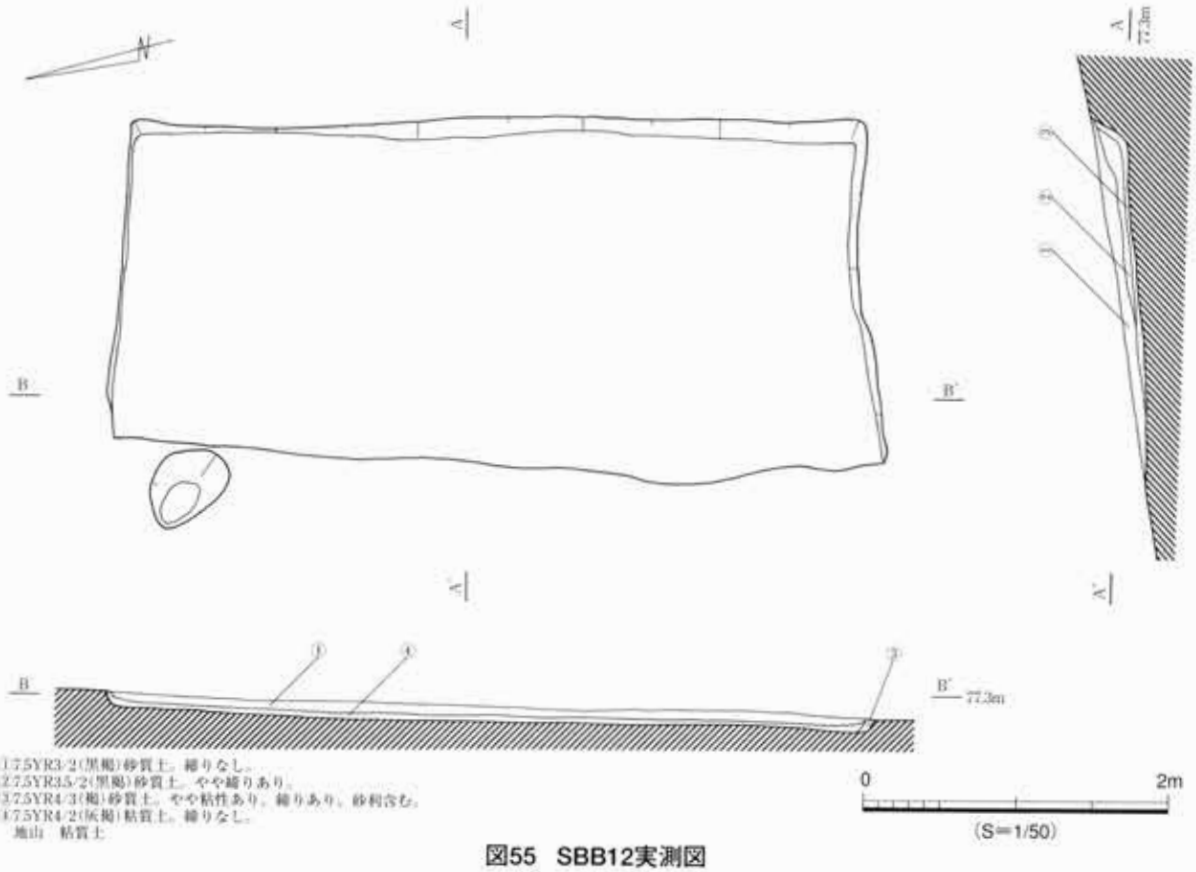


図55　SBB12実測図

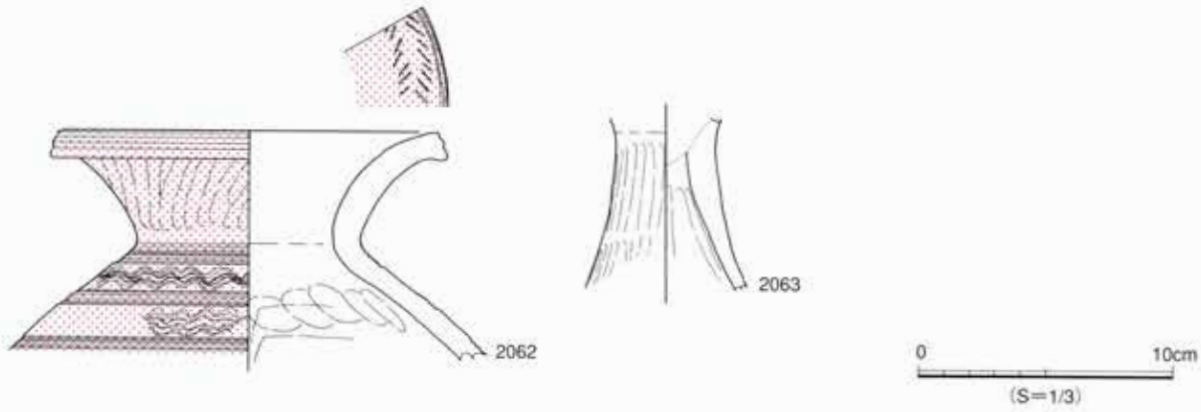


図56　SBB12出土遺物

2045と同様に、波状の返りがぎこちない。2063は高坏で脚注部である。

なおこの竪穴住居跡は、高坏の脚がやや長いことと、壺Ａ１類が古相を示していることからⅡ－２期の可能性が窺える。

ＳＢＢ13

遺構（地形図57，図58，図版６）25Ｚグリッド

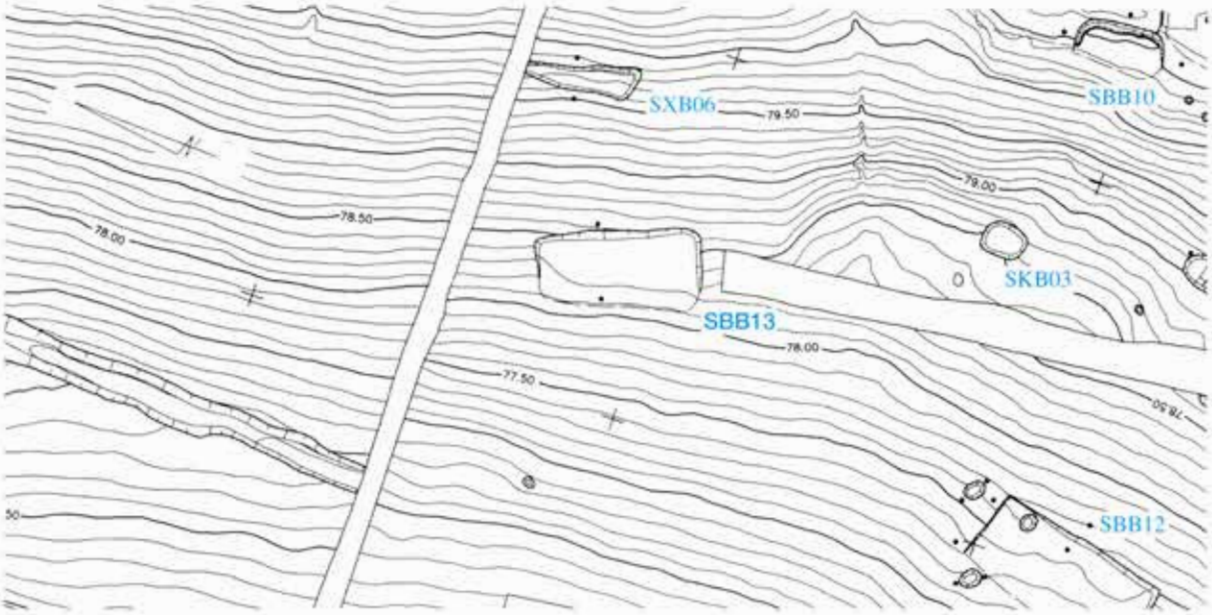


図57　SBB13周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向斜面中腹部、やや緩斜面上に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅4.00ｍ・奥行き1.70ｍの長方形で、粘質土を掘り抜いて床面を造っている。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図59）

谷側が損壊し、遺構の埋土も浅かったため、遺物の出土は少なく、図示に耐えうる遺物は２点のみ

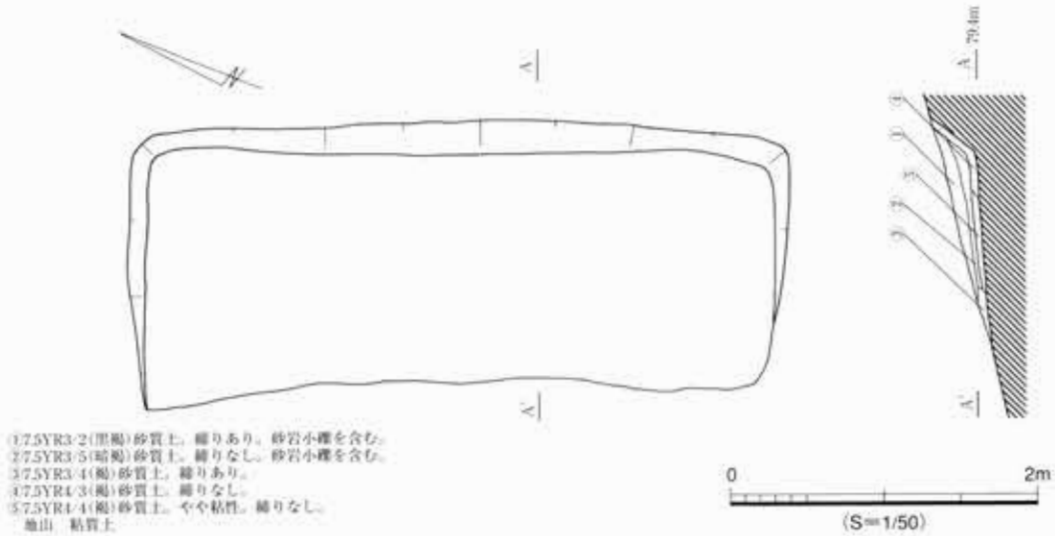


図58　SBB13実測図

である。2064は壺で、長頸壺の可能性がある。2065は甕C類の口縁部で外面の端部には列点文を入れ、内面は上から下の順に縦方向のミガキを施している。

遺物が限られているため所属時期は不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

図59　SBB13出土遺物

ＳＢＤ01

遺構（地形図60，図61，図版７）6Ｖグリッド

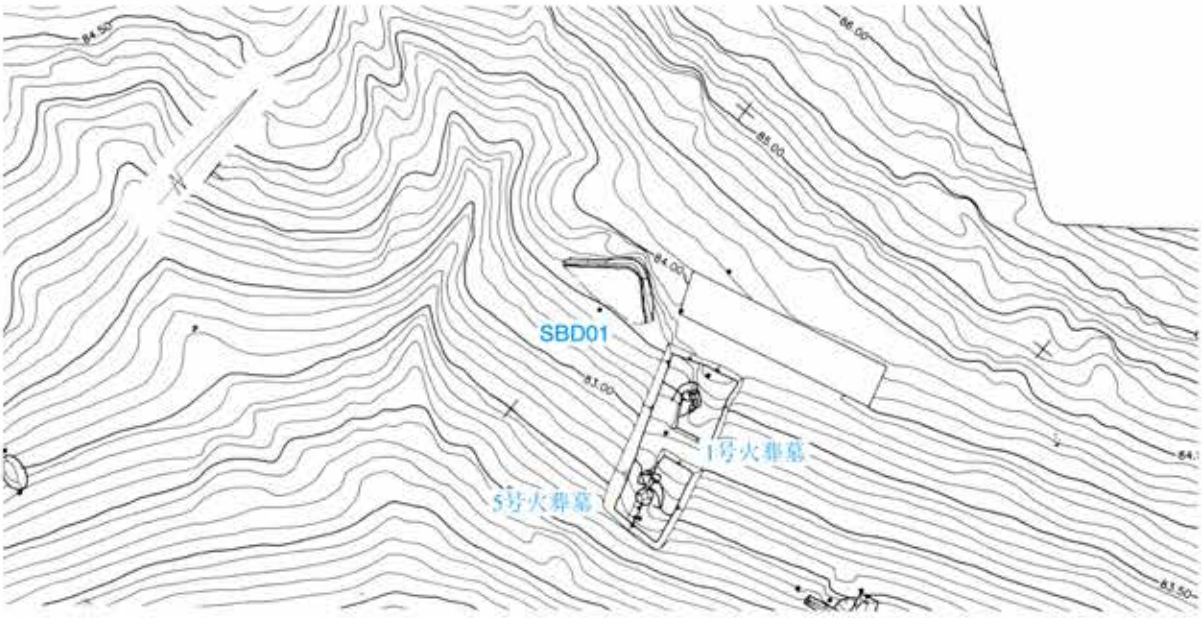


図60　SBD01周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向き斜面、尾根の頂部に近い斜面に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅2.05m・奥行き1.43m（共に現存長）の長方形と考えられ、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。床面のほとんどは、大きな谷の流土によって崩落し、北側のコーナーしか残存していない。山側には比較的しっかりとした壁溝が残っている。地床炉・柱穴・貼り床は確認できなかった。D・E区の丘陵斜にある住居跡の中で、もっとも高い位置にある。また、遺物も出土量はわずかではあるが、深橋前遺跡においてはもっとも古い様相を示している。なお、D区には、竪穴住居跡が5軒しか存在しない。このことは、D区に集中する方形周溝墓との関係があるのかもしれない。

遺物と所属時期（図62）

谷側の崩壊が激しかったため、遺物の出土は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は１点のみである。2066は高坏Ａ類で坏部上段の外反が強く、内外面共に上から下の順に縦方向のミガキを施している。

なお、この住居跡からの遺物は少なく、ほとんどが小片ばかりであったが、丘陵の最も高い位置に立地し、他からの流れ込みも考えにくいことから、高坏Ａが出土していることを根拠として、Ⅱ－１

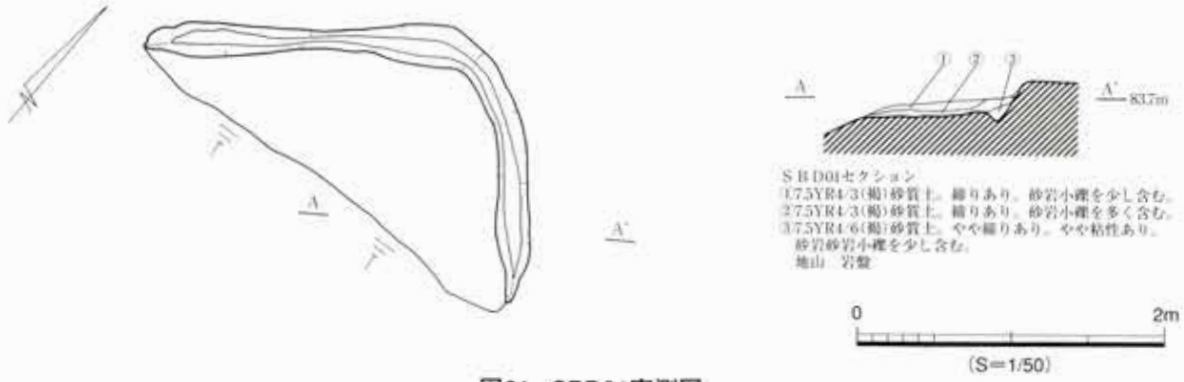


図61　SBD01実測図

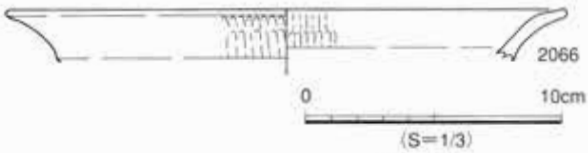


図62　SBD01出土遺物

期に所属するものと考えたい。なお、この周辺からは、弥生時代以前にさかのぼる遺物も多く出土するが、このことについては、第７章第１節で詳しく述べることにする。

ＳＢＤ03

遺構（地形図63，図64，図版７）５Ｚグリッド

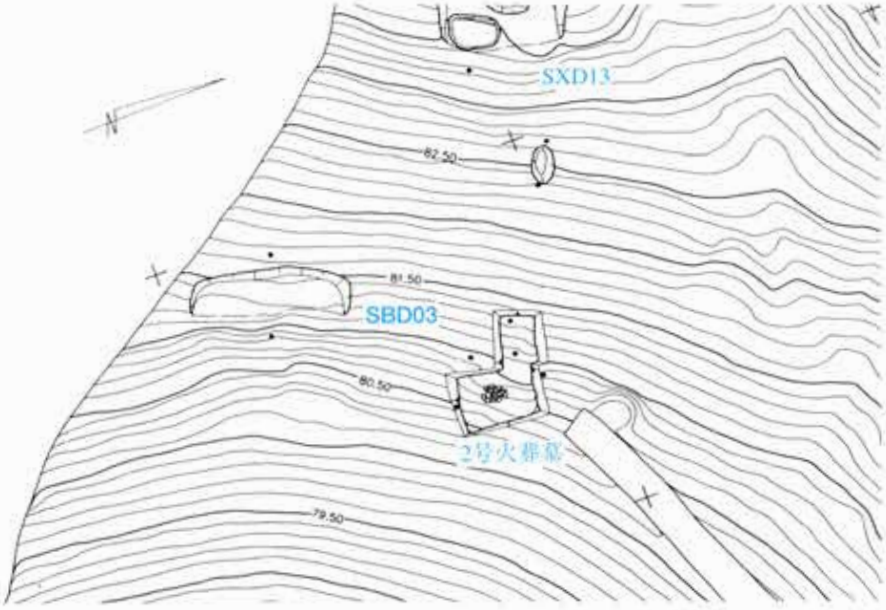
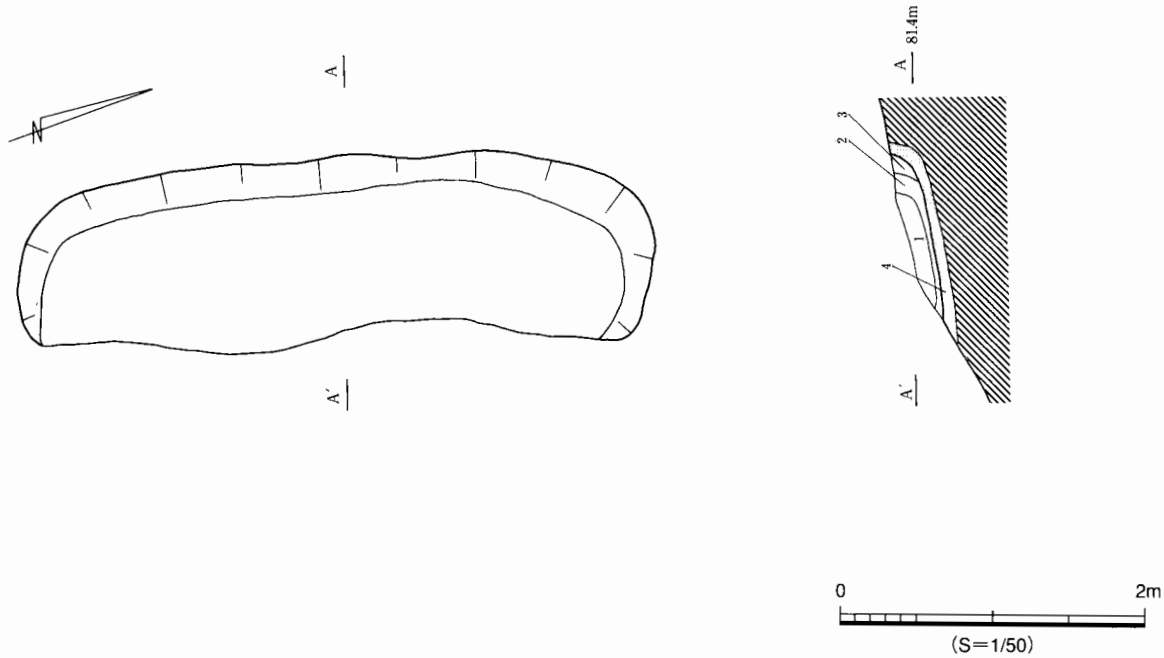


図63　SBD03周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向き斜面の中腹付近、緩斜面上に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅2.83m・奥行き1.03m（現存長）の長方形で、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。床面のほとんどは、崩落している。地床炉・柱穴・壁溝は確認できなかった。この住居跡の床面は、岩盤を掘り抜いた跡に敷いたと思われるセクション中の④層上面にあり、やや硬く締まっていた。貼り床というより掘形から床面までを充填した埋土と考えられる。この埋土の分層をするには至らなかったが、少し大きく掘った後、土砂を充填していたことが窺える。



①7.5YR2/2(黒褐)粘質土。締りなし。
②7.5YR3/2(黒褐)粘質土。締りなし。
③7.5YR4/2(灰褐)粘質土。締りなし。
④床の充填土
地山　粘質土

図64　SBD03実測図

遺物と所属時期（図65）

遺物の出土はあったものの小片が多く、図示に耐えうる遺物は１点のみである。2067は高坏Ａ類で、坏部上段が強く外反しているが、ＳＢＤ01出土の高坏よりは外反が弱い。

なおこの住居跡は、高坏Ａ類の存在からＳＢＤ01と同様、Ⅱ－１期の可能性が窺える。

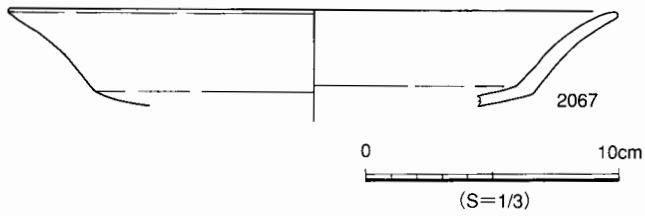


図65　SBD03出土遺物

ＳＢＤ05

遺構（地形図66，図67，図版７）14Ｖグリッド

西丘陵の東向き斜面の裾部に近い、急斜面上に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅2.83m・奥行き1.55m（現存長）の長方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。谷側の床面は崩落している。地床炉・柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物と所属時期

急傾斜地で谷側の埋土が薄かったため、遺物の出土は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

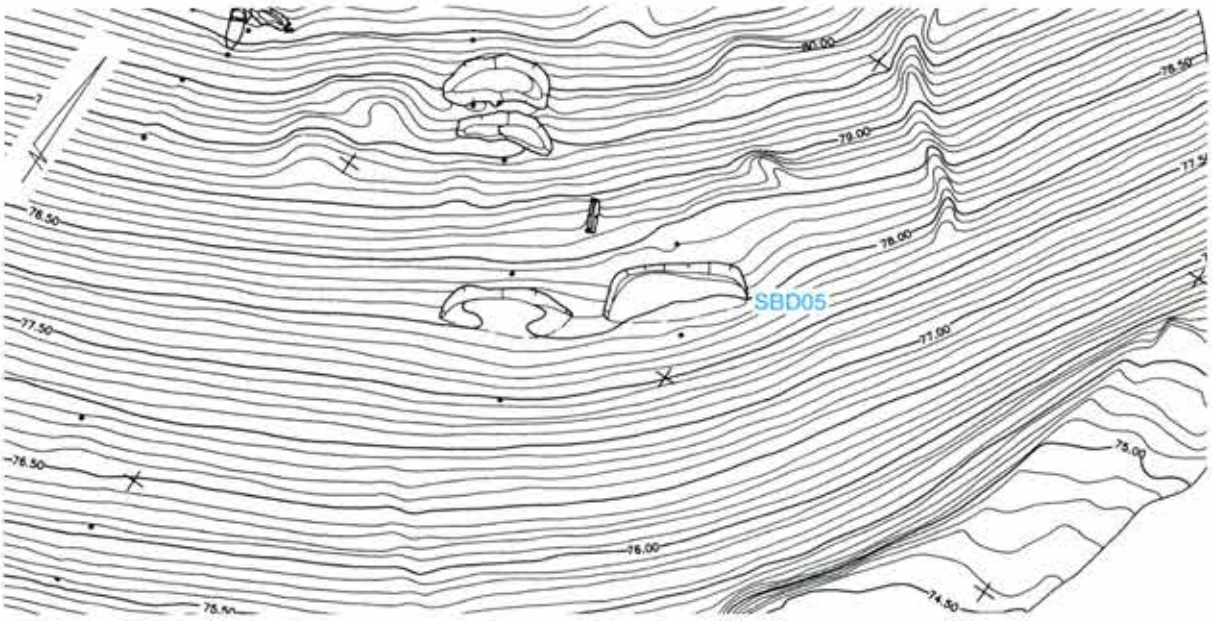


図66　SBD05周辺地形図（1/200）

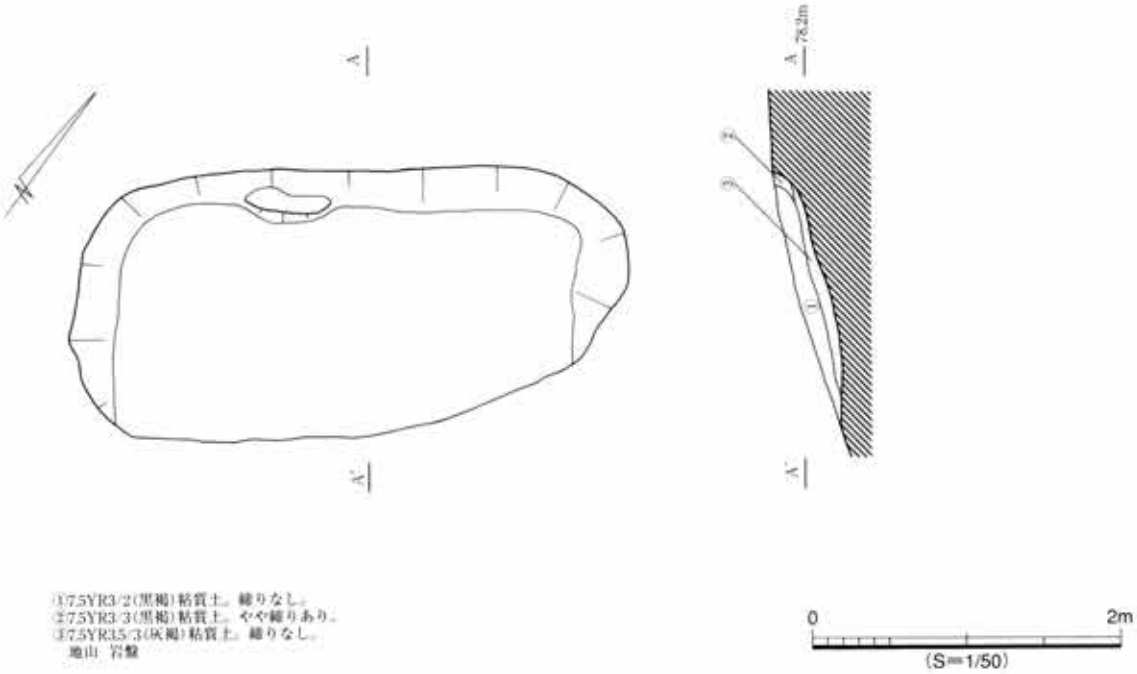


図67　SBD05実測図

ＳＢＤ08

遺構（地形図68，図69，図版７）8Wグリッド

西丘陵の東向斜面、中腹部付近の急傾斜地に立地する。山側周溝の中央部が、わずかに２号土坑墓に切られているが、同時期の遺構はこの付近に存在しない。幅2.30m・奥行き2.15m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。コーナーの掘削がしづらく、長方形か、正方形に近いかはよくわからないが、谷側の床部は比較的よく残っている。いびつながら山側周溝が残っている。また、床面の中央部付近の少し南側には川原石を用いた炉石がみられ、その周辺は赤く締まっ

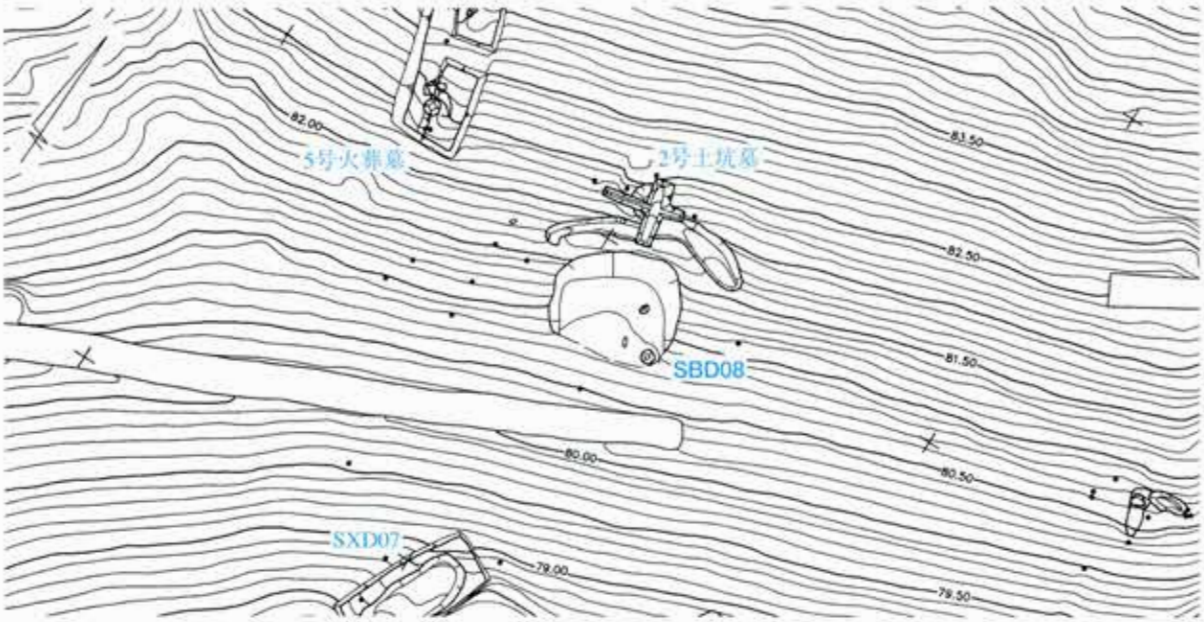


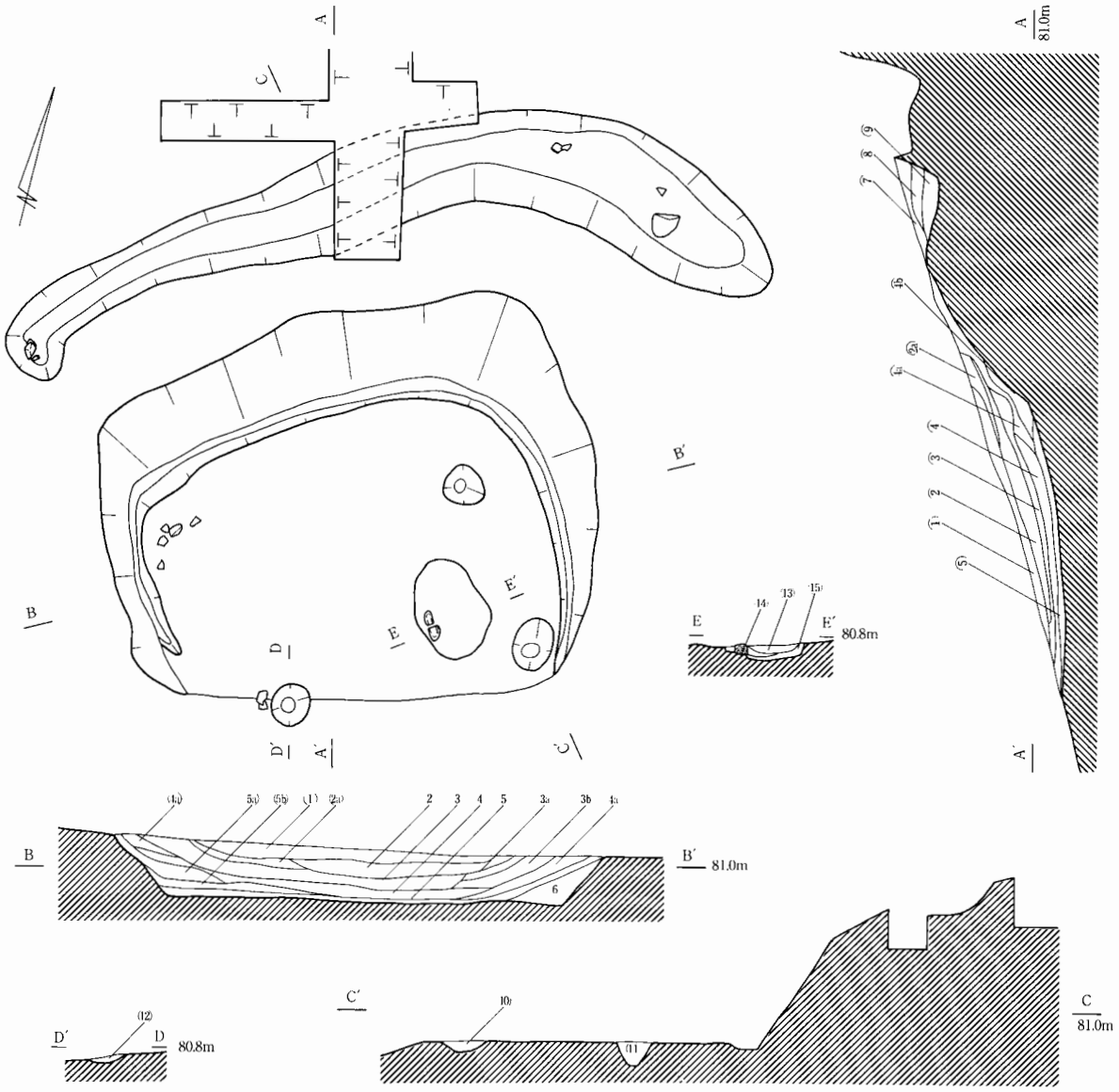
図68　SBD08周辺地形図（1/200）

ている。これは地床炉と考えられるが、このような炉は、ほとんど掘り込みはなく、炉石を置いただけの簡単なものである。また、炉石は熱を受け2つに折れていた。この使用方法については、岩瀬彰利氏が、「縄文・弥生時代の煮炊き方法－大西貝塚・橋良遺跡例より推測した一例－」（岩瀬1996）で「①少し窪められた炉内に土器を置く。②炉端の支柱石上に薪を置き煮炊きする。」として、炉石を薪の箸置きのように使用する推測例を推測図付きで示されている。また、この炉石が広い空間側に置かれていることに注目して、作業しやすい一方から薪の供給を行っていたとされている。焼土の中央部に炉石が置かれることは少ないので、おそらく岩瀬氏の推測通りと考えるが、この状態ではあまりにも熱効率が悪く、焼土の広がりにも不自然なものを感じる。盛り土の検出ができていないので、はっきりしたことは言えないが、炉石の反対側を囲むように低い土手が造られていたら、かなり熱効率は上がる様に感ずる。今後の課題としたい。柱穴と考えられるピットが3基確認でき、山側には壁溝が巡る。貼り床は確認できなかった。この住居跡のセクションは、様相の違う土砂が細かく複雑に何層にも堆積していた。これは、この住居跡が急傾斜地に造られているために、土砂の堆積の方向が複雑になったことが原因したものと考えられる。

遺物と所属時期（図70）

10点の土器を図示した。2068・2070は器台Ｂ１類で、脚部は撥形に開き、外面は縦方向にミガキを施している。2069は高坏で、柱状を呈する脚部と坏部下部の様相から、高坏Ｂ類と考えられる。この脚中部には、粘土を貼り付けて肥厚させようとした痕跡がみられる。また、充填接合を行っている。2071は壺で非常に薄く丁寧にミガキ調整を行っている。2072は器台の受け部である。2073は鉢Ａ類で口縁に波状文を持つ。2074は甕Ｂ類の口縁、2075は壺の胴部、2076は壺の底部、2077は台付甕である。

なお、この住居跡は高坏Ｂ類・器台Ｂ１類の存在から、Ⅱ－３期の可能性が高い。



(1)7.5YR4/3(にぶい黄褐)砂質土。締りなし。
(2)7.5YR3/2(黒褐)砂質土。締りなし。
(3)7.5YR3/5(黒褐)砂質土。締りなし。
(4)7.5YR2/1(黒)砂質土。締りなし。
(5)7.5YR3/3(褐褐)やや粘性あり。締りなし。
(6)7.5YR4/6(褐)砂質土。やや締りあり。
(5a) a 7.5YR3/2(黒褐)砂質土。やや粘性あり。
(4a) b 7.5YR3/2(黒褐)砂質土。締りなし。
(4a)7.5YR3/2(黒褐)砂質土。締りなし。
(4b) b 7.5YR4/3(にぶい黄褐)砂質土。締りなし。
(5a) a 7.5YR4/4(褐)砂質土。やや粘性あり。
(5b) b 7.5YR4/3(にぶい黄褐)砂質土。締りあり。
(7)7.5YR4/2(灰褐)粘質土。締りあり。
(8)7.5YR4/2(灰褐)粘質土。やや締りあり。
(9)7.5YR4/2(灰褐)粘質土。締りなし。
(10)7.5YR3/2(黒褐)砂質土。締りなし。
(11)7.5YR4/2(灰褐)粘質土。やや締りあり。
(12)7.5YR4/2(灰褐)粘質土。やや締りあり。
(13)7.5YR3/3(黒褐)粘質土。締りなし。
(14)7.5YR4/4(褐)砂質土。締まりなし。
(15)7.5YR5/4(褐)砂質土。締まりあり。
地山　粘質土

0　2m
(S=1/50)

図69　SBD08実測図

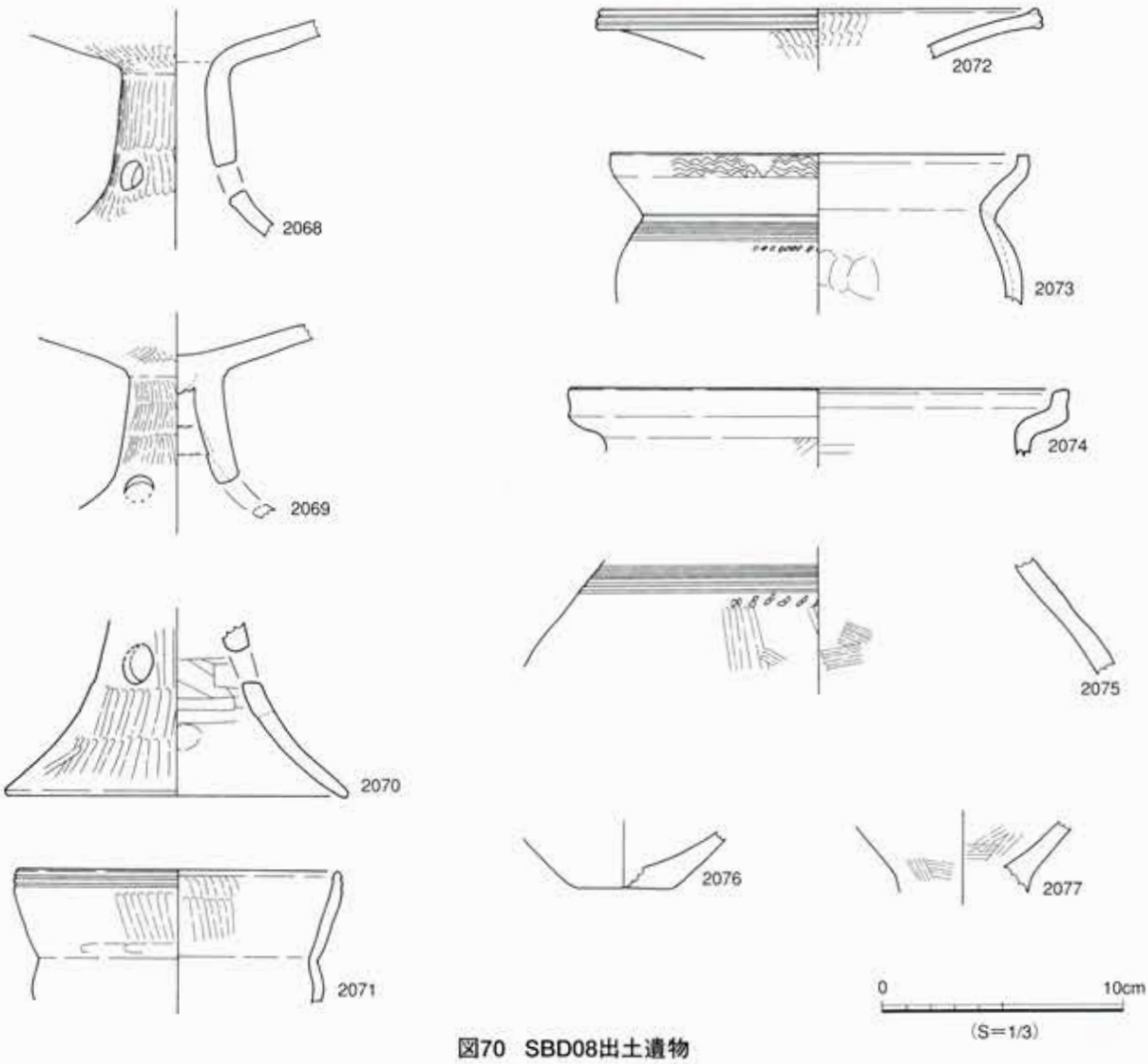


図70　SBD08出土遺物

ＳＢＤ10

遺構（地形図71，図72，図版７）11Ｚグリッド

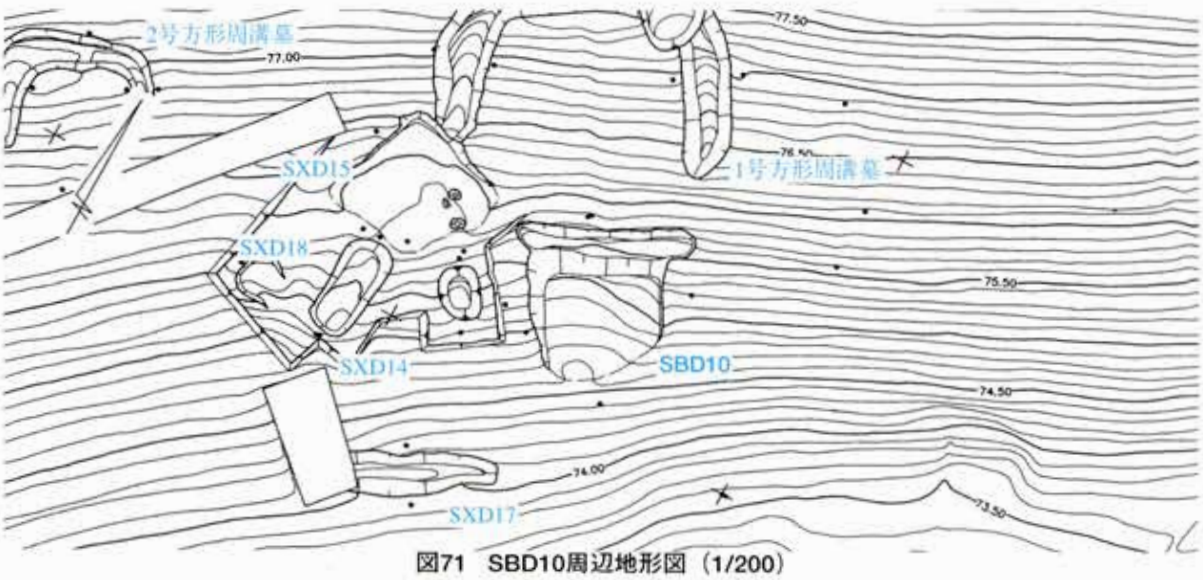
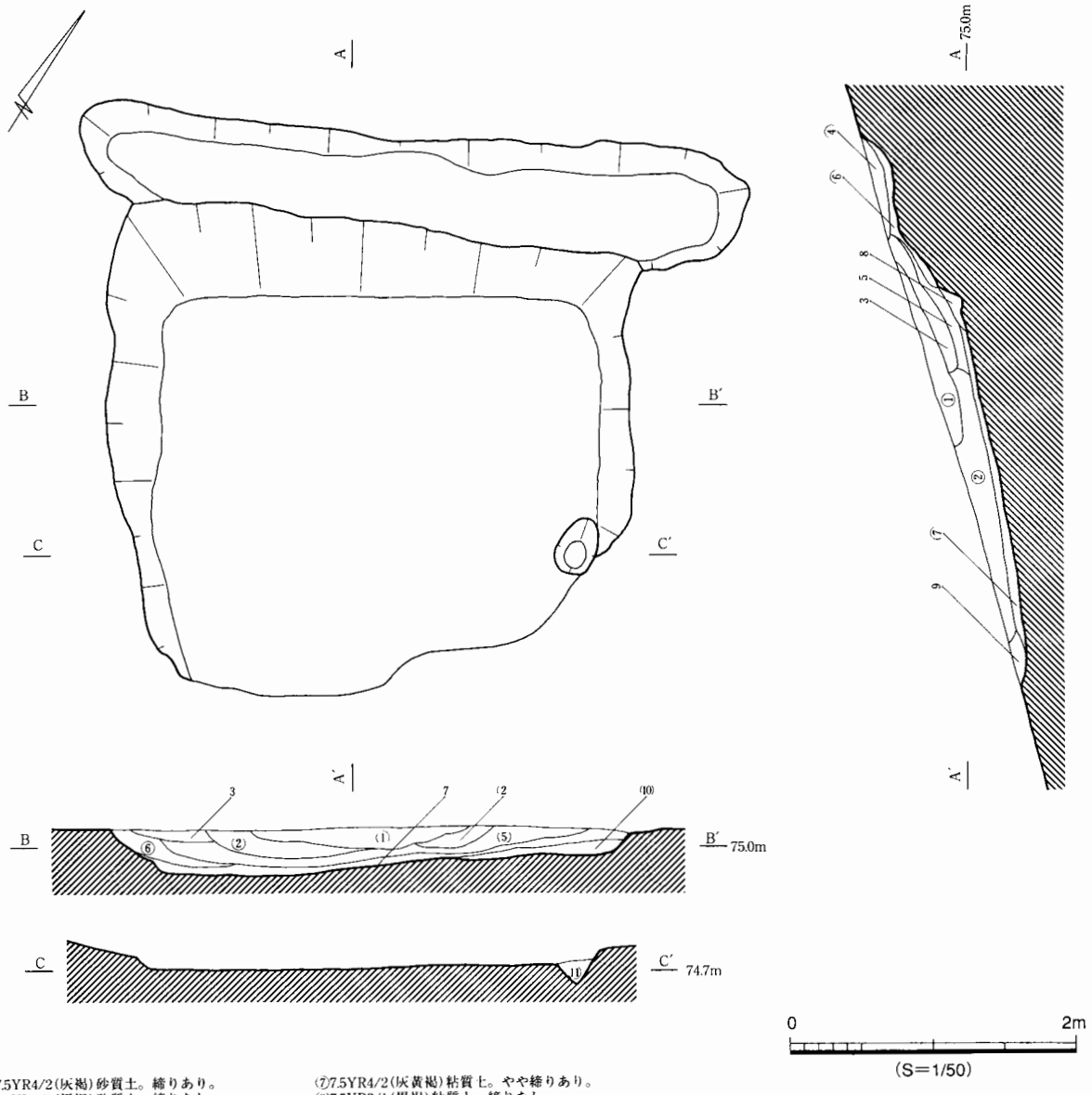


図71　SBD10周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向斜面、中腹部付近の傾斜地に立地する。北西の山側には１号方形周溝墓がある。幅2.85m・奥行き2.83m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。住居跡の北西側には山側周溝が、住居跡の立ち上がりの肩と接するように造られており、排水を目的とする周溝としては、非常に不都合である。しかし、Ａ－Ａ’のセクションによれば、周溝の堆積と、住居跡内部の埋土が交互に堆積していることから、住居跡と周溝がほぼ同時に埋まり、その際に、住居跡山側の肩が崩落して住居跡と周溝が接してしまったのかもしれない。また、ＳＢＢ05で述べたように、周溝の目的がやや違っていたと考えることもできるのかもしれない。この竪穴住居跡は、奥行きより幅がかなり長いことから、正方形に近いプランを持っていた可能性が窺える。ピットが１基確認できたが位置的にも問題があり、柱穴ではない可能性も高い。地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。



①7.5YR4/2(灰褐)砂質土。締りあり。
②7.5YR3/1(黒褐)砂質土。締りなし。
③7.5YR3/2(黒褐)砂質土。締りなし。
④7.5YR3/2(黒褐)砂質土。締りあり。
⑤7.5YR4/1(褐灰)砂質土。締りなし。
⑥7.5YR4/3(にぶい黄褐)砂質土。やや締りあり。
⑦7.5YR4/2(灰黄褐)粘質土。やや締りあり。
⑧7.5YR3/1(黒褐)粘質土。締りなし。
⑨7.5YR3/1(黒褐)粘質土。締りなし。
⑩7.5YR4/2(灰黄褐)砂質土。
⑪7.5YR2/2(黒褐)砂質土。やや締りあり。
地山　粘質土

図72　SBD10実測図

遺物と所属時期（図73）

６点の土器を図示した。2078は高坏Ｃ類で口縁部には横線を入れ、内外面は斜め方向のミガキを施している。2079は高坏脚中部であるが、裾部は撥形に開いていたのか、2083の様に内彎傾向を持っていたのかは不明である。2081は器台Ｂ類で、外面にはミガキを施し、内面にはハケ目を残すものである。2080は高坏もしくは器台で下から上方向のミガキを施し、やや厚めである。2083も高坏もしくは器台である。2082は壺Ａ３類で短く垂直に立ち上がる口縁を持ち、その中央部が最も張るようにつくられており、端部には横線を入れている。また、外面は全体に赤彩が施されている。

なお、この竪穴住居跡は高坏Ｃの存在と、器台Ｂ１類の存在から、Ⅱ－３期に属するものと考えられる。

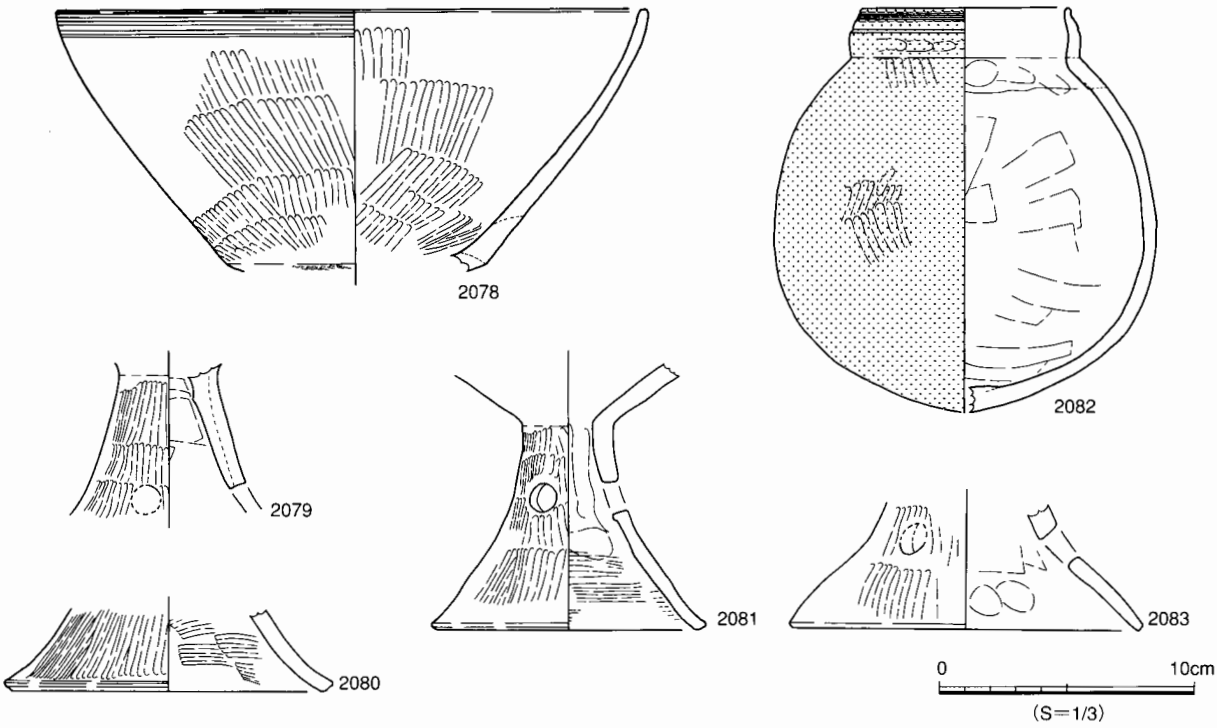


図73　SBD10出土遺物

ＳＢＥ01

遺構（地形図74，図75，図版７）５Ｇグリッド

西丘陵の東向斜面、中腹部より少し上った急傾斜地に立地する。北側のコーナーが攪乱によって壊されており、幅3.35ｍ・奥行き1.05ｍ（現存長）の長方形と考えられている。岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図76）

出土遺物は小片が多かったが、このうち、４点の土器を図示した。2084は高坏で脚注部のみしか残っていないが、Ａ類かＢ類であると考えられる。2085は鉢Ａで、受け口状の口縁部に２条の列点を入れている。2087は鉢の胴部で、横線と列点を入れている。2086は器台の受け部で、内面はハケ目、外面は下から上の順に、ナナメ方向のミガキを施している。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多く、時代を限定できる遺物に乏しいが、内彎傾向を持つやや深い坏部の高坏から、Ⅱ－3期のに属する可能性が考えられる。

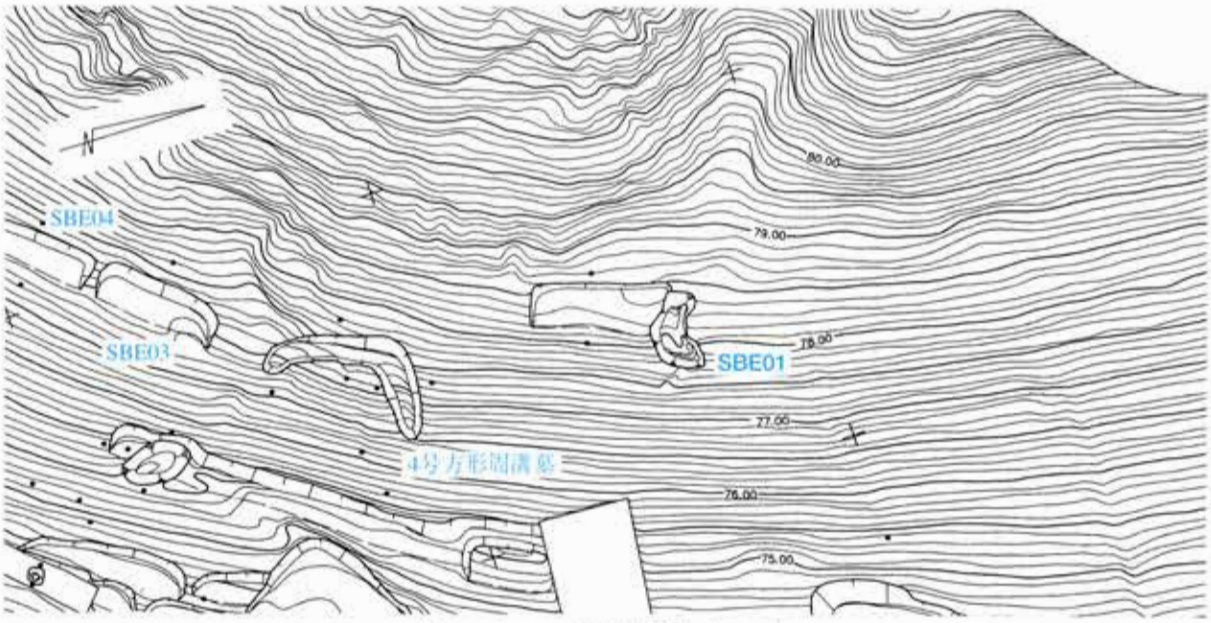
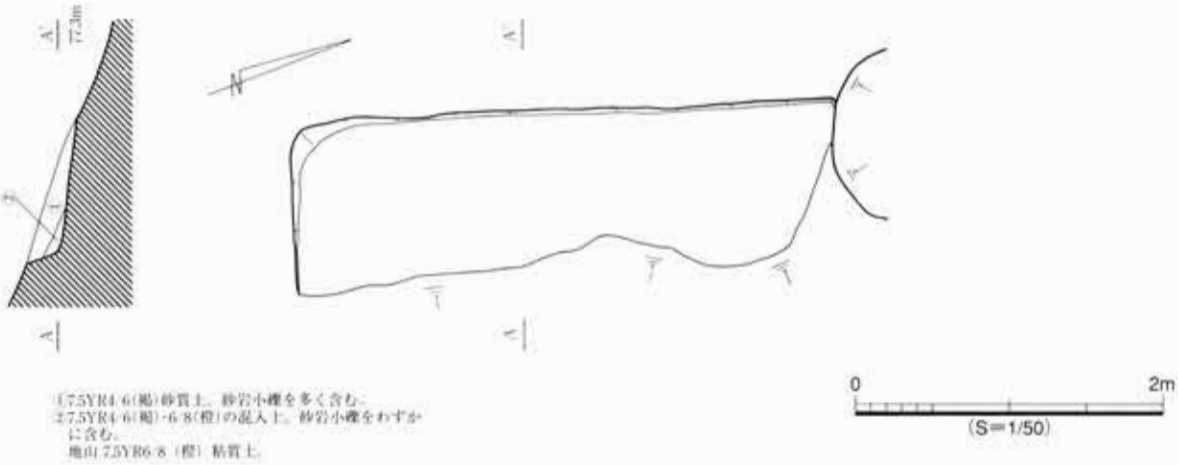


図74　SBE01周辺地形図（1/200）



①7.5YR4/6(褐)砂質土。砂岩小礫を多く含む。
②7.5YR4/6(褐)・6/8(橙)の混入土。砂岩小礫をわずかに含む。
地山 7.5YR6/8（橙）粘質土。

図75　SBE01実測図

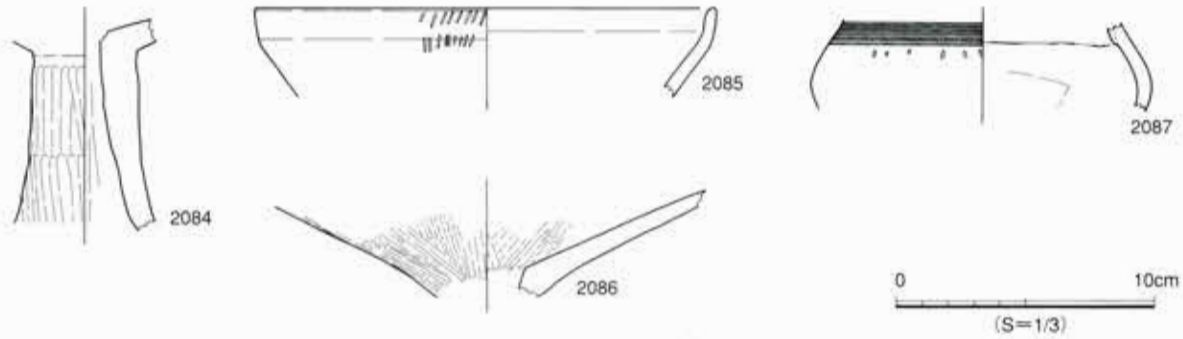


図76　SBE01出土遺物

ＳＢＥ03

遺構（地形図77，図78，図版７）４Ｊグリッド

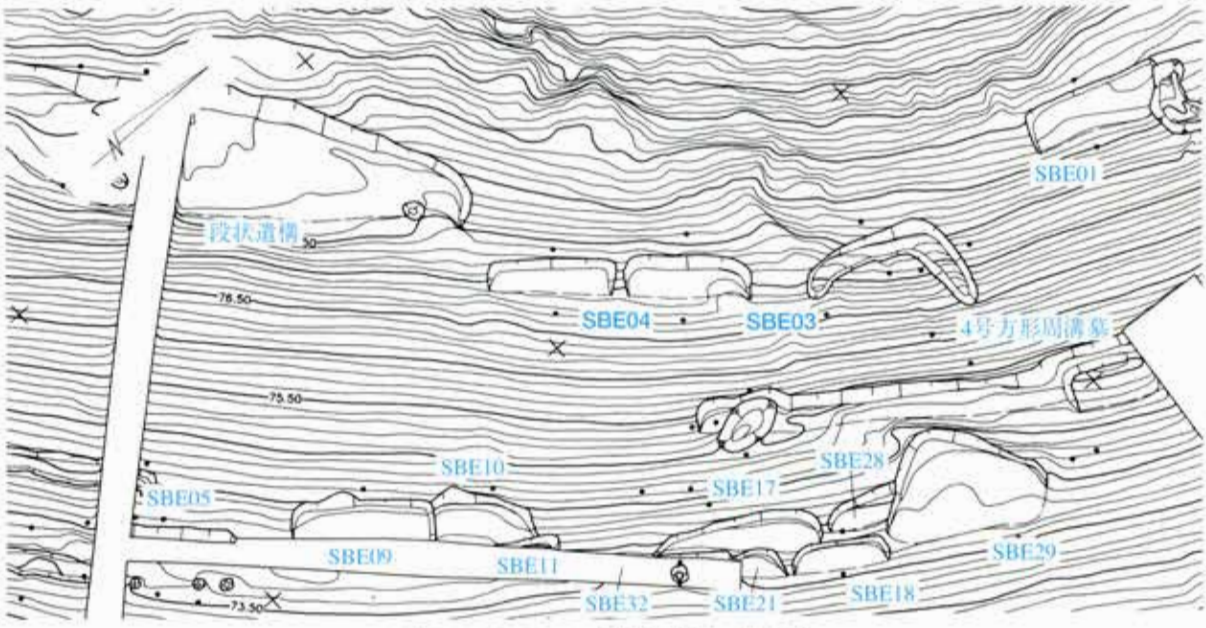


図77　SBE03・04周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向斜面、中腹部より少し上った急傾斜地に立地する。幅2.78m・奥行き1.00m（現存長）の長方形と考えられ、岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。住居跡の中央部付近の床直上部付近には、長頸壺と考えられる壺の胴体部がそのまま正位で残されていた。掘形は確認できなかったので、埋納である可能性は薄いけれども、比較的廃絶の時期に近い遺物と考えられる。なおこの竪穴住居跡は、ＳＢＥ04と４号方形周溝墓に挟まれたかたちで立地する。３遺構とも所属時期はわからないが、位置的に考えて、３遺構が同時期に存在していたことは考えられない。

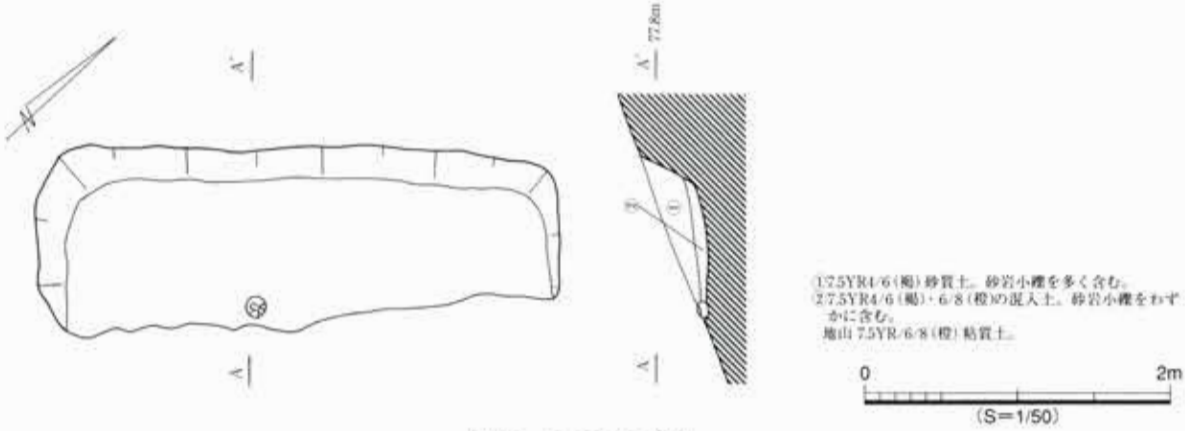
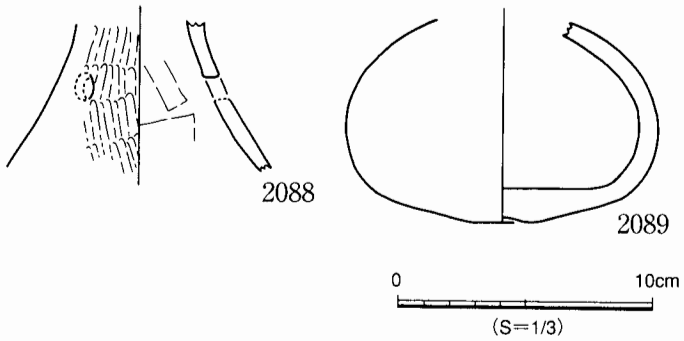


図78　SBE03実測図

遺物と所属時期（図79）

出土遺物は比較的多かったが、小片が多く、このうち、実測し得たのは２点のみである。2088は高坏で上から順にタテ方向のミガキを施し、脚柱部は撥形に開くものと考えられる。2089は壺で、長頸



壺と考えられる。床の直上部に正位で残されていたものである。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多く、時代を限定するには至らなかったが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

図79　SBE03出土遺物

ＳＢＥ04

遺構（地形図77，図80，図版７）４Ｊグリッド

西丘陵の東向斜面、中腹部より少し上った急傾斜地に立地する。幅3.02m・奥行き0.90m（現存長）の方形と考えられ、岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。ＳＢＥ03に近接する。

遺物と所属時期

急傾斜地で谷側の崩壊が激しかったため、遺物の出土は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

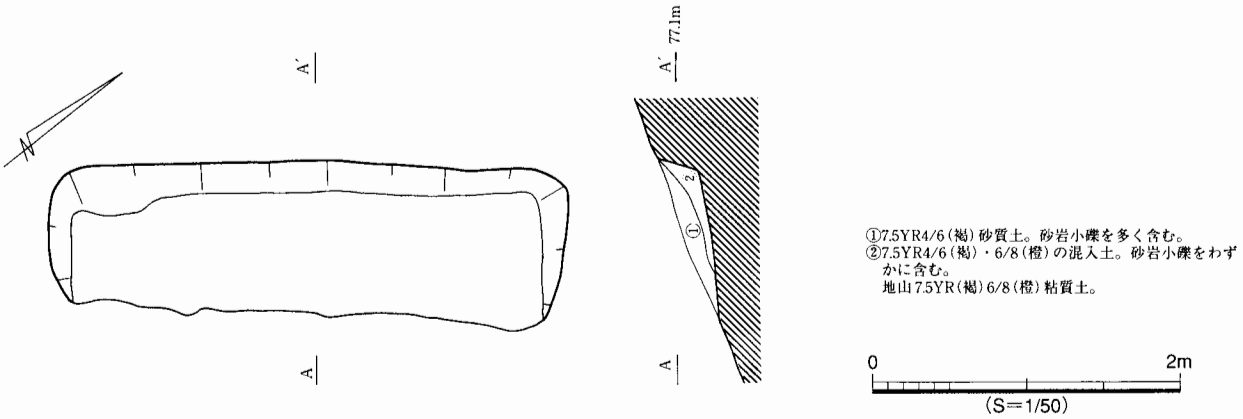


図80　SBE04実測図

ＳＢＥ05

遺構（地形図81，図82，図版８）4Mグリッド

西丘陵の東向斜面、中腹部より少し上った急傾斜地に立地する。床面の南東側と北西側は試掘トレンチによって切られている。幅2.63m・奥行き0.80m（共に現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図83）

北東側の一部しか残っていなかったために、出土遺物は小片が多かったが、このうち、５点の土器を図示した。2090は高坏Ｂ類で坏部のみしか残っていないが、坏部が多少外反するものの、ほぼ直線的に開いており、端部には３条の横線を入れる。2091は台付甕、2092は坏で外面には下から上方向へのハケ目を残す。2093は下膨れの長頸壺と考えられる。2094は鉢で、頸部に９条の横線、列点を順に

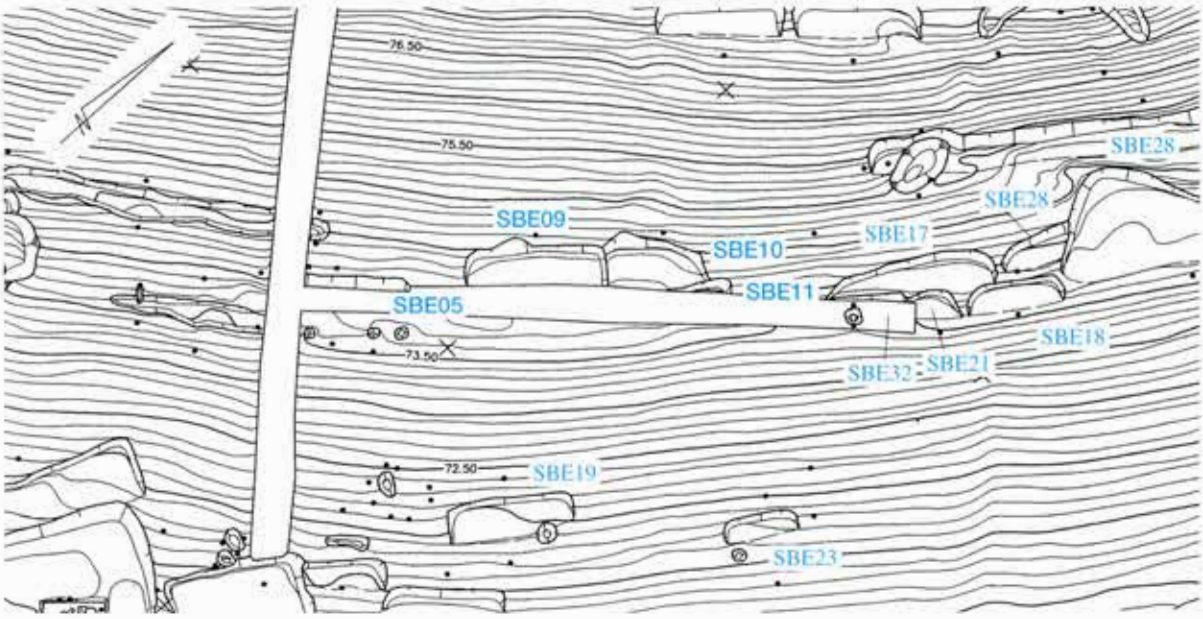


図81　SBE05・09・10・11周辺地形図（1/200）

①7.5YR5/3(にぶい褐)砂質土。砂岩小礫を多く含む。
②7.5YR3/3(暗褐)の混入土。砂岩小礫をわずかに含む。
地山　粘質土。

図82　SBE05実測図

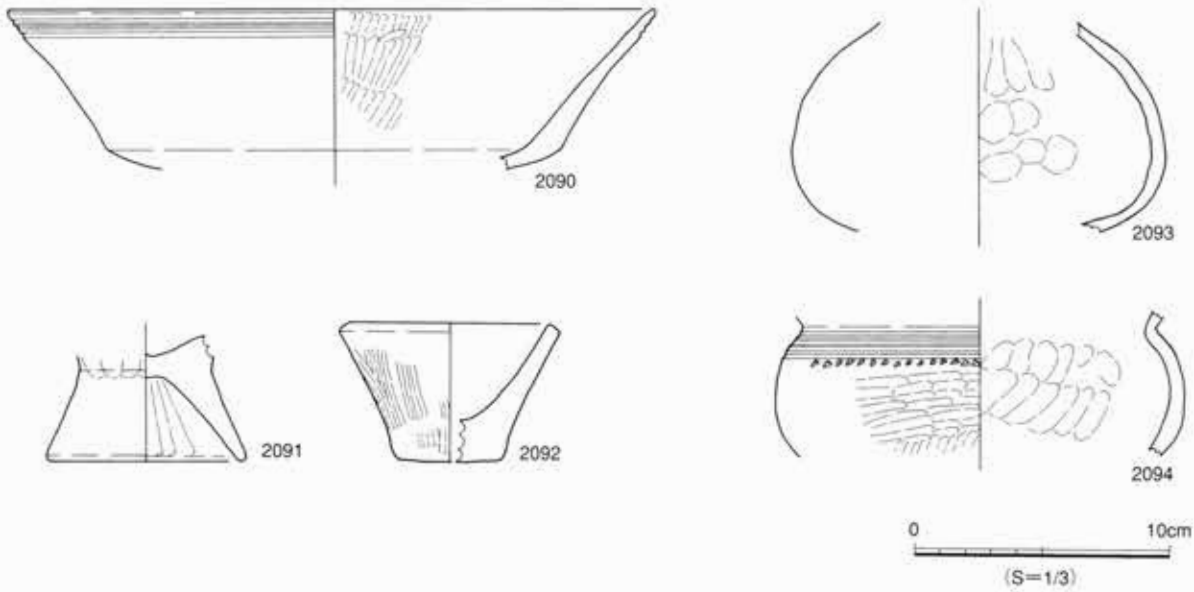


図83　SBE05出土遺物

入れ、胴部は中央部付近が丸く張り、下から上の順に横方向のミガキを施している。また、内面は指押圧痕を残す。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多いが、高坏B類、胴部に張りのある鉢の存在から、Ⅱ－2期に属する可能性が高い。

ＳＢＥ06

遺構（地形図84，図85，図版８）5Nグリッド

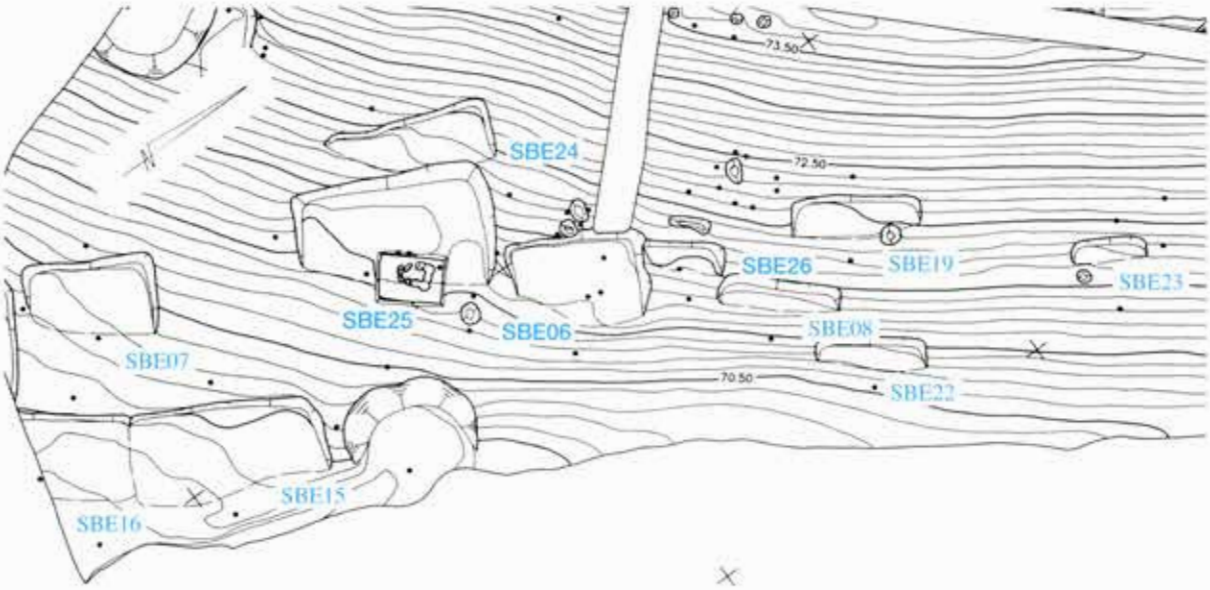


図84　SBE06・24・25・26・33・34周辺地形図（1/200）

東丘陵の丘陵端部付近の傾斜地に立地する。ＳＢＥ26を切って造られている。幅3.10m・奥行き2.33m（現存長）の方形で、黒色の砂質土を掘って床面をつくっている。そのため、住居跡の埋土と地山の土質が非常によく似ており、埋土掘削は困難であったが、床面は比較的よく残っている。壁溝・柱穴・地床炉は確認できなかった。この住居跡の床は硬く締まり、この直上に炭化材が散乱していた。床面自体の被熱は少なく、炭化材はそれほど多くはないが、散乱の範囲は広く、焼失家屋の可能性が高い。出土遺物の中で、この炭化材とと同様に床面の直上から出土した土器のうち、2103と2102は残存状況のよい甕で、各１個体が比較的良好な状況で出土している。後述するが、どちらも、搬入品の可能性が高いものであることが特筆できよう。また、2106は口縁部付近を多少掘り込んで、逆位に置かれた状態で出土している。いずれも、住居跡の廃絶時まで使用されていたものか、その際に廃棄されたものと考えられる。

遺物と所属時期（図86，87）

床面の残存状況が良かったため、出土遺物は質・量ともに良好で、このうちの15点の土器を図示した。2095・2096は高坏C類の脚部で、前者の内彎傾向は弱く後者の内彎傾向は比較的強い。2097は高坏の脚部片である。2098は壺Ｂ１類の口縁部片で、頸部外面は縦方向の、内面は横方向の細かいミガキを施している。2099は壺の底部である。2100～2102は甕Ｅ類で、ＳＢＡ06で出土したものと同様、

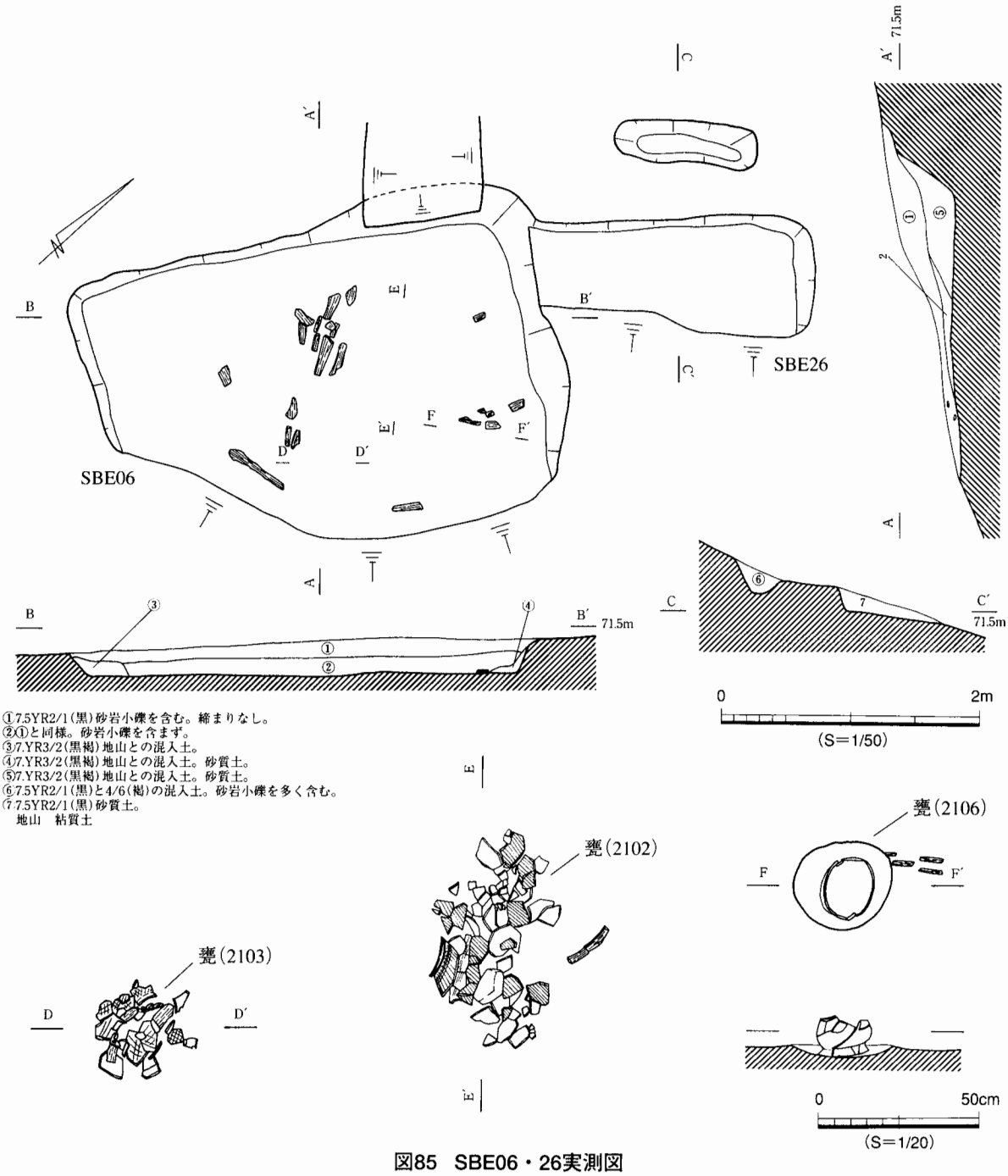


図85　SBE06・26実測図

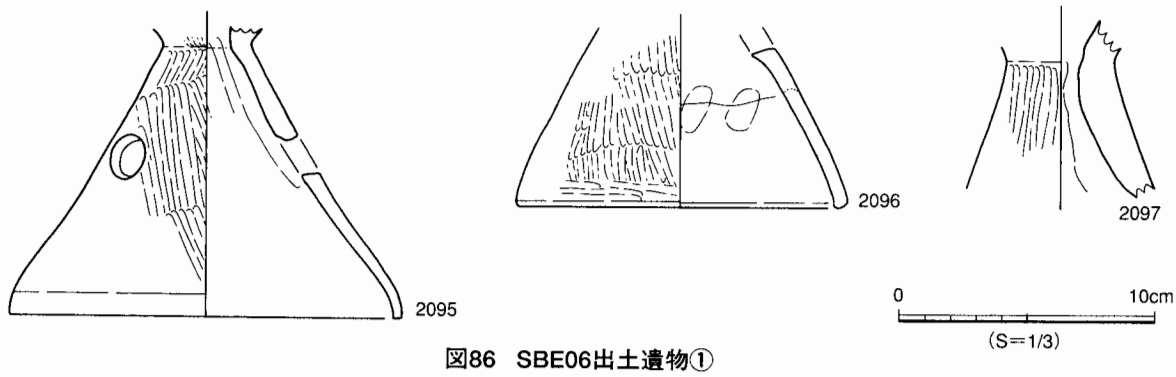


図86　SBE06出土遺物①

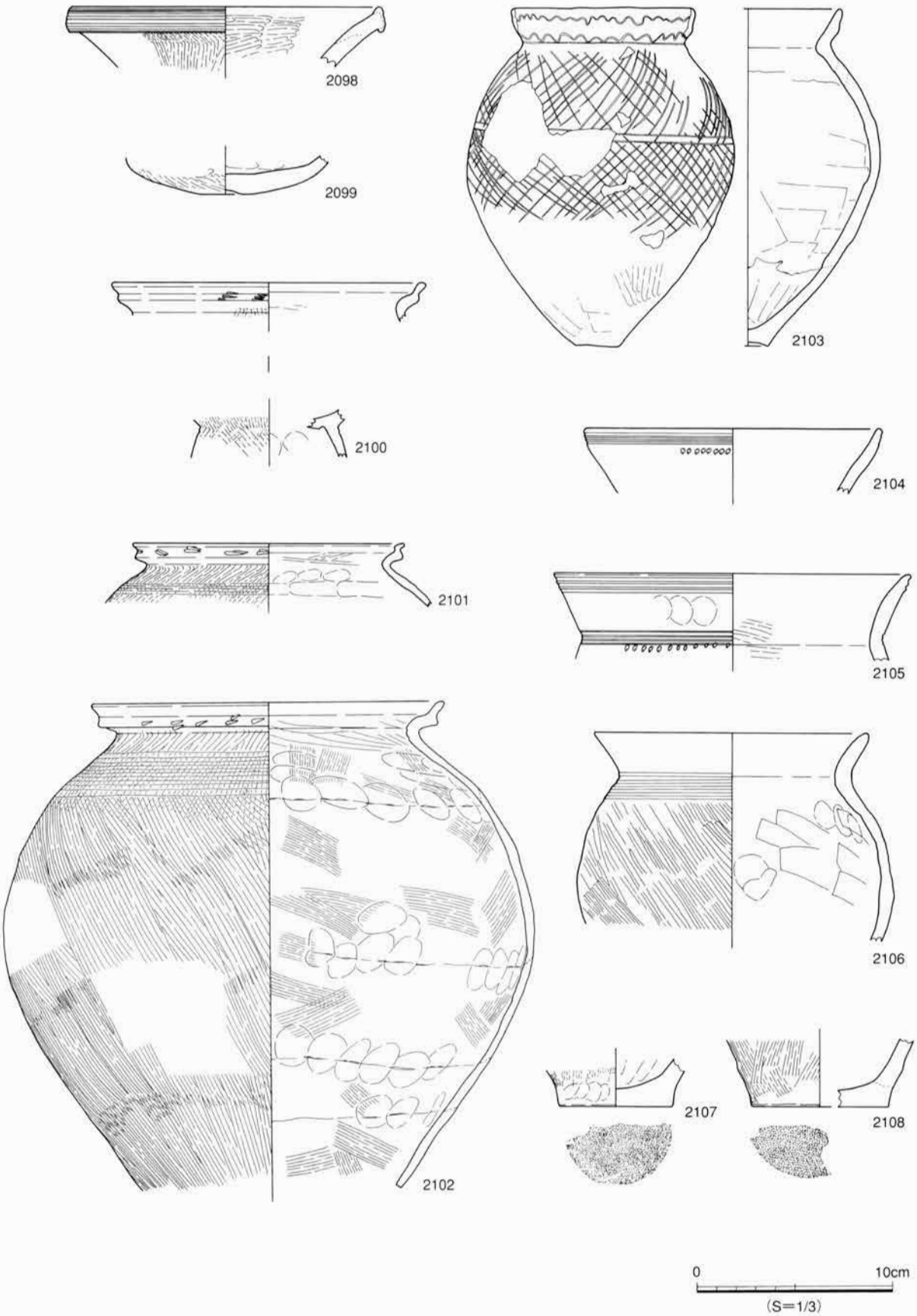


図87　SBE06出土遺物②

Ｓ字甕Ａ類である。３点とも頸部の屈曲は明瞭化し、外面には２個一単位の押引刺突が施され、頸部内面には、横方向のハケ調整を明瞭に残している。2100は口縁部と胴部の接合部、2101は口縁部片である。2102は床面に潰れた状態で出土し、口縁部から胴部の最下部までがほぼ完形に接合できたが、台部は見つからなかった。美濃地方の山間部では、ほとんど出土しないＳ字甕で、胴部の口縁部から胴部が完形で残っている。2103は甕Ｂ類口縁部外面には二段の波状文、胴部には線刻の斜格子文・直線文が施されており、底部はケズリ調整の痕跡と縦方向のミガキがわずかに残されている。また、胎土が細かく砂岩などの混入もない。この遺跡の中にはこの種の胎土はみられず、近江方面にこの種の甕がみられることから、搬入品もしくはこれを模したものの可能性が高い。2304は鉢Ｃ類、2105は甕Ｄ類である。前者は口縁部に、後者は頸部に横線・列点文を入れている。深橋前遺跡とその周辺でよく用いられる文様形態である。2106は甕Ｄ類であり、床面をわずかに掘って、底に逆位で置かれていた。底部が出土していない。2107・2108は甕Ａ２で布目圧痕を底部に残すが、外面の調整は条痕ではなく縦方向のハケ目に変わっている。在地色の強い甕である。

なお、この竪穴住居跡の所属時期は、高坏Ｃ類の存在、球胴状のＳ字甕の存在からⅢ－４期の可能性が高い。

ＳＢＥ26

遺構（地形図84，図85，図版10）5Ｎグリッド

南東側をＳＢＥ06に切られ、谷側の床面はほとんど崩落している。幅2.03ｍ・奥行き0.85ｍ（共に現存長）の方形と考えられる。住居跡の立地・地山等の状況は、ＳＢＥ06と同様であるが、山側に周溝の一部が残っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期

ＳＢＥ06に切られた上、谷側の崩壊が激しかったため、遺物の出土は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇でＳＢＥ06よりは古いものと考えられる。

ＳＢＥ07

遺構（地形図88，図89，図版９）3Ｐグリッド

東丘陵の西向斜面の端部付近の緩斜面上に立地する。切り合い関係は無く単独で存在する。幅3.08ｍ・奥行き2.00ｍの方形で、基本層序第Ⅳ層（黒色土）を掘り抜いて山側の床面を造っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。床面は、地山とは違う性質の混入土上に造られていた。これは最初の掘形の上に土を盛って床面を整形した痕跡と考えられる。このような造り方は、岩盤掘り込みの住居跡では確認しやすいが、粘質の強い地山の場合はわかりづらい。竪穴住居跡の平らな床面を整形するためには、地山が岩盤・粘質土の別を問わず必ず整地の必要性があったと考えられるので、その痕跡が確認できたことは特筆できよう。

遺物と所属時期（図90）

出土遺物は細片が多く、図示し得たのは１点のみである。2109は高坏F類の脚部で、外面には指押圧痕・内面には指ナデ痕を残している。

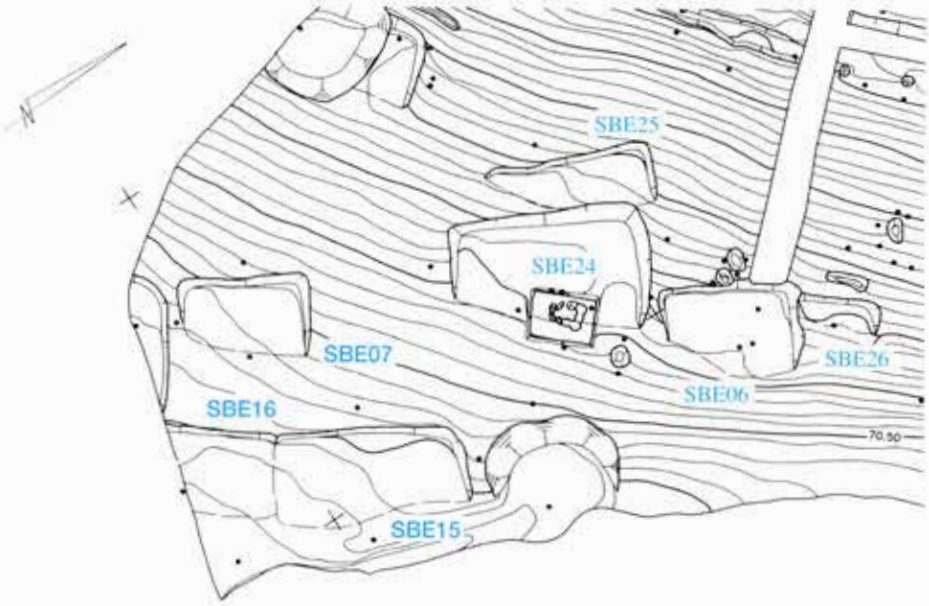


図88　SBE07・15・16周辺地形図（1/200）

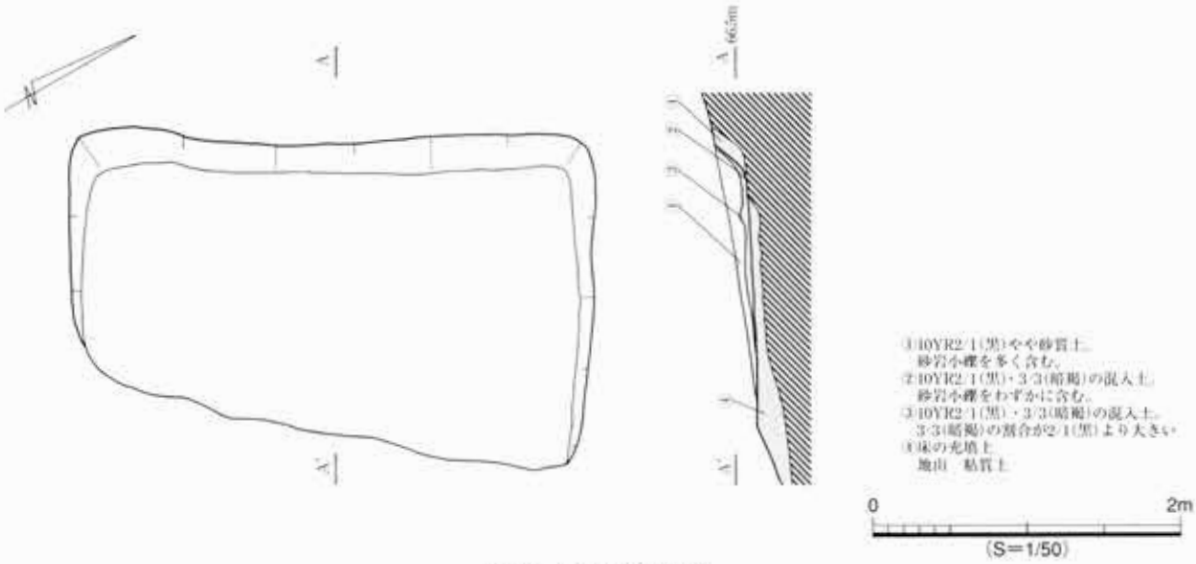


図89　SBE07実測図

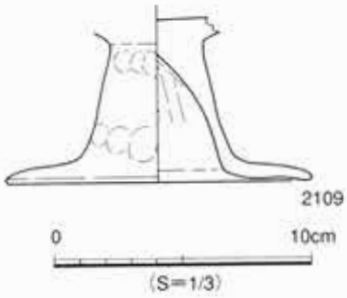


図90　SBE07出土遺物

なおこの竪穴住居跡は、屈折脚を持つ高坏F類が出土していることから、この遺跡内で3軒しか検出されていないⅢ期の竪穴住居跡の可能性が窺える。しかし、これ以外にも、実際には遺物の出土が非常に少なく、時期判定ができなかった竪穴住居跡は多く存在する。明確なカマドを持たないこの時期の竪穴住居跡は確認がしづらく、若干は存在していた可能性が考えられる。（包含層遺物の中からは、Ⅲ期の遺物がかなりの単位数出土している。）

ＳＢＥ08

遺構（地形図91，図92，図版９）5Ｎグリッド

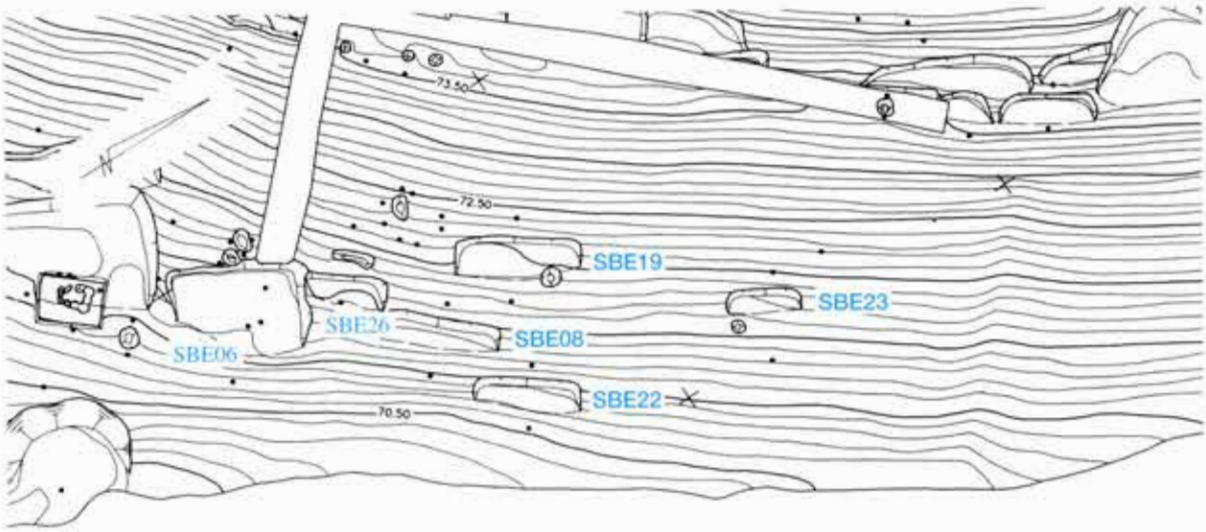


図91　SBE08・19・22・23周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向斜面の端部付近に立地する。幅2.90m・奥行き3.00m（現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。ＳＢＥ07と同様、床面の整地の痕跡が確認できた。

遺物と所属時期

床面の崩壊が激しかったためにか、出土遺物は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないがⅡ期の範疇と考えたい。

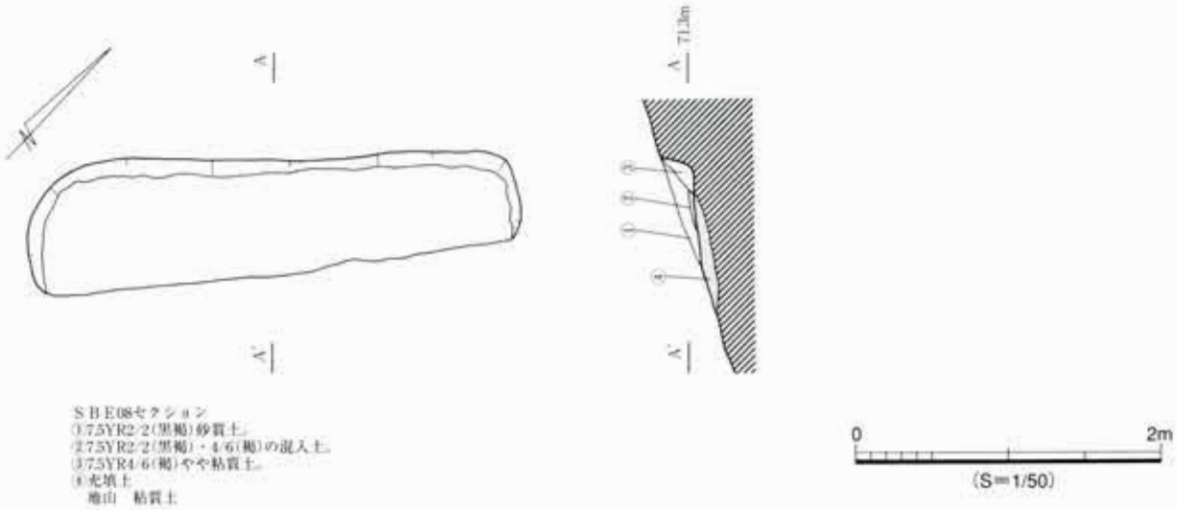


図92　SBE08実測図

ＳＢＥ09

遺構（地形図81，図93，図版９）4Ｌグリッド

西丘陵の東向斜面、中腹部より少し上った急傾斜地に立地する。床面の南東側は試掘トレンチによって切られている。幅3.18m・奥行き1.03m（現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。ＳＢＥ10を切って造られて

いる。また、ＳＢＥ11はＳＢＥ10を切って造られていることから、遺構の切り合いから、ＳＢＥ10が最も古く、前後関係は不明であるが、その次にＳＢＥ09・11が造られていたものと考えられる。

遺物と所属時期（図94）

北東側の一部しか残っていなかったために、出土遺物は小片が多かったが、このうち、５点の土器を図示した。2110は高坏の脚部である。2111は長頸壺の頸部と考えられ、下から上の順にタテ方向のミガキを施す。2112は不定方向のミガキを施した長頸壺の胴部と考えられる。2111と2112は同一個体と考えられる。2113は横線・波状文・列点を入れた広口壺の胴部、2114は底部片である。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多く、時期は限定しづらいが、比較的脚柱部の長い高坏の存在から、Ⅱ－３期に属する可能性が窺える。

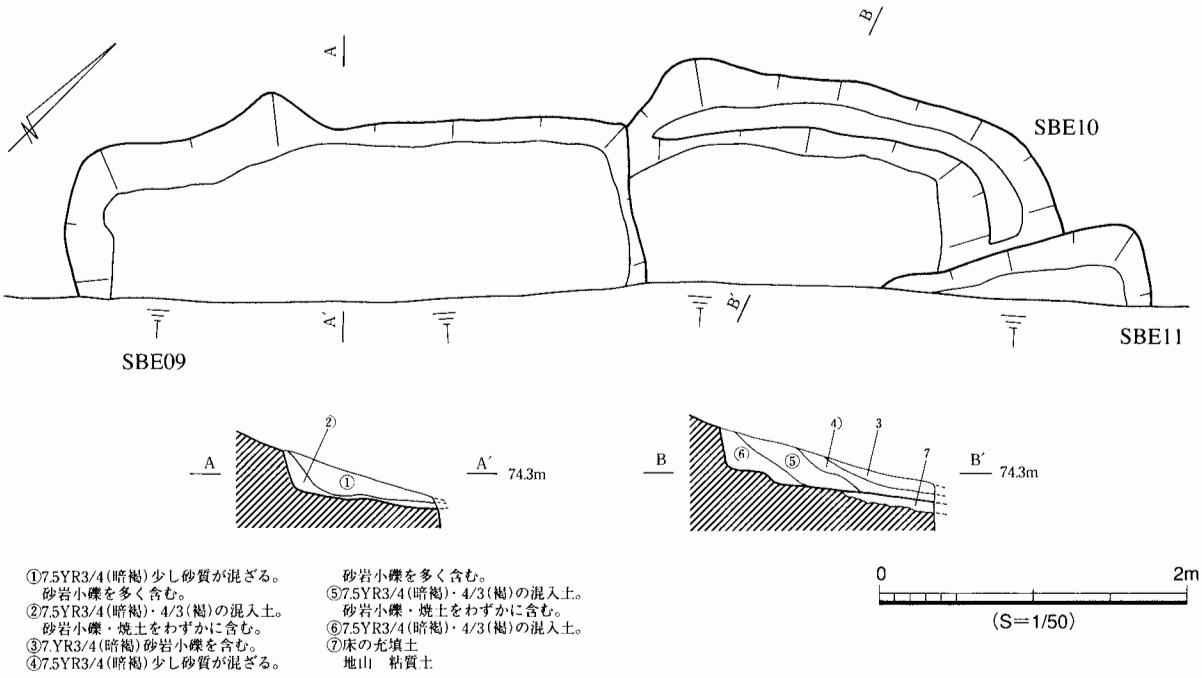


図93　SBE09・10・11実測図

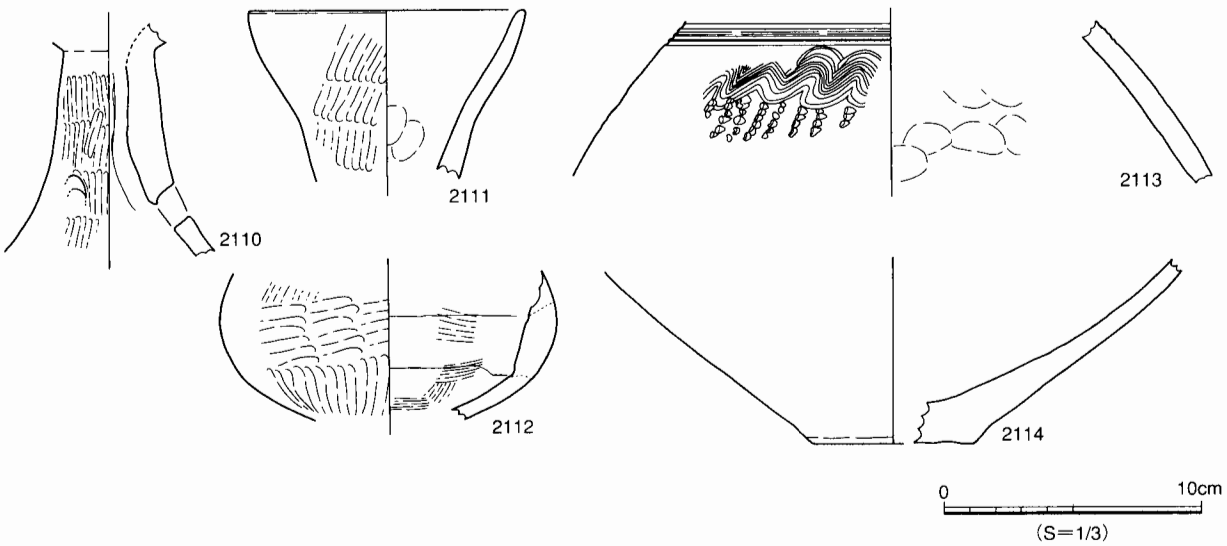


図94　SBE09出土遺物

ＳＢＥ10

遺構（地形図81，図93，図版９）５Ｋグリッド

床面の両側をＳＢＥ09・11に切られる。幅2.05m・奥行き0.95m（共に現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は試掘坑によって切られている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。ＳＢＥ07・08と同様、床面の整地の痕跡が確認できた。

遺物と所属時期

床面の崩壊が激しかったためか、出土遺物は無かった。したがって、所属時期も不明というほかない。

ＳＢＥ11

遺構（地形図81，図93，図版９）５Ｋグリッド

ＳＢＥ09の北西側を切り、南東側を試掘トレンチに切られ、床面はわずかを残すのみである。幅1.13m・奥行き1.00m（共に現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期

床面はほとんど残されておらず、出土遺物は無かった。したがって、所属時期も不明というほかない。

ＳＢＥ15

遺構（地形図88，図95，図版９）４Ｐグリッド

西丘陵の東向斜面の端部付近の緩斜面に立地する。幅4.23m・奥行き1.40m（現存長）の方形と考

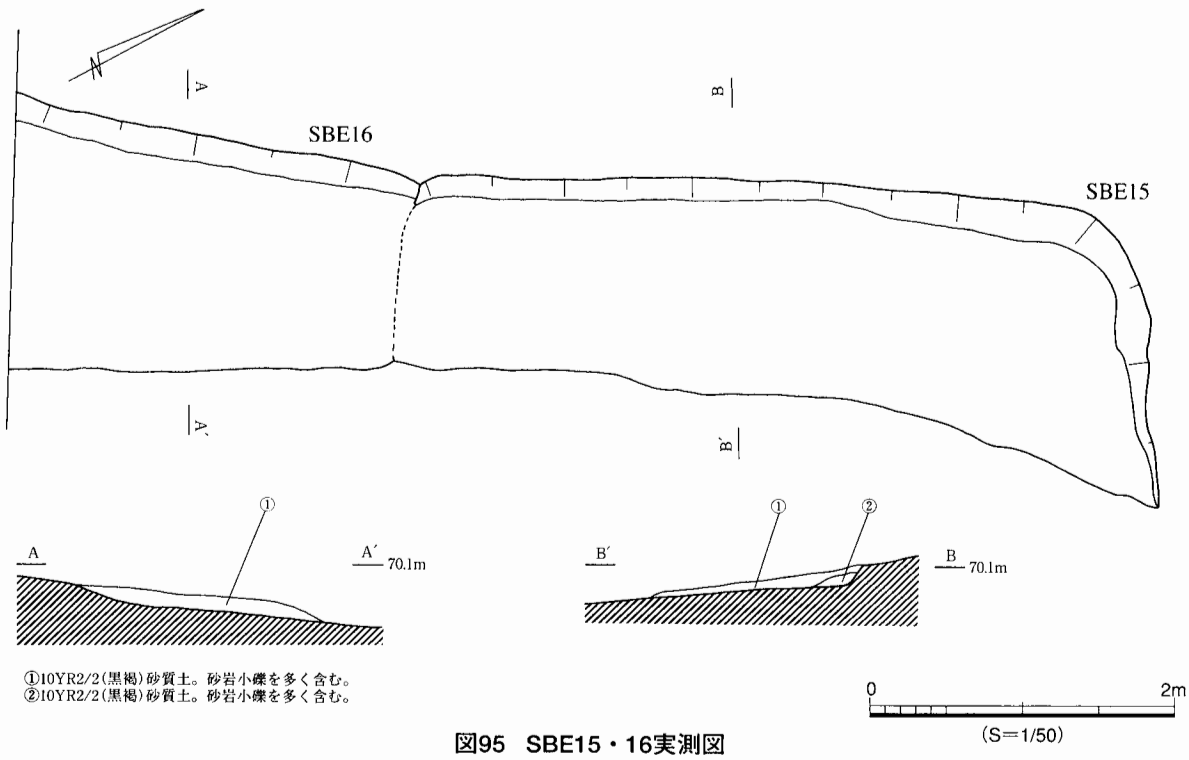


図95　SBE15・16実測図

えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。また、山からの湧き水のために黒色土はいつも湿っており、居住環境は良さそうにない。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。床面がわずかにＳＢＥ16を切っており、これより新しい竪穴住居跡であると考えられる。

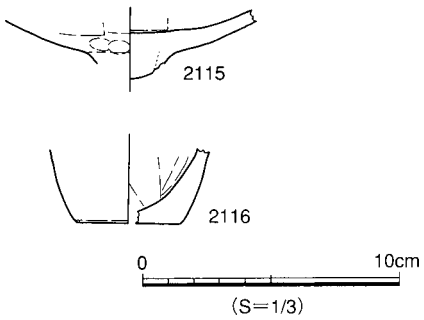


図96　SBE15出土遺物

遺物と所属時期（図96）

床面が大きく崩壊しているために、出土遺物は小片が多かったが、このうち２点の土器を図示した。2115は充填接合で坏部に板ナデを施した、高坏Ｆ類の坏部であり。2116は手づくねの坏であるが外面はナデを施している。

なお、高坏Ｆ類の存在から、Ⅲ期に属するものと考えられる。

ＳＢＥ16

遺構（地形図88，図95，図版９）４Ｑグリッド

西丘陵の東向斜面の端部付近の緩斜面に立地する。幅2.68ｍ・奥行き1.70ｍ（共に現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。立地条件は、ＳＢＥ15全く同様である。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。ＳＢＥ16に切られており、これより古い住居跡と考えられる。

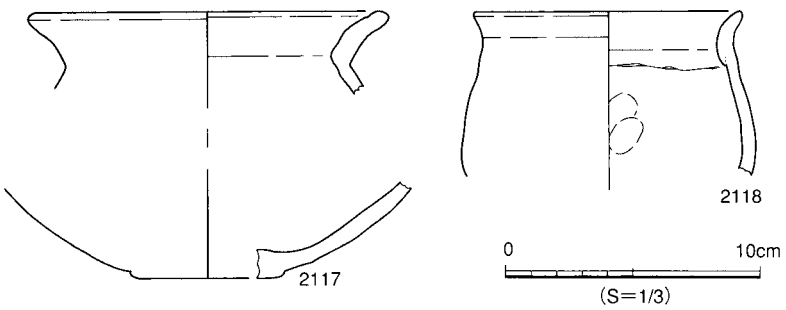


図97　SBE16出土遺物

遺物と所属時期（図97）

床面の多くが崩壊しているために、出土遺物は小片が多かったが、このうち、２点の土器を図示した。2117・2118は、口縁部を短く外反させた甕と考えられる。

なお、口縁部を分厚くして外反させた甕から、Ⅲ期に属するものと考えられる。

ＳＢＥ17

遺構（地形図98，図100，図版９）６Ｊグリッド

西丘陵の東向斜面、中腹部より少し上った急傾斜地に立地する。床面の谷側は、ＳＢＥ32・21・18によって切られている。幅4.45ｍ・奥行き1.00ｍ（共に現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。切り合いの関係からＳＢＥ17・21・32の順に造られたものと考えられ、北東側のＳＢＥ18もこの竪穴住居跡よりは新しいと考えられる。しかし、ＳＢＥ18とＳＢＥ21・32は直接切り合っておらず、これらの前後関係はわからない。しかし、後述するＳＢＥ28・29も含めて非常に近接して立地するため、同時に立て得るのは２軒が精一杯と考えられる。

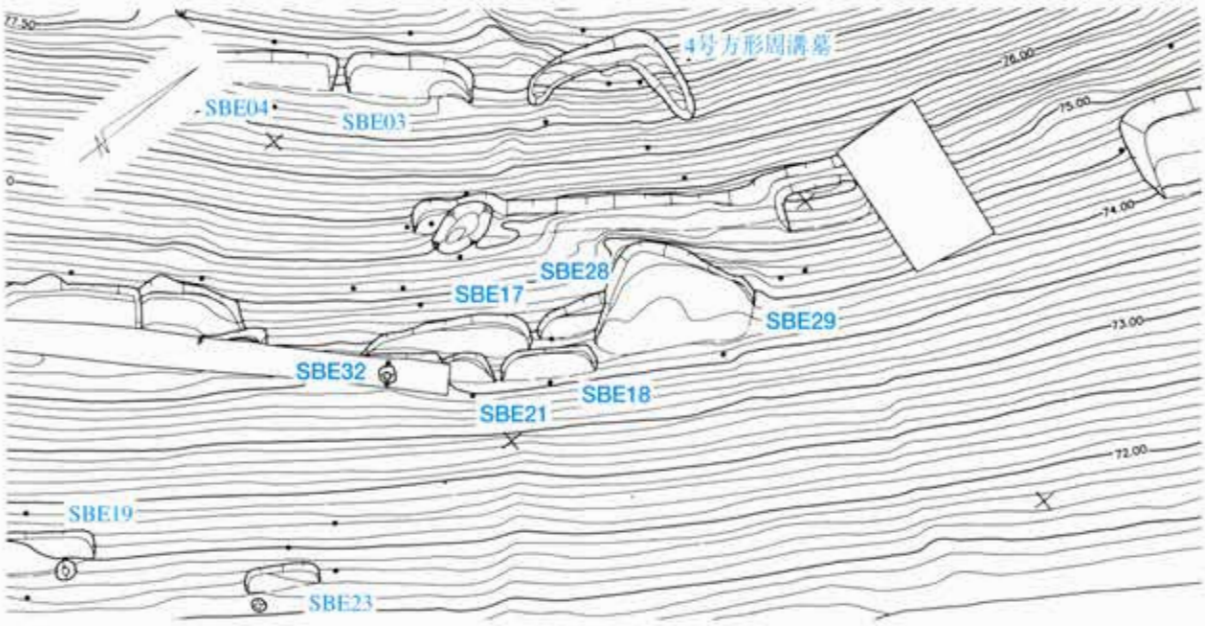


図98　SBE17・18・21・28・29・32周辺地形図（S＝1/200）

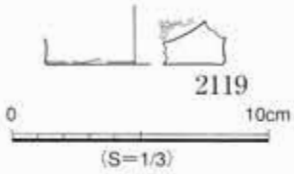


図99　SBE17出土遺物

遺物と所属時期（図99）

床面が大きく損壊しているために出土遺物は非常に少なく、図示し得たのは1点のみである。2119は甕A2類で内面にはハケ目を残しているが、外面の調整はわからない。おそらく擬口縁の製法を用いており、やや深鉢形を呈する条痕系の甕と考えられる。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は非常に少なく、所属時期も不明とせざるをえないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

ＳＢＥ18

遺構（地形図98，図100，図版9）6Ｊグリッド

ＳＢＥ17の谷側を切る、非常に小さな住居跡である。幅2.50m・奥行き0.80m（現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期

床面の崩壊が激しかったために出土遺物は無かった。したがって、所属時期も不明というほかない。

ＳＢＥ21

遺構（地形図98，図100，図版9）6Ｊグリッド

ＳＢＥ17の谷側を切り、南西側を試掘トレンチ・ＳＢＥ32に切られおり、床面はわずかを残すのみである。幅1.10・奥行き1.10m（共に現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

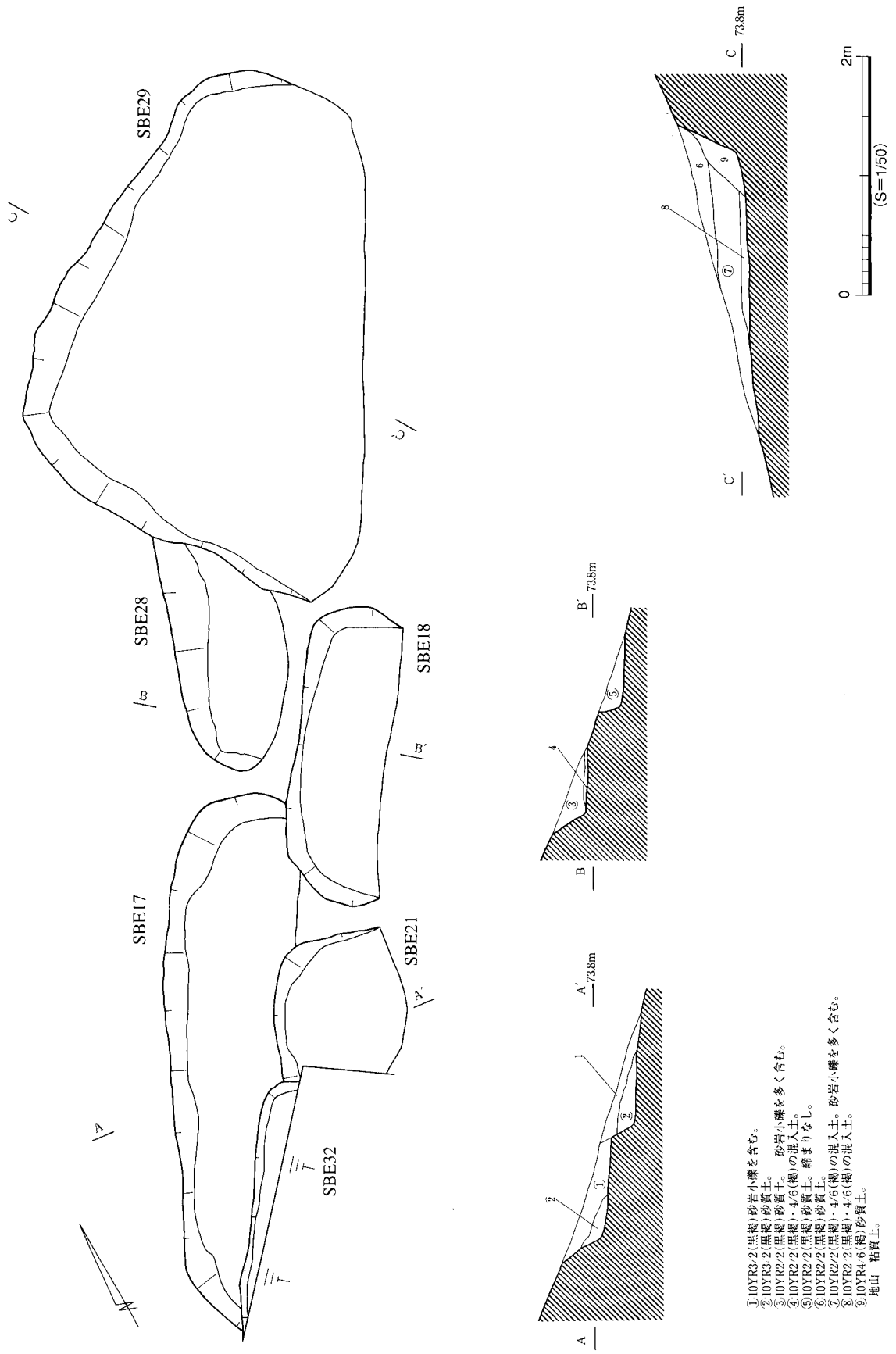


図100　SBE17・18・21・28・29・32周辺地形図

遺物と所属時期

床面はほとんど残されておらず、遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかない。

ＳＢＥ28

遺構（地形図98，図100，図版９）６Ｊグリッド

床面の北側をＳＢＥ29に大きく切られる。幅1.90m・奥行き0.95m（共に現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は試掘坑によって切られている。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期

床面の崩壊が激しかったために、出土遺物は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかない。

ＳＢＥ29

遺構（地形図98，図100，図版９）６Ｉグリッド

ＳＢＥ28の西側を切って造られている。幅3.95m・奥行き3.15m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面をつくっている。床面は比較的よく残っており、山側の壁の立ち上がりもよく残っている。床面の残存状況がよかったわりには、壁溝・柱穴・地床炉は確認できなかった。また山側周溝も確認できなかった。この住居跡の床はやや硬く締まり、山側の壁の三角堆積も明瞭に残っていた。なおこの竪穴住居跡と、ＳＢＥ28のみが、斜面の傾斜に対して軸をやや南向きに振って造られている。これは日照を意識したものかもしれない。

遺物と所属時期（図101，102）

床面の残存状況が良かったため、出土遺物は質・量ともに良好で、このうちの22点の土器を図示した。2120は高坏Ａ類の坏部で、比較的坏部は深く、外反は弱い。胎土は赤みが強く、内外面共にミガキがよく残っており、ほとんどはタテ方向であるが、坏段部のみ横方向にミガキを施している。充填接合の部分で脚部は折れ、欠損しているが、比較的長く外反する脚部を有するものと考えられる。2121は高坏Ｂ類の坏部で、ほぼ直線的に坏部が立ち上がり、口縁端部は薄く仕上げている。内外面共にタテ方向のミガキを施しているが、口縁部付近にハケの痕跡がわずかに残っていおり、ハケで調整した後にナデさらにミガキを施した形成・調整過程が窺える。2122も高坏Ｂ類の坏部片である。2123は高坏の脚部で、裾部がやや外反し、脚部が比較的低いことから、ＢもしくはＣ類と考えられる。2124は高坏Ｃ類の脚部で内彎傾向が比較的強い。充填接合の痕跡を残し、４単位の穿孔を持つ。脚端部の接地面には面を持っている。2125は高坏Ｃ類であるり、坏部の内彎傾向が強く比較的深い。一方、脚部はやや外反し、坏部と脚部はややアンバランスなつくりとなっている。器面はかなり摩耗し、わずかにミガキ調整を残すのみであった。2126は器台の器部で、端部にしっかりとした面を持っている。2127は器台Ａ類の坏部から脚部であり、タテ方向の細かいミガキを施している。2128・2129は共に器台の中空部であるが、脚部が欠損しているために分類はできない。2130は器台Ｂ２類の脚部で、弱いながらも内彎傾向を持ち、タテ方向のミガキが施されている。脚端部は2124の高坏と同様、接地面に

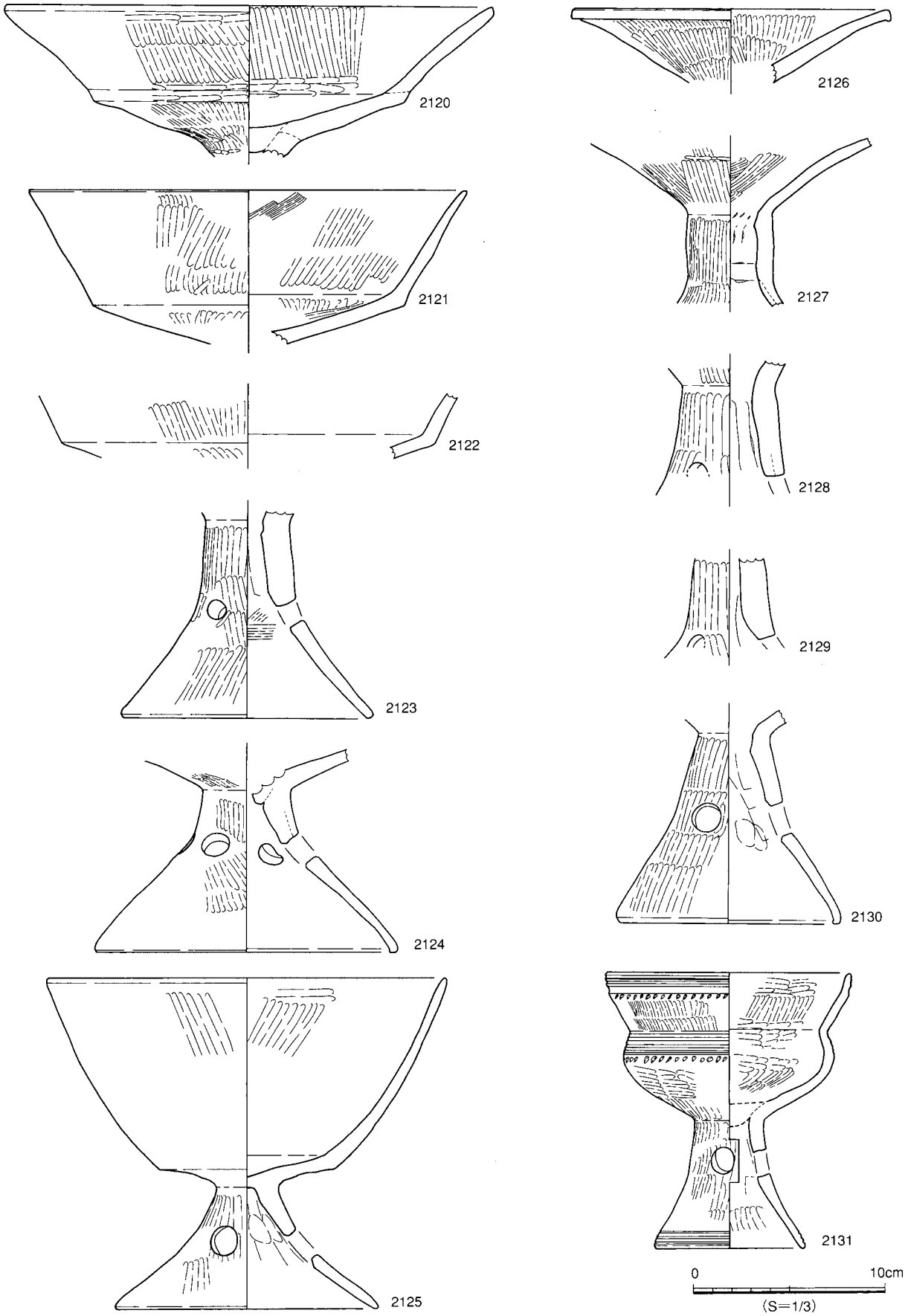


図101 SBE29出土遺物①

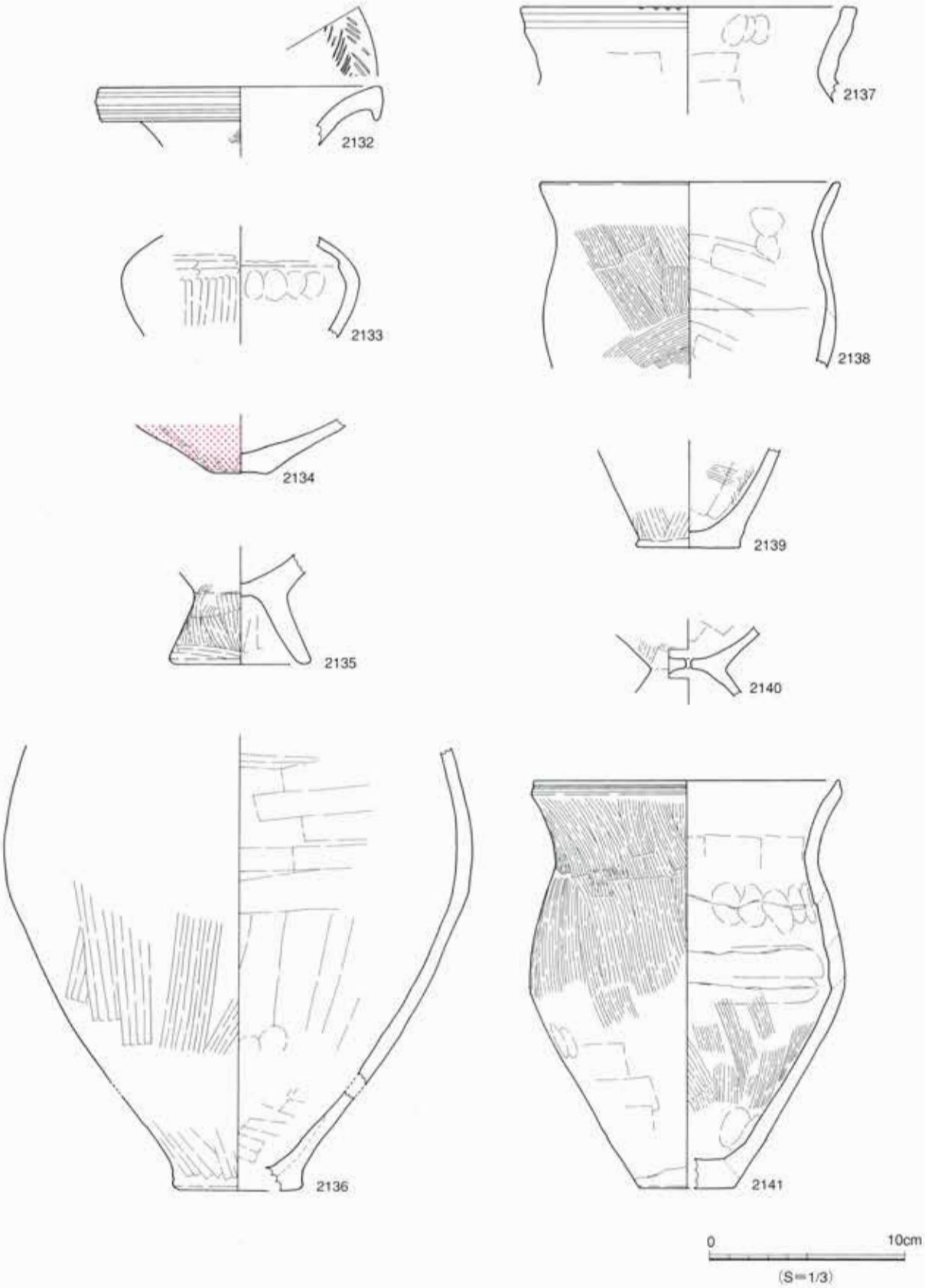


図102　SBE29出土遺物②

面を持っている。2131は脚坏鉢である。煮炊きに使われていた鉢に器台の脚が融合されている。胎土は非常に細かく良好で、煮炊きに使われたものではなく、盛器として使われたものである。そして、文様の構成は横線文と列点文により構成されており、甕の文様構成と同様であり、内外面に細かく丁寧なタテ方向のミガキを施している。2132は壺Ｂ１類であり、2133は長頸壺の可能性のある壺、2134は壺の底部である。高坏に対して壺の残存状況はよくはなく、口縁部の出土も少なかった。2135は台付甕の脚部、2136・2139は平底甕、2137は甕Ｃ類の口縁である。2138は甕Ａ２類であり、プロポーションは条痕系の長い口縁を持っているが、外面の調整はタテ及び斜め方向のハケ目に変わってしまっている。2140は台付甕の接合部であるが、底部の中心に焼成前にあけたとみられる穿孔がある。2141は甕Ａ２類である。プロポーションは条痕甕と同様で、底部も擬口縁の技法を用いているが、外面調整はタテ方向のハケ目に変わっている。また口縁部は内面に少しつまんでおり、胎土もやや赤っぽいものの黒褐色を呈している。

なおこの竪穴住居跡からは、高坏Ａ・Ｂ・Ｃ類が混在しているほか、擬口縁を持つ甕も出土している。そのため、所属時期の判定にはかなり慎重にならざるを得ないが、高坏Ｃ類や、内彎傾向を持つ器台、口縁部までミガキを施す脚坏鉢の存在から、高坏Ａ類がかなり遅い時期まで残ったと考えて、Ⅱ－４期の可能性が高いとしておきたい。

ＳＢＥ32

遺構（地形図98，図110，図版９）6Ｋグリッド

ＳＢＥ17の谷側とＳＢＥ21の北西部を切っているが、谷側のほとんどを試掘トレンチに切られている。幅1.80m・奥行き0.20m（共に現存長）の方形と考えられる。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期

床面がほとんど残っておらず、遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、切り合いの状況からＳＢＥ17・21よりは新しいものと考えられる。

ＳＢＥ19

遺構（地形図91，図103，図版９）5Ｍグリッド

西丘陵の東向斜面の端部付近に立地する。幅3.20m・奥行き0.85m（現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。ＳＢＥ07と同様、床面の整地の痕跡が確認できた（セクション④）。また、床面を切るように土坑が検出できたが埋土との関係は不明で、また出土遺物もなかったことからこの竪穴住居跡に伴うものかどうかはわからない。したがって、この土坑のみのセクションを図示しておくにとどめる。

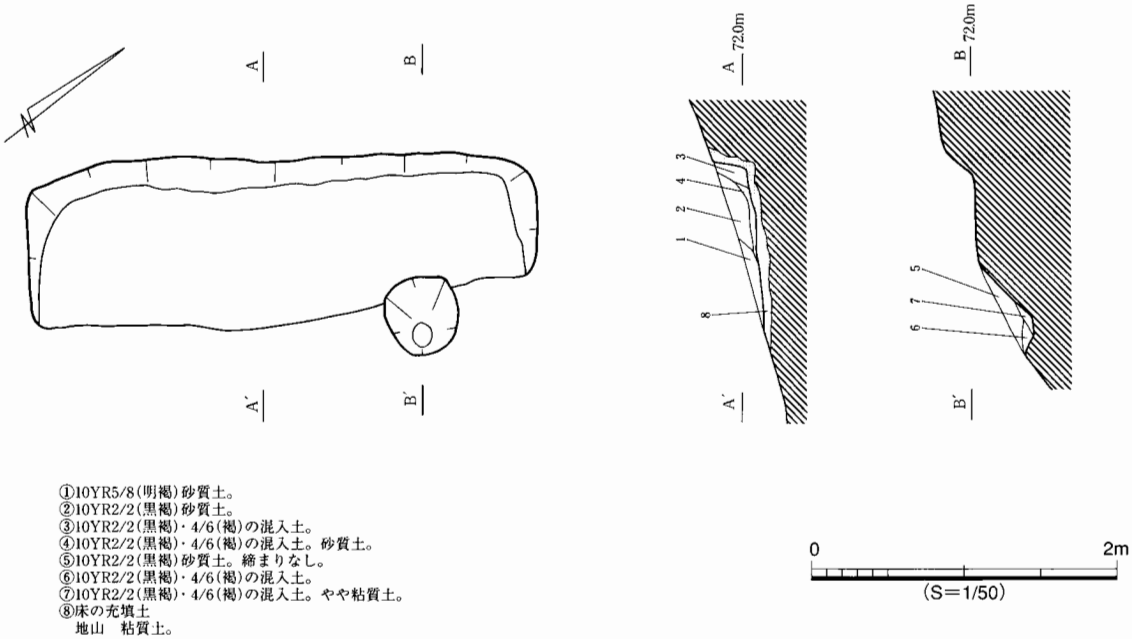


図103　SBE19実測図

遺物と所属時期

床面の崩壊が激しかったために、出土遺物は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

ＳＢＥ22

遺構（地形図91，図104，図版10）6Mグリッド

西丘陵の東向斜面の端部付近に立地する。幅2.61m・奥行き0.65m（現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。非常に小規模な住居跡で、柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。比較的厚い床面の整地の痕跡が確認できた。（セクション④）

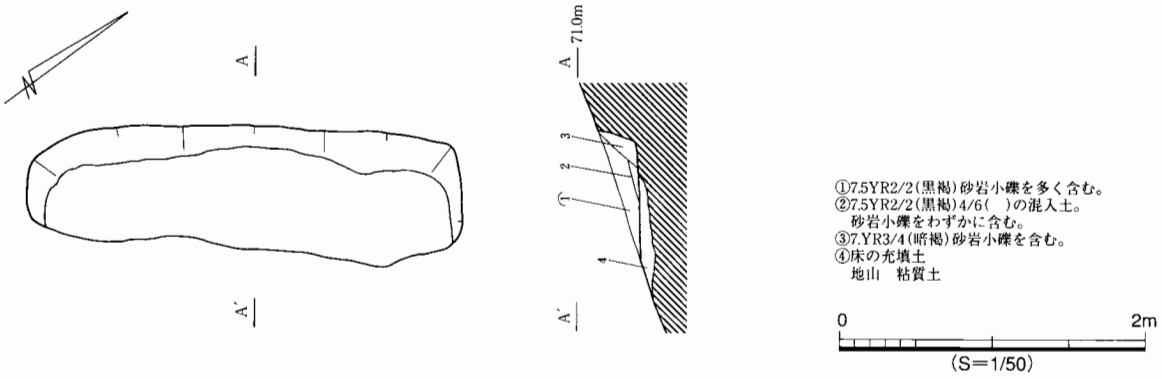


図104　SBE22実測図

遺物と所属時期

床面の崩壊が激しかったために、出土遺物は少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。した

がって、所属時期も不明というほかないがⅡ期の範疇としておきたい。

ＳＢＥ23

遺構（地形図，図105，図版10）６Ｌグリッド

西丘陵の東向斜面の端部付近に立地する。幅2.61ｍ・奥行き0.65ｍ（現存長）の方形と考えられ、粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っており、谷側の床面は大きく崩壊している。非常に小規模な竪穴住居跡である。谷側に、１基の土坑が確認できたがこの竪穴住居跡との切り合いは関係は不明で、遺物も出土しなかったため、一応図示しておくにとどめる。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。また、床面の整地の痕跡が確認できた。（セクション⑤）

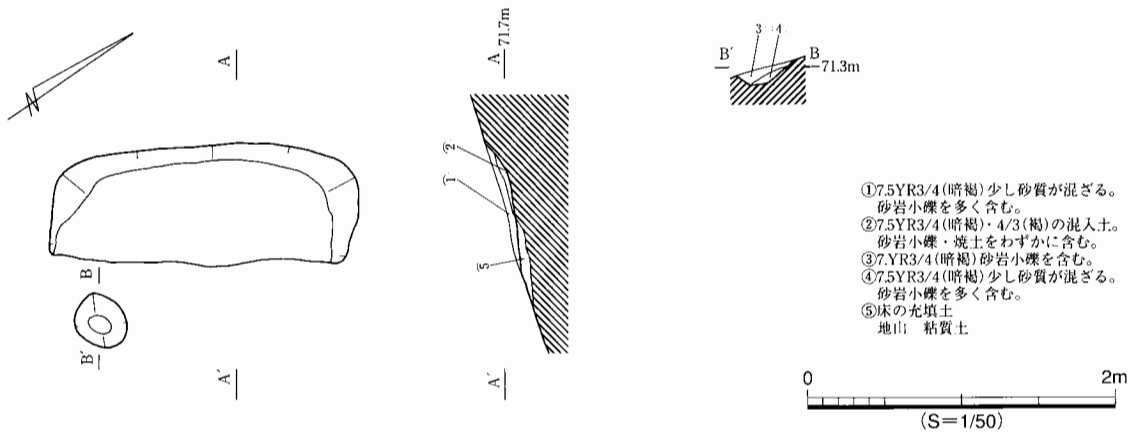


図105　SBE23実測図

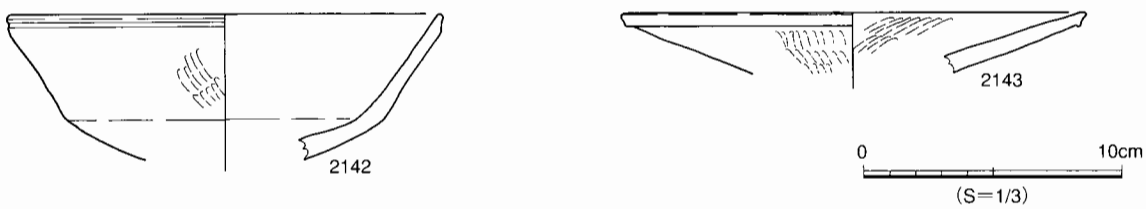


図106　SBE23出土遺物

遺物と所属時期（図106）

床面の崩壊が激しかったために、出土遺物は極めて少なく、図示し得たのは、２点のみである。2142は高坏Ｂ類の坏部で、やや浅い坏部の口縁部に横線を入れ、タテ方向のミガキをわずかに残している。2143は器台で、口縁端部に強く押し引き、内外面にタテ方向の細かいミガキを施している。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多いが、高坏Ｂ類の存在から、Ⅱ－２期に属する可能性が高い。

ＳＢＥ24

遺構（地形図84，図107，図版10）４Ｎグリッド

西丘陵の東向斜面の端部付近に立地する。幅4.20ｍ・奥行き1.35ｍ（現存長）の方形と考えられ、黒色の粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。ＳＢＥ25を完掘後、山側の壁が、真っ赤に焼け

ていたため、念のためにトレンチを入れたところ、焼土の範囲がこの住居跡の床面の下方にのびていくこことがわかった。このため、この住居跡はＳＢＥ25が埋まった後に造られたことが判明した。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

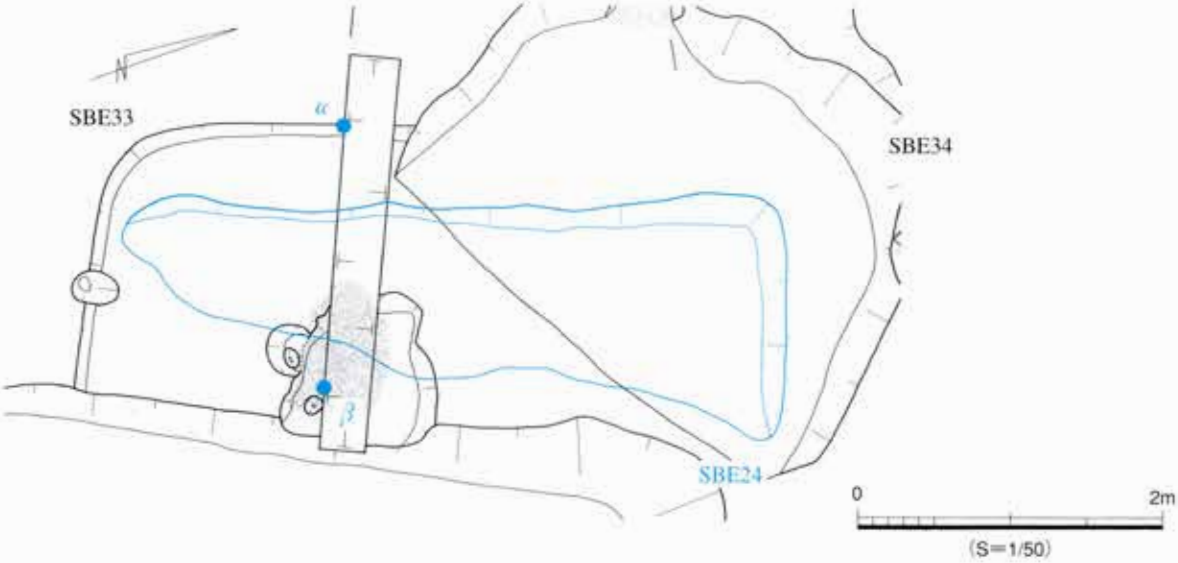


図107　SBE24実測図

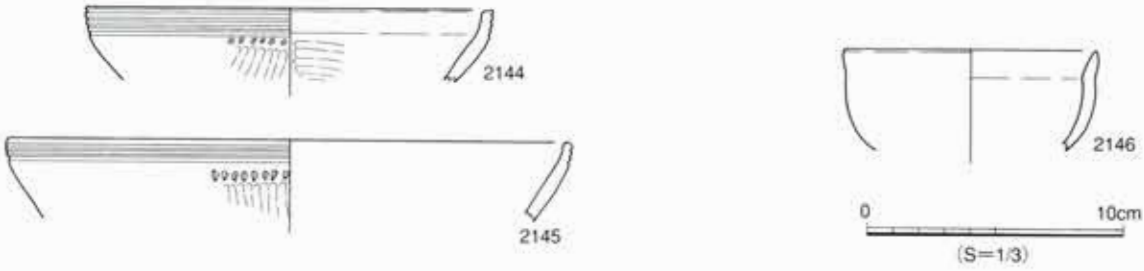


図108　SBE24出土遺物

遺物と所属時期（図108）

床面の崩壊が激しかったために、出土遺物は極めて少なく、図示し得たのは３点のみである。2144は鉢Ａ類の口縁部で、外面には横線と列点を順に入れ、縦方向のミガキを施し、内面にはヨコ方向のミガキを施している。2145も鉢Ａ類の口縁部で、文様構成は2144の鉢と同様であるが、内面にミガキが施されていたかどうかは不明である。また、口径がおおきく、やや口縁が直立気味である点から、甕の可能性もあるが、口縁部にミガキが施されていることから、ここでは鉢と考えておきたい。2146は小型の鉢で、口縁部の整形から少し下って、Ⅲ期のものと考えられる。上層（セクション①）から出土しており、埋土に流れ込んだものであろう。

なお、この住居跡から出土した遺物は小片が多いが、鉢Ａ類の口縁部に縦方向のミガキが施されていることから、Ⅱ－４期に属する可能性が高い。

ＳＢＥ25

遺構（地形図84，図109，図版10）４Ｎグリッド

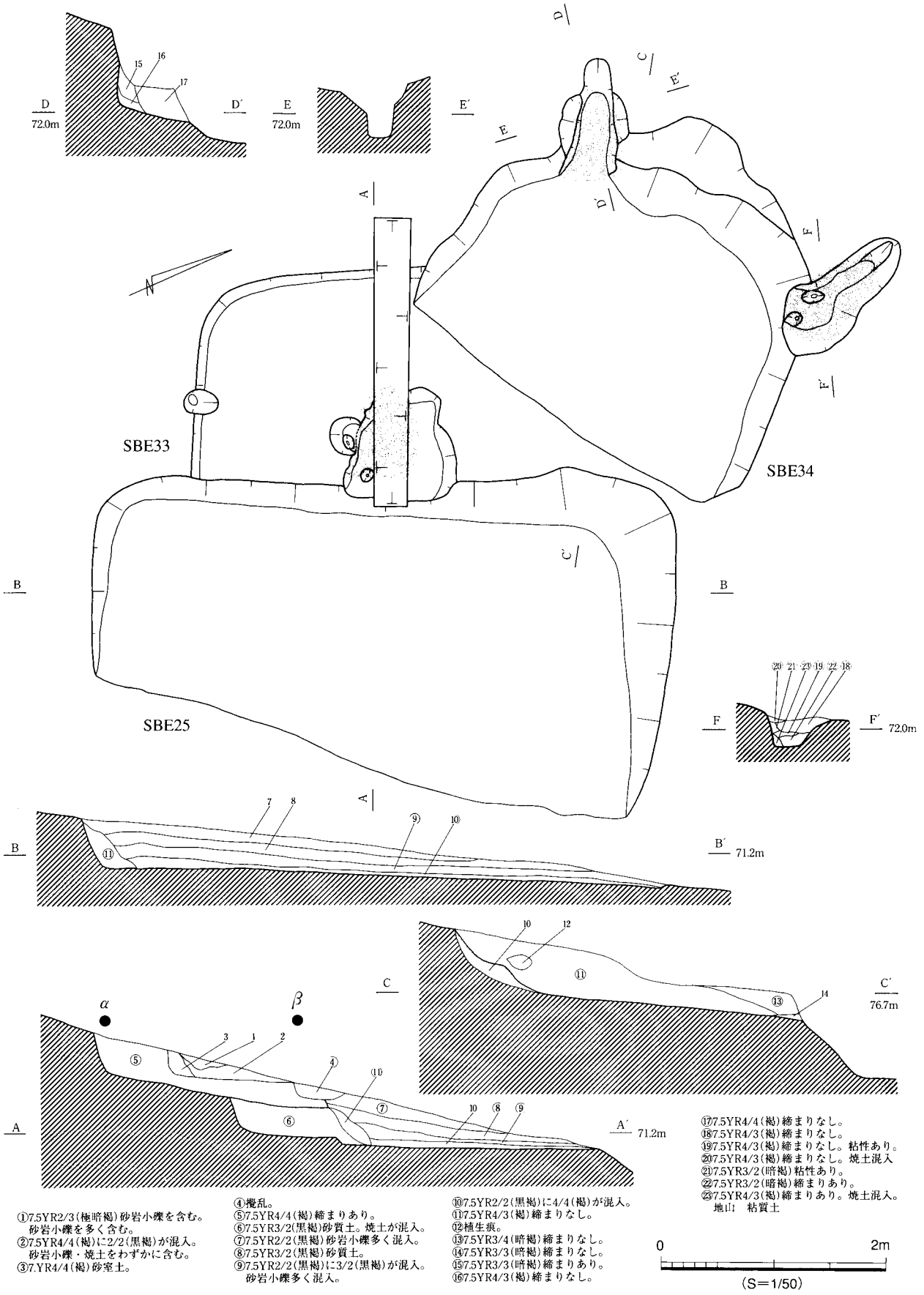


図109　SBE25・33・34実測図

西丘陵の東向斜面の端部付近に立地する。幅4.60m・奥行き2.55m（現存長）の方形と考えられ、黒色の粘質土を掘り抜いて山側の床面を造っている。黒色土の地山と、あまり様相の違わない埋土であったが、床面は硬く締まっており明確に確認できた。柱穴・地床炉・壁溝・は確認できなかった。完掘後、この竪穴住居跡の山側の真っ赤に焼けた壁を追求するため、念のためにトレンチを入れたところ、壁・底面が赤褐色に硬く焼き締まった土坑の範囲が、ＳＢＥ33の床面の下方にのびていくこことがわかった。この土坑の範囲は幅・奥行き共に１ｍほどに広がった。埋土・形状から見るとカマドの煙道に類似しているが、最も強く焼けている場所は、住居の外側であり、住居の内部はほとんど焼けていない上、焼土の痕跡も確認できなかった。さらに、その壁には、土坑の埋土を被せるようにして三角堆積が残っている。このことから、この土坑は竪穴住居跡に伴うものではあるが、その内部に構造を持つものではなく、いわゆるカマドではないと考えられる。しかし、金属器などの製作に伴うと考えられる遺物も出土していないことから、工房跡と考えることも難しく、カマドに類似した土坑である可能性は捨てきれない。縄文早期の「煙道付き炉穴」のような調理施設を思わせるが（村瀬2002、篠原・吉田1985）、これを証明する遺物は出土しておらず、時期も大きく違うため推測の域を出ないものである。なお、切り合いの状況から、ＳＢＥ25・33・34の順に造られたことが確認でき、この埋土上に、最も新しいＳＢＥ24が造られたものであろう。

遺物と所属時期

非常に残りの良い竪穴住居跡であったのにも関わらず、出土遺物は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。これが、この竪穴住居跡の性格を示すものかもしれないが、今のところはよくわからない。しかし前述したように、埋土の状況から、ＳＢＥ25・33・34の上層にＳＢＥ24が造られており、さらにＳＢＥ24は、出土遺物からⅡ－４期である可能性が高い。このことから、この住居跡は、Ⅱ期もしくはそれ以前に属するものと考えられる。

ＳＢＥ33

遺構（地形図84，図109，図版10）4Ｎグリッド

ＳＢＥ24の埋土の下層に造られ、ＳＢＥ34に山側を切られている。幅3.45m・奥行き1.75m（共に現存長）の方形と考えられる。埋土などの状況はＳＢＥ25と同様であるが、硬化した床面も無く、赤く焼き締まった土坑も伴わなかった。柱穴・地床炉・壁溝も確認できなかった。また、ＳＢＥ25とＳＢＥ34の間にのびる床面は自然に消滅し、その端部を確認することはできなかった。この竪穴住居跡の前後関係は前述のとおりである。

遺物と所属時期

出土遺物は無かった。所属時期については、前述のとおりである。

ＳＢＥ34

遺構（図109，図版10）4Ｎグリッド

ＳＢＥ24の埋土の下層に造られ、ＳＢＥ33の山側を切っている。幅2.85m・奥行き2.1m（現存長）の方形と考えられる。埋土などの状況はＳＢＥ33と同様であるが、ＳＢＥ25と同様に、赤く焼けた土坑を伴っていた。様相もほとんど同様であるが、この竪穴住居跡には、この施設が両コーナーに２基

造られていた。また、柱穴・地床炉・壁溝は確認できなかったが、竪穴を掘った後に、壁を整形したと考えられる盛り土がセクションで確認できた。また、この竪穴住居跡の前後関係は前述のとおりである。

遺物と所属時期

非常に残りの良い住居跡であるのにも関わらず、出土遺物は無かった。様相は、ＳＢＥ25と同様である。したがって、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。所属時期についても、前述のとおりである。

ＳＢＥ27

遺構（地形図110，図111，図版10）7Ｇグリッド

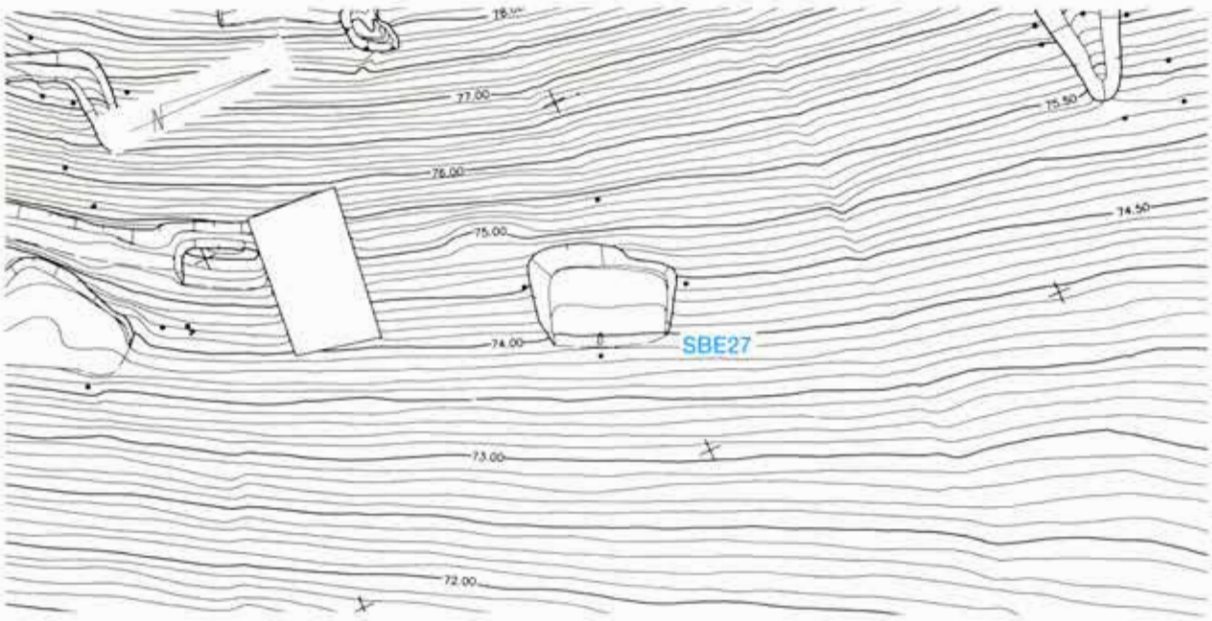


図110 SBE27周辺地形図（1/200）

東丘陵の西向き斜面、丘陵中腹部の急傾斜地に立地する。切り合いはなく単独で存在する。幅3.15m・奥行き2.08m（現存長）の方形で、黒色の砂質土を掘って床面をつくっている。床面・山側の壁、ともによく残っている。柱穴・壁溝は確認できなかった。谷側の床面残存部の端部中央付近に川原石を炉石とする地床炉が確認できたが、焼土の確認はできなかった。最後に竪穴住居跡を埋めた層位（セクション①）は、竪穴の肩も削っているため、その下層より時期の新しい層と考えられる。

遺物と所属時期（図112）

床面の残存状況が良かったため、出土遺物は比較的良好で、このうちの9点の土器と、１点の石器を図示した。2047は高坏Ｆ類で、外面の二次調整はナデであるが、一次調整の指頭圧痕も残っている。また、坏部の内面はナデ調整が施されている。下部には張り付けの垂下がつけられている。この土器は、ほかの遺物より下るⅢ期のものであるが、比較的上層から出土したことから混入であると考えられる。2148は小型の壺で、口縁部外面には３条の横線が入れられ、その下部から縦方向に細かい丁寧なミガキが施され、胴部には若干粗くヨコ方向のミガキが施されている。口縁部内面にもミガキが施され、胴部は板ナデ調整を行っている。脚付きになる可能性も高い。2149・2150は壺の底部で、後者

には指頭圧痕が残されている。2151は壺Ｂ１類で、胴部はおおよそ縦方向にミガキが施されているが、文様は入れられていない。内面は輪積み痕とそれを押さえた指頭圧痕がところどころに残されている。2152も壺Ｂ１類で、口縁部には３条の横線が入れられ、内外面共に不定方向にミガキが施されている。外面の胴部にはミガキ前のハケ調整の痕跡が残っている。2153は甕Ｅ類であるが、極めて小片で時期はおろか口縁の角度もはっきりしない。2154は甕Ｇ類で、輪積み痕とこれを押さえた指頭圧痕が残っている。2155は甕Ａ１類で、赤褐色の胎土で、口縁部と胴部の下方部が残っている。タテ方向の条痕が多少斜めになっているものの、はっきり残っている。おそらくは、布目圧痕を持つ平底の甕の底部であった可能性が高い。また、１点のみ出土した石器6006は有溝石錘である。

なお、この竪穴住居跡の所属時期は、混入が多いために、遺物の出土層位を根拠にしながらも限定的に考えざるをえないが、最大径が中央部付近にある壺Ｂ１類、また、タテ方向の条痕を明瞭に残す甕Ａ１類の存在から、Ⅲ－３期の可能性が高い。

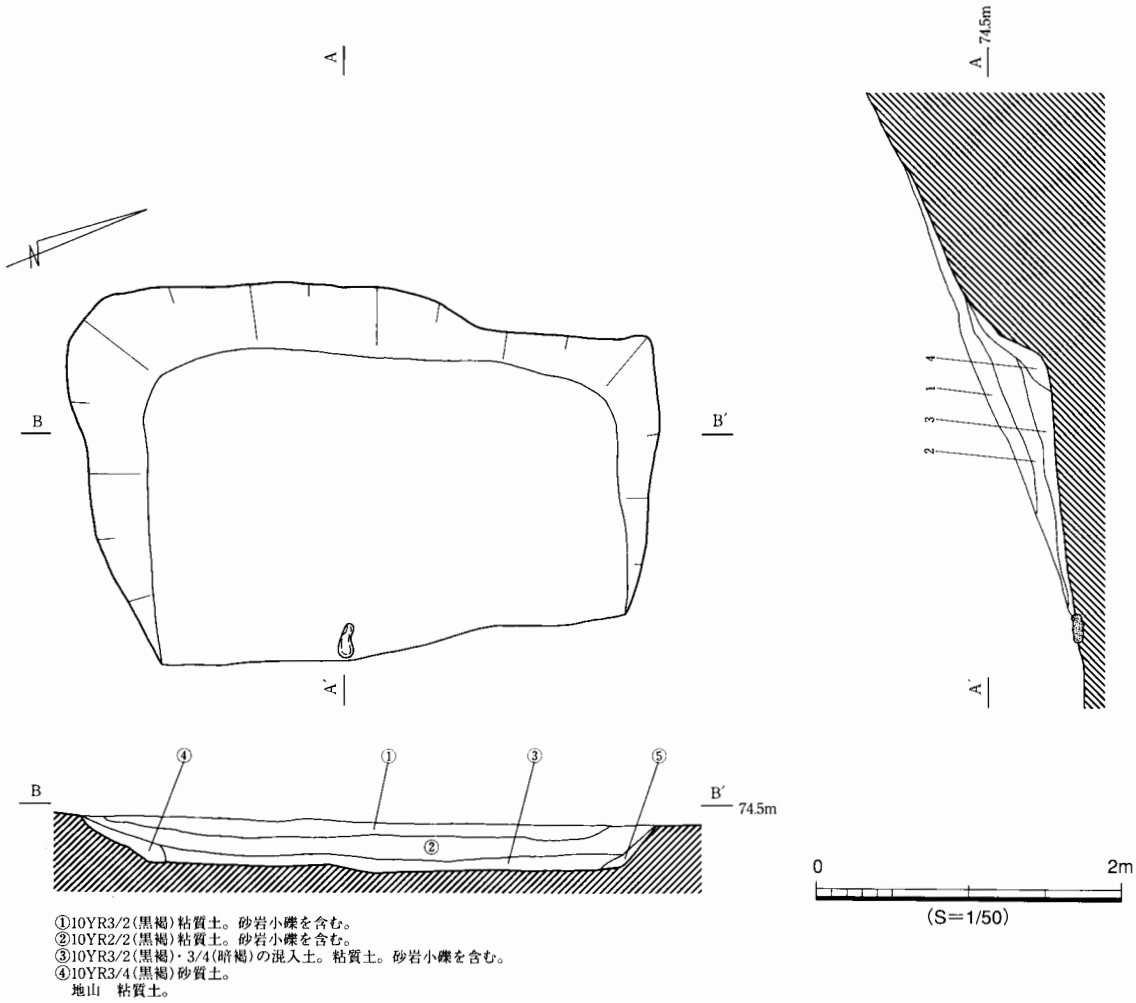


図111　SBE27実測図

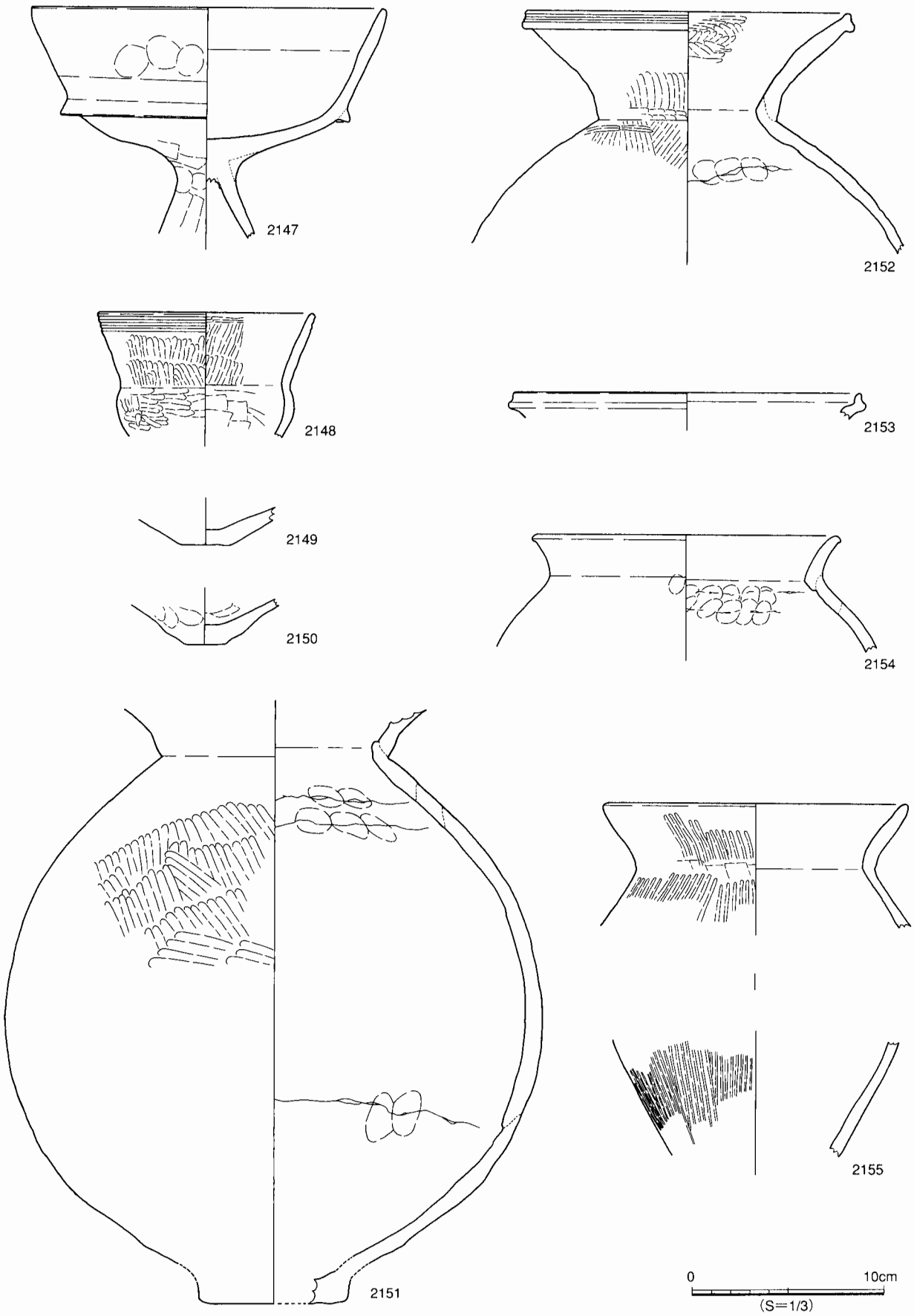


図112　SBE27出土遺物

ＳＢＦ01

遺構（地形図113，図114，図版11）26Ｊグリッド

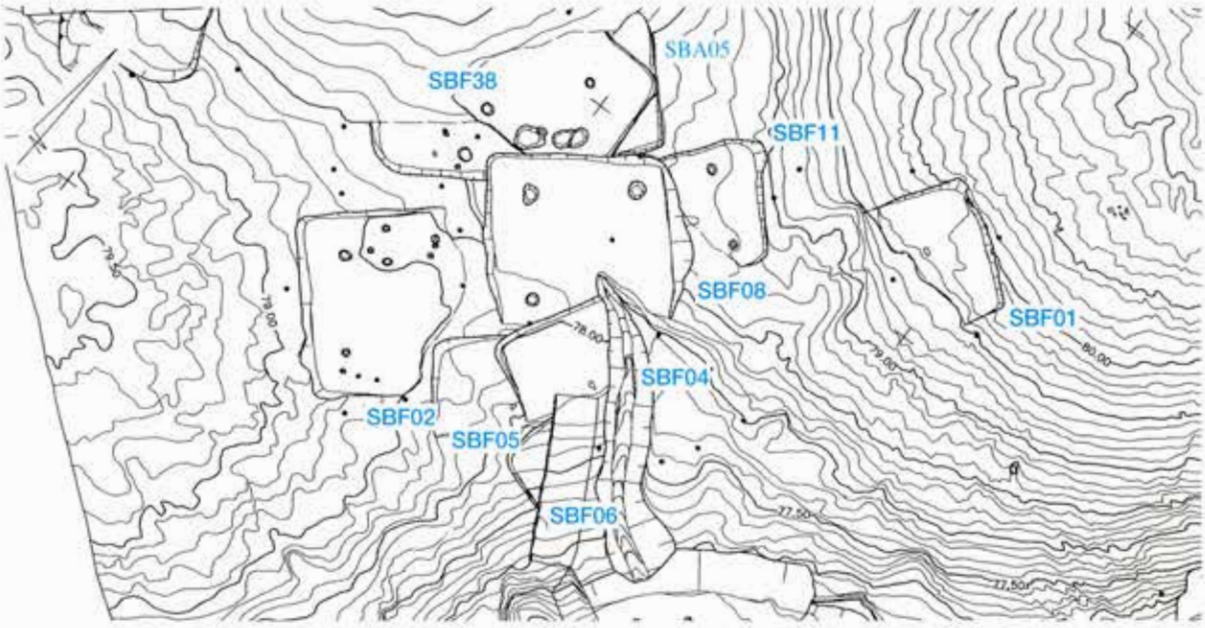


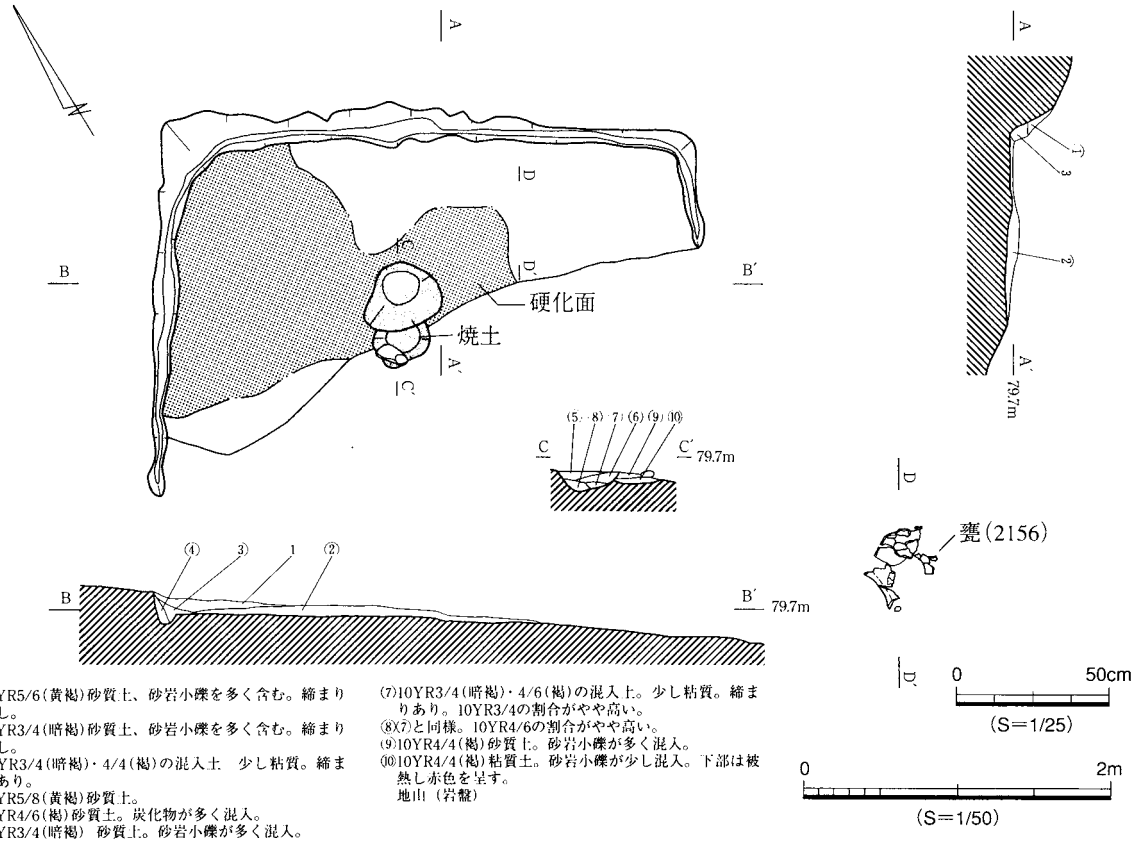
図113　SBF01・02・04・05・06・08・11・38周辺地形図（1/200）

東丘陵の東向き斜面、尾根の頂上部付近に立地する。切り合いはなく単独で存在する。幅3.50m・奥行き2.05m（現存長）の方形で、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。現在は崩落しているが、この土砂を谷側に盛って平らな床面を広げていたと考えられる。山側の壁には壁溝が巡っている。床面のほぼ中央部付近には、楕円形の川原石を置き、炭化物の混ざった混入土で埋まった２つの浅い土坑がある。これは全体に被熱しており、地床炉の痕跡と考えられる。また、北西方向には比較的混入の少ない砂質土が薄く平坦に締まっている。貼り床の一部が残ったものと考えられる。柱穴を確認することはできなかった。

遺物と所属時期（図115）

岩盤掘り込みの住居である上、床面の崩壊も多いため、遺物の出土は少ないが、このうちの３点を図示した。これらは、すべて床面の直上から出土しており、このうち2156の出土状況は図示した。2156は甕Ｈ類で、口縁部より大きく、丸く張った胴部を持ち、器壁は非常に薄く、胎土も細かい。また、口縁はやや外反し、く字状を呈しており、外面は横ハケ、内面は不定方向のケズリ調整を行っている。このような甕は深橋前遺跡や周辺の遺跡においては類例をみないものである。外面の横方向のハケ、内面のケズリ調整などから、螺旋状にタタキ調整を行う庄内甕に似せて作られたものの可能性が考えられる。（宇野隆夫氏のご教示による）。2157は壺Ｂ１類であるが、小片であり調整等は不明である。2158は器台で、中空部がやや太い。

なおこの竪穴住居跡は、器台はやや古い様相を示しているものの、壺Ｂ１類と薄甕の存在から、Ⅱ－３期の可能性を指摘したい。



(1)10YR5/6(黄褐)砂質土、砂岩小礫を多く含む。締まりなし。
(2)10YR3/4(暗褐)砂質土、砂岩小礫を多く含む。締まりなし。
(3)10YR3/4(暗褐)・4/4(褐)の混入土　少し粘質。締まりあり。
(4)10YR5/8(黄褐)砂質土。
(5)10YR4/6(褐)砂質土。炭化物が多く混入。
(6)10YR3/4(暗褐)　砂質土。砂岩小礫が多く混入。
(7)10YR3/4(暗褐)・4/6(褐)の混入土。少し粘質。締まりあり。10YR3/4の割合がやや高い。
(8)(7)と同様。10YR4/6の割合がやや高い。
(9)10YR4/4(褐)砂質土。砂岩小礫が多く混入。
(10)10YR4/4(褐)粘質土。砂岩小礫が少し混入。下部は被熱し赤色を呈す。
地山（岩盤）

図114　SBF01実測図

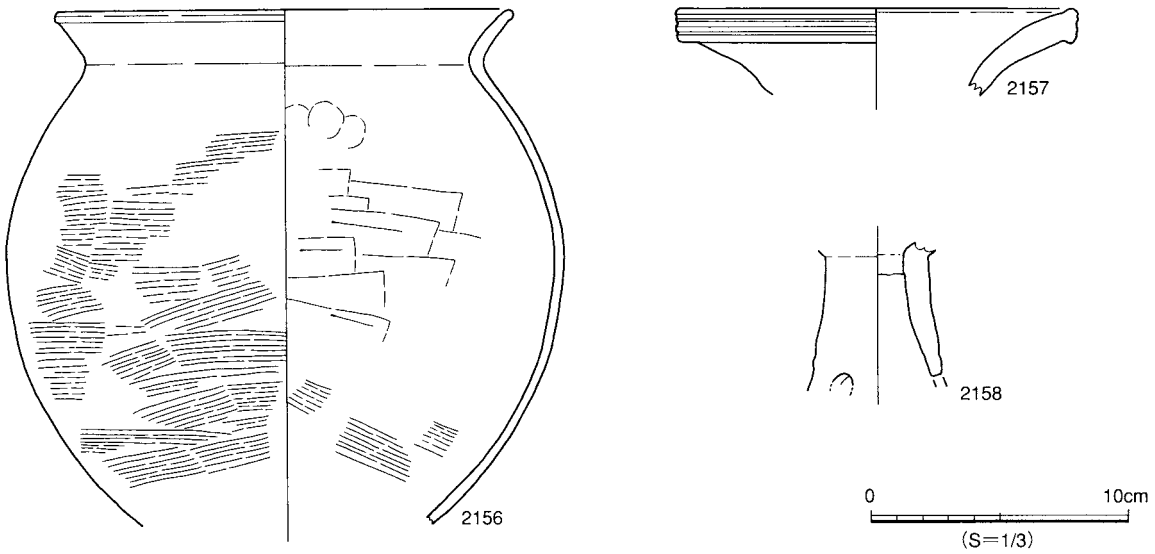
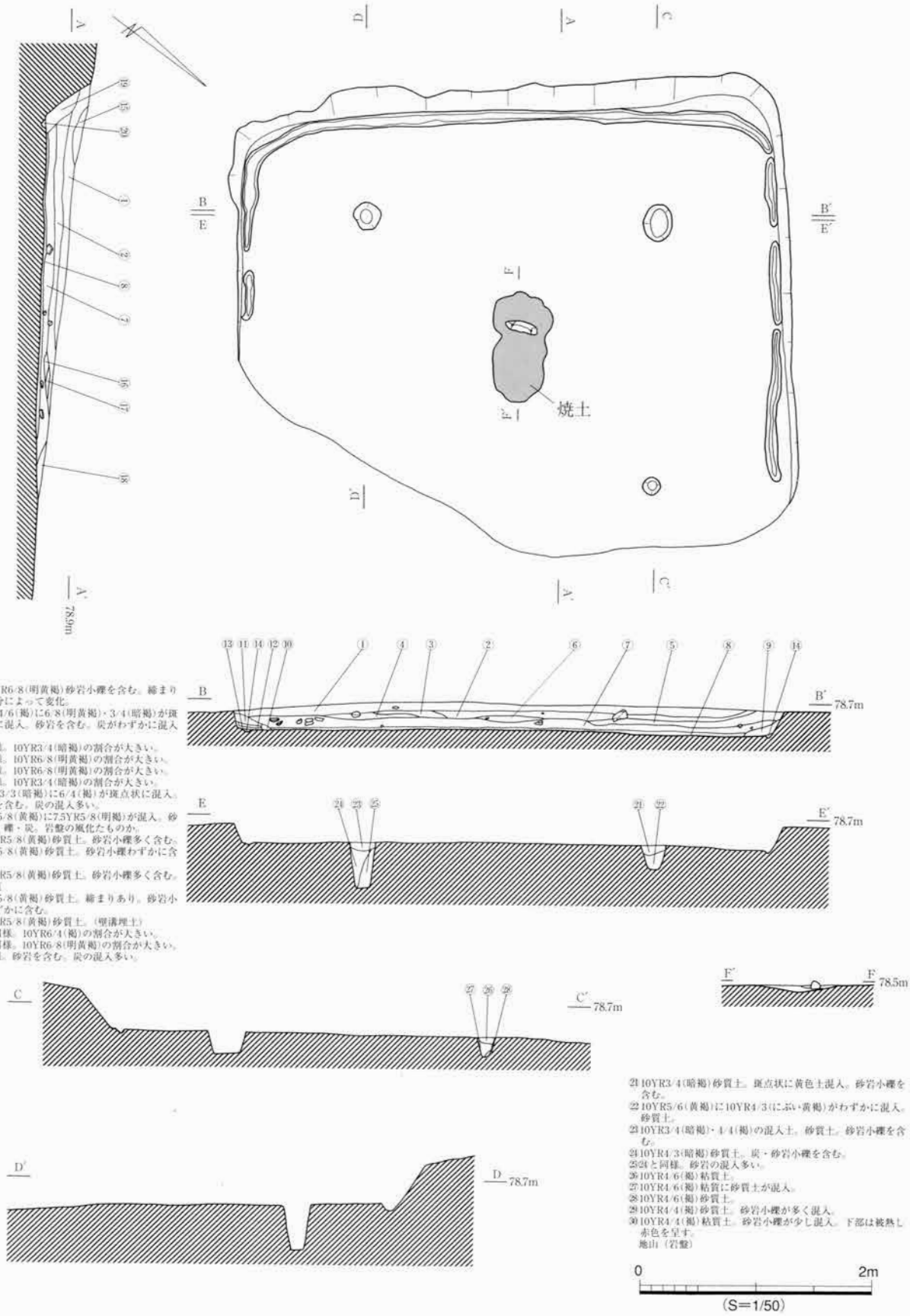


図115　SBF01出土遺物

ＳＢＦ02

遺構（図113，図116，図版11）24Ｌグリッド

東丘陵の尾根の頂上部付近の平坦地に立地する。切り合い関係はなく単独で存在する。幅4.73m・



①⑬10YR6/8(明黄褐)砂岩小礫を含む。締まりは部分によって変化。
②⑭10YR4/6(褐)に6/8(明黄褐)・3/4(暗褐)が斑点状に混入。砂岩を含む。炭がわずかに混入す。
③②同様。10YR3/4(暗褐)の割合が大きい。
④②同様。10YR6/8(明黄褐)の割合が大きい。
⑤②同様。10YR6/8(明黄褐)の割合が大きい。
⑥②同様。10YR3/4(暗褐)の割合が大きい。
⑦10YR3/3(暗褐)に6/4(褐)が斑点状に混入。砂岩を含む。炭の混入多い。
⑧10YR5/8(黄褐)に7.5YR5/8(明褐)が混入。砂質土。礫・炭。岩盤の風化たものか。
⑨⑲10YR5/8(黄褐)砂質土。砂岩小礫多く含む。
⑩10YR5/8(黄褐)砂質土。砂岩小礫わずかに含む。
⑪⑲10YR5/8(黄褐)砂質土。砂岩小礫多く含む。
⑫植生痕
⑬10YR5/8(黄褐)砂質土。締まりあり。砂岩小礫わずかに含む。
⑭⑳10YR5/8(黄褐)砂質土。(壁溝埋土)
⑮②と同様。10YR6/4(褐)の割合が大きい。
⑯②と同様。10YR6/8(明黄褐)の割合が大きい。
⑰②と同様。10YR6/8(明黄褐)の割合が大きい。
⑱①同様。砂岩を含む。炭の混入多い。

㉑10YR3/4(暗褐)砂質土。斑点状に黄色土混入。砂岩小礫を含む。
㉒10YR5/6(黄褐)に10YR4/3(にぶい黄褐)がわずかに混入。砂質土。
㉓10YR3/4(暗褐)・4/4(褐)の混入土。砂質土。砂岩小礫を含む。
㉔10YR4/3(暗褐)砂質土。炭・砂岩小礫を含む。
㉕㉔と同様。砂岩の混入多い。
㉖10YR4/6(褐)粘質土。
㉗10YR4/6(褐)粘質に砂質土が混入。
㉘10YR4/6(褐)砂質土。
㉙10YR4/4(褐)砂質土。砂岩小礫が多く混入。
㉚10YR4/4(褐)粘質土。砂岩小礫が少し混入。下部は被熱し赤色を呈す。
地山(岩盤)

図116　SBF02実測図

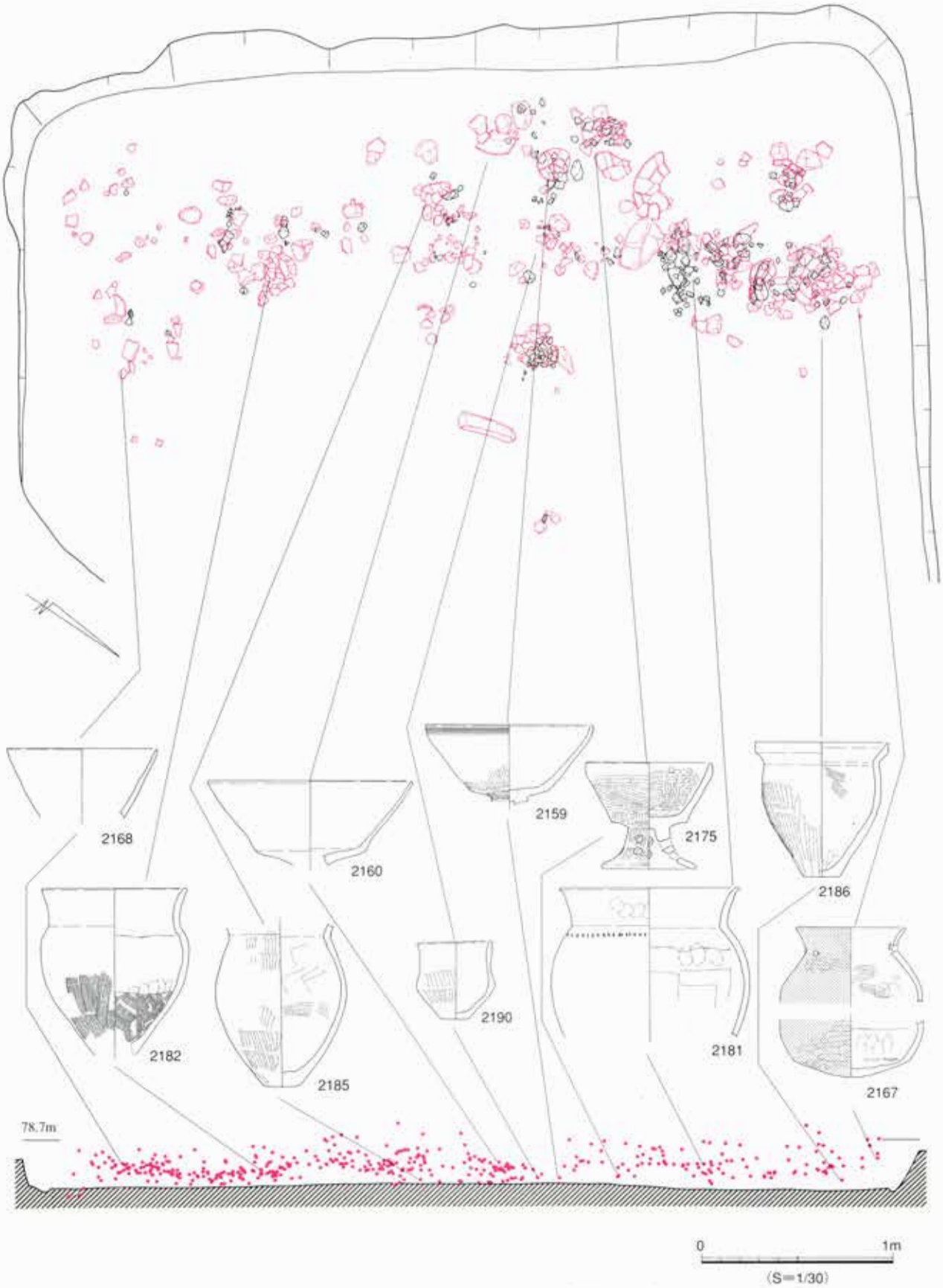


図117　SBF02遺物出土状況図（遺物は1/6）

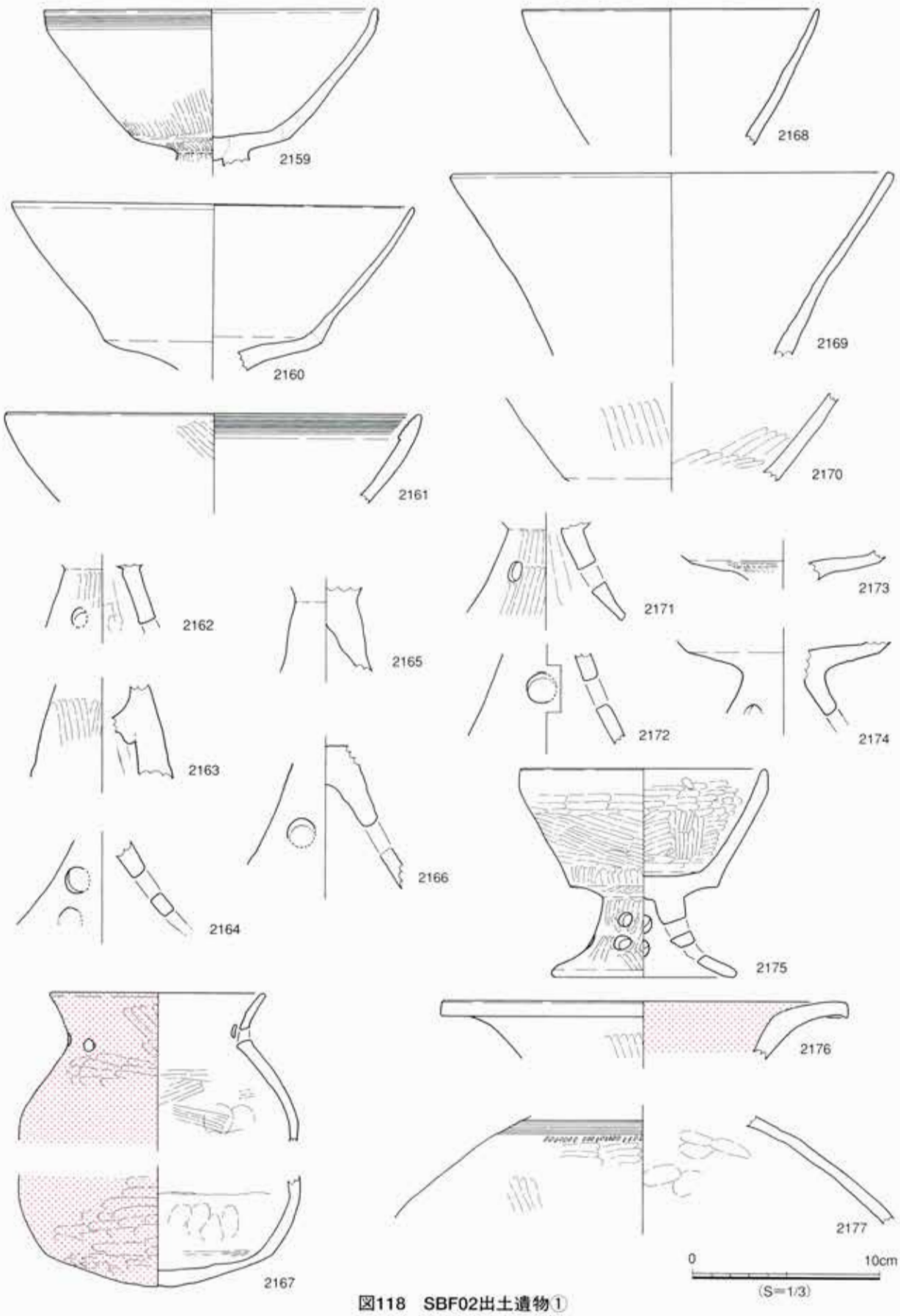


図118　SBF02出土遺物①

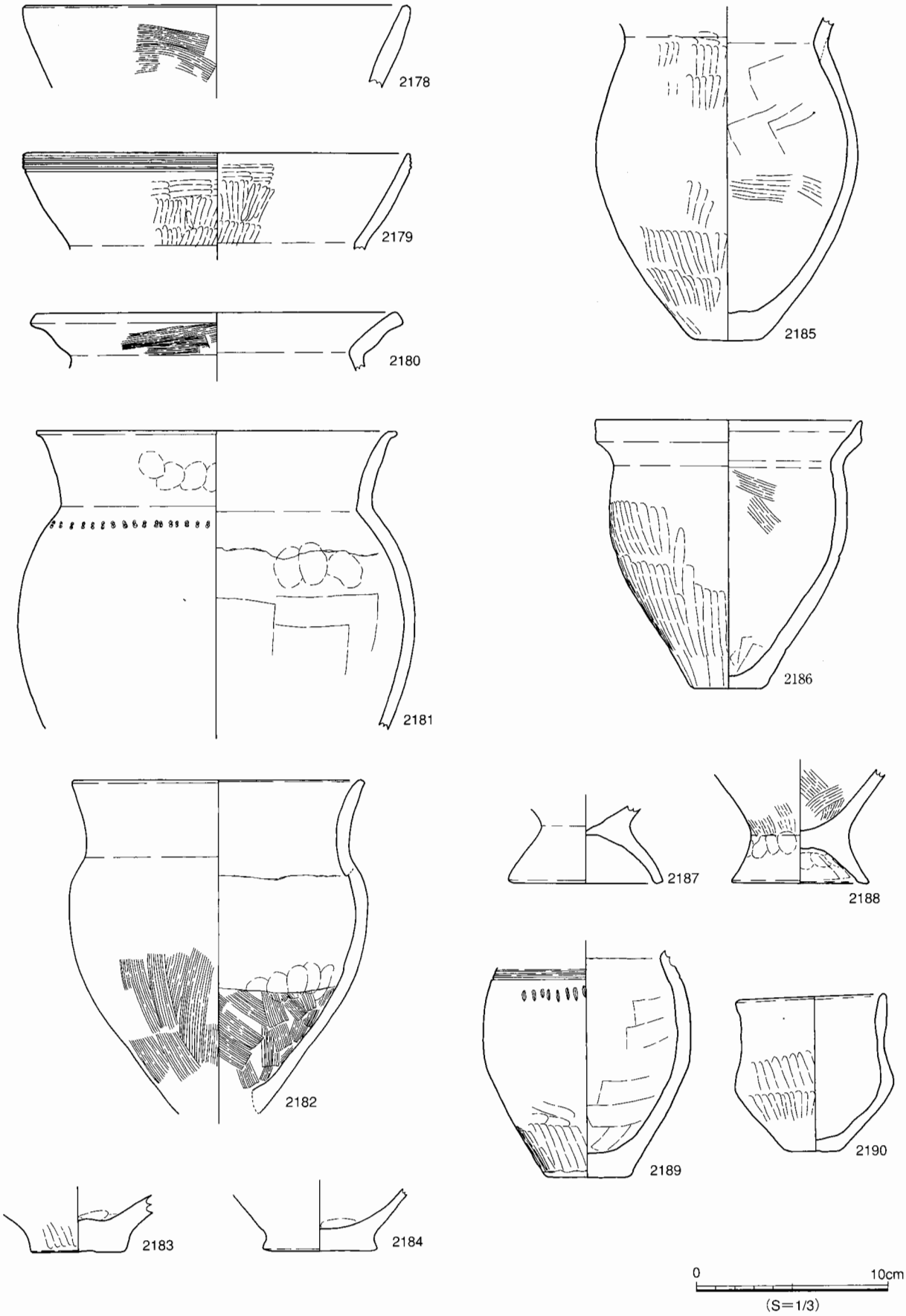


図119　SBF02出土遺物②

奥行き3.88m（現存長）の方形で、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。柱穴と縦横の比率から、床面はほぼ残っているものと考えられる。山側の壁には壁溝が巡っている。床面のほぼ中央部付近には、楕円形の石を置き、炭化物の混ざった混入土で埋まった２つの浅い土坑があり、全体に被熱している。地床炉の痕跡と考えられるが、深橋前遺跡で唯一、炉石と考えられる楕円形の石に、川原石ではなく山石の礫を使っている。また、比較的深くしっかりとした３基の柱穴を確認することができた。この住居跡からは、接合後の点数で831点にも及ぶ遺物が出土しているが、床面の直上や最下層（セクション⑧）から出土した遺物は少なく、その多くは住居跡廃絶後に投げ入れられたものと考えられる。この竪穴住居跡が、土器捨て場であったためか、何らかの祭祀的な場であったためかははっきりしない。しかし、周辺に銅鏃を出土したＳＢＡ05、筒状銅製品を出土したＳＢＦ08がある。またこの竪穴住居跡から出土した土器のなかには、搬入品やこれを様した土器の出土が多いことなどを考え合せると、この付近の平坦地がⅡ－３～４期に集落のセンター的な場所であった可能性は高いのではなかろうか。

遺物と所属時期（図118，119）

床面の残存状況が良かったため、出土遺物は質・量ともに良好で、このうちの32点の土器を図示した。2159は高坏Ｂ類で、坏部はやや浅く、内彎は弱い。口縁部外面に横線を入れ、段部から上部は上から下に、下部は下から上にタテ方向のミガキを施している。2160も高坏Ｂ類で、2159と同様であるが、少し大きめで外面の口縁部に横線を入れない。2161は高坏Ｃ類で、内彎傾向が強く、口縁部内面におそらくは折り返して肥厚させたと考えられる短い段の上に、６条の多条沈線が入れられている。2168は高坏Ｃ類でやや内彎傾向を持つもの。2169も同じく高坏Ｃ類であるが、内彎傾向は持たず、逆にやや外反気味に開いている。どちらも摩耗が激しく調整はわからない。2170は小片であるが高坏Ｃ類の可能性が高い。2175は高坏Ｄ類でほぼ完形である。内外面共にミガキ調整を施しているが、ほかの高坏と比較してヨコ方向が多く、粗く短い。また、高坏であるのにも関わらず、坏部には煤が附着する。2162から2166は、高坏脚部のうちやや古いと考えられるもの、2171・2172は、高坏脚部のうちやや新しいと考えられるもの、2173・2174は高坏脚部のうち高坏Ｄ類と考えられるものである。2167は外面全体が赤彩された壺で、口縁部は甕Ｇ類のように短く外反する。頸部には２孔一組の穿孔が対角線上に２組みられ、壺蓋をしばるための穿孔と考えられる。外面はミガキ・内面はハケ調整で、口縁部から胴部と、胴部から底部は、ややいびつで接点はないけれども、胎土・調整・赤彩の状況から同一の個体と考えられる。2176は壺Ａ１類で、内面の赤彩しか確認できない。2177は広口壺の胴部である。2178は甕Ｈ類の口縁でヨコ方向のハケ調整を施しており、2179は鉢Ｂ類で口縁部には４条の横線を入れ、甕Ｃ類の可能性もあるが、口縁部にミガキを施していることから鉢に分類した。2180は甕Ｇ類で、口縁部外面にヨコ方向のハケ調整を施している。2181は甕Ｄ類で、口縁部はナデ調整であるが、指押圧痕を消しきれておらず、胴部には横線を入れずに、頸部ぎりぎりの位置に２個一単位の竹管状の工具を用いて列点文を施している。2182は甕Ａ２類で、頸部のくびれは緩やかで、赤褐色の胎土を持ち、底部は欠損しているものの擬口縁の工法を用いている。条痕調整はみられないが、外面の底部から胴部にかけてタテ方向のハケ調整を施している。内面は胴部下部の指押圧痕付近で接合したものらしく、ここから下部はハケ調整、上はナデ調整を行っている。2183は壺底部、2184は甕底部である。2185は小型の甕であり、口縁部は欠損している。胴部から底部にかけてやや膨らみを持ち、甕

であるのにも関わらず、外面にはタテ方向のミガキが施されている。2186は甕G２類で、これも外面にタテ方向のミガキが施されている。口縁部は短く外反し外面に段を持つことから、近江の影響を受けている可能性がある。2189もミガキの施された小型の甕で、2185のプロポーションに類似している。しかし、胴部の文様は横線と列点文であり、この地域の土器と融合した様子が窺える。2187・2188は台付甕の底部である。2190は小型の壺であるが、胴部にミガキが残されている。

なお、この竪穴住居跡の所属時期は、高坏B類とC類の両方がみられ、条痕系の影響も残すことからⅢ－３期の可能性が高い。ただし、高坏については内彎志向を持つ坏部と外反志向を持つ坏部の両者がみられるため、内彎志向に一掃されたとみられる外反志向が、深橋前遺跡のⅢ－３期に至っても強く残ることを前提としての位置づけとしておきたい。

ＳＢＦ04

遺構（地形図113，図120，図版12）25Ｌグリッド

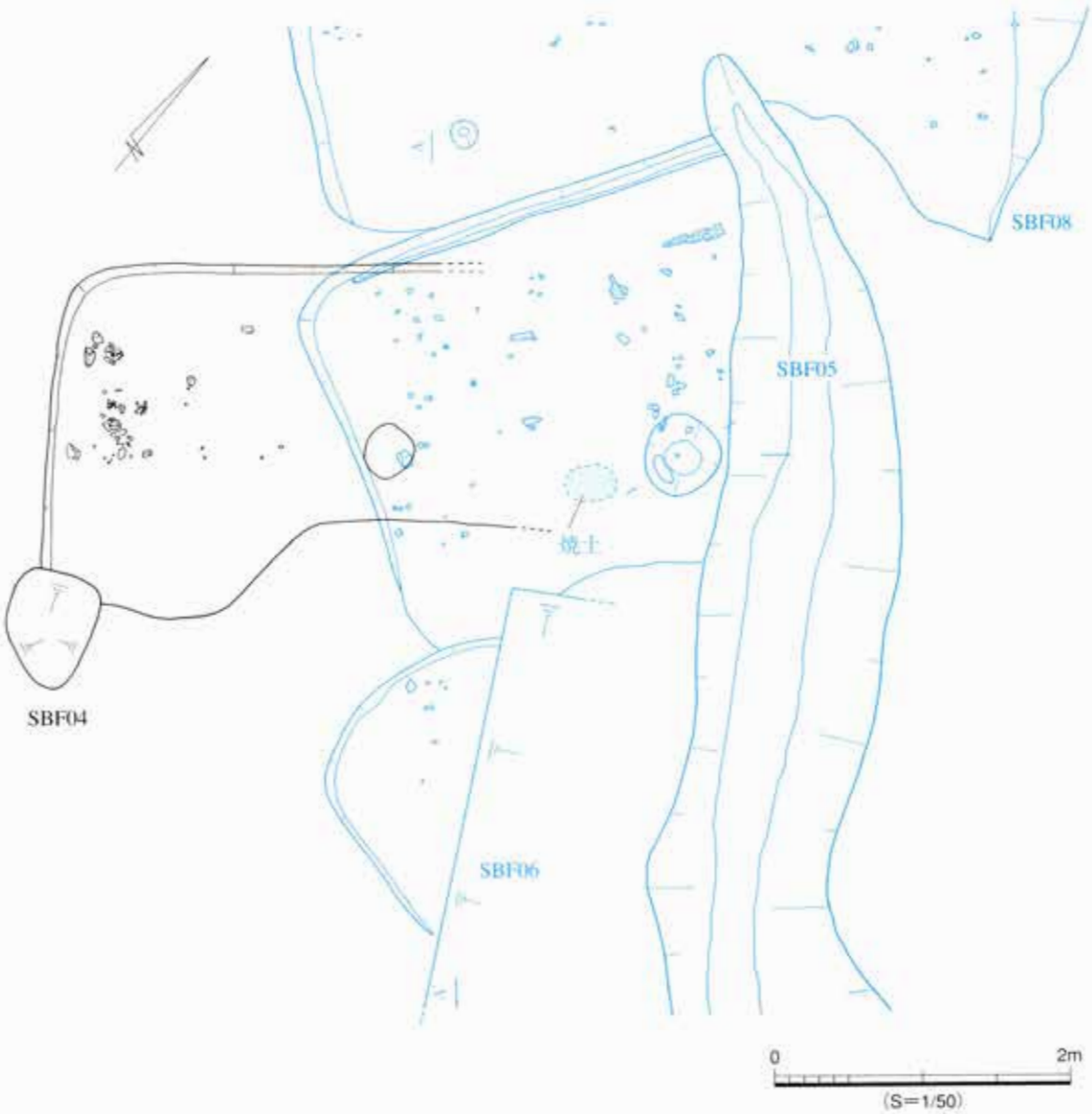


図120　SBF04実測図

西丘陵の東向斜面の尾根頂部から少し下ったほぼ平坦地に立地する。幅4.20m・奥行き1.25m（現存長）の方形と考えられ、黄褐色の岩盤とＳＢＦ05の埋土に床面を造っている。床面の谷側に焼土の範囲が残っており、地床炉と考えられる。柱穴・壁溝・貼り床は確認できなかった。ＳＢＦ05の埋土上に床面を造っていることから、これよりは新しいものと考えられる。

遺物と所属時期（図121）

出土遺物は、床面の直上のものが多く、量的にも比較的多かったが、ほとんどが小片で、図示し得たのは、１点のみである。2191は高坏の脚部であり、内彎傾向は持つものの大きく開いている。外面はタテ方向・内面はヨコ方向のミガキが施されている。高坏Ｄ類もしくはＥ類と考えられる。

なお、この竪穴住居跡の所属時期は、内彎傾向を持つ高坏が図示した遺物以外にも何点か出土しているほか、脚部が大きく開いた高坏Ｄ類もしくはＥ類が出土していることからⅡ－４期の可能性が高い。

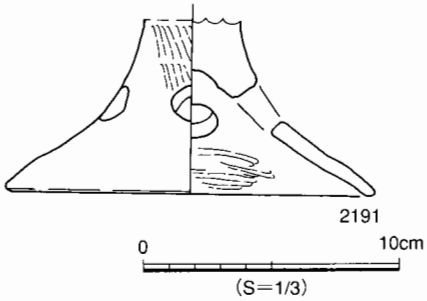


図121　SBF04出土遺物

ＳＢＦ05

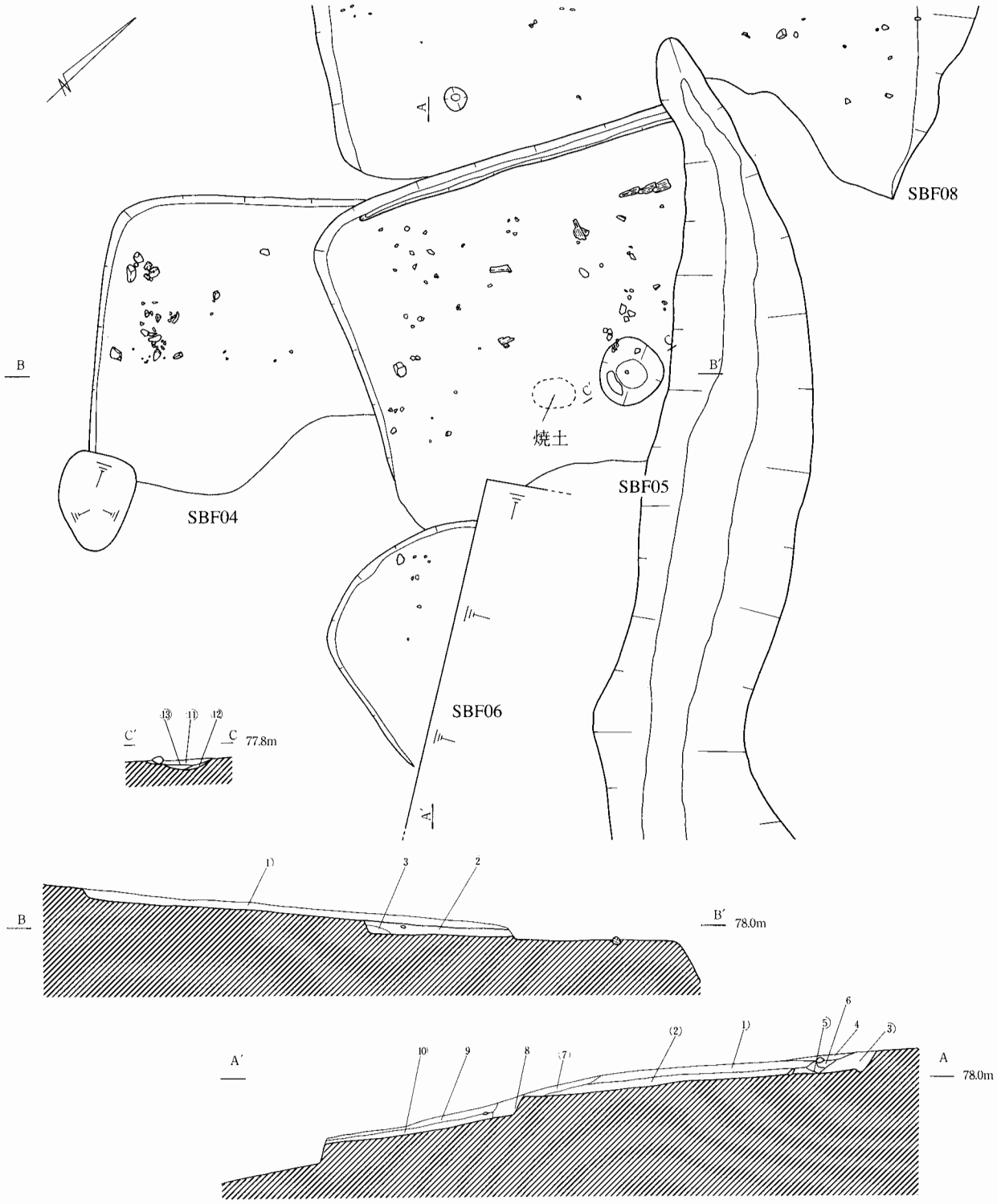
遺構（地形図113，図122，図版12）25Ｌグリッド

ＳＢＥ08の谷側を切り、ＳＢＦ06に谷側を切られている。また、北東側は自然流路によって削られ、上層の一部にはＳＢＦ04床面が造られている。幅2.60m・奥行き2.65m（共に現存長）の方形と考えられる。床面中央部と考えられる場所に、赤く焼き締まった部分と、川原石の炉石を伴った土坑があり、地床炉とそれに関連する焼土と考えられる。柱穴は確認できなかったが、山側には浅いながらも壁溝が確認できた。床面の直上から炭化材が数点確認できたが、焼失家屋と考えられるほどではなく、燃料材の燃え残りが散乱したものであろう。後述するが、この竪穴住居跡に切られるＳＢＦ08はＳＢＦ11を切っていることから、ＳＢＦ11・08・05・06の順に造られ、ＳＢＦ04はこれらより新しいものと考えられる。

遺物と所属時期（図123）

出土遺物は、床面の直上のものが多く、量的にも比較的多かったが、ほとんどが小片で、図示し得たのは、４点のみである。2192は器台の脚部であり、柱状部は太いものの器部は非常に小さい。外面は細かくミガキが施され、口縁部には面を持ち、１条の横線が入れられている。2193は甕Ｇ２類の口縁部で、わずかな段を持ち、段の下部には棒状工具により列点文が入れられている。2194も甕Ｇ２類の口縁部で、わずかな段を持ち、ナナメ方向のハケ調整が施されている。2195は鉢Ｂ類で、口縁部にはわずかな段を持ち、胴部の最大径はかなり下方に下がっている。摩耗のため全体的に調整は不明である。

なお、この竪穴住居跡の所属時期は、全体的に遺物が小片であり、また、実測し得た遺物も時期判定に結びつくものが少なかった。そのため確証に欠ける点もあるものの、鉢の最大径がかなり下がっているなどの様相から、Ⅱ－４期のＳＢＦ04下層竪穴住居跡であることを考え合せても、これとの時期差はそれほどないものと考えて、Ⅱ－３期としておきたい。



(1)10YR5/6(黄褐)砂岩混入。
(2)7.5YR4/6(褐)砂質と粘質の混入土。砂岩小礫含まず。
(3)7.5YR4/6(褐)にかなり多くの黒色土混入。砂質土。
(4)10YR4/6(褐)に3/4(暗褐)が斑点状に混入。粘質土。砂岩礫締りあり。
(5)10YR4/6(褐)に3/4(暗褐)が斑点状に混入。質が強い。砂岩小礫ややり。
(6)7.5YR4/6(褐)砂質土。砂岩小礫を少し含む。
(7)7.5YR4/6(褐)砂質と粘質の混入土。
(8)10YR6/8(明黄褐)砂質土。締りなし。
(9)10YR3/4(暗褐)砂質土。締りなし。砂岩の混入わずか。
(10)10YR4/6(褐)粘質土。締りあり。砂岩の混入なし。
(11)7.5YR3/4(暗褐)・4/6(褐)などの混入土。
地山　岩盤

図122　SBF05・06実測図

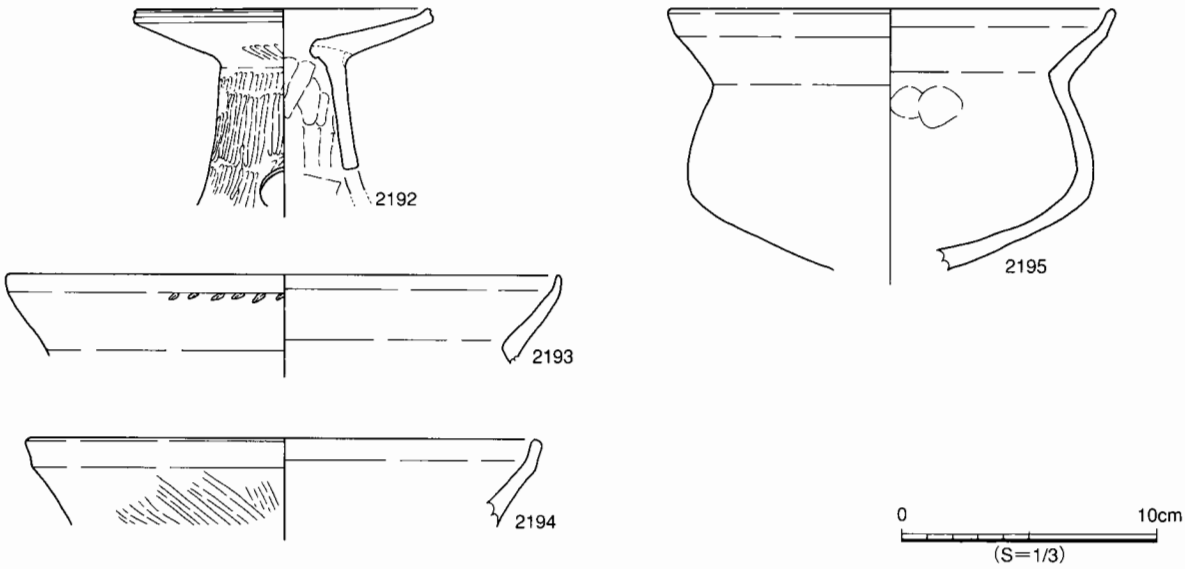


図123　SBF05出土遺物

ＳＢＦ06

遺構（地形図113，図122，図版12）25Ｌグリッド

ＳＢＦ05を切っているが、谷側のほとんどを試掘トレンチに切られている。幅1.80m・奥行き0.20m（共に現存長）の方形と考えられる。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期

床面がほとんど残っておらず、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、切り合いからⅡ期の範疇と考え、ＳＢＦ05よりは新しいものと考えられる。

ＳＢＦ08

遺構（地形図113，図124，図版13）24Ｋグリッド

東丘陵の尾根頂上部付近の平坦地に立地する。ＳＢＡ05・ＳＢＦ11を切り、ＳＢＦ05に切られる。幅.4.85m・奥行き4.50m（現存長）の方形で、黄褐色の粘質土を掘って床面をつくっている。谷側の床面は崩壊しているが、南側のコーナーがわずかに残っていることから、ほぼ正方形のプランを呈していたものと考えられる。立地の制約からか、深橋前遺跡内の竪穴住居跡は小規模なものが多いが、これは、ＳＢＦ02と共に最も規模の大きなもののうちに属する。北側コーナー付近には一部壁溝が残されていた。４基のピットが確認できたが、このうち中央付近の１基以外は、位置的にみて柱穴と考えられる。地床炉は確認できなかった。貼り床の痕跡は無かったものの、床面は硬く締まり、この直上から後述する筒状銅製品などが出土している。

遺物と所属時期（図125）

埋土の状況や床面の残存状況は比較的良好であり、図示した遺物はいずれも床面の直上から出土したものである。筒状銅製品１点を含む、７点の遺物を図示した。7002はいわゆる筒状銅製品である。西側のコーナー付近の床面の直上から横になった状態で出土した。ほぼ完形であるが、青銅の状況は

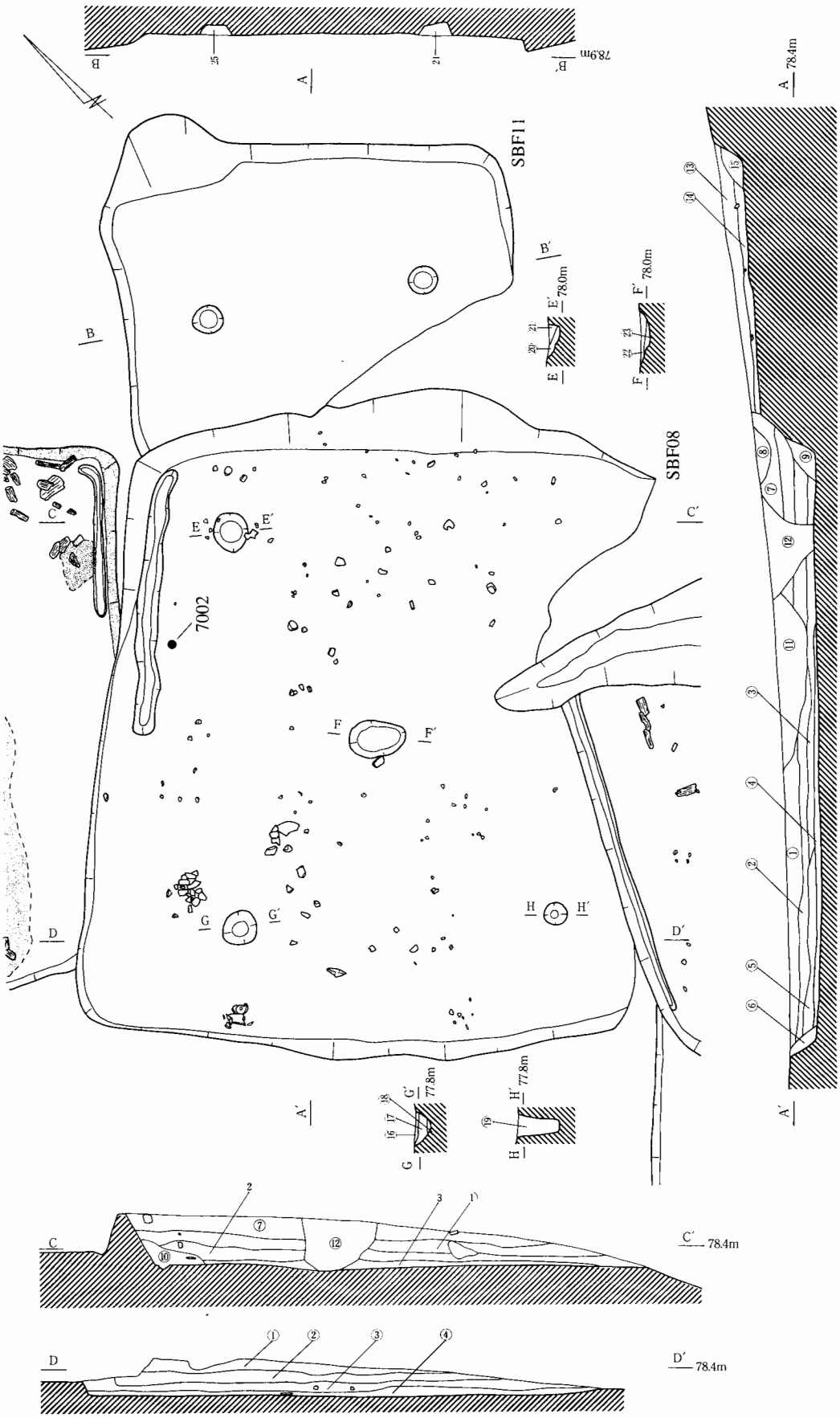


図124　SBF08・11実測図

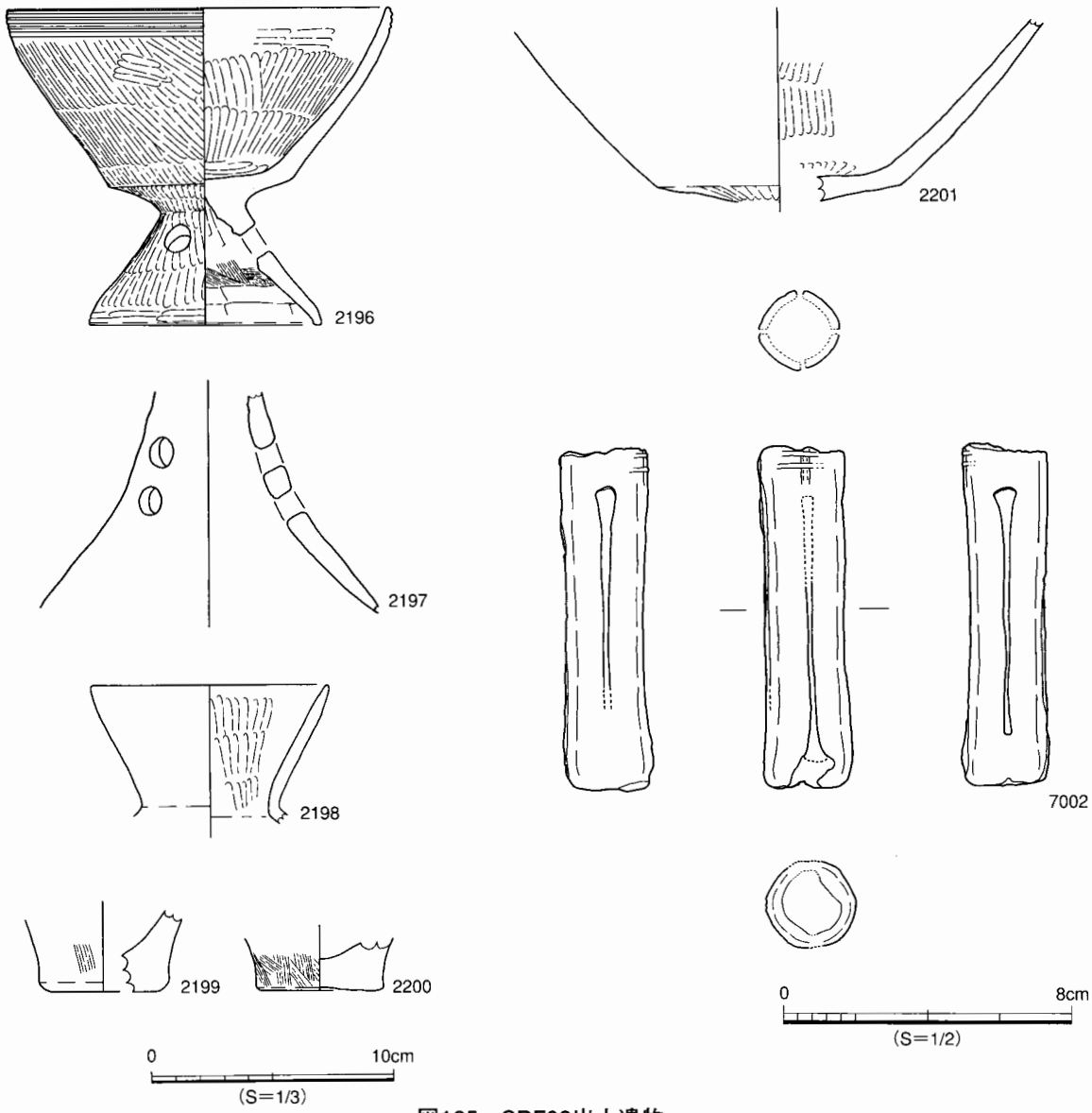


図125　SBF08出土遺物

極めて悪い。これについては、第７章第２節において詳述する。2196は高坏Ｃ類であり、非常に小型で脚部も低いが、大型のいわゆる有段高坏の体裁を整えている。坏部は若干厚めであるが、坏部・脚部共に内彎傾向を持っている。また、口縁部外面には４条の横線を入れ、内面共にタテ方向のミガキを施している。2197は高坏の脚部で、端部も欠損しているが、多少内彎傾向を持つことから高坏Ｃ類の可能性が高い。2201も高坏Ｃ類であり、口縁端部も欠損してはいるが、坏部の開き具合からそれほど深くはならないものと考えられる。長頸壺と考えられる2198は壺Ｃ類であり、2199は甕の底部であるが、いずれも小片で全体のプロポーションは不明である2200は甕の底部であり、胎土と底部のつくりから甕Ａ２類の可能性が高い。

なお、この竪穴住居の所属時期は、比較的浅い高坏Ｃ類や脚部の低いものが存在することから、Ⅲ－４期の可能性が高い。しかし前述したが、これを切るＳＢＦ05、さらにこれを切るＳＢＦ06ともそれほどの時期差は無いものと考えられる。

ＳＢＦ11

遺構（地形図113，図124，図版12）25Ｊグリッド

西側のコーナーをＳＢＦ08に切られている。幅3.15m・奥行き2.05m（現存長）の方形と考えられ、黄褐色の粘質土と岩盤の境界付近に立地する。浅いながらも２基の柱穴が確認できた。壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。床面がＳＢＦ08に切られている付近に、コーナーと考えられる若干の丸みもあるが、ここをコーナーとする正方形のプランでは、柱穴の位置が不自然であり、長方形のプランを呈する可能性もある。

遺物と所属時期（図126）

出土遺物が多かったわりにはほとんどが小片で、図示し得たのは３点のみである。2202は甕Ｇ２類で、口縁部に３条の横線を、頸部に１条の細い沈線を入れる。2203は壺の底部、2204は平底甕の底部と考えられる。

なおこの竪穴住居跡の所属時期は、小片が多いために確証に欠けるが、切り合いからＳＢＦ08よりは古いと考えられるものの、図示しえなかった遺物の観察などから、Ⅱ期の範疇としておきたい。

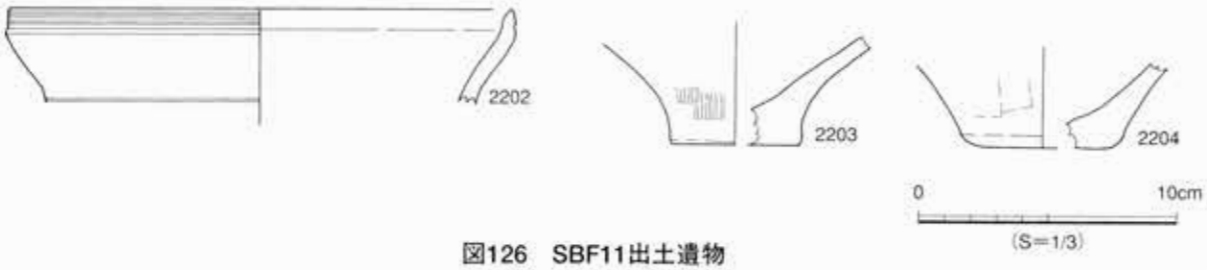


図126　SBF11出土遺物

ＳＢＦ13

遺構（地形図127，図128，図版14）26Ｌグリッド

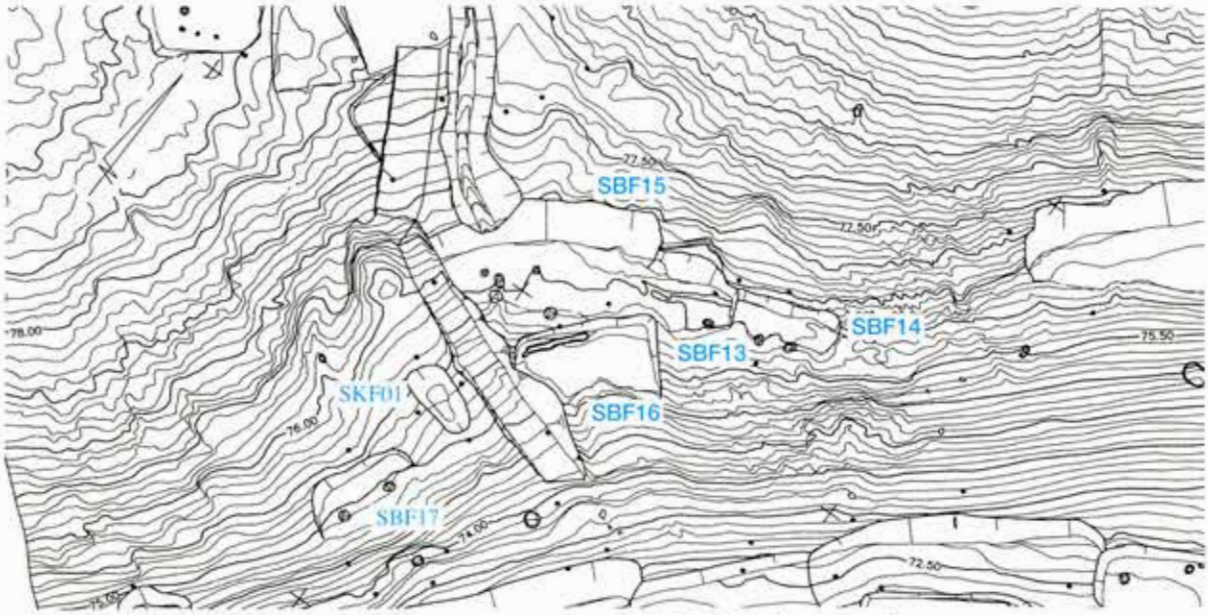


図127　SBF13・14・15・16周辺地形図（S=1/200）

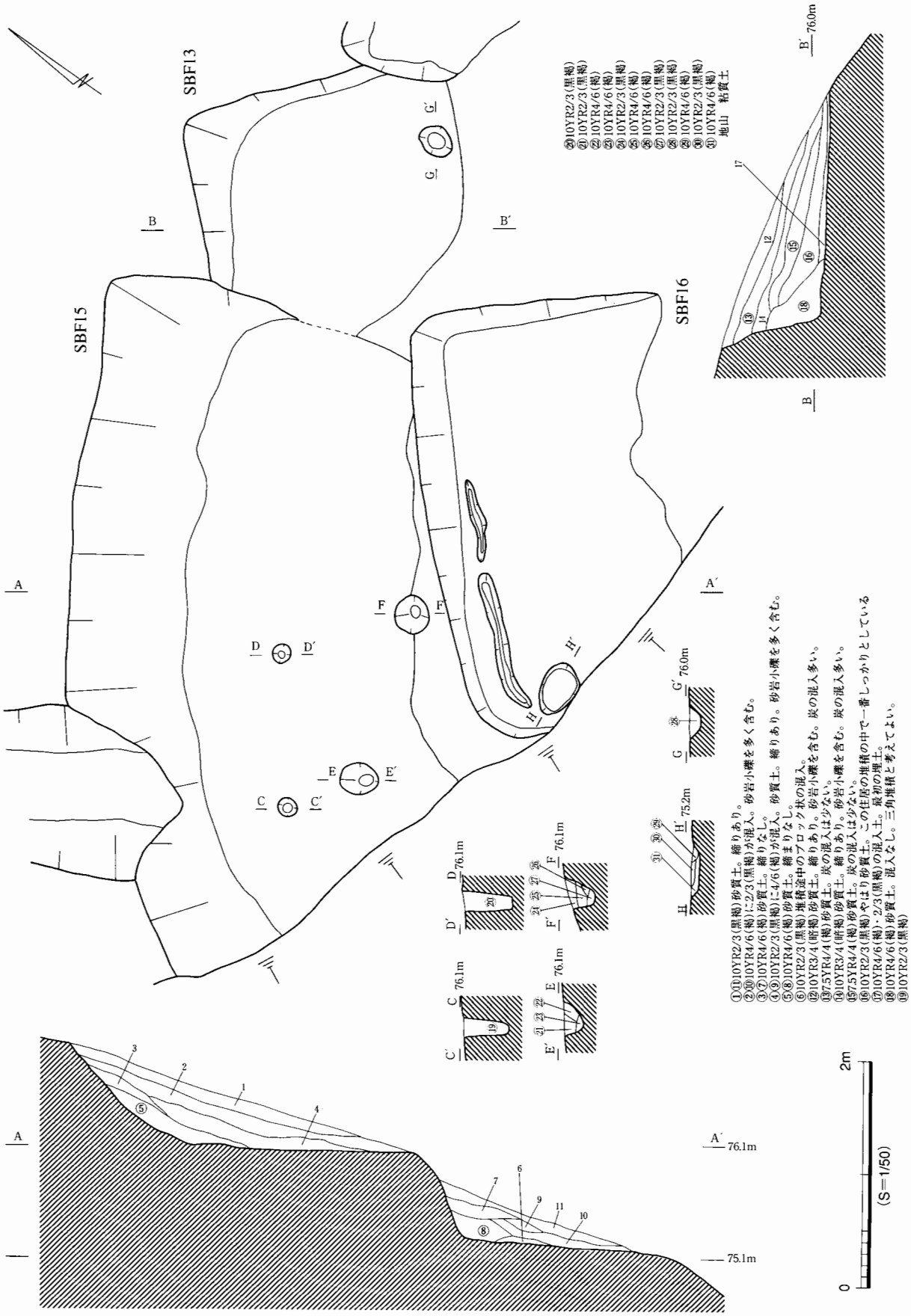


図128　SBF13・15・16実測図

東丘陵の東向き斜面中腹の急傾斜地に立地する。ＳＢＦ15・14に切られ、床面はわずかしか残っていない。幅2.20m・奥行き2.05m（共に現存長）の方形で、砂岩の岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。１基のピットが確認できたが、浅いもので、柱穴とは断定できない。地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

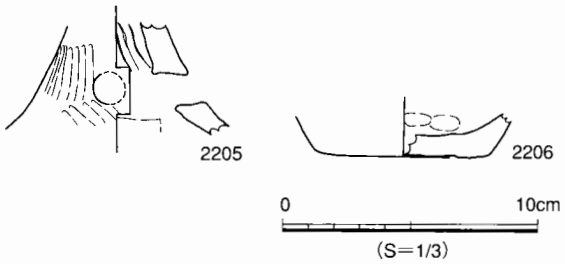


図129　SBF13出土遺物

遺物と所属時期（図129）

遺物の出土は比較的多かったが、小片が多く、図示し得たのは２点のみである。2205は高坏の脚部であるが、小片のために全体のプロポーションは不明である。高坏Ｄ類の可能性も窺える。2206は平底甕の底部である。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多く、所属時期を限定するには至らなかったがⅡ期の範疇としておきたい。

ＳＢＦ15

遺構（地形図127，図128，図版14）27Ｌグリッド

ＳＢＦ13を切り、谷側の床面をＳＢＦ16に切られている。幅5.30m・奥行き2.08m（共に現存長）の方形と考えられ、黄褐色の岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っている。４基の柱穴と考えられるピットが確認できたが位置的には多少疑問が残る。壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。比較的大きな竪穴住居跡であるが山側の竪穴の立ち上がりがはっきりせず、ＳＢＦ16の山側周溝である可能性も捨てきれない。

遺物と所属時期（図130）

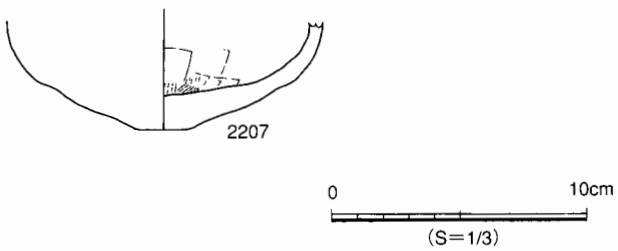


図130　SBF15出土遺物

遺物の出土は比較的多かったが、細片が多く、図示し得たのは１点のみである。2207は壺の底部であり、壺Ｃ類の可能性はあるが、胴部より上は残っておらず、不明としておきたい。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多く、所属時期を限定するには至らなかったがⅡ期の範疇としておきたい。

ＳＢＦ16

遺構（地形図127，図128，図版14）27Ｍグリッド

ＳＢＦ15の谷側を切っている。幅3.52m・奥行き1.95m（現存長）の方形と考えられ、黄褐色の岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っている。非常に小規模な竪穴住居跡であるが、断続的ながらも山側にはしっかりとした壁溝が巡る。１基のピットが確認できたが位置的に問題があり柱穴ではない可能

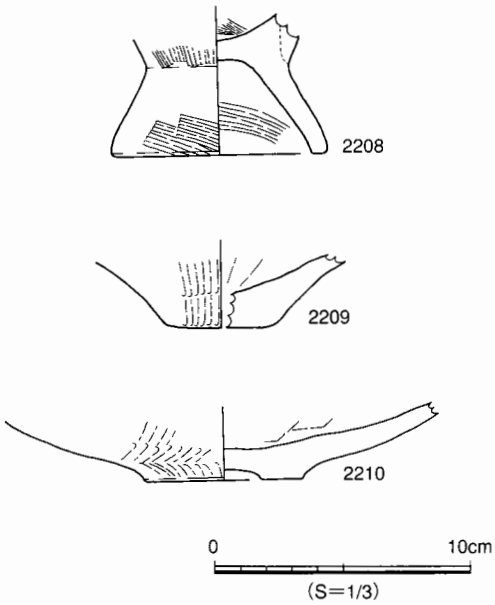


図131　SBF16出土遺物

性のほうが高い。床面のところどころに焼土がみられたが図示するほどの広がりは見せなかった。地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図131）

遺物は小片が多く、図示し得たのは３点のみである。2208は台付甕の底部であり、内外面にハケ調整を施している。2209・2210は壺の底部であり、共に外面はミガキを施し、内面は板ナデ調整を施している。

なお、この竪穴住居跡から出土した遺物は小片が多く、所属時期を限定するには至らなかったが、Ⅱ期の範疇としておきたい。また、切り合いからＳＢＦ13・15・16の順に造られたと考えられる。また後述するＳＢＦ14もＳＢＦ13よりは新しいが、ＳＢＦ15・16との時期関係は不明である。

ＳＢＦ14

遺構（地形図127，図132，図版14）28Ｌグリッド

ＳＢＦ13の東側を切っている。幅2.55m・奥行き1.20m（現存長）の方形と考えられ、黄褐色の岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っている。非常に小規模な住居跡であるが、２基のピットが確認できた。多少中央に接近しているものの、掘形はしっかりしており、柱穴と考えたい。壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

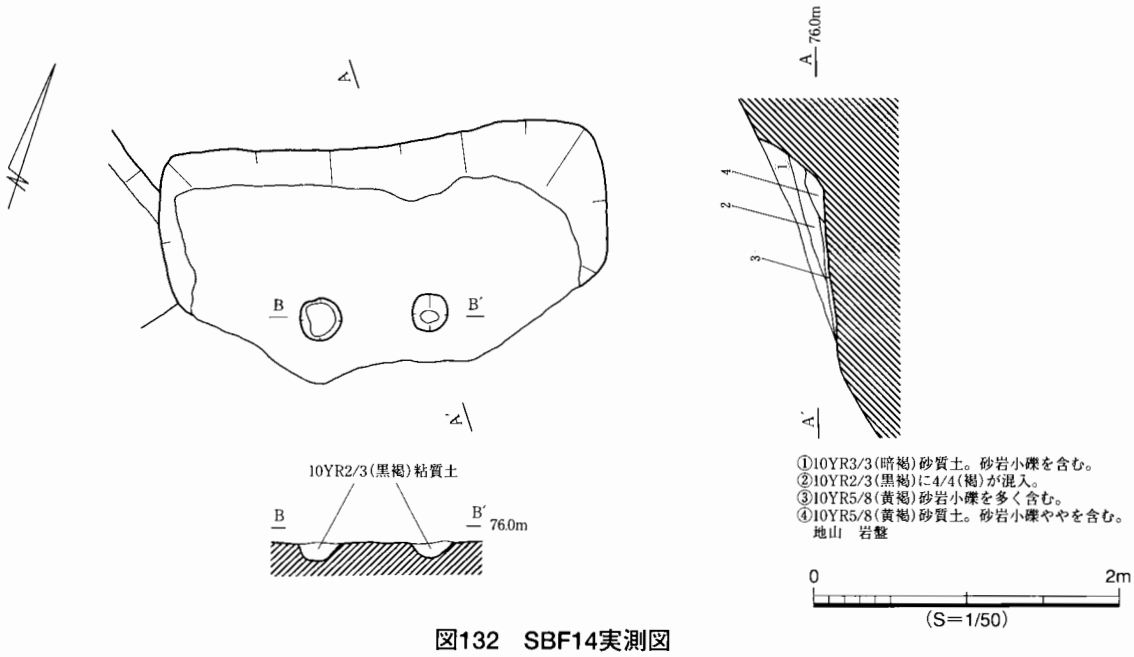


図132　SBF14実測図

遺物と所属時期（図133）

出土遺物は非常に少なく、図示し得たのは、１点のみである。2211は甕Ｂ類で、口縁部に２条の横

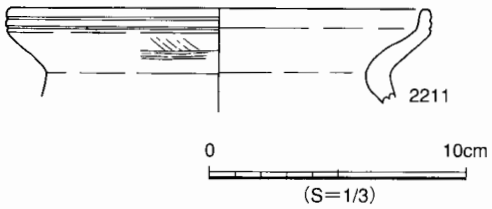


図133　SBF14出土遺物

線を入れ、その下方にナナメ・タテ方向のハケ調整の痕跡を残している。

なおこの竪穴住居跡の所属時期は、遺物が少なかったもののＳＢＦ13を切っていることから、この竪穴住居跡よりは新しいものと考えるが、Ⅱ期の範疇としておくにとどめたい。

ＳＢＦ17

遺構（地形図135，図134，図版14）26Ｎグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部の急斜面に立地する。切り合い関係はなく単独で存在する。幅2.95ｍ・奥行き1.23ｍ（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。床面は大きく崩壊するが、２基の柱穴が存在する。壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

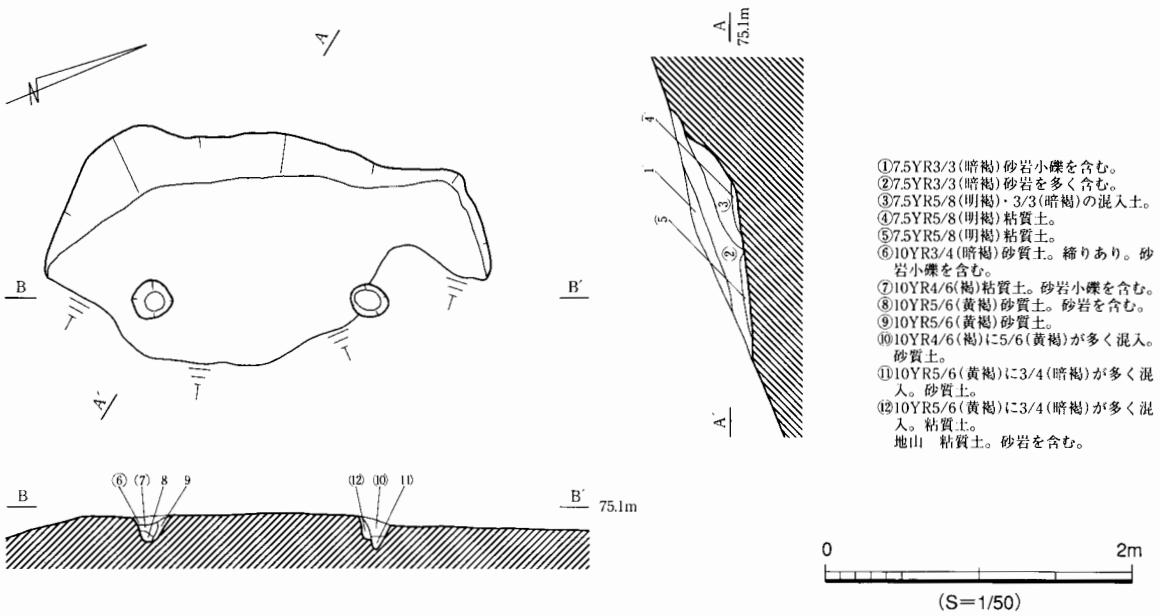


図134　SBF17実測図

遺物と所属時期

出土遺物は比較的多かったが、小片が多く、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

ＳＢＦ18

遺構（図136，図版14）27Ｏグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部より少し下った急斜面に立地する。北西の肩をＳＢＦ31に切られている。幅3.13ｍ・奥行き0.95ｍ（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。床面は大きく崩壊し、また層位もつかみにくく、堆積の状況も判然としない。しかし、しっかりとした２基の柱穴が存在することから、住居跡と判断した。壁溝・地床炉・貼り床は確認できな

かった。

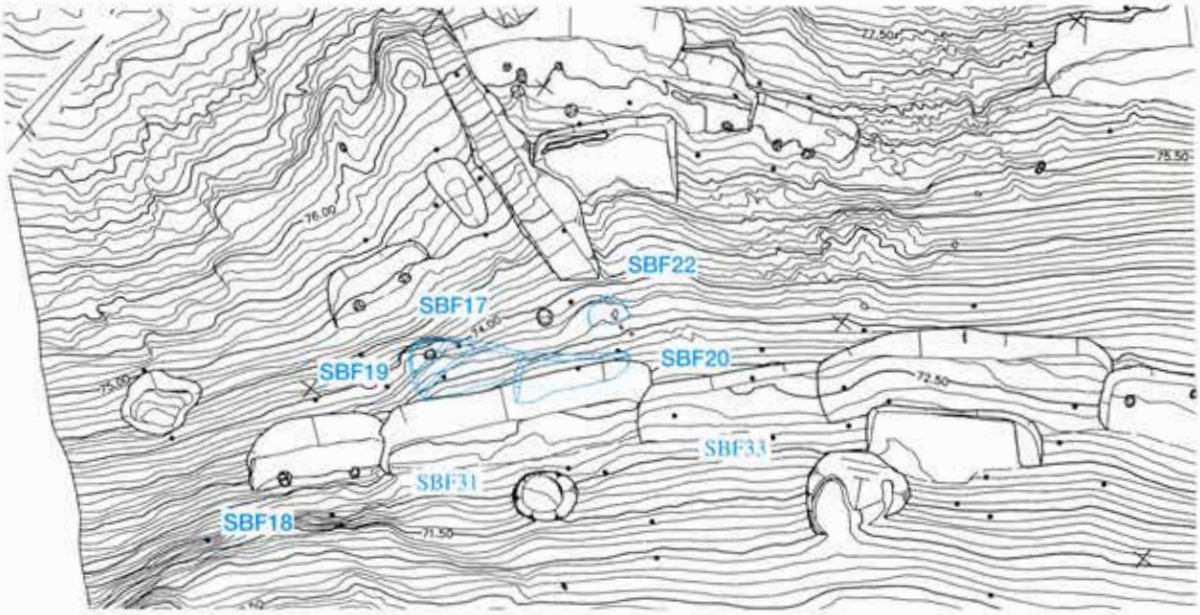
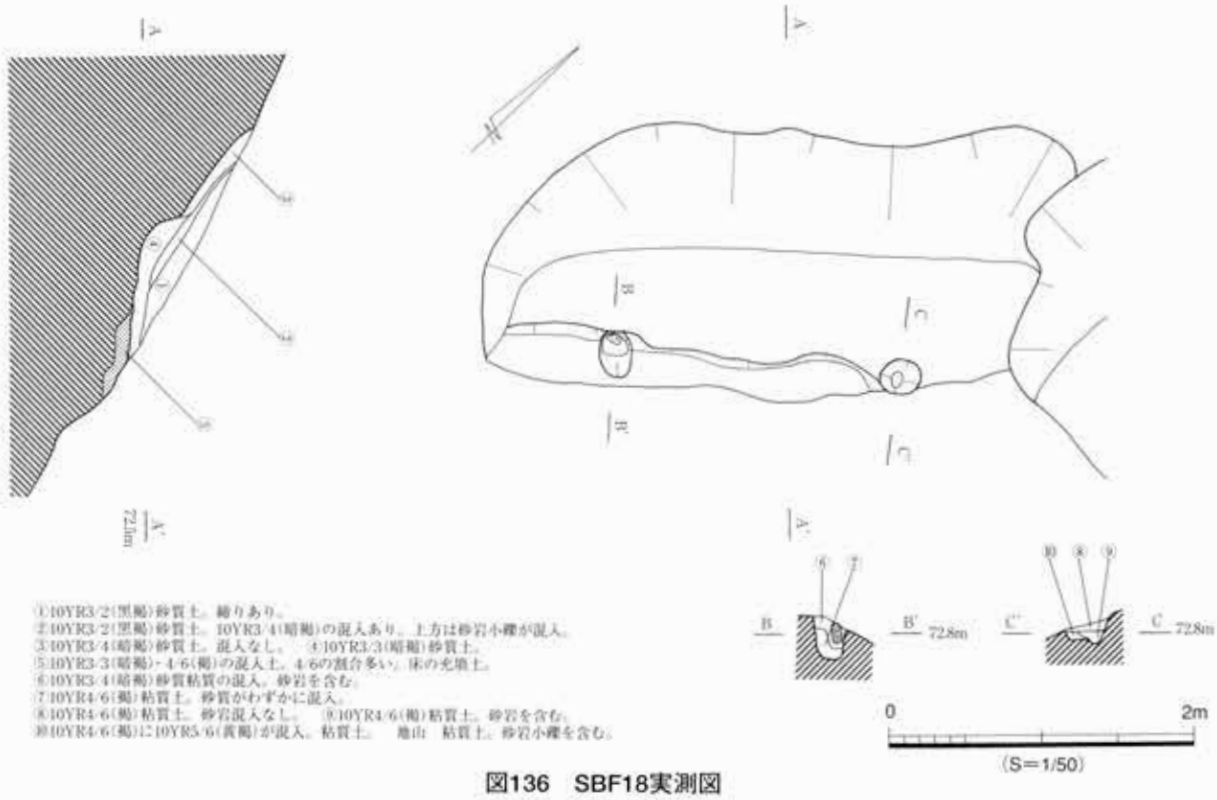


図135　SBF17・18・19・20・22周辺地形図（1/200）



①10YR3/2(黒褐)砂質土。締りあり。
②10YR3/2(黒褐)砂質土。10YR3/4(暗褐)の混入あり。上方は砂岩小礫が混入。
③10YR3/4(暗褐)砂質土。混入なし。　④10YR3/3(暗褐)砂質土。
⑤10YR3/3(暗褐)+4/6(褐)の混入土。4/6の割合多い。床の充填土。
⑥10YR3/4(暗褐)砂質粘質の混入。砂岩を含む。
⑦10YR4/6(褐)粘質土。砂質がわずかに混入。
⑧10YR4/6(褐)粘質土。砂岩混入なし。　⑨10YR4/6(褐)粘質土。砂岩を含む。
⑩10YR4/6(褐)に10YR5/6(黄褐)が混入。粘質土。　地山　粘質土。砂岩小礫を含む。

図136　SBF18実測図

遺物と所属時期

出土遺物は比較的多かったが、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、ＳＢＦ31に切られていろことから、この住居跡よりは古いものと考えるが、Ⅱ期の範疇としておくにとどめたい。。

ＳＢＦ19

遺構（地形図34，図137，図版14）27Ｎグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部より少し下った急斜面に立地する。幅3.13ｍ・奥行き0.95ｍ（現存長）の方形で、やや砂質の混入した粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。ＳＢＦ20・ＳＢＦ22と同様、他の竪穴住居跡より上層の面から検出されている。床面は大きく崩壊し、西側の床面をＳＢＦ20に切られている。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

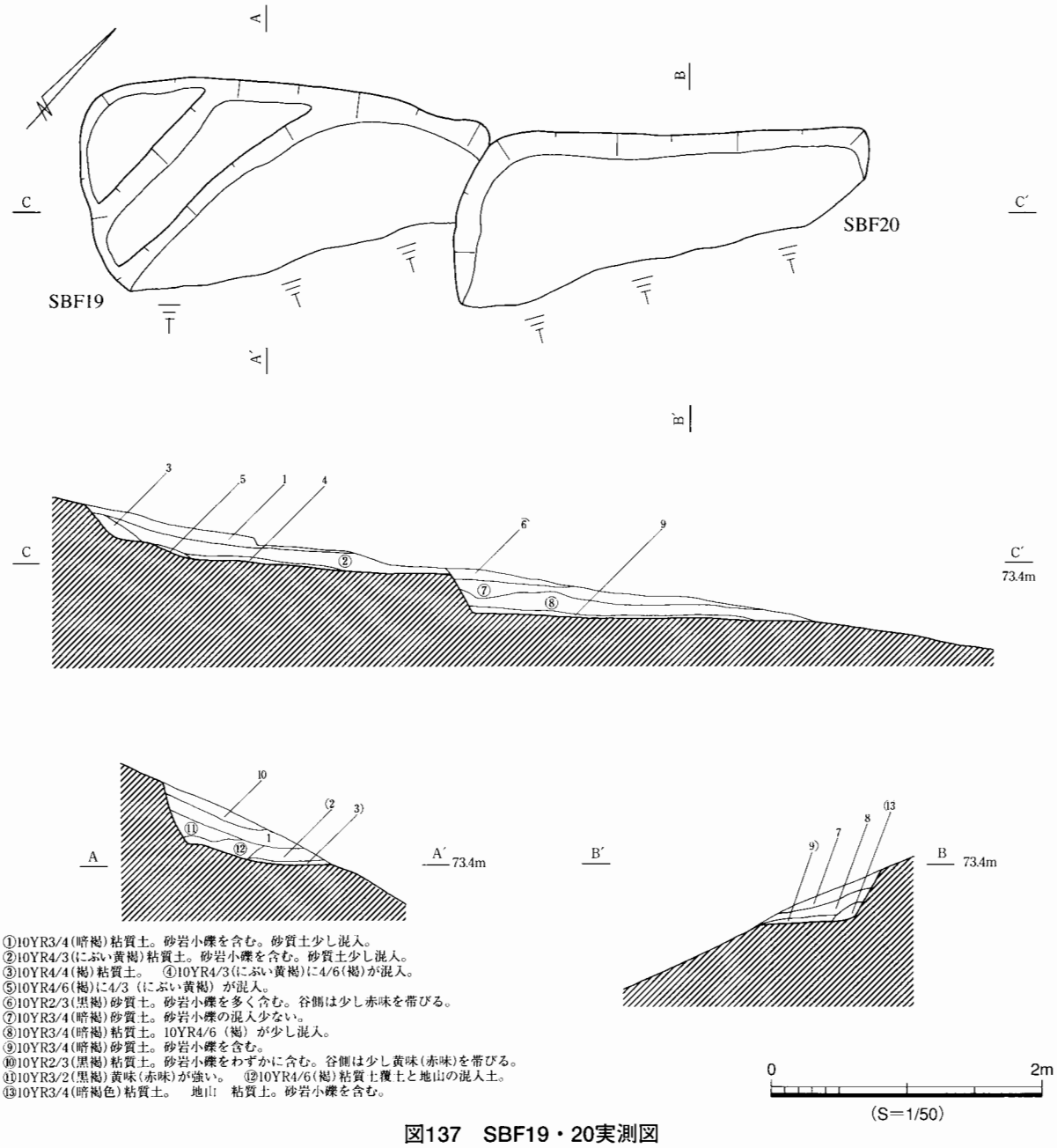


図137　SBF19・20実測図

遺物と所属時期

出土遺物は、小片が多く、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって所属時期も不明ととというほかないが、ＳＢＦ31に切られていろことから、この竪穴住居跡よりは古いものと考えるが、Ⅱ期の範疇としておくにとどめたい。

ＳＢＦ20

遺構（地形図135，図137，図版14）27Ｎグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部より少し下った急斜面に立地する。幅2.90ｍ・奥行き1.08ｍ（現存長）の方形で、砂質土が混入した粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。この竪穴住居跡も、ＳＢＦ19・ＳＢＦ22と同様、他の竪穴住居跡より上層の面から検出されている。床面は大きく崩壊し、西側の床面をＳＢＦ20に切られている。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

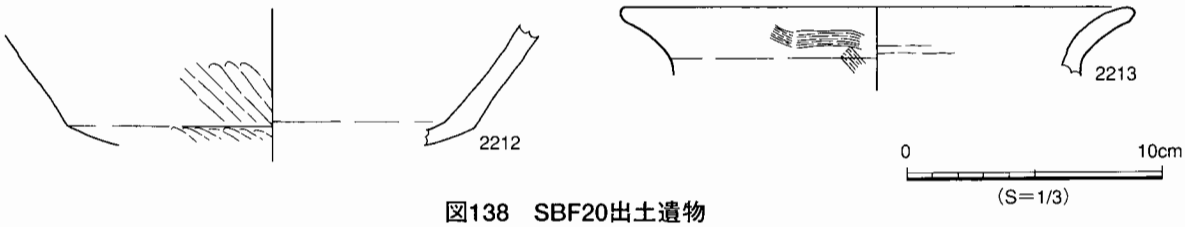


図138　SBF20出土遺物

遺物と所属時期（図138）

出土遺物は、比較的多かったが、ほとんどが細片で図示し得たのは、２点のみである。2212は高坏Ｃ類の段部で、比較的深いものと考えられる。外面にはナナメ方向のミガキが施されている。2213は甕Ｇ類の口縁部で、外面には横及びナナメ方向の、内面にはヨコ方向のハケ調整が施されている。

なおこの住居跡の所属時期は、小片が大きいために確証に欠けるけれども高坏Ｂ類の存在から、Ⅱ期の後半と考えられる。

ＳＢＦ22

遺構（地形図135，図139，図版14）27Ｍグリッド

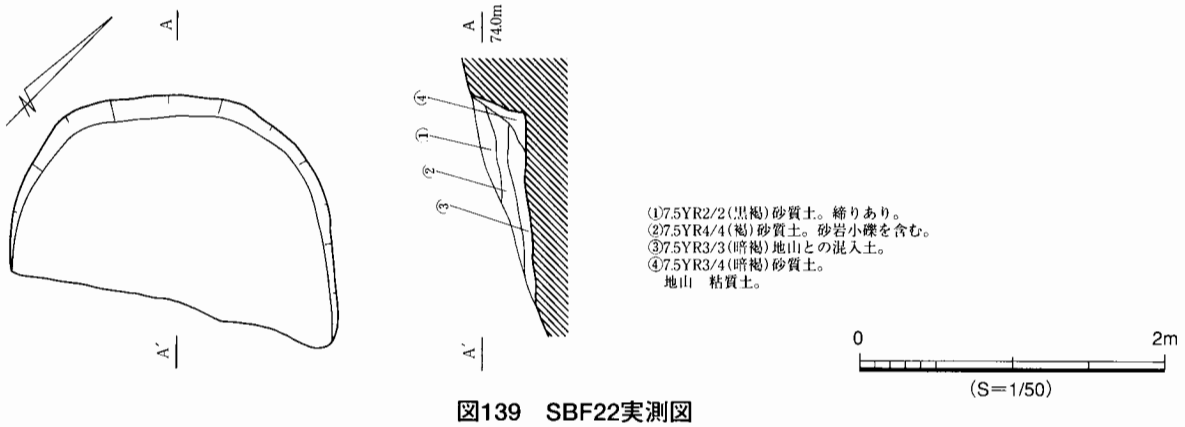
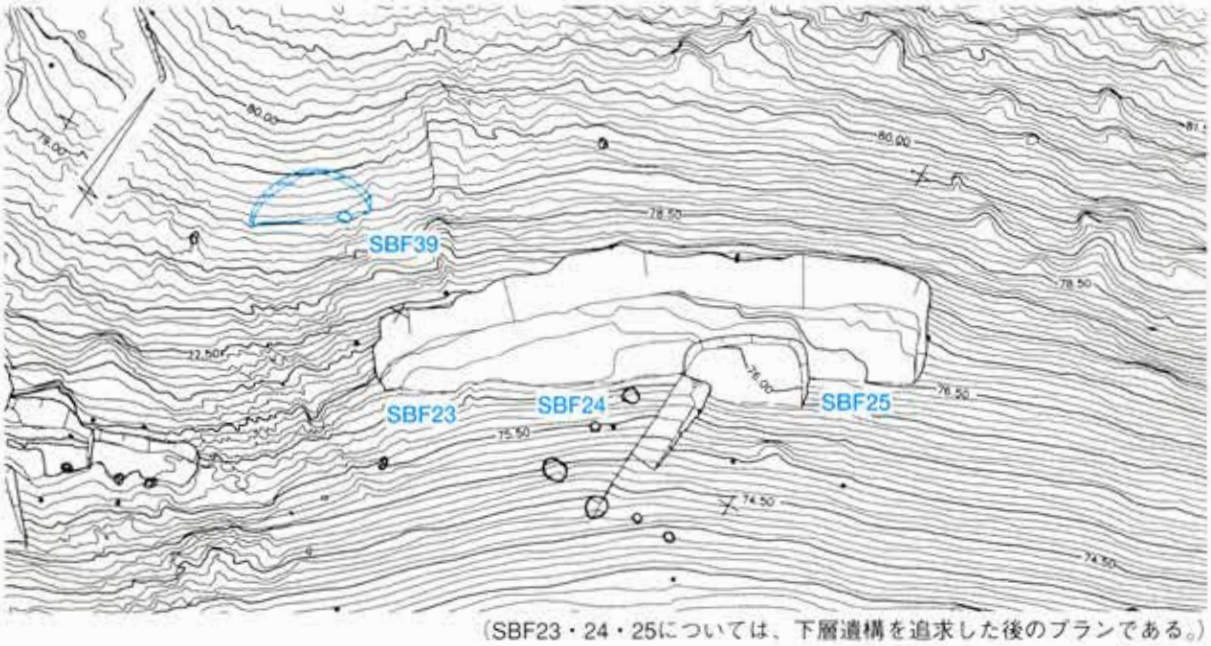


図139　SBF22実測図

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部より少し下った急斜面に立地する。幅1.95ｍ・奥行き1.35ｍ（現存長）の楕円形で、やや砂質の混入した粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。ＳＢＦ19・ＳＢＦ22と同様、他の竪穴住居跡より上層の面から検出されている。床面は大きく崩壊している。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。非常に小規模であるので竪穴住居跡の可能性はかなり低いが、平らな床面を持つことから、竪穴住居跡として載せることとする。



（SBF23・24・25については、下層遺構を追求した後のプランである。）

図140　SBF23・24・25周辺地形図（1/200）

遺物と所属時期

出土遺物は、小片が多く、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。上層からの検出されていることから、若干新しい可能性はあるものの、所属時期も不明というほかないがⅡ期の範疇としておきたい。

ＳＢＦ23

遺構（地形図140，図141，図版14）29Ｋグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の頂部より少し上った急斜面に立地する。幅3.65ｍ・奥行き1.28ｍ（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。この竪穴住居跡は、SBF24の北西側を切っている。床面は大きく崩壊し、山側の立ち上がりも不明確であり、埋土も複雑な堆積を示している。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図142）

出土遺物は比較的多いが、ほとんどが小片で、このうちの５点を図示した。2214は高坏Ｃ類の坏部で、口縁部を少し肥厚させて３条の沈線を施し、坏部は多少内彎傾向を持っている。傾きから考えて、坏部は比較的浅く、ほとんどは摩耗しているが、ナナメ方向のミガキを施しているのがわずかに窺える。2215は甕Ｆ類の口縁部で、北陸系の有段口縁を持ち、立ち上がり部分に擬凹線を入れている。多少開き気味なのは、法仏・月影様式の中でも、やや新相の影響を受けたためであると考えられる。2216も甕Ｆ類の口縁部であろうが、口縁部は2215と比べてかなり厚く、また小片のため、あまりはっきりとはしない。2217は甕Ｃ類の口縁部で、口縁部にあらいナナメ方向のハケ調整を施している。2218も甕Ｃ類の口縁部から胴部であるが、口縁部の段が強く、そこに４条の横線を入れている。

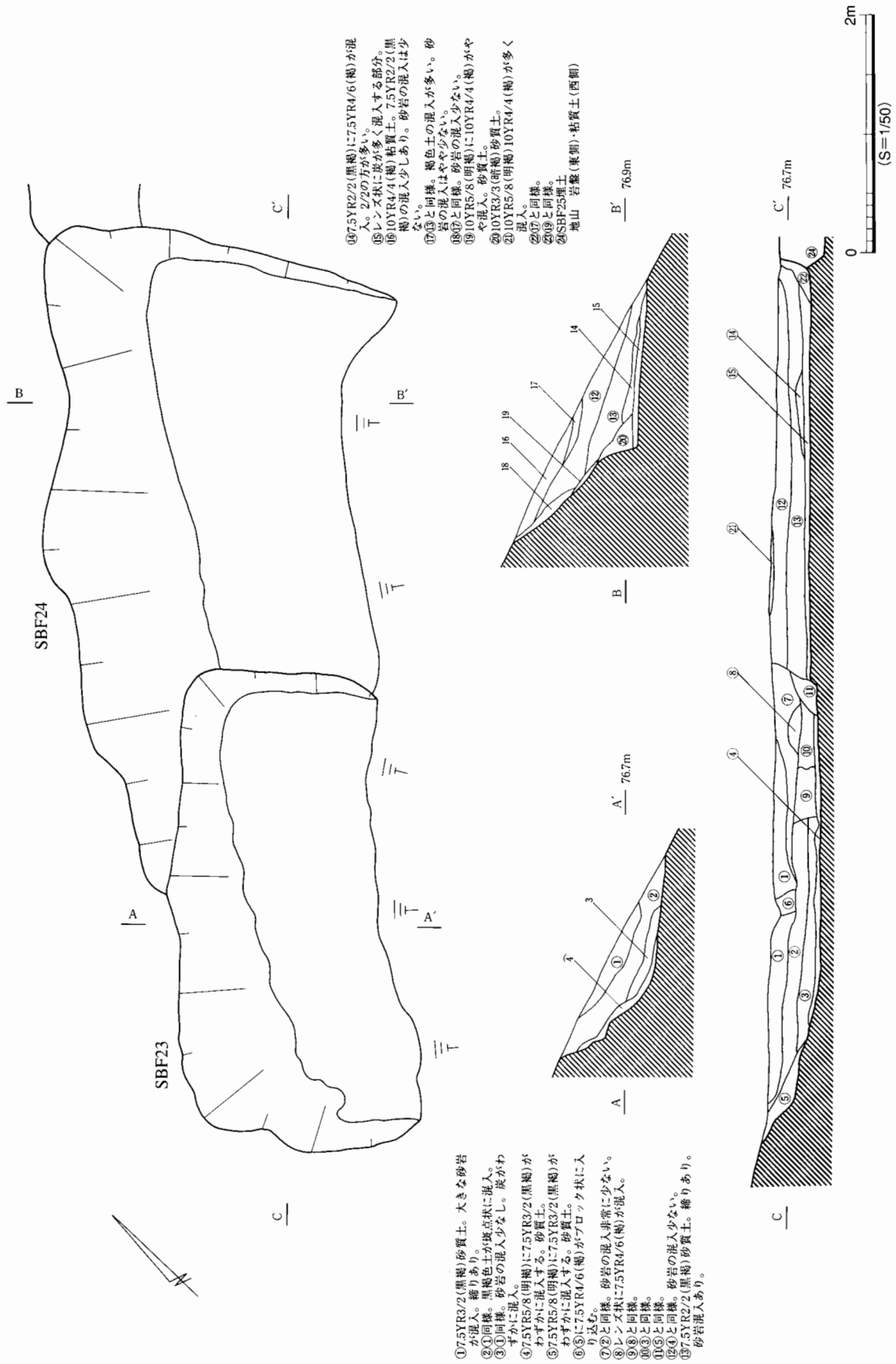


図141　SBF23・24実測図

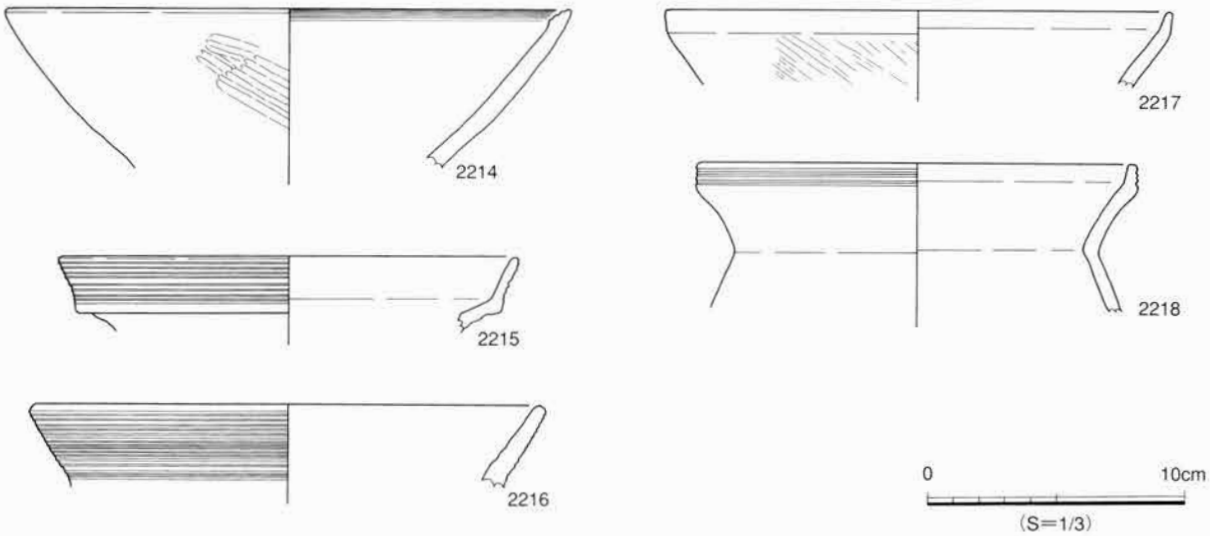


図142　SBF23出土遺物

なお、この竪穴住居跡の所属時期は、全体的に遺物が小片であり、実測しえた遺物も時期判定に結びつくものが少なかったが、切り合いから、ＳＢＦ18・ＳＢＦ24よりは新しく造られたと考えられる。また、口縁部内面を少し肥厚させそこに多条沈線を入れ、比較的浅い坏部を持つ、高坏Ｃ類が存在することから、Ⅱ期後半と考えられる。

ＳＢＦ24

遺構（地形図140，図141，図版14）29Ｊグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の頂部より少し下った急斜面に立地する。幅3.43m・奥行き2.13m（ともに現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。この竪穴住居跡は、ＳＢＦ23に切られ、ＳＢＦ29を切っている。床面は大きく崩壊しているが、山側の立ち上がりは明瞭である。埋土は複雑な堆積を示しており、何度も崩れながら堆積していった状況が窺える。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図143）

出土遺物は比較的多く、このうちの12点を図示した。2219は高坏Ｄ類での坏部で、口縁部から横線と同じハケ状の工具で施した山形列点文を交互に入れており、その下方はやや粗目ではあるが不定方向のミガキを施している。内面は外面と同様のミガキが施されている。これは西濃方面に多い文様構成を有している。2222は高坏Ｃ類の坏部で、外面は内彎傾向を持ちナナメ方向のミガキが施されている。段部が比較的小さく浅いものであった可能性が高い。2220・2221は器台の器部である。2223は平底甕の底部で板ナデを施しており、2224は台付甕の台部でこれも板ナデを施している。2226は小型の甕の口縁で外面は粗く、ミガキ内面は板ナデを施している。2227は甕Ｇ類の口縁で、これも外面にミガキを施している。2228は甕Ｃ類の口縁で、横線と列点文を上から順に入れている。2229は甕Ｂ類であろうが、小片のため傾き等も不明である。2225は壺の底部で外面はナナメ方向のミガキを施しており、内面にはハケを残している。2230は壺の胴部で、横線・波状文・横線・列点文を上から順に入れており、その下方は不定方向のミガキを施している。

なお、この竪穴住居跡の所属時期は、高坏Ｃ類の存在することと、Ⅱ期でも比較的新相を呈する、

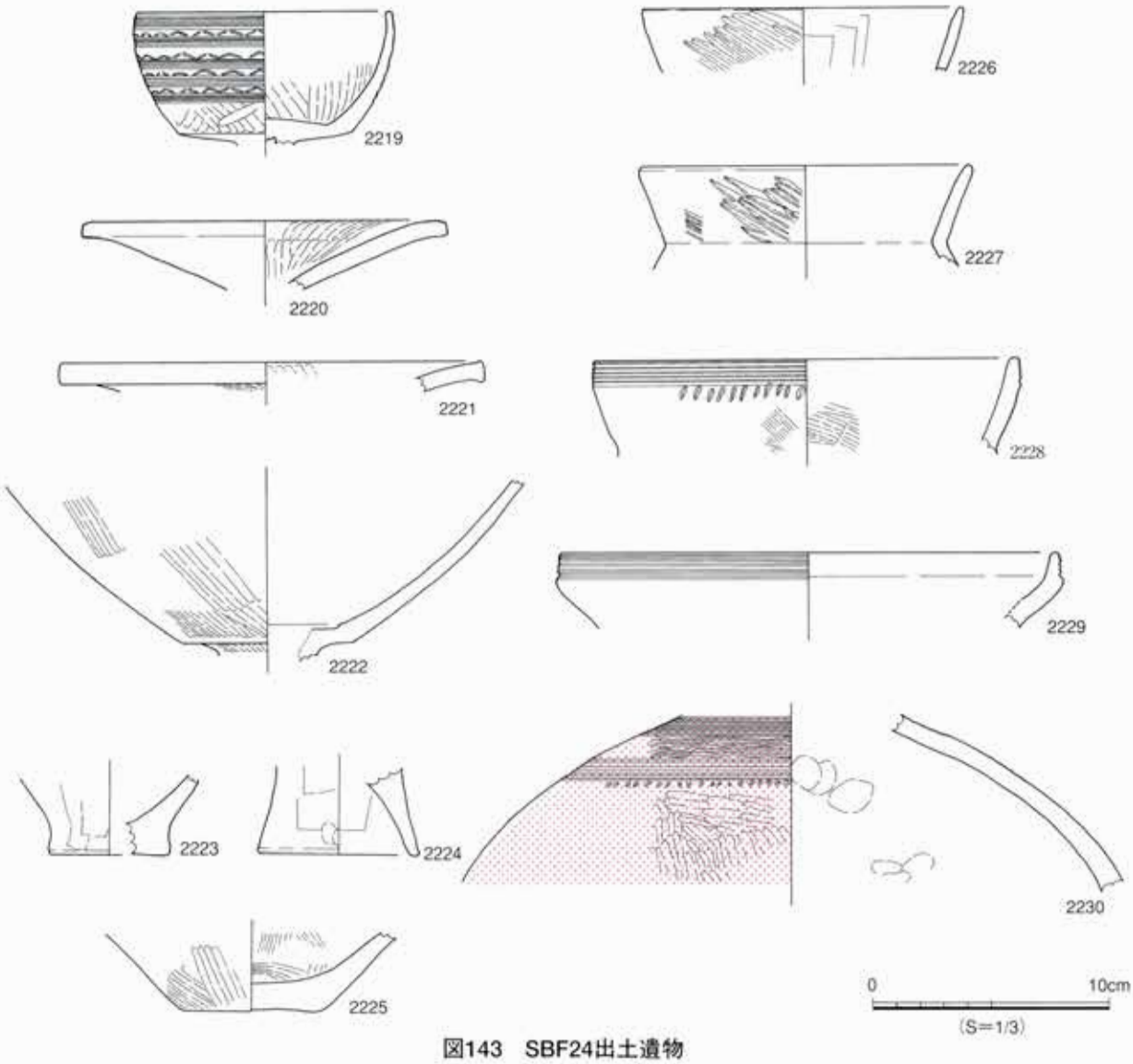


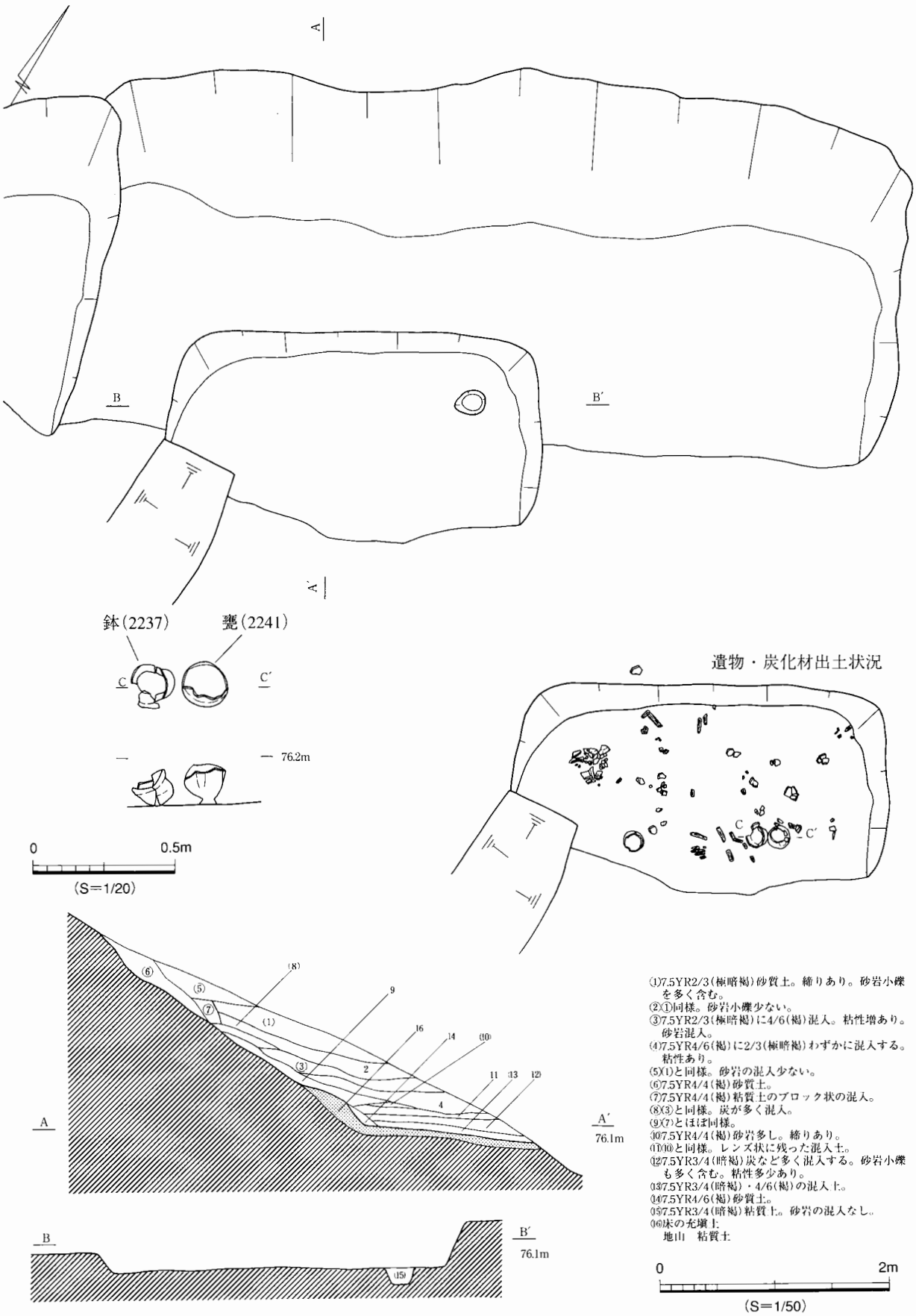
図143　SBF24出土遺物

外面に施文する高坏D類が存在することから、Ⅱ期－4と考えられる。また切り合いから、ＳＢＦ23よりは古く、ＳＢＦ29よりは新しいものであろうが、ＳＢＦ23の遺物とこの竪穴住居跡の遺物の新旧関係はあまり認めがたく、ほぼ接近した時期に造られた可能性が高い。

ＳＢＦ25

遺構（地形図140，図144，図版15）30Ｊグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の頂部より少し下った急斜面に立地する。幅3.06m・奥行き1.68m（現存長）の方形で、岩盤を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。比較的小規模で、床面は大きく崩壊しているが、この規模の竪穴住居跡にしては大きい山側周溝がめぐる。この山側周溝は、山側の壁面に接してしまっているので、大きな崩壊の痕跡の可能性もあるが、検出状況・セクション等では確認できなかったため、一応は山側周溝としておくことにする。床面は硬く締まり、その直上から多くの遺物が出土した。そのうち2237の台付甕と2241の鉢は、図144にもあるように床面に正位で立ったままの状態で出土しており、2235の壺も正位で床面に底部が接して出土している。地床炉の痕跡がは



①7.5YR2/3(極暗褐)砂質土。締りあり。砂岩小礫を多く含む。
②①同様。砂岩小礫少ない。
③7.5YR2/3(極暗褐)に4/6(褐)混入。粘性増あり。砂岩混入。
④7.5YR4/6(褐)に2/3(極暗褐)わずかに混入する。粘性あり。
⑤①と同様。砂岩の混入少ない。
⑥7.5YR4/4(褐)砂質土。
⑦7.5YR4/4(褐)粘質土のブロック状の混入。
⑧③と同様。炭が多く混入。
⑨⑦とほぼ同様。
⑩7.5YR4/4(褐)砂岩多し。締りあり。
⑪⑩と同様。レンズ状に残った混入土。
⑫7.5YR3/4(暗褐)炭など多く混入する。砂岩小礫も多く含む。粘性多少あり。
⑬7.5YR3/4(暗褐)・4/6(褐)の混入土。
⑭7.5YR4/6(褐)砂質土。
⑮7.5YR3/4(暗褐)粘質土。砂岩の混入なし。
⑯床の充填土
地山　粘質土

図144　SBF25出土遺物

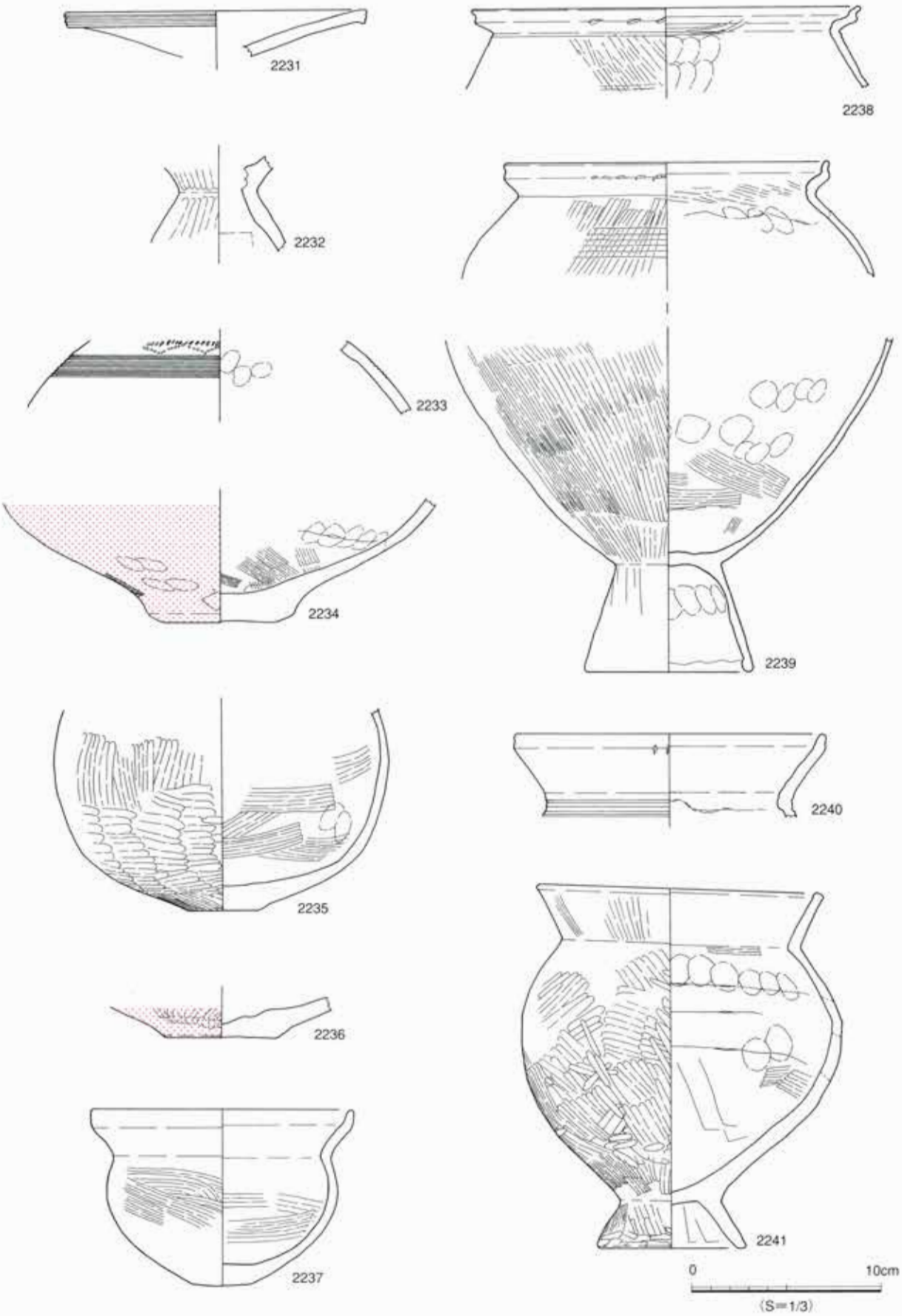


図145　SBF25出土遺物

っきりせず、焼土もみられなかったことから、2237・2241の煮沸具が、炉で使用中に埋没したとは考えにくいが、この竪穴住居跡の廃絶の時点でこのような状態に置かれていたことは間違いがない。１基の柱穴と考えられるピット、床面の充填土が確認された。壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図145）

出土遺物のほとんどは、床面の直上から出土しており、質・量ともに良好で、このうちの11点と山側周溝から出土した１点を図示した。2231は器台の器部で、端部に３条の横線を入れている。2232は器台の脚部で、外面にはタテ方向のミガキを、内面には板ナデを施している。2233は壺の胴部で、外面には列点文・刺突による山形文・横線文を入れている。2234は壺の底部で、外面には指押圧痕とハケ調整の痕跡を残し、内面にはハケ調整を施している。2235は壺の胴部で、外面には不定方向のミガキを施しており、内面にはハケ目を残している。2236も壺の底部で、外面にタテ方向のミガキを施している。2237は鉢Ａ類で、内外面にあらいハケ調整を施している。内外面共に摩耗が激しく焼成時と考えられるゆがみも大きいが、口縁部には少し段を持ち、ナデ調整が施されていたと考えられる。外面には煤が附着している。なお後述する2241の台付甕に近接するように、床面の直上から、ほぼ完形で出土している。2238・2239は甕Ｅ類で、外面口縁部には、押し引き刺突が入れられ、胴部にはナナメ方向の明瞭なハケ調整が施されている。内面の頸部には横方向のハケ調整が、胴部には指押圧痕が残っており、Ｓ字甕Ａ類の特徴を示している。このうち2239は、胴部の一部を除いて台部まで残っており、深橋前遺跡近辺の丘陵部ではほとんど出土しないＳ字甕で、台部付近のプロポーションが窺えるのはこれが唯一である。2240は甕Ｃ類の口縁部で段部に列点文を入れている。2241は甕Ｄ類で、口縁を短くほぼ均等な厚さで外反させ、端部部の内面をわずかに丸く肥厚されている。外面の口縁部にはナデ残しのハケ目が残っており、胴部はあらい不定方向のミガキ調整が施されている。台部との接合部付近には、おそらく一次調整であろうハケ目が残されており、台部はわずかに内彎させようとしている。内面頸部・胴部には、ハケ調整がわずかに残されている。口縁部のつくり・プロポーション・調整ともに、深橋前遺跡ではみられない異質な土器の１つである。また2242は、山側周溝から出土した甕Ｃ類の口縁部で段部には列点文を入れ、その下部にはミガキを、内面には板ナデを施している。

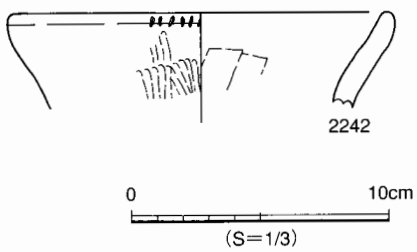


図146　SBF25山側周溝出土遺物

なお、この竪穴住居跡は、比較的新相を呈するＳ字甕Ａ類が出土していることから、Ⅱ－４期に属するものと考えられる。

ＳＢＦ27

遺構（地形図147，図148，図版16）33Ｊグリッド

東丘陵の東向斜面、端部付近の急傾斜地に立地する。非常に小規模な竪穴住居跡で、ＳＢＦ28の山側につくられている。幅3.52m・奥行き0.63m（現存長）の長方形と考えられ、岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っている。埋土は砂質土で、分層もしづらく、竪穴住居跡ではない可能性もあるが、遺物も少量ながら出土しているため、一応は竪穴住居跡としておくことにする。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

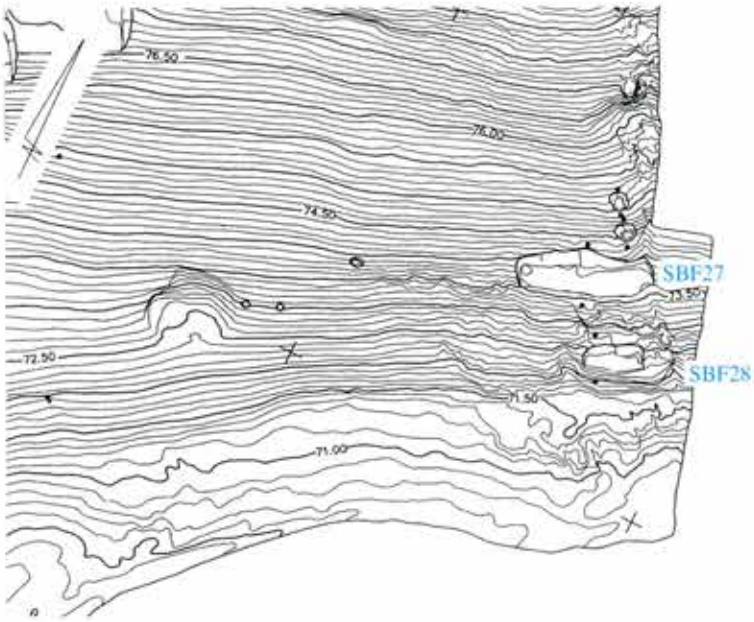


図147　SBF27・28周辺地形図（1/200）

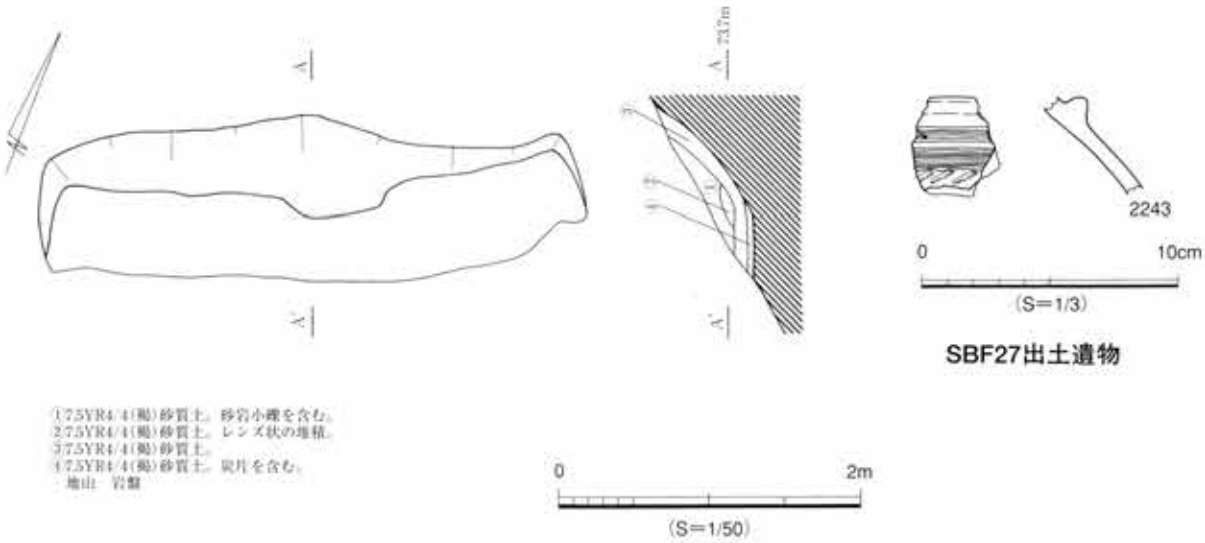


図148　SBF27実測図

遺物と所属時期

出土遺物は非常に少い上に小片が多く、図示に耐えうる遺物は１点のみである。2243は壺で、頸部に突帯を付け、胴部には細かい横線・棒状工具を用いたと考えられる列点文を入れている。広口壺である可能性が高い。

なおこの竪穴住居跡からは、小片であるために図示できなかったが、Ａ類と考えられるＳ字甕が出土している。そのため、Ⅱ期に所属すると考えたい。

ＳＢＦ28

遺構（地形図147，図149，図版16）34Ｊグリッド

東丘陵の東向斜面、端部付近の急傾斜地に立地する。非常に小規模な竪穴住居跡で、ＳＢＦ27の谷

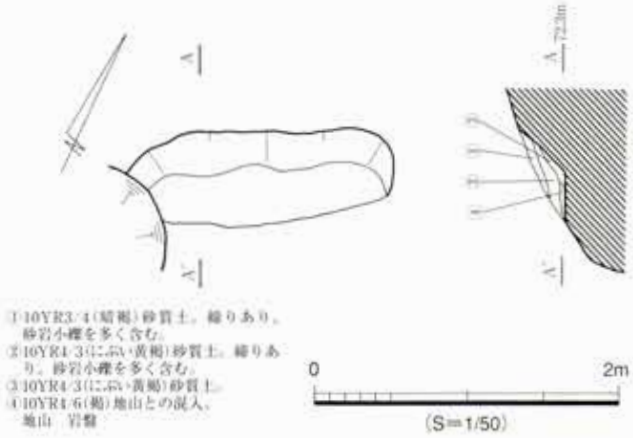


図149　SBF28実測図

側に造られている。幅1.3.4m・奥行き0.40m（共に現存長）の方形と考えられ、岩盤を掘り抜いて山側の床面を造っている。埋土等の状況はＳＢＦ27と同様である。柱穴・地床炉・壁溝・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期

小規模な竪穴住居跡であり、遺物の出土はなかった。従って所属時期も不明というほかない。

ＳＢＦ29

遺構（地形図150，図151，図版16）29Mグリッド

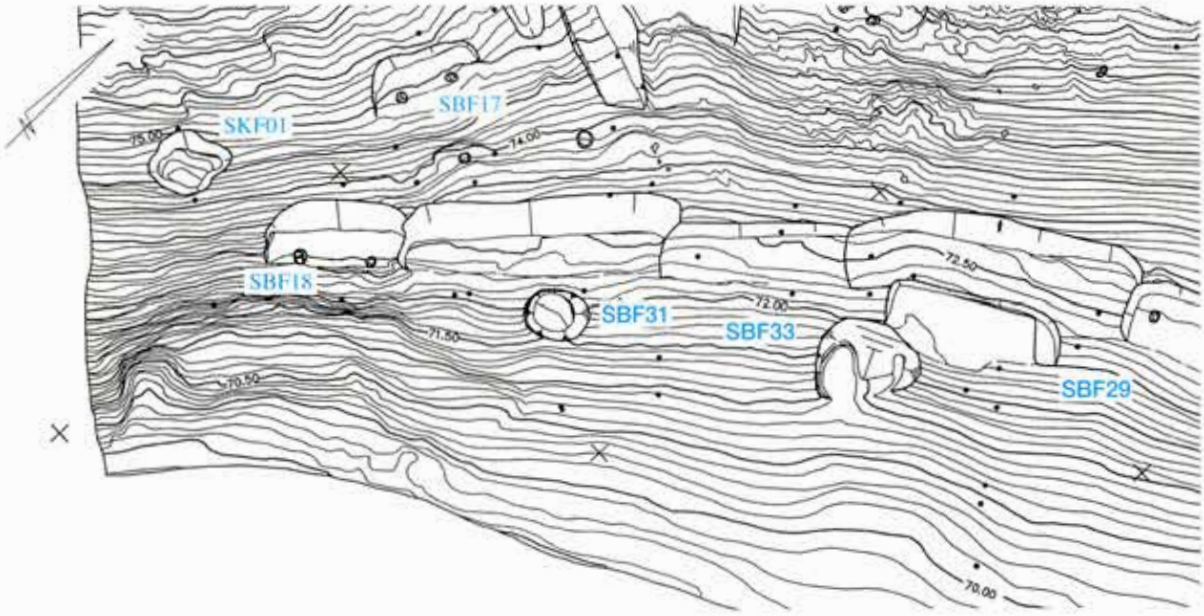


図150　SBF29・31・33周辺地形図（1/200）

東丘陵の東向き斜面、端部付近の斜面に立地する。幅4.35m・奥行き1.85m（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。多量の遺物を出土した山側周溝を持ち、これを両隣のＳＢＦ33・ＳＢＦ34が切っている。床面を平らにするための整地土（セクション⑮）が確認された。２基の柱穴と川原石を炉石とする地床炉が確認された。壁溝・貼り床は確認できなかった。床面には、垂木と考えられる、多くの炭化材が放射状に確認されており、焼失家屋である可能性が高い。また、この炭化材は床面の直上に散在しているため、失火か、廃絶直後に火をつけて燃やしたものと考えられる。山側周溝の埋土で、この住居跡の埋土をパックするようにするように見える層（セクション⑧）がみられるが、この上面は全く締まりが無い。そのため、山側周溝がこの住居跡廃絶後に造られた住居である可能性は非常に少ないが、何らかの遺構であった可能性は残る。

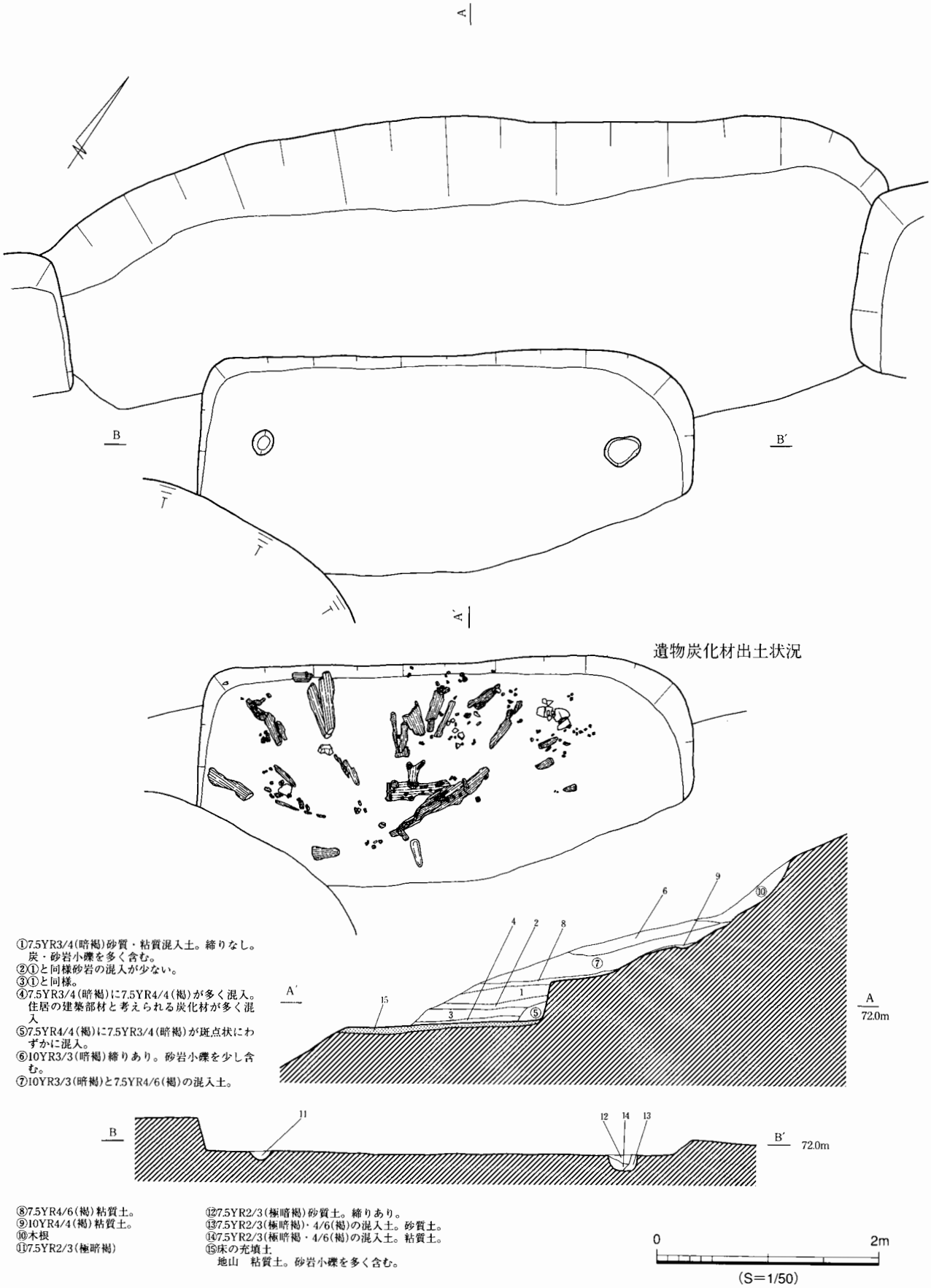


図151　SBF29実測図

遺物と所属時期（図152，153，154）

出土遺物のほとんどは、床面の直上、及び山側周溝の埋土から出土しており、質・量ともに良好で、このうちの７点と山側周溝から出土した24点を図示した。2244は高坏Ｂ類の坏部で、比較的直線的で直立しており、タテ方向にあらいミガキを施している。2245は充填接合の高坏である。2246は器台の器部で、内外面ともに非常に細かく丁寧な、タテ方向のミガキを施している。2247は高坏の脚部で、2246の器台と類似したミガキを施し、胎土も非常によく似ている。2248は壺Ｆ類で、口縁部には５条の横線を入れ、タテ及びヨコ方向にミガキを施している。2249は甕Ｇ類の口縁で、2250は壺Ｂ類の胴部である。以上がSBF29の埋土中から出土した遺物であり、以下は山側周溝の埋土から出土した土器である。2251は高坏Ｃ類の坏部で、段部の径は小さく比較的浅いものであり、内外面ともにタテ方向にミガキを施している。2252も高坏Ｃ類で、坏部は若干深いが、2252と同様に段部の径は小さい。2257は充填接合の高坏、2258・2259は高坏の脚部と考えられるが、器台の脚部の可能性も考えられる。2253は壺Ｂ類・2254は壺Ａ類の底部であり、2260は壺Ｂ類の口縁部、2261は壺Ｂ類の胴部である。2225は壺Ｆ類で、胎土がよく、丸底になるか、器台と融合した、脚付になるものと考えられる。2262は鉢Ｂ類の口縁部で段部に列点が入れられている。2256は甕Ｄ類の口縁部である。2263は甕Ｄ類の口縁部で、端部を外側に丸く肥厚させ、外面にはタテ方向・内面にはヨコ方向のハケ目を残している。胴部外面には、横線を入れ、内面は口縁部に段をつけて、ナデ調整を施している。2264は甕Ｃ類で、摩耗のため外面の列点がわずかに確認できる程度で、調整等はほとんどわからない。2265・2266は外面に強く段をつけた甕であるが、2266のほうがやや厚く強い段となっている。2267は擬凹線は入れられていないものの、甕Ｆ類と考えられる。2268は甕Ｃ類で、口縁部の端部に非常に浅い、１条の横線を入れており、内面は丁寧にナデ、胴部に段をつけている。2269・2272は甕Ｅ類の台部、2270・2271

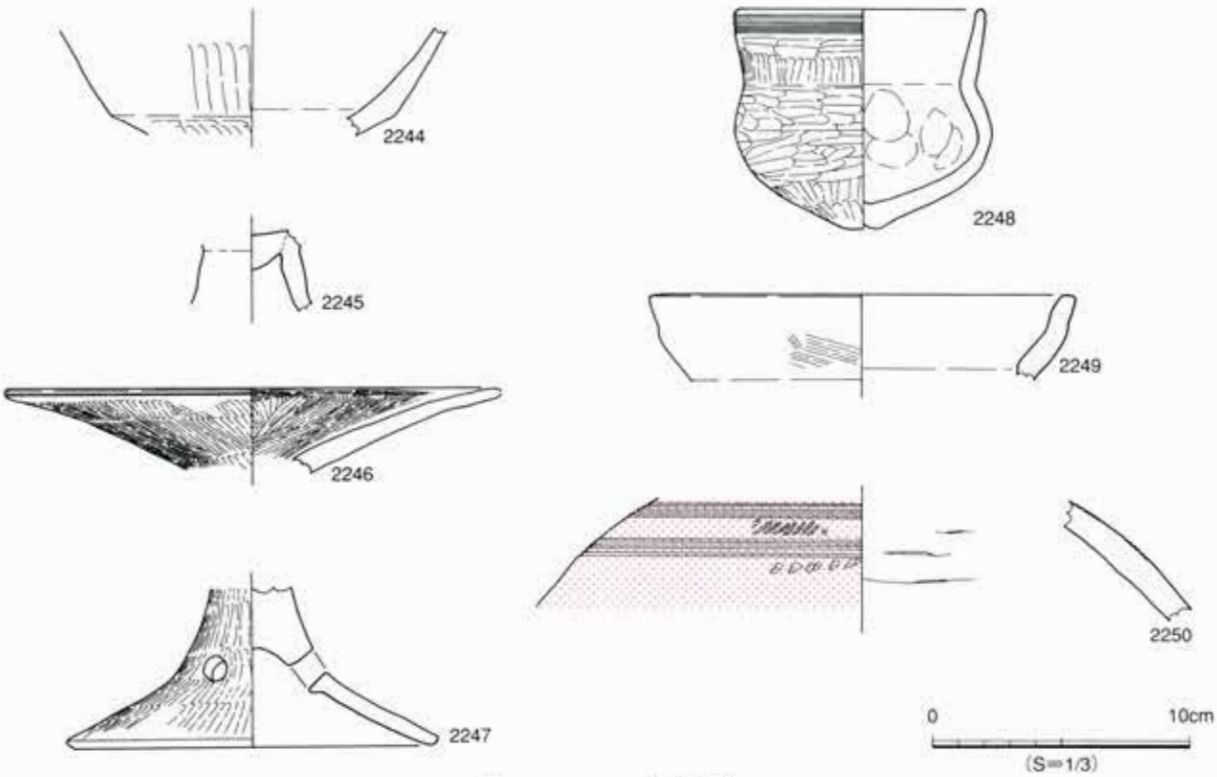


図152　SBF29出土遺物

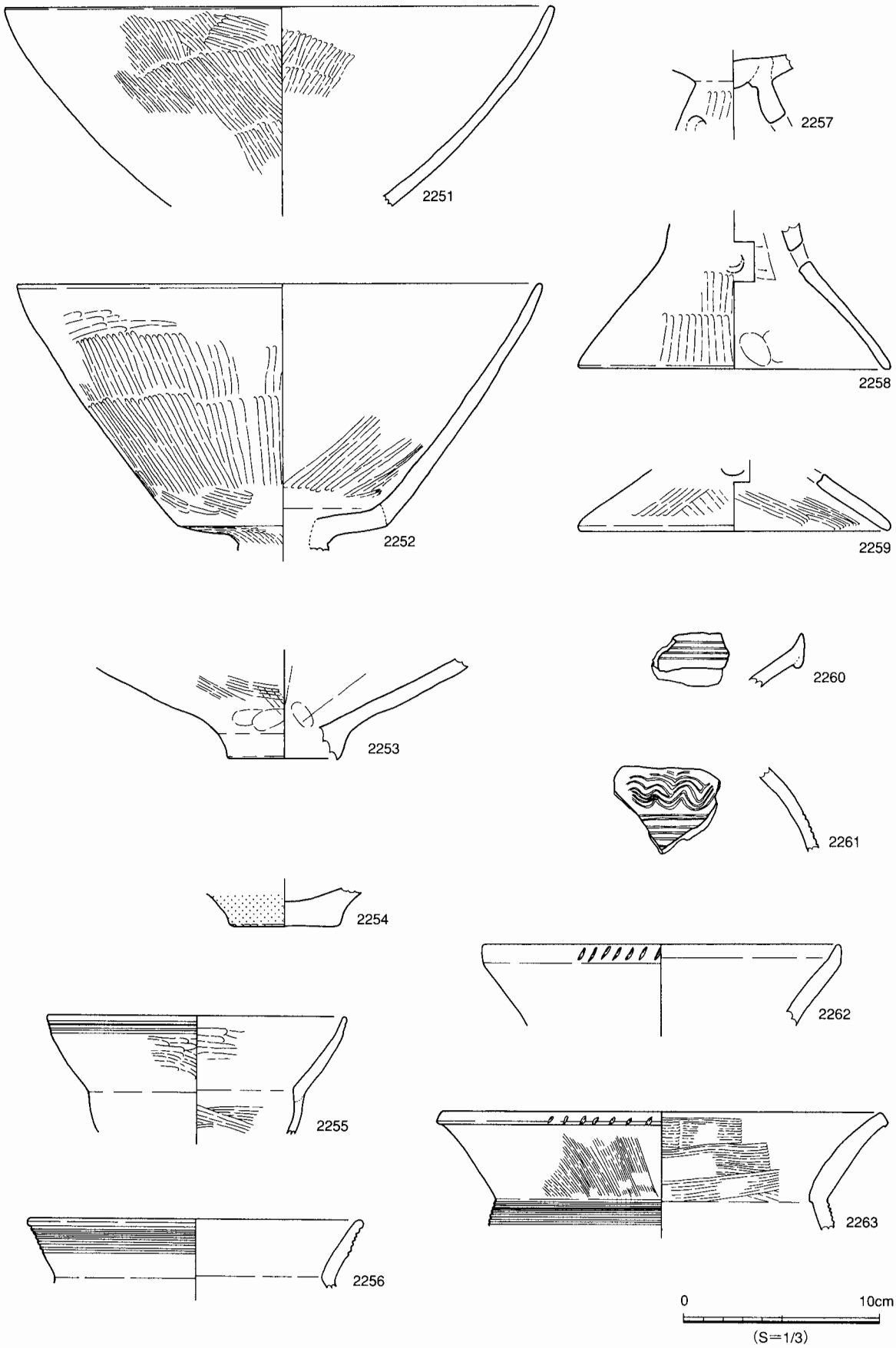


図153　ＳＢＦ29山側周溝出土遺物①

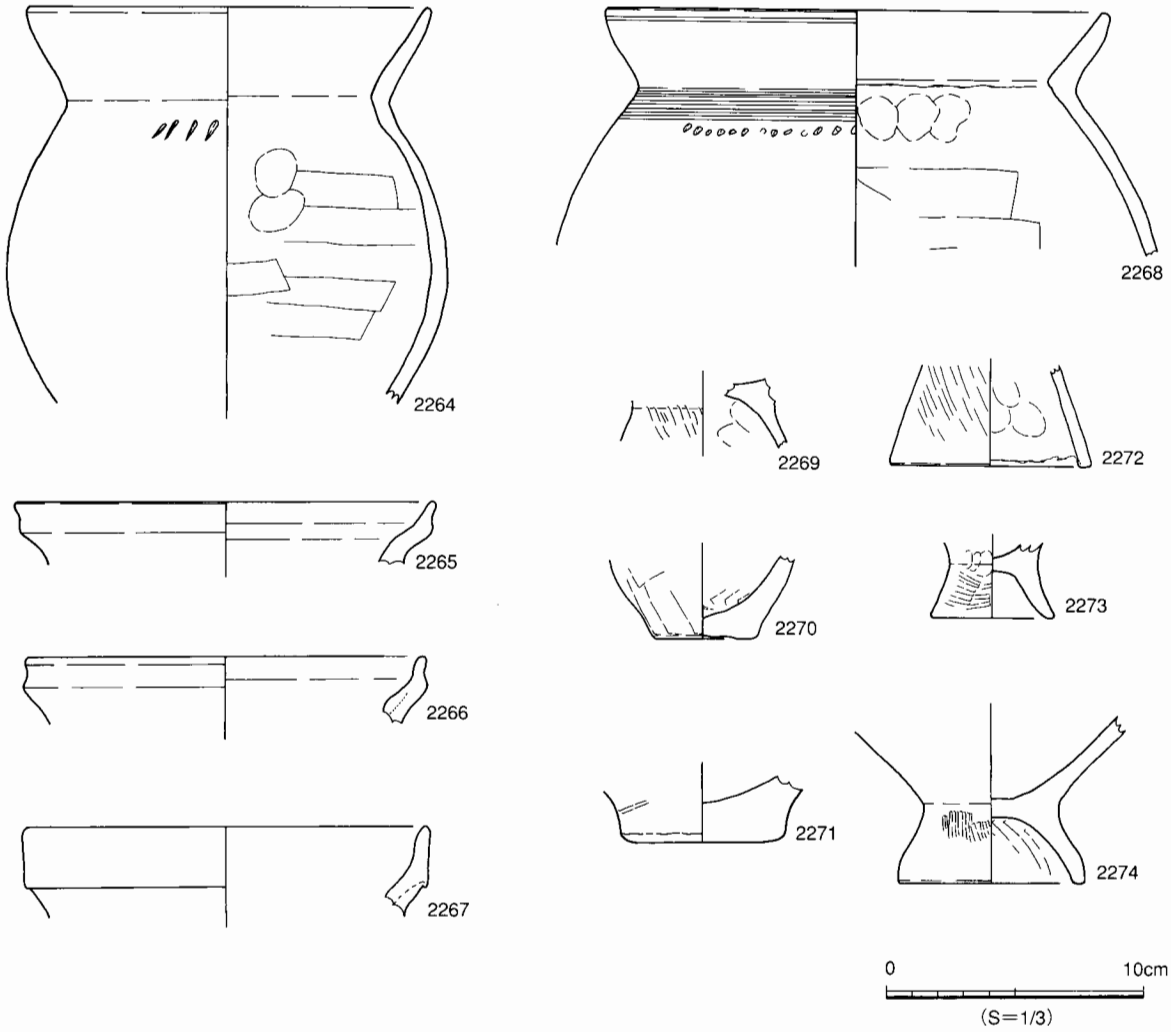


図154　SBF29山側周溝出土遺物②

は平底の甕の底部である。2273・2274は台付き甕の台部であるが2273は小型品である。

なお、この住居跡は、高坏Ｂ類が出土していることから、Ⅱ－２期に属するものと考えられる。しかし山側周溝では、かなり新相をみせる、高坏Ｃ類が出土しており、Ⅱ－４期に属するものと考えられる。山側周溝内の遺物が流れ込みであるか、何らかの遺構であったかは、今のところ不明といわざるをえない。

ＳＢＦ31

遺構（地形図150，図155，図版17）27Ｎグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部より少し下った斜面に立地する。ＳＢＦ18・ＳＢＦ33を切っている。幅5.88ｍ・奥行き1.25ｍ（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。床面は大きく崩壊し、また層位もつかみにくく、堆積の状況も判然としない。しかし、遺物の出土も多いため竪穴住居跡としたが、その他の遺構の可能性も拭えない。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

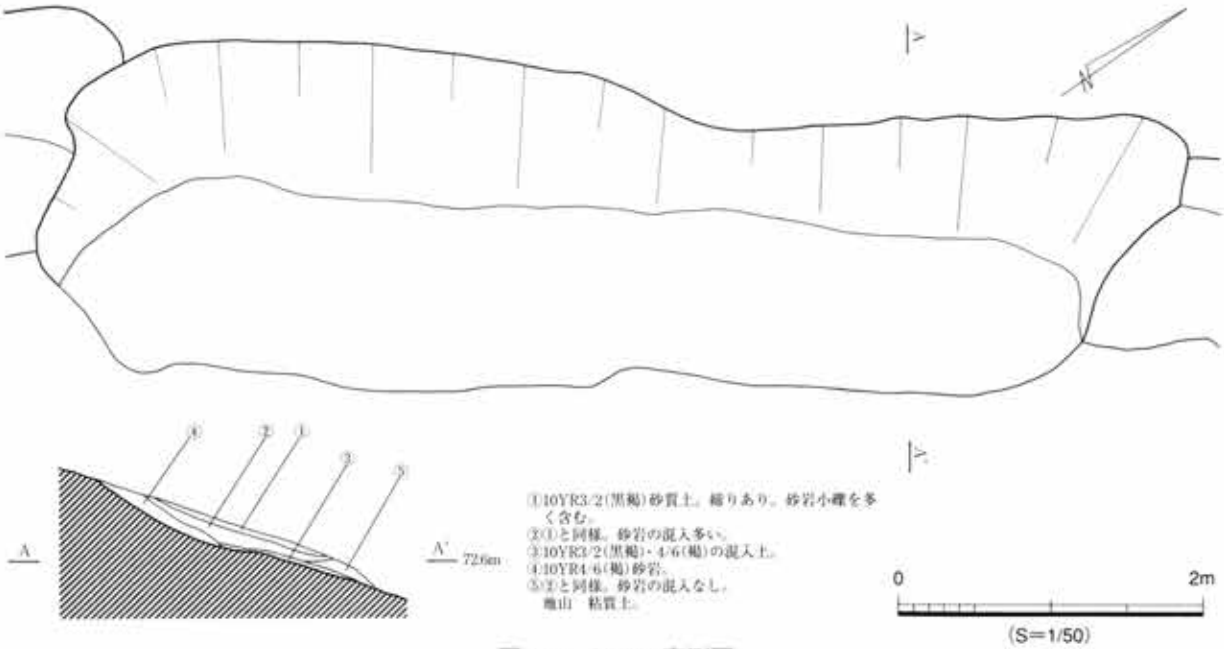


図155　SBF31実測図

遺物と所属時期（図156）

出土遺物は比較的多く、このうちの５点を図示した。2275は器台Ｂ類の脚部で、比較的太くしっかりとしたつくりで、内彎傾向が強い。2276は高坏の脚部で、厚めで重量感のあるつくりである。2277は壺Ａ２類の口縁部で外面の短部を肥厚させている。2278は壺Ａ類の胴部であり、列点文を入れている。胴部のほうが少し大きい様ではあるが、2277と同一個体の可能性もある。2279は鉢Ａ類の口縁部で、段部に２条の横線を入れている。

なお、この住居跡は内彎傾向の強い器台が出土していることから、Ⅱ－４期に所属するものと考えられる。高坏がやや古相を示していることから、Ⅱ－３期に近い時期の可能性が高い。

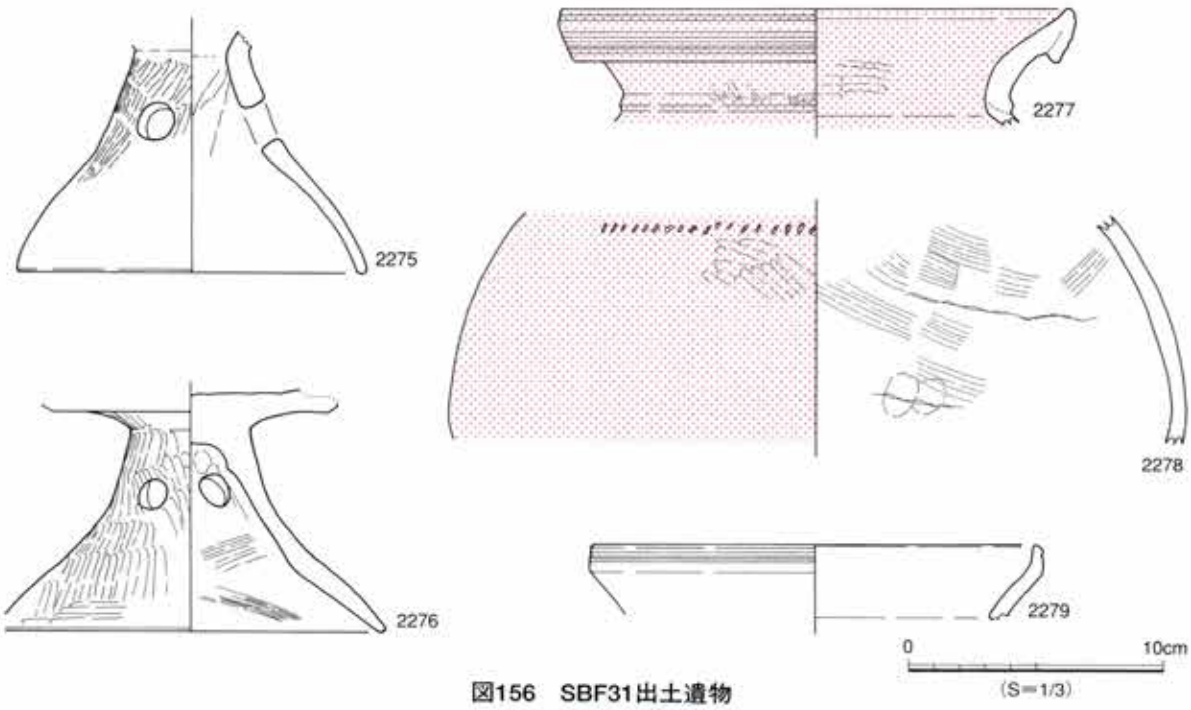


図156　SBF31出土遺物

ＳＢＦ33

遺構（地形図150，図157）28Ｍグリッド

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部より少し下った斜面に立地する。ＳＢＦ31に切られ、ＳＢＦ29の山側周溝を切っている。幅4.55ｍ・奥行き1.03ｍ（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。床面は大きく崩壊し、また層位もつかみにくく、堆積の状況も判然としない。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

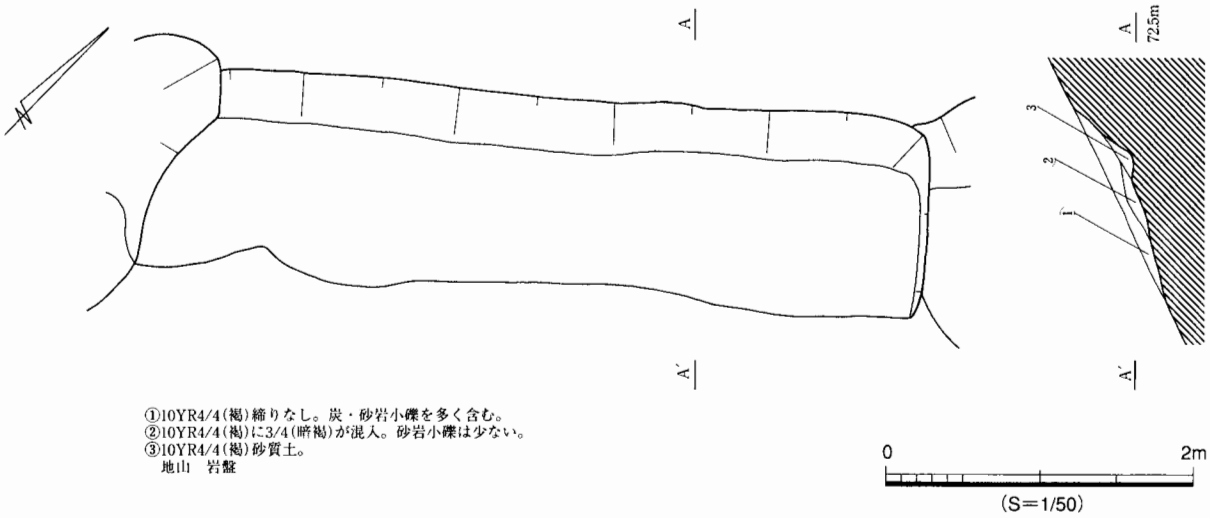


図157　SBF33実測図

遺物と所属時期

出土遺物は、小片が多く、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、切り合いからＳＢＦ31よりは古く、ＳＢＦ29の山側周溝新しいものと考えるが、Ⅱ期の範疇としておくにとどめたい。

ＳＢＦ34

遺構（地形図158，図159，図版17）30Ｌグリッド

東丘陵の東向き斜面、端部付近の斜面に立地する。幅3.78ｍ・奥行き1.80ｍ（現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。ＳＢＦ29の山側周溝を切り、ＳＢＦ35を切っている。また、ＳＢＦ35とは全く同じ方向を向いて造られている。床面はかなり崩落していたが、比較的締りはよく、山側の２基の柱穴が確認できた。北側のコーナーには壁溝が確認できた。地床炉・貼り床は確認できなかった。なおこの住居跡がＳＢＦ29の山側周溝の切り合う付近の直上にはＳＵＦ01が存在する。ここからは、Ⅱ期の範疇に属する多くの遺物が出土したが、これについては、ＳＵＦ01の遺物と所属時期において詳述する。

遺物と所属時期（図160，161，162）

出土遺物は非常に多く、このうちの40点を図示した。2280は高坏Ｃ類の坏部で、内彎傾向が強く、やや浅いものと考えられ、口縁部には面を持っている。外面は不定方向に、内面はタテ方向にミガキを施している。2281は高坏Ｄ類と考えられ、脚部外面にタテ方向のミガキを施している。2286は、坏

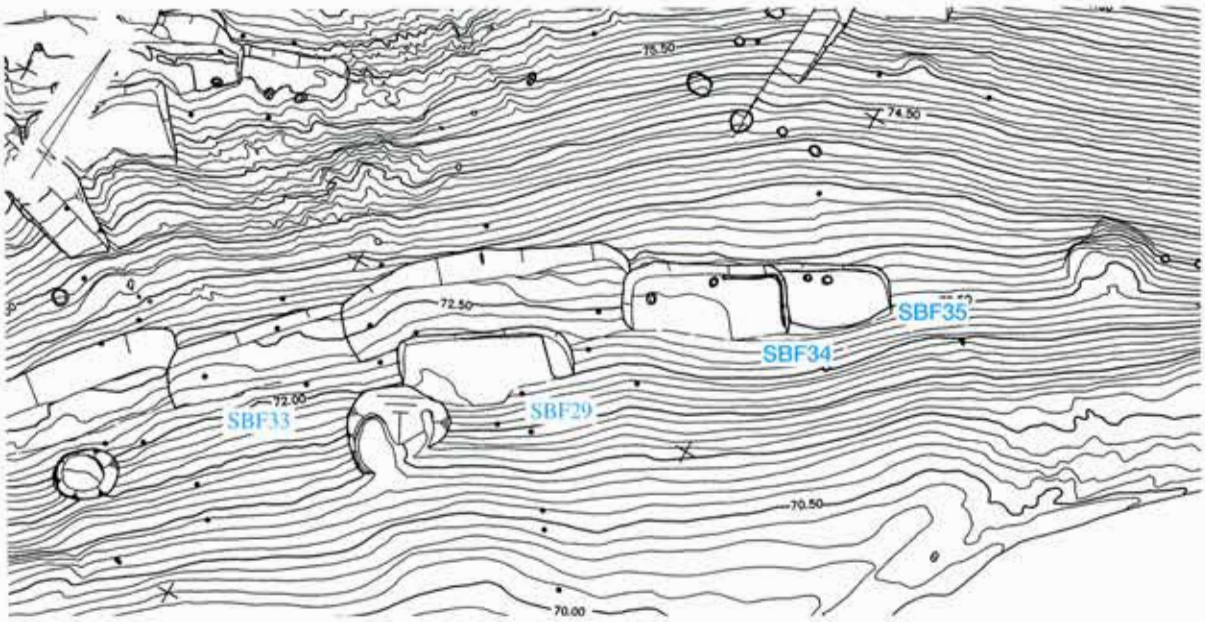
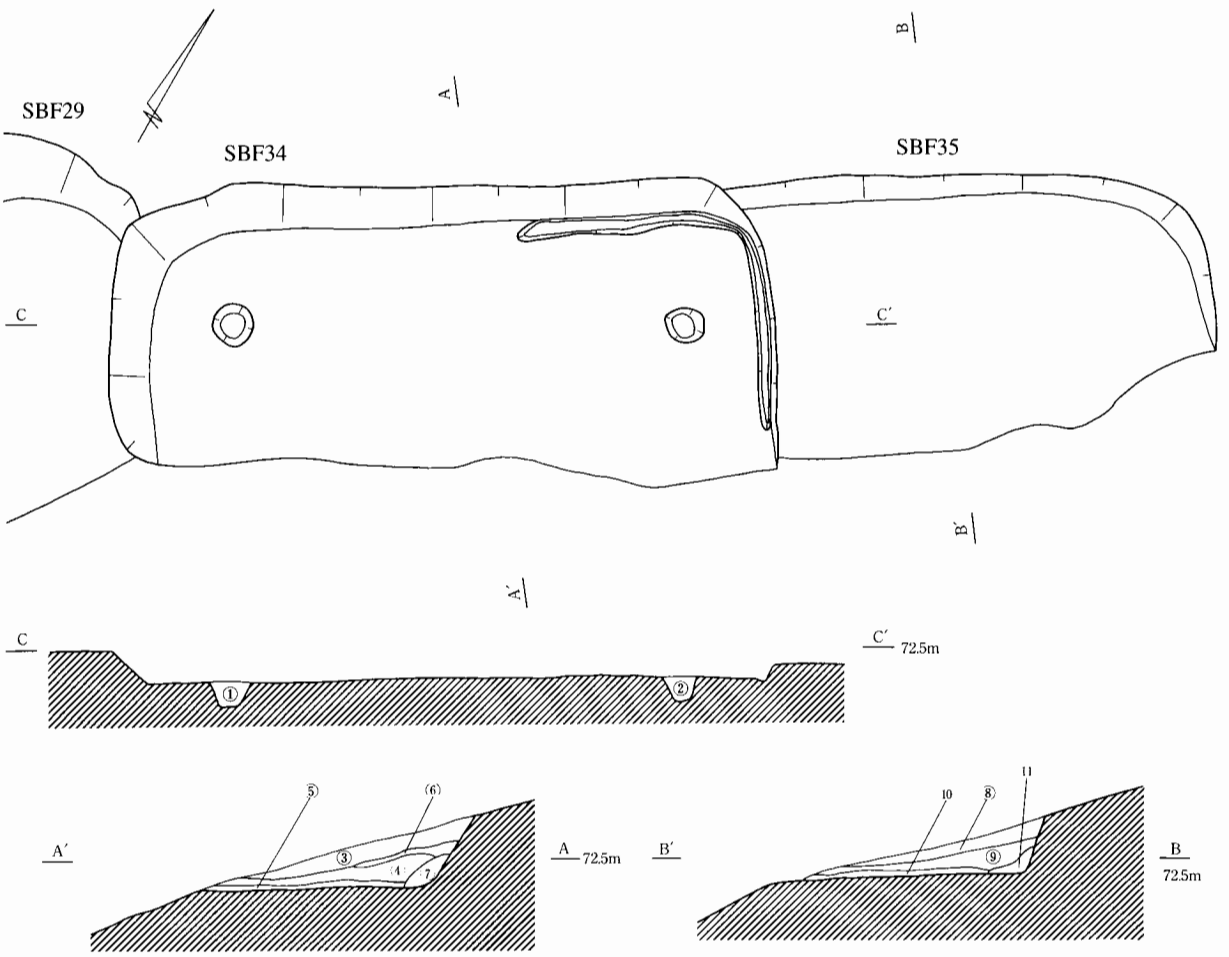


図158　SBF34・35周辺地形図（1/200）

部が出土していないが、大きさから高坏Ｄ類と考えられる。2282は器台で、坏部がやや急に開いている。2287は、器部の内彎がやや不自然であるが、外面にはタテ方向のミガキが施されており、器台と考えられる。器部の2282はやや古相を示す可能性はあるが、小型品のためよくはわからない。2283は壺Ｂ２類であり、胴部は無いものの底部にはハケ調整の痕跡を残す。口縁部外面はナデ調整で飾らない壺である。2284は壺の胴部で、外面に残されているだけで４条の波状文と、１条の横線を上から順に入れ、その下方はタテ方向のミガキを施している。2285は横線・波状文・横線を入れた後に、羽状列点を加えている。2288は壺Ａ１類で、口縁部をつまみあげて、外面の段部をつくり、そこに３条の横線を入れている。2289は壺Ａ２類であるが、口縁部の平坦面わずかで、これに続く頸部は、斜めにではなく、ほぼ垂直につくられている。2288・2289は赤彩が施されている。2290は小型の壺の底部であり、2291は、壺の底部である。2292も壺の底部であるが、外面に、2312の調整と類似した、棒状工具で施したと考えられる、粗いミガキが施されている。2293・2294はどちらも壺の胴部片であるが、2293には頸部付近に縦長の列点が入れられ、2294には横線・列点・波状文が上から順に入れてれている。2296はやや小型の鉢で、口縁部外面には横線文の列点が順に入れられているが、列点と横線の間のわずかの空間に、短く丁寧なミガキを施されている。2297は鉢Ｂ類で、口縁部外面には横線文・列点文の順に入れた後に、ヨコ方向・タテ方向の順にミガキを施されており、内面にも同様にミガキを施されている。2305は小型の鉢で、全体のプロポーションは鉢Ｂ類とほぼ同様であるが口縁部の段がやや開いている。2298は甕Ｂ類で、胴部が丸く張り、口縁部外面には横線、胴部には横線・棒状工具による列点文を上から順に入れている。2295・2300・2301は甕Ｂで、どれも口縁部外面に横線文を入れているが、2295・2300は段がやや強く、2301は横線の下部に非常に小さな列点文をいれている。2302は甕Ｄ類で、口縁部外面には段をつけて横線を入れ、内面は少しつまみ上げている。2303は口縁部を短く内彎させた甕で、口縁部外面を肥厚させるために粘土を貼り付けている。この後ナデ調整を施しているが、粘土を貼り付けた痕跡はナデ消されてはいない。また摩耗が激しく、内外面の調整も

不明である。2304は甕Ｇ類で、口縁部に段をつけここに横線を入れている。2306は甕Ｆ類であるが、直立した口縁部には擬凹線はみられず、直立口縁のみが残り、外面はナデ調整を施したものである。胴部は比較的よく張り、全面に煤が附着している。2307は壺の底部でである。2308・2309・2310・2311・2312は平底の甕の底部である。2311は壺の可能性も否めないが、胎土が比較的粗く、外面に煤が附着していることから甕とした。また、2312は、2292と類似したミガキが最終に施されている。2313は小型の台付甕の台部で、端部をややつまみ上げており、おそらくは充填接合が行われていたものと考えられる。2314・2315・2316・2317・2318も台付甕の台部である。このうち2314・2317・2318は、充填接合によって台部と胴部を接合している。

なお、この竪穴住居跡は比較的浅いと考えられる高坏Ｃ類と、口縁部が長くのび、ここにミガキが施されている鉢Ｂ類が出土していることから、Ⅱ－４期に所属するものと考えられる。また切り合いから、ＳＢＦ35よりは新しいものと考えられる。



①10YR3/4(暗褐)砂質土。②10YR2/2(黒褐)砂質土。
③10YR2/2(黒褐)砂質土。砂岩小礫を含む。炭片混入。
④10YR3/4(暗褐)砂質土。砂岩小礫を含む。
⑤10YR4/6(褐)に3/4(暗褐)が混入。粘質土。
⑥④と同様。砂岩小礫を多く含む。
⑦10YR3/4(暗褐)に4/6(褐)が斑点状に混入。
⑧7.5YR3/2(黒褐)砂質・粘質土の混入土。砂岩小礫を多く含む。
⑨⑧と同様。砂質強い。砂岩混入少ない。
⑩7.5YR3/2(黒褐)に5/8(明褐)が混入。砂質強い。床に最初に積った土。
⑪7.5YR3/2(黒褐)に5/8(明褐)が斑点状に混入。砂質土。　地山（粘質土）。

図159　SBF34・35実測図

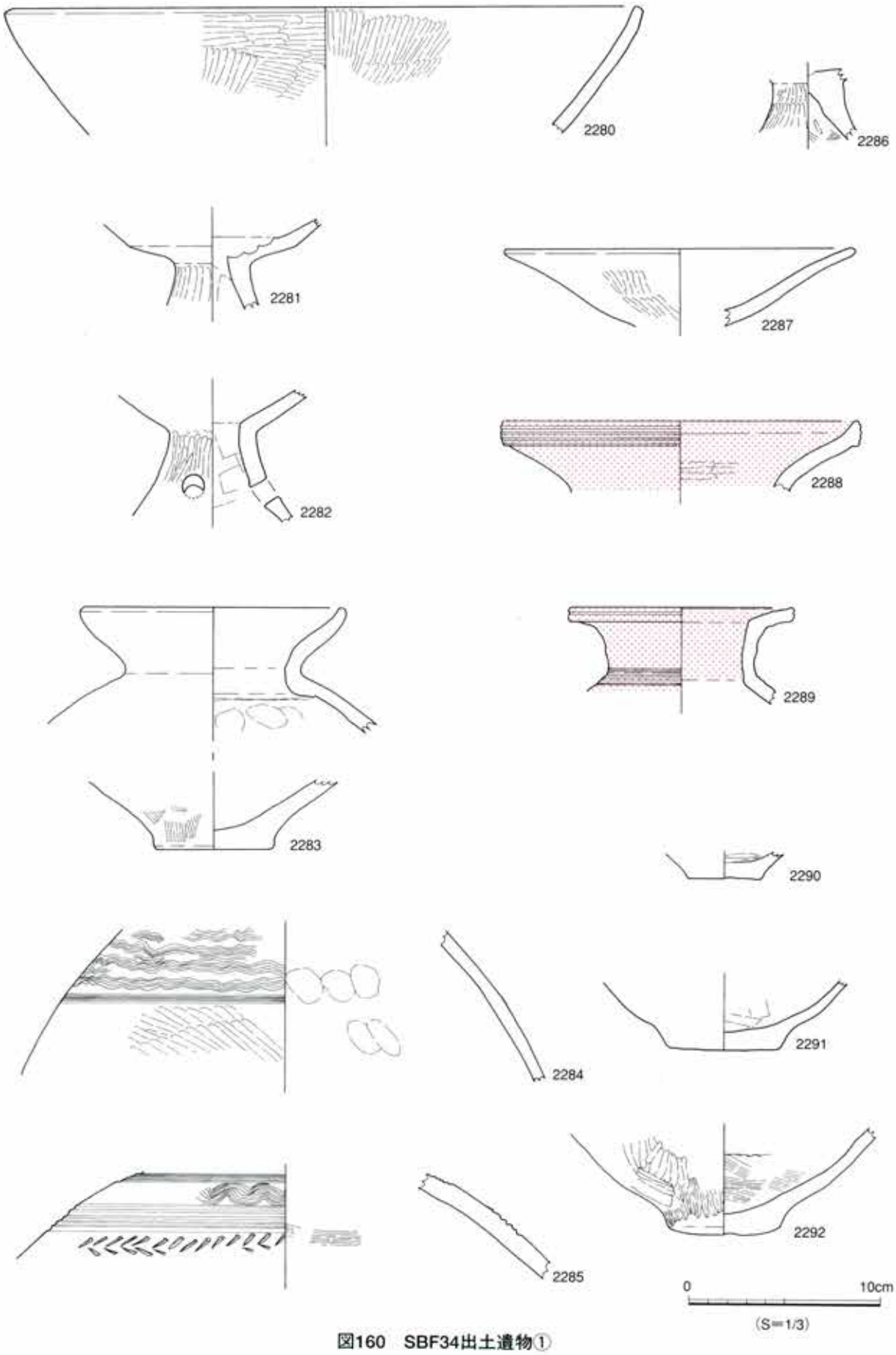


図160　SBF34出土遺物①

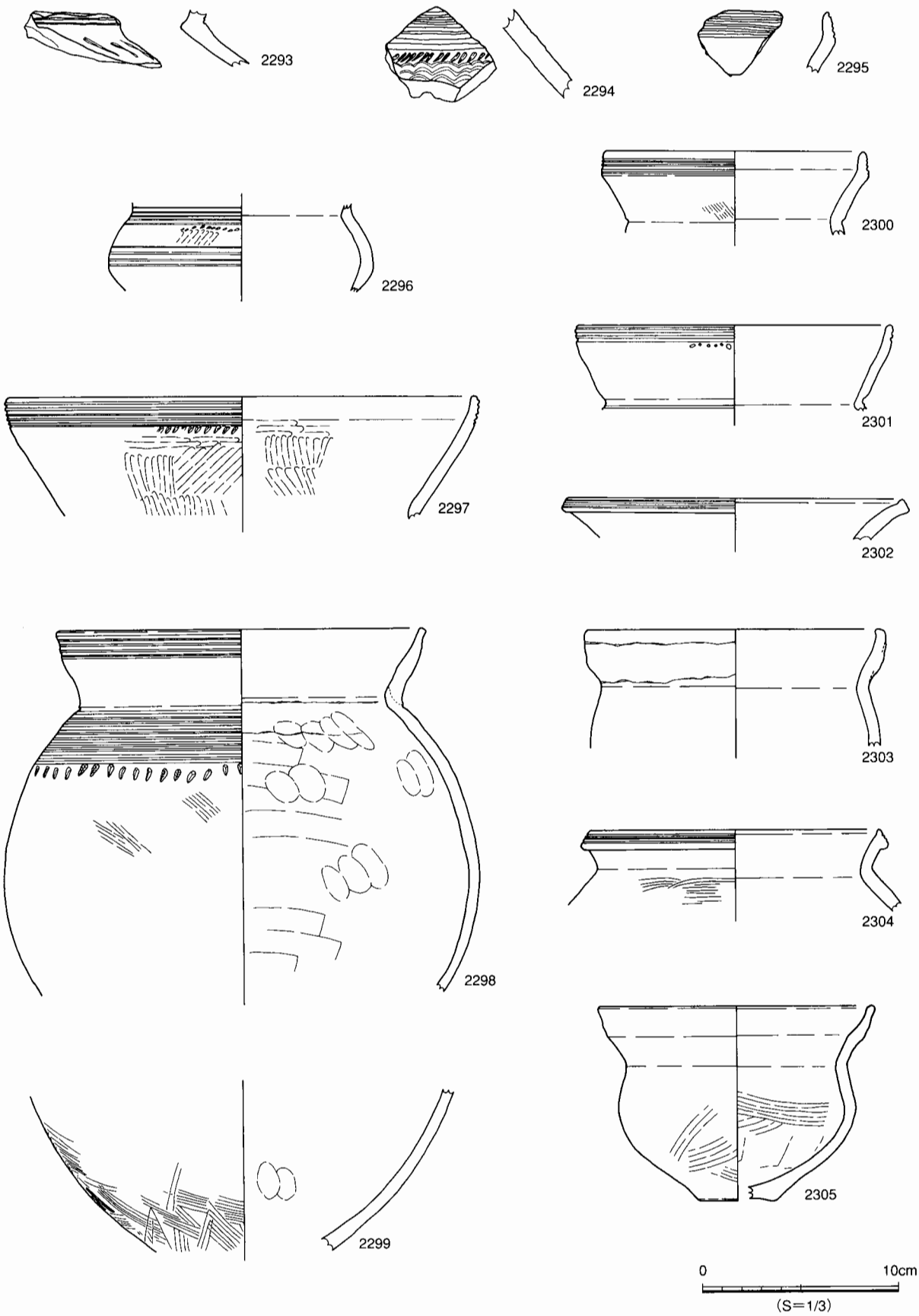


図161　SBF34出土遺物②

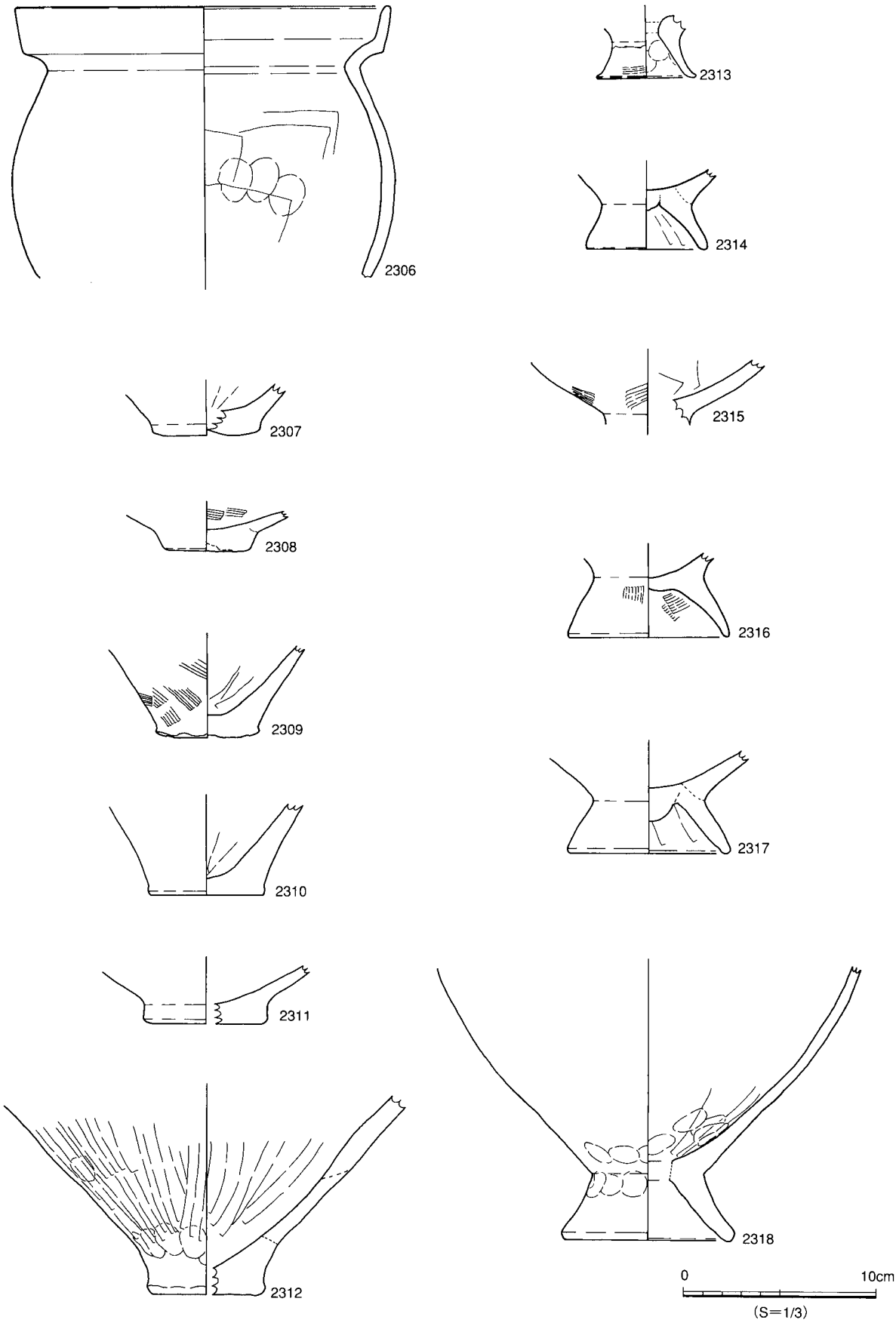


図162　SBF34出土遺物③

ＳＢＦ35

遺構（地形図158，図159，図版17）31Ｋグリッド

東丘陵の東向き斜面、端部付近の斜面に立地する。幅2.55m・奥行き1.95m（共に現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。ＳＢＦ36と全く同じ方向でつくられており、これに床面を切られている。床面はかなり崩落していたが、床面は比較的堅く、しっかりとしていた。柱穴・壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物と所属時期（図163）

出土遺物は比較的多かったが、小片が多く、このうちの５点を図示した。2319は壺Ａ２類の口縁部で、外面は端部を肥厚し、下部に垂下させ幅広の面をつくってそこに横線を入れている。頸部には貼り付けの隆帯を入れている。内面は端部からやや窪んだ平坦面をつくって盛り上げ、ここに横線を入れた段をつけている。平坦面にはヨコ方向の、頸部にはタテ方向のミガキを施し、赤彩している。2320は、甕Ｇ１類で、口縁部を上から弱く押し引き、横から強くナデている。2321は鉢の口縁部で、外面に不定方向のミガキを施している。鉢として分類したが、甕の可能性も否めない。2322は壺Ｃ２類で、外面の口縁部には横線を入れてタテ方向のミガキを施しており、内面にはハケ・指押圧痕を残している。2323は壺Ａ２類の底部で、接地面付近は上から下に、上部は下から上にミガキを施しており、赤彩されている。

なお床面直上からは、口縁端部を垂下させた新相を示す壺Ａ２類が出土している。このことから、この住居跡はⅡ－４期に所属するものと考えられる。また切り合いから、ＳＢＦ34・ＳＢＦ29よりは古いものと考えられる。

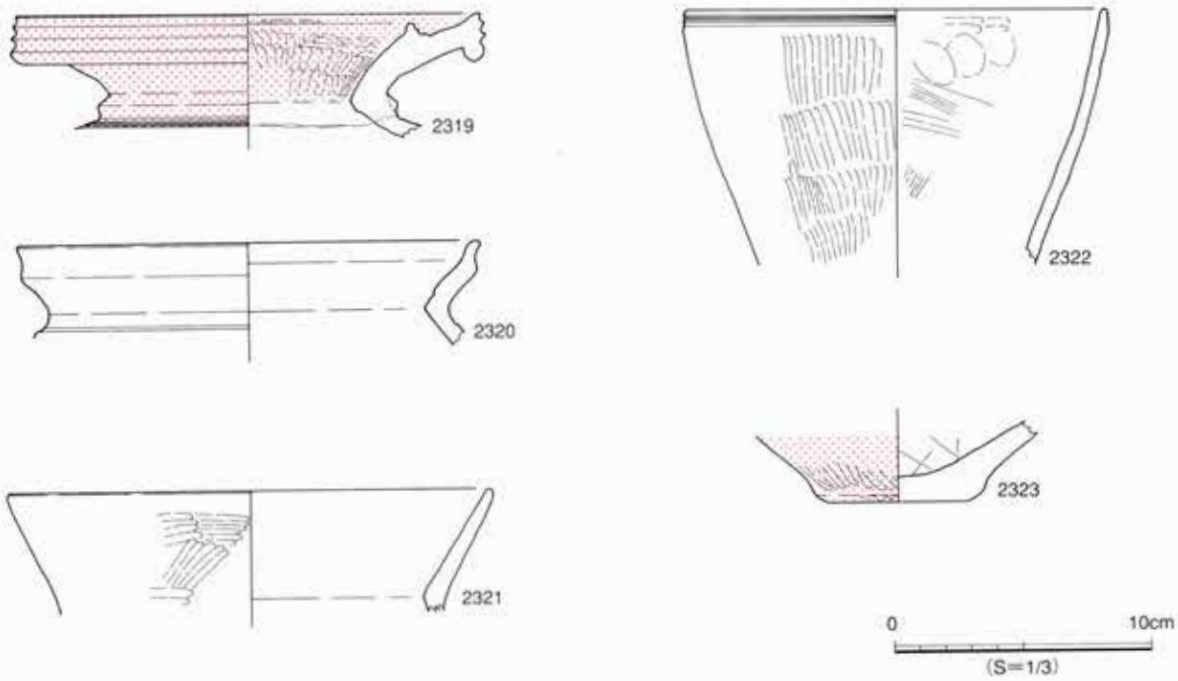


図163　SBF35出土遺物

ＳＢＦ38

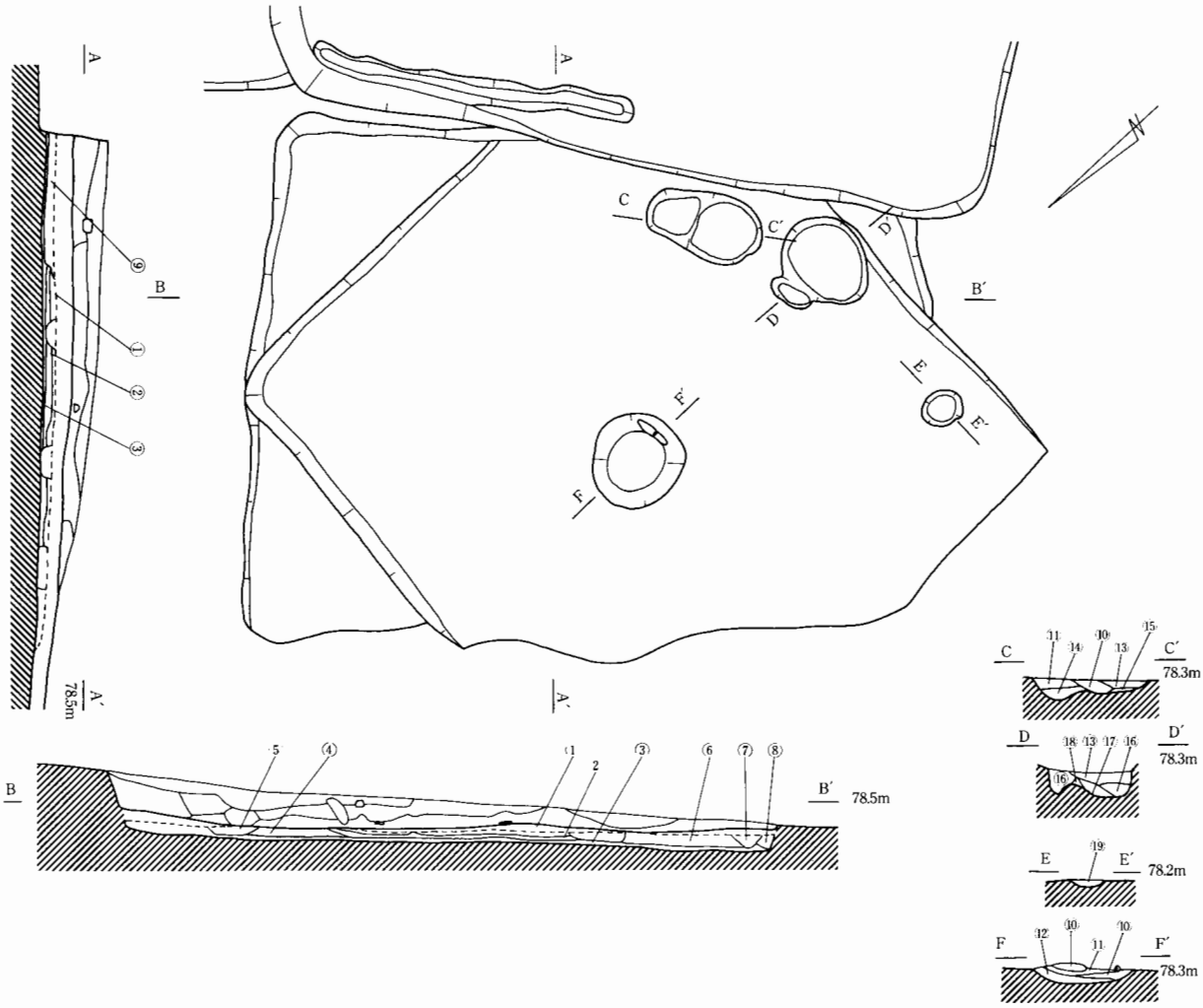
遺構（地形図113，図164，図版17）24Ｋグリッド

東丘陵の尾根頂上部付近の平坦地に立地する。この上層にはＳＢＡ05があり、南側はＳＢＦ08に切られている。幅3.62ｍ・奥行き4.11ｍ（現存長）の長方形で、粘質土を掘って床面をつくっている。谷側の傾斜は緩やかであるが、竪穴の立ち上がりは崩落のため確認できない。床面直上には、遺物のほかに、炭化材も散乱していたが、量は少なく、焼失家屋の可能性は低い。柱穴と考えられるピットが１基と、廃棄土坑と考えられる形状の類似した土坑が２基確認できた。また、中央部付近には川原石を炉石に用いた地床炉がある。周溝・貼り床は確認できなかった。埋土は薄かったが、床面直上の遺物は比較的良好に残っていた。この住居跡は、西側の裾部がＳＢＡ05と２段になっていたためにわかったもので、上層からのセクションも記録してある。ＳＢＡ05の床面が硬く焼き締まっていたことから、人為的に竪穴を埋めて上層にＳＢＡ05を立て直したと考え事もできるが、それに足る確証を得ることはできなかった。なおＳＢＦ38周辺の竪穴住居跡の新旧関係は、ＳＢＦ38・ＳＢＡ05・ＳＢＦ08・ＳＢＦ04・ＳＢＦ05・ＳＢＦ06の順に造られたことが確認されている。またＳＢＦ11は、ＳＢＦ08より古い事が確認されている。この丘陵頂上部には、今掲げた切り合いのある竪穴住居跡のほか、ＳＢＡ01や、ＳＢＦ01なども造られており、深橋前遺跡の範囲の中で、最も竪穴住居跡が集中している地点である。さらに、これらの竪穴住居跡からは、豊富で良好な土器が多く出土しているほか、銅鏃・筒状銅製品などの金属製品も出土している。以上の根拠から、この地点付近が、この集落の中心的な場所であったことは間違いがないのではなかろうか。

遺物と所属時期（図165）

埋土が非常に薄かったわりには、出土遺物は良好で、このうちの７点を図示した。2324は高坏Ｅ類で、口縁部には横線が３条入れられ、タテ方向のミガキがわずかに残されている。脚部は撥形に開くものの、端部はやや内彎する。穿孔は比較的大きく、１孔３組３穿孔であったと考えられる。2325は高坏の脚部で、大きさから高坏高坏Ｄ類の可能性が高い。2326は甕Ｄ類で、口縁部の屈曲は緩やかであり、底部は平底で条痕の調整に擬してハケ調整を掻き上げるように施している。甕Ａ類の影響と考えられる。外面は最終調整がハケで、列点文をいれており、口縁部のみ板ナデの調整を残している。内面は全体的に板ナデ調整を施しており、ところどころに指頭圧痕を残している。2327・2328は甕Ｇ類で、2327は口縁部に４条の横線を入れており、2328は口縁端部にキザミを入れている。2329は鉢Ｂ類で、口縁部は長く伸び、端部には細かいキザミを入れている。胴部には横線を５条入れ、この下部に口縁部にキザミを入れた工具と同様の工具を用いて列点文を入れている。胴部の下部はヨコ方向のミガキを施している。2330は甕Ｄ類で、甕Ａ類のプロポーションとはさらに2326とプロポーションが非常によく似ており、擬口縁の技法を用いた底部の可能性が高い。

なおこの竪穴住居跡は、脚部が撥形に開いた高坏Ｄ類が出土していることからⅡ－２期に所属するものと考えられる。



①7.5YR2/3(極暗褐)に7.5YR3/4(暗褐)・7.5YR4/6(褐)が斑点状に混入。粘質土。砂岩小礫・炭化材片片・焼土など多く混入。
②①と同様。7.5YR4/6(褐)の割合多い。
③①と同様。7.5YR5/8(明褐)が混入。
④7.5YR3/4(暗褐)・7.5YR4/6(褐)の混入土。締りあり。
⑤7.5YR4/3(褐)・7.5YR3/4(暗褐)の混入土。砂質土。
⑥7.5YR4/6(褐)砂質土。
⑦7.5YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が混入。
⑧⑦と同様。7.5YR2/3(極暗褐)が多い。
⑨7.5YR4/6(褐)砂質土。
⑩2.5YR4/8(赤褐)熱による硬化。
⑪7.5YR3/4(暗褐)と7.5YR4/6(褐)の混入土。炭片混入。締りなし。
⑫7.5YR3/4(暗褐)と7.5YR4/6(褐)の混入土。
⑬7.5YR3/4(暗褐)と7.5YR4/6(褐)の混入土。
⑭7.5YR3/4(暗褐)と5/3(にぶい褐)の混入土。
⑮7.5YR5/8(明褐)と7.5YR3/4(暗褐)の混入土。
⑯7.5YR3/4(暗褐)と7.5YR4/6(褐)の混入土。
⑰2.5YR4/8(赤褐)と2.5YR5/8(明褐)の混入土。
⑱7.5YR3/4(暗褐)と7.5YR4/6(褐)の混入土。
⑲7.5R2/3(極暗赤褐)
地山　粘質土。

図164　SBF38実測図

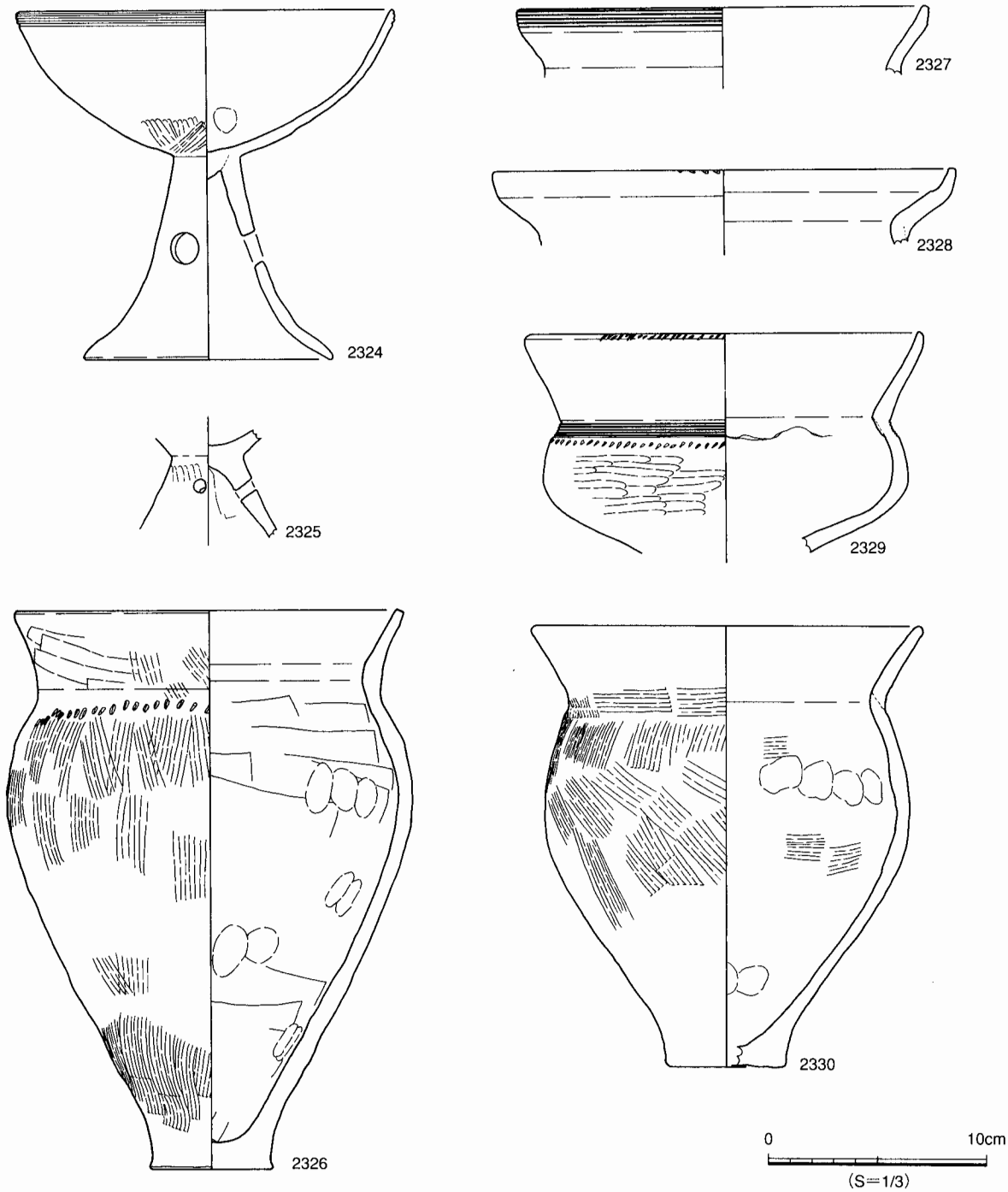


図165　SBF38出土遺物

ＳＢＦ39

遺構（地形図140，図166，図版17）28 J

東丘陵の東向き斜面、尾根の中腹部より少し下った急斜面に立地する。幅2.95m・奥行き1.25m（共に現存長）の方形で、粘質土を掘り抜いて山側の床面を削りだしている。この住居跡は、調査最終日に、地山と確認されていた堆積土のすべてに入れたトレンチの下から確認されたものである。規模が小さく出土遺物も少なかったが、床面は硬く締まり、１基ながらも比較的しっかりとした柱穴と考えられるピットも確認できたことから、竪穴住居跡としたが、その他の遺構の可能性も拭えない。

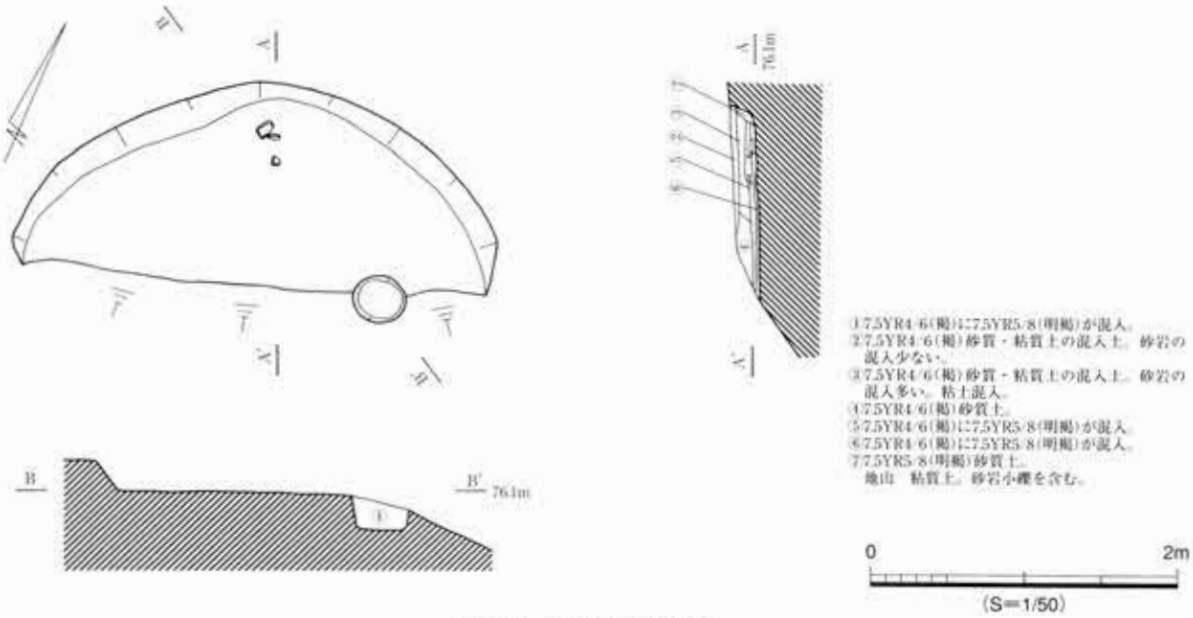


図166　SBF39実測図

壁溝・地床炉・貼り床は確認できなかった。なお、この竪穴住居跡の掘り込みの上端から広がる古層の地表面（当時の自然地形面）は、確認できなかった。

遺物と所属時期

出土遺物は、小片が多く、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないがⅡ期の範疇としておきたい。

1号方形周溝墓

遺構（地形図167，図168，図版18）10Yグリッド

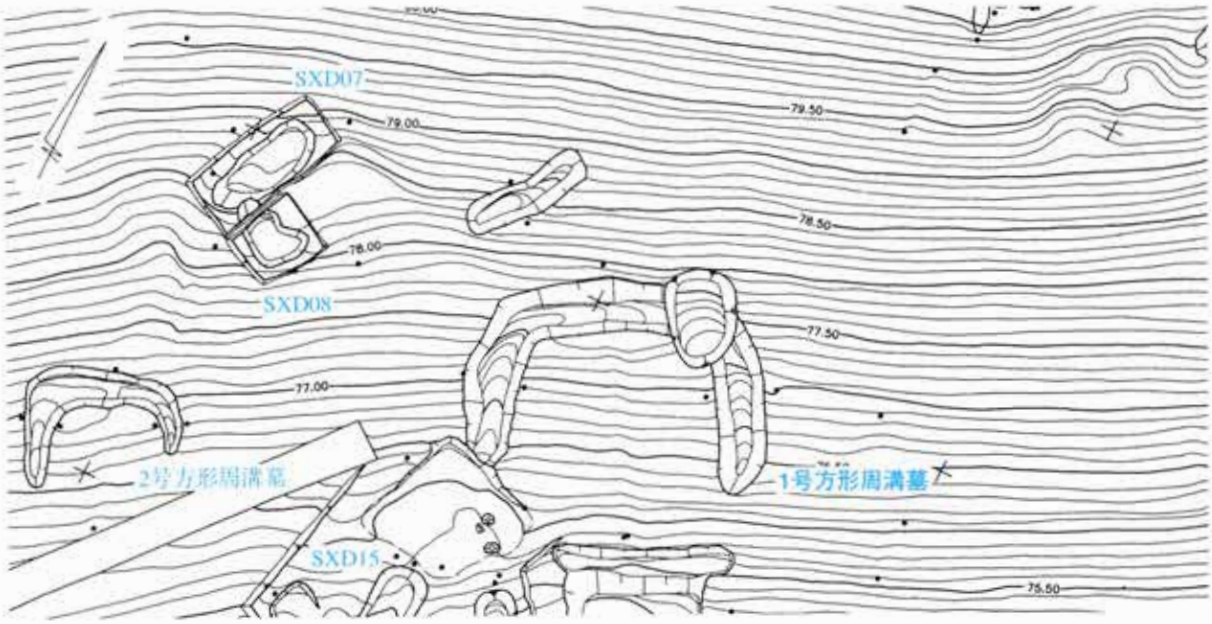
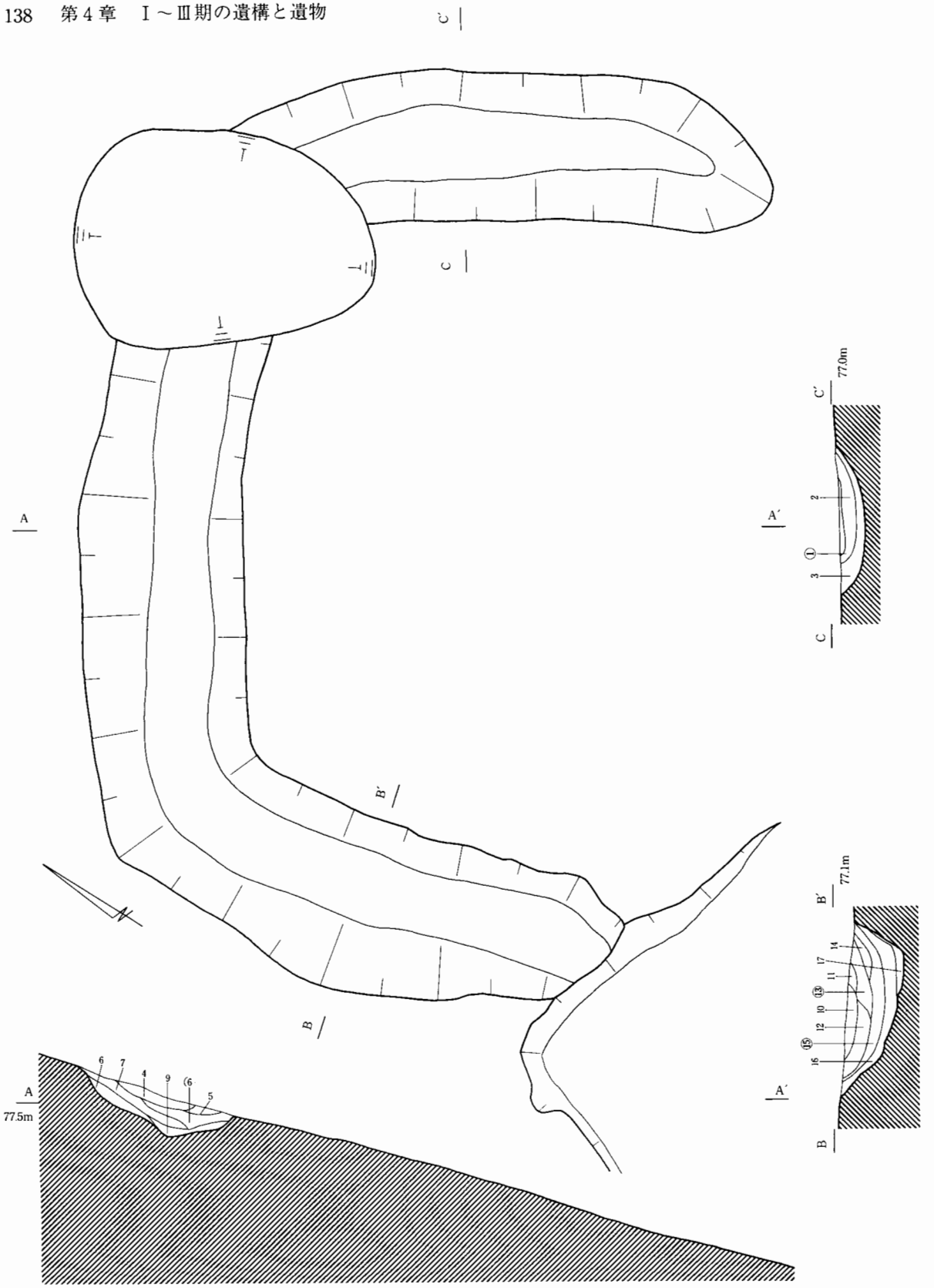


図167　1号方形周溝墓周辺地形図（1/200）



①7.5YR2/1(黒)粘質土。締まりなし。
②7.5YR3/2(黒褐)粘質土。締まりなし。
③7.5YR2/1(黒褐)粘質土。締まりなし。
④7.5YR2/1(黒褐)砂質土。締まりなし。
⑤7.5YR3/2(黒褐)粘質土。締まりなし。
⑥7.5YR4/2(黒褐)砂質土。締まりあり。
⑦②と同様。
⑧7.5YR5/4(褐)粘質土。締まりあり。
⑨①と同様。
⑩④と同様。
⑪②と同様。
⑫①と同様。
⑬⑤と同様。
⑭7.5YR3/3(暗褐)粘質土。締まりなし。
⑮①と同様。
⑯7.5YR3/2(黒褐)粘質土。締まりあり。
⑰7.5YR4/2(灰褐)粘質土。締まりなし。
地山　粘質土

図168　1号方形周溝墓実測図

1・2・3号方形周溝墓は、東丘陵の西向斜面、尾根から少し下った斜面にD区の緩やかな谷部を囲むようにして立地する。これらの中軸線は、斜面に直行するように造られているようにみられる。南側のコーナー付近をＳＸＤ15に切られ、北側のコーナー付近は攪乱によって喪失している。比較的残存状況はよく、幅7.90m・奥行き5.25m（現存長）の方形で、周溝は最大幅は1.25m・最大深さ0.54mであり、山側は岩盤を谷側は粘質土を掘って周溝を造っている。

本遺跡に存在する4基の方形周溝墓は、谷側が開放する「コ」の形状を呈している。本来は四隅がまわって、「口」の形状であった可能性もあるが、谷側の周溝が土砂の流失のため失われたために、谷側が開放する「コ」の形状になったと考えられる。また、すべてについて入念な検出と断ち割り調査を行ったが、台状の盛土・主体部と考えられる土坑・ブリッジ状の周溝の切れ目などは確認できなかった。したがって、方形周溝墓の全容を窺うことはできなかった。なお、方形周溝墓の造られているD区の南東部からE区の北西部にかけては、多少竪穴住居跡の希薄な場所とはいえ、同時期のものと考えられる方形周溝墓と竪穴住居跡が、かなり近接して造られていた。居住域と墓域は違うエリアを構成しようとするのが普通と考えられるため、やや不自然さは否めない。しかし、本遺跡ある関市に隣接する、富加町大平賀の後平遺跡でも弥生時代末から古墳時代初頭の方形周溝墓と竪穴住居跡が近接して造られている。後平遺跡も斜面に造られた集落であることから考えて、土地利用の関係で、このような立地になった可能性も想定できよう。

遺物と所属時期

遺物の出土は極めて少なく、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかないが、Ⅱ期の範疇としておきたい。

2号方形周溝墓

遺構（地形図169，図170，図版18）82グリッド

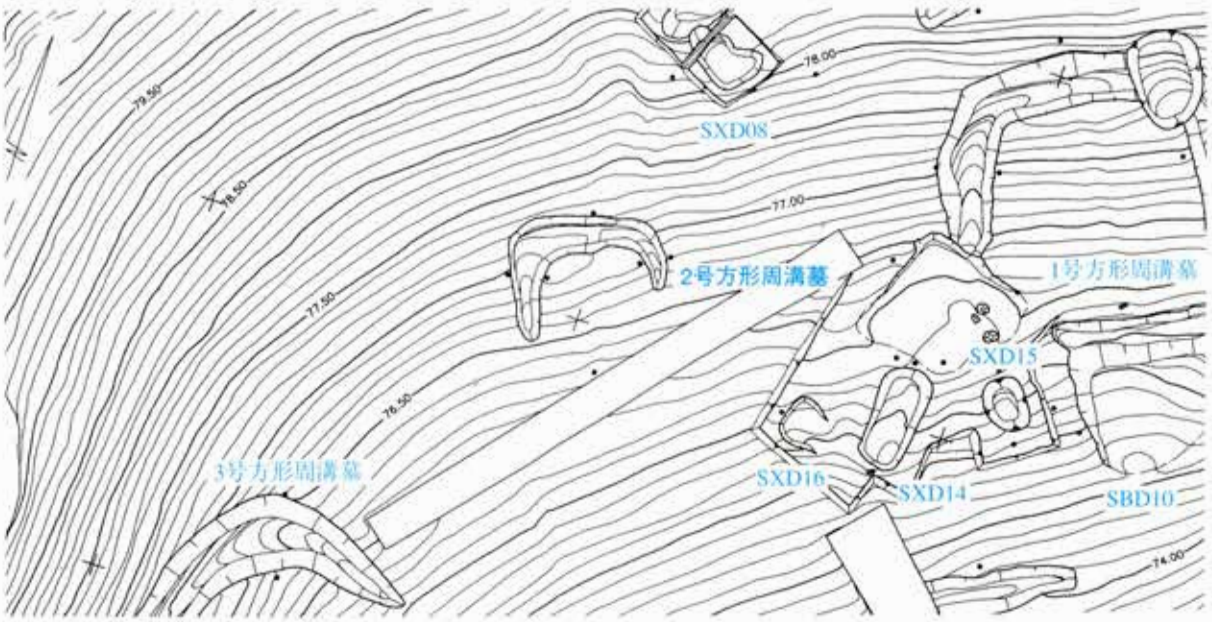


図169　2号方形周溝墓周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向斜面、尾根から少し下った斜面に立地する。幅4.20m・奥行き3.23m（現存長）の方形で、周溝の最大幅は1.13m・最大深さ0.25mである。周溝の北東隅は、方形の一隅をやや崩している。

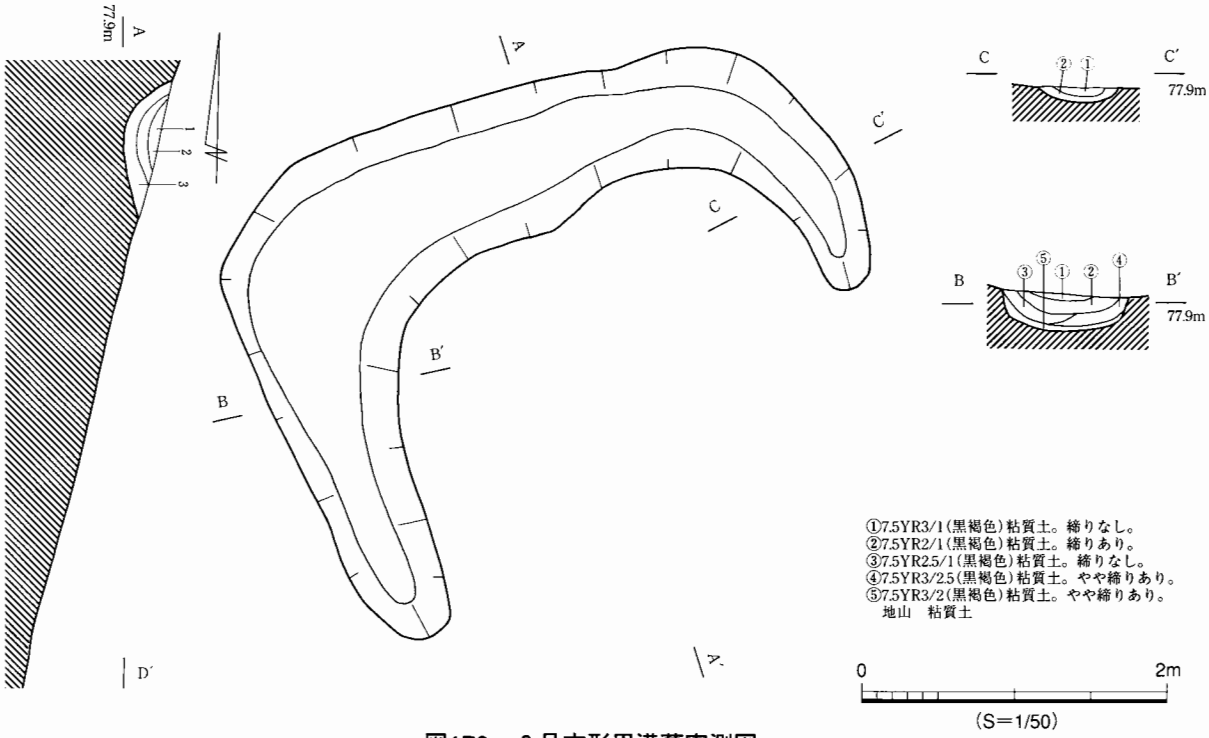


図170　２号方形周溝墓実測図

遺物と所属時期（図171）

出土遺物は少なく、図示に耐えうる遺物は５点のみである。2331は高坏の脚柱部である。2332は壺の胴部で横線の下部に、細い竹管状工具を簾状にして刺突したものと考えられる、列点文が入れられている。2333は甕Ａ類の口縁部で、タテ方向の条痕が施され、口縁端部には同様の工具を用いたキザミが入れられている。2334は甕Ｂ１類の口縁部で、胴部にはミガキが施されている。広口壺の中では、小型のものである。

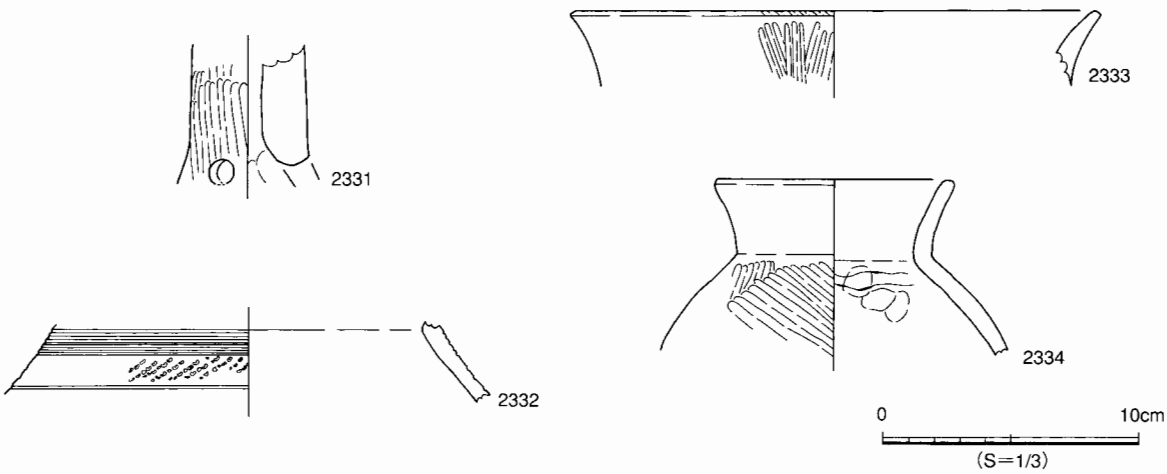


図171　２号方形周溝墓出土遺物

なお、この周溝墓は甕Aと脚柱部やや長い高坏が出土していることから、Ⅱ－3期に所属するものと考えられるが、周溝内に流れ込んだ遺物であるため断定はし難い。

3号方形周溝墓

遺構（地形図172，図173，図版18）7Bグリッド

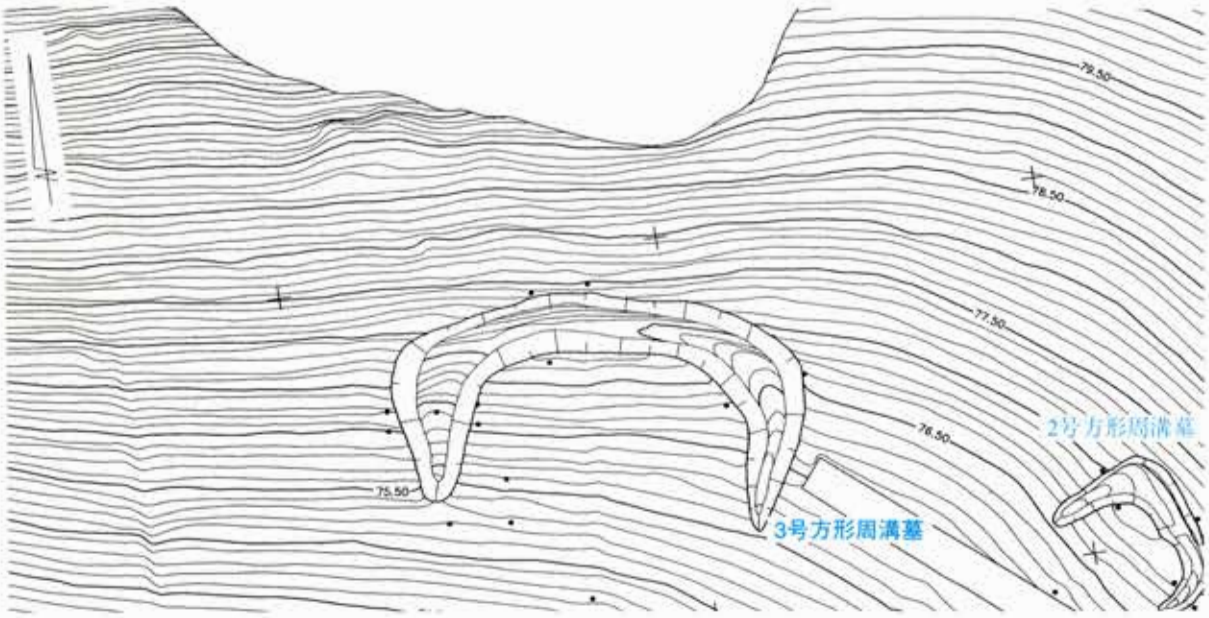
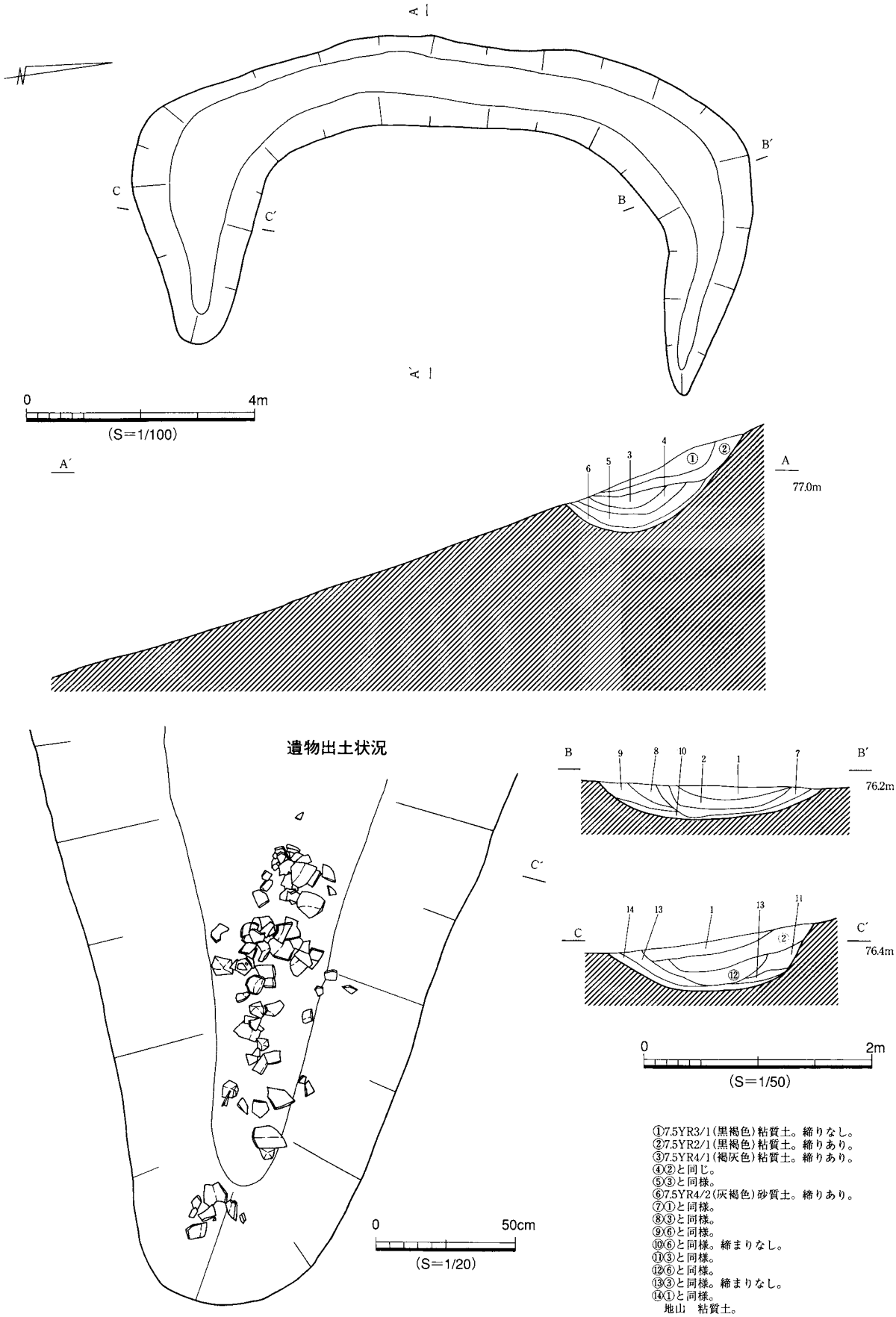


図172　3号方形周溝墓周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向斜面、尾根から少し下った斜面に立地する。幅11.1m・奥行き5.81m（現存長）の方形で、周溝の最大幅は1.56m・最大深さ0.52mである。山側の周溝はやや丸みを帯びているが、4基の方形周溝墓の中で最も大きなものであり、粘質土を掘って周溝を造っている。また周溝の南西方向からは、高坏や長頸壺などが、残存の良好な状態で、集中して出土している。これは、この方形周溝墓に供献された土器が、周溝内に転落した可能性も考えられる。

遺物と所属時期（図174，175）

出土遺物は良好で、このうちの9点を図示した。2335は高坏C類で、坏部・脚部ともに内彎傾向を持ち、坏部は内外面に、脚部は外面にタテ方向のミガキを施している。また、脚部の内面には指ナデ、ハケ、板ナデ調整を施した後に、ミガキを施しており、高坏の製作過程を検証するために役立つものである。2236も高坏C類であり、2235と同様に、坏部には内彎傾向を持つ。坏部の端部内面には、粘土を折り返して張り付けやや肥厚させた上に、多条沈線を入れている。2237は高坏の脚部である。2338は壺C1類であり、胴部に対して口縁部が長い上に、極端に大きく膨らんでいる。口縁部外面には、横線を入れ、外面、口縁部内面に、丁寧なミガキを施している。2339は壺B1類で、口縁部外面には横線を入れ、胴部には横線を入れた後に、ハケ状工具を用いたものと考えられる羽状の列点文を入れており、全体に亘って不定方向のやや幅広のミガキを施している。内面は口縁端部付近に棒状工具を用いたものと考えられる、列点文を入れ、不定方向にミガキを施している。大型の広口壺であるが、口縁部外面にハケ調整痕を、底部付近に指ナデ痕を残しており、やや粗雑な面も窺える。2340は



①7.5YR3/1(黒褐色)粘質土。締りなし。
②7.5YR2/1(黒褐色)粘質土。締りあり。
③7.5YR4/1(褐灰色)粘質土。締りあり。
④②と同じ。
⑤③と同様。
⑥7.5YR4/2(灰褐色)砂質土。締りあり。
⑦①と同様。
⑧③と同様。
⑨⑥と同様。
⑩⑥と同様。締まりなし。
⑪③と同様。
⑫⑥と同様。
⑬③と同様。締まりなし。
⑭①と同様。
地山　粘質土。

図173　3号方形周溝墓実測図

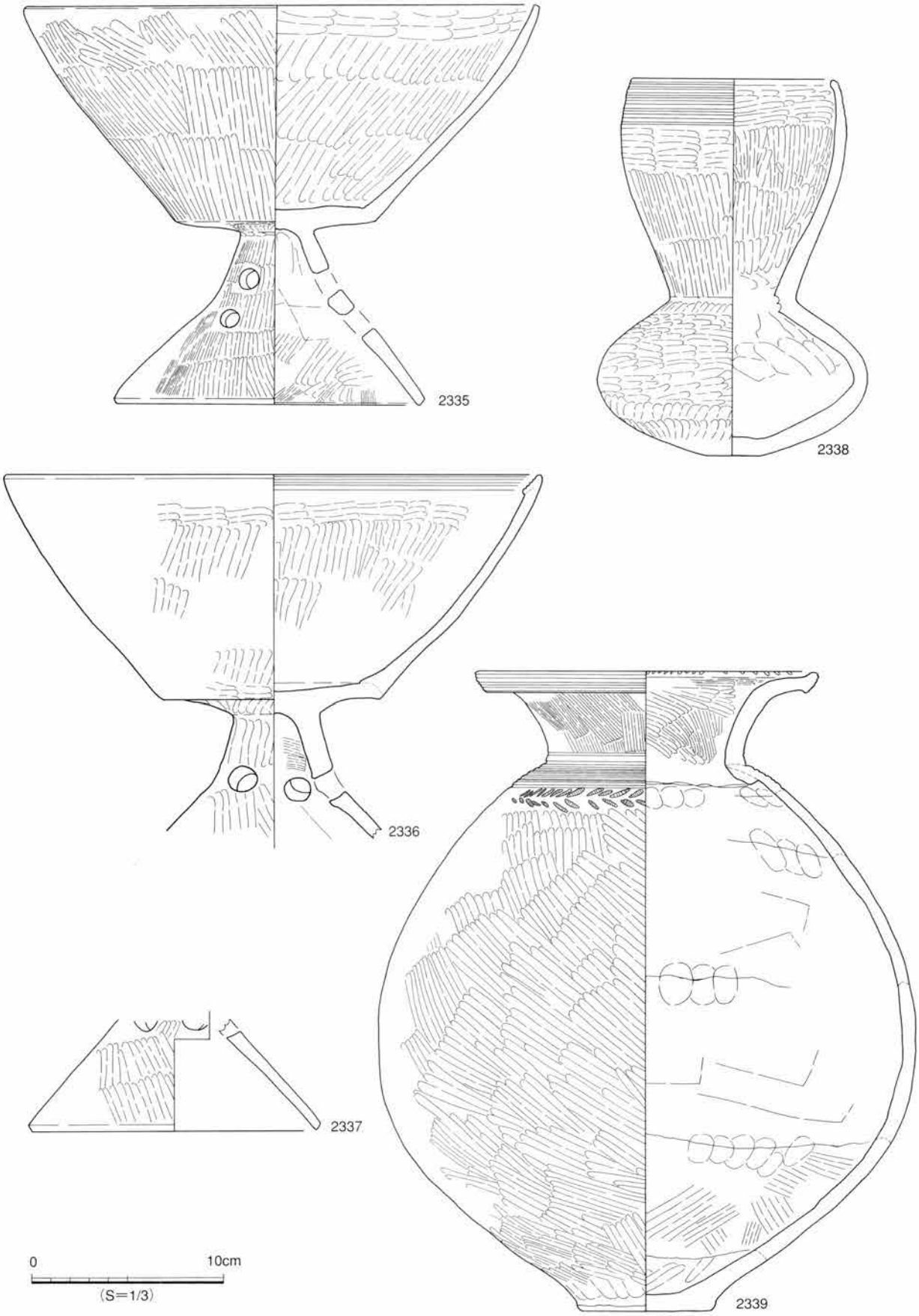


図174　3号方形周溝墓出土遺物①

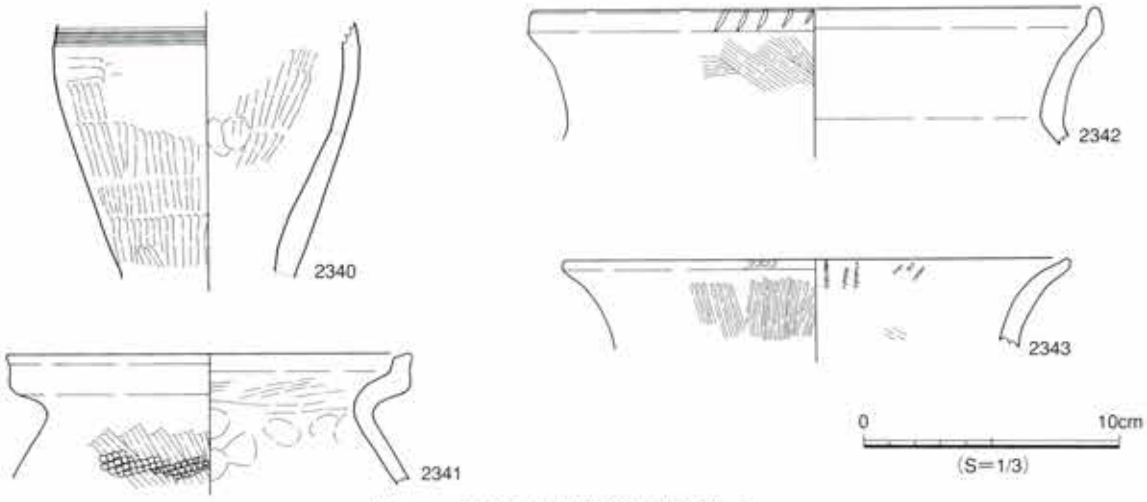


図175　3号方形周溝墓出土遺物②

壺C１類で、2338よりやや小型のもの。2341は甕B類で、胴部外面に粗いハケ調整を行った後に、同じ工具を用いて列点文を入れている。2342は甕C類であるが、口縁部外面の段がやや強い。2343は甕A２類で、口縁部外面には条痕調整を施したものと同じ工具を用いたキザミを、口縁部内面には列点文を入れている。この甕はやや古相を示しているが、破片で上層から出土しているものであり、混入と考えてもよいものであろう。

なおこの方形周溝墓は、短脚で多条沈線を入れた高坏C類が出土していることからⅡ－４期に所属するものと考えられる。

４号方形周溝墓

遺構（地形図176，図177，図版18）５Ⅰグリッド

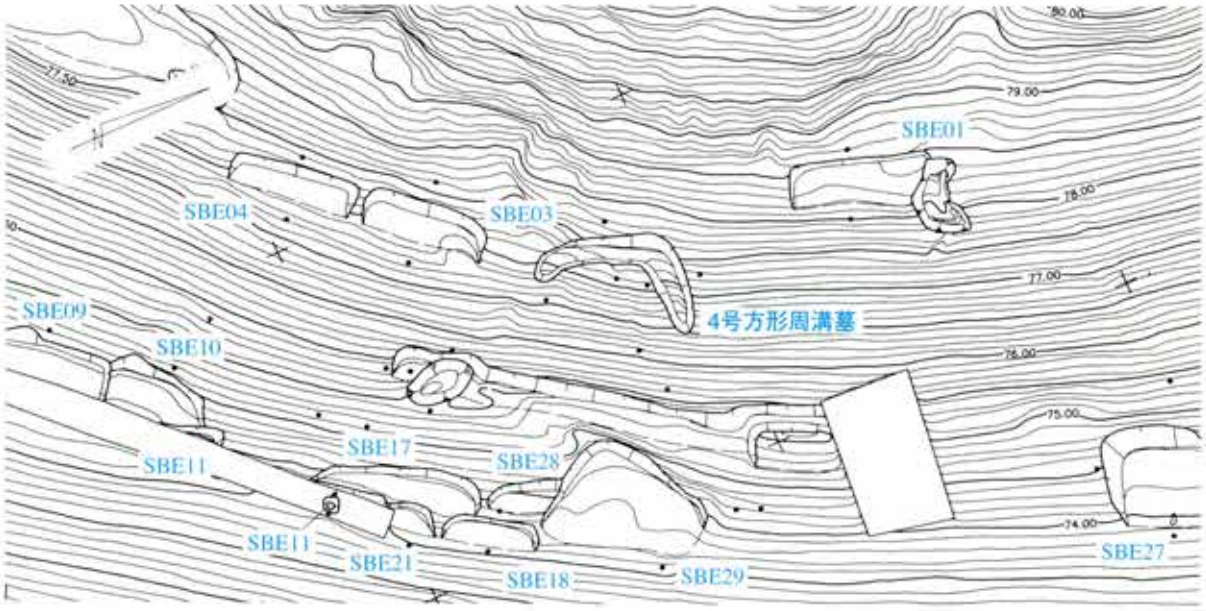


図176　４号方形周溝墓周辺地形図（1/200）

西丘陵の東向斜面、尾根から少し下った急傾斜地に立地する。幅3.91m・奥行き2.75m（現存長）の方形で、周溝の最大幅は0.92m・最大深さ0.21mであり、砂岩の岩盤を掘り抜いて周溝を造っている。ＳＢＥ01・02に挟まれて造られており、１～３号方形周溝墓とは少し離れている。最も小規模で、この中軸線は山の斜面に対して垂直ではなく、やや南方向に振っている。周溝は浅く、残存状況はあまり良好ではない。

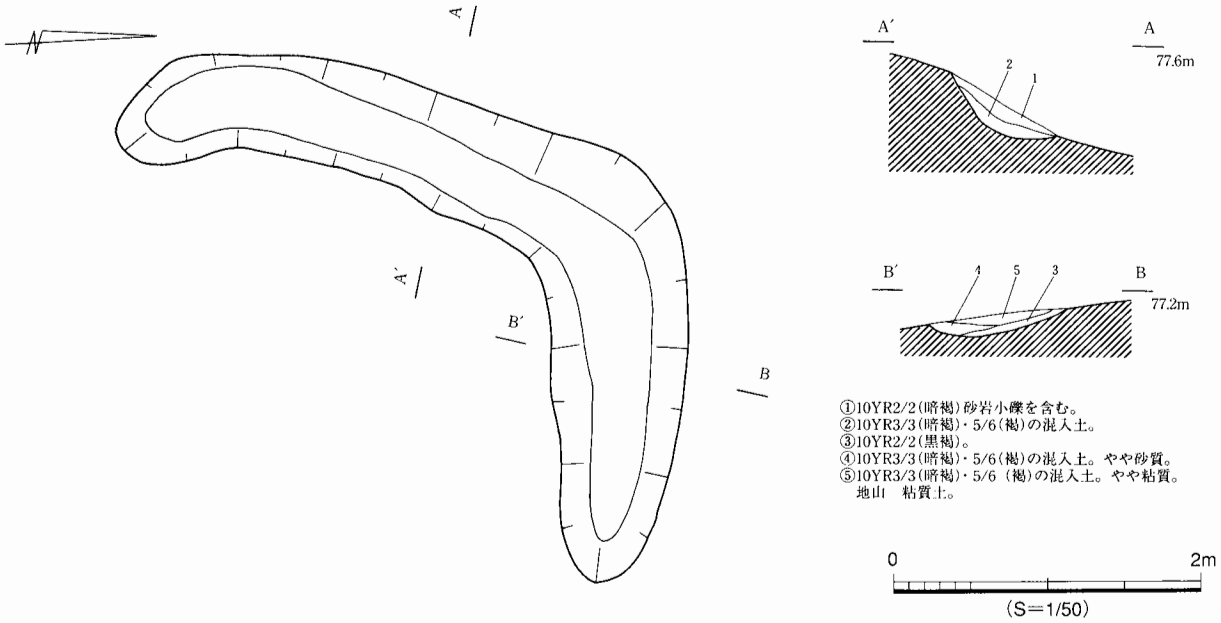


図177　４号方形周溝墓実測図

遺物と所属時期（図178）

出土遺物は良好で、このうちの９点を図示した。2344・2345・2346は高坏Ｂ類で坏部で、坏部がやや外反する。いずれもタテ方向のミガキが全面に施されていたようであるが、一部のみしか確認できない。2347は高坏の脚部でやや外反している。高坏Ｂ類である可能性が高いが、器台である可能性も否めない。2349は器台の器部で、内外面にタテ方向のミガキが施されている。2348は小型の鉢で口縁部にタテ方向のミガキが施されている。2350は鉢Ａ類で、外面口縁部の段部はナデを施し、その下部にはタテ方向の胴部にはヨコ方向のミガキを施している。また、胴部には横線を入れた後、スタンプ状の工具を用いて扇状の列点文を入れている。内面は丁寧にナデ調整が施されているが、胴部には指頭圧痕が一部残っている。2351は甕で口縁部は直線的に立ち上がるものであるが細分はできなかった。2352は甕Ｄ類で、口縁部はやや内側につまんで面を入れ、ここに棒状の工具を用いてキザミを入れており、この下部はナデを施している。胴部は横線を入れた後、条痕が短く５・６本みられるが、全体的には不定方向のハケ調整を施している。

なおこの方形周溝墓は、高坏Ｃ・Ｂ類が出土していることからⅡ－２期に所属するものと考えられる。また、遺物が出土した２・３・４号方形周溝墓のうち、４号方形周溝墓はⅡ－２期、３号方形周溝墓はⅡ－３期であり、遺物の出土しなかった１号方形周溝墓もⅡ期の範疇と考えられる。したがって、どの方形周溝墓も竪穴住居跡の造られた時期とほぼ同時期に造られたものと考えられる。なぜ同時期の方形周溝墓が竪穴住居跡と同じ区域に造られたかについては、1号方形周溝墓で述べたとおり立地の関係があったものと考えられる。

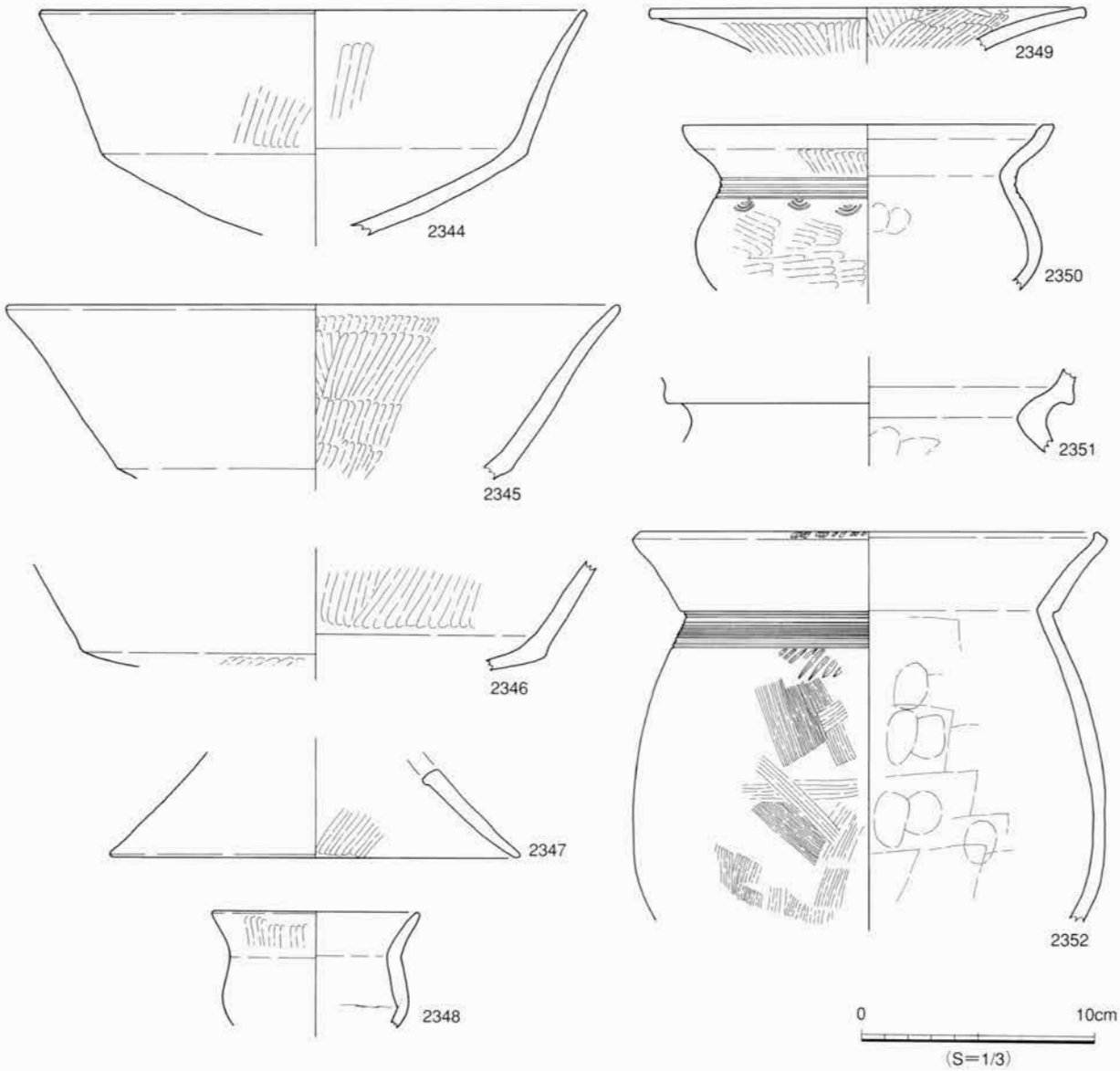


図178　4号方形周溝墓出土遺物

3号土坑墓

遺構（地形図172，図180，図版19）5Mグリッド

西丘陵の東向斜面、急両端部付近の傾斜地に立地する。墓壙と考えられる土坑は、長径0.71m・短径0.64mで、東側を4号土坑墓によって切られている。土器棺と考えられる甕は、土坑のやや谷寄りに、正位で埋納されていた。堆積の状況から、この甕は最初に整地され（セクション③・④）、平らな面を造った後に埋納されたようである。甕の胴部より、上層については、検出ができなかったため不明である。また、この甕の中に詰まっていた土について、慎重な水洗を行ったが、玉類・骨片等を確認することはできなかった。

遺物と所属時期

遺物は2353の甕C類1点のみである。ほぼ完形で、胴部外面には多量の煤が附着している。長く伸びた口縁部の端部にわずかな段を持つ甕C類で、この周辺の甕の典型を示すものである。外面は、ナ

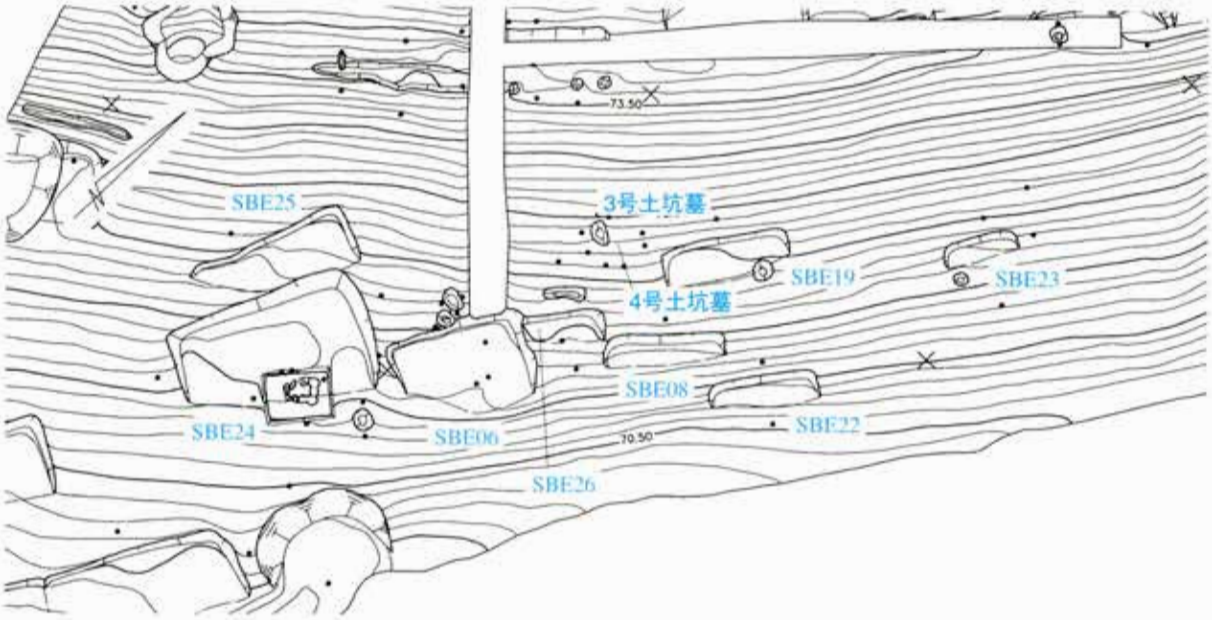


図179　3・4号土坑墓周辺地形図（1/200）

ナメ方向にハケ調整が施されている。外面に多量の煤が附着していることから、煮沸具として使われていたものが転用されたことは間違いがない。

なおこの土坑墓は、比較的新しい様相を持つ甕C類が出土していることと、後述するが、比較的新しい様相の高坏が埋納されている4号土坑墓に切られていることから、Ⅱ－3期に所属するものと考えられる。

4号土坑墓

遺構（地形図172，図180，図版19）5Mグリッド

東側を4号土坑墓によって切られ、墓坑と考えられる土坑は長径0.54m・短径0.62mである。土器棺と考えられる壺は、土坑の中心に横位で置かれ、高坏の坏部の外面で壺の口縁部に蓋をするように埋納されていた。堆積の状況から、この壺も最初に整地され（セクション③）、平らな面を造った後に埋納されたようである。土坑の上層については、検出ができなかったため不明である。また、この壺の中に詰まっていた土についても、慎重な水洗を行ったが、玉類などのほか、骨片等を確認することはできなかった。竪穴住居跡の集中する場所に、多少時期が違うとはいえ、これら2基の土坑墓が隣接して造られたことには、何がしかの理由があったものと考えられるが、今のところは不明というほかない。

遺物と所属時期（図181）

遺物は2354の高坏と2355壺の2点のみである。2354は高坏C類で坏部の一部しか残っていないが、あまり内彎傾向を持たない、口縁部の広く坏部のやや浅いものである。不定方向のミガキが施され、外面には煤が附着していた。2355はほぼ完形で、口縁部端部外面には2条の深い横線をいれ、その下部は指ナデ痕を残している。胴部外面は、上から順に、横線・波状文・横線と入れた後に、列点文を入れている。口縁部内面には羽状の列点文を入れた後に、不定方向のミガキを施している。

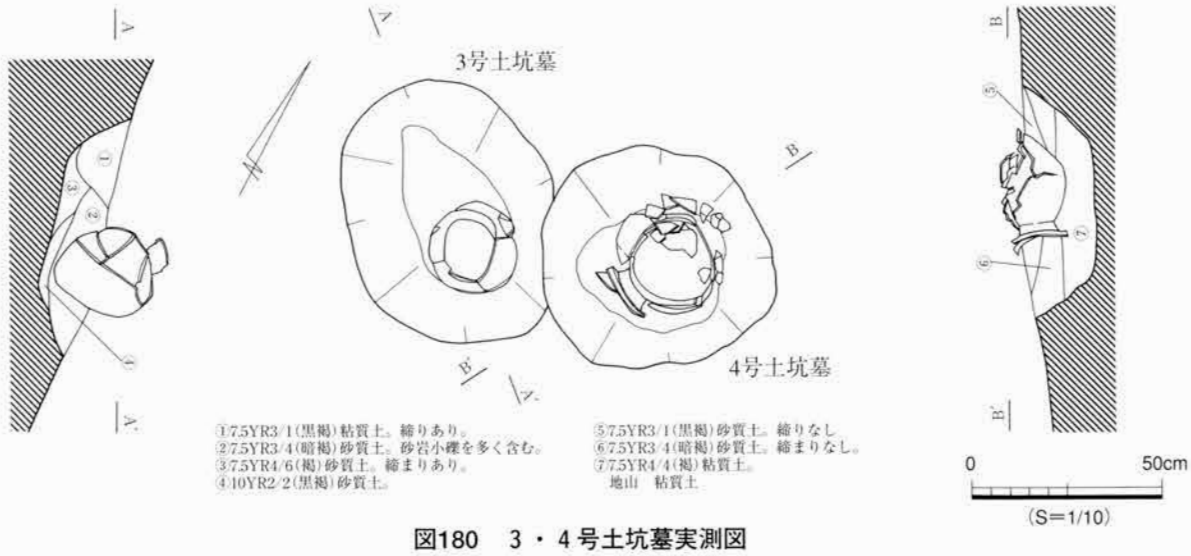


図180　3・4号土坑墓実測図

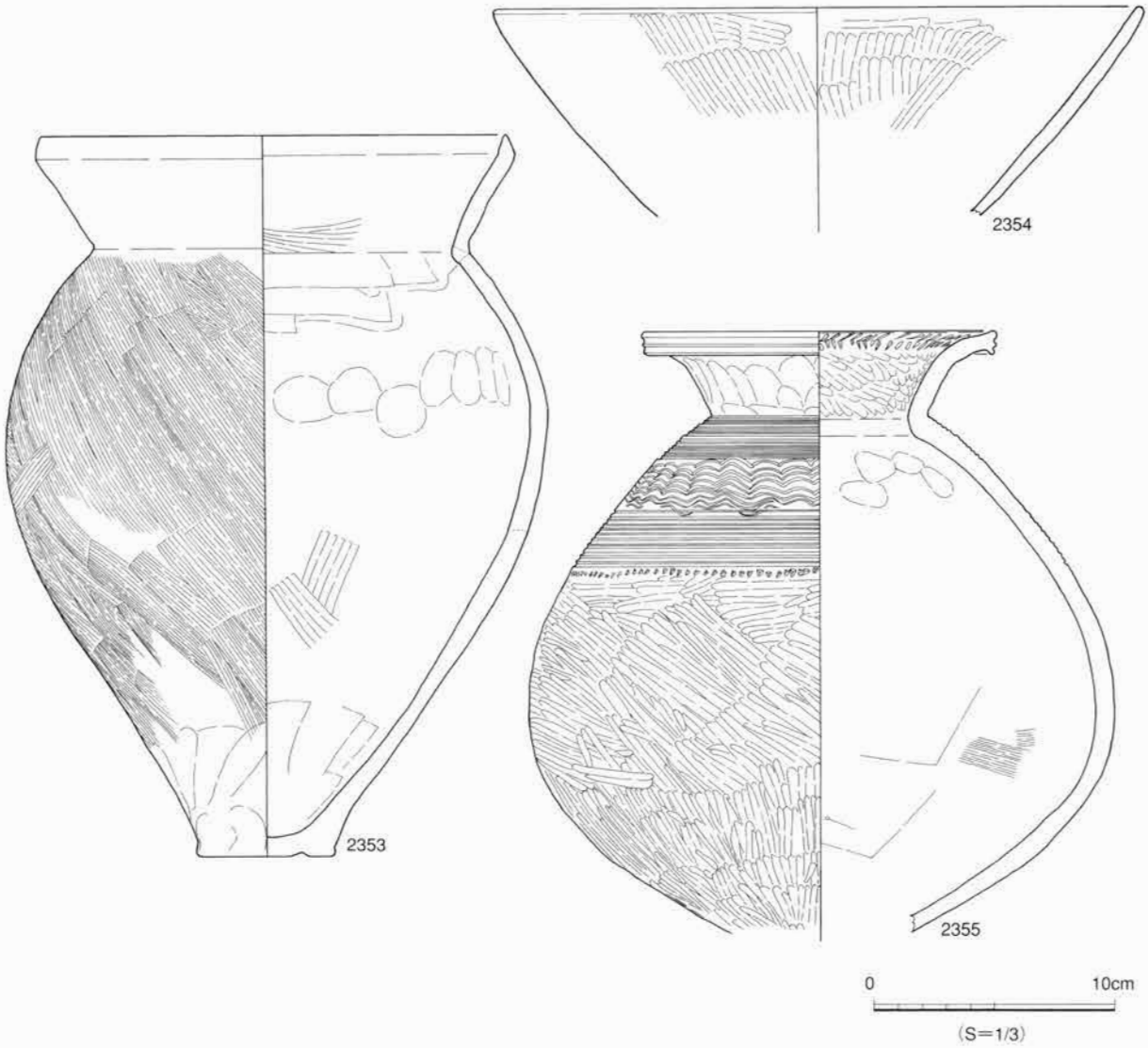


図181　3・4号土坑墓出土遺物

なおこの土坑墓は、新しい様相を持つ高坏C類が出土していることと、胴部の最大径がやや下部に下がった、壺が埋納されていることから、Ⅱ－4期に所属するものと考えられる。

段状遺構

遺構（地形図182，図183，図版19）2Kグリッド

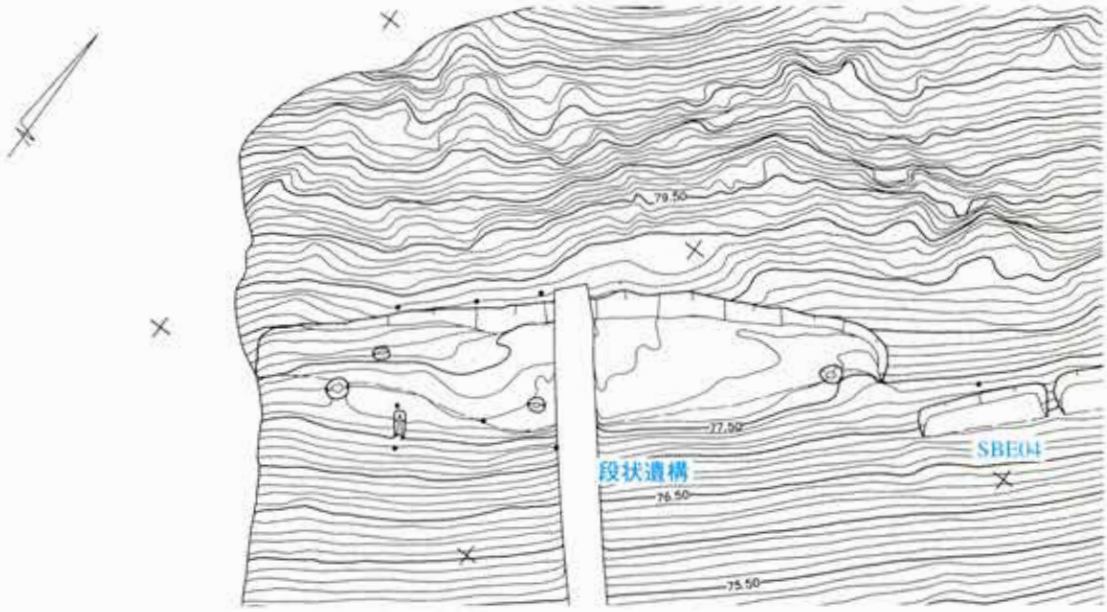


図182　段状遺構周辺地形図（1/200）

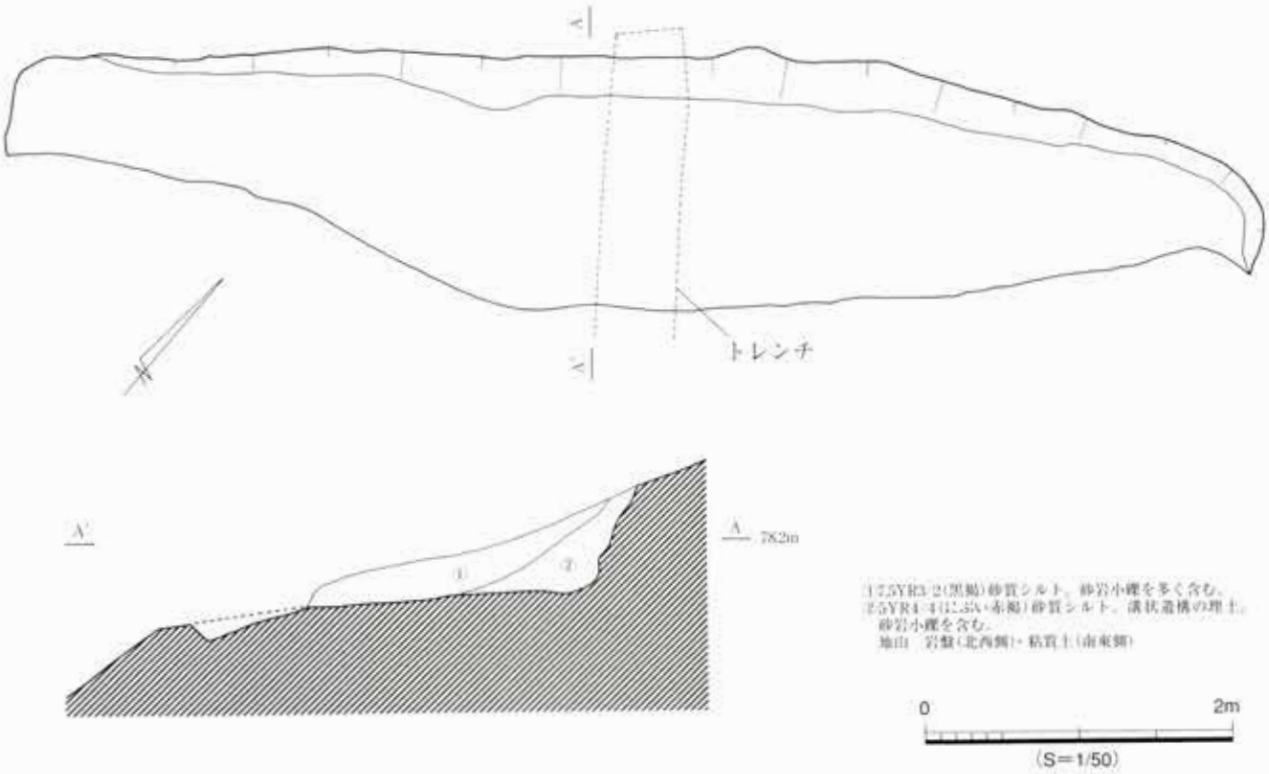


図183　段状遺構実測図

西丘陵の東向き斜面、尾根の頂上部より少し下った急斜面に立地する。幅8.03m・奥行き1.40m（現存長）の長方形と考えられ、岩盤と粘質土を掘り抜いて山側の平坦面を削りだしている。両端部の崩壊は激しく、谷側には多少の盛り土があったと推測されるが、急斜面であるため中央部の奥行き以上には平坦面がのびることはないと考えられる。柱穴・壁溝・貼り床は確認できなかったため、竪

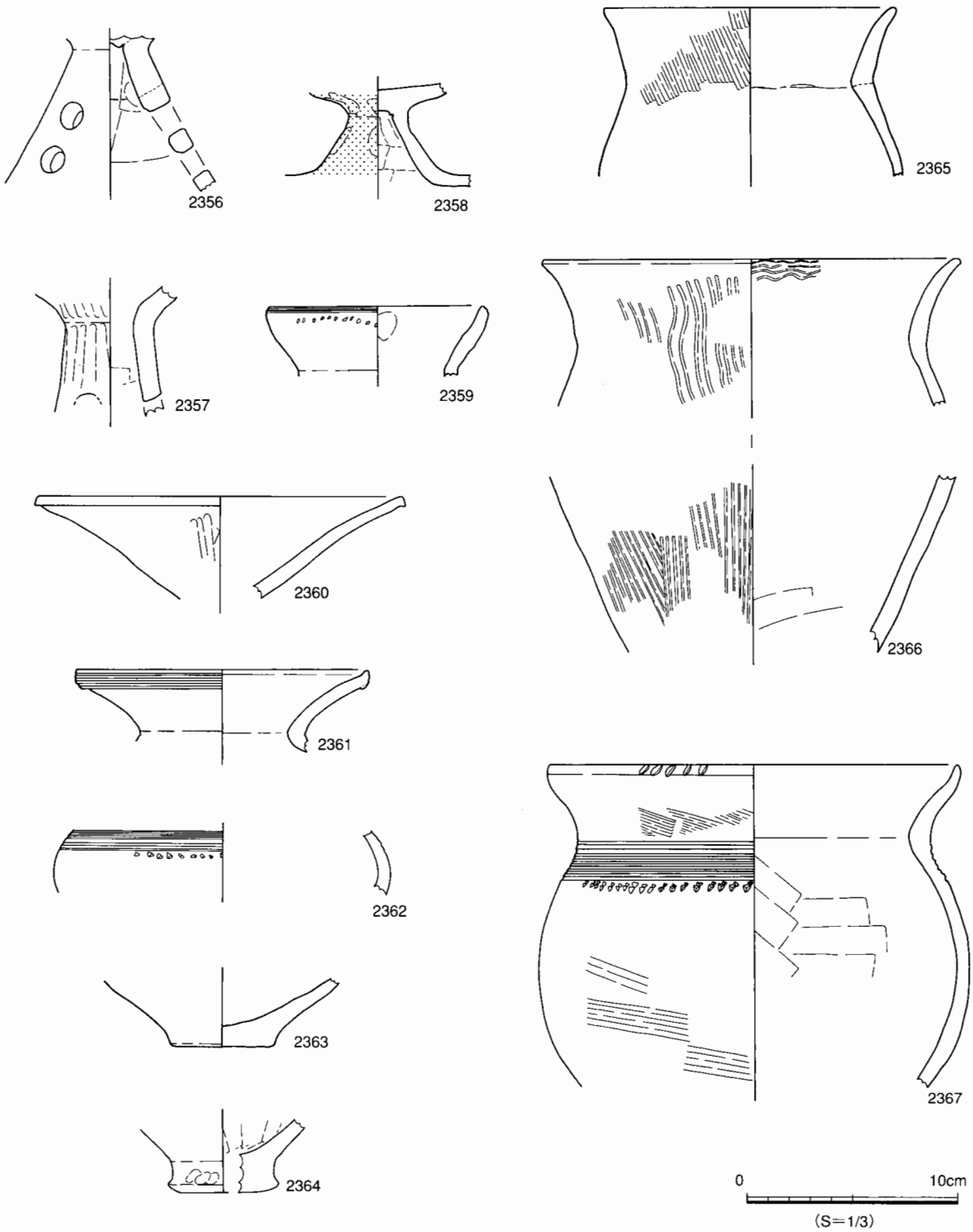


図184　段状遺構出土遺物

穴住居跡の可能性は低いと考えられるが、建物跡の可能性は高いものと考える。かなり大きい遺構であり、遺物の出土も良好である。また、この遺構は、Ｅ区の斜面で最も高位にあり、この上部には遺構がなかったことから、出土遺物が流れ込みによるものではないことは確かである。そのため、何らかの遺構であることには違いなかろうが、今のところその性格は不明と言わざるを得ない。

遺物と所属時期（図184）

出土遺物は良好で、このうちの12点を図示した。2356は高坏Ｂ類で脚部で、比較的厚く、重量感がある。2358は高坏Ｄ類で、脚部端部の開きが著しく、穿孔はない。高坏Ｆ類の可能性も考えられるが、薄手で小型品であるため、高坏Ｄ類の範疇の中で考えたい。2357・2360は、それぞれ器台の脚部と器部である。2361は壺Ｂ２類の口縁部で、比較的小型品であり、2363は壺の底部である。2362は鉢の胴部であり、横線と列点文が入れられている。2359は甕Ｃ類の口縁部で、横線と細かい列点が入れられている。2364は甕の底部である。2365は甕Ｂ２類で、口縁部に下から掻き上げた、ハケ調整が施されている。2366は甕Ａ１類で、外面には条痕調整が施されており、口縁端部内面には条痕を用いた波状文が入れられているが口縁端部外面のキザミは入れられていなかった。2367は甕Ｃ類で、口縁端部外面には棒状工具を用いたキザミを入れ、その下部にはハケ調整を施し、胴部には横線と２個一単位の列点文を入れ、その下部にハケ調整を施している。

なお、この段状遺構からは、甕Ａ１類と比較的古層を示す器台・胴部中央部に最大径のある鉢が出土していることから、Ⅱ－２期に所属するものと考えられる。

ＳＫＡ01

遺構（図185，図版19）21Ｊグリッド

東丘陵の西向き斜面、丘陵端部付近の緩斜面に立地する。幅1.08ｍ・奥行き1.07ｍの方形で、粘質土を掘り抜いている。出土遺物は１点のみであるが、下層から出土しているため土坑とした。その性格は不明である。

遺物と所属時期（図186）

出土遺物は１点のみである。2368は器台Ａ類の脚部で、中空部は直線的にのび、比較的太くしっかりとしたつくりであり、穿孔の一部がわずかに残っている。

なおこの土坑からは、出土遺物が４点のみであるため確証に欠けるが、比較的古相を示す器台が出土していることから、Ⅱ－２期に所属するものと考えられる。

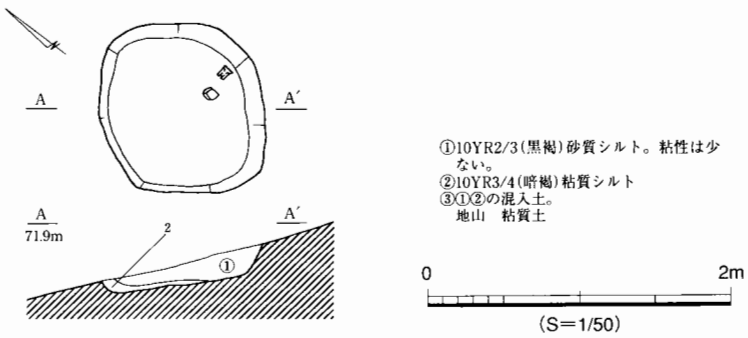


図185　SKA01実測図

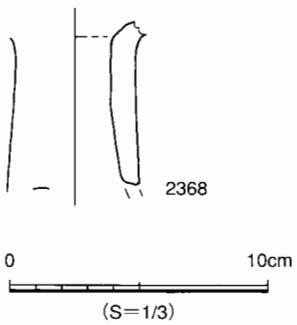


図186　SKA01出土遺物

ＳＫＡ02

遺構（図187）24Ｊグリッド

東丘陵の西向き斜面、丘陵端部付近の緩斜面に立地する。幅1.10m・奥行き0.76mの方形で、粘質土を掘り抜いている。その性格は不明である。

遺物と所属時期

遺物の出土は無かった。したがって、所属時期も不明というほかない。

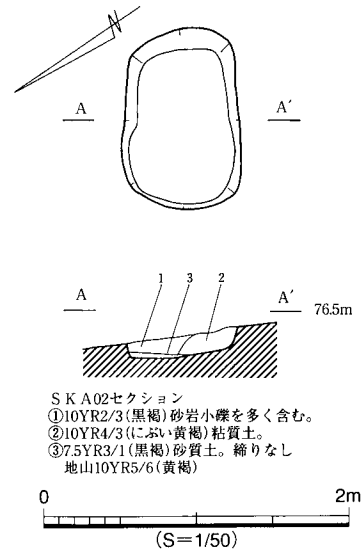


図187　SKA02実測図

ＳＫＡ03

遺構（図188）20Ｇグリッド

東丘陵の西向き斜面、丘陵端部付近の緩斜面に立地する。長径2.66m（現存長）・奥行き1.08mの長方形で、粘質土を掘り抜いている。埋土は浅いが、全面に炭が入っている。なお、砂行遺跡ではこれと類似した土坑（ＳＢＡ01・02・03）を簡易式の炭焼き施設と考えている。砂行遺跡の土坑が等高線に並行しているのに対して、深橋前遺跡の土坑は直行しているという違いはあるものの、同種の遺構と考えても良いのではなかろうか。

遺物と所属時期（図189）

出土遺物は２点のみであるが、上層から出土したものであり、流れ込みの可能性が高い。2370は甕の胴部で、内外面に不定方

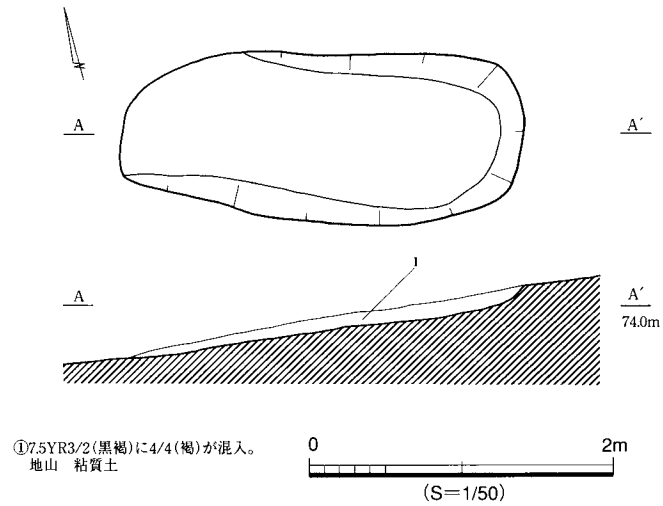


図188　SKA03実測図

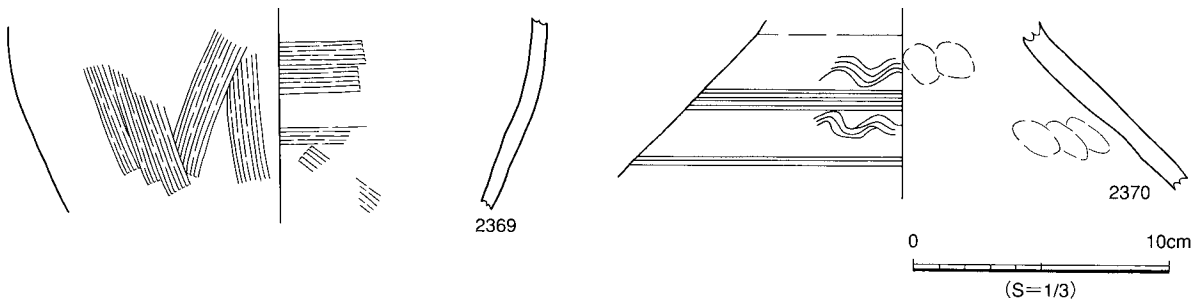


図189　SKA03出土遺物

向のハケ調整が施されている。2371は壺の胴部で表面の摩耗が激しいが、波状文と横線が２段に入れられている。小片のため傾きは推定である。

なお、この土坑から遺物は流れ込みのものであり、時期は不明というほかない。

ＳＫＢ03

遺構（図191）26Ｂグリッド

東丘陵の西向き斜面、中腹付近の緩斜面に立地する。ＳＸＢ01の底部から検出された。長径1.32m・短径1.10mの方形で、粘質土を掘り抜いている。その性格は不明である。

遺物と所属時期

出土遺物は１点のみである。2369は高坏の脚部で、比較的太くしっかりとしたつくりである。

なお、この土坑から遺物は上層で出土したものであるため、時期は不明としておきたい。

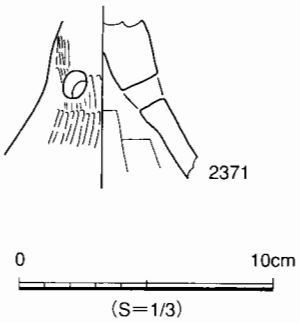


図190　SKB03出土遺物

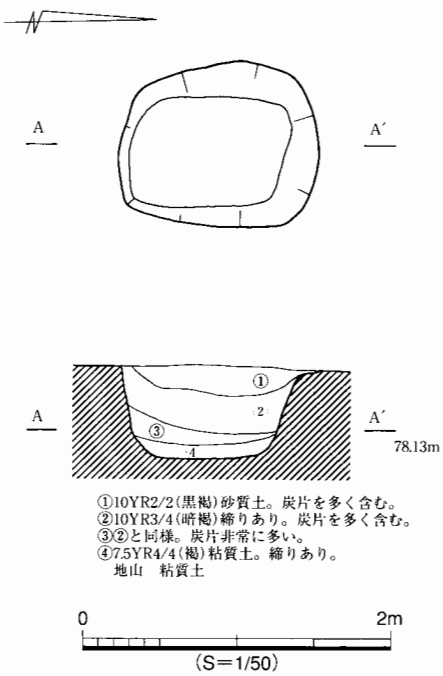


図191　SKB03実測図

ＳＫＦ01

遺構（図192）26Ｏグリッド

東丘陵の東向き斜面、丘陵中腹部付近の急傾斜地に立地する。長径2.05m・短径1.50mの円形で、岩盤を掘り抜いている。短軸方向に植生による、径0.3mほどの攪乱がある。埋土の堆積状況も不自然で、その性格は不明である。

遺物と所属時期

遺物の出土は無かった。したがって、所属時期も不明というほかない。

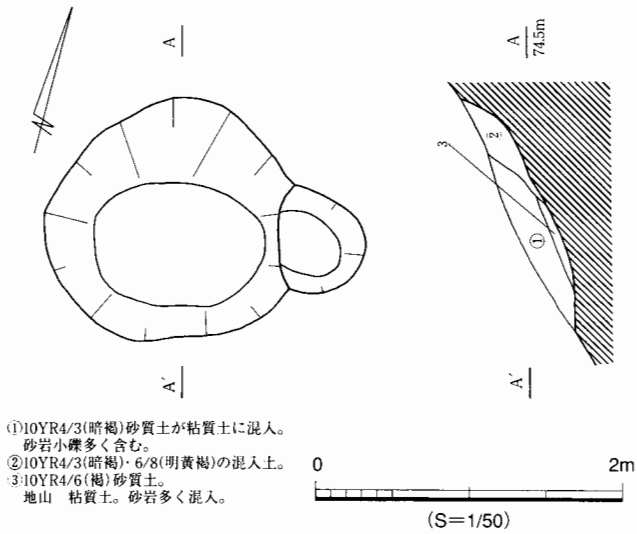


図192　SKF01実測図

ＳＫＦ02

遺構（図193）26Ｍグリッド

東丘陵の東向き斜面、丘陵中腹部付近の傾斜地に立地する。長径1.97ｍ・短径0.88ｍの楕円形で、粘質土を掘り抜いている。等高線に直行して掘られている。炭化物等の混入は確認できず、埋土の堆積状況も単純であり、炭焼き用の土坑とは考えられない。性格不明の土坑である。

遺物と所属時期

遺物の出土は無かった。したがって、所属時期も不明というほかない。

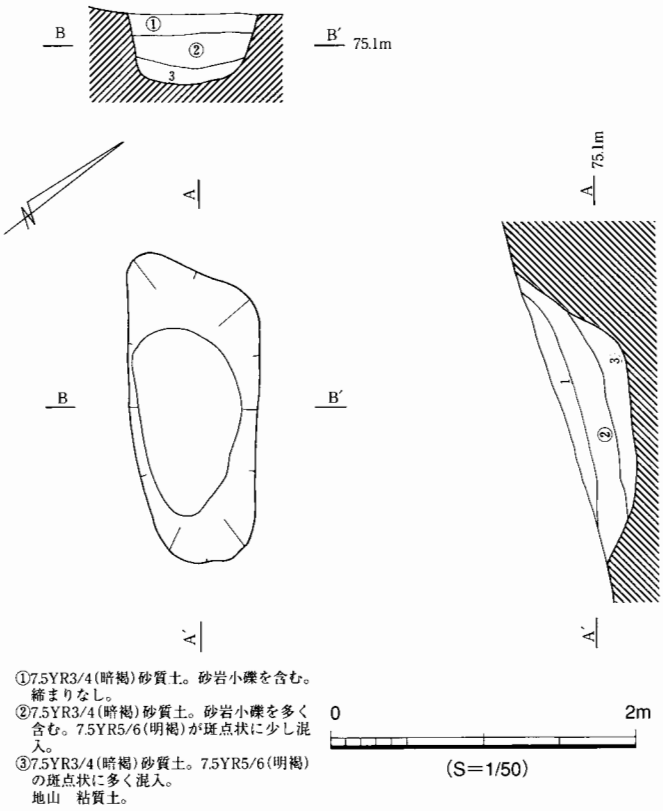


図193　SKF02実測図

ＳＸＢ06

遺構（図194）26Ｚグリッド

東丘陵の西向き斜面、丘陵中腹部付近の傾斜地に立地する。溝状の遺構で北西側はトレンチ切られている。粘質土を掘り抜いて造られている。性格不明の遺構である。

遺物と所属時期

遺物の出土は無く、図示に耐えうる遺物は出土しなかった。したがって、所属時期も不明というほかない。

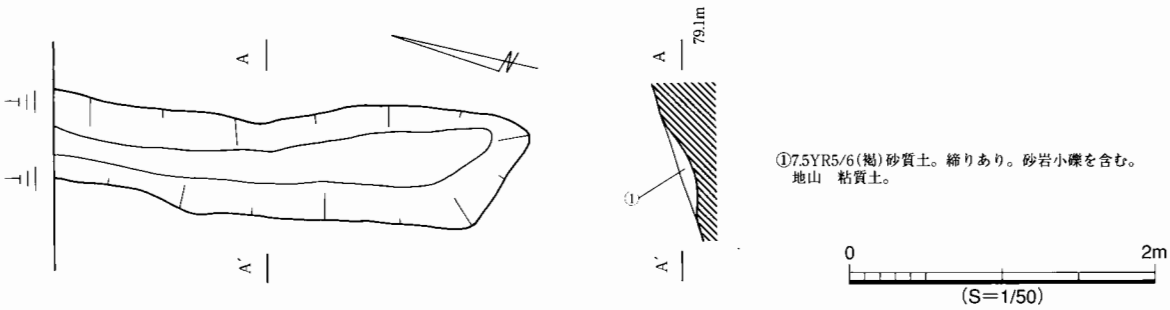


図194　SXB06実測図

ＳＸＤ02

遺構（図195）11Ａグリッド

西丘陵の東向き斜面、丘陵端部付近のの傾斜地に立地する。溝状の遺構で南東側はトレンチ切られ

ている。粘質土を掘り抜いて造られている。Ⅱ期の遺物が出土しているが、後述するSXD01と同様性格不明の遺構である。

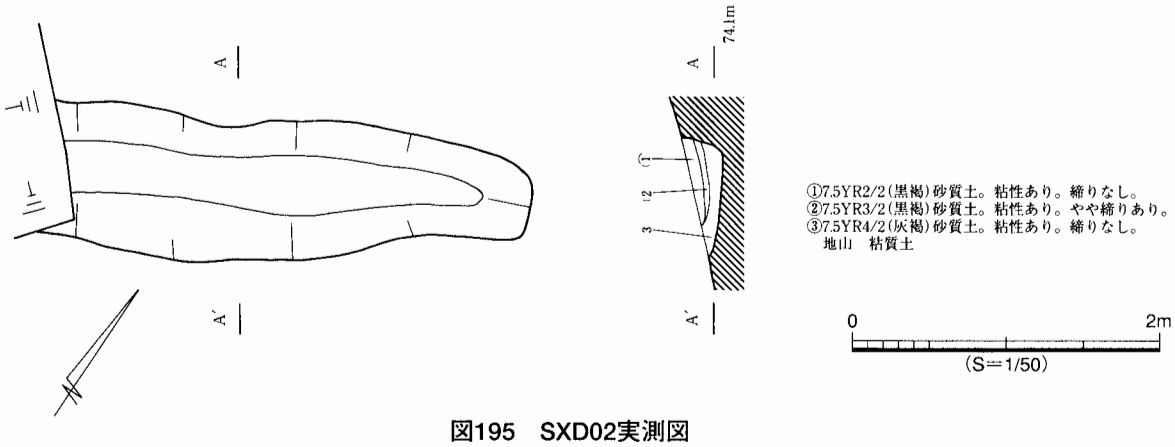


図195　SXD02実測図

遺物と所属時期（図196）

遺物の出土は少なく、図示に耐えうる遺物は２点のみであった。2372壺の胴部で、上部は板ナデ・下部はハケ調整を施している。2373は甕Ｂの口縁部で、横線と列点文が入れられている。

なお、この遺構からは出土した遺物はわずかであったため、所属時期については前述のSXB01と同様不明としておきたい。

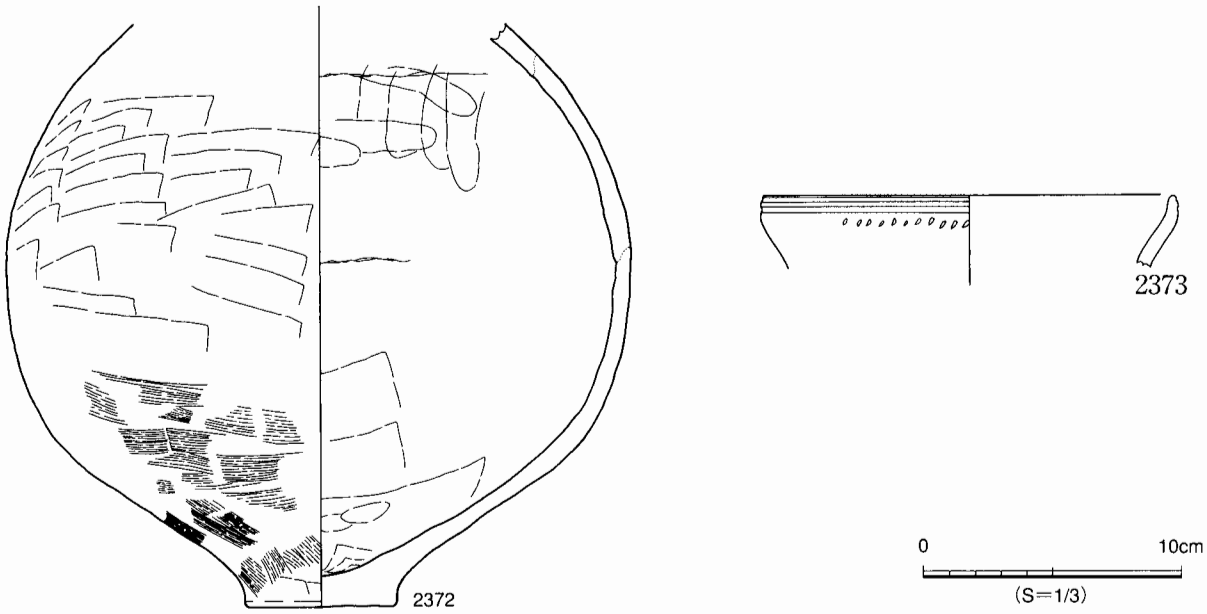


図196　SXD02実測図

ＳＵＡ01

遺構（図197，図版19）21Ｇグリッド

東丘陵の西向き斜面、丘陵端部付近、傾斜変換点下部のやや平坦地に立地する。破片数でⅢ期のものと考えられる56点の土器が、集積して出土した。接合の結果、集積した土器は10点ほどであり、いずれも完形にできるものはなかった。遺物の状況から、廃棄された土器の痕跡と考えられる。また、この集積が検出された層位は、Ⅱ期の竪穴住居跡が検出された層位と同じ面であったため、明確な生

活面を確認するに至らなかった。なお、Ⅲ期の遺構は、Ｅ区の丘陵端部付近に立地する３軒の竪穴住居跡とＳＵＡ01のみであり、この期の生活の痕跡は極めて小さいものと考えられる。

遺物と所属時期（図198）

10点ほどと考えられる土器の中から、６点を図示した。2374は高坏Ｆ類の杯部で、坏部の外反が激しい。器面の摩耗が激しいが、ナデ調整が施されていたと考えられる。2375も高坏Ｆ類の杯部であるが、2374に比べ坏部の外反は緩やかで、内外面のナデ調整が比較的よくわかる。2377は高坏Ｆ類の脚部で屈折脚を持つものであり、内外面に板ナデを施している。2378も高坏Ｆ類の脚部で外面は指ナデによる調整が行われているものと考えられる。2376は壺の底部、2378は壺Ｅ類の口縁部で、２段立ち上がる接合面は擬口縁のように鮮やかである。

なおこの遺物集積からは、高坏Ｆ類が出土していることからⅢ期と考えられる。

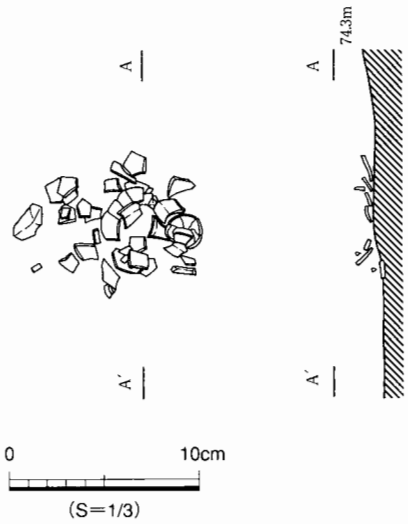


図197　SUA01実測図

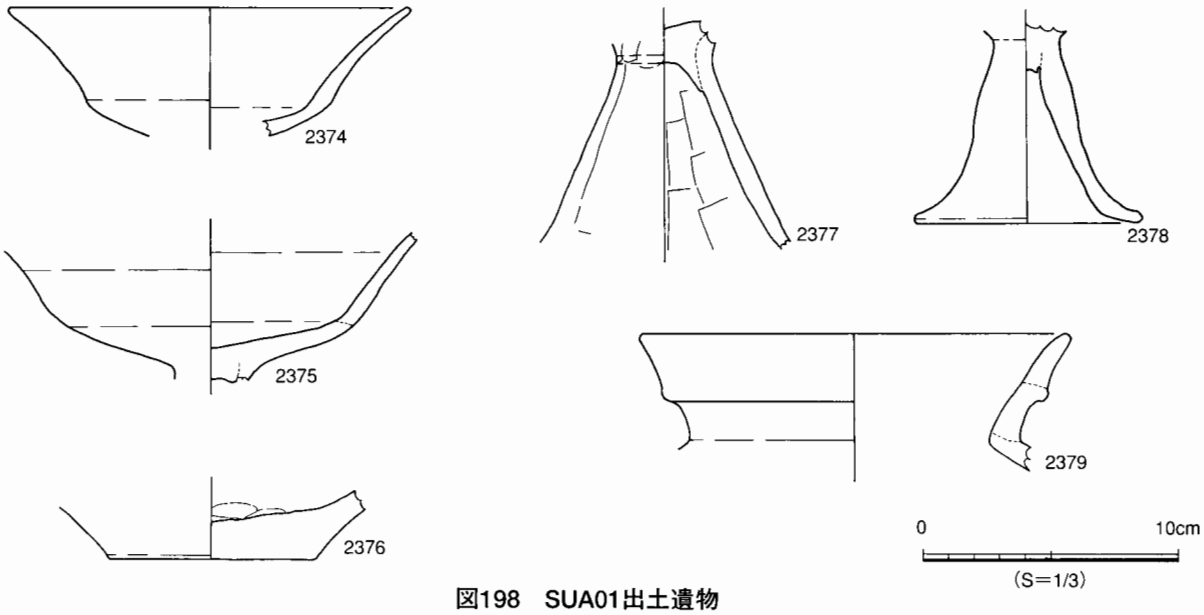


図198　SUA01出土遺物

ＳＵＦ01

遺構（図199）30Ｌグリッド

東丘陵の東向き斜面、端部付近の斜面に立地する。ＳＢＦ35とＳＢＦ29の山側周溝の切り合う付近の上層に存在する遺物集積である。しかし、これらの土器は、破片が多く、本来置かれた場所で出土したものとは考えられない。何らかの理由でこの場所に廃棄されたか、上部の遺構から崩落したものかもしれない。しかし、集積した土器は地山上にプライマリーな状態で出土したわけではなく、下層から検出されたＳＢＦ35とＳＢＦ29出土の遺物と、この遺物集積の遺物の時期差はほとんどみられない。単なる包含層遺物と考えられなくもないが、一応下層の遺構との関係を載せておく。

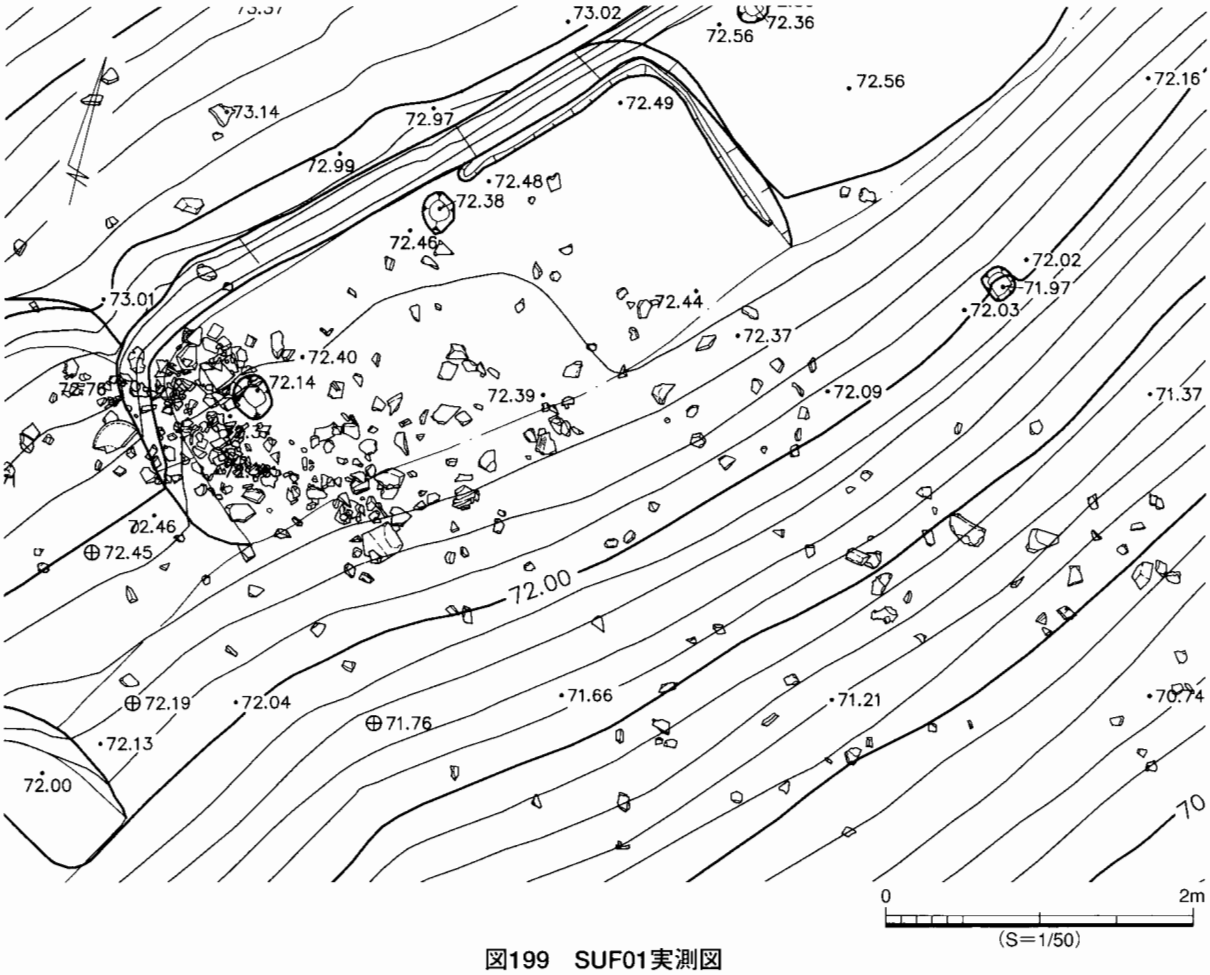


図199　SUF01実測図

遺物と所属時期（図200）

出土遺物は豊富で、このうちの13点を図示した。2380は高坏Ｄ類で、段上遺構から出土した2355と共に最も小型の部類にはいる。2381も脚部の開きから高坏Ｄ類と考えられるが、坏部がやや開くことから、高坏Ｃ類の可能性もある。2382・2383はともに高坏の脚部であるが、2382は高坏Ｄ類、2383は高坏Ｃ類の可能性が高い。2386は器台である。2384は壺Ｂ１類で、外面口縁部に５条の横線を入れ、この上に２個一組３単位の棒状浮文を貼り付けている。胴部には横線・波状文・横線・細かい棒状工具を用いた列点文の順に入れているが、波状文の下部は横線によって掻き消され、扇状に見える。胴部の大部分に施されたミガキの単位はやや大きい。2385は壺の底部である。2387・2388・2389は壺Ｂ１類の口縁部である。2390は甕Ａ１類の口縁部で、受け口状の口縁部の外面には、不均等な波状文を入れている。内面はナデを施している。2391は小型の壺であるが、手捏ねではなく、外面は横線・細かい竹管状の工具を用いた列点文を入れた後、細かいハケ調整を施している。内面は板ナデを施している。2392は手捏ね品ある。一応、台付甕、もしくは台付鉢の台部としておきたい。

なおこの遺物集積の出土遺物は、時期差が大きく、細分することはできないが、Ⅱ期の範疇より外に出ることはあり得ないとしておくにとどめたい。

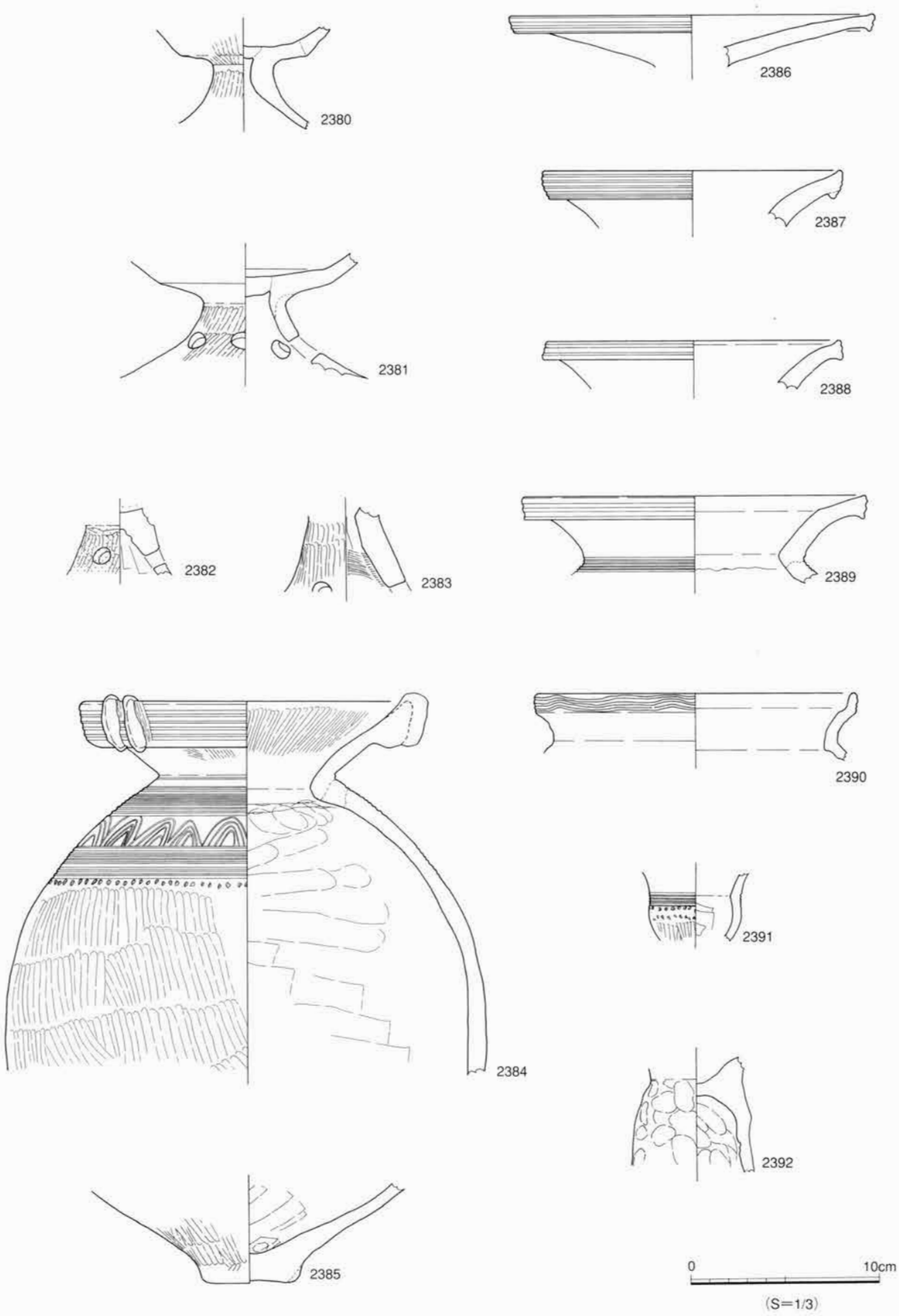


図200　SUF01出土遺物

第２節　Ｉ期の包含層出土土器（図201）

深橋前遺跡では、Ｉ期の遺構は確認できなかった。そのためこの期の包含層遺物については、本節でまとめて述べることにする。なお遺物が少なく、時期幅も大きいことから、小期区分は行わなかった。そこで先行の研究成果に照らして、編年的に位置づけられるものについては、その型式・様式名を参考までにそのまま用いたものである。(1) 石器については、他の時期のものともまとめて本章第４節で述べる。またＩ期の遺物の分布については、第７章第２節で詳述する。なおここで図示した土器のほとんどは小片であるため、実測図の断面の傾き、拓本の向き等については、やや問題の残るものも多い。

①縄文時代早期～前期の土器

1001は、山形押型文をもつもの。1002・1003は、外面に山形押型文と横方向の押引を持ち、口縁部内面に山形押型文持つもので、押型文終末期の相木式に属するものと考えられる。1004も1002・1003と同様のものと考えられる。1005・1006も押型文を有するが、早期に属すると考えられるのみである。1007は器面の摩耗が激しいが、隆帯と爪型文を持つ非常に薄い土器で、通称「おせんべ土器」と称されているもので、早期末から前期初頭のものと考えられる。1008～1010は横方向と斜め方向の隆帯を持つ土器であり、早期末から前期初頭のものと考えられる。1011は爪形文を持つ前期初頭の土器の口縁部、1012は隆帯を持つ諸磯式の可能性のある土器である。

②縄文時代中期の土器

1013は隆帯３条のうち２条に爪形文を持つ北裏ＣＩ式の可能性のある土器、1014は隆帯２条の間に三角形の刺突を持つ中期初頭の土器である。

③縄文土器ではあるが時期のわからないもの

1015は渦巻文を持つもの、1016は貼り付けの隆帯を持つもの、1018は無文のものであり、時期決定する決め手に欠けるため、縄文土器として一括して取り上げる。

④弥生時代前期の土器

1019は浮線文系の土器の口縁部で、深鉢の可能性が高い。浮線の表現は沈線によって行われているため、弥生時代前期にずれ込むものと考えられる。1021・1022は条痕文系の壺の口縁で、口縁端部には面を持ち、外面には突帯を貼り付け押圧を施している。頸部には不定方向の条痕を施している。弥生時代前期前葉、樫王式併行の壺と考えられる。1020も、1021・1022と同様に、樫王式の壺の口縁部と考えられる。

⑤弥生時代中期の土器

1017は壺の胴部で、隆帯を貼り付け、この上に棒状工具で押圧して列点を入れている。この下部には横方向のミガキが施されており、一部にはハケ調整の痕跡が残されている。おそらくハケ調整をしたあとにミガキが施されたものと考えられる。内面はハケ調整の後にナデ調整が施されている。朝日遺跡に同時期の類例があることから、弥生時代中期中葉、貝田町式併行の可能性が高い(2)。1023は条痕系の壺の底部である。太い条痕をタテ方向に底部から掻き上げており、弥生時代中期中葉、貝田町式の壺との可能性が高く、1017と同時期の遺物と考えられる。

なお、深橋前遺跡周辺の遺跡では本遺跡と同様、Ⅰ期の遺物の出土は非常に少なく、砂行遺跡で23点・南青柳遺跡で2点図示されているのに過ぎない。

(1) 春日井恒・早野壽人・藤田英博・近藤大典・長谷川幸志・三輪晃三・三島誠の各氏に全面的な指導を得た。
(2) 石黒立人氏のご教示による。

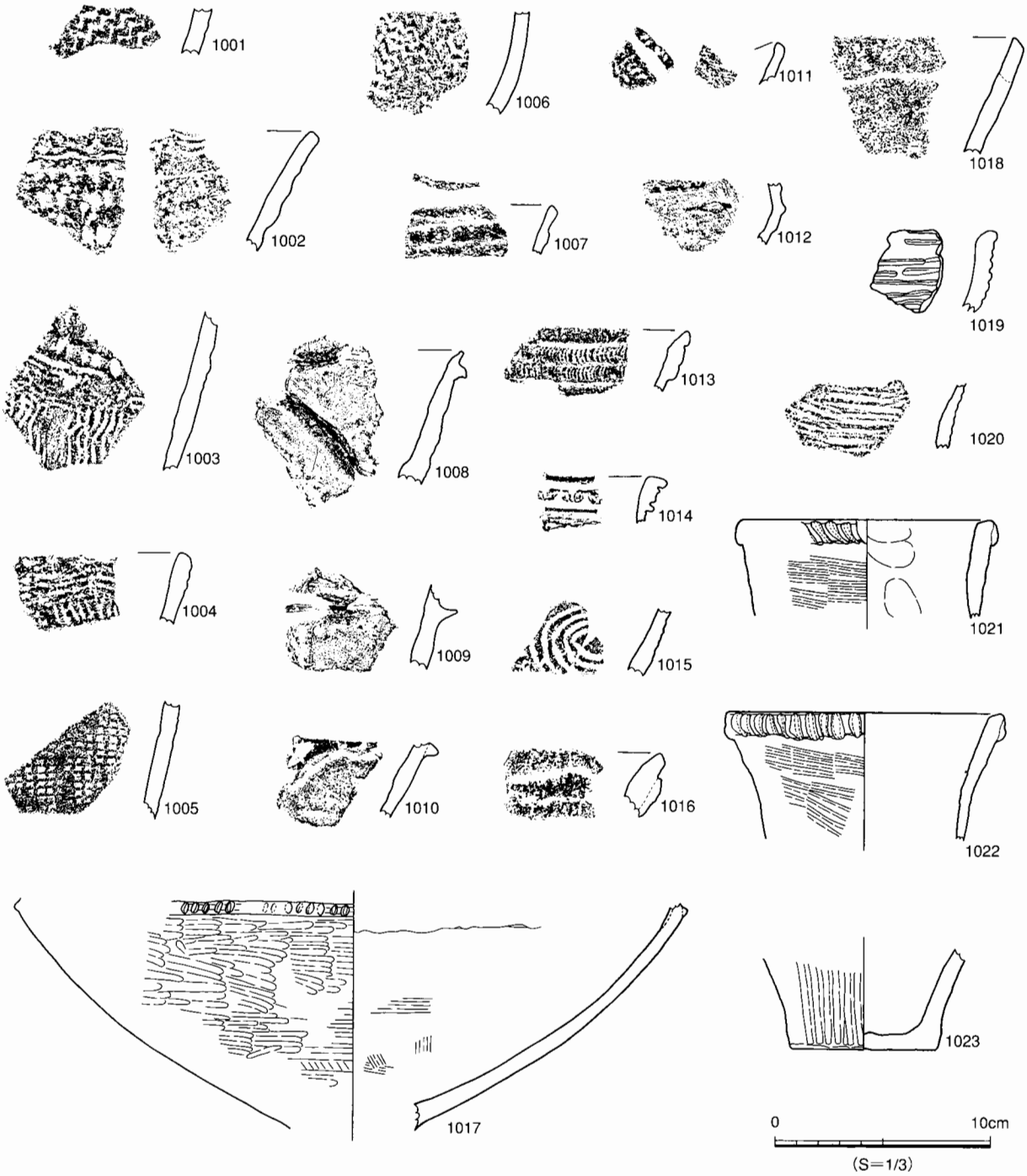


図201　Ⅰ期包含層出土遺物

第３節　Ⅱ・Ⅲ期の包含層土器

第１章第３節で述べたように、深橋前遺跡には、各遺構から崩落した遺物が、斜面の裾部や傾斜変換点から多く出土する。これらは、どの遺構から崩落したものかが限定できないために、包含層遺物として扱わざるを得ないが、この集落で使用されていた土器の様相を明らかにするため、非常に重要である。そのため、小片についても極力図示することにする。本節で実測図を掲載した遺物は467点である。なお、ここに掲載する包含層遺物についても、遺構内遺物と同様の精度で接合を行い、遺構内遺物と同様の基準で図示している。したがって、遺構・包含層出土の実測図掲載遺物をもって、深橋前遺跡のおおよその土器組成を理解していただいても、大きく現実から離れることはないと考える。

(1) 高坏

①高坏Ａ類（図202）＜2393～2406＞

口縁部の外反が強いもの（2096）や、口縁部の外反が比較的弱いもの（2397）のほか、高坏Ａ類に属さない可能性も否めない特殊な段を持つもの（2406）もみられる。ミガキは器面の摩耗のため確認できないものもあったが、横方向は１点のみ（2397）であり、その他はすべてタテ方向である。口縁部に波状文・脚柱部に横線文を持つものはみられなかった。また、接合を経ても完形に図示できるものはなく、脚部については厳密に分類できない。おそらくは、脚部が撥形に開き、脚高が高いものをこの類に分類できようが、ここでは深入りは避け、あえて⑦脚部一括においてその分類の可能性を述べるに止めたい。

②高坏Ｂ類（図202）＜2407・2408＞

坏部が直線的にのびる、高坏Ｂ類の中でも坏部が比較的浅いもの（2407）がみられる。砂行遺跡では、高木宏和氏がⅥ－１様式の基準資料としたＳＢＡ26・ＳＢＣ12から、この分類にあたる良好な資料が出土しているが、（2000 成瀬正勝）（2002 高木宏和）深橋前遺跡からは遺構内外を問わず、ほとんど出土していない。これが時期的な欠落を示すものか、様式的な欠落を示すものかは断定しづらい。なお、脚部の分類に慎重を期すことについては、高坏Ａ類で述べた事と同様である。

③高坏Ｃ類（図202・203）＜2409～2418＞

包含層遺物をみると、内彎傾向の弱いものが多いが、遺構内出土遺物には内彎傾向の強いものも多くみられる。脚部も内彎傾向を持っていたようであるが（2410）、脚部の分類については、⑦脚部一括に譲る。口縁部については、端部に面を持つもの（2412）、外面に横線を入れるもの（2415）、内面を肥厚させ多状沈線を入れるもの（2416～2418）があり、内面を肥厚させて多状沈線を入れるもののなかにも、端部を丸くおさめるもの（2416）、やや尖らせるもの（2417）、鋭く尖らせるもの（2418）がある。ミガキは、内面と口縁部外面に横ミガキを施すもの（2411）、比較的新相を示す可能性が高い多状沈線を持つもの（2416～2418）に横方向の可能性があるほかはタテ方向である。この分類にあたる高坏は竪穴住居跡からの出土が多いわりには、包含層からの出土は少なかった。

④高坏Ｄ類（図203）＜2419＞

小型の高坏は１点のみしか図示し得なかった（2419）。脚部の分類については、⑦脚部一括に譲る。

⑤高坏Ｅ類（図203）＜2420・2421＞

多の器種の可能性も考えられる小型品（2420）、外面に横線を入れたもの（2421）がある。脚部の分類どのような形態になるのかわからないので、⑦脚部一括でその可能性を述べることも不可能である。

⑥高坏Ｆ類（図203）＜2422・2423＞

２点とも、坏部端部を垂下させたものである。この分類に属す高坏は、遺構内からはほとんど出土せず、この高坏を基準資料とした所属時期（Ⅲ期）を示す遺構は非常に少なかった。しかし、⑦脚部一括で述べるものも含めて、この分類の高坏は丘陵裾部でやや集中して出土している。わずかながらもⅢ期にも、人の生活の痕跡があったことが認められる。なお、須恵器との共伴はなかった。

⑦高坏脚部一括（図203～206）＜2424～2493＞

ここでは、高坏の脚部について一括して述べる。遺構内出土の完形の高坏を参考にして、おおよその分類を行った。しかし、このうち高坏Ｅ類については、屈折脚を持つという属性で分類されたものであるため、ほぼ確実に分類できているが、高坏Ｂ・Ｃ類については、内彎傾向を持つもの・撥形に開くものが、双方にみられる可能性が高いため、厳格に分けられているものではない。また、脚端部のみしか残っていないもの（2438・2439）については、器台の可能性も否めない。

□高坏Ａ・Ｂ類（2424～2439）

脚柱部が厚くて比較的長く、脚端部に至っても内彎傾向を持ちにくいものを集めた。破片資料が多いために、脚端部の成形はわからなかったが、穿孔については１孔、もしくは縦に２孔のものがほとんどであり、特殊なものは極めて高い位置にあったもの（2035）のみであった。ミガキはタテ方向に極めて丁寧に施されているものがほとんどで斜め方向のものも少なかった。

□高坏Ｃ類（2444～2464）

脚端部が内彎するもの、もしくは内彎する蓋然性の高いものを集めた。内彎の傾向には、脚柱部がそのまま開きながら内彎するもの（2456）、直線的のびた後に内彎するもの（2460）がある。また、脚端部の成形は、面を持つもの（2463）、外面からのナデによってやや尖らすもの（2460）がある。穿孔は１孔３組３穿孔・２孔３組６穿孔のものが多いが、３孔２組６穿孔のもの（2460）もあった。ミガキはタテ方向のものもあるが、斜め方向のものも多い。

□高坏Ｄ類（2440～2443 2465・2466）

小型の高坏の脚部を集めた。いずれも小片で、接合部のみしか残存せず、充填接合のものが多いという他は、述べることができない。

□高坏Ｅ類（2467～2493）

屈折脚を持つものを集めた。胎土は精緻で砂粒を含まないものが多く、赤色が強い。外面の最終調整は、板ナデ・指ナデ・ナデが多くなり、ミガキを施しているものはかなり少なくなる。脚端部は屈

折が強いもの（2493）、屈折が弱いもの（2489）がある。穿孔はほとんどなくなり、装飾性の少ない小さな穿孔を１単位のみ持つもの（2479）、穿孔しかけでやめたものとも考えられるもの（2491）がある。なお、東海において、屈折脚を持つ高坏は、いわゆる松河戸期と宇田期のものがあるが、深橋前遺跡からは両時期のものがみられる。須恵器との共伴はなかったため、宇田期の後半には及ばないものと考えられる。

（２）器台

①器台Ａ類（図207）＜2494＞

いわゆる中空器台を集めた。比較的厚手で、器部端部には２条の横線を入れている。包含層遺物の器台で細分できるのはこれが唯一である。

②器台器部（図207）＜2495～2511＞

いずれも小片で、細分はできなかった。器部端部には横線を入れるものが多いほか、円形浮文を貼り付けた比較的古相を示しそうなものもある（2506）。また、脚端部の可能性も否めないもの（2504）もある。

③器台脚柱部・脚端部（図207）＜2512～2513　2515＞

いずれも小片で、細分はできなかった。また、器部の可能性の否めないもの（2515）もある。

（３）壺

①壺Ａ１類（図208）＜2516・2517　2521・2522＞

口縁部内面に平坦面を持つ可能性のあるものを集めた。どれも口縁部に凹線を入れた、装飾の意図のある広口壺である。赤彩によって円形の文様をつけたもの（2517）もある。

②壺Ａ２類（図208）＜2523＞

口縁部に入れられておらず、装飾性は低いが、赤彩のある広口壺を広義に解釈して分類した。

③壺Ａ類　胴部・底部一括（図208）＜2518～2520　2524～2527＞

ここでは赤彩のある壺について一括して述べる。胴部は横線・列点文が基本パターンであるが、列点文の入れ方は多様である。ハケ状工具を用いたもの（2518・2524）、竹管状工具を用いたもの（1519）、棒状工具を用いたもの（2518・2520）があるほか、羽状に入れたもの（2524）もある。

④壺Ｂ１類（図208～210）＜2534～2553　2563＞

赤彩のない広口壺は、ほとんど壺Ｂ１類に集められる。今少し細分することが可能かとも考えられるが、破片資料が多く、壺自身の絶対量が少ないため、一括して述べるに止める。口縁部には面を持つものや、垂下させたもの（2547）、横線を入れるもの、列点を入れるもの（2532）など、バラエティーに富んでいる。円形浮文（2528）や、棒状浮文（2529～2531）を貼り付けた、やや古相を示すも

のもある。また口縁部の内外面に、ハケ状工具や棒状工具を用いて、羽状の列点文を入れたもの（2541～2543）もある。

⑤広口壺　胴部一括（図210・213）＜2554～2562　2564～2571　2627～2628＞

広口壺の可能性のある壺類の胴部を集めた。横線・列点文が基本パターンで、使用した工具も①壺Ａ１類と同様あるが、波状文を入れるもの（2516・2570）もある。最終調整はミガキが施されていたものと考えられるが、器面の摩耗のため、その痕跡の窺えるものは少ない。またハケ調整の痕跡が、意識的にかどうかはわからないが、残されているもの（2560）もある。なお壺類は、遺構内に良好な資料がが多い。

⑥壺Ｃ１類（図210・211）＜2572～2576＞

内彎傾向を持たない頸部を集めた。口縁端部には横線を入れるものもある。最終調整は、すべてミガキである。

⑦壺Ｃ２類（図211）＜2580～2582＞

内彎傾向を持つ頸部を集めた。口縁端部には横線を入れるものがあるほか、工具は不明であるが、細かい爪形の文様帯をやや重ねつつ数段に入れたもの（2528）もある。最終調整は、すべてミガキである。

⑧壺Ｃ類　胴部一括（図211）＜2577～2579　2583～2585＞

長頸壺の可能性を持つものの胴部を集めた。2577～2579は鉢等の可能性も否めないが、煤の附着もなかったためここに分類した。2583～2585は、ヨコ方向のミガキが施されており、充填接合で脚をつけているもの（2585）もある。

⑨壺Ｄ類（図213）＜2629＞

二重口縁の壺は１点のみである。Ⅲ期の遺物は少なく、またこの種の壺はSUA01出土のものとあわせて２点のみである。

⑩壺Ｅ類（図212）＜2586～2596＞

手捏ね品を除く小型の壺を集めた。プロポーションは多様である。また時期幅も大きいと考えられる。

⑪壺　底部（図212）＜2586～2596＞

壺底部をすべて集めたもので、細分はできなかった。指ナデ・ナデ・ハケ・ミガキなど、調整のバラエティーは豊富である。また、内面に棒状工具を刺した痕跡のあるもの（2626）があるが、どのような工程の痕跡かは不明である。

（４）鉢

①鉢Ａ類（図214）＜2630～2638＞

口縁部に段を持つものを集めた。深橋前遺跡では、砂行遺跡などと同様、鉢で煮沸行為を行ったものらしく煤の附着するものが多い。壺や甕と同様に、横線・列点文が入れられたものが多い。完全に受け口状になるものはなく、段があるにとどまっている。やや新相と考えられる、ミガキの施されているものも多い。なお鉢と器台とのセット関係はそれほど多くないものと考えられる。

②鉢Ｂ類（図214）＜2639～2648＞

口縁部にわずかな段を持つものを集めた。文様・調整などは、鉢Ａ類と同様である。鉢Ａ類より、ミガキの施されている割合がやや多い。

③鉢　胴部（図215）＜2649～2662＞

鉢の胴部を一括して述べる。他の器種や鉢の口縁部と同様に、横線・列点文が入れられたものがほとんどであり、波状文を入れたもの（2656）もみられる。列点の工具は、棒状工具を用いたものがほとんどであるが、ハケ状工具を用いたもの（2649）、細かいひご状のものを簾状に編んで刺突したと考えられるもの（2651）もある。ミガキはタテ方向のものもヨコ方向のものもあり、一般的に横線や列点を入れた後に施されるのが普通のミガキが、先に施されているもの（2658）もある。

④鉢Ｄ類（図214）＜2663～2666＞

Ａ～Ｃに分類できない鉢類を集めた。Ⅱ・Ⅲ期より後継の可能性のあるもの（2663）もある。小型品のため細かい時期ははっきりしないが、底部に布目圧痕のあるもの（2666）もある。

（５）甕

①甕Ａ１類（図216）＜2667～2682＞

口縁が長く外反し、深鉢形を呈して条痕調整を施したもので、赤褐色の強い色調を持つものを集めた。口縁部は上から下に、底部は下から上に向かって、タテ方向に条痕を施している。口縁部外面のキザミも条痕によって施されており（2670・2671・2675）、内面にも同じ条痕工具によって列点文（2667・2669・2671）・波状文（2668・2670）を入れているものがある。また、包含層遺物にはないが、底部には布目圧痕のあるものも多く、擬口縁によって底部の規格を統一しているもの（2681・2682）も多い。頸部には横線を入れ、条痕の工具を用いた列点を入れたもの（2672）もある。これは横線・列点文の文様構成と融合したものであり、『砂行遺跡』（成瀬2000）では甕Ａ２類に分類しているものであるが、条痕調整に重点を置いて甕Ａ２類をハケ調整のあるものとしたので、ここでは甕Ａ１類に分類することにする。なお、本来は簾状の工具を用いたものであるため「簾条痕」とすべきかもしれないが、弥生時代中期や信州地方にみられる「簾状文」との混乱を避けるために、単に条痕とすることにする。『砂行遺跡』では「櫛条痕」をとしているが、ここで単に条痕としているのは、この考え方に非常に近いものと考えていただきたい。

②甕Ａ２類（図217）＜2683～2699＞

甕Ａ１類と同様のプロポーションおよび色調で、条痕調整ではなくハケ調整に変わったものを集めた。ハケ目はタテ方向がほとんどで、口縁端部外面にキザミはが入れられているものもある。またまれに、板ナデの施されているもの（2698）もみられる。

③甕Ｂ類（図218）＜2700～2711＞

受け口の甕をあつめた。段の弱いもの（2700・2706・2709）や、非常に段の強いもの（2705）がある。口縁部外面の段の部分には、列点文やキザミが入れられてものも多い。列点文は、竹管状工具を用いて刺突したもの（2700）、細い棒状工具を用いたもの（2702）、ハケ状工具を用いたものがあり、ハケ状工具を用いたものは、単に押しつけたもの（2701・2704など）と、押しつけた後に角度を変えて２度押ししたもの（2703）がある。最終調整はハケが主流で、板ナデのものもあるが、ミガキを施したものは見あたらない。加茂郡富加町の後平遺跡では、これに属する甕が多くみられるが、深橋前遺跡ではそれほど多くない。これは深橋前遺跡が、時期的にやや下るか、伝播の方向が違うことからきているものと考えられる。

④甕Ｃ類（図218～219）＜2713～2727＞

深橋前遺跡の最も多いプロポーションの甕である。口縁部の面取りも、わずかな段と理解したので、口縁部が長くのびる甕は、すべて甕Ｃ類となる。口縁端部にはキザミや、列点文が入れられているものがある。また、胴部に波状文が入れられているもの（2716）もあり、これは赤褐色の強い色調で、甕Ａ類の流れを引くものと考えられる。

⑤甕Ｄ類（図220～221）＜2728～2758＞

いわゆるくの字甕を集めた。プロポーションも文様構成も多様で、時期的にも幅が広い。ナデを施す前の指押圧痕が残っている粗製の甕（2748など）も多い。

⑥甕Ｅ類（図222）＜2759～2763＞

Ｓ字甕は山間地では少ない種類のものであるが、これらについては、第７章第４節で詳しく述べているのでここでは省略する。包含層から出土したものは、すべて小片であるが、極力図示した。

⑦壺Ｆ類（図222）＜2764～2766＞

直立口縁の甕についても、第７章第４節で詳しく述べているのでここでは省略する。

⑧壺Ｇ類（図222）＜2767～2770＞

Ａ～Ｆ類に属さないものを集めた。甕Ｆ類に近いもの（2768）、新しい時期と考えられるもの（2769）などがある。

⑨甕口縁一括（図222）＜2771～2774＞

口縁部のみしか残存していない甕を集めた。口縁端部の整形に特徴のあるもの（2771）、キザミ・列点・横線を入れ頸部のくびれの緩やかなもの（2774）、口縁部にわずかな段をつけ横線を入れたもの（2772）、などがある。

⑩甕胴部一括（図222）＜2775～2777＞

甕胴部で文様構成などに特徴のあるものを一括して述べる。横線が多状のに入れられているもの（2776）、押し引き気味の刺突を持つもの（2777）がある。

⑪平底甕　底部（図222～224）＜2778～2818＞

平底の甕の底部をすべて集めた。山間部の遺跡のために、平底甕の割合は非常に高い。擬口縁で底部の整形を行っているもの（2783など）や、臍状に底上げをしているもの（2815など）、底部中央に穿孔のあるもの（2818）などがある。調整については、ハケ・板ナデがあるほか、指ナデや指押圧痕が残っているものもある。

⑫台付甕　台部（図224）＜2819～2839＞

台付甕の底部をすべて集めた。撥形に開くもの（2826・2829）や、自重によって接地面に平坦面がついたもの（2831・2833）、外面からのナデによって先端部がシャープに整形されたもの（2838）などがある。

（6）その他もの

①煮沸に使われない鉢（図225）＜2840～2846＞

煤の附着しない鉢で、煮沸に使われないものを一括して述べる。ミガキを施したもの（2841）、ナデ調整のもの（2843）もあるが、ほとんどは板ナデを施している。高坏F類と胎土・色調が同様で、おそらくⅢ期に所属するものと考えられる。

②小型の坏（図225）＜2847～2852＞

小型の坏を一括して述べる。ほとんどは、手捏ね・指ナデによって整形されている。

③その他の小型品（図225）＜2853～2857＞

ここまでの分類に属さない小型の土器を一括して集めた。坏もしくは甕になると考えられるもの（2853～2857）、壺形になると考えられるもの（2858・2859）がある。また、底部に焼成前の穿孔のあるもの（2857）もある。

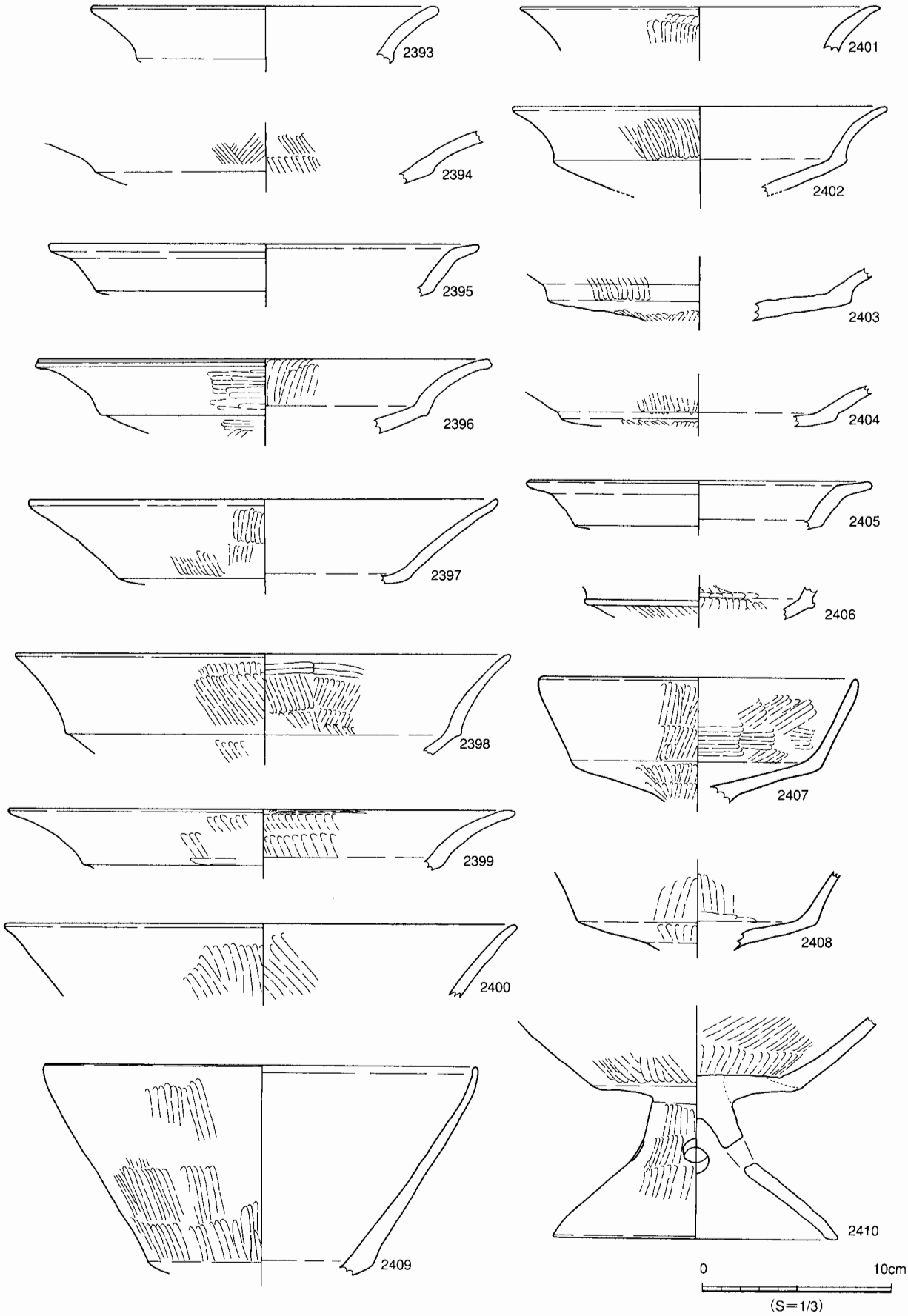


図202　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物①（高坏）

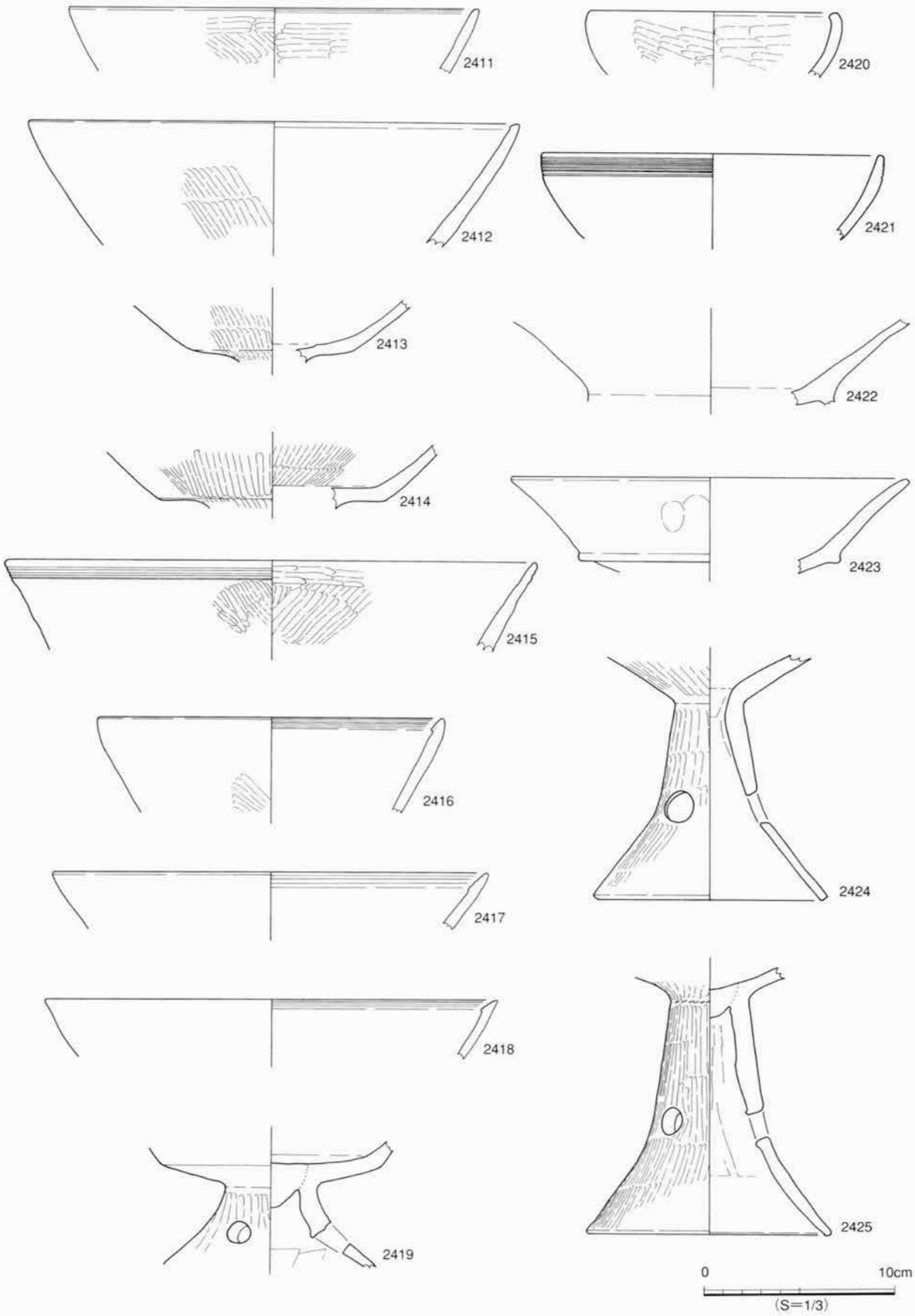


図203　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物②（高坏）

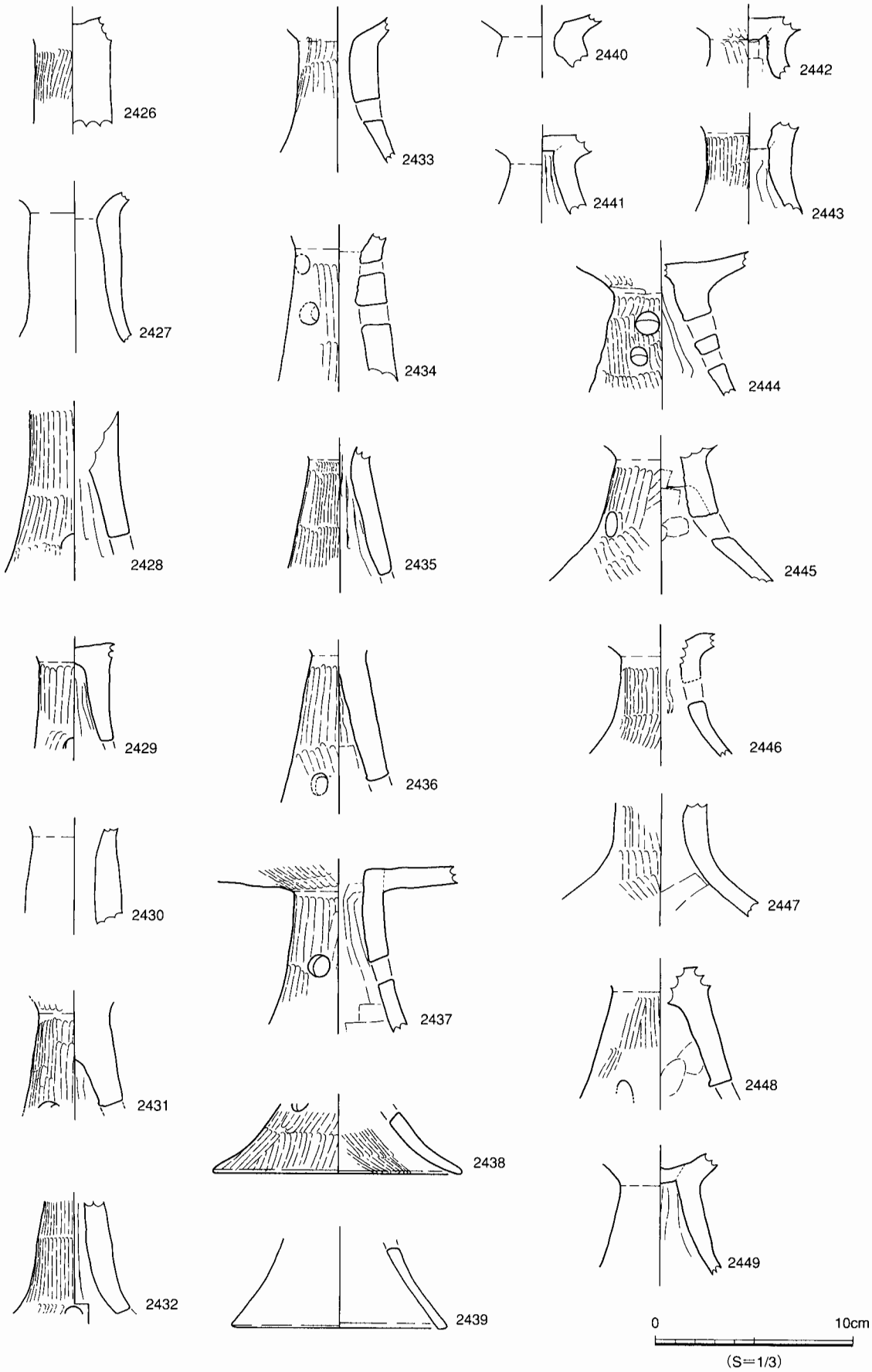


図204　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物③（高坏）

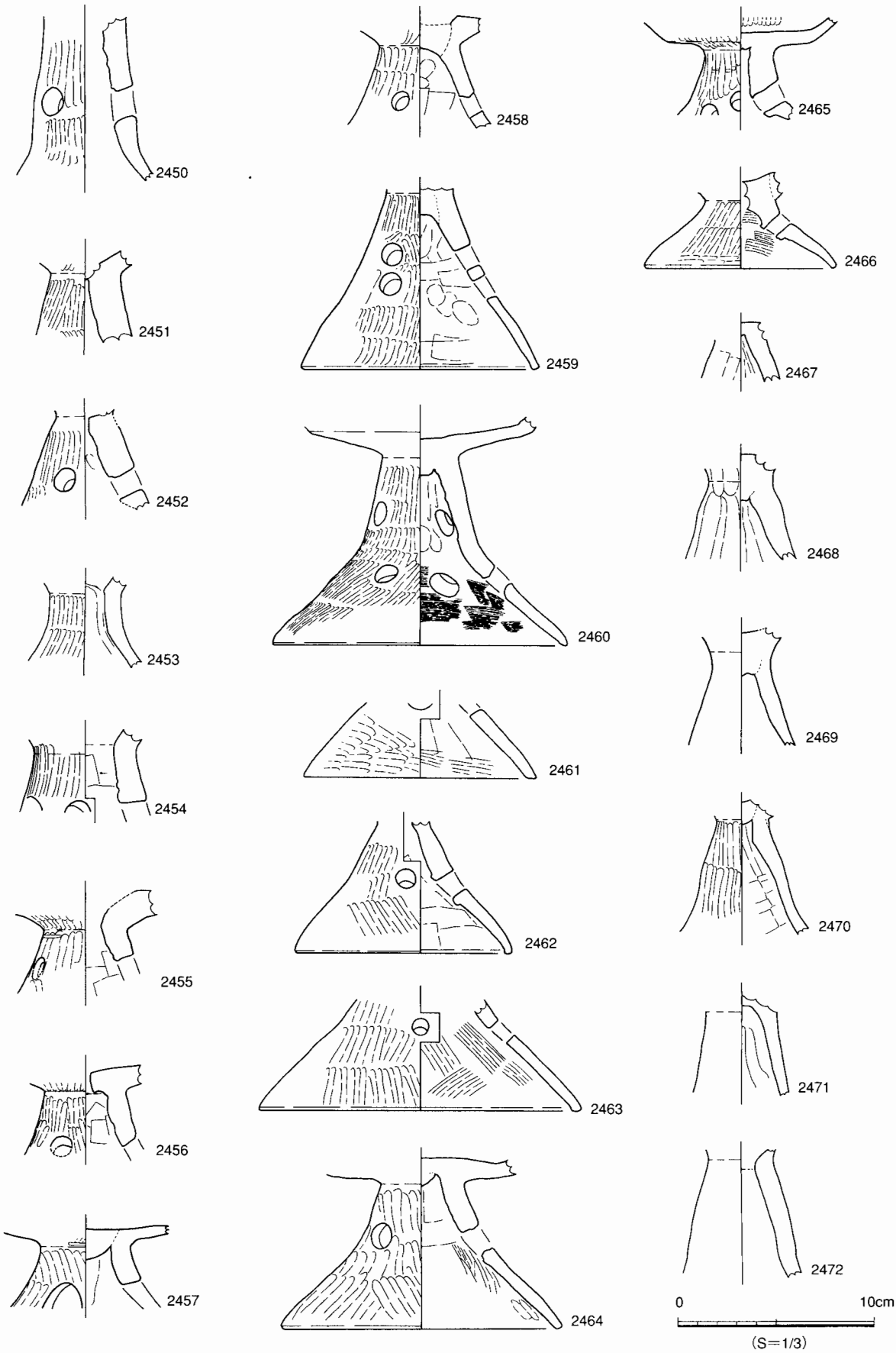


図205　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物④（高坏）

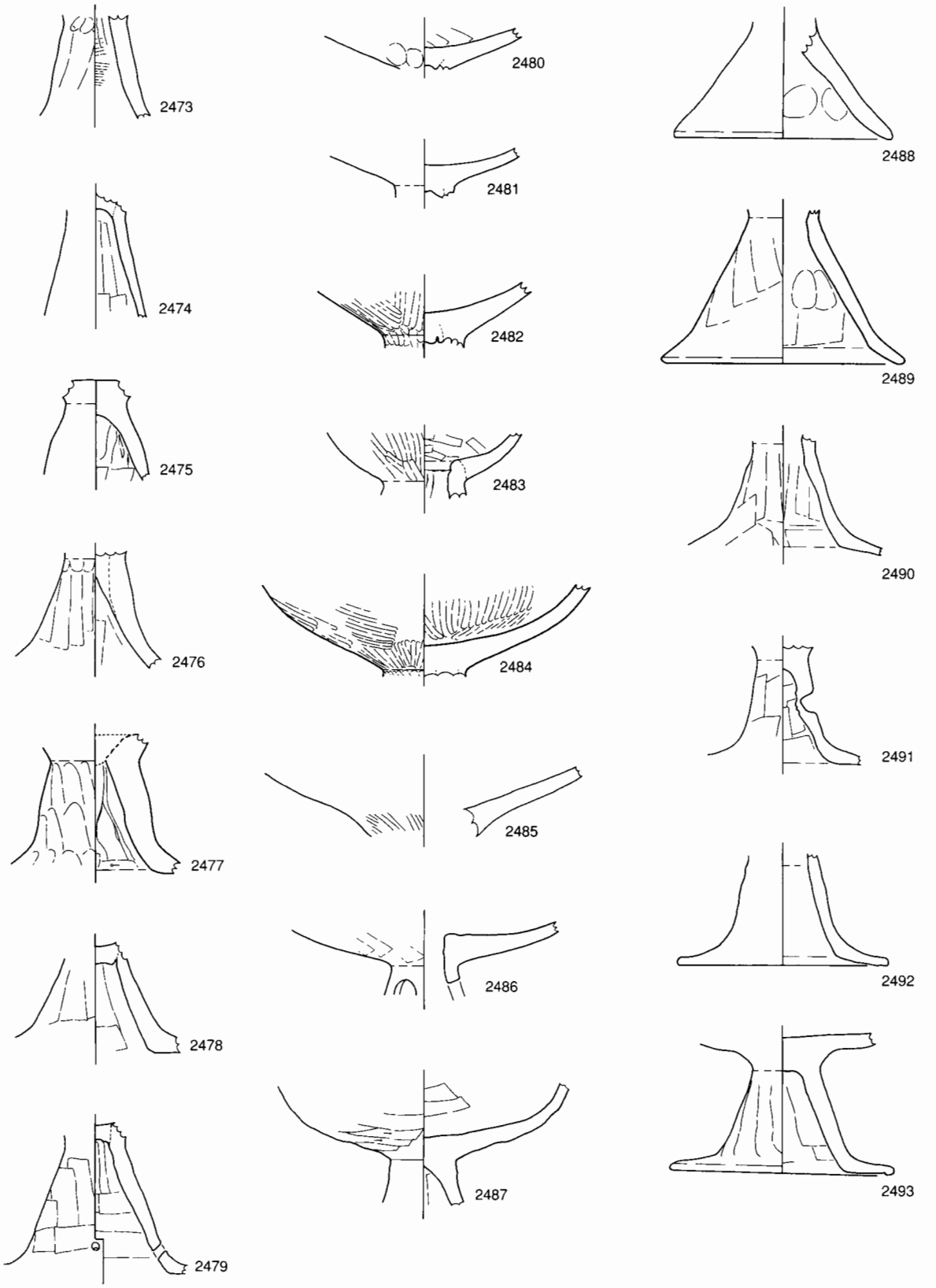


図206　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑤（高坏）

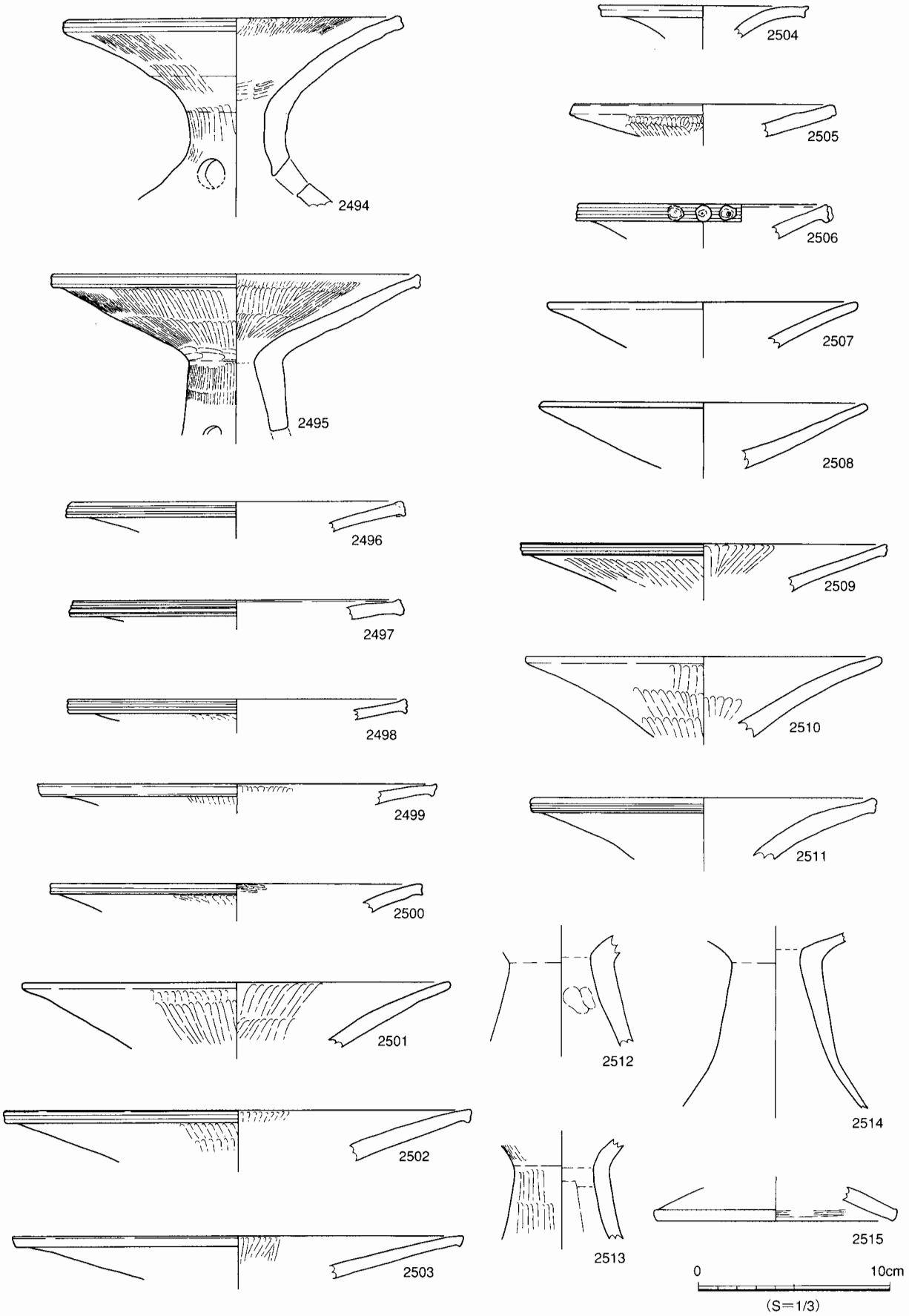


図207　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑥（器台）

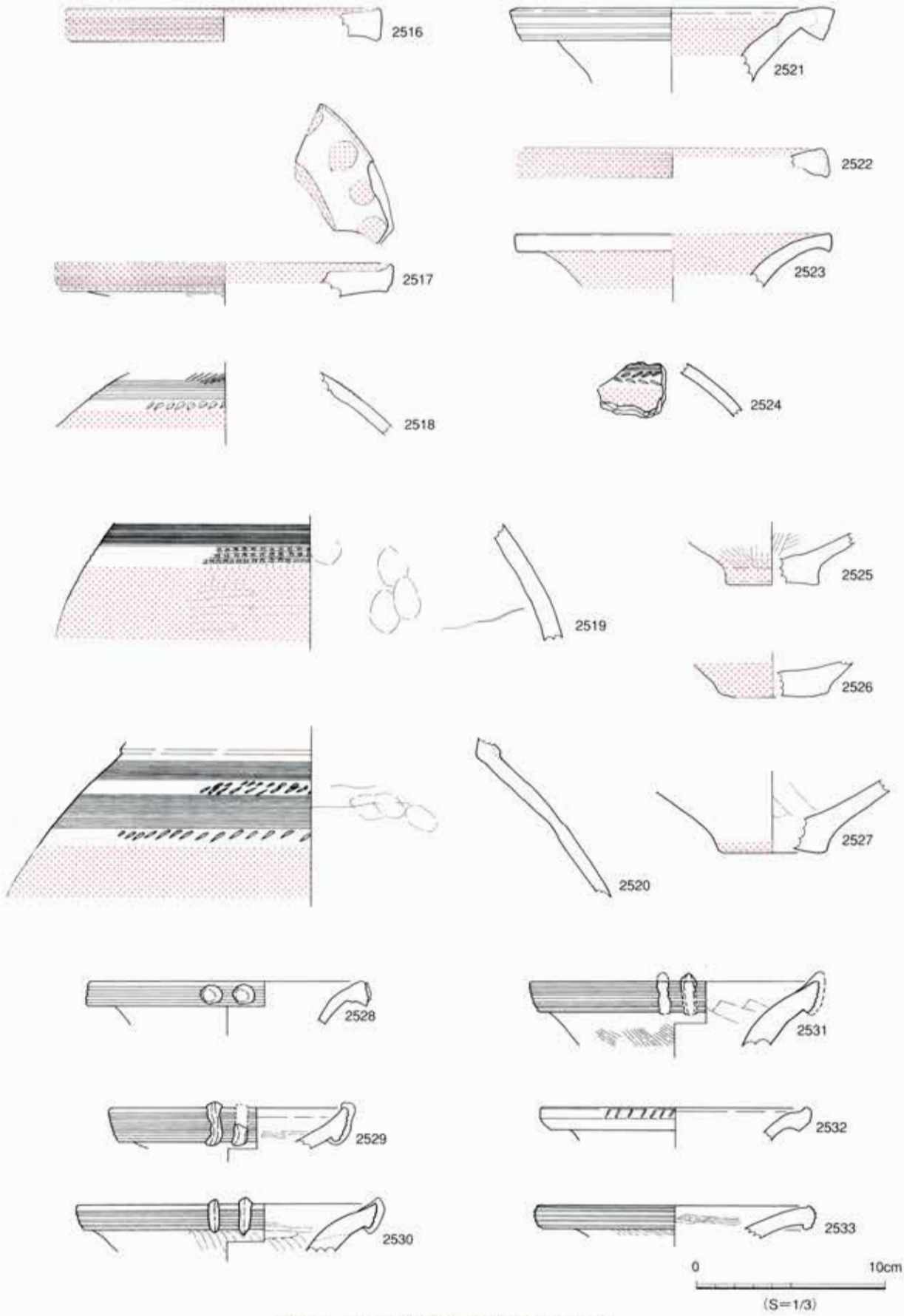


図208　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑦（壺）

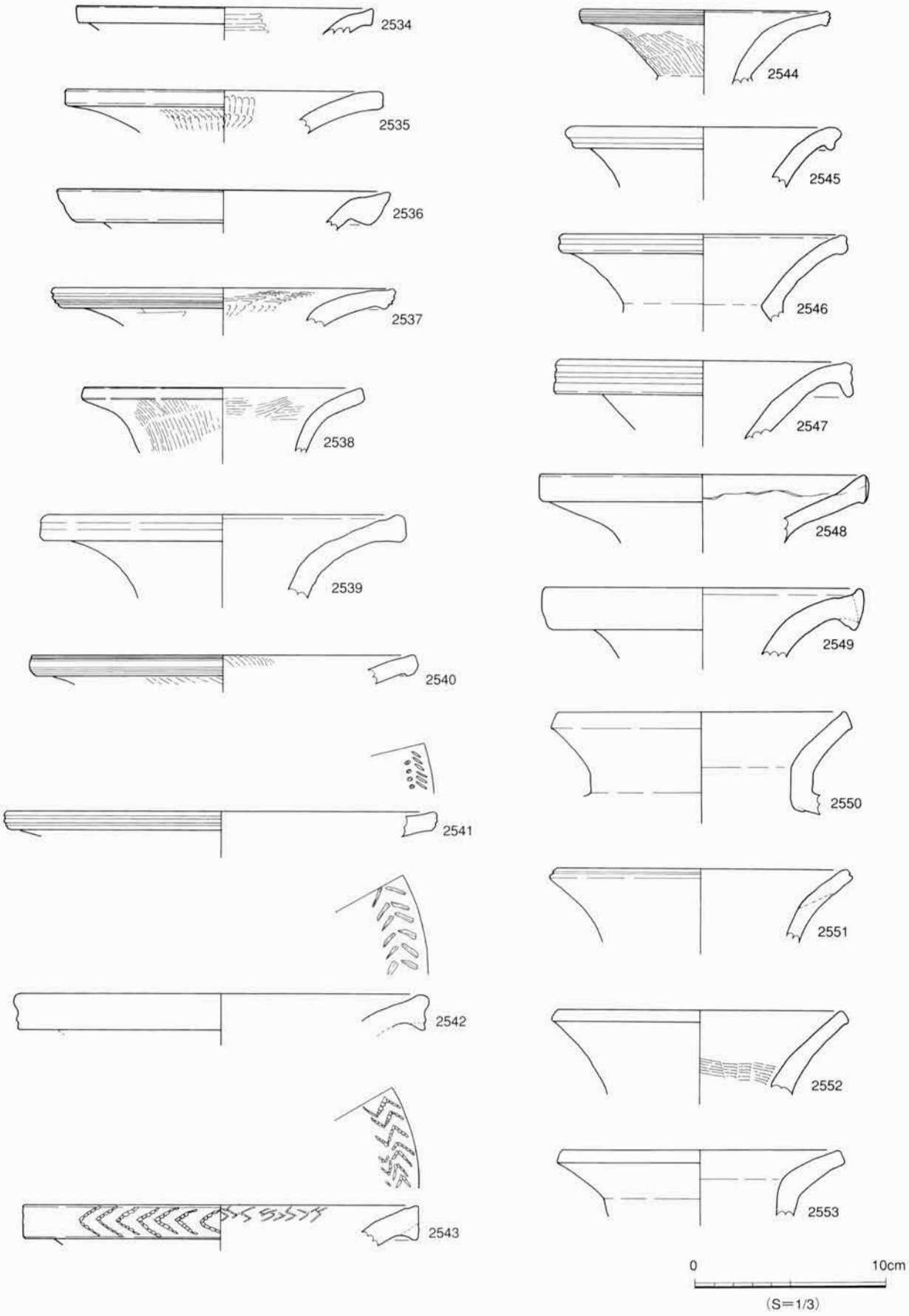


図209　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑧（壺）

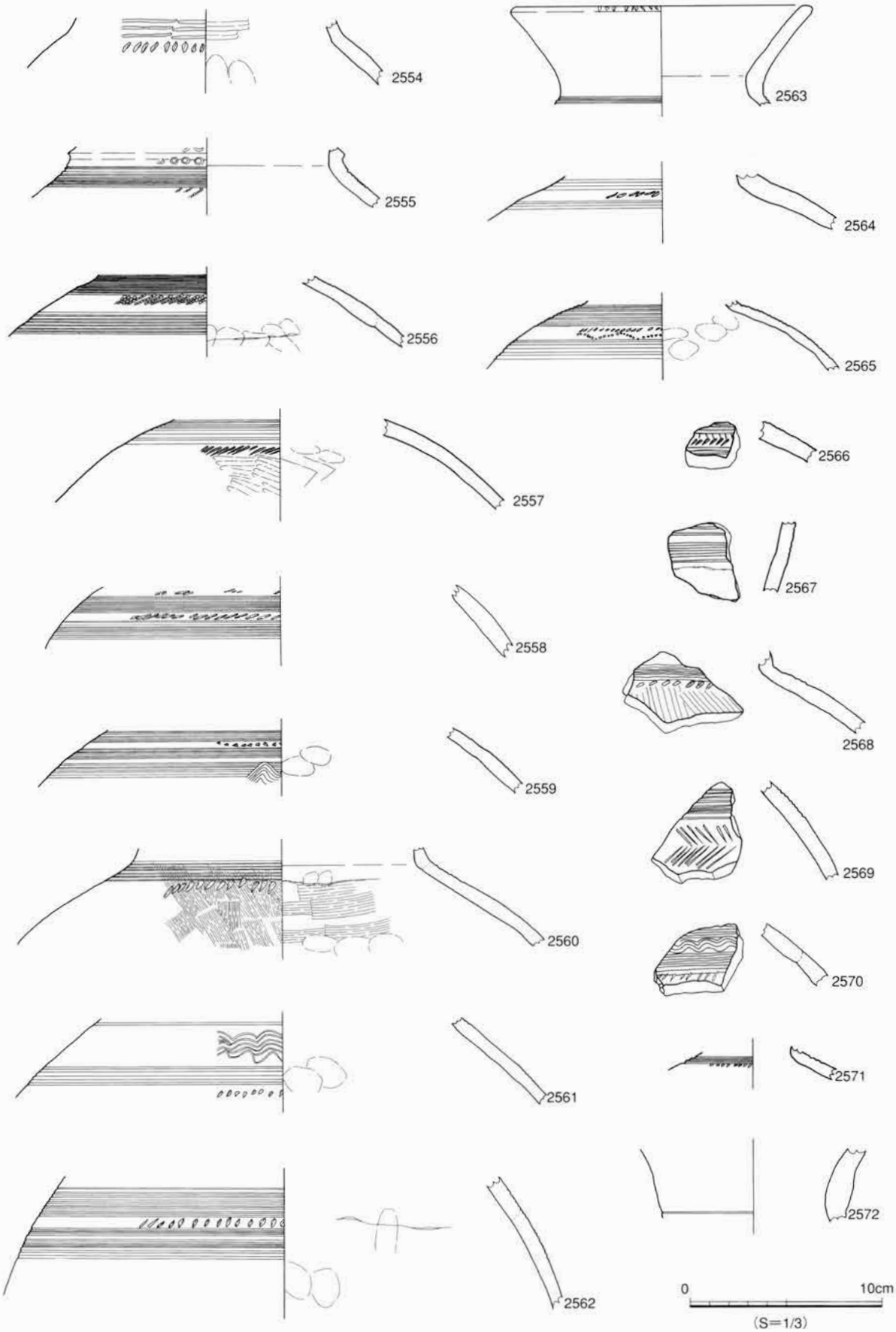


図210　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑨（壺）

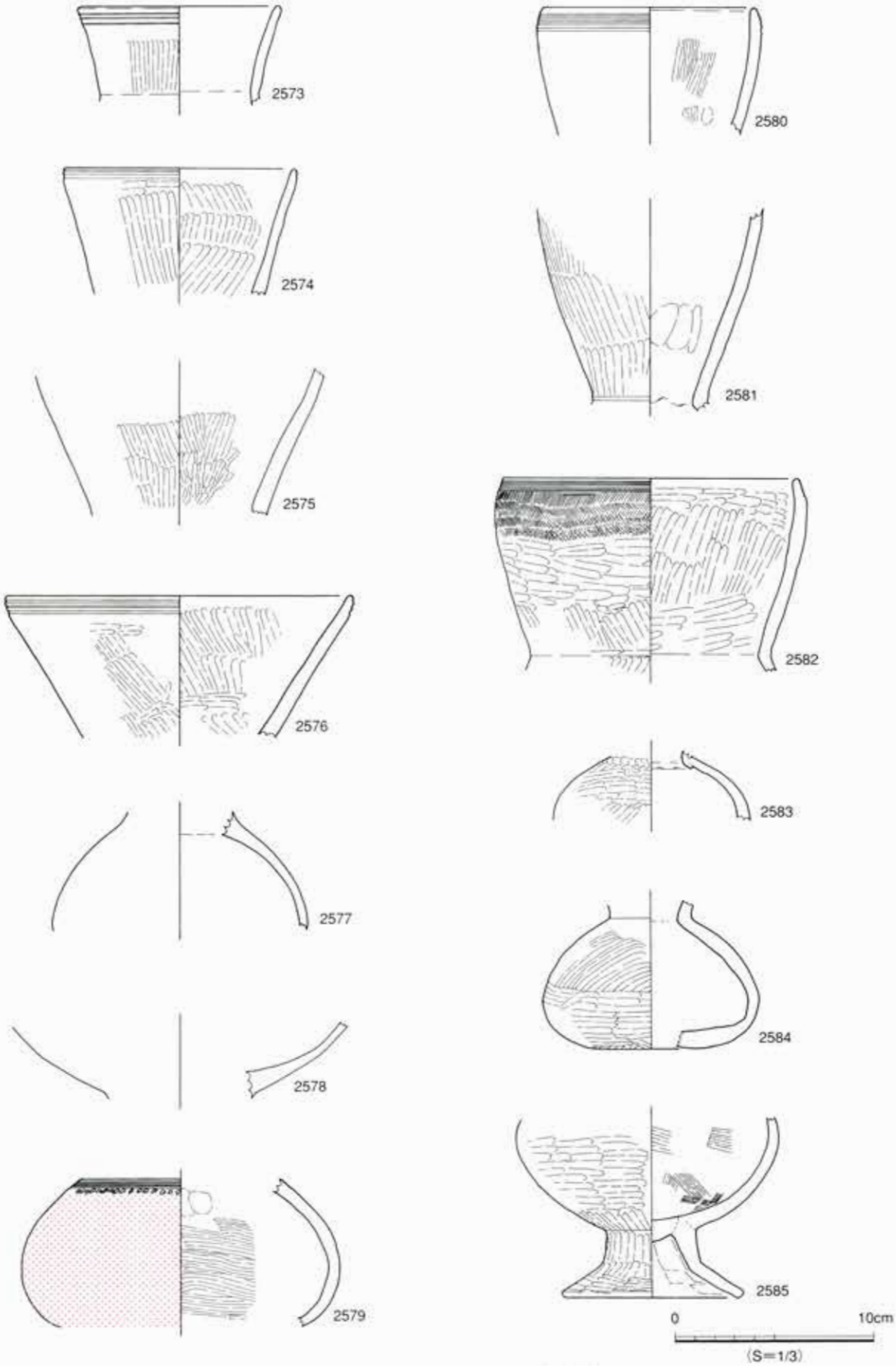


図211　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑩（壺）

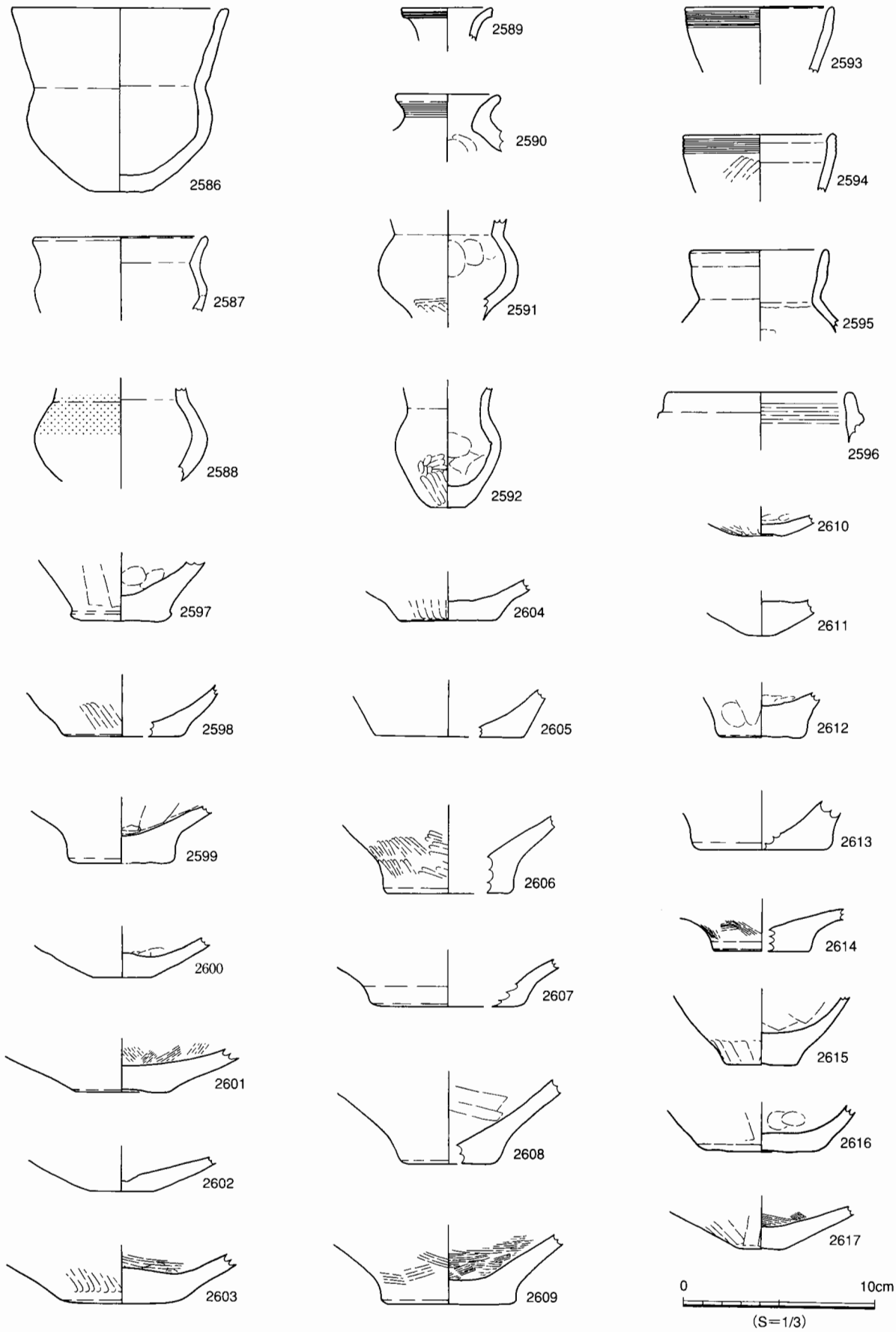


図212　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑪（壺）

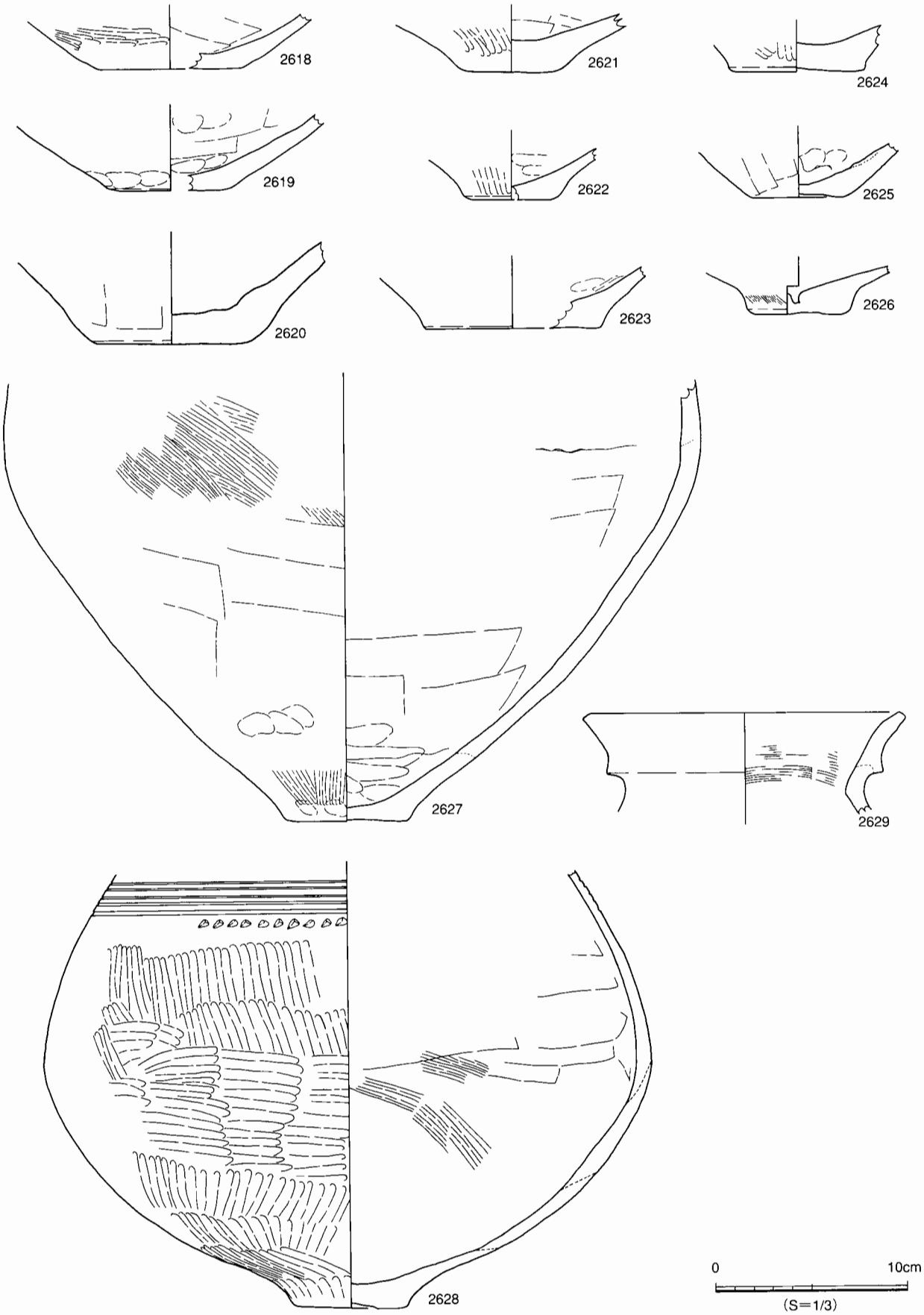


図213　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑫（壺）

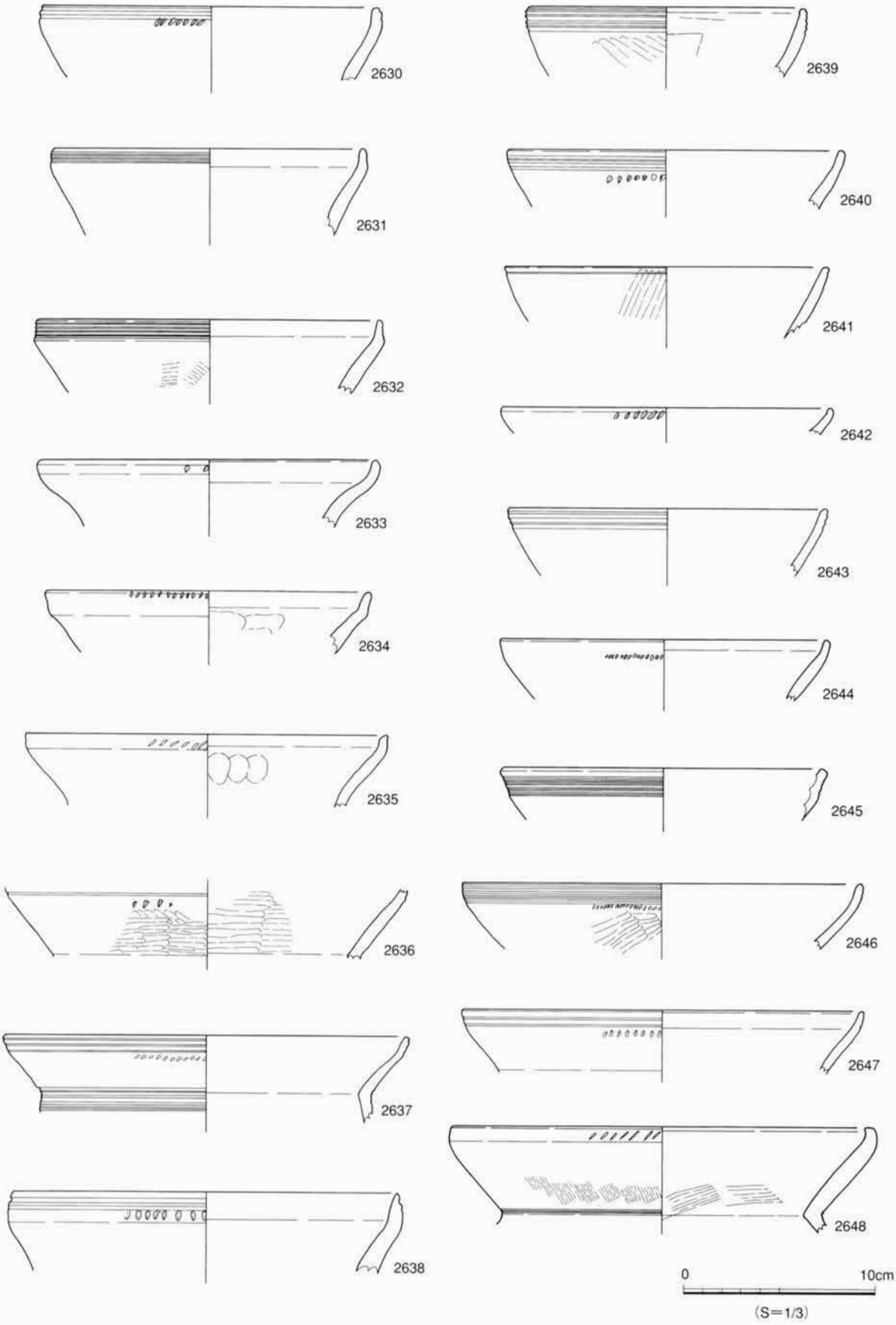


図214　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑬（鉢）

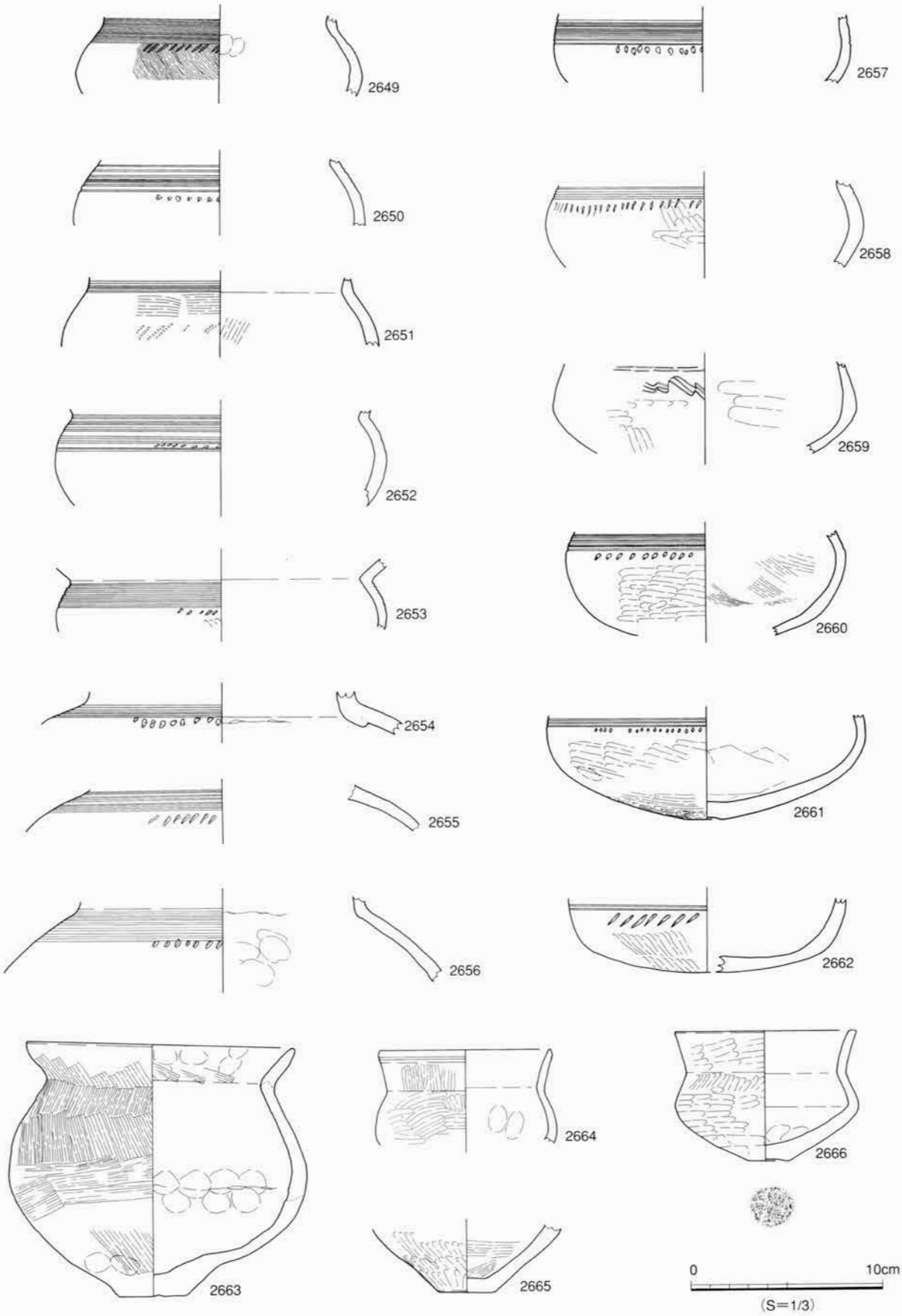


図215　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑭（鉢）

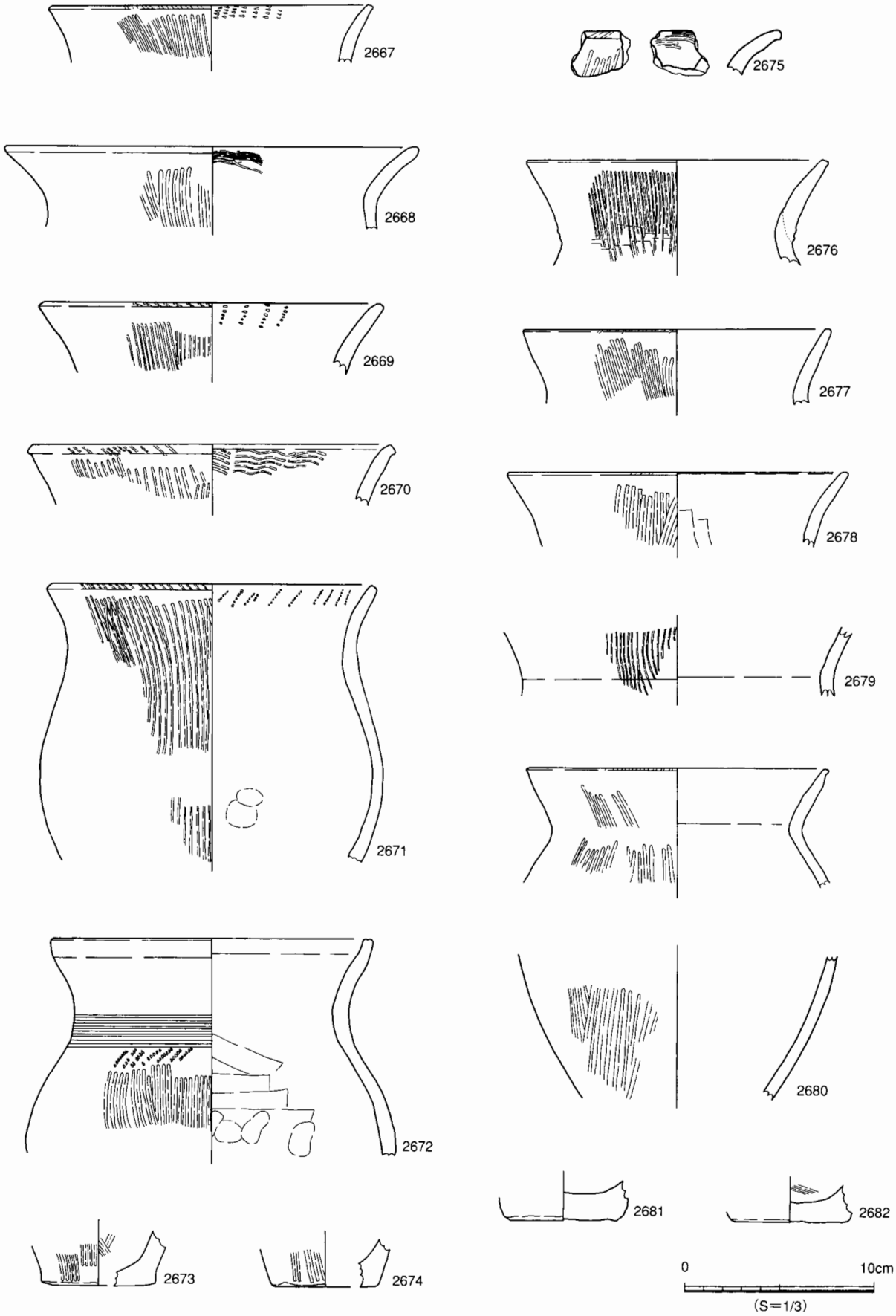


図216　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑮（甕）

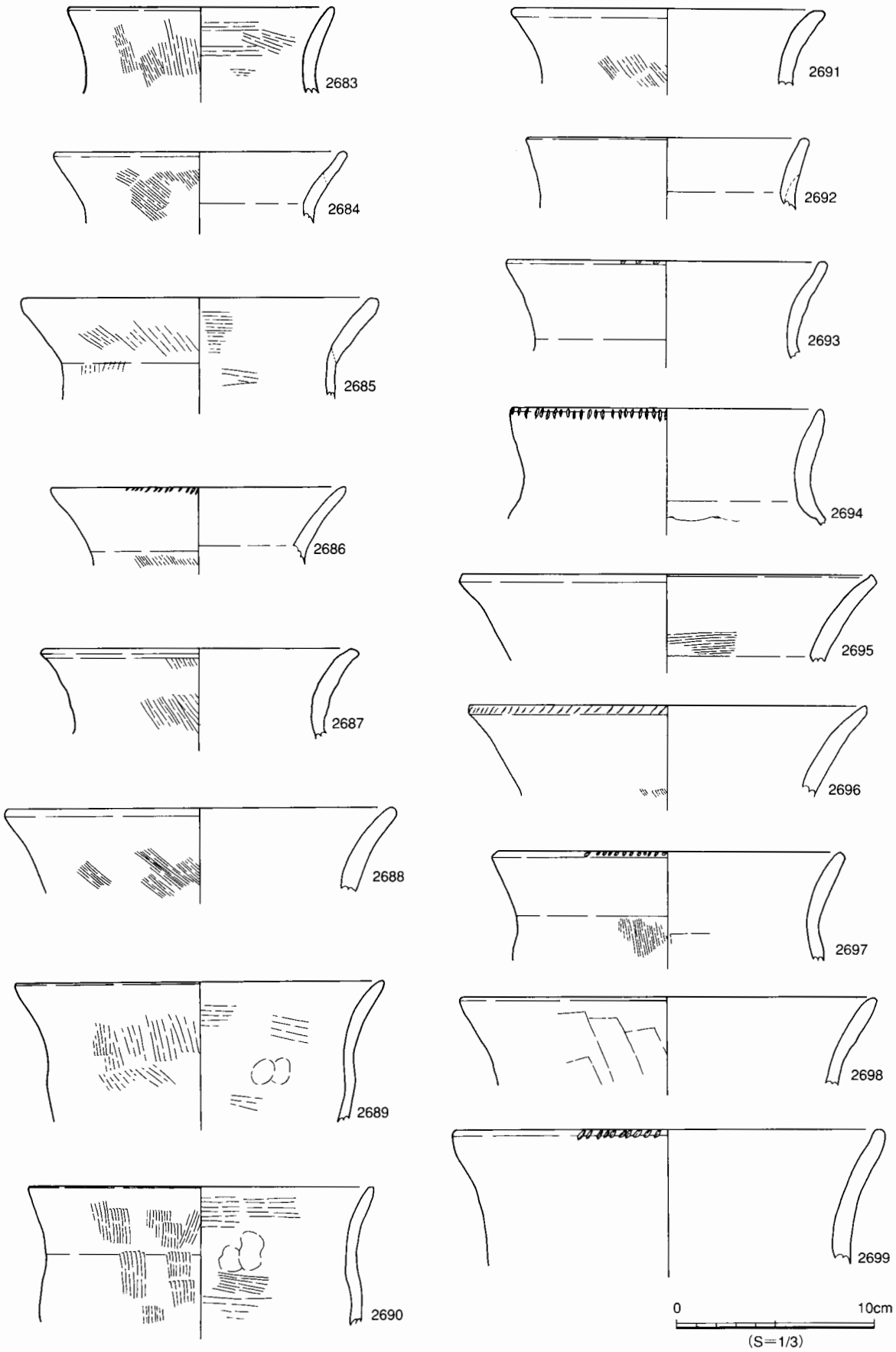


図217　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑯（甕）

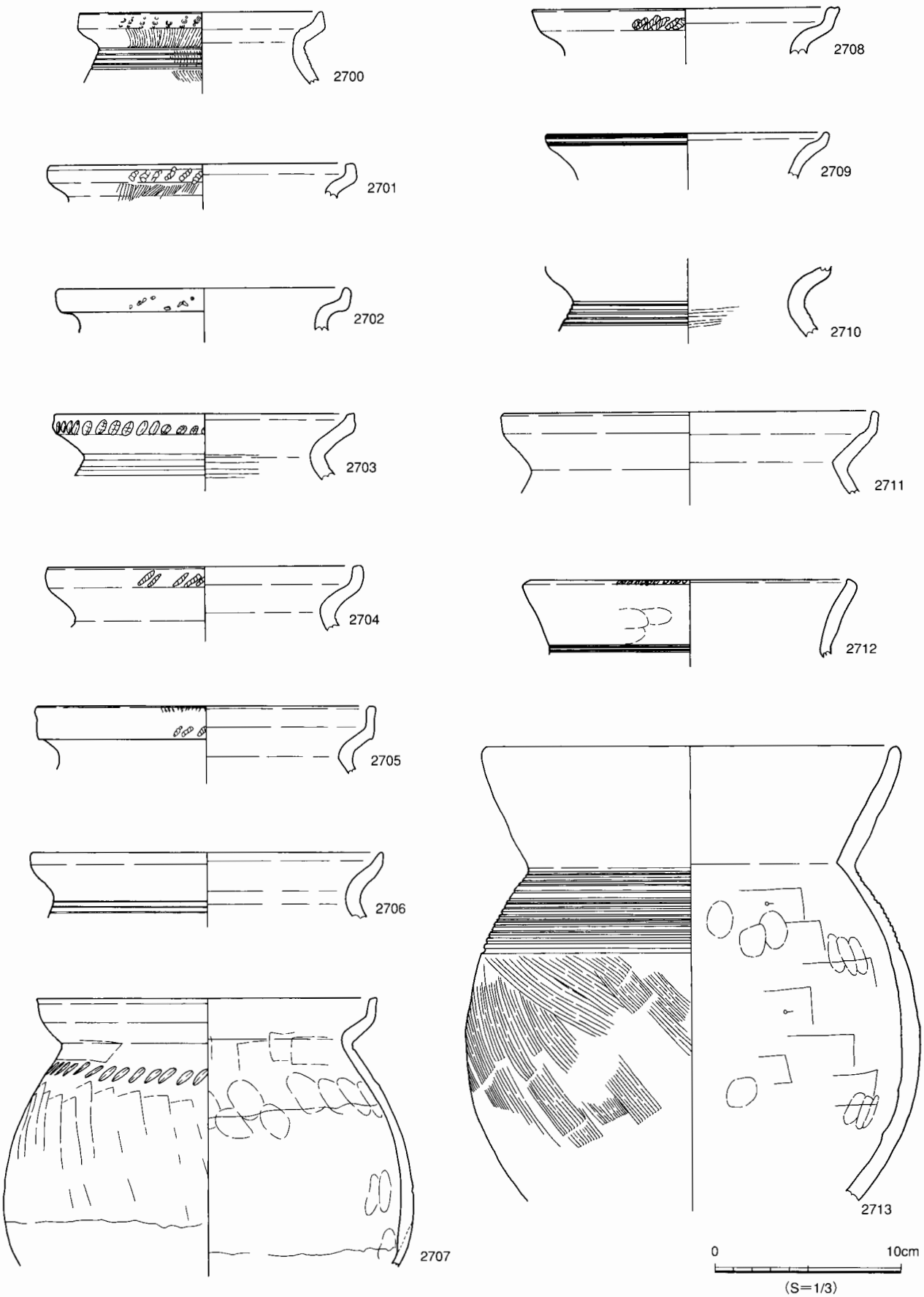


図218　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑰（甕）

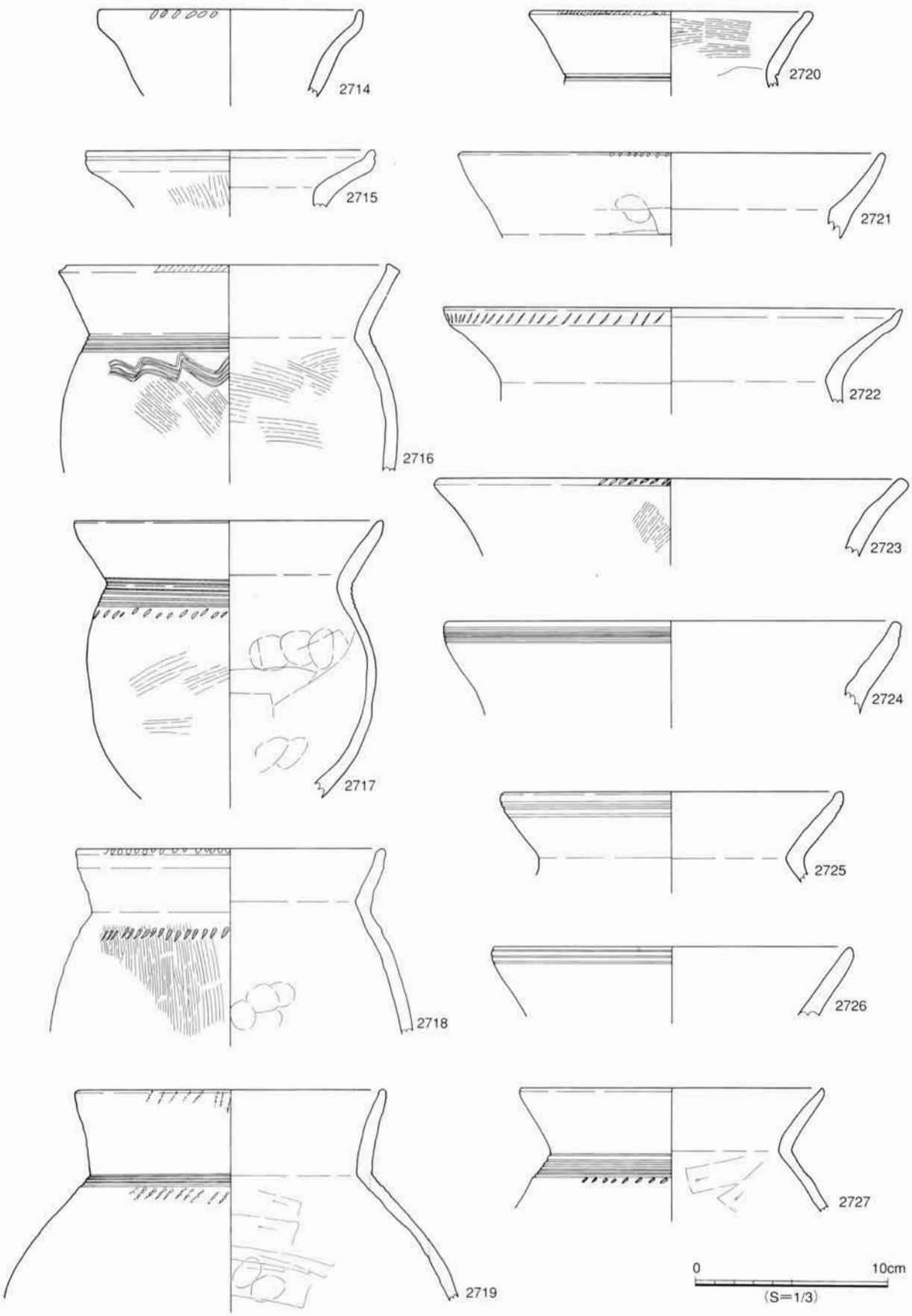


図219　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑱（甕）

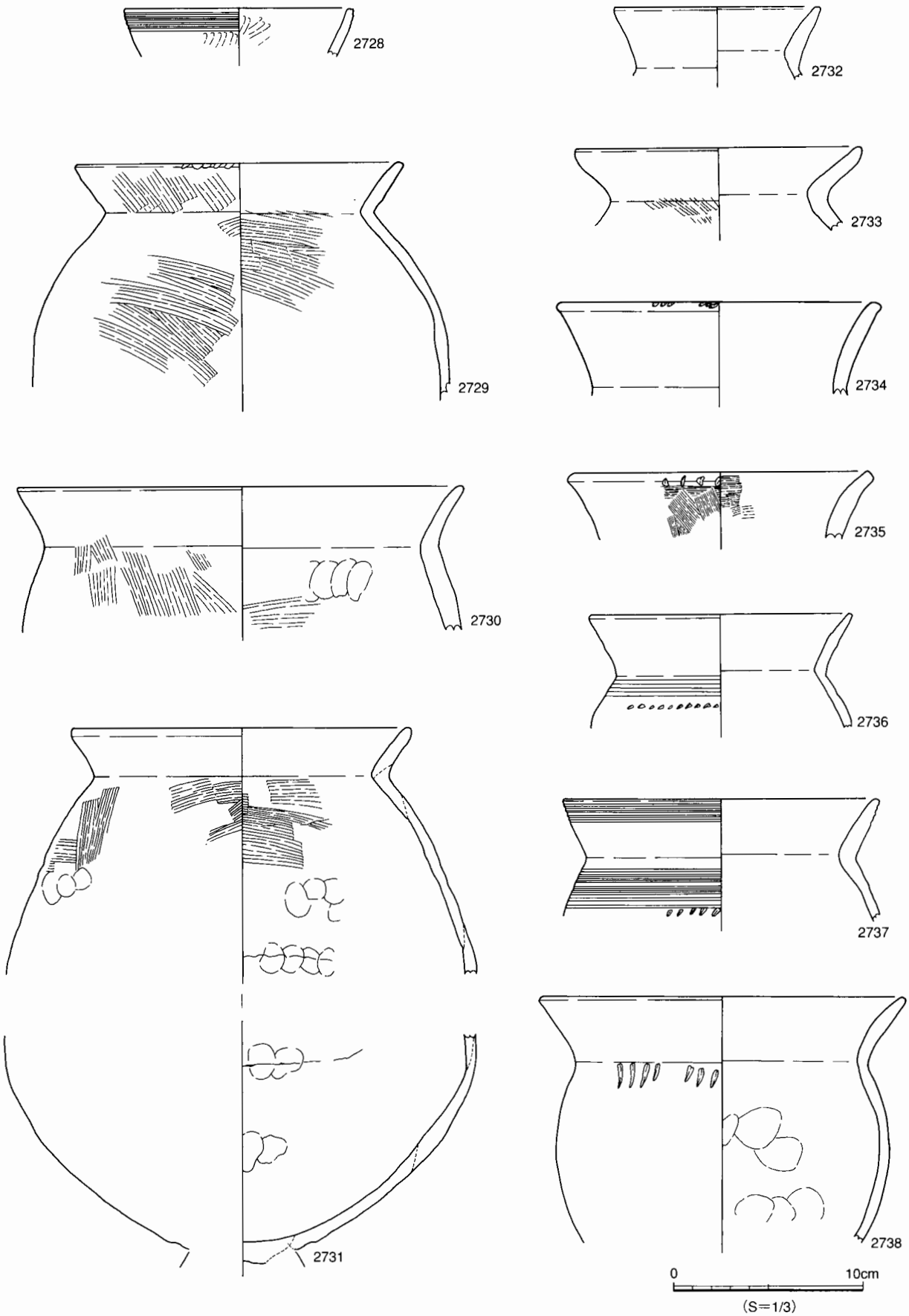


図220　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑲（甕）

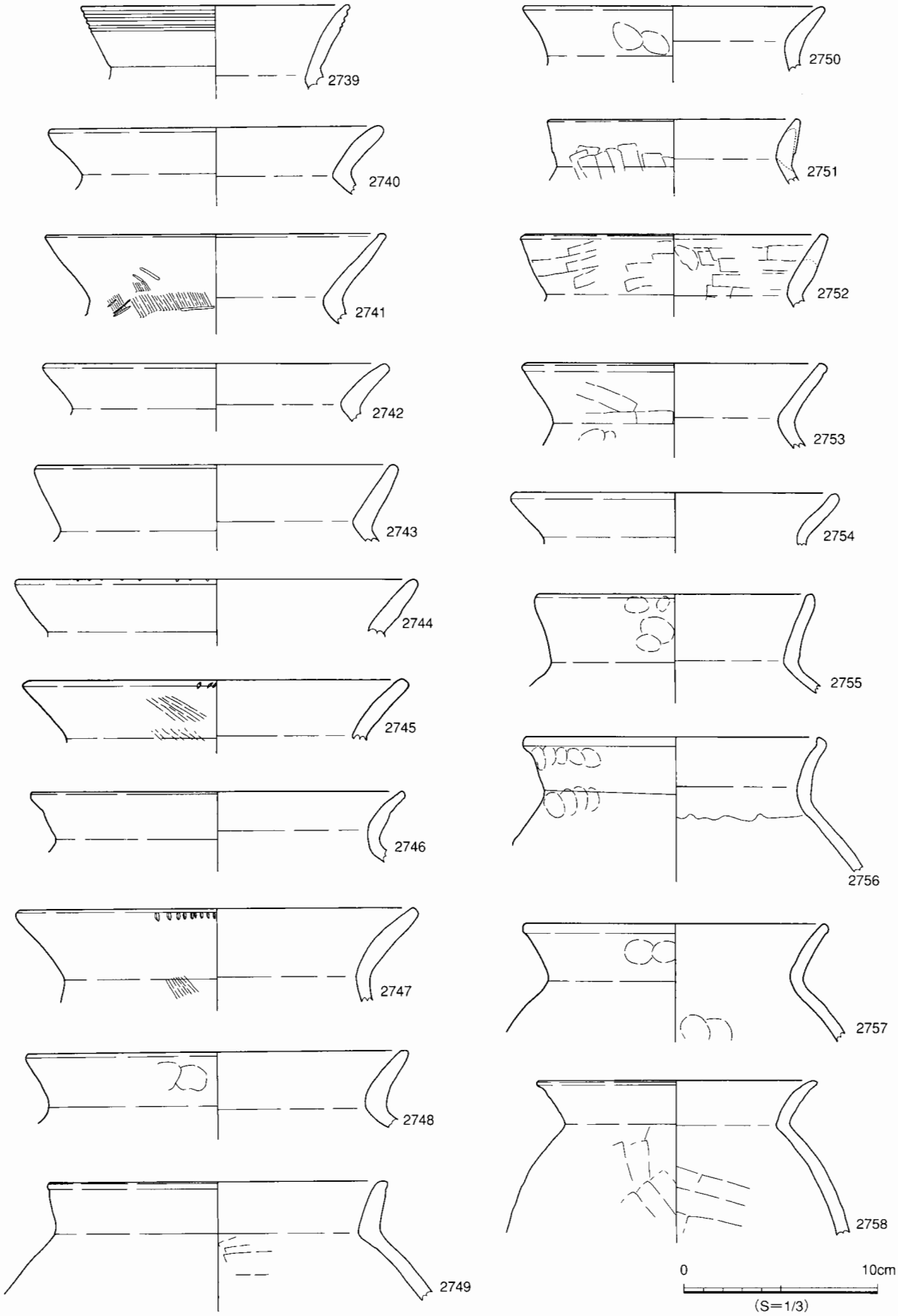


図221　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物⑳（甕）

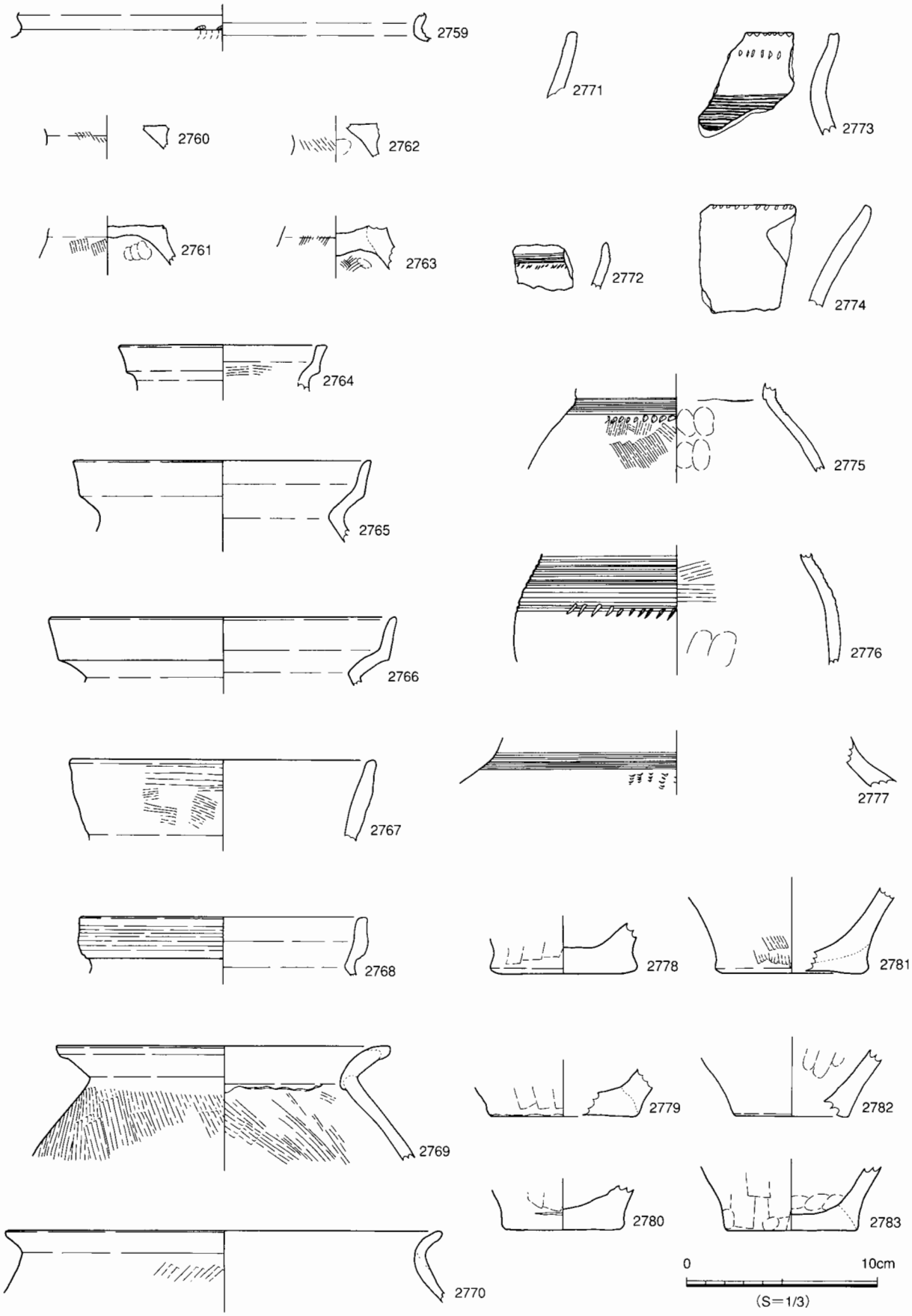


図222　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉑（甕）

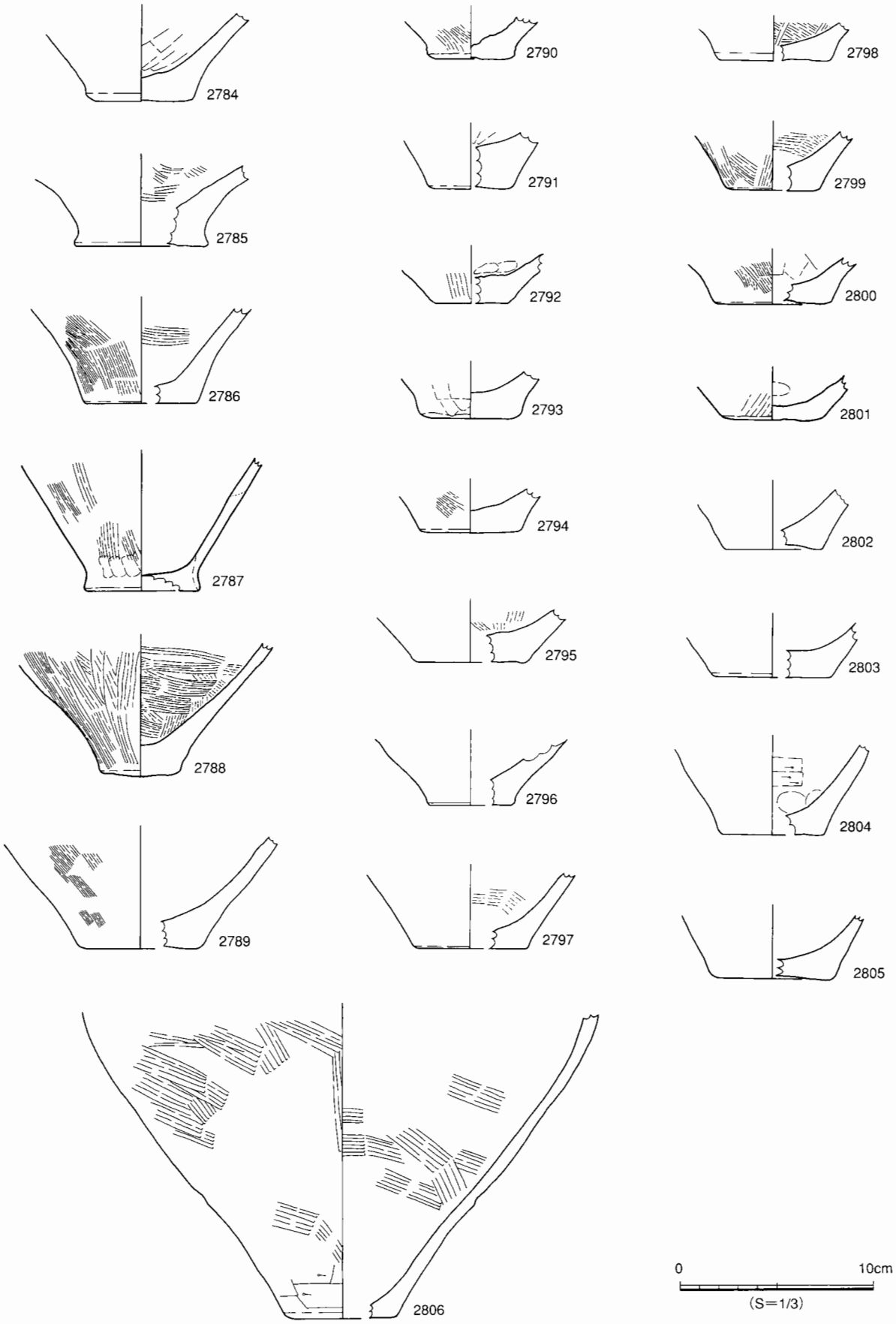


図223　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉒（甕）

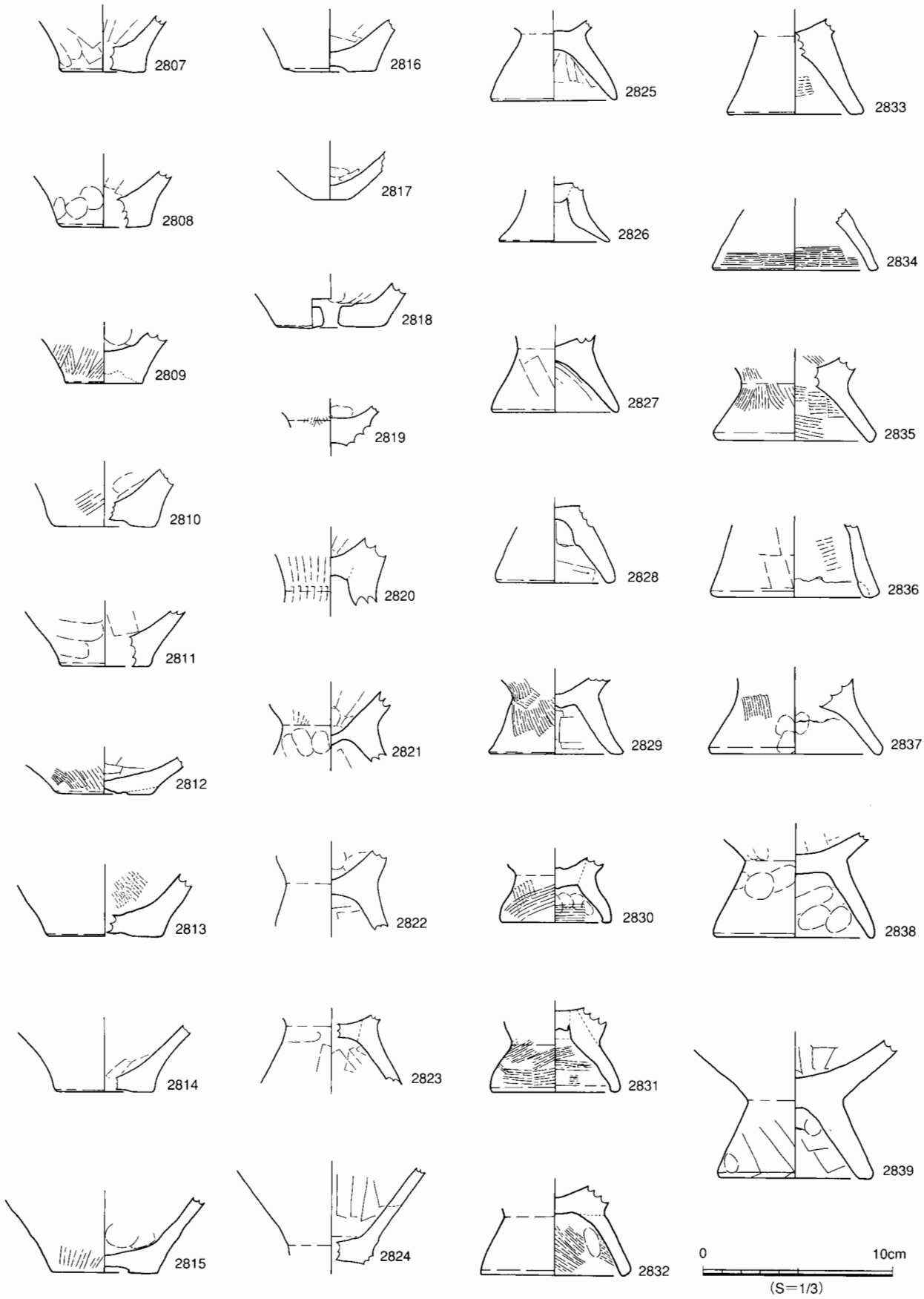


図224　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉓（甕）

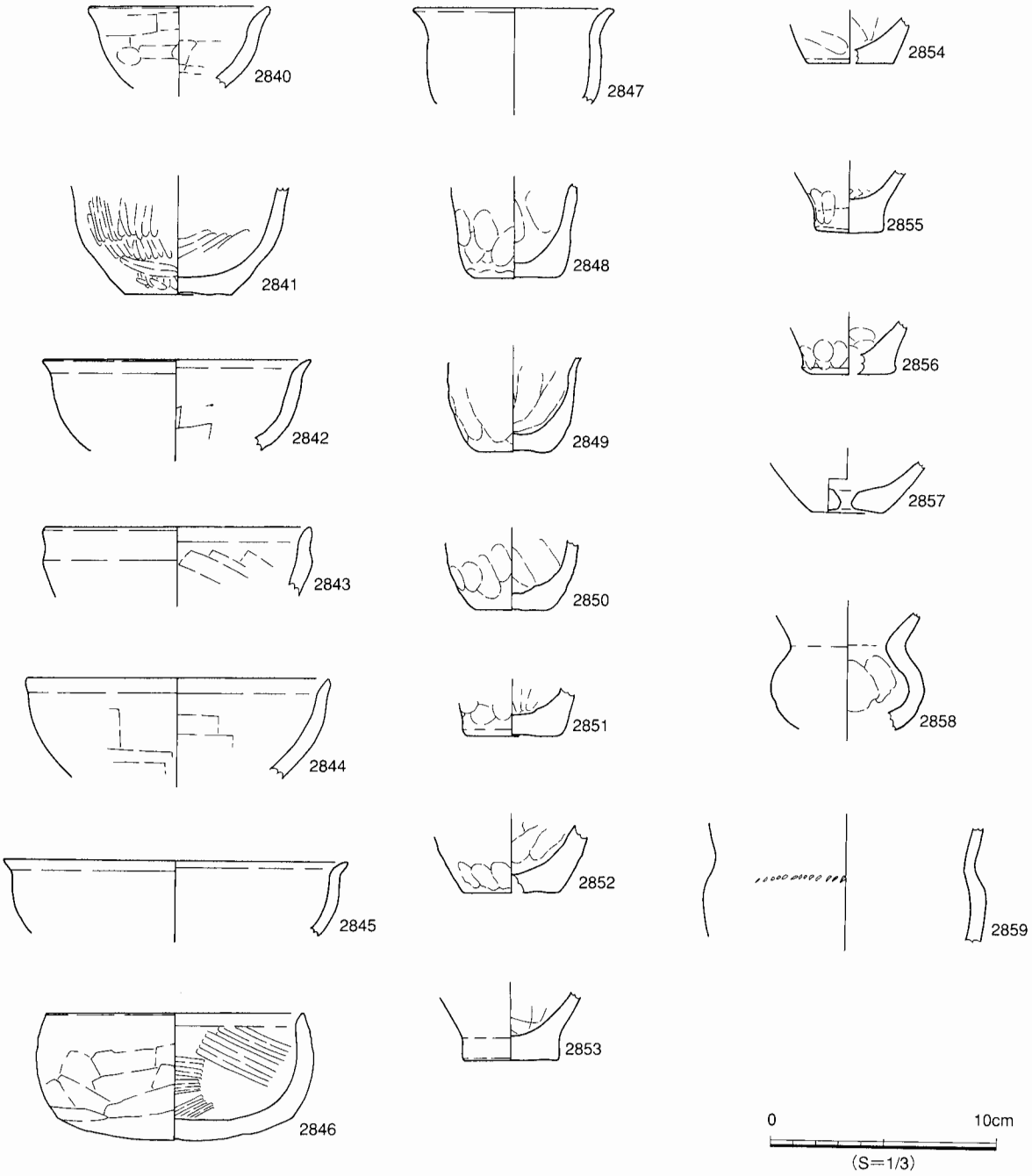


図225　Ⅱ・Ⅲ期包含層出土遺物㉔（坏・ミニチュア）

第4節　包含層出土金属製品

深橋前遺跡で出土した金属製品は、青銅製品3点・鉄製品4点の合計7点である。このうち、3点の青銅製品は、遺構から出土したものであるため、各遺構の文章に譲り、ここでは4点の鉄製品について述べることにする。(1) また鏃各部の名称などについては、杉山秀宏氏に依った。(2) なお7点の金属製品については、すべてに保存処理を施し、脱酸素剤を入れ、シーラーパックをした上で保管している。

7004は、柳葉形の鏃身を持つ有茎鏃であり、逆刺部も緩いものである。茎下部、欠損部の付近がやや細くなっている。ここを関部といい、関部を境にして上方を頸部、下方を茎部という。鏃身のなどの形態から、弥生時代から古墳時代のものと考えられる。7005は平造斧箭式の有茎鏃であり、両端部は欠損している。やはりこれも関部を持つものであり、鏃身の形態から、弥生時代から古墳時代のものと考えられる。また、これと類似する鉄鏃が尾崎遺跡の包含層から出土している。(3) 7006も有茎鏃であり、茎部が非常に長いものである。これも関部を持ち、この上方の頸部は撥形に開いて、抉りが大きい。7007は板状の鉄製品残欠で、1か所の穿孔が認められる。残存部分の形状から甲冑（短甲）の可能性がある。短甲だとすると、前胴の上部にあたるの最上段が考えられる。ただし穿孔の位置は、通常竪上に開けられている穿孔の位置とは異なる。(4) 出土層位が包含層であること、残欠で製品全体の形状が不明であることから、ここでは可能性を指摘するにとどめたい。

(1) 本節は澤村雄一郎氏にご教示を得て記述した。
(2) 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」（橿原考古学研究所論集第八創立五十周年記念）吉川弘文館
(3) 佐野康雄1993『尾崎遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第13集）（財）岐阜県文化財保護センター
(4) 末永雅雄1981『墫補　日本上代の甲冑本文篇』本耳社

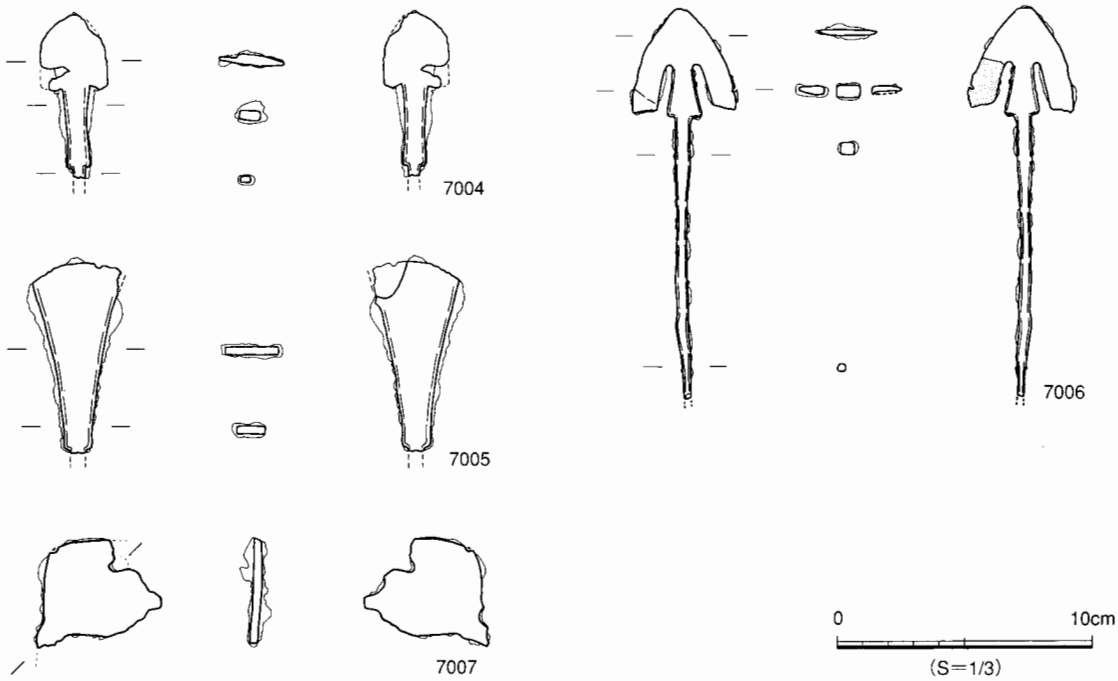


図226 包含層出土金属製品

第５節　包含層出土石器

概要

深橋前遺跡の資料は698点である。これらの資料は最初の観察から次のように大きく区分される。

縄文時代の打製石斧、弥生時代の磨製石器類、縄文時代と弥生時代の礫石器類、多様な剥片石器類、弥生時代以降の砥石などの石器類である。多様な剥片石器類は縄文時代・弥生時代の石鏃の他に、後期旧石器時代のナイフ形石器などが混在する資料である。

石器の概要を数量で把握すると次のようになる。剥片石器は旧石器時代から弥生時代までを含んでいる。全部で574点の出土で、その内訳は以下の通りである。加工のある石器や石器断片が196点で、そのうち128点を図化した。図版を作成する時点で不要と判断した資料があるので、図版掲載の剥片石器は116点である。

分析に適用しない剥片類は、珪岩155点、下呂石・サヌカイト47点、凝灰岩・頁岩35点、砂岩類14点、石英12点、黒曜石4点、珪化木１点、裂片類110点（石材属性は不要）である。珪岩はすべての時代の資料を含み、下呂石・サヌカイトは縄文時代中期以降、凝灰岩は旧石器時代の石器の可能性がある。剥片石器類の内訳は図化資料の数量の把握で十分であるので、属性表を参考していただきたい。

打製石斧は８点出土し、５点図化した。磨製石斧は図化した１点出土している。磨石は43点出土し、特に良好な資料を8点図化した。打欠石錘は44点出土し、11点を図化した。磨石のなかでも縄文早・前期に特徴的な特殊磨石は２点出土しているので図化した。敲石は14点出土し、9点を図化した。砥石は9点出土し４点図化した。石球２点は図化した。大形の器種不明石器１点も図化してある。

第１項　整理の目的

以上の点から深橋前遺跡の石器の整理は、大きく区分された時期別の資料体を作成すること、次にその資料体について、考古学的な所見を記述することに重点を置くことにした。この目的に添って作業をすすめたので、いずれも図化の対象となった石器は形態的特徴の顕著なものである。

第２項　整理の方法

剥片石器以外は器種に分類して、そのまま図化対象の遺物を選択した。剥片石器は最初に遺構内出土の石器と包含層出土の石器を区分した。次に遺構内出土の石器について検討を行った。検討の結果、遺構内にあっても出土層位がMと記載されている石器は、縄文時代の石匙、旧石器などで、遺構の時期とは異なる遺物であることがわかった。これらの遺物は、包含層出土の石器として扱った。

次に包含層出土の石器は、二次加工のある石器と打面の残る剥片類を資料体として152点選択した。この中から二次加工のある石器で、時代の特徴を示す遺物を選択し、それを図化と分析の対象とした。

図化しなかった剥片類は、石器ブロックの分析を行うために母岩別分類作業と接合作業を行った。しかし出土位置で有意なまとまりを示す母岩別資料がなく、さらに接合もしなかった。この結果、石器ブロックの母岩別資料の分析をすることは成果がでにくいと判断したので、剥片類の分析作業は行わなかった。

図化された石器は、時代を明瞭に示す資料であり、それらは属性表と原稿を作成した。

第３項　属性表の記述

打製石斧や磨石・叩石類については、法量と所見を記載した属性表を作成した。剥片石器については、特に剥離技術の分析で、さらに細かな時期区分ができる可能性があるので、二次加工技術を記号化して属性表を作成した。記述にあたっては、石器の理解をすすめる目的で、剥離技術に着目した石器の記述方法についてを付編に記した。一般的な記述方法については、「石器研究法」（竹岡俊樹著、言叢社、1989）と『『続石器研究の感想』（角張淳一、「東京考古」18号、東京考古談話会、2000）に準じた。

第４項　図版と石器の説明

図の構成は基本的に時期区分ごとになっている。弥生時代以降の遺物は、遺構内遺物と包含層の遺物に分けてある。弥生時代以前の石器は、包含層の石器であるので、これまで蓄積された学問的成果をもとにした時期区分になっている。以下に図と石器の説明を行う。

①遺構内出土の石器（図227　図版66）

遺構内の石器をまとめて掲載した。6001は磨製石斧の断片。6002は磨製石剣の断片。6003は片刃打製石斧である。基部は欠損している。6004は磨製石鏃の未製品。6005は有溝石錘。6006と6007は有茎石鏃である。6008は縁辺に押圧剥離で刃部を形成した掻器。縄文時代にも同じ形態の石器があるが、遺構出土なので掲載した。6009は砥石である。石鏃の技術分析は図２とともに行なった。

②弥生時代の石鏃（図228　図版 67）

有茎石鏃はＳＸＥ01から２点出土している（図１）ので、弥生時代の有茎石鏃があることが理解された。また有茎石鏃は、縄文時代後期中葉から晩期にかけて、関東以西に出現するが、深橋前遺跡の出土の縄文土器には後期中葉から晩期にかけての土器はない。よって有茎石鏃はすべて弥生時代の石鏃であると判断した。

遺構内の石鏃は３点しかないが、それらは下呂石に硬質ハンマーの押圧剥離（HP）で加工がなさる製作技法である。

これらを弥生時代の石鏃の技法とみて、１；有茎石鏃であること、２；凹基鏃でも下呂石やサヌカイトを利用して、HPの加工がなされ、素材面を大きく残していることを判断の根拠として、資料の中から弥生時代の石鏃を選択した。

③弥生時代以降のその他の石器（図229　図版67）

石球・砥石・磨製石斧・勾玉である。石球は球形の自然石を遺跡に持ち込んだもの。投弾の可能性がある。砥石はいずれも金属痕が付いている。弥生時代以降の石器であるが、時期の特定はできなかった。片刃磨製石斧は弥生時代の石器である。勾玉も時期の特定はできなかった。

④旧石器１（図230　図版68）

ここに掲載した旧石器は後期旧石器時代の石器で、台形様石器群とナイフ形石器の資料である。１から６までは所謂台形様石器群で、後期旧石器時代の初頭の石器群と推定できる。

台形様石器の加工は、細い先の硬いハンマーの間接打撃（HI）で主要剥離面側に平らな加工をする

のが特徴である。6040は台形様石器の加工をよく示している好資料である。この加工と同じ技法で構成される石器が6041・6042・6043である。また台形様石器群の素材剥片は円盤状石核から斜軸剥片を剥離して、その剥片を素材にしている。また円盤状石核からは石刃も剥離される。そして斜軸剥片や石刃を生産する剥離技術も二次加工と同じHIであるが、ハンマーの角度が打面に垂直であるため、しばしばクサビタイプの割れをおこし、打面がくだけることもある。この様相をよく示しているのが6045の石刃である。6045の石刃は打面が点状打面で、裏面に顕著な使用痕も観察できる。

剥片6044は、以上のような剥離技術をよく表現している6040と同一石材の資料である。参考に掲載した。

これらの台形様石器は、もうひとつの問題がある。それは台形様石器の素材には斜軸剥片が用いられる場合と、横長剥片が用いられる場合がある。東京都武蔵台遺跡X層石器群は、台形様石器・刃部磨製石斧と大量の接合資料を出土して遺跡である。そこには、黒色緻密安山岩質（岩石名はホルンフェルス）で、剥片素材の石核を用い、その主要剥離面を石核底面に、素材打面側を作業面にして、打面調整を行いながら連続的に横長剥片を剥離している接合資料がある。。広義の瀬戸内技法といってよい資料である。ひるがえって深橋前遺跡の１の資料は、底面をもつ横長剥片を素材にしている。背面には裏面と同じ方向から剥がされた剥離面があり、底面をもつ連続横長剥片素材であることが観察される。斜軸剥片を素材とする台形様石器群と広義の瀬戸内技法の関係は後期旧石器時代の初頭の様相にきわめて重要な問題を提起するが、ここでは資料の提示にとどめることにしたい。

6046から6047はナイフ形石器群である。後期旧石器時代の後半に位置すると推定できる。

７は珪岩製の杉久保型ナイフ形石器である。杉久保型ナイフ形石器は、１本稜線の石刃の打面側と末端辺の一部を「硬質ハンマーの押圧剥離の刃潰し加工（HP/刃潰し）」で整形した石器である。茂呂型ナイフ形石器は素材の石刃を斜めに切り取るように整形するので、一側辺は連続して加工がなされるのが特徴である。6046のナイフ形石器は茂呂型ナイフ形石器ではなく、杉久保型ナイフ形石器である。

6047は横長剥片素材のナイフ形石器である。末端辺を刃潰し加工で整形し、打面を折とり、そのあとに弱い刃潰し加工で整形している。先端が折れているので、加工の範囲と形態が理解できない。一側辺に刃潰し加工がなされること、小形の横長剥片素材であることが重要な属性である。

6048は掻器である。珪岩の石核断片の先端部に刃部を形成している。刃部の剥離痕は加工ではなく、使用痕の可能性が大きい。

⑤旧石器２（図231　図版68）

6049から6054までは、主に瀬戸内系の旧石器と推定できる資料である。6050はナイフ形石器の可能性が高いが、問題点が２つある。最初の問題点は素材の目的的剥片の形態が不明な点である。この石器の素材裏面は節理面であるが横長剥片の可能性を示している。しかし節理面が強すぎて、果たして目的的に剥離された素材か判断できない。ゆえにここでは素材を裂片とした。次の問題点は二次加工技術である。瀬戸内系石器群の二次加工といえば、間接打撃の鋸歯状剥離が原則である。しかしこの石器の二次加工は、直接打撃である。先の細い硬質ハンマーを、素材の真上からトントンと叩くように加工をしている。こうした剥離技術は、南関東ではIV下文化層の時期によくみられ、瀬戸内系と茂呂系の折衷形式のナイフ形石器として存在している。この地域の旧石器文化の様相の解明に重要な資

料である。

次に6051の石器は凝灰岩の鋸歯状石器である。瀬戸内系の石器群に多用される石質と二次加工技術の石器である。素材はおそらく厚い石刃であろう。両端を切り取るように鋸歯状の加工がなされている。

6049と6053と6054は側辺に同じ剥離面がつくられている。明瞭な打点、深いバルブで瀬戸内系の加工である急角度の剥離そのものである。しかし6049の剥離痕は背面側に、6053と6054の剥離痕は裏面側にそれぞれ剥離痕が形成されている。瀬戸内系の石器群の特徴は、背面側に付く剥離面は加工の面、裏面側は剥片を剥がす面という規則がある。同じ急角度剥離でも、一方は刃部を形成する加工であり、一方は横長剥片を剥離する石核の作業面なのである。ゆえに6049はノッチ（抉入削器）であり、6053と6054は小形の横長剥片を剥離する剥片製の小形石核である。6053と6054には打面をつくる打面調整も観察できる。

6052は凝灰岩製の旧石器である。横長剥片の側辺を刃部にして、素材の末端辺を折取り、基部裏面を平坦な剥離で厚みをとっている石器である。器種面はない。

瀬戸内系の旧石器の資料は、時期を特定できる要素が少ない。近隣の遺跡様相も参考にすると、AT上位の石器群と推定できる。

⑥縄文時代の石鏃（図232　図版68）

石鏃の資料体から弥生時代の石鏃以外を縄文時代の石鏃とした。縄文時代の石鏃は、石材と加工技術と大きさという属性の相関（技法）で大きく３つの区分ができた。

上段は硬質ハンマーの押圧剥離で急角度の加工がなされる小形の石鏃である。珪岩を主として頁岩と下呂石が１点づつ混じる。

中３段は硬質ハンマーの押圧剥離で平坦剥離のきれいな両面加工の石鏃である。珪岩が主体で、硬質頁岩と下呂石が少量混じる。

下３段は軟質ハンマーの押圧剥離で平坦剥離で薄くやや幅広の石鏃である。下呂石を主とし、珪岩が１/３の量で混じっている。

これらの石鏃を出土土器と整合させてみると、上段が早期、中３段が早期末から前期初頭、下３段が中期に比定できる可能性がある。地域の類例の分析が望まれる。

⑦縄文時代の石錐（ドリル）と石匙（図233　図版69）

上２段は石錐である。時期は特定できない。

石匙は縄文時代早期末から前期の時期に比定できる。関東甲信越では、押圧剥離の石匙は早期から出現し、前期に全盛をむかえ、中期にはほとんど組成しない。深橋前遺跡の事例も、おそらく早期末から前期初頭にかけての土器の時期に比定できると推定できる。石匙も珪岩が主体であるが、6104の黒曜石、6105のサヌカイトは異質な石材である。信州でも前期の石匙は珪岩主体で黒曜石は少ない。黒曜石の石匙の意味は珪岩のそれとは違うと推定でき、深橋前遺跡の縄文前期文化の位置づけに重要な資料である。

⑧尖頭器・削器・両極石器・石核・器種不明石器（図234・235　図版69）

6112は赤珪岩の尖頭器である。粗悪な石質ながら平坦剥離で尖頭器をつくっている。縄文前期中葉から中期初頭にかけての石器である。2113は良質な珪岩の削器である。打面から背面側にはいる小さな剥離面の打点径は主要剥離面のそれとは違う。その部分を薄くする加工であろう。また裏面に押圧

でわずかに抉れている部分がある。加工はされないが、おそらく保持のための使用痕であろう。薄くされた打面と押圧剥で抉れた部分を対応させて図を作成した。

6114から6119は押圧剥離で刃部を形成している削器である。6118は縦形石匙の先端部の可能性もあり、この資料は石匙と同時期の資料であろう。6120は直接打撃の刃部をもつ削器である。旧石器の可能性もあるが、断定できないので縄文の石器と推定した。

6121と6122は器種不明の石器である。6121は間接打撃で剥片を加工している。6122は押圧剥離で加工している。両者とも素材と加工の位置関係からは、製作者の意図が読めないので器種不明の石器とした。

6123は小さな剥片を素材にした両極石器である。通常、このような石器は石鏃のブランク（加工された素材）である。6124は使用痕の明瞭な剥片。6125は間接打撃による小形縦長剥片石核である。深橋前遺跡の場合は、縄文前期末から中期初頭の時期と推定される。

⑨打製石斧・礫石器類（図236～239　図版70～72）

これらの石器は。時期の特定が難しく、量的に少ないので属性表に所見を記載した。打製石斧については、中期前半以降の資料と推定されよう。

また6131は深橋前遺跡の石器で類例のない資料である。縄文時代の資料と推定できるが、石核であるか礫器であるか特定できなかった。こうした資料は同一母岩の剥片分析によって資料の内容が決まる。今回は器種不明として、参考に図を掲載した。

まとめ

深橋前遺跡の石器は、大きな時期区分の可能な中・大形石器類と多様な時期の混在する剥片石器類で構成されていた。剥片石器類は珪岩を主として、そこに下呂石・サヌカイトなどのガラス質安山岩が組成していた。珪岩を利用する時期は、後期旧石器時代の前半から後半にかけて、縄文時代早期・前期にかけてと、比較的古い時期であった。下呂石は縄文時代中期から弥生時代の石鏃に多く用いられている。石材の選択が大きな時期区分と一致し、そこに剥離技術の特性も関係していることは興味深い。

遺跡内の石器分析を積み重ねることで、地域内の様相が明らかになり、それらの蓄積を総合すると、考古遺物による歴史の記述が可能になるであろう。

付　弥生時代の石器について（松岡）

深橋前遺跡で出土した弥生時代の石器は39点である。このうち石鏃が25点、石鏃以外の剥片石器が２点、磨製石鏃などの磨製品が４点、勾玉などその他の石器が８点であり、そのほとんどは石鏃が占める。平地から離れているためにか、磨製石庖丁・粗製刃器などの農耕に関係すると考えられる石器は確認できなかった。また石鏃の石材は、珪岩が16点（64％）・下呂石が７点（28％）・ その他の石材が２点（８％）である。この割合は縄文時代の石鏃の石材、珪岩21点（54％）・下呂石12点（31％）・その他の石材６点（15％）ほとんど変化が無い。これは周辺にチャート露頭を持ちながら、比較的製作の容易な下呂石を供給する飛騨川・木曽川水系から一定の距離を持った遺跡の特徴と考えられるのではないか。なお、縄文時代以前の石器などについては、第７章第１節について詳述する。

付編　石器分析の目的と方法

①石器分類の手続きと分類の目的

石器分類の手続きは、2つの作業によって実現される。最初に私たちが石器を見たときに、石器はみたままの違いで分類される。石皿である、石鏃である、打製石斧であると。これらは大きさ、石材など見るからに違う石器は、あらかじめ分類しておく必要がある。この分類の方法を「器種分類」という。

次に見た目で明らかに違う石器をさらに分類する必要がある。最初に見た目の違いで分類された石器の中で、同じ石器としたモノの中にも、製作者の意図の違いがみられるからである。

以上のように、石器分類の目的は、作った側の意図に従う分類を明らかにするために行われるのである。ゆえに、石器分類によって得られた「分類表」の善し悪しは、どの程度まで製作者の意図に従う分類を復元できているのかで評価がなされるのである。私たちが恣意的に分類した石器の分類表（器種分類表）は、分類した現代人の石器の分類を示しているので、石器研究の目的の最終分類表にはならないのである。

②技術属性の記述の必要性

石器の分類で最も必要なことは、石器の技術属性を記述することである。石器は人工物なので、製作者の意図が込められている。その意図は技術属性に表現されているので、技術属性の記述を行うことで、製作者の意図に従った石器の分類を復元するのである。そして石器研究の目的は、技術属性によって石器を見ることで、石器製作者の意図に従う石器の分類を、現代語で記述できる。

③剥離技術の定義

石器をつくるためには、石を割る（剥離する）手法を習得する必要がある。この手法を「剥離技術」と呼ぶ。

石器をつくるときには、利き手に工具（ハンマー）をもち、左手に剥離する素材をもつ。利き手の動きと左手の動きの総合動作で石器の剥離は行われる。そこで「剥離技術」の実状をわかりやすくすると、「右手（利き手）の技術」と「左手の技術」に分解できる。「右手の技術」は「ハンマーの種類とその作法」であり、「左手の技術」は素材の傾け方のことになる。

④剥離技術の属性項目

右手の技術に従い、ハンマーの種類及びハンマーの動作の作法という属性がある。従って、「ハンマーの種類」と「ハンマーの作法」が右手の属性として記述されることになる。一方左手の技術は素材の傾きであり、剥離面の役割を決める属性である。素材の傾きは、剥離角として記述もできるし、剥離の様相としても記述できる。より現実感のある記述は、剥離角と縁辺や末端の様相を組み合わせた「現代語」として記述されるとわかりやすい記述になる。以下にそれらを詳述する。

⑤ハンマーの属性（右手の属性）

ハンマーの属性は硬・軟質の区分とハンマーの大きさである。

硬質ハンマー（表記は「H」）は、素材よりハンマーがより硬いものを指す。ゆえに硬質ハンマーでは、結果として石器の縁辺に砕けや潰れが生じる。軟質ハンマー（表記は「S」）は、ハンマーのほうが柔らかく、ハンマーそのものが変形し、衝撃のショックを吸収する。その結果打点周辺には砕けや潰れがほとんど生じない。

またハンマーの違いは、打点周辺だけでなく、剥離面様相にも顕著に現れる。硬質ハンマーで加撃されると石核側に残される剥離面の稜線はゴツゴツした切り立ったものになる。軟質ハンマーで加撃されると、石核側に残される剥離面の稜線は平らで滑らかな線となる。また、軟質ハンマーのほうが、剥離面が石器の中心に向かって、より伸びる傾向がある。

本遺跡の場合に限らず、黒曜石のハンマーの種類は特にわかりにくい。黒曜石は縁辺が砕けやすく、打点の砕けだけではハンマーの種類を特定できないからである。しかし基本にもどって観察を行うと、硬質ハンマーの場合は縁辺に潰れたコーンができ、白く濁った打点が発生する。軟質ハンマーの場合は曲げの剥離が頻発するものや、打点が残るものは大きく打点が広がっている。曲げの剥離にはバルブは発生しないので、打点の有無は容易に観察できるのである。また剥離面の幅に硬質・軟質の顕著な差が表れる。軟質ハンマーのほうが剥離面の幅が２ミリ程度大きくなる傾向がある。また本遺跡の場合にはリングのうねりと稜線の切り立ち方についても特徴がある。でみることにする。

ハンマーの大きさは、打点から推定できる打点の径によって記述する。加工の打点の径を測り、ミリ単位で記述してもよいし、その記述をさらに整理して、この遺跡には広い（W）径のものと狭い（N）径のものがある、という「理解」を示した記述でもよい。

⑥ハンマーの作法（使い方）の属性（右手の属性）

ハンマーの使い方は、対象（石核）に直接ハンマーを叩きつける直接打撃（表記は「D」）、ハンマーを石核に押し付けて押し剥がす押圧剥離（表記は「P」）とパンチを使う間接打撃（表記は「I」）の３種類がある。ともにハンマーの使い方が異なるので、剥離面様相も異なる。

直接打撃の場合は、打点は明瞭でバルブは比較的発達し、稜線はゴツゴツする。

押圧剥離の場合は、打点は明瞭なもののバルブが発達せず、稜線は平らになる。

間接打撃の場合は、小さい剥離面ながら規則正しく剥離がなされ、バルブがある直接打撃に近似する剥離面になる。

⑦直接打撃のハンマーの作法（右手の属性）

普通に手首を返しながらハンマーを用いる直接打撃がある。通常の剥離とも呼ばれる。このとき生じる剥離面は割れ円錐の発達する「コーンタイプ」と呼ばれる剥離面である。打点の直下から円錐が発達し、さらに円錐は次第にハンマーの押し出す力に吸収されながら剥離がおこる。

次にハンマーを垂直にたたきつける直接打撃がある。、主に楔形石器にみられる直接打撃である。剥離面の打点は明瞭なものの、ハンマーによる圧縮の力が優勢のために、円錐が発達しないで、物体を引き裂くように剥離が起こる。通常の剥離によって生じる「コーンタイプ」の剥離に対して、これを「ウェッジタイプ」の剥離面と呼ぶ。

さらに、ハンマーを寝かせて、石器の鋭い縁に並行にあてるハンマーの用い方がある。この剥離面

は広義の折れ面であり、打点がなく、バルブも生じない。「ベントタイプ」の剥離面とも呼ぶ。

このように3種類の剥離面があるが、主にハンマーストーンの加撃によって形成される剥離面は通常の剥離による「コーンタイプ」の剥離面である。

⑧素材の傾きと剥離の方向（左手の属性）

素材の傾きは、剥離面の役割を実現する。平らにおいた石器の縁辺を加撃すると、剥離によって刃先ができる。また立てた縁辺を加撃すると、鋭い縁辺は潰れて、「刃潰し」の状態になる。こうした素材の傾きは、刃先のあるものは剥離角で、刃先のないものは剥離面の様子によって記述ができる。「石器研究法」によれば、左手の技術によって形成された剥離面の種類は、通常の剥離・急角度剥離・平坦剥離、階段状剥離・刃潰し・樋状剥離の6種類とされている。左手の技術の記述は、この6種類でを用いることで、十分に記述ができる。

一方剥離面の方向というのは、ハンマーの加撃による力の抜ける主たる方向である。

人間が素材の石を加撃する時には、その石を叩き壊そうとするのか、薄い剥片を剥がそうとするのか、いずれにしろ意識的に加撃がなされる。例をあげれば、榛名平遺跡の打製石斧の側辺には階段状剥離がみられるものがあるが、この階段状剥離は打製石斧から剥片を剥がそうとした剥離痕ではない。石器の周辺をハンマーで叩いて、石器の側辺を整形することが目的の剥離である。では、何故そのようなことが言えるのであろか。

それは、ハンマーの振り下ろされる方向が、石器の奥に向かって進行しているので、剥片を剥離する方向ではないからなのである。このようにハンマーを振り下ろすときに、何を目的とした剥離なのかを理解する手だてとして、剥離面の方向は分析の対象とされるのである。

⑨剥離技術の記述方法

属性の項目を明らかにしておこう。

ハンマーの種類：硬質（H）か軟質（S）。

ハンマーの当て方：直接打撃（D）、間接打撃（I）、押圧剥離（P）。

ハンマーの径：細い（N）、広い（W）。本遺跡の場合は、ハンマーのコンタクトエリアの径が2mm程度のものを「N」、4mmをこえるものを「W」とする。

直接打撃のハンマーの身振り：通常と垂直（「v」と表記）があるものの、通常は省略して、垂直打撃のみを記述するほうが整理しやすい。

押圧剥離の作法：なんらかの固定具を使う押圧剥離（「MP」と表記）、手のひらのなかで石器を保持して押圧する手のひら押圧（「HP」と表記）の2種類が本遺跡ではみられる。

以上の属性の組み合わせで剥離技術を記述する。このとき、剥離技術の定義に従って、右手/左手の順番に記述するとわかりやすい。

したがって、記述の順番は「ハンマーの種類、ハンマーの作法/素材の傾き」となる。

例えば、径の広い硬質ハンマーの直接打撃で急角度の剥離がなされている加工なら、「wHD/急角度」。同じように、径の狭い硬質ハンマーの垂直打撃で刃潰し加工がなされているなら「nHVD/刃潰し」となる。径の細い軟質ハンマーの固定具を使う押圧剥離であるなら、nSMPと記述する。いずれも、

記号の意味と記述の順番の規則さえ守れば、混乱は少ない。

⑩石器の製作技法

石器を製作するにあたっては、剥離技術だけで石器製作はできない。そこにつくろうとする道具の設計図がなければ剥離技術だけでは石器にならないのである。

石器をつくるということは、石の剥離技術の習得と文化の中に埋め込まれた石器形態の理解が必要になる。したがって、石器をつくるということは、その文化の中で習得する剥離技術（ハンマーの種類とその使い方の身振り）と、その文化の中にある道具の形態（形のイメージ）に習熟することである。

石器の形態分析は、石器の形を構成している辺を分解することである。そして、分解した辺にどのような剥離技術でどのような剥離面が形成されているかを理解し、特定の辺が特定の剥離技術によって形成されて、特定の形態が形態がつくられているのが石器の姿である。

石器の形態は特定の辺を特定の剥離技術で形成することで成り立っている。辺と剥離技術の規則的な関係、及びその関係を全体の形態に置き換えると、特定の石器文化には特定の石器製作の基本的な約束ごとがあることがわかる。この石器製作の約束ごとを「石器の製作技法」と呼ぶ。

引用・参考文献

「石器研究法」竹岡俊樹著　言叢社　東京　1989
『石器研究の感想』　角張淳一　「東京考古」16　東京考古談話会　1998
『続石器研究の感想』　角張淳一「東京考古」18　東京考古談話会　2000
「武蔵台遺跡Ⅰ」　府中病院遺跡調査会　東京都　1984
「江川・中畦遺跡」　高知県西土佐村教育員会　2000

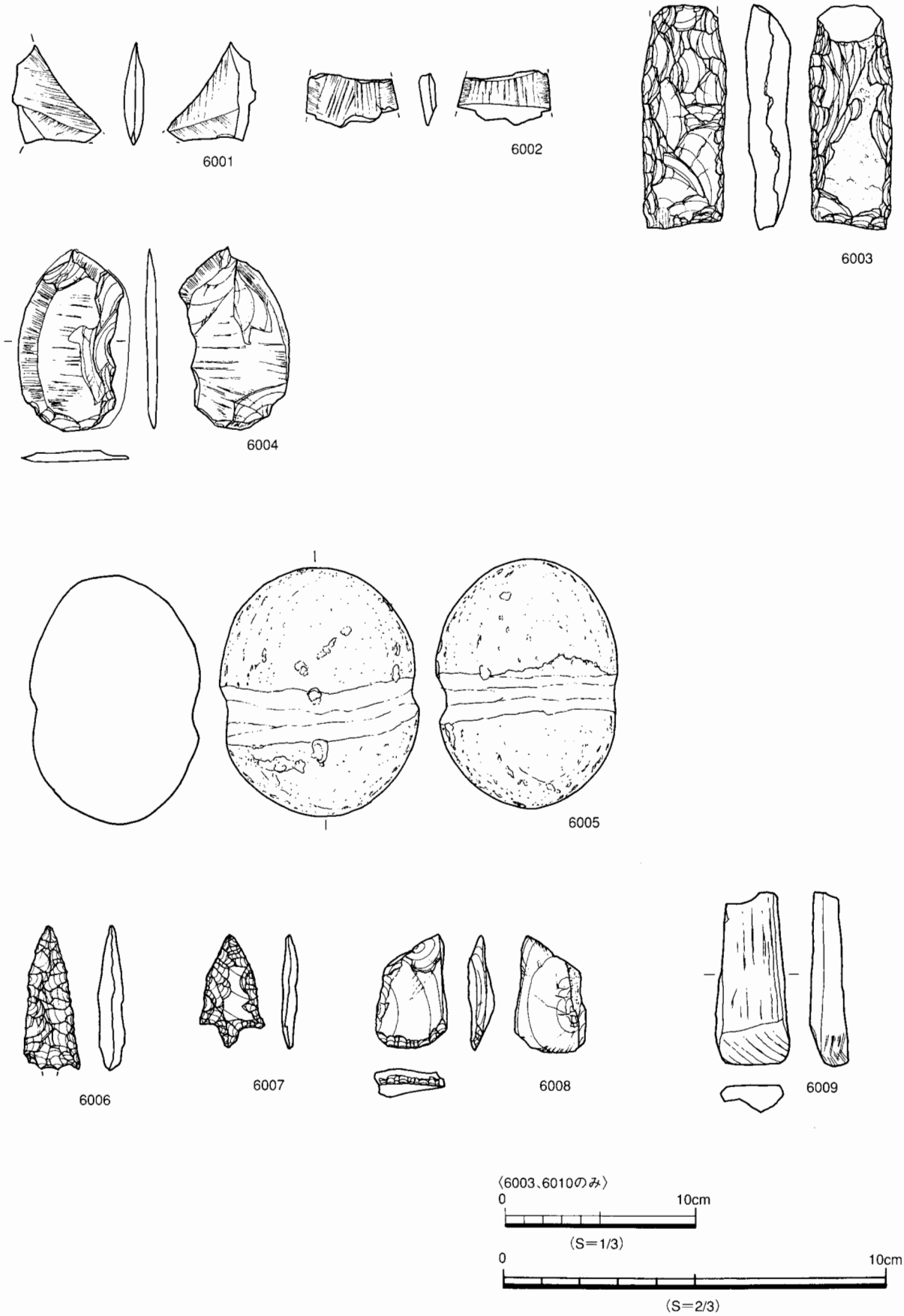


図227　遺構内出土石器

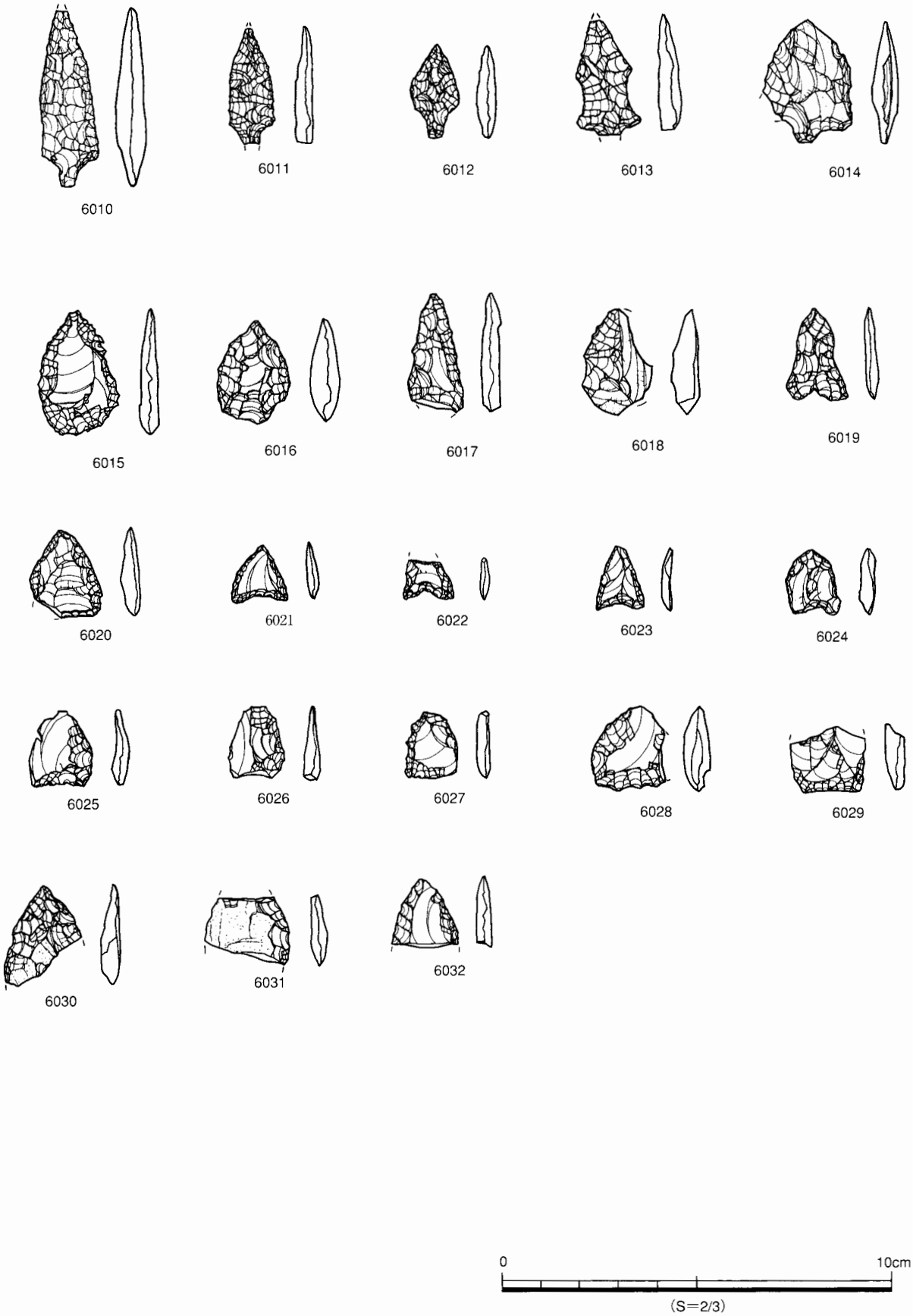


図228　包含層出土石器１（弥生時代の石鏃）

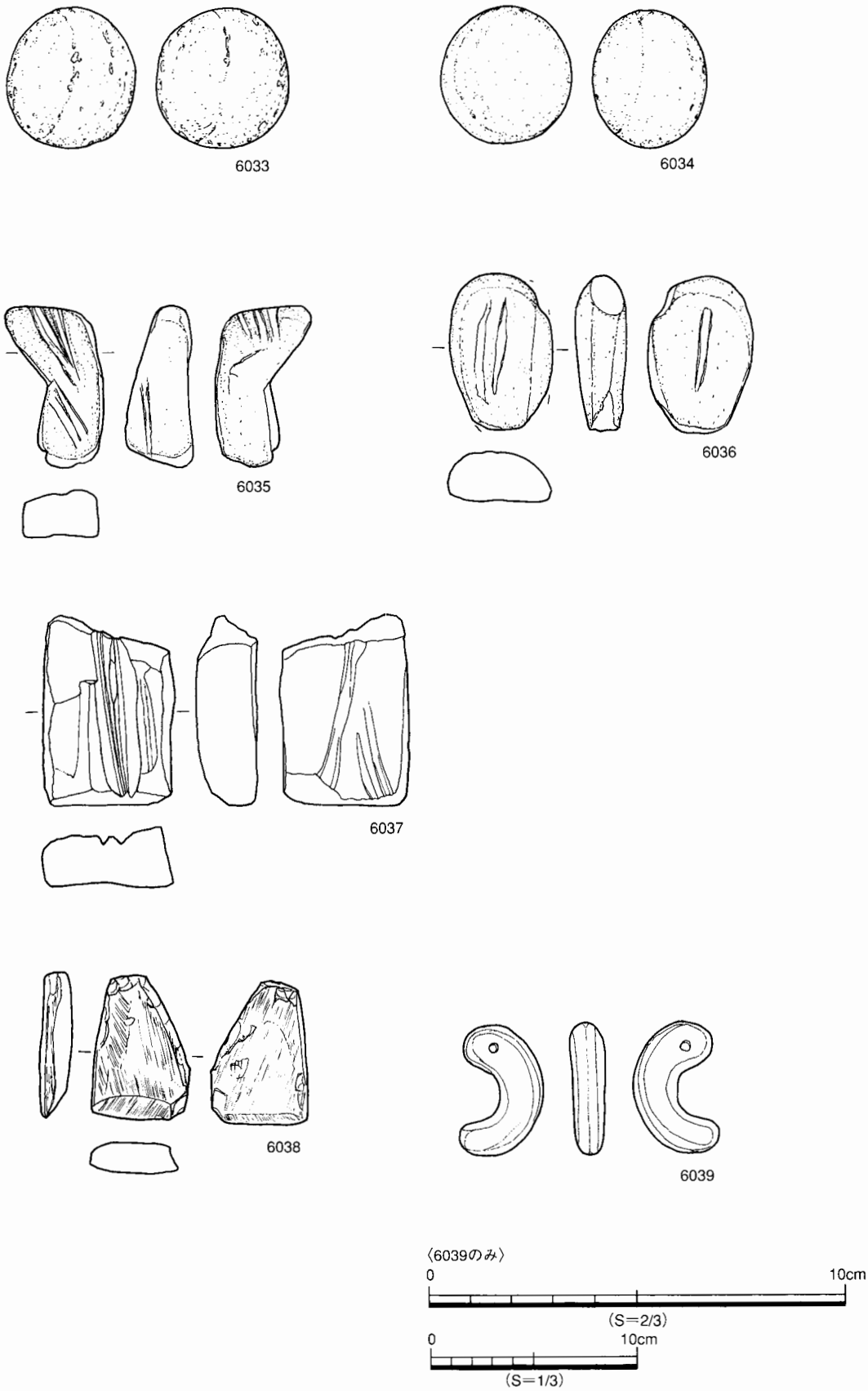


図229　包含層出土石器2（弥生時代以降の石器）

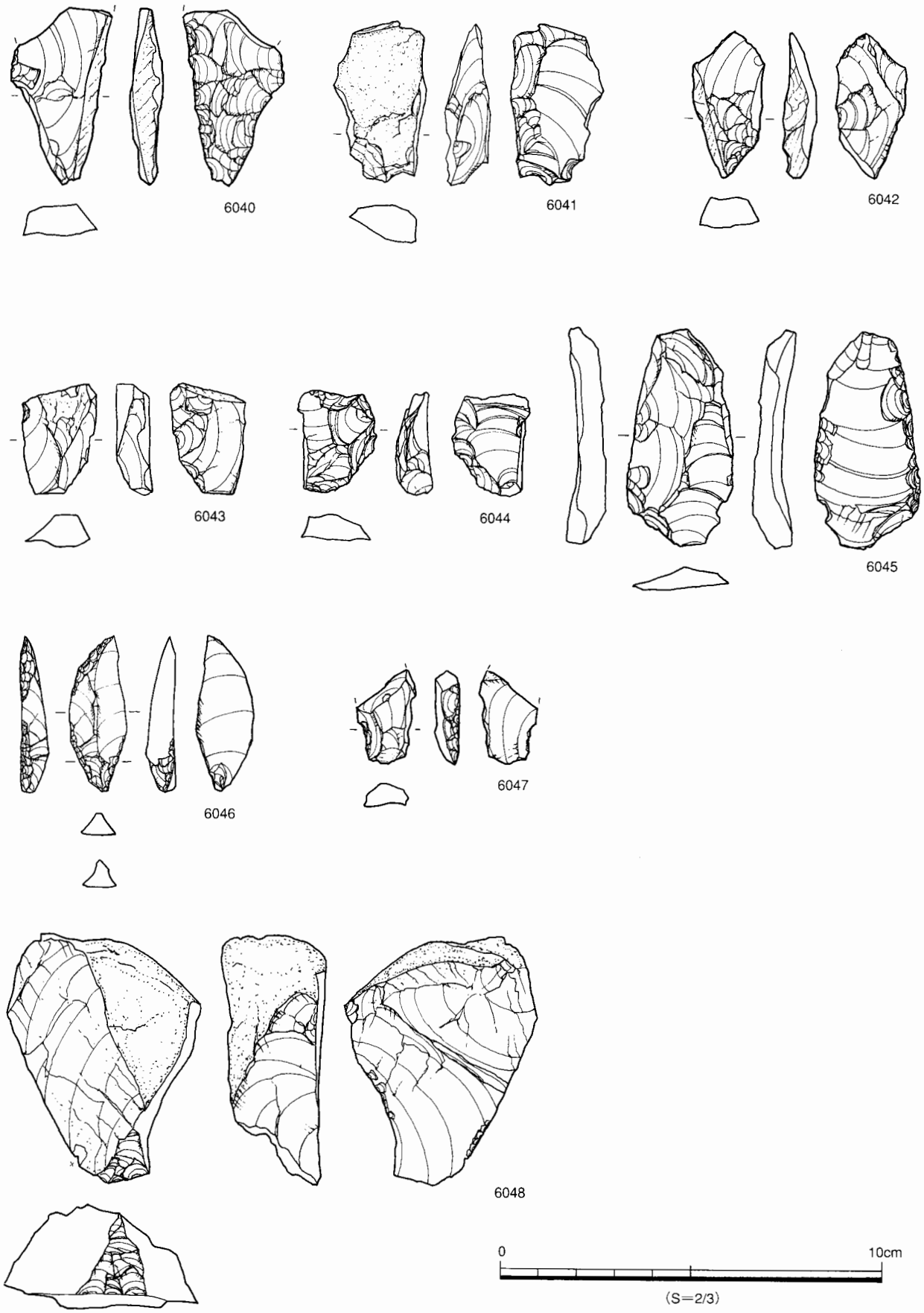


図230　包含層出土石器3（旧石器）

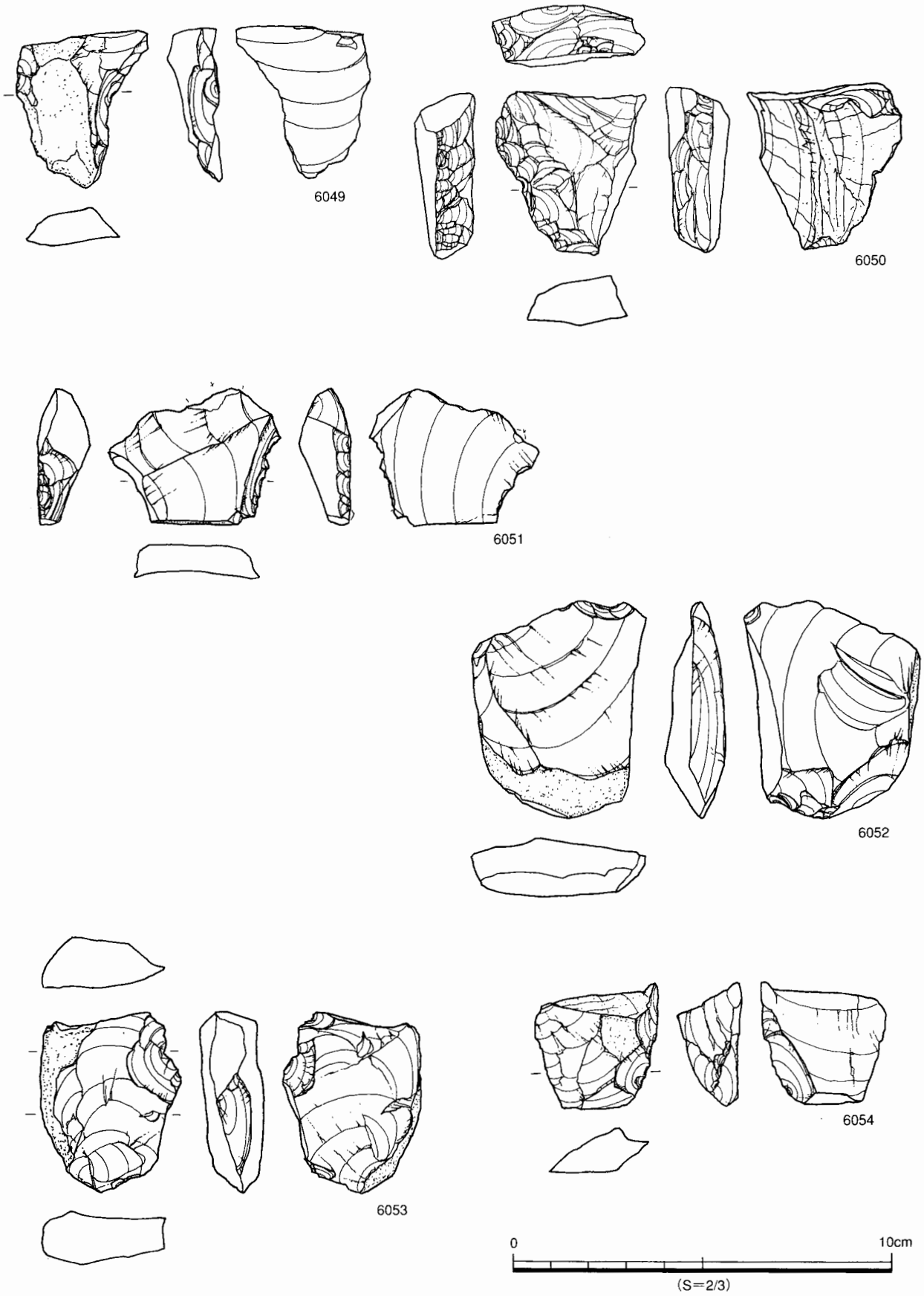


図231　包含層出土石器4（旧石器）

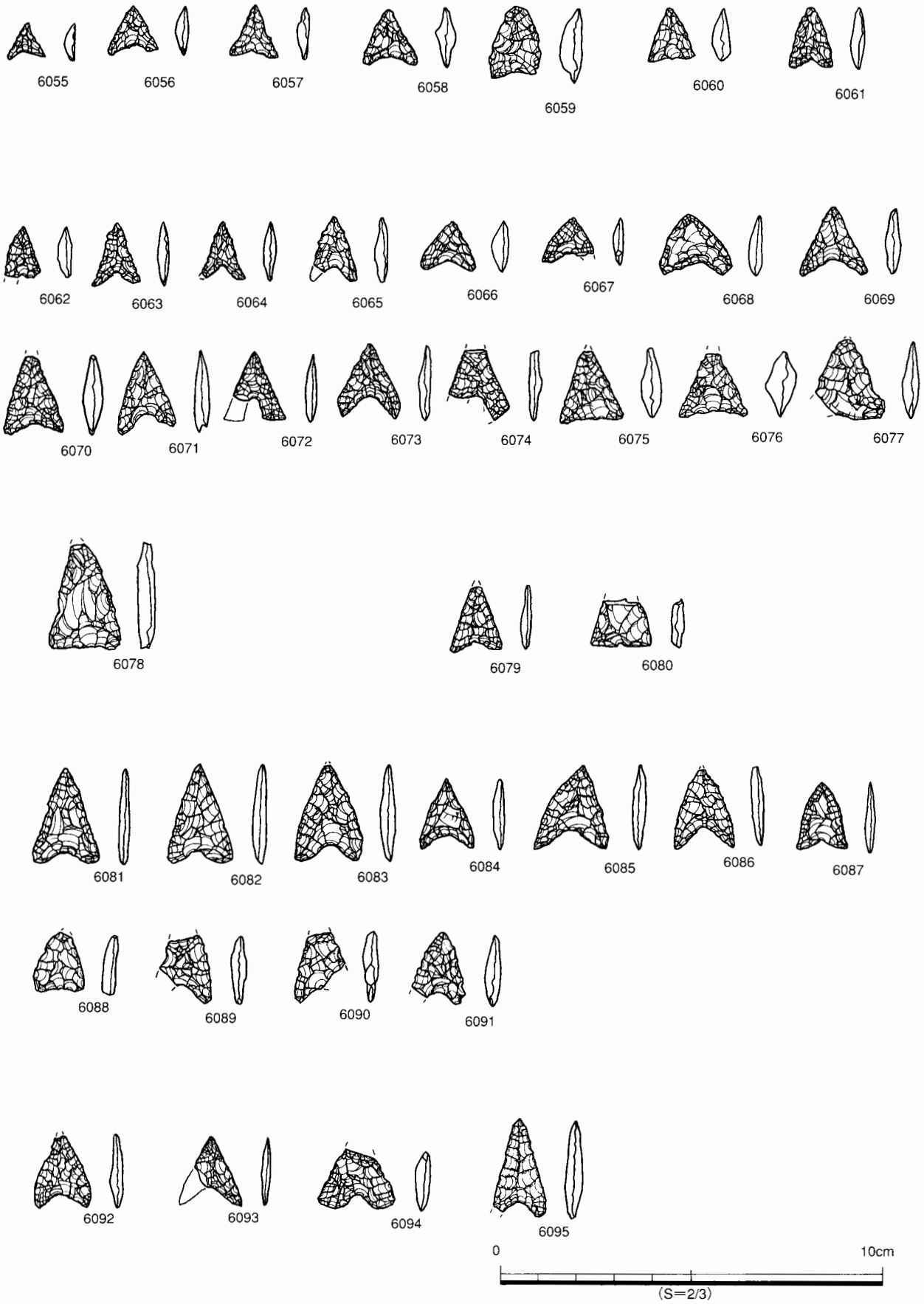


図232　包含層出土石器5（縄文時代の石器）

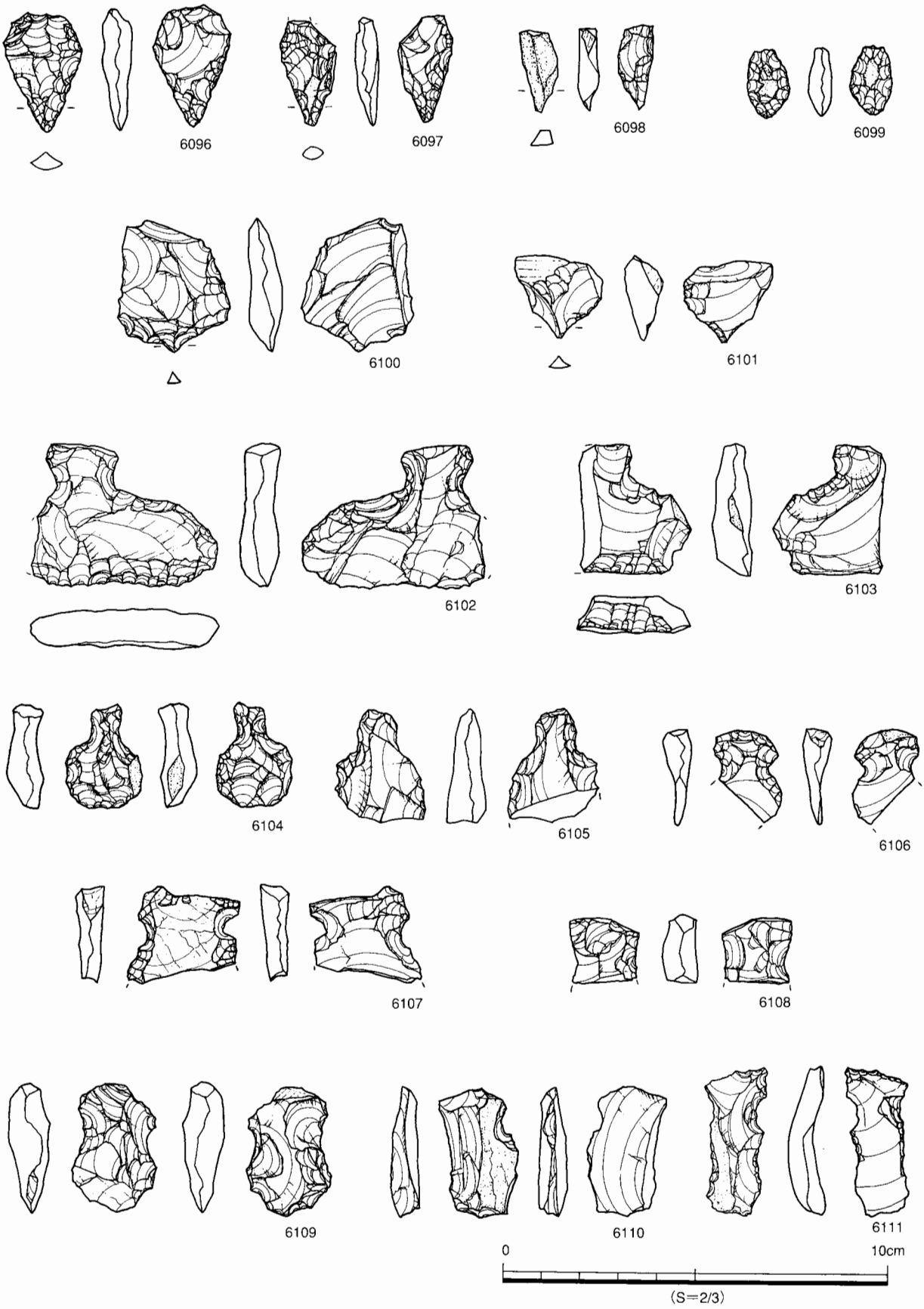


図233　包含層出土石器6（縄文時代の石器）

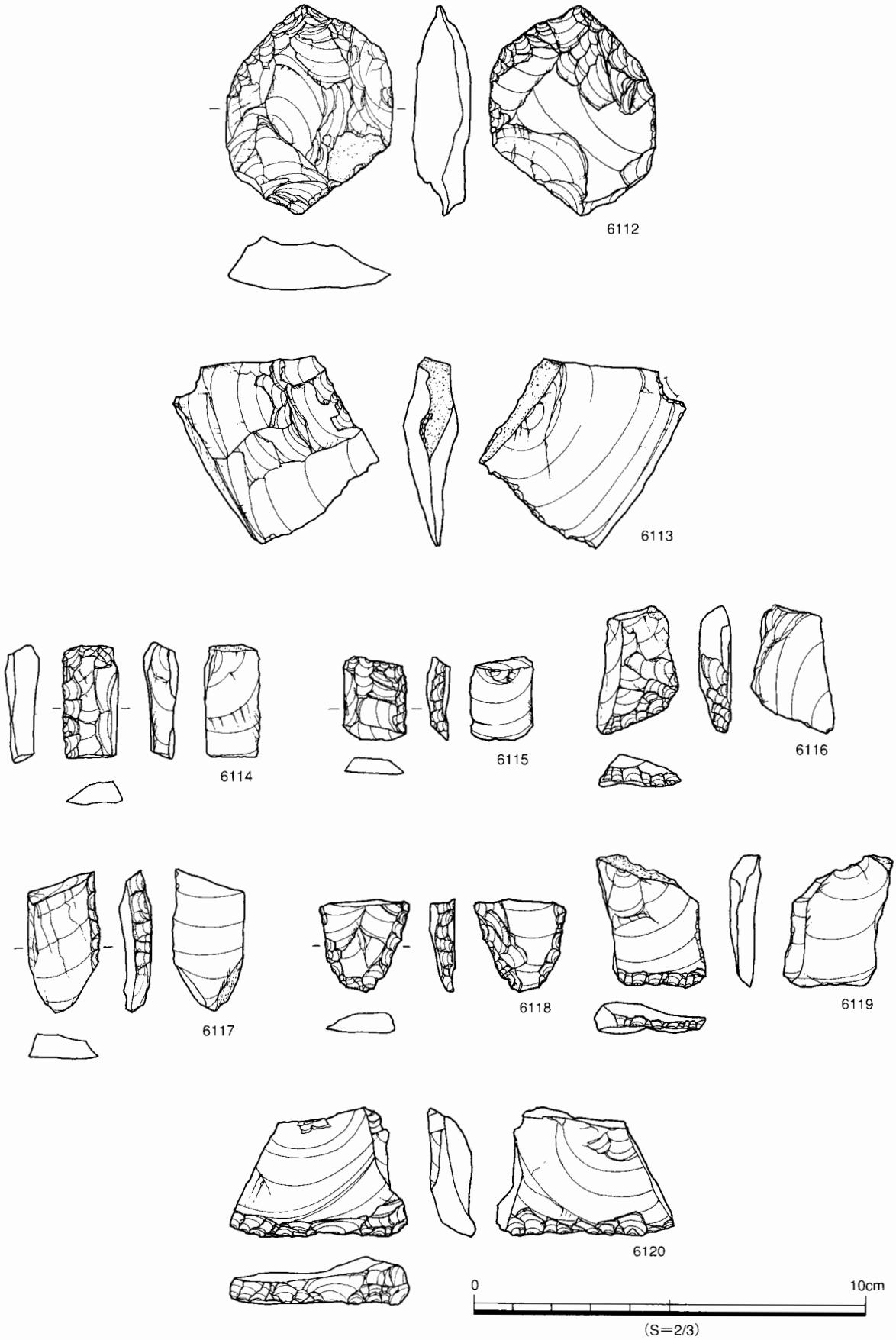
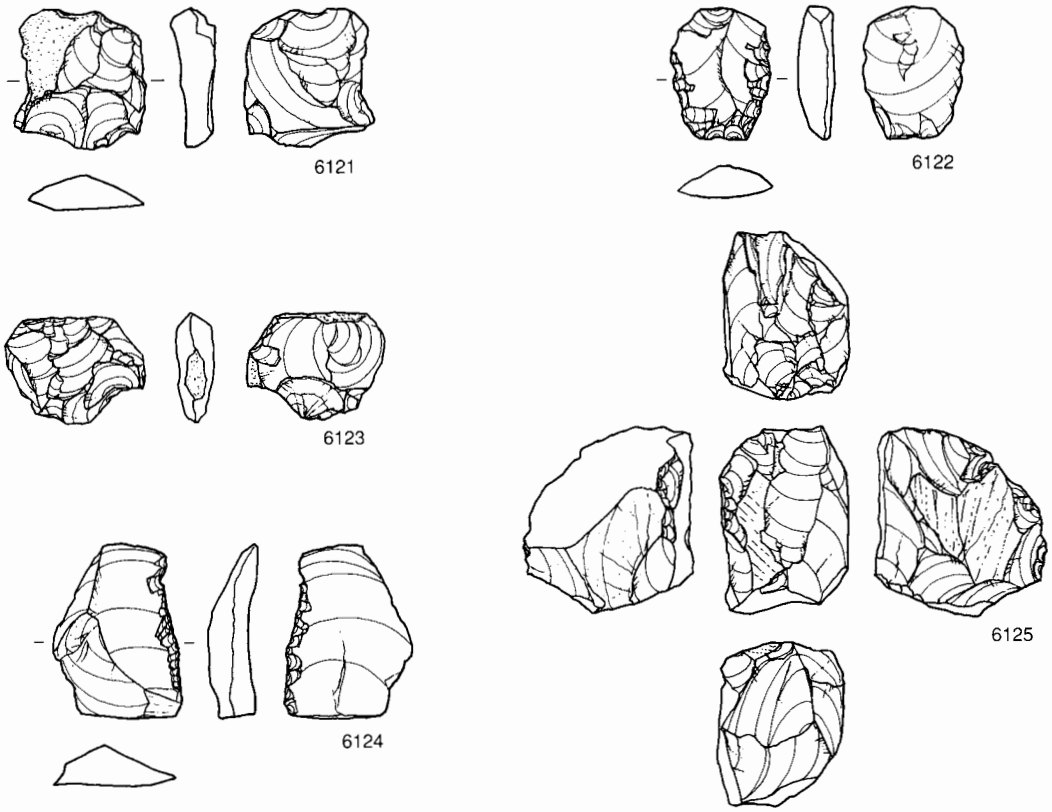


図234　包含層出土石器7（縄文時代の石器）



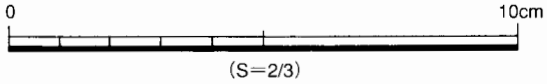


図235　包含層出土石器8（縄文時代の石器）

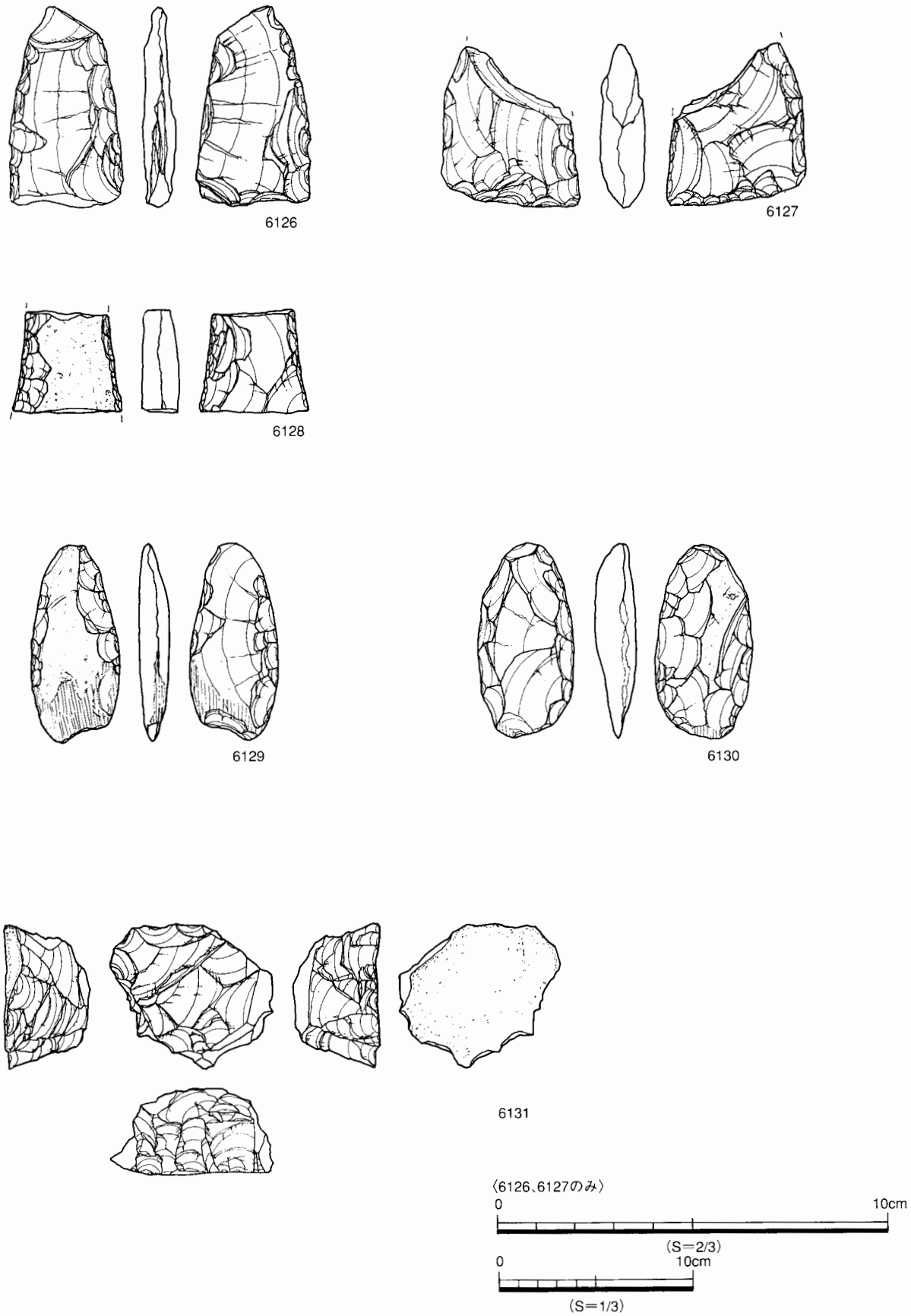


図236　包含層出土石器9（縄文時代の石器）

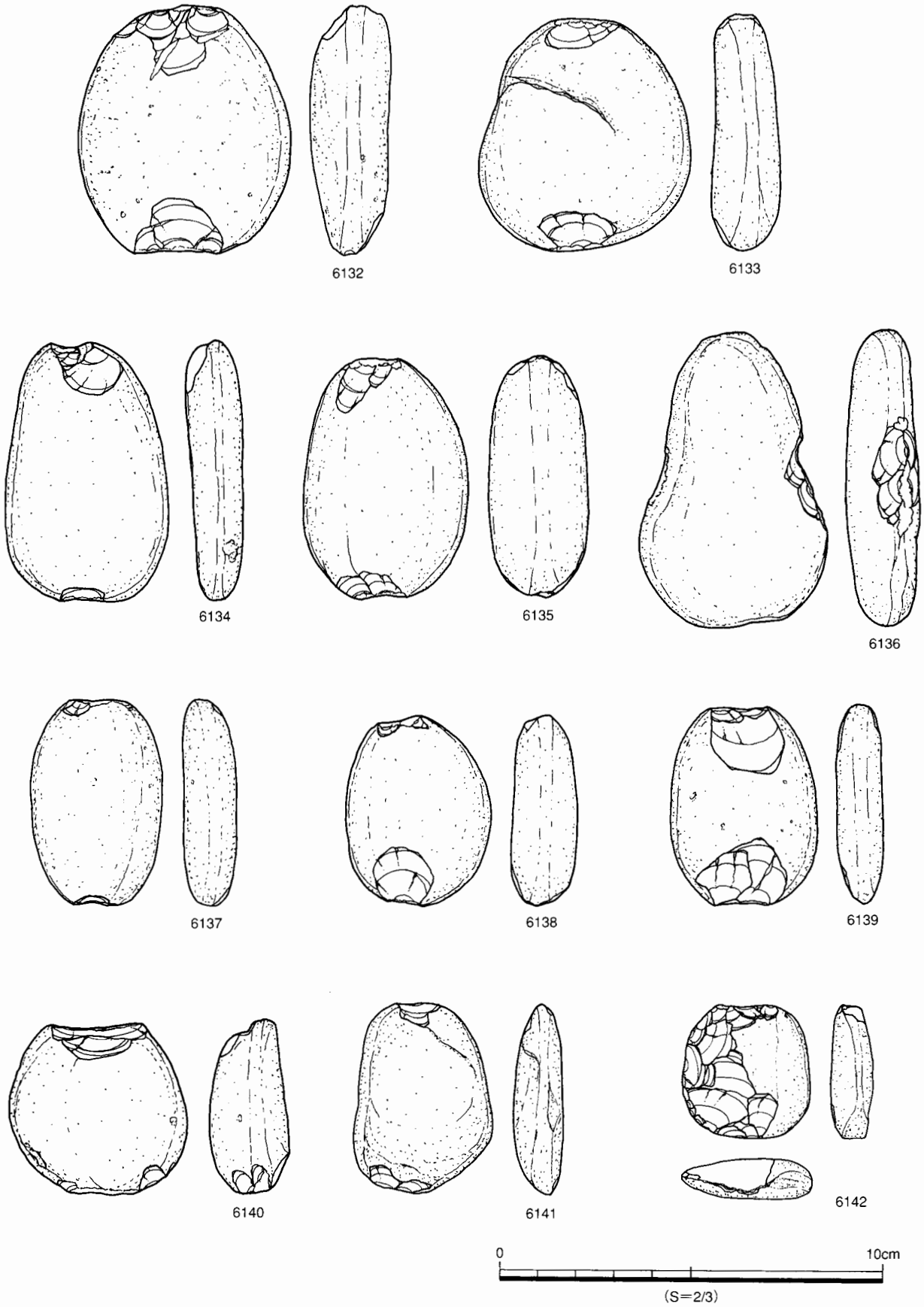
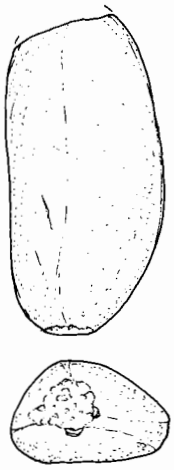
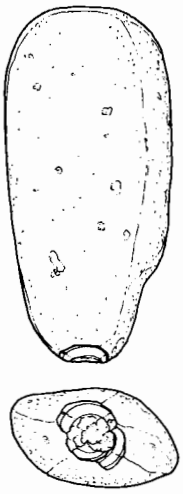
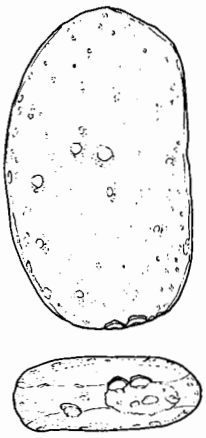
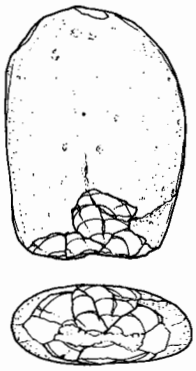


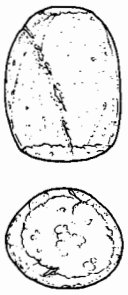
図237　包含層出土石器10（縄文時代以降の石器）

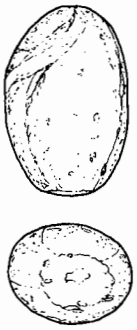

6143

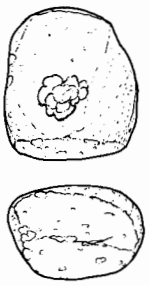

6144

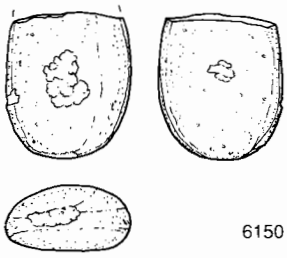

6145

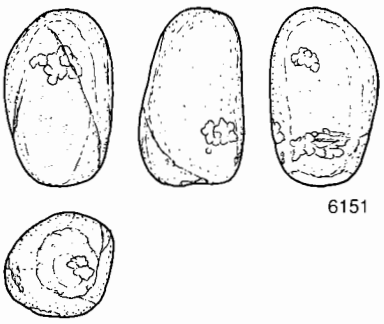

6146


6147


6148


6149


6150


6151

0　10cm
(S＝1/3)

図238　包含層出土石器11（縄文時代以降の石器）

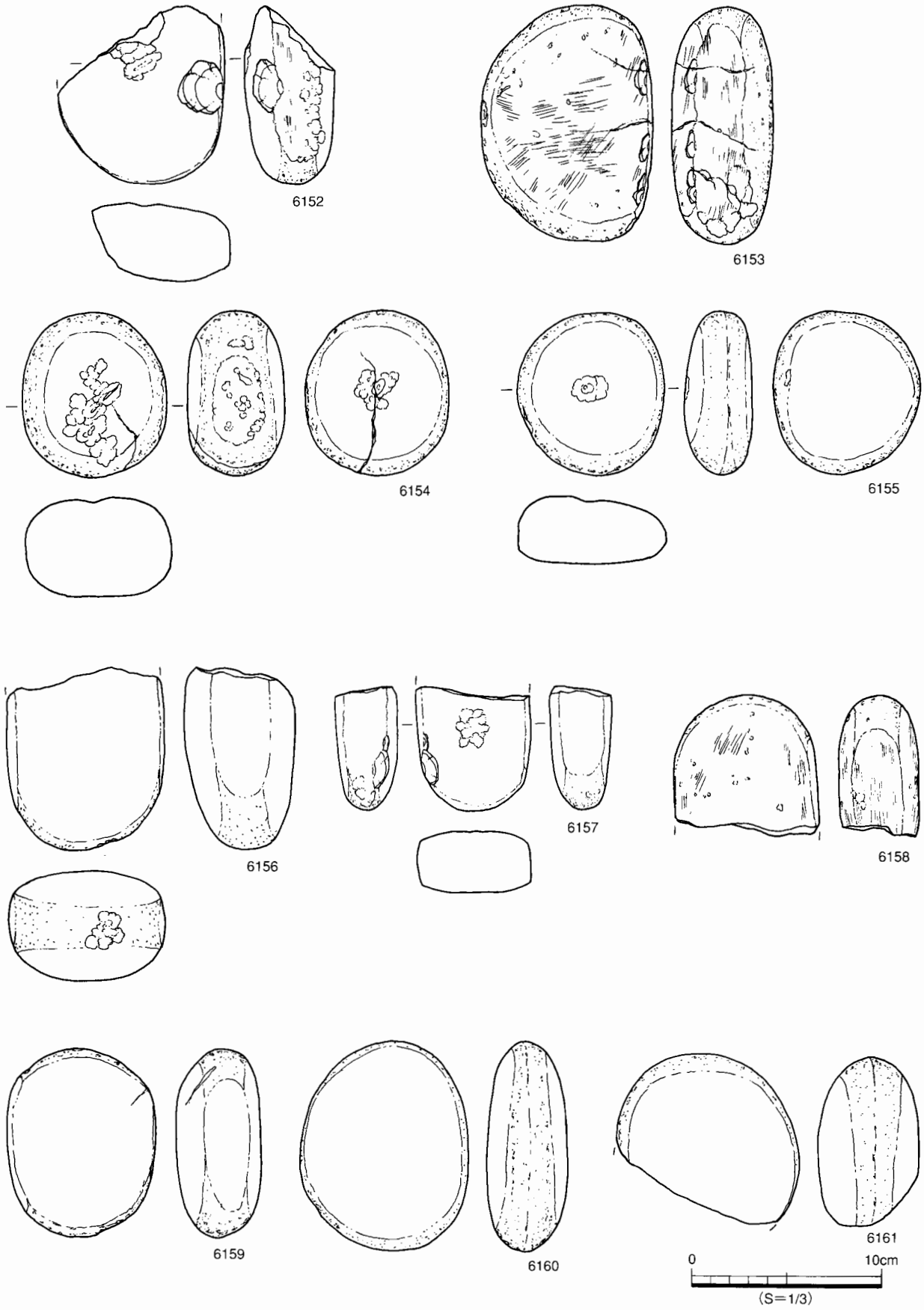


図239　包含層出土石器12（縄文時代以降の石器）

第５章　Ⅳ～Ⅵ期の遺構と遺物

第１節　深橋前古墳と遺物

確認された古墳は１基である。試掘確認調査では天井石がすでに露出し、斜面に斜めにあったので、原位置からは動いていることが考えられた。天井石は尾根頂上部より３ｍ南に下った南向きの斜面上に単独で存在する。古墳は丘陵の最高所をさけてやや下がった急斜面につくっていることから、場所の選定を強く意識していると考えられる。また、尾根頂部から伸びてきた尾根によって取り囲まれている。ここからは谷全体が見渡せるとともに丘陵の南に広がる平野部を一望できる。遺構検出範囲は（28E,29E,30E,28F,29F,30F,28G,29G,30G,28H,29H,30H）で調査区はＣ区である。

出土遺物は灰釉陶器碗１点（4299）である。29F・Gで検出した石室の床面の埋土上部に、奥壁手前に長さ2.4ｍ、幅1.1ｍの範囲で攪乱が見られ、中央部は１×1.4ｍの範囲で被熱している。出土した灰釉陶器は、この攪乱の南0.8ｍにあった20cm大の礫と炭が集中した場所から出土した。このことより10世紀の時期に石室内を再利用している可能性が考えられる。

古墳は砂岩の岩盤上に形成されたために、検出の段階で残存していたのは奥壁と側壁２・３段分のみであった。石室に使用されていた石材は既に位置がずれていた天井石１つとともにチャートであった。

本遺跡は砂岩の岩盤上に形成されているが、本遺跡の約300ｍ北東にある大平前遺跡周辺はチャートの岩盤である。ちょうど大平前遺跡あたりで砂岩の岩盤とチャートの岩盤の境があり、おそらくそこから運んできたものと思われる。

山側に周溝がつくられ、両側縁には自然地形とするには不可解な人為的に掘られたくぼみがみられる。南側の開口部側は切り立った斜面になっている。山側の周溝はまっすぐであるため方墳にみえるが、盛り土が完全に流失しているため古墳の形が円墳か方墳かの判断がしにくい。地形上の制約も考えると、円墳であれば山側の周溝までの距離から直径12ｍ、幅約２ｍの周溝をもつことになり、方墳であれば１辺12ｍで約２ｍの周溝をもつことになる。

石室の長軸は磁北に対して7.5°東に振っている。ほぼ南に開口している。構築時期は石室の構造や立地から古墳時代終末段階（７世紀後半以降）と考えられる。宇野隆夫氏からは「本古墳は群集墳を否定したつくりで、官人的・古代の在地官僚的で新しく、砂行古墳・南青柳古墳とは違い見晴らしの良い丘陵の斜面に単独で存在していることから、群衙や集村化した平地にかたまったものの墓である。律令性的造墓（深橋前古墳）から生産の場（深橋前古窯跡）への移行がすんなりと行われたと思われる」と御教示を頂いた。

外部構造

墳丘

墳丘の盛り土はほとんど流失しており状況は不明である。

周溝（第240図）

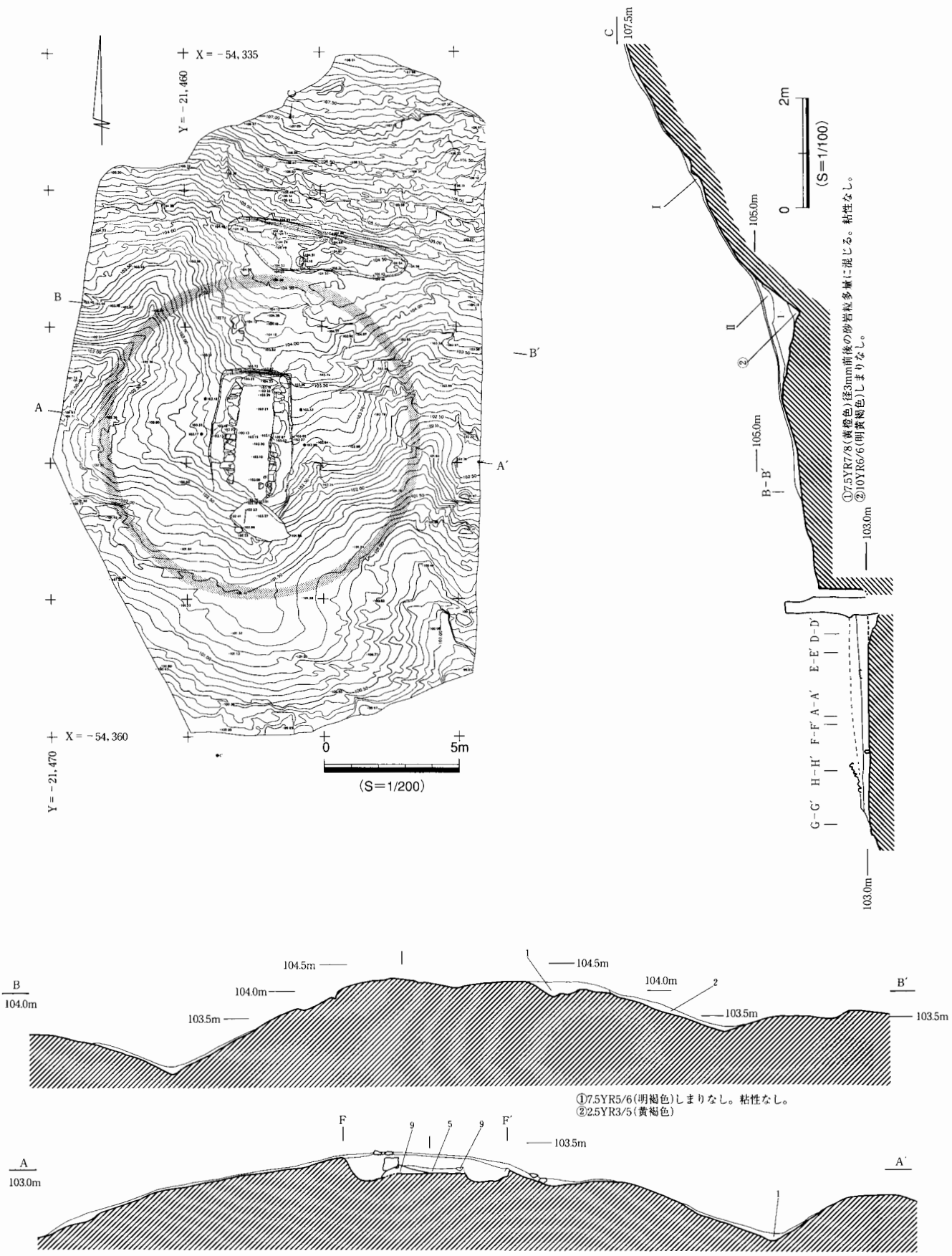


図240　Ⅳ期深橋前古墳平面図（S＝1/200）　断面図（S＝1/100）
(SZ01)

周溝は山側のものははっきりと確認できた。幅は約２ｍ、深さ約0.6ｍ、長さ6.7ｍでほぼまっすぐな状態で検出された。石室の東と西にある周溝は残存している状況で確認できる限りでは幅約２ｍ、深さ約0.5ｍくらいの周溝をＢ・Ｃのラインで確認できる。

内部構造

石室（第242・243図）

現存で約4.8ｍをはかる横穴式石室で、平面形は長方形をしている。斜面につくられているため流失しており、玄室と羨道の境ははっきりしない。石室の幅は奥壁から出入り口にいたるまでほぼ一定である。砂岩の岩盤が深さ約50cmで垂直に、コの字状に4.8×３ｍの範囲で彫り込まれており、掘形の壁には工具痕（蚤痕）が見られる。奥壁背面で最大深1.1ｍの空間の中に側壁・奥壁が設置されている。側壁の裏込めの土は黄橙・明黄褐色で周辺の砂岩の土とほとんど変わらない。羨道部の石材は流失し、閉塞石がわずかに残存している。石室はほぼ真南を向いている。天井石は開口部付近に１つ残存しているのみで、大きさは２×1.2ｍのチャートの一枚岩である。これと同じ大きさのものが天井石に使われていたとすると天井石は４つほど使われていたと思われる。奥壁は原位置をとどめており高さ約２ｍ、幅1.3ｍのチャートの一枚岩が立てられている。奥壁の下部は側壁に比べると20cm程深く埋まっている。奥壁と掘形との間には細かいチャート礫が詰められている。側壁は２段まで残存しており、１段目が細長い石材を縦方向に並べるのに対し、２段目は横長に積んでいる。側壁の石材は１段目、２段目ともに、40～60cm大の小型の角礫を使用している。断面を見ると一段づつ石を積んで裏込めの土を入れている。奥壁の高さから考えて、石室の高さは約２ｍとすると、両壁は10段ほど積まれていたと思われる。

玄室の主軸長は残存で約４ｍ、最大幅は中央付近で1.3ｍである。無袖式で平面形は長方形である。奥壁から２ｍの範囲で楕円形の盗掘坑が入っており、副葬品は出土しなかった。副葬品は盗掘を受けているかもしくは石室の流失と伴に転落しているものと思われる。盗掘は10世紀に再利用される以前にあったと思われる。このため詳しい年代は分からないが、石室の構造から本古墳は７世紀の終わり頃のものと考えられる。

再利用面（第241図）

玄室内の範囲で、石室床面より約40cm上位のレベルに掘削の痕跡と被熱の痕と炭化材の広がりを確認した。石室内床面の自然堆積後に再利用されている。掘削は深さ約10cm程で奥壁前から中央部にいたり、被熱は中央部にあり、炭化材の広がりと灰釉陶器が出土している。開口部付近からは直径10cm前後のチャート礫が折り重なって検出されている。これらのチャート礫は閉塞石である可能性がある。再利用の状況が石室内にとどまっていることから、再利用の状況を検出したのは２・３段のみ残存している側壁の上面のレベルで、再利用の時点では天井石が残存していた可能性も考えられる。再利用の時期は、被熱痕の周辺に炭化材とともに粉々に割れた灰釉陶器の碗１点（4299）から10世紀と考えられる。

遺物（第302図）

出土遺物は再利用面から出土した灰釉陶器の碗が１点ある（4299）。深橋前古窯跡で焼成されたものである。

注１　土地分類基本調査「美濃」　表層地質図・地形分類図

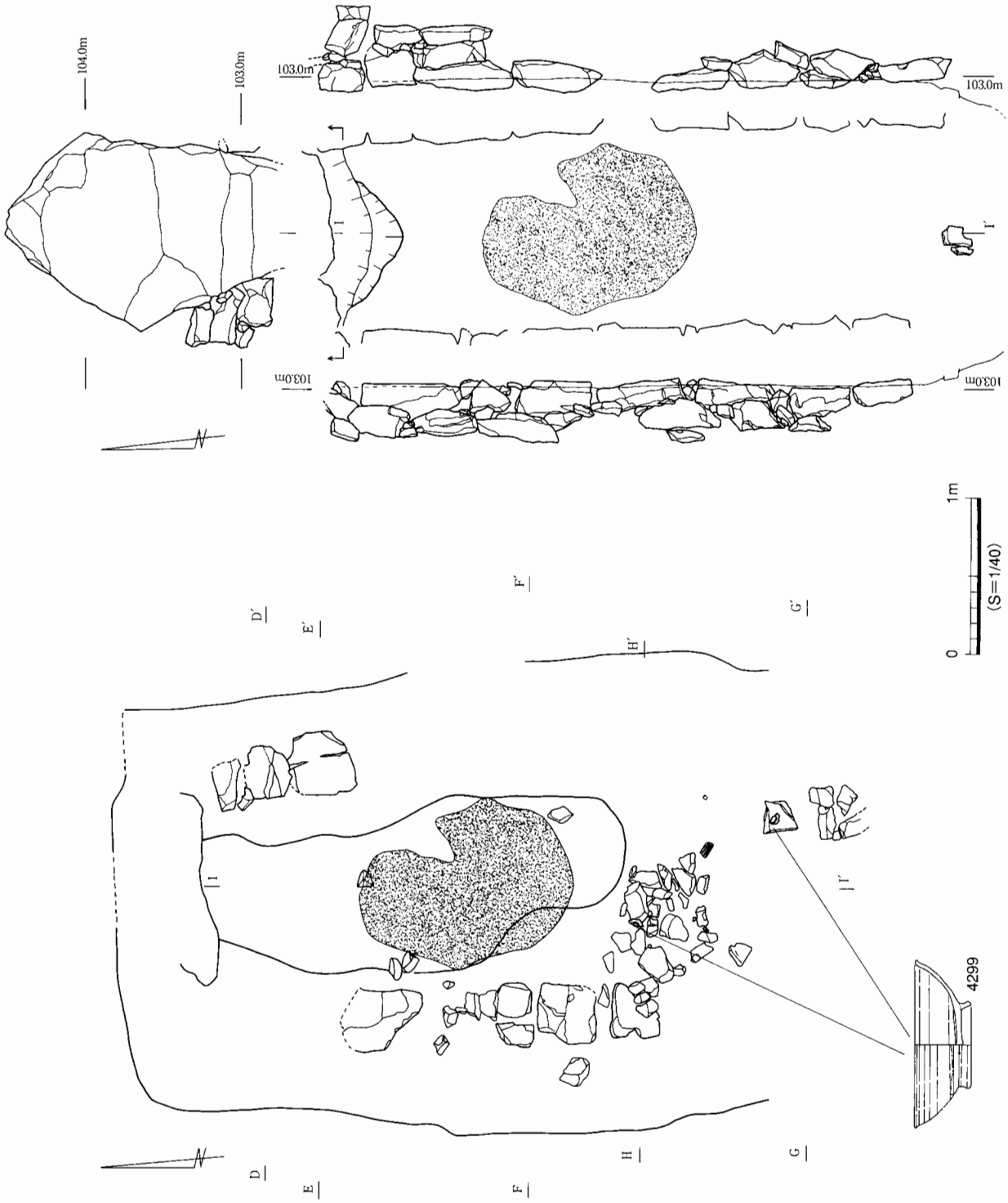


図241　深橋前古墳石室内再利用面遺物出土状況、石室展開図（S=1/40）

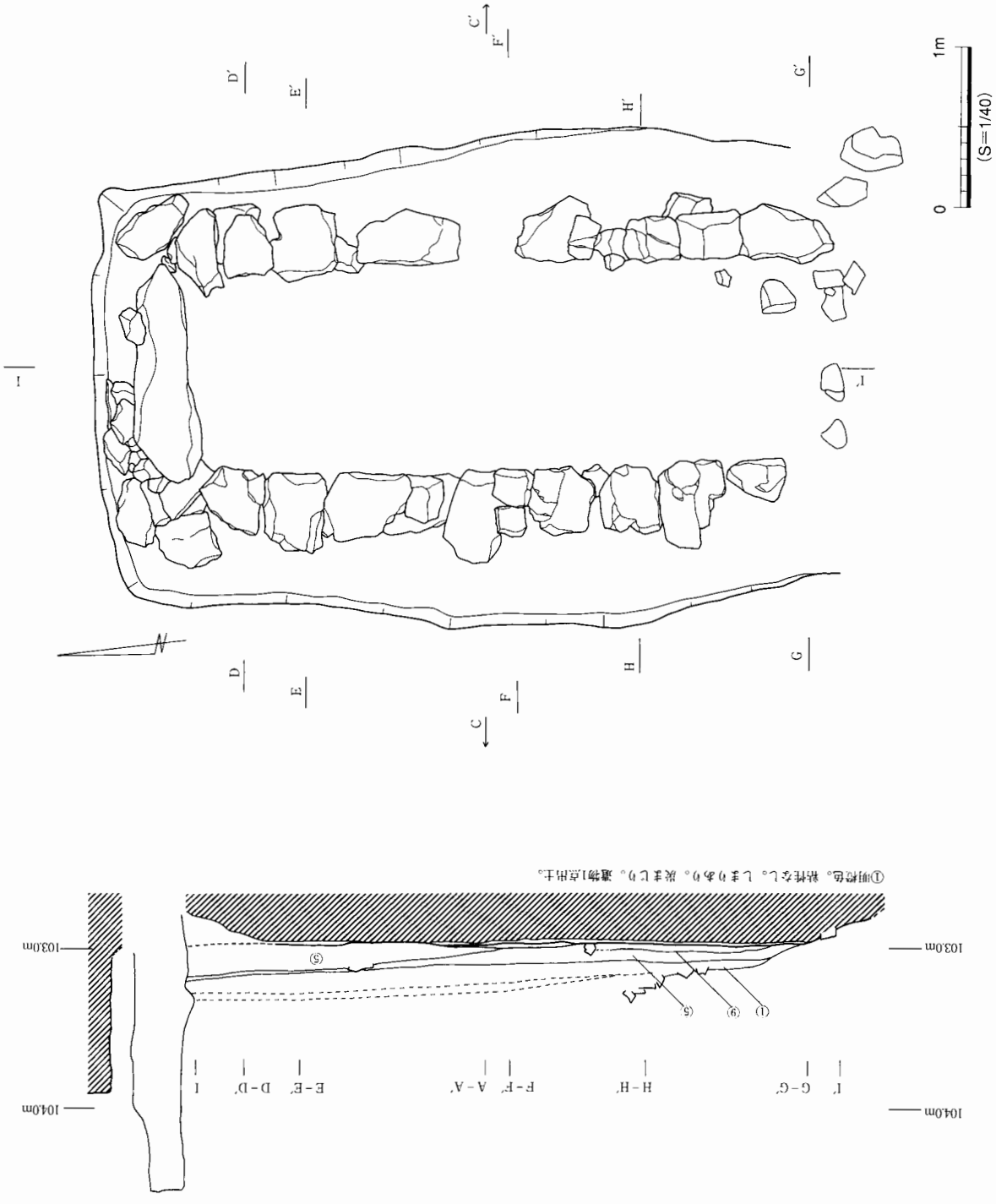
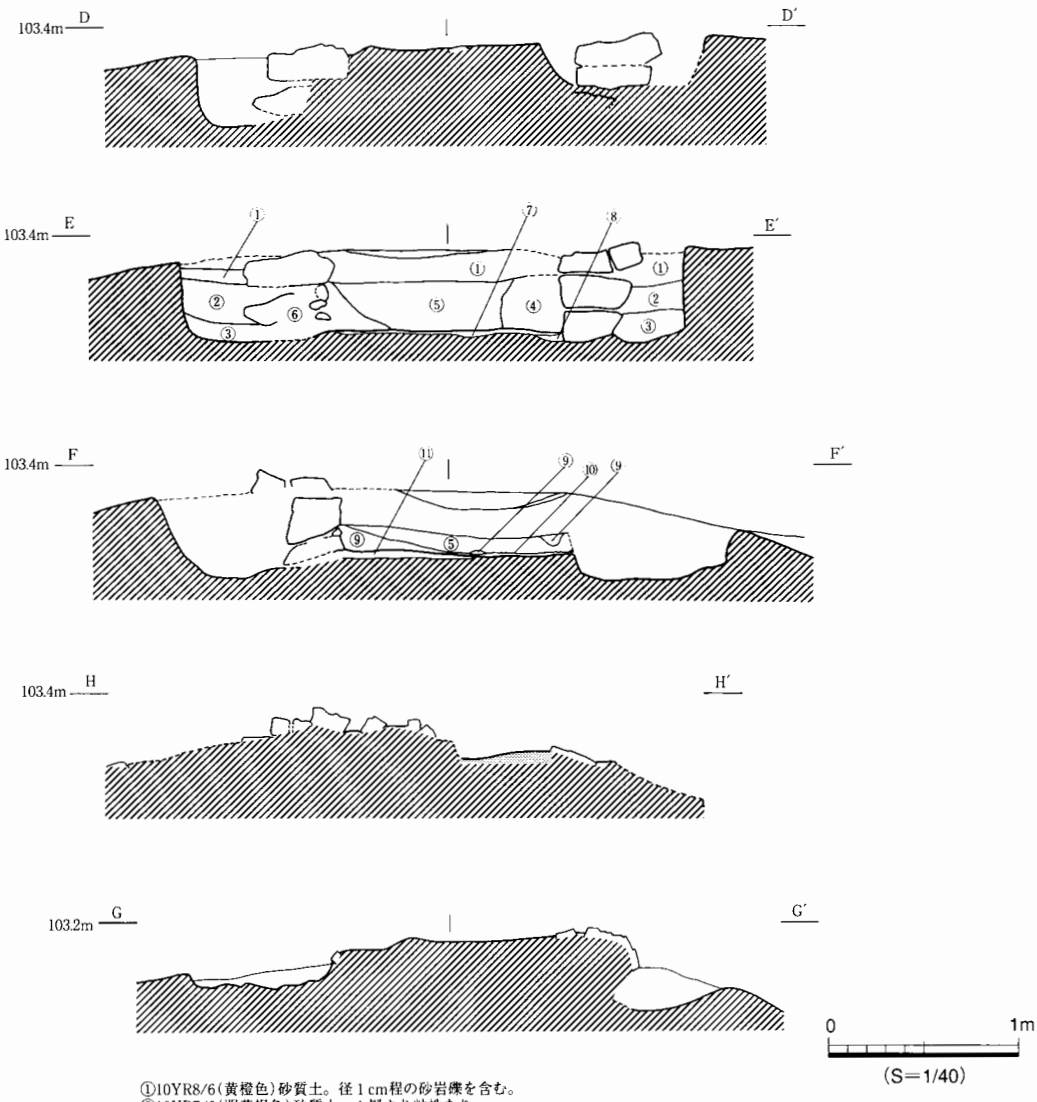


図242　深橋前古墳石室掘形平面図、断面図（S＝1/40）



①10YR8/6(黄橙色)砂質土。径１cm程の砂岩礫を含む。
②10YR7/6(明黄褐色)砂質土。１層より粘性あり。
③10YR7/6(明黄褐色)砂質土。径３cm程の砂岩礫を含む。
④7.5YR7/6(橙色)砂質土。ややしまりあり。わずかに風化した砂岩礫のブロックを含む。
⑤7.5YR8/8(黄橙色)礫は含まない流土と思われる。根を含む。
⑥7.5YR6/8(橙色)やや粘性あり。径１cm程の砂岩礫を含む。
⑦7.5YR6/8(橙色)砂質土。径１～２cmの砂岩礫を含む鉄分がわずかに沈着する→床面。
⑧7.5YR5/8(明褐色)やや粘性あり。
⑨5Y5/1(灰色)灰色の粘土。黄褐色のブロックが混入する。人為的な土（再利用か？）
⑩2.5YR5/6(明赤褐色)砂質土。径１cm以下の砂岩礫を含むも褐熱を受ける（古代？）
⑪7.5YR8/6(浅黄橙色)砂質土。径１cm以下の砂岩礫を含む。一部に径３cm程のチャート散在する→床面。

図243　深橋前古墳石室掘形断面図（S＝1/40）

第２節　土坑墓・小石室・火葬墓

１号土坑墓（SXB04）（25Ｃ：Ｂ区）（第244図）

Ｂ区25Cグリッドから検出した。土師器長胴甕を穴の中に逆さまに埋めたもので、中は空であった。土師器長胴甕は胴部外面に煤が付着しており日常湯甕として使用したものを埋納している。弥生時代末～古墳時代初頭のＳＢＢ12より上層面で検出され、土師器長胴甕は６世紀前半～７世紀前半とみられる。この時期の住居跡が本遺跡からは検出されていないことから祭祀的なものか土坑墓ではないかと考えた。口縁部を下にしており、中に何か入っていたとしても土に還るようなものではないかと思われる。口縁部付近の土をリン・カルシウム分析に出したが反応は見られなかった。土坑の大きさは60×40cmで、検出面は土師器長胴甕の底部が出土した段階のもので実質よりもやや下がっているので、深さは50cmはあったものと思われる。

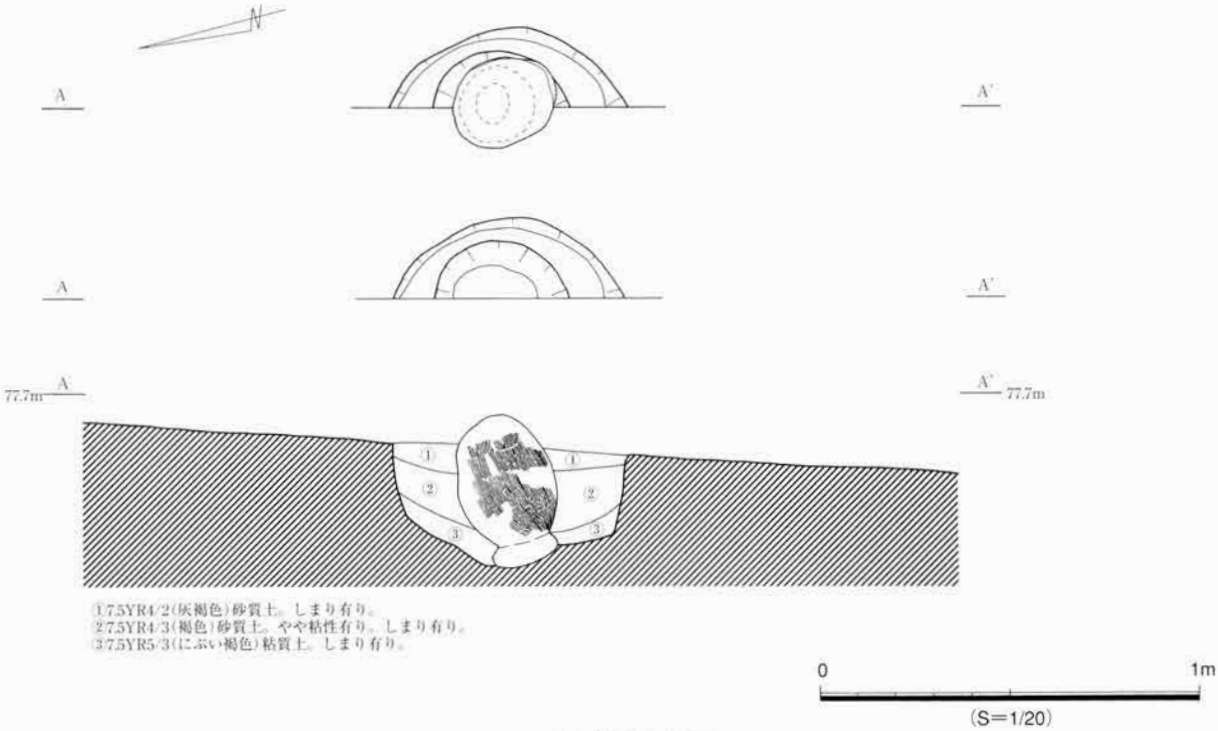
遺物（図244　図版74）

遺物は3001の長胴甕が１点のみである。口縁がわずかに欠損しているがほぼ完形で、底部外面は摩耗のため調整が不明であるが、ほかの部分は調整もはっきりと残っている。口縁部は強く外反し、頸部付近は肥厚させ、端部はつまみ上げている。胴部の張りは強く、口径よりも胴部最大径が7cm大きい。底部は丸底を呈する。外面胴部は、斜め方向の掻き下ろした、粗いが丁寧なハケ調整がみられる。胴部より底部にかけては使用時のものと考えられる煤が附着し、転用されたものであることが窺える。口縁部はハケ調整の後にしっかりとナデ調整が行われており、頸部付近の肥厚された部分にはナデきれなかった多くの指押圧痕が残っている。内面胴部は、横方向の外面よりやや細かい丁寧なハケ調整がみられる。さらに底部からはハケ調整が行われた後に掻き上げられた、ケズリ調整が全面に亘ってみられる。底部もハケ調整が行われていたものと考えられるが、痕跡はみられなかった。後部から口縁部にかけては丁寧なナデ調整が行われており、ナデきれなかったハケの痕跡が残されている。ヘラ記号などはみられない。

この甕は、内堀信雄氏が「丸底甕で、口縁端部を上方に鋭く引き延ばし、口頸部が肥厚する。胴部内面上半横ハケ、下半部ケズリ調整が多数を占める。胎土・焼成・調整技法等が三重県北野遺跡産の甕と酷似する。」とされた、伊勢型１類甕に分類できる。（内堀1999）おそらくは、伊勢方面で焼かれて、当地へ搬入されたものであろう。さらに、各務原市の鵜沼古市場遺跡Ｂ地区（坂井2001）からは、１号土坑墓と同様の調整を持つ長胴甕が出土している。これらのことから、１号土坑墓出土の長胴甕は、つまみ上げ口縁で、内面上半部ハケ・下半部ケズリ調整を行い、口縁部径より胴部径が大きく、胴部の張りも強いことから、６世紀代後半に所属する可能性が高い。(1)

なお古墳時代後半から古代前半の煮沸具をみてみると、西濃・岐阜方面には伊勢系の丸底の甕が、東濃方面には濃尾系の平底の甕が多く、中濃方面ではその両者がみられる。中濃方面で同じ様相を見せている重竹遺跡(吉田1984)に近い本遺跡で出土した６世紀代後半の甕のうち、１号土坑墓から伊勢系の甕が、10号土坑墓から濃尾系の甕が出土したことは、それぞれの境界域を考える上で非常に興味深い。

（１）上村安生氏・永井宏幸氏のご教示による。



1号土坑墓実測図

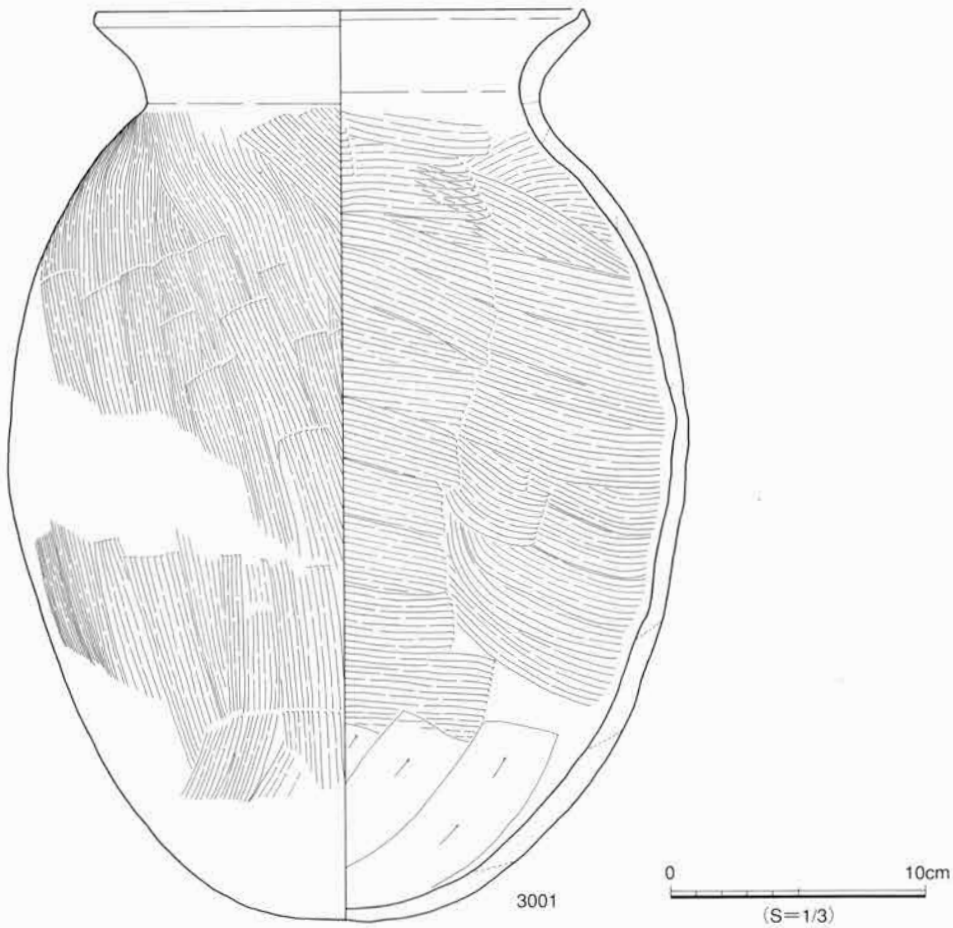


図244　1号土坑墓出土遺物

２号土坑墓（ＳＺ06）（第245～247図）

Ｄ区９Ｖグリッドから検出した。１号・５号火葬墓を検出後、弥生時代末～古墳時代初頭の住居跡を検出しようと掘り下げていたところ、約30cm下げたところで突然作業員の足がはまって検出した。1.0×0.8mの大きさで深さ60cmの土坑の中に須恵器の甕（器高40cm、最大幅40cm）が据えられ、甕に蓋をするように縄状にねじった把手が二つ付いて丸底の鉢がのっていた。鉢は火力の弱いところで焼かれており焼成が不良で、底部上を作業員が踏んで割れたことでこの遺構は検出された。甕は水瓶として使っていたのか内面に鉄分が付着している。後に２号土坑墓は、弥生時代末～古墳時代初めの住居跡ＳＢＤ08の山側の庇溝を切っていることがわかった。住居跡山側庇溝検出面よりも約30cm上から掘形がはじまる。甕の底には鉱滓が４つ丸底の甕の座りがよくなるように置いてあった。須恵器甕は７世紀後半のもので、口縁部が人為的にか一部欠けているが、ほぼ完形である。欠けている方が南側に向いて据えられていた。甕と鉢は丸く摘み出す口縁や、胴部の縄目状になる叩きから在地の関美濃産であると渡辺博人氏に御教示頂いた。これらは土坑墓か祭祀的な意味を持つものと考える。その理由は甕と鉢の据えられかたによる。まず鉱滓を４つ置きそこに甕を据え甕の肩まで土を埋める。この段階でまた甕の南側（谷側）に鉱滓を１つ置き（正面の意味か？）、甕の上に逆さにした鉢をのせて蓋をする。鉢がかぶるまで土を埋める。という感じに鉢で蓋をする前に一段階あるところが特徴である。しかし甕の中は空であった。はじめから何も入れずまじない的なものであったのか、あるいは液体状のものであった可能性も考えられる。７世紀後半のものは土坑墓以外には深橋前古墳があるのみで住居跡等は検出されていない。甕の中に鉢の底部が割れるとともに落ち込んだ土をリン・カルシウム分析に出したところ両方に反応したが、甕の中に土がたまっていた形跡がないため、鉢の底部上にのっていた土のなかにリン・カルシウム分析に反応するものが混じっていたのか、甕の中に反応するものが残存していて落ち込んだ土をあげた時に混じった可能性もある。幼児埋葬や火葬していないものが中に入っていた可能性もある。

10号土坑墓（ＳＸＤ15内）（第246図）

ＳＸＤ15の埋土を掘削中に北東隅から灰釉陶器とともに７世紀後半の土師器甕（3002）が細かく割れた状態で出土した。土師器甕はほぼ完形に近く接合できたことから、埋納位置からはほとんど動いていないとも考えられる。１号土坑墓や２号土坑墓と時期を同じくし、性格も同じものであると考えた。ＳＸＤ15をつくるさいに壊れたようで、土坑のプランは確認できていない。

3002は平底で胴が長いの大型の甕で、口縁部は比較的短いものの強く外反し端部には面を持つ。外面には全体的に、非常に粗くて強いハケ調整をそのまま残すが、頸部のみに軽いナデ調整を施す。口縁部内面はナデ調整が、胴部には粗い板ナデ調整が施されており、至るところに指押圧痕が残されている。底部は胴部は内面側に器壁の１／２程の糊代を作って接合させており、その際底部側には絞り込んだ痕跡がみられる。これは、「底部内面有段接合技法」（永井1996）もしくは「相欠はぎ接合」（佐野1998）と呼ばれているもので、濃尾系甕（永井1996）もしくは牧野系甕（佐野1998）の特徴である。また外面には全体に煤が附着していることから転用されたものであることが窺える。やや張りがあり、胴部が長くのびないことから６世紀代後半に所属する可能性が高い。伊勢系甕との関係については前述（１号土坑墓）した。

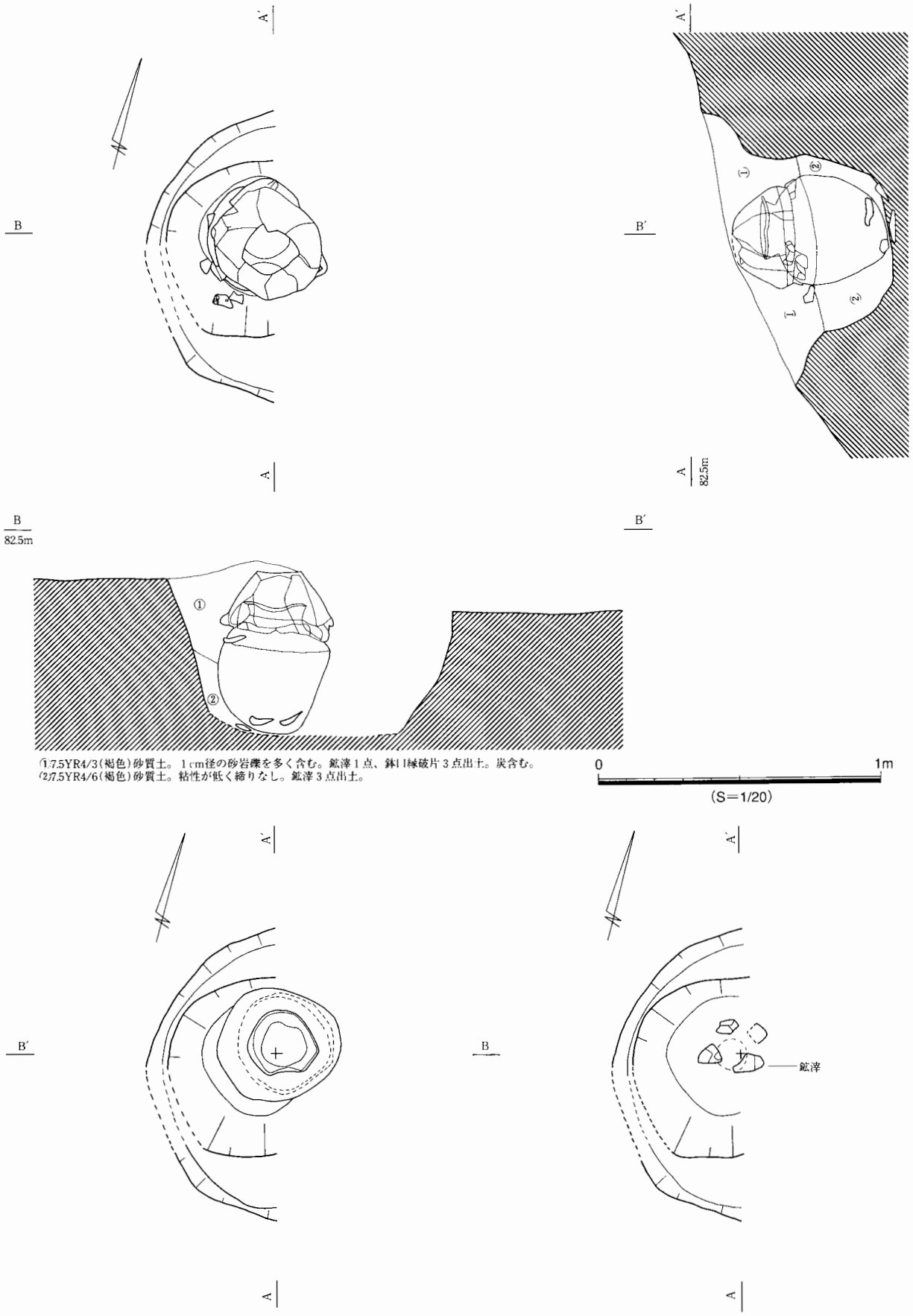
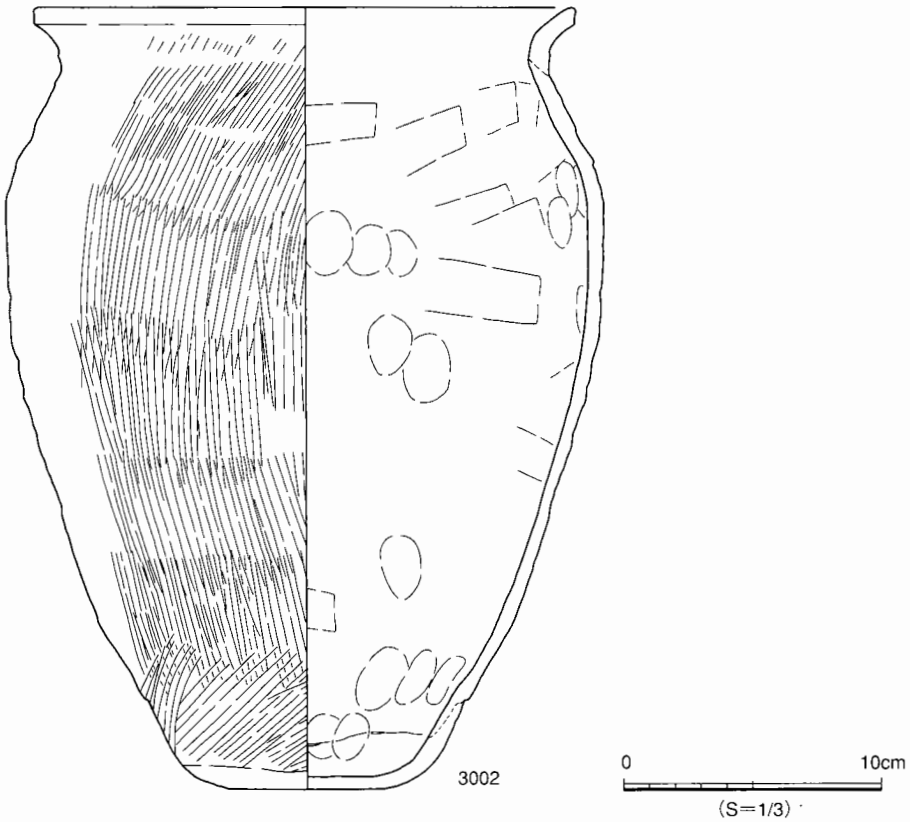


図245　Ⅳ期2号土坑墓平面図・断面図（S=1/20）



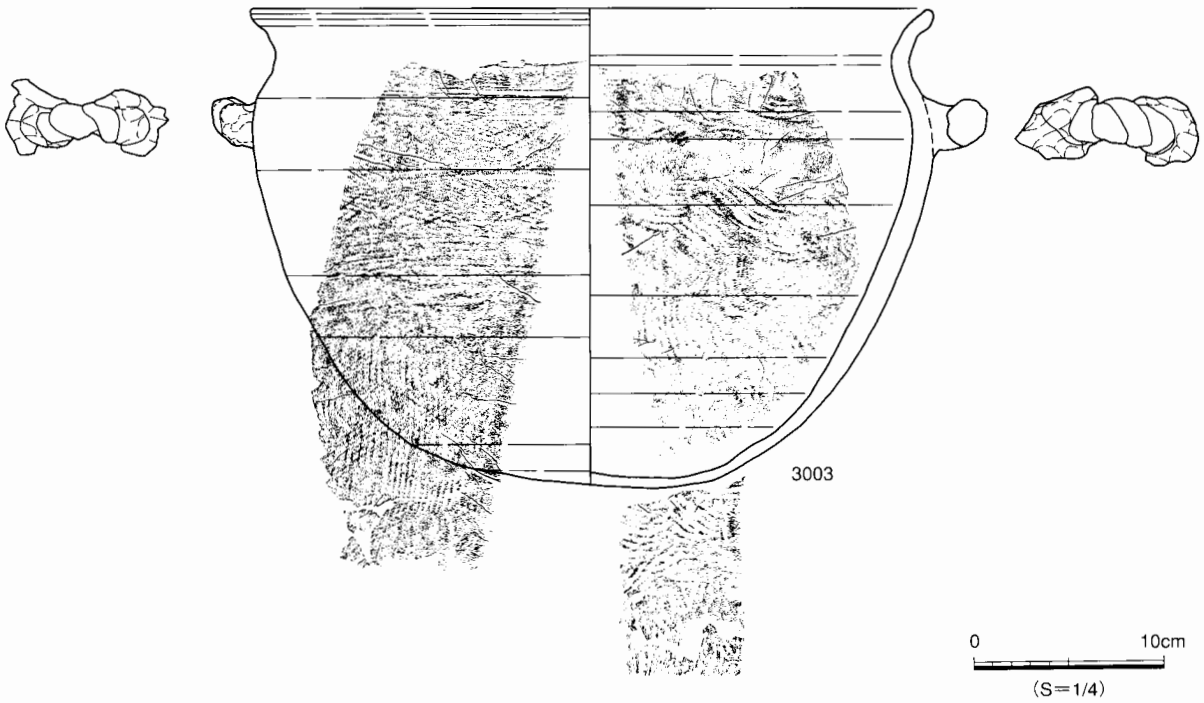


図246　Ⅳ期2号・10号(SXD15)土坑墓出土須恵器（1）（S=1/4）

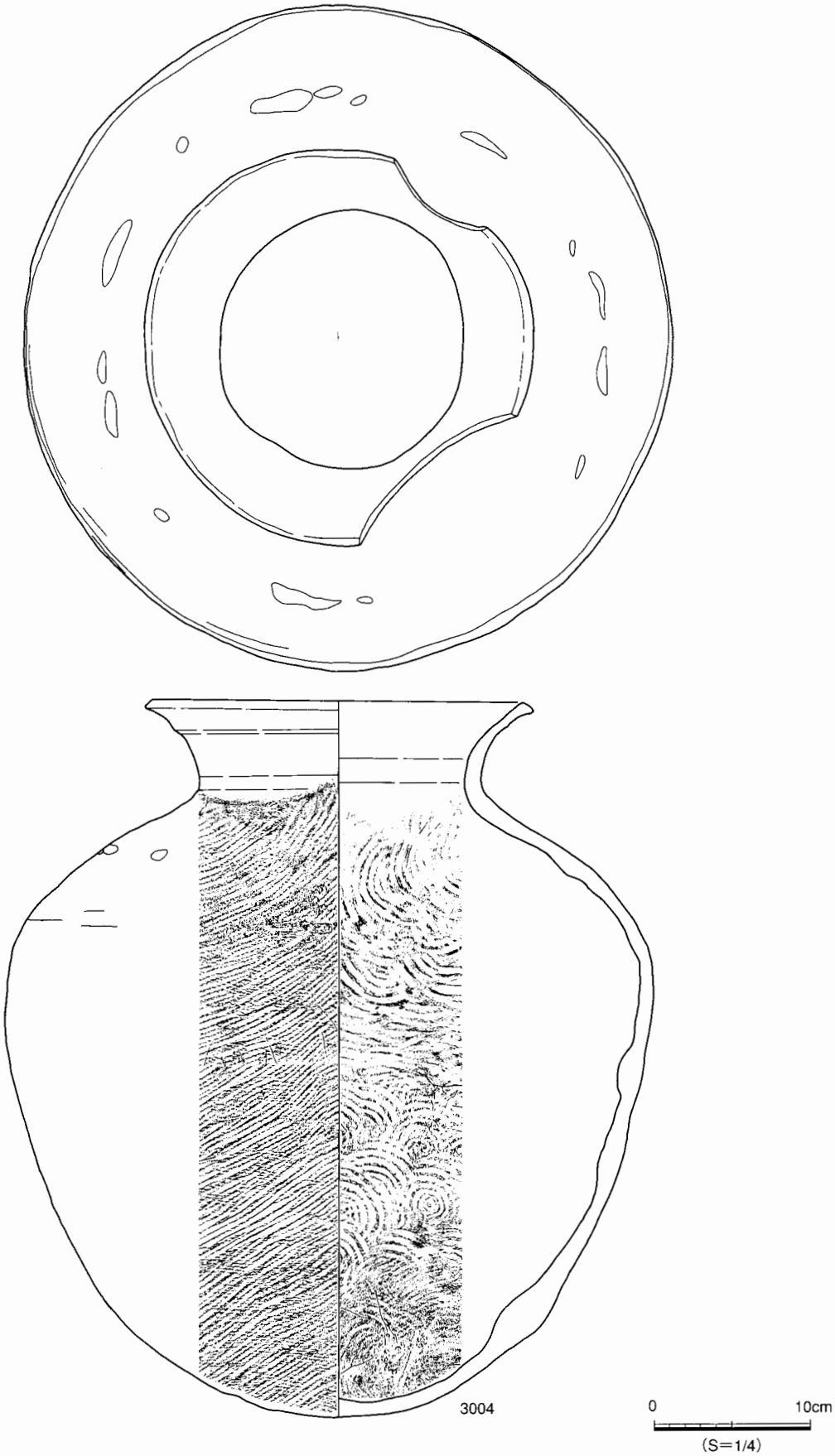


図247　Ⅳ期2号土坑墓出土須恵器（2）（S＝1/4）

小石室（ＳＺ08）（第248図）

Ｅ区４Ｏグリッドで検出した横穴式小型石室墓（小規模石室）である。蔵骨器と思われる須恵器甕と土師器甕の破片が石組みの中から出土している。3005は７世紀末～８世紀前半、3006・3007は７世紀代のものである。石組みのチャートの角礫が５つ現位置を保って立っている。石の抜けた痕もあり、他にも４つ立っていた可能性がある。

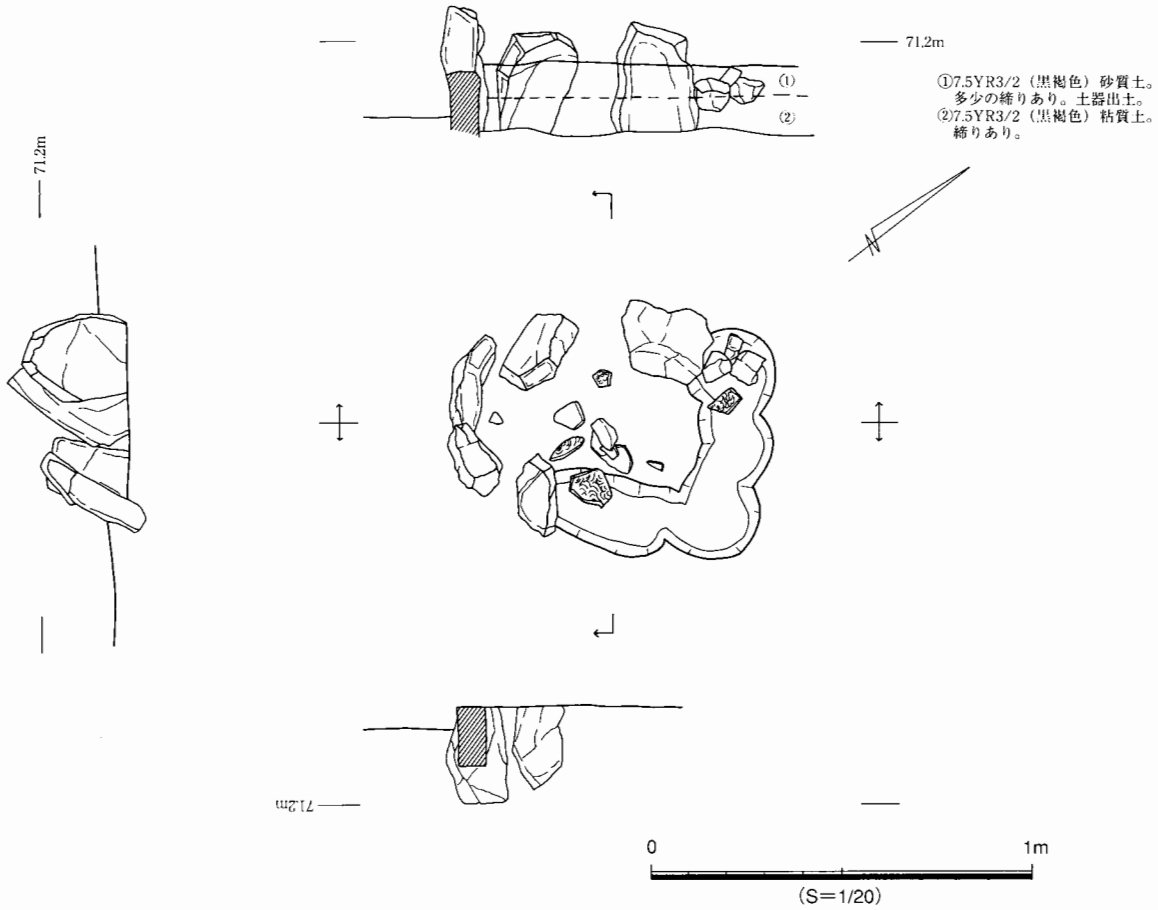


図248　Ⅳ期小石室（SZ08）石室平面図・展開図（S=1/20）

不明遺構

ＳＸＢ01（Ｂ区）

ＳＸＢ02の山側にあり、ＳＸＢ01・03に切られている。地形的に窪んでいる部分に、土がラミナ状に堆積しており池のようなものかもしれない。

ＳＸＢ02（26B：B区）

ＳＸＢ01より新しくＳＸＢ03と同時期のものと思われる。長さ２ｍ幅0.5ｍ深さ0.15ｍと浅く、炭を伴い焼けている。平安時代の祭祀遺構に類似するものか。

ＳＸＢ03（25B：B区）

ＳＸＢ01を切り、ＳＸＢ02と同時期のものと思われる。長さ0.65ｍ幅0.6ｍ深さ0.3ｍで壁が焼けており近辺ではＳＸＢ02と遺構の性格は類似している。

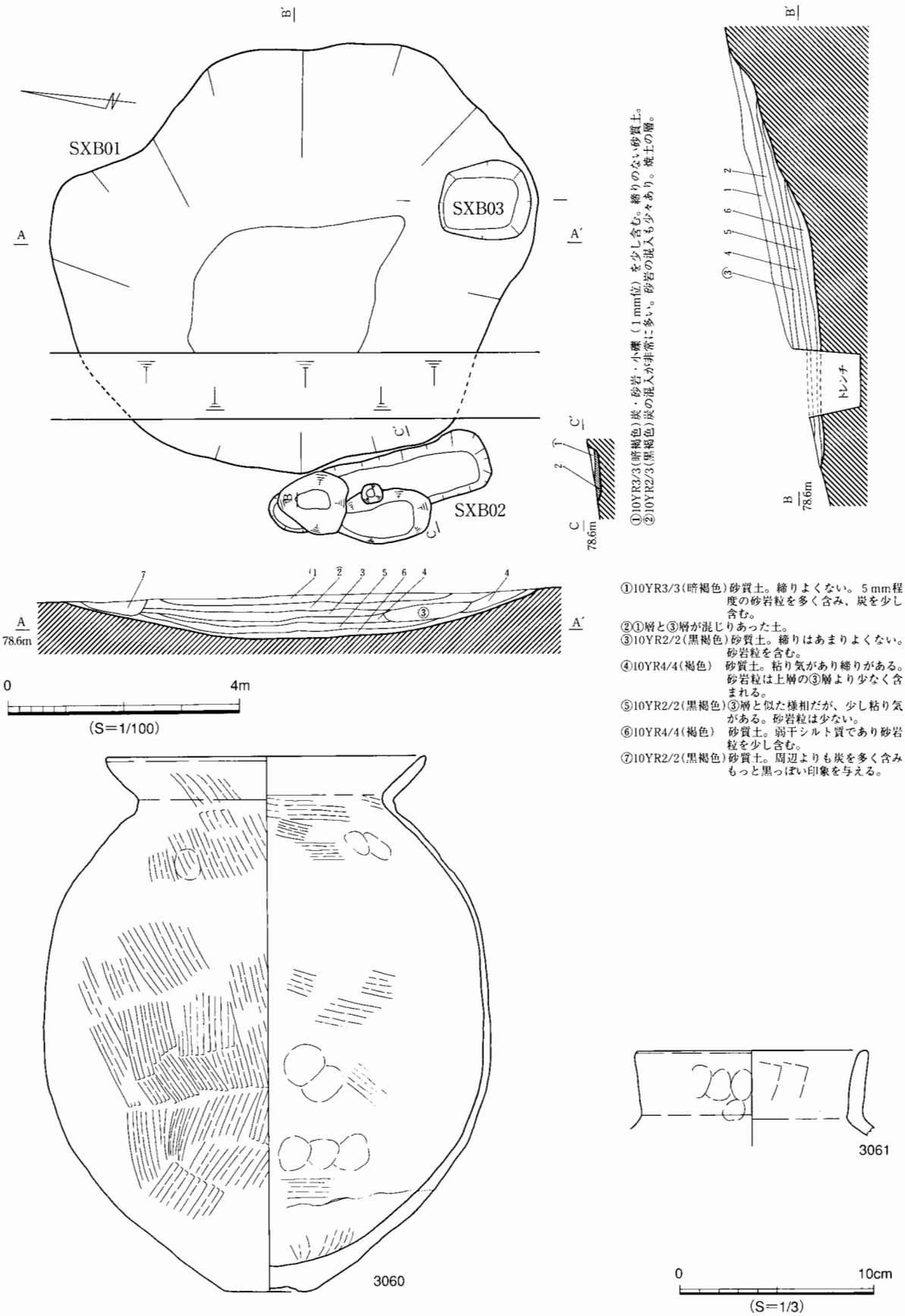


図249　Ⅳ期SXB01・SXB02平面図、断面図、SXB03平面図（S=1/100）

深橋前火葬墓群

深橋前１号火葬墓～６号火葬墓の奈良時代の火葬墓を６基検出した。火葬墓は勾配が20～30°の急傾斜に散在している。標高約76mに２基、約82mに２基、約84mに２基それぞれ離れて存在する。立地条件は標高にあるというよりも、尾根の頂上部から４～５m避けてあるという感じである。本遺跡の谷の入口付近に２基と、入口から少し中に入った小さい谷に４基と大きく分けると位置関係からはこの２グループになりそうである。

火葬墓のほとんど全てが尾根頂部から比較的近く表土及び流土の堆積が浅い所にあったために、重機による表土掘削の際に重機でひっかけて検出されている。そのためもとは流失をまぬがれて比較的残りが良かったのではないかと思われるものも、構造や出土状況が分からなくなってしまっていることをここで断っておく。１・２・３・５号火葬墓は重機の掘削で検出した。４・６号火葬墓は手掘りで掘削していた際に検出したが土の流出のために４号火葬墓は石組み等の構造がはっきりせず、６号火葬墓は蔵骨器が転落していた。いずれも火葬墓の構造や埋納方法の詳細を観察するにはいたらない状況である。

１号火葬墓（ＳＺ02）（第250～252図）

Ｄ区７Ｖグリッドで検出した。流土を重機で掘削している際に引っかけてしまっている。引っかけた際に埋納されていたと思われる蔵骨器の須恵器の横瓶が出土している。横瓶は粘土紐を積んで円筒形につくり片側をふさぎ、その後別に作った口縁～頸部を付けている。横瓶の時期は８世紀中葉である。「この横瓶は口縁部の摘み上げ等、美濃須衛窯にはない形式で、関美濃地域の在地のものである」と渡辺博人氏から御教示を頂いた。横瓶には鈕の付いた須恵器の蓋（８世紀中葉～後葉）が伴い、中には土がいっぱい入っており、土を取り出したところ火葬人骨（414g）と炭が入っていた。人骨は火葬後に人為的に切ったと思われる痕跡が残るものもある。岐阜大学医学部法医学教授武内氏にみてもらったところ、細片で頭蓋骨・歯・喉仏周辺・手足の細い骨・膝の骨とわかるものと、さらに細かく粉砕したようなものも入っていた。ほとんど現在の火葬後に骨を拾う箇所と変わらない。年齢・性別を明らかに判断できるような頭蓋骨や腰骨の形が残るような箇所は入っていなかったため、年齢・性別は不明である。

重機で引っかけてしまったチャートや砂岩の角礫が周囲に転がっていたため、本発掘調査で石組みの痕跡等がないか確認したところ、山側に向かって右側半分（東側）に石が２つ原位置に近く残存し、他に東側半分で４個の石組みの痕跡が残っていた。これらの痕跡から石組みは砂岩の角礫で組まれていた可能性が高い。墓穴の大きさは約0.8×0.8mで、形は分からないが方形をしていた可能性がある。石組み痕検出の際に蔵骨器が埋まっていたと思われる中央部分に、銅製の馬具の鉸具が残存していた。大きさは４cm×４cmで、厚さは約６mmで一部欠けているがほぼ完形である。当初鉸具は８世紀頃のもので腰帯の留め金具と考えていた。しかし、松村恵司氏に留め具の先が尖っていることから馬具であると御指導頂いた。この鉸具は蔵骨器の中に入っていたのか蔵骨器の外に副葬されていたのかは不明であるが、重機で横瓶は割れてはいたが、土がいっぱいに入っていたようなので、蔵骨器の外に置かれていた可能性が高い。鉸具を検出した位置の下には炭が入った黒土の層が残存していた。埋葬された人物は馬と関わりが深い可能性も考えられる。周辺に転がっていたチャートや砂岩の大きさは30×25×15cmくらいで、少なくとも１面は平らな角礫が７個ある。おそらく平らな面を内側にして、

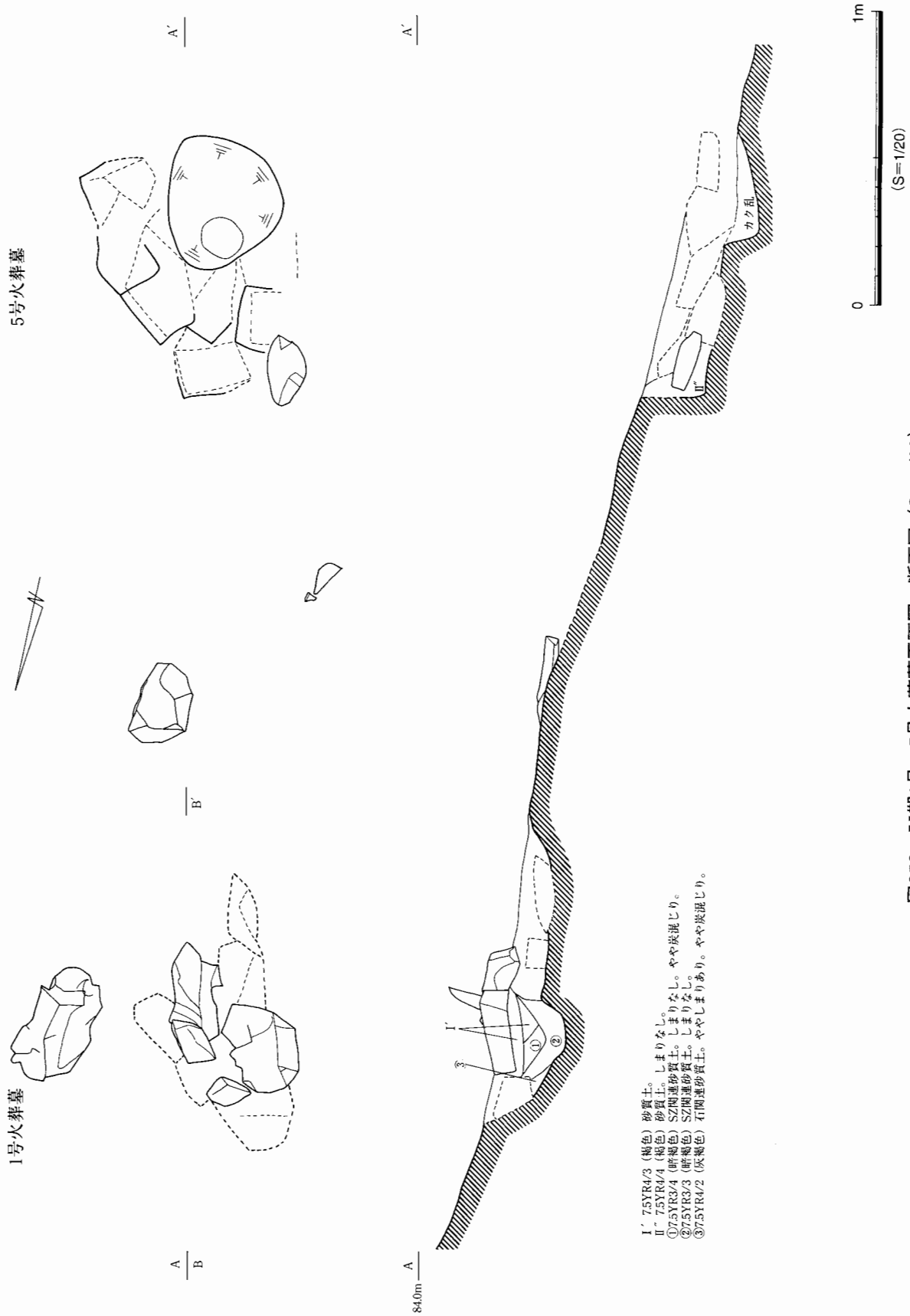


図250　Ⅳ期1号・5号火葬墓平面図・断面図（S＝1/20）

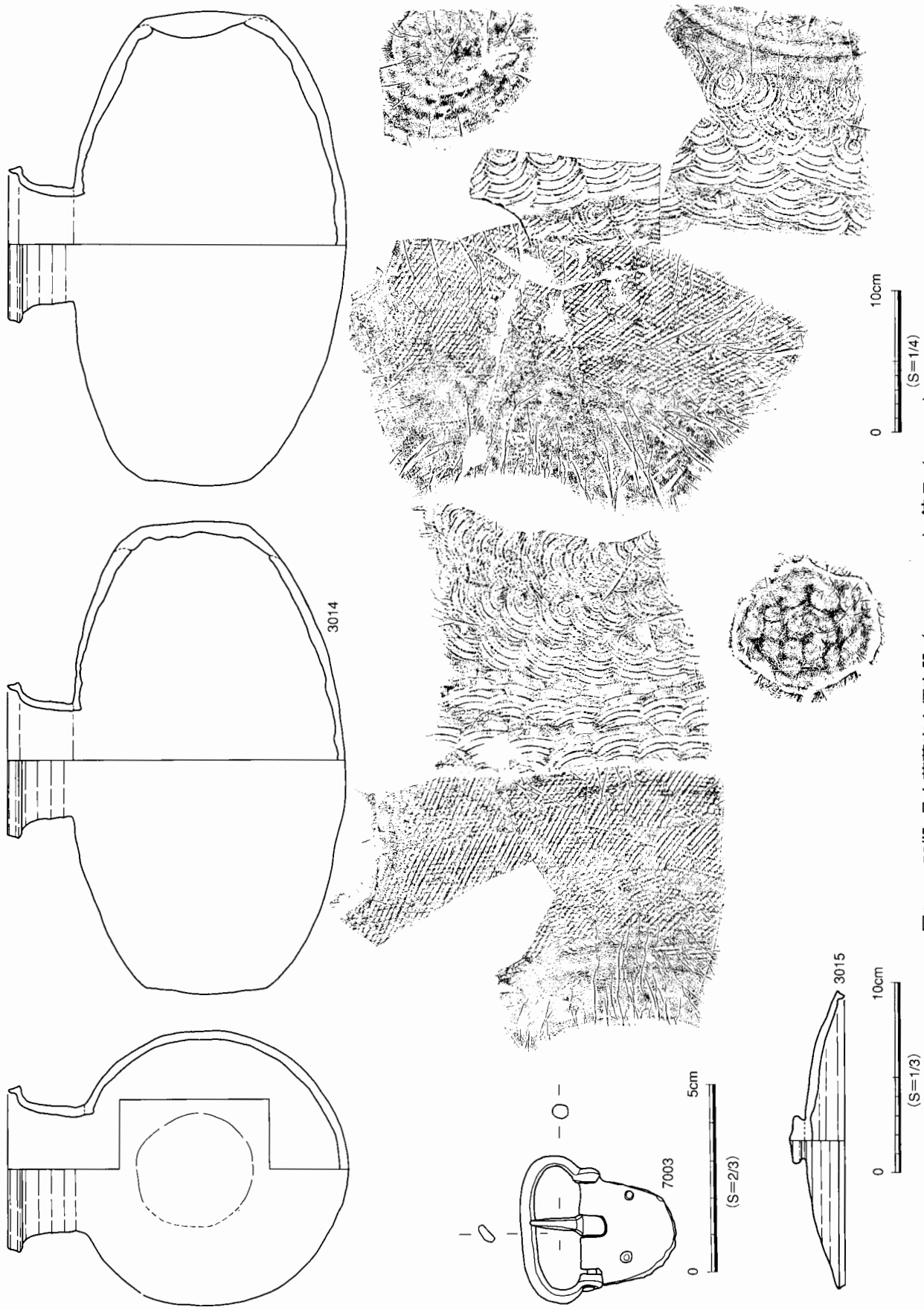


図251　Ⅳ期1号火葬墓出土須恵器（S＝1/3,1/4）鈴具（S＝2/3）

石を組んでいたのではないかと考えられる。角礫の他に一番大きいもので、40×25×15cmの砂岩が１個ある。この他に大きさがやや小さい砂岩で25×20×15cmのものや30×20×15cmのものが７個あった。

２号火葬墓（ＳＺ03）（第252・255図）

Ｄ区５Ｙグリッドで検出した。重機で引っかけているため蔵骨器が納められていた土坑等の構造は不明であるが、周辺には角礫も残存していなかった。蔵骨器は須恵器の小型丸底壺で、８世紀中葉の須恵器の蓋を伴う。火葬骨が少々壺の中に残っていた。

３号火葬墓（ＳＺ04）（第252・255図）

Ｅ区２Ｍグリッドで検出した。蔵骨器と思われる８世紀中頃以降の須恵器の短頸壺が重機で引っかけられて検出しており、火葬骨が少し残存していた。石組みの石も土坑の形状も確認できなかった。

４号火葬墓（ＳＵＥ03＝ＳＺ09）（第252・255図）

Ｅ区７Ｉグリッドで検出した。蔵骨器と思われる８世紀中頃の須恵器の短頸壺が蓋を伴って検出された。薬壺のようなものかもしれない。手掘りの際に検出され、石組みも土坑も、火葬骨も確認できなかった。流失しているものと思われる。

５号火葬墓（ＳＺ05）（第250・255図）

Ｄ区７Ｖグリッドで検出した。蔵骨器は検出されなかったが、谷側の９Ｗから８世紀中葉の須恵器の小壺が出土しており、５号火葬墓から転落したものである可能性がある。１号火葬墓の1.5ｍ下（谷側）にあり１号火葬墓と同じく谷側からみて左側（西側）半分は重機の掘削が蔵骨器埋納位置よりも深い位置にまでおよび何も残っていない。かろうじて右側（東側）半分に石組み痕が残っている。石組み痕から他に６～８個ほど角礫が使われていたものと思われる。周辺には重機で動いてしまった砂岩とチャートの角礫があり、この火葬墓の石組みに使われていた可能性が考えられる。墓穴の大きさは0.8×0.8ｍで方形をしている可能性もあるがはっきりとはわからない。石組み痕中央部に撹乱を受けた土坑があり、その中に蔵骨器が入っていた可能性が考えられる。

６号火葬墓（ＳＺ07）（第253・254図）

Ｄ区12Ｖグリッドで検出した。谷側の半分以上が流れているため、石組の一部のみが残存し、遺構に伴う遺物も流失に伴い転落したようで確認できなかったが、１号火葬墓と５号火葬墓の石組み痕と類似しており、また同一レベル上（等高線上）にあり同じ谷にあること、石組み下から検出された炭の層と火葬人骨片から、蔵骨器は確認されていないが同時期の火葬墓であると考えた。火葬墓の構造は他の火葬墓よりも残存状況が良く、構造を復元できそうである。土坑は1.2×0.5ｍの大きさで深さは0.5ｍあったものと思われる。土坑の底全体に厚さ15～20cmの炭の層があり、奥壁前の炭層上層には火葬人骨も少し（鎖骨・手足の骨）残存していた。炭の層の上には土坑の北側（山側）にのみ石組みの一部が残存していた。古墳でいう奥壁と側壁と天井石にあたるものである。残存していた天井石一つと奥壁は角礫のチャートで、砂岩の側壁と奥壁の間には細かい石が込められている。おそらく１号火葬墓や５号火葬墓の構造から予想すると、石組みは角礫で土坑内に長方形あるいは正方形の形に組まれ、中に蓋付きの蔵骨器がいれられ、天井石が２～３個のせられていた可能性がある。

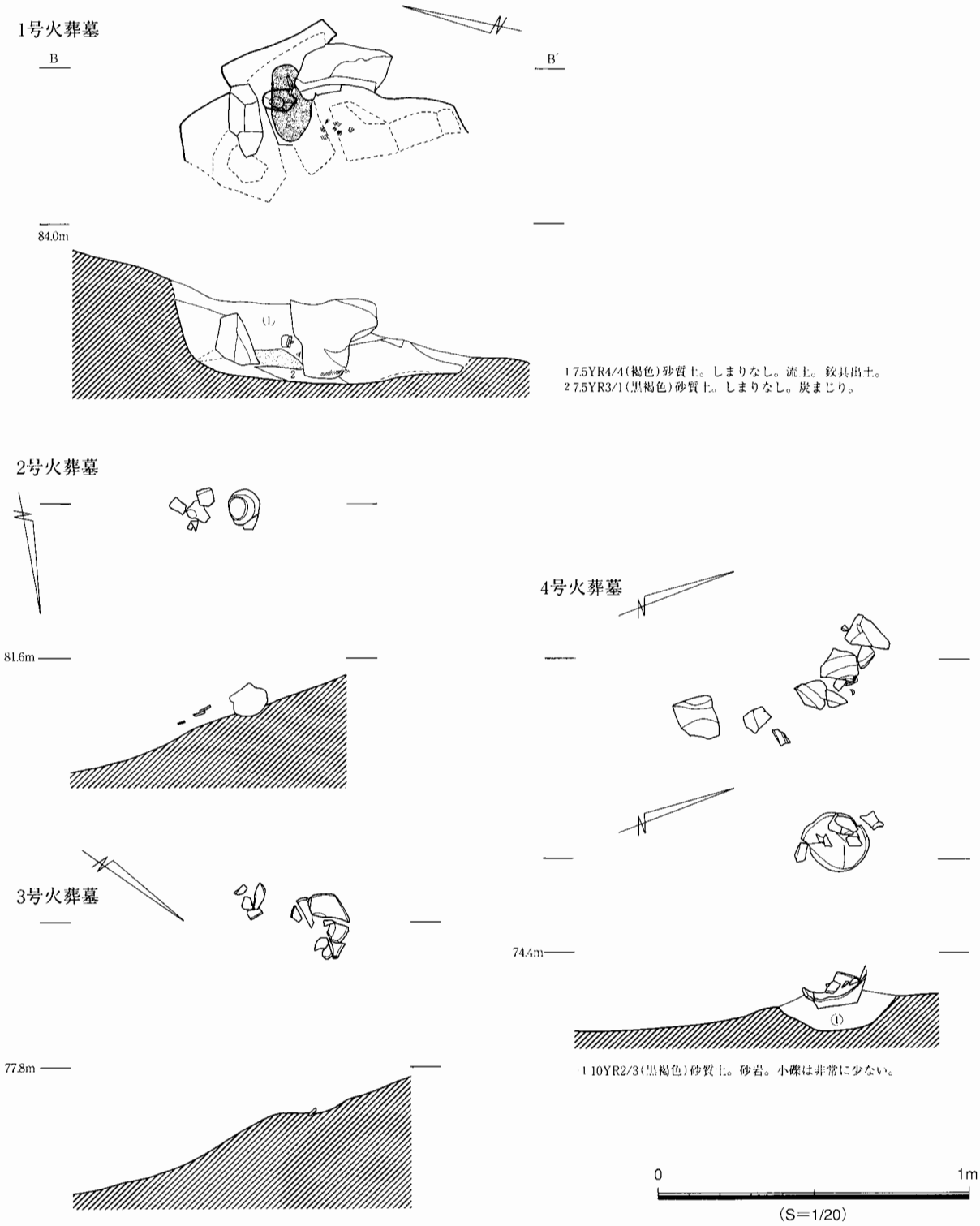


図252　Ⅳ期1号・2号・3号・4号火葬墓平面図・断面図（S=1/20）

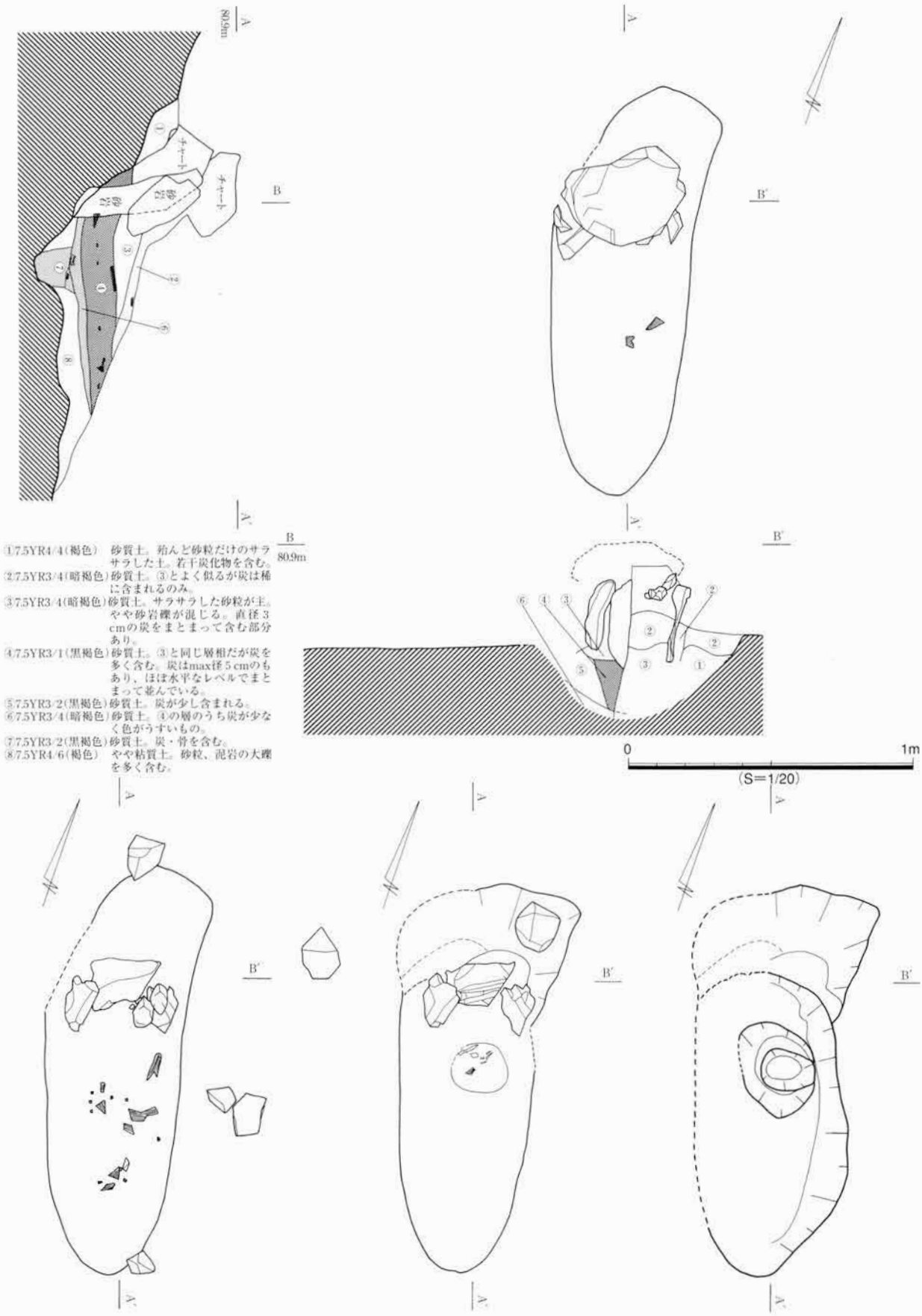


図253　Ⅳ期6号火葬墓平面・断面図（S=1/20）

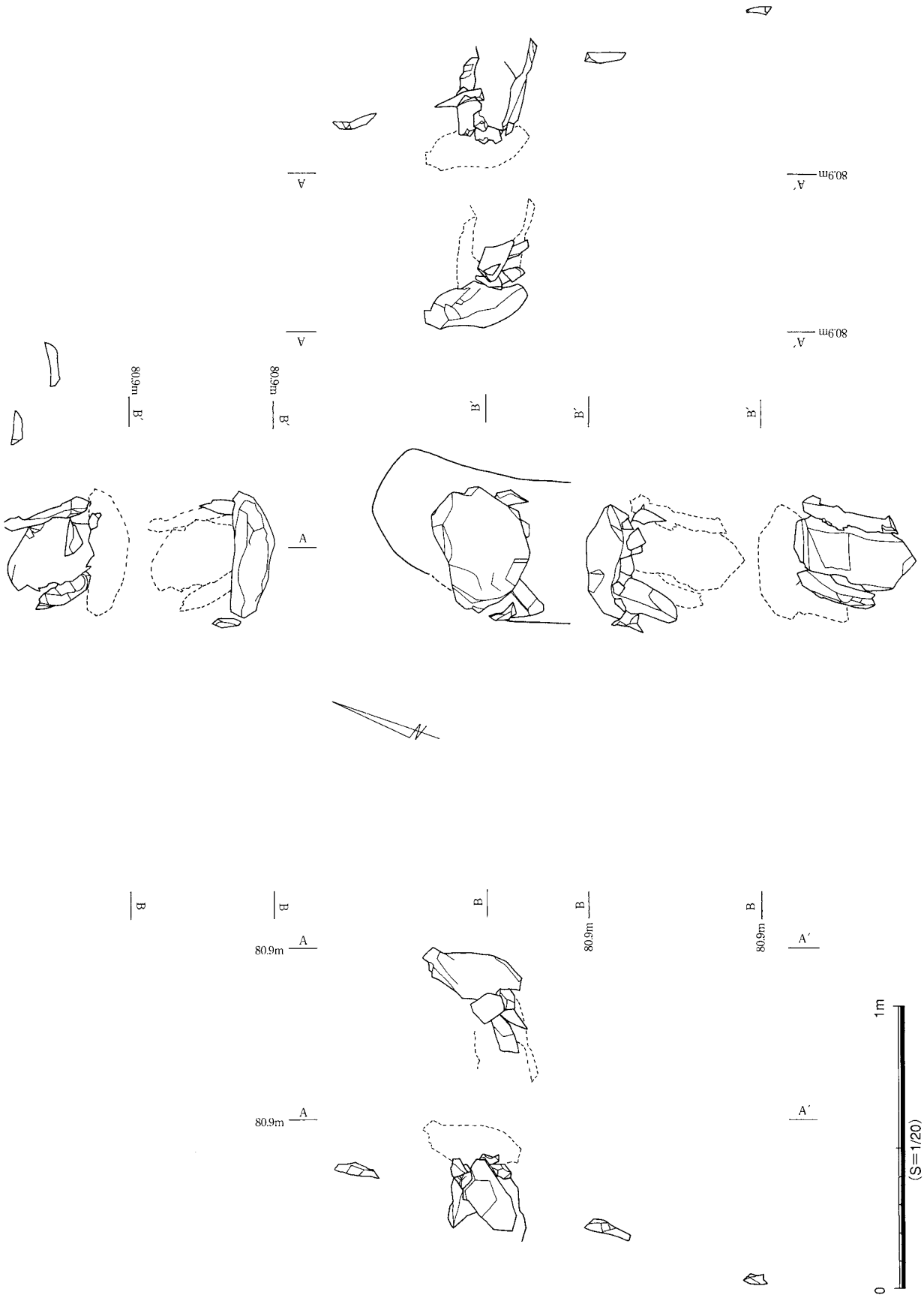


図254　Ⅳ期6号火葬墓展開図（S=1/20）

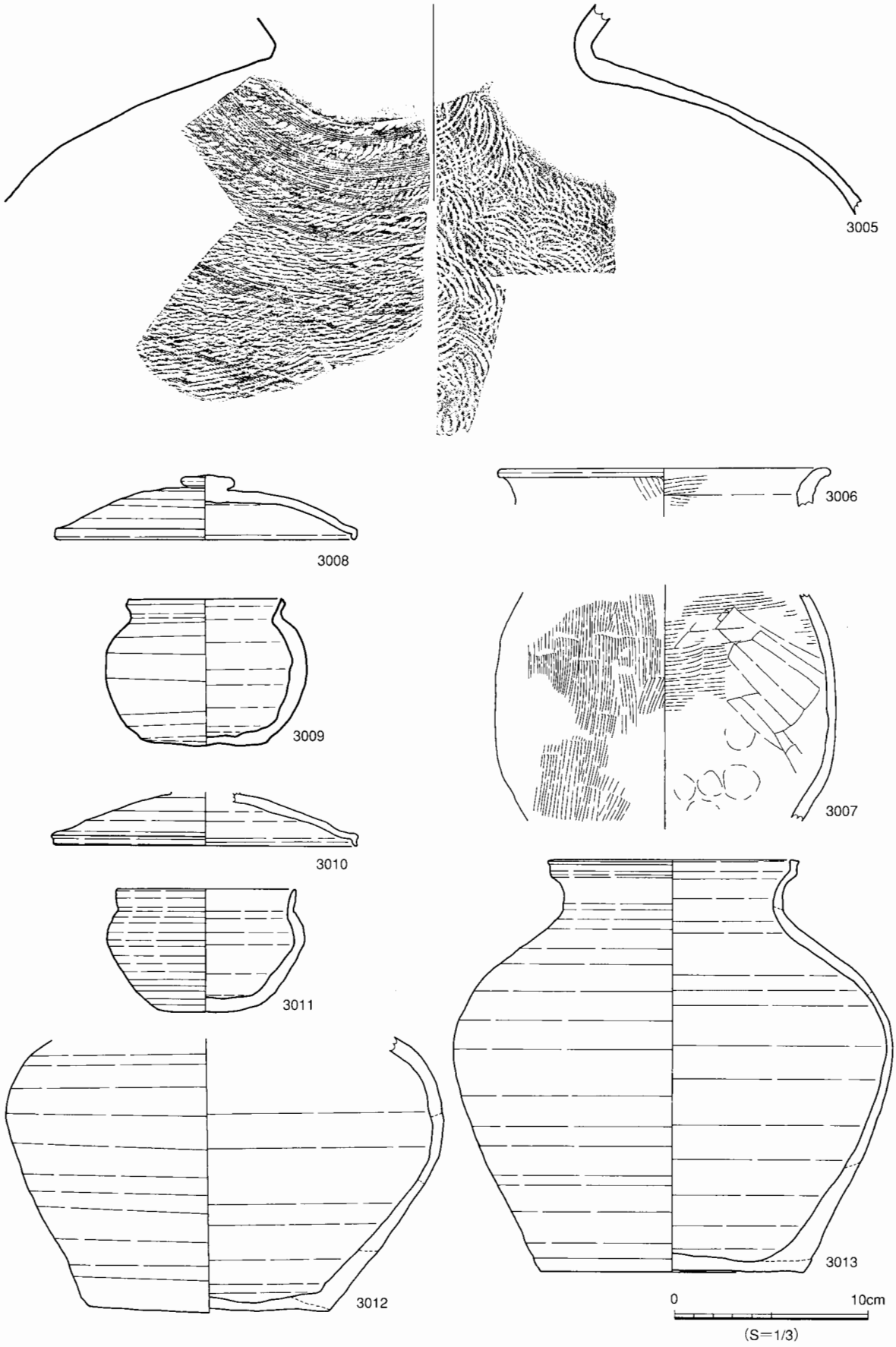


図255　Ⅳ期深橋前古墳、2号～5号火葬墓出土遺物（S=1/3）

まとめ

火葬墓の構造を得ることができた１号と６号火葬墓の情報から復元してみると火葬墓の構築過程は次のようになる。

①楕円形の穴を掘り、薪と棺を穴の中で燃やす。

②できた炭の層の上に、小さな石室のような石の囲いを、内部が方形になるようにつくる。

③石の囲いの中に、骨を入れて蓋をした蔵骨器を納め、石で蓋をする。

（小さい石室で残存し直接確認できたのは奥壁・側壁・天井石と思われるような構造の一部のみである。）

第３節　Ⅳ期の包含層出土須恵器

（第256～259図）

3018～3022は５世紀の広口壺で、同一個体と思われる。外面には叩き痕がつくが内面はきれいにあて具痕を撫で消している。出土地点は24Ｖ、25Ｖ、23W、24W（Ｂ区）で、湧水地点の東側に集中している。５世紀の水辺の祭祀にかかわるものである可能性がある。

3027～3034は８世紀後半～９世紀のもの、3047は甑の口縁部から胴部の破片で把手が２つ付く、3048～3052は甑の底部破片である。Ｄ区から出土している。

3035～3046はＥ区出土で、3035・3036が６世紀中頃、3037・3038が７世紀前半、3039は７世紀中頃、3040は７世紀末～８世紀前半のものである。3053～3059はＥ区出土の甕の破片で、3053・3054は叩きとあて具痕の文様が細かく７世紀のもので、3055～3059は叩きとあて具痕の文様が粗く８世紀末のものである。

Ｅ区出土のものは７世紀末～８世紀前半のものが多く小石室に関連したものが多いようである。それに対してＢ・Ｄ区は８世紀代の新しい時期のものが多いようである。

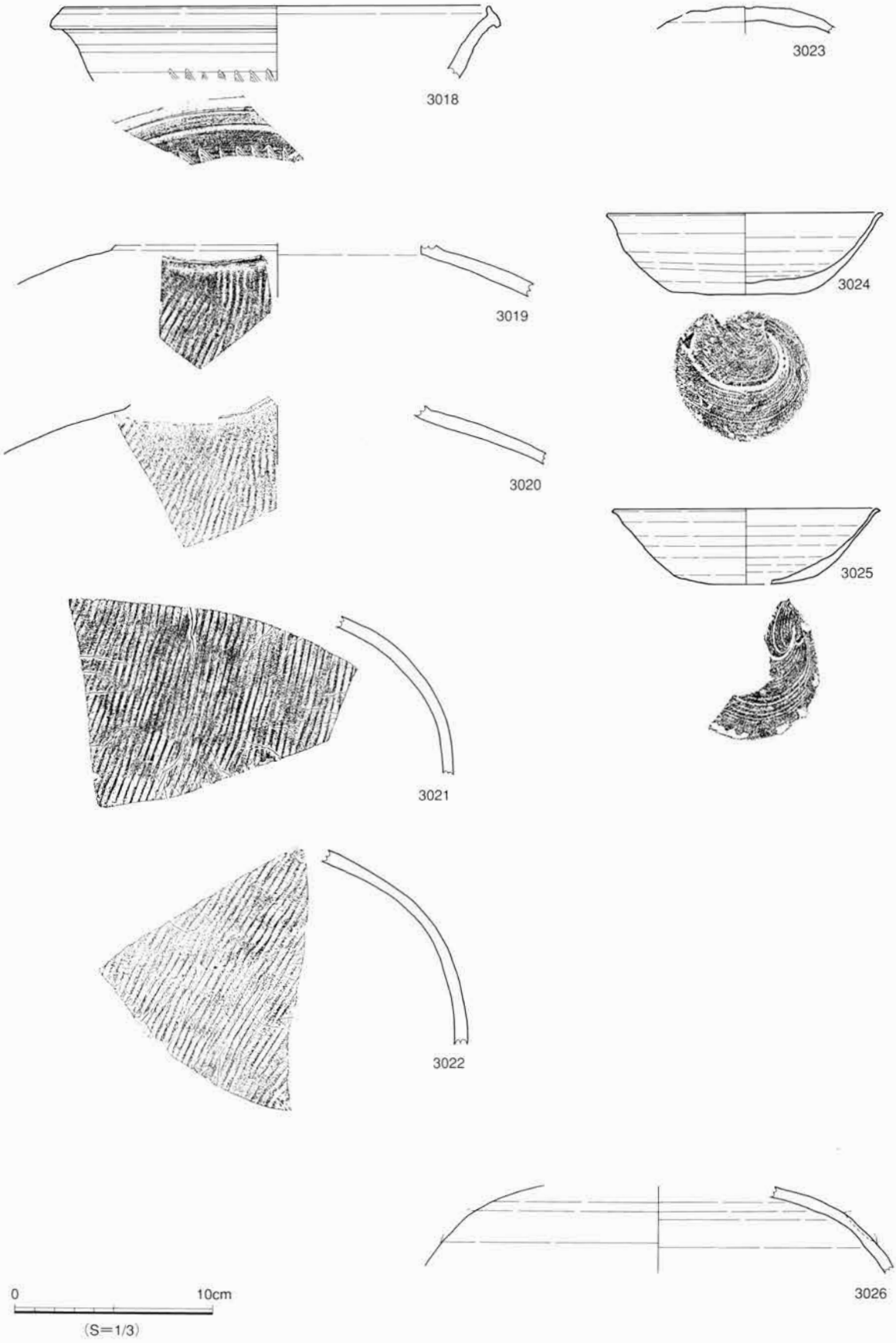


図256　Ⅳ期B区出土須恵器（S=1/3）

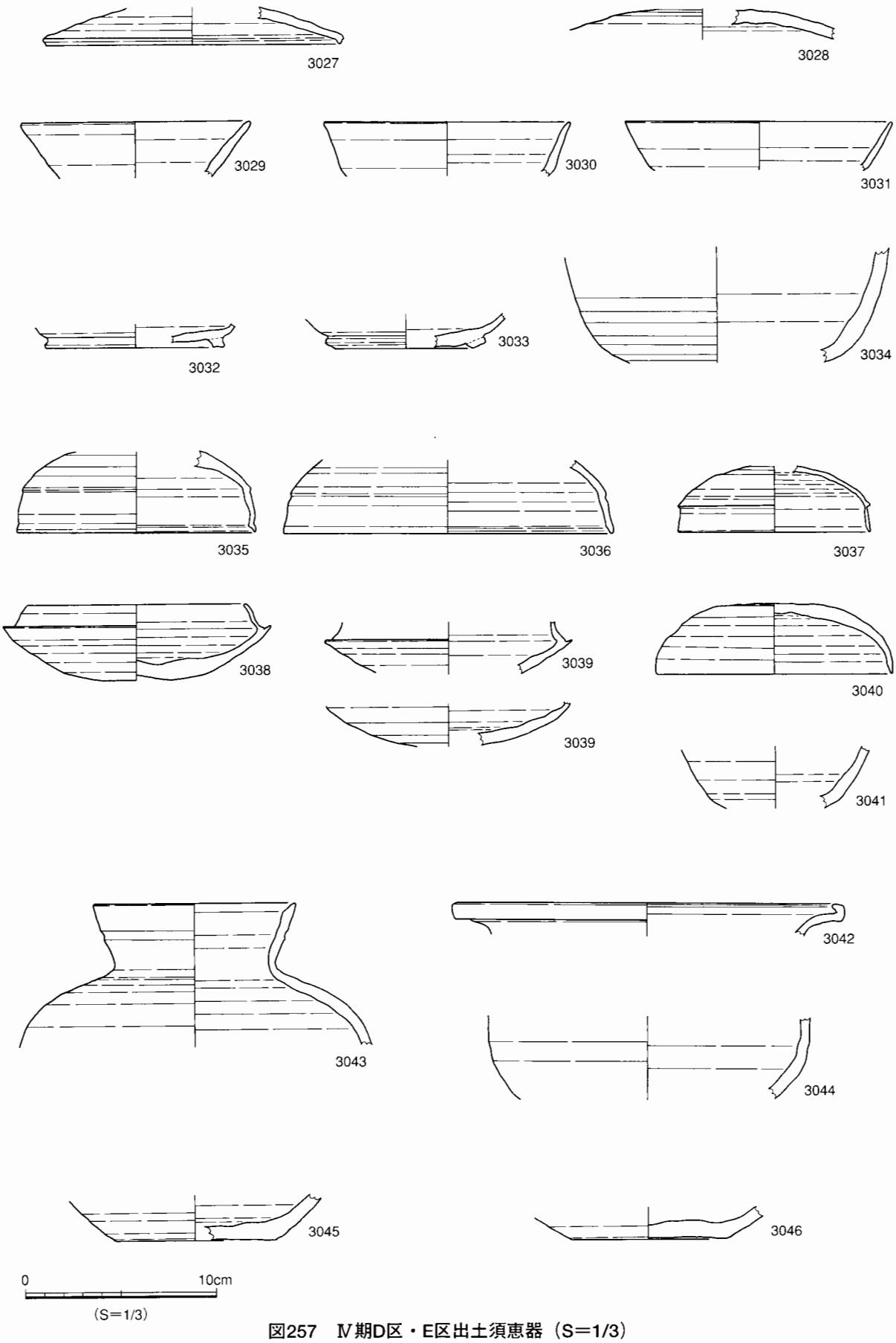


図257　Ⅳ期D区・E区出土須恵器（S=1/3）

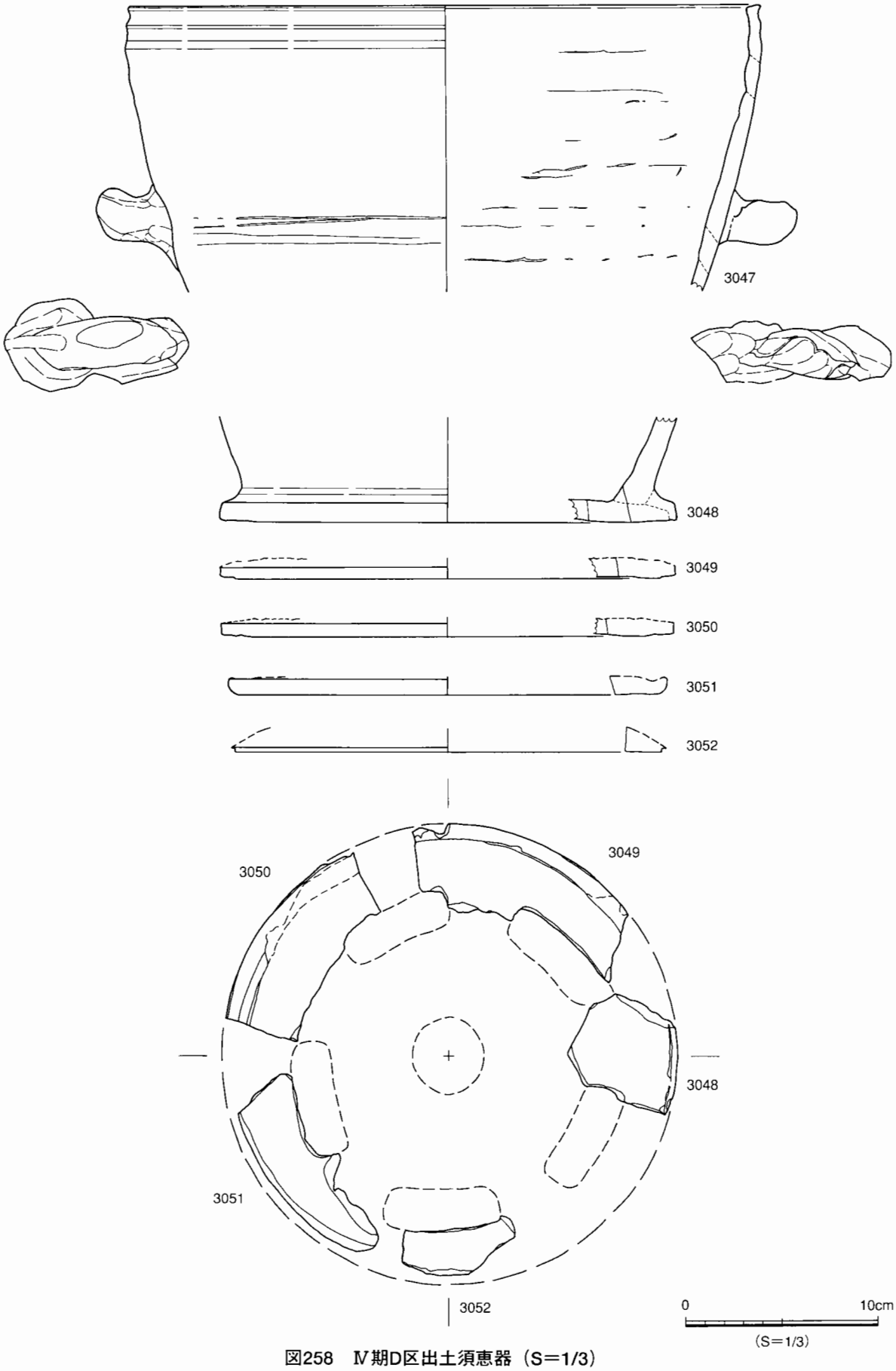


図258　Ⅳ期D区出土須恵器（S=1/3）

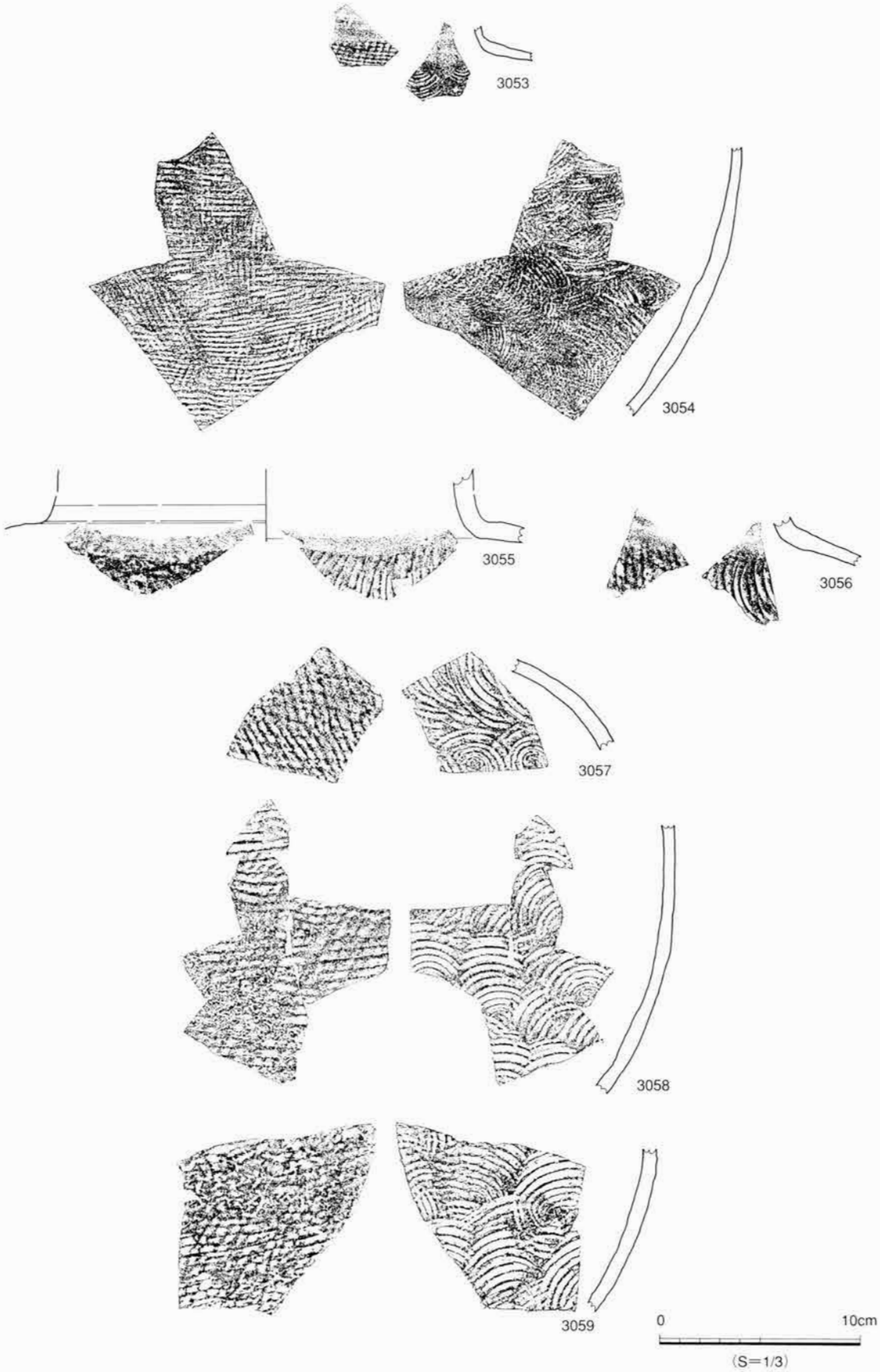


図259　Ⅳ期E区出土須恵器（S=1/3）

第４節　深橋前古窯跡

平成９年度の試掘調査のトレンチではＳＫ５,６,７や灰原の末端部が検出されている。調査後に試掘トレンチは灰原の左縁にあたっていたことがわかった。検出された遺構は灰釉陶器窯跡１基と土坑８基である。B区の24W,25W,26W,27W,24X,25X,26X,27X,26Vで検出された。土坑は燃焼室の両脇（北側と南側）にある。そのうちのＳＫ１～３には多くの灰釉陶器、焼台、窯壁が捨てられている。窯から一番近い一種の灰原になっている。窯体内の埋土は最終焼成の窯出し後に入り込んだようで、操業放棄後に放置していた間に埋まった可能性があり、その後天井が崩落しているようである。流土の堆積は、プラン検出に及ぶまでに窯上部で約40cm、灰原の上で50cm～１mの堆積があった。

灰釉陶器窯の立地は、南方向に向かって開く南北に細長い谷の奥の緩やかな西向き斜面の中腹につくられており、谷の入口から吹き上げた風が窯の中に入るように窯全体がわずかながら南西に向いている。窯体の北側には東西方向に伸びる自然地形の小さい谷があり、自然地形を排水溝として利用している。窯にあたる風の強さは台風が来たときに、ビニールシートが窯にかけた分がすべてめくれたことからも証明された。窯体の検出標高は80.7～82.6mの間で、比高差は1.9mである。窯体の全長は5.6mである。砂行古窯（6.9m）、榿ノ木洞古窯（6.5m）に比べると小型である。本古窯は砂行古窯とともに断層によるずれでできた湧水地点付近につくられている。

本遺跡には湧水箇所が20T付近にあり、粘土も採掘できる。本古窯に伴う粘土採掘が行われた可能性もあり胎土分析を行った結果その可能性は強くなった。また比較分析から本古窯跡の灰釉陶器の胎土は砂行古窯出土灰釉陶器の胎土に近く、榿ノ木洞古窯のものとは類似しないことがわかった。

窯の構造は半地下式で、基盤の砂岩岩盤を掘って築窯しているが、焼成室の途中から（断面⑥の位置から）は岩を含む地山に基盤が変わっている。焼成室は１つで、それに伴って燃焼室と煙道部がある。火力を充分に窯内に広めるために、焼成室と燃焼室の間には据え置き式の分炎柱がある。分炎柱の他にも火力を充分に広めるために分炎棒も９個検出されている。分炎棒の大きさは長さ約20～25cm、幅約10～20cmである。分炎棒には多くの灰釉がかかっているが、還元焼成の状況で強い火力を受けたためか５個は灰釉がコバルトブルーに変色している。煙道部と焼成室の境には、後につくりつけた段差があり、ガスの排出量を抑えることにより、蓄熱作用を高めている。

窯は煙道部を東側（尾根頂部側）に向け、焚口を西側（丘陵裾部側）に向けている。焚口は27Ｘ杭から南西へ1.5ｍのところにある。窯は等高線に直交するようにつくられており、軸は国土座標を基準にして打った杭の28Ｘ杭と26Ｘ杭を結んだ線よりも北の方向に約６°振っている。グリッドは調査区全体に対応する杭のみで、窯の軸にあったものにはなっていない。

全長約5.6ｍ、焼成部長さ約３ｍ・幅約1.3m・分炎柱付近幅約1.4m、燃焼部長さ約1.5m・幅約1.4m、焚口幅約1.5mである。それぞれの標高は焚口80.62m、分炎柱残存上部81.23m、焼成部床面80.8m、閉鎖施設部81.91m、煙道部床面82.28～82.5mである。傾斜角度は灰原15～20°、焚口～分炎柱までは３°、焼成室は分炎柱～0.5m上部までは14°・分炎柱から0.5m上部～閉鎖施設までは28°、ダンパー33°、煙道部床面20～27°である。焼成室の床面を急角度にして、炎を低いところから高いところへまっすぐに流し、炎の勢いを強め熱効率を高める工夫をしている。

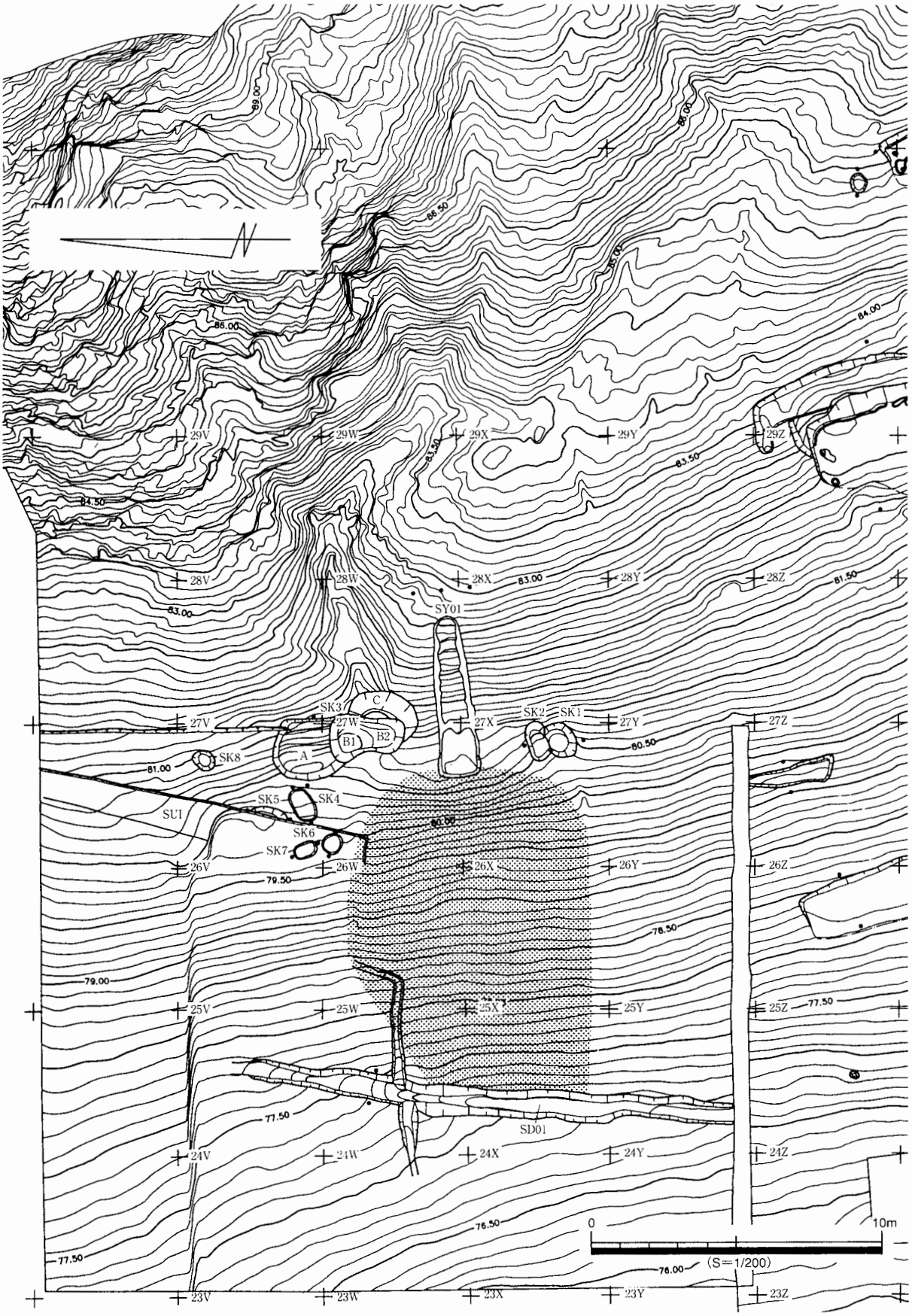


図260　Ⅴ期深橋前古窯跡全体図（S=1/200）

窯内から出土した遺物は、窯体内埋土から24点と少なく、出土遺物のほとんどは灰原から出土している。

焚口（第261・262図）

窯壁が残っているところまでを燃焼室とすると、焚口は長さ約0.6m、幅約1.4m、床面幅1.1m、深さ0.2mで長方形をしている。長さ60cmのうち落ち込み口から燃焼室方向に長さ30cmの範囲には被熱地山赤色がない。燃焼室の両脇1.5mの範囲で平坦面がつくられており、焼成に伴う作業に使われていたと思われる。焚口からすぐに谷側に灰原が広がっている。床面は焼成室内等が平坦であるのに対して、主軸線上がやや盛り上がっている。

燃焼室（第261・262図）

分炎柱で焼成室と区画される。焚口からはほぼ幅が同じで、窯壁が残存しているところから分炎柱まで測ると約1.5m、被熱地山赤色があるところから測ると1.8mになる。焚口の掘り方から分炎柱までは傾斜も同じなので区別しにくい。また分炎柱から約30cmの範囲に黒灰色硬化面が残っている。床面幅は1.1mである。黒灰色硬化面から外側は赤色になり地山が被熱して変色したものと思われる。燃焼室半割断面には、炭層１層とその上に被熱した赤色層、その上に炭層、そして表面には石が多くみられる。断面の⑭の位置では壁面の立ち上がりが外傾し、分炎柱付近から内傾し始める。燃焼室からは焼台が８点出土している。天井部は残存せず、左右の側壁が高さ約50cm分内湾気味で残っている。

分炎柱（第261・262図）

分炎柱は焼成室の床面が立ち上がる手前に設置されている。分炎柱には木芯痕があり、木芯の周辺にスサの入った粗い粘土をつけてできている。焼成室側からと燃焼室側からスサ入りの粘土を貼り付けて補修をしている。分炎柱は１回目の焼成からつくられている。分炎柱の焼成室側には自然釉が付着した硬化面があり、強い被熱を受けていた状況が確認できる。分炎柱は中心部にくびれがあり、平面形は楕円形をして長軸長約40cm、短軸長約25cmである。中心は焚口から1.6mのところに位置している。断面形は燃焼室側は真っ直ぐに立ち上がり、焼成室側は外傾し天井部へと続いていくようである。分炎孔の大きさは高さが左側は約40cm、右側は入口が約35cm奥で45cm、幅は約50cmである。

焼成室（第261・262図）

分炎柱奥からダンパー手前までの部位を焼成室とする。分炎柱付近が一番幅が張り床面幅は1.2mあり、焼成室の中でも傾斜が緩く14°である。分炎柱の位置から若干開き、煙道部に向かって徐々にすぼまっていく。焼成室の断面は巾着状をしている。⑪のあたりから傾斜が変わり28°になる。ダンパー付近では床面幅が１mになり徐々に煙道部に向かって床幅は細くなっている。床面の半分ほどには最後の焼成時の黒灰色硬化床面が残っているが他の半分は床面がはがれて、被熱で黒灰色になった地山が見えている。被熱地山黒灰色の下は被熱地山黄色その下は被熱地山赤色の順に変色している。床面の被熱範囲は最深で約15cmである。床面はほとんど平坦である。天井部はほとんどが落下しているが、分炎柱付近にはアーチ状に残っている。残りのいいところで床面からは約60～70cmの高さで、地上部のみでは約40cmである。焼成室の側壁にはスサ入り粘土の貼り壁が高さ55cmで残り、この上面には床面から上に20～30cmの範囲で硬化面に指撫で痕がみられる。側壁の断面では貼り壁の重複が焼成室全体（断面⑥⑧⑪の位置）に見られ、改修しているものと思われる。

焼成室から出土している分炎棒は、扁平な舌状をし粗い粘土で成形されている。表面には指圧やナ

図261　深橋前古窯跡窯体側面図・平面図（S=1/20）

図262　深橋前古墳跡窯体側面図・断面図（S=1/20）

デ痕が残っている。

床面に残存していた焼台は２つ、灰釉陶器は７点である。埋土からは焼台が15点、粘土塊が30点出土している。床面直上に張り付いている７点の灰釉陶器はほとんど逆位で、横一列に並んで検出されており、焼台に転用されたものである。埋土から出土した灰釉陶器は18点である。焼成室の上から見た平面積は、幅約1.1ｍ×長さ2.6ｍ＝2.86㎡である。焼台の上から見た平面積は約15cm四方の0.0225㎡となる。床にぎっしり焼台を並べたとして計算すると一度の焼成で使用する焼台の数は127個である。床面に残存している焼台２点を参考にして考えると長軸方向に19個、短軸方向に６個並ぶ。計測した焼台の点数は881個で、焼台と床面が接する部分の傾斜角度を計測したものを見ると20°～35°が多く510個ある。

焼成室から出土した遺物は4004～4019である。4004～4009は碗、4010は深碗、4011～4015は皿、4016は短頸壺、4017・4018は長頸瓶、4018には焼成室内で使用していた支え粘土塊が胴下部に付着したまま残っている。4019は分炎柱の北から出土しており器種不明遺物である。焼成がやや不良で底部外面には回転糸切り痕が残っている。

煙道部（第261・262図）

ダンパーから地山と連なるまでを煙道部とした。煙道部の床面は３面ある。図261・262のｅが一番最初の床面で、この時点ではダンパー（閉鎖施設）が作られていなかったようで、ｅはダンパーの下に広がる。ｅの上のｄの上面には布目圧痕が残り灰釉陶器の碗１点・皿１点が口縁部を下にして張り付いている。ｄ上のａの上面が最終の床面である。傾斜角度はｄの段階では27°でａの段階では20°になっており、床を張り足した際に傾斜が緩くなっている。焼成室の傾斜に近かったものが、自然地形に近く変化している。床面幅は約70cm、長さは1.1ｍである。

ダンパーはまずスサ入りの粘土で作られており、59°の傾斜角度があるが、焼成室の床面からは30°立ち上がることになる。次の焼成の時点で１回目のダンパーの手前・焼成室側に約７個の焼台を横に並べ閉鎖施設を強化している（長さ90cm、幅15cm、高さ14cm）ようである。開口部は不明である。榿ノ木洞１号窯でも同形態のダンパーがつくられている。

煙道部からは碗１点（4001）、皿１点（4003）が２回目の床面上にあり位置を保って出土している。碗の4002も煙道部埋土から出土している。

排水溝（第260図）

窯の形成に際して地形を選んでいるようで、窯の左側は煙道部よりも更に上の尾根側に近いところから、小さい谷になっており自然の排水溝ができている。この谷は砂岩の岩盤で、29Ｘ－28Ｗ－27Ｗという方向に流れており、深さが約50cmあり流土が堆積していた。またこの谷は後にＳＫ３を浸食している。また、窯自体が小さな尾根上にあるため窯の右側も自然に緩やかな谷になっている。本古窯の排水溝は自然の地形を利用しているといえる。

前庭部（第260図）

焚口から谷側約1.1ｍは、傾斜角度が20°と急になっている。平坦面はないが斜面の先に約２ｍの範囲で20cmほど窪んでおり灰層①が捨てられている。燃焼室から焚口の左右がやや平坦面になっている。この平坦面上にＳＫ１～５がある。

ＳＫ灰出し土坑（第263図）

窯の左右には、分煙柱（燃焼部と焼成部の境）とレベルをほぼ同じくして標高81ｍ～79.5ｍ・幅約５ｍのやや平坦なところに廃棄土坑が見られる。窯の右にＳＫ１とＳＫ２があり、２つの土坑は切り合い、ＳＫ２がＳＫ１を切っている。ＳＫ１は1.2×1.0ｍ・深さ25cm、ＳＫ２は1.1×1.0ｍの大きさで深さ20cmである。埋土は茶褐色・黒褐色で灰層と類似する。窯の左側の土坑はＳＫ３であるが、土坑の右側半分が更に深くなっている。ＳＫ３の方がＳＫ１・２を合わせた幅約1.7ｍよりも大きく、横に長い（南北方向に長い）長さ約4.5ｍ・幅約2.3ｍ・深さ0.8ｍの土坑である。ＳＫ３の埋土は明褐色や褐色で、ＳＫ１・２とは異なり、流土に近い土色である。そのため27Ｗグリッドの方に掘りすぎている。ＳＫ３は中央部の底部が被熱し、炭が多く含まれている。ＳＫ１・２・３からは窯壁が出土している。

ＳＫ１からは灰釉陶器20点・焼台22点・粘土塊４点と多量に出土し、ＳＫ２からは灰釉陶器８点・焼台17点・粘土塊１点と炭が多量に出土している。ＳＫ３からも灰釉陶器63点・焼台47点・粘土塊５点と炭が多量に出土している。またＳＫ３の西側（谷側）はやや平坦地になっていて、ＳＫ４・５・６・７・８がある。大きさは0.5～１ｍ・深さ10～40cmのもので灰原の範囲よりも外側にある。ＳＫ４からは灰釉陶器が３点、ＳＫ５は窯壁を含み、ＳＫ８は炭を含んでいた。ＳＫ４・５のにぶい赤褐色土からと周辺の26Ｖ・22Ｉから土師器甕（4086）が出土している。4086は胴部外面に煤が付着しているが内面には付着物がなく、工人が湯沸しに使っていた可能性がある。またＳＫから出土したものは灰原の上層群から出土したものに近く、最終操業に伴う遺物であると思われる。ＳＫ１から出土したものとＳＫ３から出土したものが接合することより、ＳＫ１・２・３はほぼ同時期のものと考えられる。ＳＫ３と灰原の遺物が接合することより、ＳＫ３から転落しているものもあるようである。

4020は皿状焼台で燃焼室から出土、4021～4034はＳＫ１から出土しており、4035～4073はＳＫ２から出土している。4021～4026は碗で、4025は底部外面に円文があり、4026は胴部内面に先の細い工具による線刻があるが何が描かれているかは不明である。4027～4030は皿、4031～4034は長頸瓶、4035・4036は碗、4037・4038は碗と思われるが極端に器高が低い。4039・4040は長頸瓶で大型のものである。4041～4053は碗、4054～4067は皿、4068・4069は長頸瓶、4070は駒爪焼台が付着した壺か甕の底部と思われる。4071～4073は皿状焼台で底部外面には回転糸切り痕が残っている。

4074～4081はＳＫから出土、4082～4086はＳＫ４から出土、4087～4095はＳＫ付近から出土、4074は小碗で底部内面に円文がある。4075・4077・4078・4082は碗で、4076は深碗、4079・4084は皿、4080・4081は皿状焼台、4083は深碗で底部内面に円文がある。4085は長頸瓶、4086は甕で焼成は良好だが砂粒が多く胎土は白い。4087・4088は碗、4089・4090は深碗、4091・4092は皿、4093は大皿で底部内面に円文がある。4094は長頸瓶だが頸部が体部の大きさに比べると短いものが付着している。4095は皿状焼台だが口縁部が内湾し高台が付着する。

灰原（第264図）

灰原は焚き口よりも谷部方向の26Ｗ・26Ｘ・26Ｙ・25Ｗ・25Ｘ・25Ｙ・24Ｗ・24Ｘ・24Ｙグリッドにわたって広がっている。多量に灰釉陶器が出土しているのは、26Ｗ・25Ｗ・26Ｘ・25Ｘグリッドである。焚口から谷裾方向にはちょうど主軸線上がやや窪んで緩い谷になっている。また窯より南西方向（窯の右下の方向）へやや低く緩やかに傾斜している。灰原はまず主軸方向の谷に広がりその後地

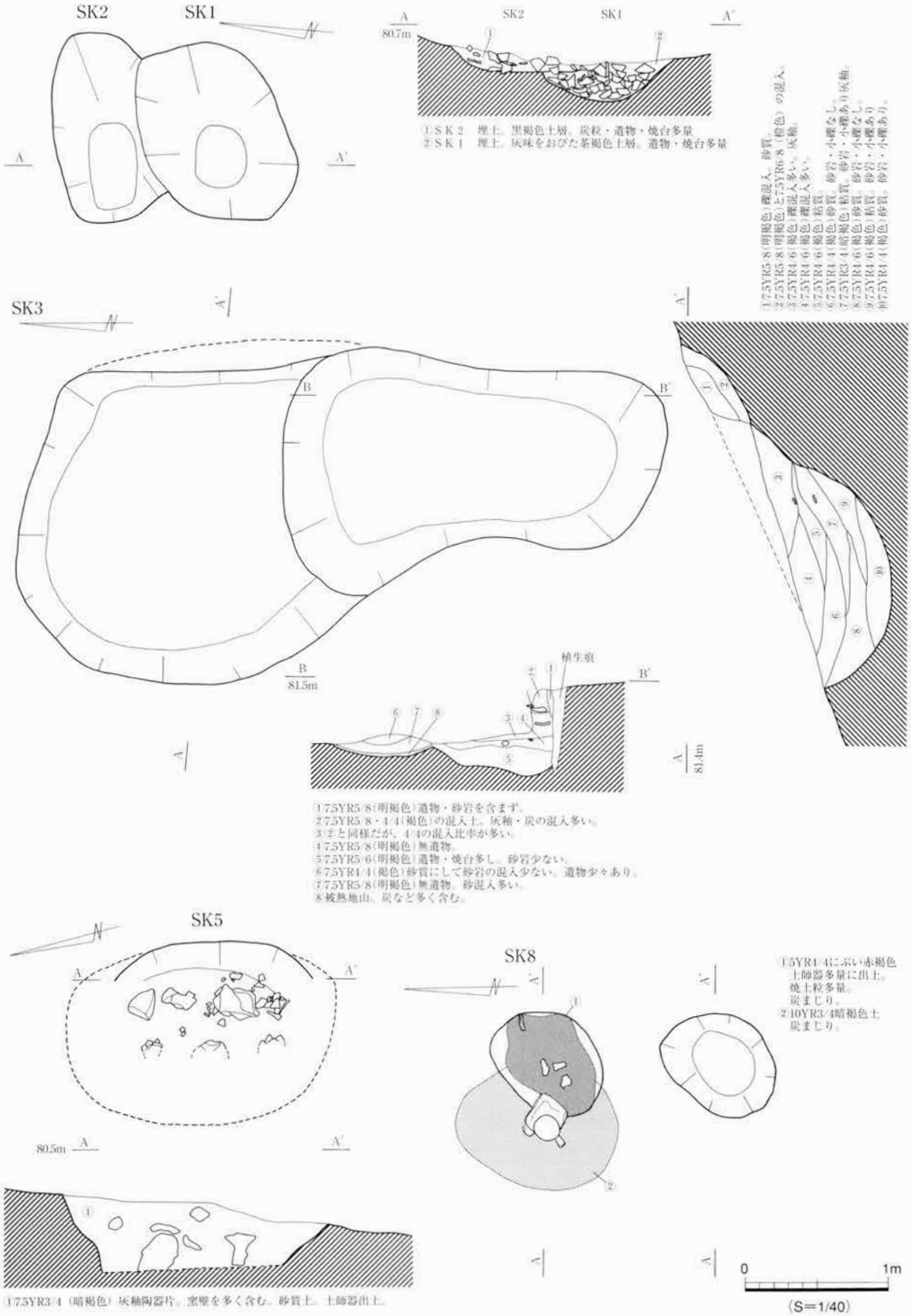


図263　深橋前古窯跡附帯施設SK1、SK2、SK3、SK5、SK8平面図・断面図（S=1/40）

形の傾斜に合わせて広がっている。黒色の灰層は10×15mの範囲で楕円形に厚さ30cmほどで堆積している。谷側は⑦層がＳＤ01に切られている。⑦層は灰原では最も新しいので窯の創業が終了した後のものと考えられる。灰原の新旧関係は（古）⑪→⑨＝①→②→⑩→⑧＝③→④→⑤→⑦（新）である。灰原の層位名は発掘調査時のものをそのまま使用している。堆積状況から⑪,⑨,②,⑩,⑧層を下層群、④,⑤,⑦層を上層群とし、グラフに反映させた。

焚口から谷裾部方向への（27Ｘ杭～24Ｘ杭）土層断面図からは特に多量に遺物・焼台を含む層が２層あり遺物を多量に含む層の上層には炭を多量に含む層がかぶさっている。また26W杭～26Ｙ杭方向の灰原を横方向に切断した土層断面図と合わせてみると大きく３回に渡って廃棄されている様子がうかがわれる。まず、①～③までの層が焚口直下に捨てられ（Ａ）、その後①～③の周辺に④層が捨てられ（Ｂ）、更に④層の上にかぶるように炭を多く含む⑦層が広範囲に谷側へ捨てられている（Ｃ）。焚口から近いところへまずＡが捨てられ、次にＡの周辺部にＢが捨てられ、更にＡとＢを上から覆うようにＣが捨てられている。窯体の近くの谷に近いところから遠いところへと捨てている。

灰原は面積約100㎡、最大で厚さ約60cmで、出土量は整理用コンテナに約50箱である。出土遺物のほとんどは灰釉陶器で、少数であるが土師器甕・須恵器・山茶碗も出土している。土師器甕はＳＫ４・５と周辺の26Ｖ・22ｉから出土している。山茶碗は灰原からは27W・25W・25Ｖ・24W・24Ｙから出土し、その他は灰原の西南方向（26ａ・25ａｃｄ・24ｂ・23ＸＹＺａｂ・22Ｘ）に出土している。須恵器も山茶碗も本古窯で焼成されたものではない。

灰原で出土した炭化材を樹種同定分析に出したところ、灰層下層からはクヌギ節のみが見られるのに対して、灰層上層からはクヌギ節に混じってマツ・コナラ等が見られるようになるという結果が出た。またこれら薪に使った樹木は古窯周辺に自生しているものであるということである。

灰原層位一覧

灰原の新旧関係は（古）⑪→⑨＝①→②→⑩→⑧＝③→④→⑤→⑦（新）である。堆積状況より大きくＡ～Ｃに時期が分けられる。

Ａ①黒褐色（5YR1/3）　：炭粒を多量に含む。赤く焼けた砂岩礫を含む。⑨に近い。
Ａ②にぶい赤褐色（5YR4/3）：赤く焼けた砂岩礫・焼土粒を多量に含む。多量の遺物・焼台を含む。砂粒混じる。
Ａ③黒色（7.5YR1.7/1）　：炭を多量に含む。締まりなし。粘性無し。⑧に近い。
Ｂ④黒褐色（5YR1/3）　：遺物層。多量の遺物・焼台・窯壁を含む。
Ｂ⑤うすい黒色（5YR1/2）　：砂粒多い。④混じる。
Ｂ⑥黒色（7.5YR1.7/1）　：炭を多量に含む。締まりなし。粘性無し。
Ｃ⑦黒色（7.5YR1.7/1）　：炭を多量に含む。締まりなし。粘性無し。焼台を含む。
Ａ⑧黒褐色（5YR1/3）　：炭・焼台・遺物・赤く焼けた礫多量に含む。窯壁をわずかに含む。②より新しい。④より古い。
Ａ⑨黒褐色（5YR1/3）　：炭粒・焼台多量に含む。②より古い。
Ａ⑩黒褐色（5YR1/3）　：⑧より古い。②より新しい。
Ａ⑪黒褐色（5YR1/3）　：②より古い。
Ⅱ層（流土）明黄褐色（10YR7/6）：５mm前後の小礫が多い。締まりなし。粘性無し。

灰原を切る溝（第260図）

24Ｖ・24Ｗ・24Ｘ・24Ｙグリッドで灰原の裾部を南北方向の溝が切っている（ＳＤ01）。幅は約１ｍ、深さ30～40cmで埋土には焼台も入っている。灰原はちょうどＳＤ01に切られたところで終わった感じになっている。また、25Ｗ・24Ｗには幅が約50cm、深さ約10cmの溝が東西方向にあり、灰原の末端を切っており焼台等が出土している。幅の細い溝は太い溝を切っている。２つの溝は一番最後に堆積した灰原の⑦層の末端を切っており、時期は窯の操業が途絶えてからと考えられる。

出土遺物

遺物の多くは白瓷（灰釉陶器）で他に土師器と窯道具に分けられ総数で1999点である。焼き物で白瓷が927点を数えて圧倒的多数を占める。土師器は５点出土している。窯道具は1067点である。

出土遺物の多くは灰原から出土している。燃焼室、焼成室、煙道部からも窯内部の埋土や、床面直上から出土しているが、点数はごくわずかである。

白瓷のほとんどが碗であり、次に多いのは順に皿・長頸瓶・鉢である。他に小数だが段皿・短頸壺・小瓶・蓋がある。焼台も出土しているが駒爪焼台がほとんどで、ほかに皿状焼台もある。

碗と皿は口縁及び高台の形状がほとんど同じで口縁部・底部のみの破片は判別しづらい。

碗・皿には生焼けのものが多く、炎のまわりが良くないところに置かれているものと思われる。それに対し長頸瓶は自然釉がコバルトブルーをしている部分もあり焚口に近い壁際に並べられていたと思われる。碗・皿は重ね焼きしており皿には11枚重なっているものも見られる。

釉薬は、碗・皿は大量に生産したようで口縁部に浸け掛けを施している。それに対して輪花碗・深碗は刷毛塗りを施し、鉢・長頸瓶は筆塗りを施している。

窯道具は輪とち・玉形ぴん・他に胎土は土師器甕に近いが中が空洞で支柱のようなもの（4019）がある。またSKからは土師器甕、灰原や窯周辺からは少数だが山茶碗や、須恵器も出土している。灰釉陶器の出土点数は燃焼室１点、焼成室18点、煙道部３点である。窯体内から出土した少数の遺物のなかでも興味深いものは、長さ約10cmほどの粘土の塊である。ちょうど手の平に入るくらいの大きさの粘土塊を軽く手で握った程度のもので、均一の太さではなく片側端部は細く、もう片側端部の平面は丸く生焼けになっており、やや丸みをおびている。生焼けの感じは焼台の床面との接地面と同じである。よく見ると長頸瓶の胴部の破片が粘土塊の細くなっている端部に付着している。おそらくこれらの粘土塊は、焼成室の中でも側壁に沿うように長頸瓶を並べて焼いた痕跡ではないかと考える。これらの粘土塊は焼成室内から30点、灰原から40点出土している。粘土塊は短いものと長いものの２種類有り、１つの長頸瓶に少なくとも２つ付けたとすると、一度の焼成で、側壁に固定して並べた長頸瓶は多く見て片方の側壁に７点、両側面で14点くらいと考えられる。

粘土塊の他に窯の中に一度にどれくらいの量の製品を詰めたかという計算をする上では、焼台が基準になる。焼台には皿あるいは碗の高台の形が窪んで残っている。高台径が7.0～8.0cmのものは約42点、径8.0～9.0cmのものは64点、径9.0cm以上のものは17点ある。焼台の多くは灰原から出土しており、26Ｗから154点、26Ｘから134点、25Ｗから217点、25Ｘから107点、24Ｗから25点、24Ｘから12点出土している。この他に燃焼室から８点、焼成室から15点出土している。焼成室の床の平面での面積は約2.5㎡である。一度の焼成に使ったと思われる焼台の点数は58点となる。このことから灰原に捨てられた焼台の点数と焼成室及び窯内埋土に残存していた点数とおおよその焼成回数を計算すると約15.5

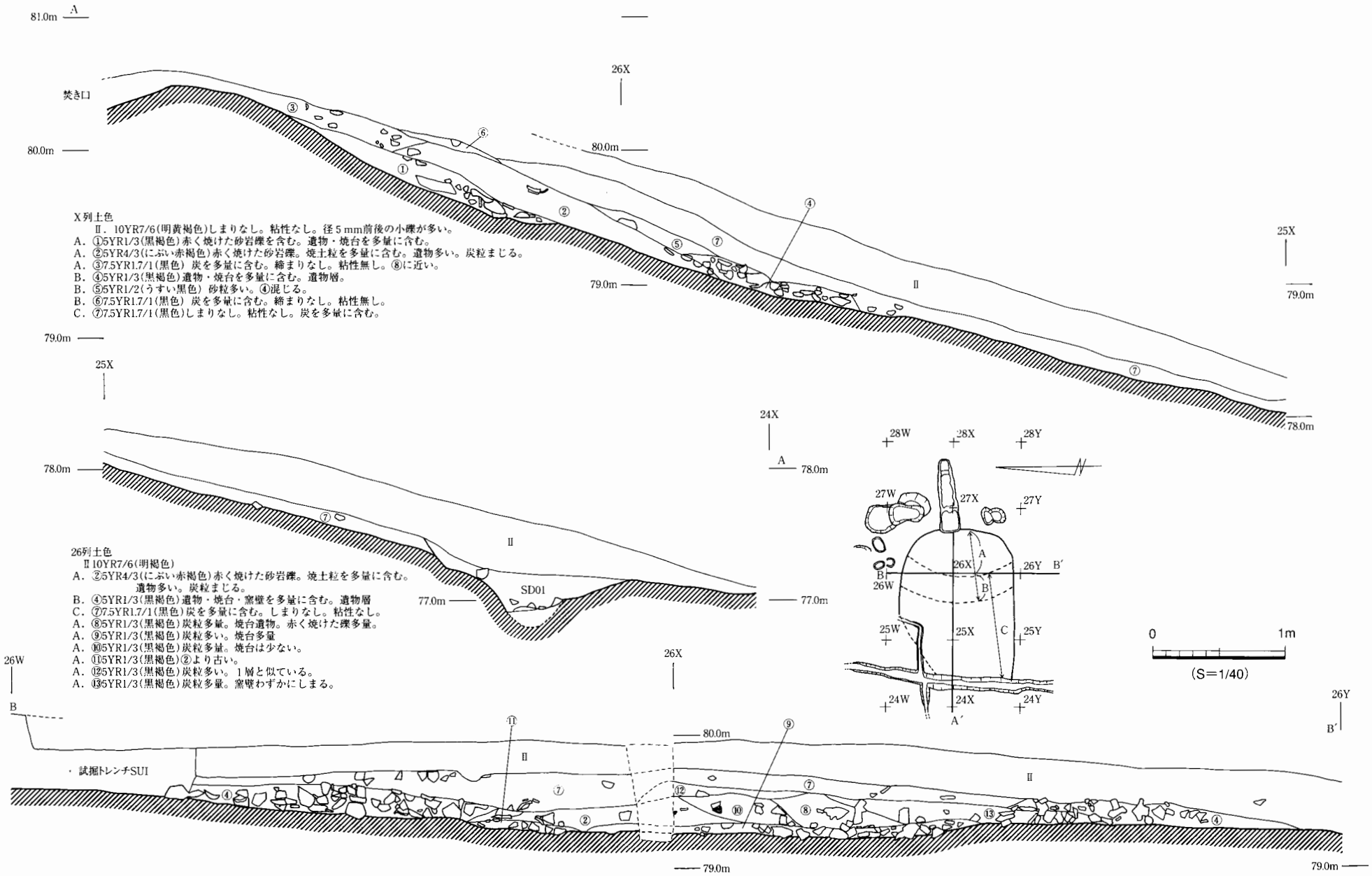


図264　深橋前古窯跡灰原断面図（S=1/40）

回で、おおよそ年１回の焼成では20年間本古窯は使用されていたことになる。このことは遺物の時期からも合致するようである。

Ａ白瓷

白瓷は４表に示すように、碗・皿・瓶・蓋・鉢・壺・甕の７類16種がある。古窯跡とは谷向かいのＤ区から出土している灰釉陶器は瓶と皿状焼台で接合関係を確認したのみだが、灰原の⑦層から出土したものと接合しており、本古窯跡で焼成されたもので新しい時期のものが灰原からＤ区へ運ばれていると考えている。

１．碗類

碗類には①碗、②小碗、③輪花碗、④深碗の４種類がある。碗類は製品全体の46.1％を占め、最も多く焼成されている。426点のうち270点を掲載した。

①碗（266・267、273～276、278～283、290・291・295・296・304・307・309・300図・表36）

体部はわずかにふくらみ口縁部にいたる。口唇部はわずかに外反するものが多いが、外反しないものや、明確に折り曲げ小さな玉縁をなすものもある。

灰釉は体部の内外面の中程より上部に施したものが多い。内面全面に施したものは輪花碗・深碗で刷毛塗りである。施釉方法が、刷毛塗りか浸け掛けかが問題であるが、内外面の施釉ラインがくっきりと濃く出ているものを浸け掛け、刷毛の痕が見えるものを刷毛塗りと判断した。

口径は最小のもので12.0cm、最大のもので19.0cmのものがある。下層群は大小２つにグループ分けできるが、小グループの法量の平均は口径14.6cm・器高4.32cm、大グループの法量の平均は口径16.71cm・器高4.93cmである。上層群も大小２つにグループ分けできるが、小グループの法量の平均は口径14.28cm・器高4.32cm、大グループの法量の平均は口径16.6cm・器高4.99cmである。口径と器高の相関を第266・268図に示した。これによると４段階にグルーピングできそうである。浅碗が主になるようである。高台が高いものほど器高も高く、低いものには小碗や輪花碗があり、深碗の高台が一番長くなっている。高台の高さが両極のものはつくりが丁寧で中間の量の多いものはつくりが雑である。

高台形は、計測方法に示したように細かく８類、大きく４類に分けた。Ａ・Ｂ類は高台外面の下位（接地面から１～２mm）に稜があるものである。Ｇ・Ｈ類は高台の先端が丸いものである。Ｅ・Ｆ類は外面が外傾するもので、Ｃ・Ｄ類は垂直的なものである。断面は内面が凹むものと真っ直ぐなものがある。

碗の中で極小のものと極大に属する17点の底部内面中央に円形の削り込みがある。以下これを円文と呼ぶ。この他に特徴的なものは底部内面の文字５点・ヘラ描き文３点、線刻絵画４点、爪形圧痕２点などがある。

ほとんどは碗同士の重ね焼きと思われるが少数であるが、4281にはぴんが３点付着しており、この他にもぴんは少数であるが７点出土している。

層位の分かるベルトから出土した碗は4096～4142で層位不明の灰原出土碗が4143～4147である。4096は11層出土、4097・4098は９層出土、4099～4106は２層出土、4107～4109は10層出土、4110～4113は８層出土、4114～4132は４層出土、4133・4134は５層出土、4135～4142は７層から出土、4143～4147は層位が不明のものである。

②小碗（第283図・表36）

５点と少数出土している。口径が11.0～12.0cmのものと15.0cmのものがあり小型であるが碗に比べると高台がやや高い。4148～4150が小碗で4150は底部内面に円文がある。

③輪花碗（第278・283・290図・表36）

５点出土している。口径が12.0～14.0cmまでのもので器高は低く小型であるが高台は高い。4151～4153が輪花碗で、すべて底部内面に円文がある。4152は焼成室から、4153は７層から出土している。軽く外から押したような工具痕が見られる。輪花は口縁部がほぼ全周回るものをみると４方向に施しているようである。

④深碗（第273・278・283・292・300・307図・表36）

口径17.0～20.0cmで器高・高台も高く大型のものである。（4244）には底部内面に菊か蓮と思われる陰刻花文がみられる。深碗は16点と少数の出土である。4154～4159が深碗で、4156・4158・4159は底部内面に円文がある。4154は７層から出土している。

２．皿類

皿類には①皿、②輪花段皿③大皿④有台皿の４種類がある。皿類は製品全体の38.0％を占める。

①皿（266・268・269・273～275、278・279・284～286、291・292・295・296・300・304・309図・表36）

体部は碗と同様でわずかにふくらみ口縁部にいたる。口唇部はまっすぐなものと若干外反するものが混在し碗と同様である。354点のうちの99点を掲載した。

皿は施釉の方法が浸け掛けがほとんどで（339点）、中には３点ほど刷毛塗りのものもみられる。口径は最小のもので13.2cm、最大のもので17.0cmである。下層群は小グループ１つのみで、小グループの法量の平均は口径14.58cm・器高2.75cmである。上層群は大小２つにグループ分けできるが、小グループの法量の平均は口径14.76cm・器高2.8cm、大グループの法量の平均は口径19.36cm・器高3.78cmである。高台高は6.5mmのものが多い。9.0mmを超すものは小型と大型の例に限られている。碗の高台高は10.0mm以下のものは皿との区別がつけにくい。高台が高いものほど器高も高く、低いものは器高も低く、大皿・有台皿の高台が一番長くなっている。高台の高さが両極のものはつくりが丁寧で中間の量の多いものはつくりが雑である。

灰原から出土した皿で層位が分かるものは4160～4189で、灰原から出土した皿で層位が不明のものは4190、4191である。4160は９層から出土、4161～4166は２層から出土、4167・4168は10層から出土、4169・4170は８層から出土、4171～4179は４層から出土、4180は５層から出土、4181～4189は７層から出土している。

4192～4196は円文のある皿である。爪形圧痕があるものが８点ある。

②輪花段皿（第286図・表36）

体部は直線的で、口縁部はわずかに外反する。点数が少ないため口径のグルーピングはできないが、13.0cmのものと14.0cmのものがある。4197・4198が輪花段皿である。

③大皿（第279・286・295・304図・表36）

口径17.0～20.8cmと大型で高台が長いのが特徴である。高台形は碗・皿類と同様に分類できる。4199～4204が大皿で4200～4203には底部内面に円文がある。4201は７層から出土、4202・4204は４層

から出土、4203は７層から出土している。

④有台皿（第286・304図・表36）

口径20.0cmと大型で高台が長いのが特徴であり、盤類の脚のように長くて外反する。口縁部も長く外反している。4205は有台皿である。

３．瓶類

瓶類には①長頸瓶、②小瓶、③平瓶の３種類がある。瓶類は製品全体の14.7％を占める。

①長頸瓶（第265・270・271・273～275、277～279、287～291、295・305図・表36）

口縁端部に0.3～0.93mmの垂直に近い折り返した縁帯があり、体部は縦に長いものである。大型のもの（4217,4218,4222～4225）と小型のもの（4206～4210）に分けられる。全体の法量グラフから、小型グループの法量の平均は最大幅13.96cm・胴部下7.4cm、大型グループの法量の平均は最大幅17.00cm・胴部下9.07cmである。台形に近い高台を持ち胴部に丸みをみせてふくらむタイプが増えていくようである。肩部に張りをみせるタイプは少なく32点で胴部で張るものが多く62点あり、大型のものは胴で張るものがほとんどである。口頸部はほぼ垂直に立ち上がってラッパ状に開く。口頸部と体部は別々にロクロ水挽き成形され、後に接合された痕跡が観察できる。体部内面にはロクロ痕を残し、体部外面中程より下部にはヘラ削り整形痕を残している。長頸瓶の底部残存から求めた個体数は70.6個体である。また、碗・皿に比べ接合がいきとどくため特に瓶は時間をかけて接合し、その結果得た個体数は134点で、このうちの88点を掲載した。

高台形は計測方法に示したように４類に分類した。

4206～4212は灰原出土の長頸瓶で層位が不明なものである。4213～4225は灰原から出土した長頸瓶で層位が分かるものである。4213～4218は４層出土のものでその中でも4215は２・８・４層が接合している。4219～4225は７層出土のもので4222は胴部の大きさに比べ頸部が短いが、胴部と頸部を別々に作ったものを付けているが、頸部の長さは4.5～8.5cmのもので極端に長いものがなく、胴が大きくなると胴部の大きさに比べると頸部が短くなる。

注２：底部残存度；破片の残り具合を残存度と呼び、全周するものを12とし、12分の１残るものは残存度１、12分の２残るものは２と計測し（以下同じ）その合計を12で割った数を残存度から求めた個体数と呼ぶことにした。

②小瓶（第290図・表36）

腰部に丸みをみせてふくらみ高台が付かない。頸部は小さく、口縁端部は外反する。頸部と底部破片から個体数は２点が推定できる。底部外面には糸切り痕が残る。4226は小瓶で25Vから出土している。

③平瓶（第290図・表36）

4227は平瓶で口縁部と胴部の一部が接合した。口縁は直角に折れて開く。接合できる底部がなかったため、器高は不明である。4227とは接合できなかったが他にも破片が出土しており個体数は２点あるものと思われる。

４．蓋類（第290図・表36）

4233・4234が蓋で７層から出土している。宝珠状の鈕が付き、天井部の中程よりやや上部に突帯を巡らし、口縁部は８・９世紀に一般的な坏蓋に類似する。天井部外面全体に淡い緑色の灰釉が発色している。碗の身とセットになると思われる。榿ノ木洞１号窯では確認されていないが砂行古窯から２

点出土している（石川県でも出土例があると篠原氏より御教示いただいた）。また榿ノ木洞遺跡の17号住居跡から類似したもので天井部内面中央に沈線による円文があるものが出土している。

５．鉢

①鉢（第290・300・305図・表36）

口径は25.5～33.6cmで、最大の碗の口径より６～10cm程大きい、器高も高く大型品である。口縁は直角に折れて開き、高台形は碗類のF3類と同類で高い。口縁から高台まで接合できたものは古窯跡とは谷向かいのＳＸＤ15から出土している（4336）。施釉方法は筆塗りである。

4235は灰原出土の鉢の口縁部である。

②小鉢（第290図・表36）

4236は小鉢でやや焼成不良、４層出土で１点のみである。

６．壺類

①短頸壺（第290・308図・表36）

口縁部の破片が８点ある。口縁部は短く垂直に立ち上がる。4228は口縁部から肩にかけての破片である。

②壺（第277・290・305・308図）

4229・4230は壺の底部破片である。4230は高台が付くが4229は高台が付かず平底である。

７．甕類（第290図・表36）

4231・4232は甕の口縁部破片である。

８．その他（第305図）

4334は子持ち器台の一部と思われる。

Ｂ土師器

①甕（第278図）

口縁部は外反し口縁端部に縁帯がつく。外面には煤が付着している。粘土継ぎ痕がはっきりみられる。砂粒が目立ち灰白色を呈する。22I、25V、26Vグリッドの灰原周辺からとSK4・5から出土している。

②壺（第309図）

胴部と底部（4373）の破片が１点づつ出土している。

Ｃ．窯道具

とち類、ぴん類、焼台類、分炎棒がある。

１とち類

①輪とち（第295図・表36）

輪とちは数が少なく24点のみ出土している。手づくねの扁平な粘土紐を円形にしたもので、つなぎ目が見えるものがある。胎土は緻密で白瓷質である。直径は4.5～7.5cm、厚さ0.5cmの範囲である。

4269～4275は輪とちで4271～4275は７層出土である。

２ぴん類

①玉形ぴん（第296図・表36）

玉形ぴんは球形粘土を両手で押した碁石形のもので７点出土し、碗の底部内面に付着した例（4281）

がみられる。粗雑な粘土を使用している。4281は４層出土の碗でピンが３つ付着している。4282はＳＫ３出土の皿でピンの付着痕が３つある。

３焼台類

①皿状焼台（第273・277～279、293～295・305・309図・表36）

蓋を回転糸切り面を下にして使用した焼台のようで、駒爪焼台との接地面が黒くなっている。これに似たもので小さめのものが須恵器の窯道具に使われており、須恵器の技術が使われているようで胴下部にはヘラ削りが施されていない。皿とは異なり口縁端部まで器厚が厚く、底部外面は無調整で糸切り痕が残存している。回転糸切りがほとんどだが、静止糸切りも少ないが見られる。4095は唯一高台が付く。口径は14.0～22.0cm、器高は2.4～4.9cm、底径は5.2～13.0cmの範囲にある。内面に釉薬が厚く付着し、熱によるゆがみが激しく、高台の付着痕が認められるため焼台の役割を果たしたものと判断した。口縁部の形状から大きく２種類に分けられる。口縁部が内傾するもの15点とそれ以外の碗・皿と同類のa～e類が49点である。降灰の状況から見て口縁部を上にした状況で焼かれていると考えた。81点のうちの30点を掲載した。

4252～4268は皿状焼台である。4252・4253は２層出土、4254は８層出土、4255～4257は４層出土、4258～4264は７層出土、4265～4268は層位不明のものである。底部内面に付着している重ね焼きした器種の高台痕の大きさから、ほとんどが碗・皿用に使用された思われるが、4253・4257は大皿や鉢の大型品に使用されている。

②駒爪焼台（第277・295図・表36）

断面が三角形を呈するもので、881点が出土している。製品と床面の間にあって角度調整を主な目的としたものである。焼火度の違う面が１面あり床面との付着面と思われる。窯内の床面には原位置を保つものが２点残っていた。窯体内から24点、灰原からは804点出土している。焼台に皿・碗が付着したまま出土したものの中には、はずれてしまうものもあり、このことからよく乾かした皿・碗をまだ柔らかい粒の粗い粘土の塊に押しつけたものであることがわかる。

4276～4279は駒爪焼台が付着したものである。4276は碗が付着したもので７層から出土、4277は皿が付着したもので２層から出土、4278は５層から出土しており、割れた大皿を焼台として利用したもので、大皿の底部内面に付着している高台痕から碗・皿用に使用している。4279は皿状焼台が付着したものである。

４粘土塊（第287・295図）

長頸瓶の胴部に、粒子の粗い粘土の塊を手で握っただけのもので、焼火度の違う１面の断面からみると窯壁の側壁に付着させて支えに使ったと思われる。焼成室から多く出土している。またこの粘土塊に付着しているのはほとんどが長頸瓶の胴部であり、4018のように接合できたことから長頸瓶は側壁よりに並べられていたと判断した。また、瓶・壺の底部外面には自然釉が付着しており碗・皿のように駒爪焼台にはのせずに高台の位置で３カ所づつ、粒子の粗い粘土を手で握った程度の塊を置いている（4280）。これらのことから、粘土塊は長頸瓶の焼成用に使用されていたものと思われる。

4280は長頸瓶の底部に粘土の塊が２つと碗か皿の胴部破片１点が床面との間に付着している。７層から出土している。付着している床面には少なくとも２回の張り替えがみられる。

５再利用焼台（第309図）

甕の胴部を焼台として再利用している（4376）。

６支柱（第273図）

4019は胎土が土師器甕（4086）に近いが、中が空洞で支柱のようなものである。大きさは回転糸切り痕のある底径が6.5cm長さが14.1cmで、一見メスシリンダーのような形をしている。口縁は外反し、口縁帯は4086の甕に類似するようである。このことからも上になにかをのせるようなものではないかと思われる。分炎柱の北側の焼成室内から出土した。

７分炎棒（図版106）

扁平で舌状の形をしている。スサ入りの粗雑な粘土を使用している。指圧、撫で痕が残っている。９個あり、高さが16.0～27.5cmで、底面形は10.0～20.0cmの長方形である。底部には床面が付着し、体部に自然釉が多く溶着する。特に焚口側を向いていたと思われる方向に多く自然釉が溶着している。

円文のある遺物（第274・278～283・285・286・291・304・307・308図・表36）

最後に付けられているためヘラ記号の一種で、技法上の意味はないと思われる。線刻状にほどこされるものと平面的に削られるものとがある。

底部内面に円文のある機種は、小碗・輪花碗・深碗がほとんどである。まれに碗で内外面ともに円文が見られるものもある。碗426点中17点、皿354点中15点の割合である。

陰刻文のある遺物（第274・292・309図・表36）

陰刻文のある遺物は12点ある。陰刻文は手本を真似ているにしてもどれもかなり簡略化されているため、解読はかなり困難である。

4026はＳＫ１から出土しており底部内面に何の文様かはわからないが陰刻文がみられる。4243は碗で９層出土、胴部内面には５つの雲と思われる陰刻文がみられる。4244は深碗で２層出土、底部内面に花の陰刻文と円文がみられる。この花は陰刻花文碗でよくみられる文様である。4245は焼成不良の皿で７層から出土している。陰刻文は昆虫（蝶？）と花のようにみえる。4371は底部内面に花の陰刻文がある。

4246～4251は底部内面に文様や文字でもない線刻がみられる。4246～4248は碗、4249～4251は皿で4249は４層、4251は８層から出土している。4248は割れた後に焼台として使用している。

文字のある遺物（第291・309図・表36）

文字のある遺物は４点ある。4238は輪花碗で２層と７層が接合している。底部内面に「大府ヵ」の文字と円文がみられる。4239は碗で２層から出土し、底部内面に「大」の文字がみられる。4240は碗で底部内面に「大□□□」の文字がみられる。文字は細い金属の先でかかれたと思われる。4241は碗で底部内面に「□」の文字がみられる。4242は皿で細い金属の先でかかれたと思われる「□」の文字がみられる。4372はD区から出土しており底部内面に「大」の文字がある。

底部内面に文字があるのもので「大」の文字が多く３点ある。榿ノ木洞１号窯からも「大」の箆書き文字が出土している。文字のあるものは碗426点のうち５点、皿354点のうち１点、瓶134点のうち１点の割合である。いずれも焼成以前に刻まれたものである。

あとの１点は4237は長頸瓶で頸部に「瓮ヵ」とある。焼成以前に文字を刻んでいる。「瓮」と「瓮」は別字である[注1]とするが、本古窯のものははっきりと区別がつかない。他の例では、石神遺跡出土須恵器壺の底部外面に「瓮五十戸」とヘラ書き銘があり「ほとぎのさと」と読むことができ「須恵器制作者の里」を意味するのかとしている[注2]。尾張元興寺跡の例は大型鉢口縁部外面に「瓮」とヘラ書きされ税目名よりも地名ではないかとしている[注3]。丹波周山窯址の例は須恵器直口壺の肩部外面に「大家瓮」の箆書きがある[注4]。総持寺遺跡の須恵器甕口縁部外面に「□調□」があり、調に続く文字は「瓮」と推定している[注5]。

荒井氏は、石神遺跡の例は地名とし、尾張元興寺跡と総持寺遺跡の例は貢納用に器名を書いたものと想定し、器型はいわゆるカメであるとし、その用途としては長屋王家木簡「木上進焼米二瓮」「進出物橡一斛茶一荷鯛鮓一瓮」「交易進瓮七口」など六点あり、焼米や鯛鮓が納められたことが知られる[注6]としている。

石神遺跡、尾張元興寺跡出土の文字が筆順もしっかり観察できるしっかりしたものであるのに対し、本古窯出土の「瓮ヵ」の箆書き文字はかなり文字も崩れ筆順もはっきりしないため、「瓮」か「瓮」かがはっきりとしない。長屋王家木簡にあるのは「瓦」の上の字が「公」とはっきり書いてあるのが図版で確認できるのが３点、「瓦」の上が「分」と確認できるのは１点ある[注6]。

本古窯のものは税目名か地名か器名かのうちでは器名の可能性が高く、貢納用である可能性が高いが、中央へなのか周辺の寺院等へなのかは不明である。例えば時代は異なるが、船山北３号窯[注7]出土大型盤底部内面に「奉施入　祐向寺　建久五年十月十八日」の刻銘があり、建久五年（1194年）に岐阜県各務原市の窯で焼かれたものが、岐阜県本巣郡に存在したと推定される祐向寺に某かが祈願のために寄進したと思われる例があり、本古窯出土の長頸瓶等も周辺寺院等への寄進用かとも考えられる。

「瓮ヵ」の箆書きのある長頸瓶は、他の長頸瓶に比べ作りが丁寧である。大きさは小さいグループに入り、「瓮ヵ」を「瓮」と読み酒を入れる器として貢納したには小さいようでもある[注8]。尾張元興寺跡、丹波周山窯出土の瓮の箆書きのあるものは壺で、大きさは底径約10cm、器高約20cmであり、甕というほど大きいものではない。この点では本古窯出土の箆書きのある長頸瓶も同じことがいえる。

注１　荒井秀規「平瓶と平居瓶」註１「湘南考古学同好会々報」77　1999。
注２　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」16　1986。
注３　名古屋市教育委員会「尾張元興寺跡発掘調査報告書」1994。
注４　京都大学文学部考古学研究室「丹波周山窯址」1982。
注５　大阪府教育委員会「総持寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ」1997。
注６　奈良国立文化財研究所『平城京木簡一長屋王家木簡一図版』1995。「土師女三人瓮造女二人雇人二」「木上進焼米二瓮」
奈良国立文化財研究所「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告」図版編1995。「土師女三人瓮造女二人雇人二」「十月八日瓮直四文知若」「泉坊進上瓮子一古」
注７　岐阜県文化財保護センター「舟山北古墳群・舟山北古窯跡・舟山北遺跡」2000。
注８　荒井秀規「平瓶と平居瓶」に、天皇元服儀の儀式書『西宮記』に「陶平瓶一口、納七升、付鳥頸。召造酒司醴入之」とあり、七升は今量三升二合弱とある。

窯出土遺物のまとめ

灰原はベルトを残して掘削しており、層位の分かるものはベルトから出土しているもののみで、それ以外はグリッドで一括して取り上げている。上下の層位で接合しているものもあり、グラフでの上層群・下層群の分け方は接合した破片の大きさが大きい方の層位に含めている。

接合して口縁部から高台までが一部でも接合できたもののみを１個体として数え、接合結果より数えることができた個体数としている。長頸瓶についてはかなり時間をかけて接合できているが、碗・皿には充分な時間をかけることができていない。個体数は接合で１個体と数えた数、底径残存率から計算した数、重量の平均から計算した数、口縁残存率から計算した数の順に少なくなっている。文章中の点数や割合の数字は接合できたものを計測しているため接合から計算された一番多い数値を使用している。

器種は碗・皿・長頸瓶が主であるが他に点数が少ない特殊器種は小碗・輪花碗・深碗・輪花段皿・大皿・有台皿・蓋・鉢・小瓶・平瓶・壺・甕・子持ち器台等がある。

碗は形状で大きく２つに区別することができる。一つは底径が口径より小さく器高が深く胴部が直線的に高台の幅の位置から立ち上がるものと、もう一つは底径が口径に近く大きくて器高が浅いものである。新しくなると器高が浅くなり皿と区別しにくい器形になっていくようである。高台の断面も真っ直ぐのものより三日月形の崩れた内湾するものが多い。碗は内湾するものが73％・真っ直ぐのものが26％、皿は内湾が44％・真っ直ぐのものが56％である。

高台の貼り付け位置の違いでは糸切りした範囲に高台がつくものから胴部に高台を貼り付ける傾向に変わっていくようである。碗は底部に貼り付けるものが84％、胴部に貼り付けるものが16％で、皿は底部が61％・胴部が39％、長頸瓶は底部が47％・胴部が53％である。

皿は碗に比べ高台が低いと言える。皿の高台の高いタイプが碗の高台の低いタイプと高さが同じくらいである。碗・皿は高台の高低で大きく小・中・大の３つに分類できる、高台の高低は胴部の高低にも関連している。深碗の高台はまっすぐで長いものがほとんどである。

口縁部の形状でまっすぐなもの（a類）は大量に作る碗・皿には少なく深碗・輪花碗・大皿に多い。深碗で口縁部が長く外反するものは（仏器を模倣したものか？）焼成室・ＳＸＤ08・ＳＸＤ15から出土しており、新しい時期のものと思われる。これと似た口縁は有台皿にもみられる。

高台の形状がまっすぐのものは少ない。碗・皿ともに高台の形状が丸みのあるものG・H類が一番多い。底部外面に回転糸切り痕が残るのは碗が１点、皿が１点、長頸瓶が９点で右回転である。

碗・皿の口縁部と高台の形状のセット関係は口縁が丸みを持つ形状で高台も丸みを持つ形状のセット関係が一番多い。

円文のあるものは少なく約25点の内の１点の割合であるが、記号の一種と思われる。文字・線刻絵画のあるものも約100点の内の１点の割合である。文字は「大」が多く、他に「瓮カ」がある。絵画はかなり省略されておりおそらくは花・蝶・雲であると思われるが、何を描いているかがはっきりとはわからないものがほとんどである。この点も本古窯出土のものが灰釉陶器の中では新しい時期のものとする理由である。

灰釉陶器と須恵器の違いで大きな特徴の違いでは、灰釉陶器は基本的に体部外面の中程より下部をヘラ削りすることにあるが、碗ではヘラ削りを施すものが59％で、施さないものが41％で、皿ではヘ

ラ削りを施すものが41.5％で、施さないものが58.5％である。碗・皿ともにヘラ削りを施す位置はほとんどが高台との境に近い体部外面下部で（75％）体部外面中程の高さまでヘラ削りを施すものは25％である。本古窯のものは徐々にヘラ削りをしなくなるという新しい要素を持っている。

長頸瓶は底部から肩部まで作ったものに、口縁部から頸部を別に作ったものをくっつけている。頸部の貼り付け方法は、下になでつけるものが35％・横になでつけるものが65％である。焼成方法は粘土の塊で支えるように並べ、自然釉が青色のものが多いので焚口に近いところで、粘土の塊が底部以外に肩部にも付着していることから側壁に近い所に並べられたのではないかと思われる。長頸瓶は肩で張る小型のもの35％と胴部で張る大型もの65％の大きく２つに分けられ、胴部で張る大型のものが主流になっていくようである。

長頸瓶の口縁形はほとんどが上と下に引き出すもので、高台形は基本的には台形をしており高台の底部が浅く削られているものがほとんどである。

施釉方法は、量産の碗・皿はほとんど浸け掛けで、刷毛塗りは特種な器種の輪花碗・深碗・大皿にみられる。長頸瓶・鉢は筆塗りである。釉薬の範囲がはっきりと分かるものを浸け掛け、釉薬の範囲がはっきりとしないもの（刷毛の痕の見えるもの）を刷毛塗りとした。浸け掛けの割合は96％以上である。焼成良好の割合は碗が84％で皿が98％で、焼成不良の割合は碗が16％、皿が２％である。浸け掛けが施される位置は碗では口縁部までが43％・胴部の半分までが49％・胴部の下部までが８％で、皿では口縁部までが38％・胴部半分までが50％・胴下部までが12％である。

碗・皿で底部外面が黒いものは駒爪焼台に付着していたと考えられるが、灰原から出土しているものの179点が底部外面が黒く、また焼台で遺物の付着しているものは60点出土している。

4283はB区から出土している皿、4284はＳＫ３から出土している碗で、底部内面に窯壁が付着しており重ね焼きの一番上にのっていたものである。4285～4290は碗の重ね焼き状況、4291～4298は皿の重ね焼き状況の分かるものである。4285は４層出土で口縁と底部のセットがやや外反する口縁とC2・G2の高台である。4286は４層出土で口縁部がｂとｄが重ね焼きされている。4288はＳＫ３出土で高台がG2とC2が重ね焼きされている。4291は７層出土で皿が11枚重なっている。口縁と底部のセットはとeG・ｂG・ｃG・ｃH・ｃFがある。4292は皿でｃGとｂCが重ね焼きされている。4293は４層出土、4296は２層と７層が付着している。以上のことから口縁と高台の形状のセット関係には新古の違いがはっきっりでるものがみられないということがいえ、焼成期間中に大きく形状を変えていないといえる。

輪とち・ピン（4281・4282）が少なく、碗・皿・鉢等は重ね焼きをするものがほとんどである。駒爪焼台に付着している遺物は碗・皿がほとんどである。碗が付着しているものは窯内の傾斜角度が20～40度にあったものが多く、26Ｘから多く出土している。皿が付着しているものは窯内の傾斜角度が20～30度にあったものが多く、25Ｗから多く出土している。碗が口縁部を下にして駒爪焼台に付着しているものも１点出土している。また大皿が付着しているものも１点出土している。

高台が長いものは時期が新しいと思われる。また口縁部が大きく折れて外反するものも（深碗・有台皿・鉢）新しいと思われる。

古窯の対岸のＤ区から出土しているものには偏りがあるようである。Ｄ区出土のものはＳＫ１・２・３から出土しているものと類似するようで、時期も新しいと思われる。ＳＸＤ15出土のものと灰

原出土のものが接合しており、灰原に廃棄したものの一部を運んでいるものと思われる。ＳＸＤ15出土遺物と灰原出土遺物の接合をみたのは瓶・鉢・皿状焼台のみで、碗・皿は点数が多いため確認していない。焼成室出土のものとＳＫ３出土のものとＳＫ１・２出土のものが接合している。焼成室出土のものと、窯の両脇にあるＳＫ１・２・３出土のものはほぼ同時期のもので、窯の廃絶時に近いものと思われる。

線刻絵画は花鳥文がかなりくずれたもので、上層群と下層群の両方にみられ少量はずっと作っているようである。器壁もK90は薄くO53では厚手になるが、本古窯のものは厚手といえる。

大量に生産している碗・皿・瓶は、大きく２形式に分けることができる。このことから操業年数は20年くらいと思われる。碗・皿が多く、市場で買える民具を中心に焼いている。

法量グラフからいえることは、碗・皿では上層群と下層群で法量分化が見られる。碗の高台は下層群から上層群へは幅が広くなり低くなっていく傾向がでている。口径と器高の法量グラフと上層の高台の法量グラフから、小・中・大の３グループあるといえる。口径と器高のバラエティは高台のバラエティと似てくる。瓶の最大幅と最大幅から下の胴部高の法量グラフから上層群ではたくさん焼いており小・中・大の３グループに法量が分化する特徴がある。瓶の高台のグラフでは、下層群は幅１cm、高さ0.7、0.8cmが中心で差がないが、上層群は幅が小・中・大と３グループに分かれるようである。皿状焼台は法量が多様化している。下層群にない小型のものが上層群で見られる。皿状焼台の上にのせる碗・皿が多様化すれば下に置く皿状焼台も多様化するといえる。

床面が残っているのはおおよそ半分くらいである。床面を断ち割ったところ、黒灰色硬化面が残るのみで、床面の張り替えは確認できなかった。煙道部では２回の張り替えが確認できた。第262図①煙道部断面のｅが一番最初の床でこの時点ではまだダンパーは作られていなかった。次がｄで、ｄの上には布目圧痕が２つ残存している。黒灰色硬化面が最後の床面である。⑧と⑪では窯壁が内部に倒れてきているものの外にも窯壁があり、窯壁も外側に張り足している可能性がある。煙道部の床面の張り替え回数から４回の焼成が考えられ、徐々に進化させている。残存状況が良いとはいえずこのまま操業回数にはつながらないが、おそらくは10回以上は焼成しているものと思われる。

窯の構造からみると分炎柱があることからK90より新しく、O53までの間の時期になる。また本古窯跡からは焼台が881個出土しており焼成回数は約15回と考えられるが、K90・89からは焼台は800個も出土していない。K90は須恵質の甕が多く、さやに入れて焼成する。窯の入り口が狭く分炎柱の天井の一部を壊して出し入れしている可能性がある。

本古窯出土の遺物は全体的に作りや焼成が荒く、碗は器高が低く口径と底形の大きさの差が少なくなってきている。高台の張り付け位置も底部よりも胴部に張り付けているものが多い。本古窯出土灰釉陶器の時期は、口縁部や高台の形、高台の貼り付け位置、形状から比較すると本古窯の操業開始は黒笹90（K90）号窯（９世紀後半～10世紀前半）の終末期にかかり、折戸53（O53）号窯（10世紀前半～10世紀後半）と同時期に主に操業し、東山72（H72）号窯（10世紀末）の時期近くに終焉しているようである。本古窯の操業年数は９世紀末～10世紀中頃までの約50年間くらいと考える。

周辺古窯との比較

砂行古窯とは遺物・窯道具・焼台に類似点が多いが、砂行古窯の方が古くから焼成が始まっているようで、本古窯に無いものが多い。焼台や窯道具で異なる点は、本古窯には窯道具で輪とち・ぴんがあるが、つくや橋状とち・Ｔ字状とちが無いことや、木葉痕のある駒爪焼台が無い点である。また遺物で砂行古窯にあって本古窯にない主なものは火舎・耳皿である。興味深いことに得意な例で砂行古窯と本古窯が一致する点がある。特に遺物に見られる一致点であるが、輪花碗・突帯をもつ蓋・円文のある碗があることである。逆に砂行古窯に無いが本古窯にあるのは陰刻花（蓮か？）文の他、飛雲・虫（蝶か？）等の陰刻文のある皿や碗があることである。陰刻文が見られる点では榿ノ木洞１号古窯に類似している。また榿ノ木洞１号古窯からも円文のある碗が出土している。榿ノ木洞１号古窯は砂行古窯と出土遺物や窯道具等が類似しているが、先に挙げた突帯をもつ蓋は榿ノ木洞１号窯からは出土していない。以上のように遺物の面から考えると、本古窯は榿ノ木洞１号窯・砂行古窯よりも創業は遅く、榿ノ木洞１号窯からの工人の移動および、砂行古窯の影響も受けているようである。

榿ノ木洞１号窯・砂行古窯からは火舎が１点ずつ出土しており、仏具も少々出土しているようである。

深碗は底部内面中央に径2.7cmで約6.7mmほど削って円形に窪んでおり、底部の回転糸切り痕調整の際に残った器具痕の可能性も考えられる（砂行古窯報告の円文に類似・黒笹５・90号窯の段皿の円形沈線文に共通か？）。またこの円形のくぼみを持つものはつくりが丁寧な優品である。

灰原から出土した炭化材の樹種同定を灰層の層位別に行ったところ、灰層下層（Ａ・Ｂ）から出土した樹種はクヌギ節で、その上層（Ｃ）になるとクヌギ節にコナラ節やマツ属が混じってくるという結果がでた。周辺に自生していたものを薪として利用している可能性が考えられが植生の２次林化が見られるほど植生に影響するくらいの伐採は本古窯１基だけでは考えにくく、砂行古窯や榿ノ木洞１号古窯にも供給していたと考えられる。このことから深橋前の森は榿ノ木洞１号古窯、砂行古窯の薪取り場で、伐採後の土地に窯をつくったのが深橋前古窯ではないかと考えられる。窯の磁化測定と考古地磁気推定年代測定の結果は灰釉陶器の時期からはかけ離れて古い時期がでており、今後のデータの蓄積が必要とのことであった。また、胎土分析結果を榿ノ木洞１号窯・砂行古窯と比較すると、本古窯の灰釉陶器の粘土は古窯周辺の粘土を使用しており、砂行古窯のものに類似し、榿ノ木洞１号窯のものとは異なるという結果がでた。

本古窯の全長は榿ノ木洞１号窯、砂行古窯と比較すると小型である。本古窯は分炎柱を有し、焼成室の傾斜角度は28°である。遺物の面からは器種が少なく碗・皿の量が圧倒的に多いこと、遺構から見ると据え置き式の大きな分炎柱が付くことから、灰釉陶器の編年から見ると新しい時期に入り、折戸53号窯式に類似し10世紀前半に創業していたと考えた。碗・皿の量産がみられ消費者も一般の本古窯周辺の人々に広く使われたと思われる。

本古窯周辺にはほぼ同時期の榿ノ木洞１号窯（関市教育委員会発掘調査・10世紀前半美濃須衛窯白瓷Ｉ期・黒笹90に比定・美濃窯光ヶ丘１号窯に伴行）・砂行古窯（1994関市教育委員会発掘調査）・末洞古窯・田之洞古窯・池之洞古窯がみつかっており、関市の北部は９世紀後半から小規模ながら灰釉陶器の生産地として栄えていたようである。

深橋前古墳出土の灰釉陶器

4299は深橋前古墳石室内から出土した碗である。石室入り口付近から細かく割れた状態で、埋土の表面に炭とともに出土している。深橋前古窯で焼かれたものと考える。

参考文献
宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
齋藤孝正1996「美濃の灰釉陶器」『日本土器事典』雄山閣
恵那市教育委員会昭和58『正家１号窯発掘調査報告書』

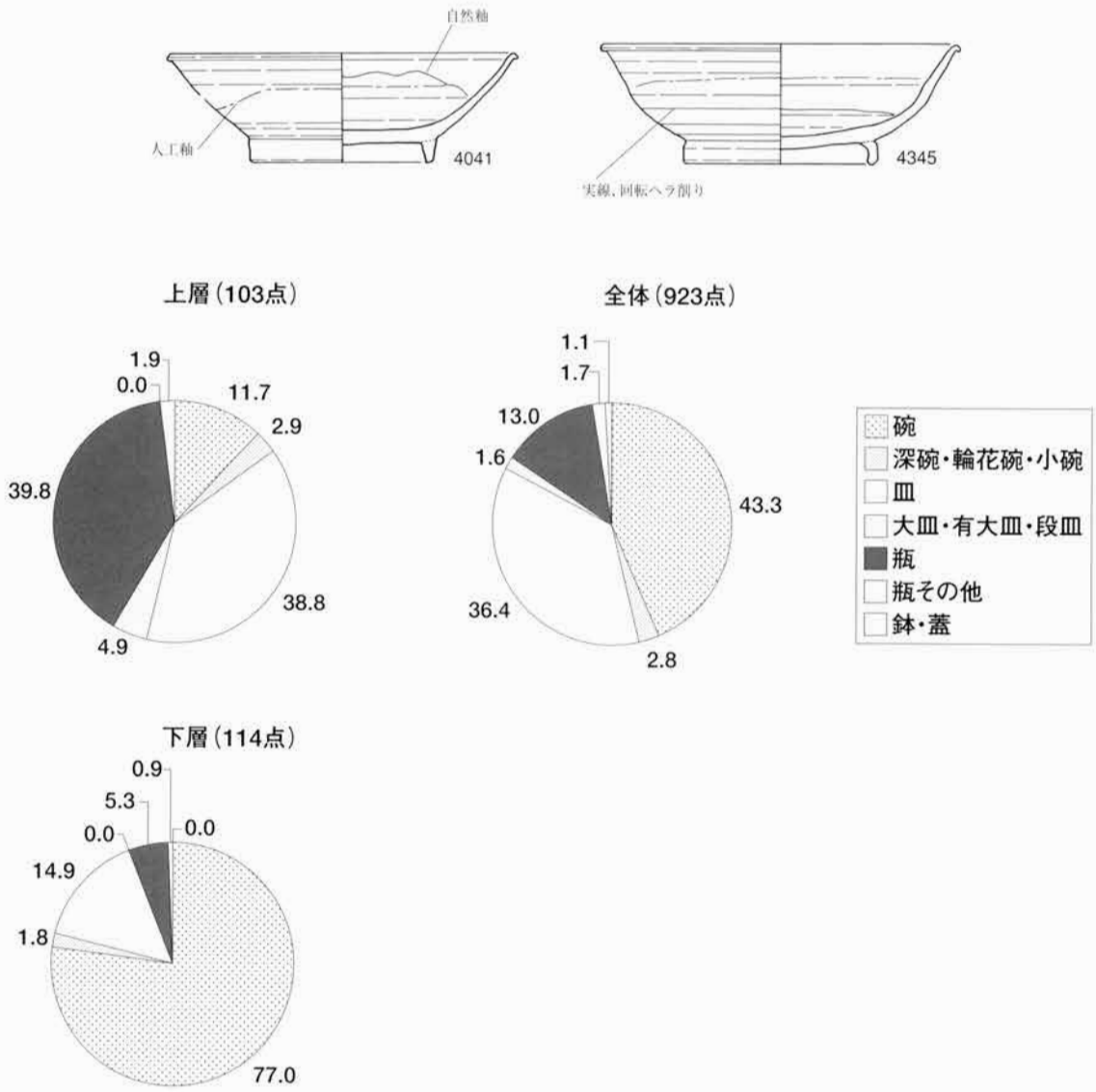


図265　器種別割合グラフ

深橋前古窯出土遺物　固体数

器種	上層	下層	灰原層位不明	窯体内	ＳＫ	Ｄ区	SXD15	計	円文	文字有	ヘラ描	絵画有
碗	12	88	198	8	48	25	21	400	8	4	3	2
深碗		2	3		1	2	1	9	4			2
外反深碗	1		1	1	1	3		7				
小碗			5					5	1			
輪花碗	2		1	1	1			5	4	1		
碗類計	15	90	208	10	51	30	22	426	17	5	3	4
皿	40	17	200	6	33	25	15	336	7	1	3	1
大皿	4		2			1	4	11	8			
有台皿	1		1				1	3				
段皿			2				2	4				
皿類計	45	17	205	6	33	26	22	354	15	1	3	1
長頸瓶	41	6	47	7	15	4		120		1		
小瓶			2					2				
平瓶			2					2				
短頸壺			3	1		3	1	8				
甕		1	1					2				
瓶類計	41	7	55	8	15	7	1	134		1		
鉢			1			4	3	8				
蓋	2							2				
子持器台						1		1				
土師器甕・壺	1			1	1	2		5				
輪とち	5	2	15			2		24				
皿状焼台	18	4	36	1	7	9	6	81				
駒爪焼台	5	3	796	24	53			881				
粘土塊	6	1	33	31	10			81				
その他計	37	10	881	57	71	18	9	1083				
総合計	138	124	1351	81	170	81	54	1999	32	7	6	5

個体数

器種	接合	口縁残存率	底部残存率	重量	平均重量
碗	400	248.75	564.90	240.80	216g
深碗	16	6.75	13.50	10.40	339g
小碗	5	1.30	3.90	2.58	157g
輪花碗	5	2.75	4.50	4.02	180g
皿	336	159.05	310.00	205.20	164g
大皿	11	3.74	5.92	4.45	361g
有台皿	3	0.58	0.90	1.42	467g
段皿	4	0.67	1.90	1.50	140g
不明		1.75	12.20	74.12	164g
瓶	120	54.15	70.60	82.94	802g
小瓶	2	0.17	1.25	0.89	293g
平瓶	2	0.92			
壺	8	0.75	2.75	2.73	1018g
甕	2	0.17			
鉢	8				
蓋	2				
子持器台	1				
皿状焼台	81	33.29	52.08	42.21	375g
計	1006	514.79	1044.40	673.26	

底部残存率から算出した個体数

器種	接合分	破片焼成良好	破片焼成不良	
碗	288.90	234.41	42.02	565.33
深碗	10.67	2.75		13.42
小碗	3.90			3.90
輪花碗	4.50			4.50
皿	218.00	77.63	14.88	310.51
大皿	5.92			5.92
有台皿	0.92			0.92
段皿	1.92			1.92
不明	3.50	8.65		12.15
瓶	59.10	11.48		70.58
小瓶	1.25			1.25
平瓶				
壺	2.75			2.75
甕				
皿状焼台	52.08			52.08
計	653.41	334.92	56.90	1045.23

口縁残存率から算出した個体数

器種	接合分	破片焼成良好	破片焼成不良	
碗	128.75	112.70	7.30	248.75
深碗	6.75			6.75
小碗	1.30			1.30
輪花碗	2.75			2.75
皿	99.00	55.35	4.70	159.05
大皿	3.16	0.58		3.74
有台皿	0.58			0.58
段皿	0.67			0.67
不明	1.75			1.75
瓶	28.90	25.25		54.15
小瓶	0.17			0.17
平瓶	0.92			0.92
壺	0.75			0.75
甕	0.17			0.17
皿状焼台	32.29	1.00		33.29
計	307.91	194.88	12.00	514.79

表4　個体数

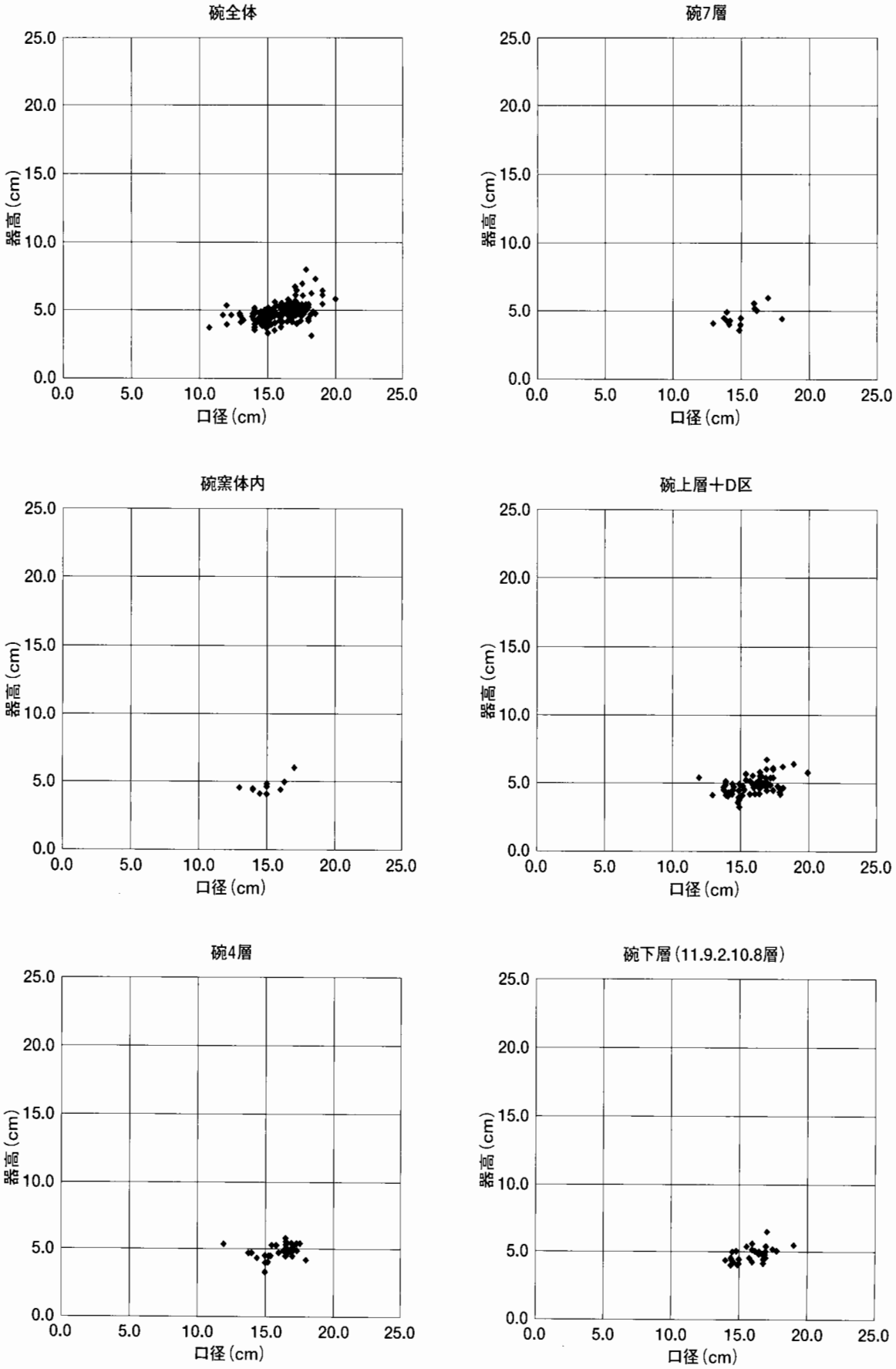

碗全体
碗7層
碗窯体内
碗上層＋D区
碗4層
碗下層（11.9.2.10.8層）
器高（cm）
口径（cm）
0.0
5.0
10.0
15.0
20.0
25.0

図266　碗法量グラフ

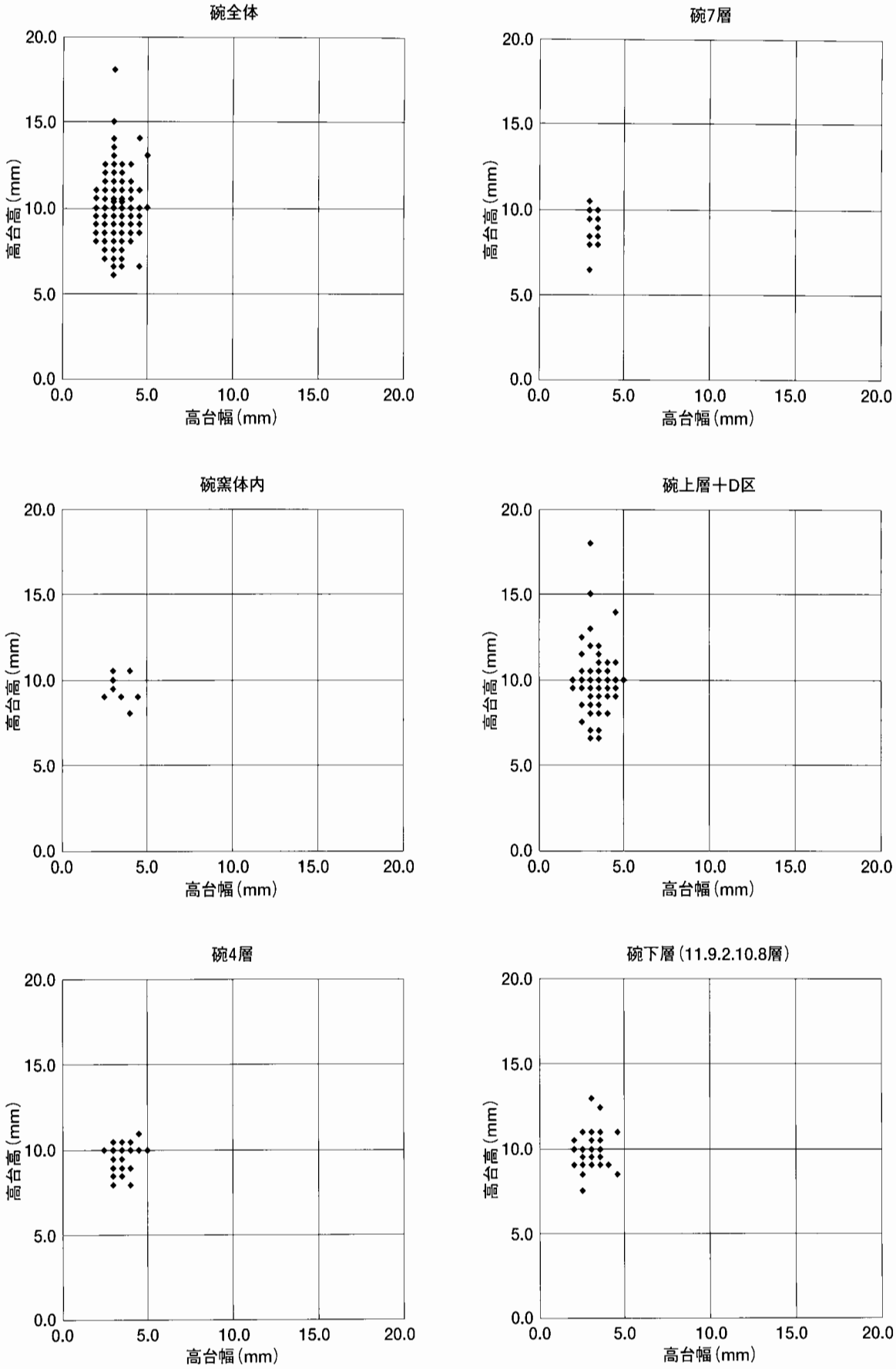


図267　碗高台法量グラフ

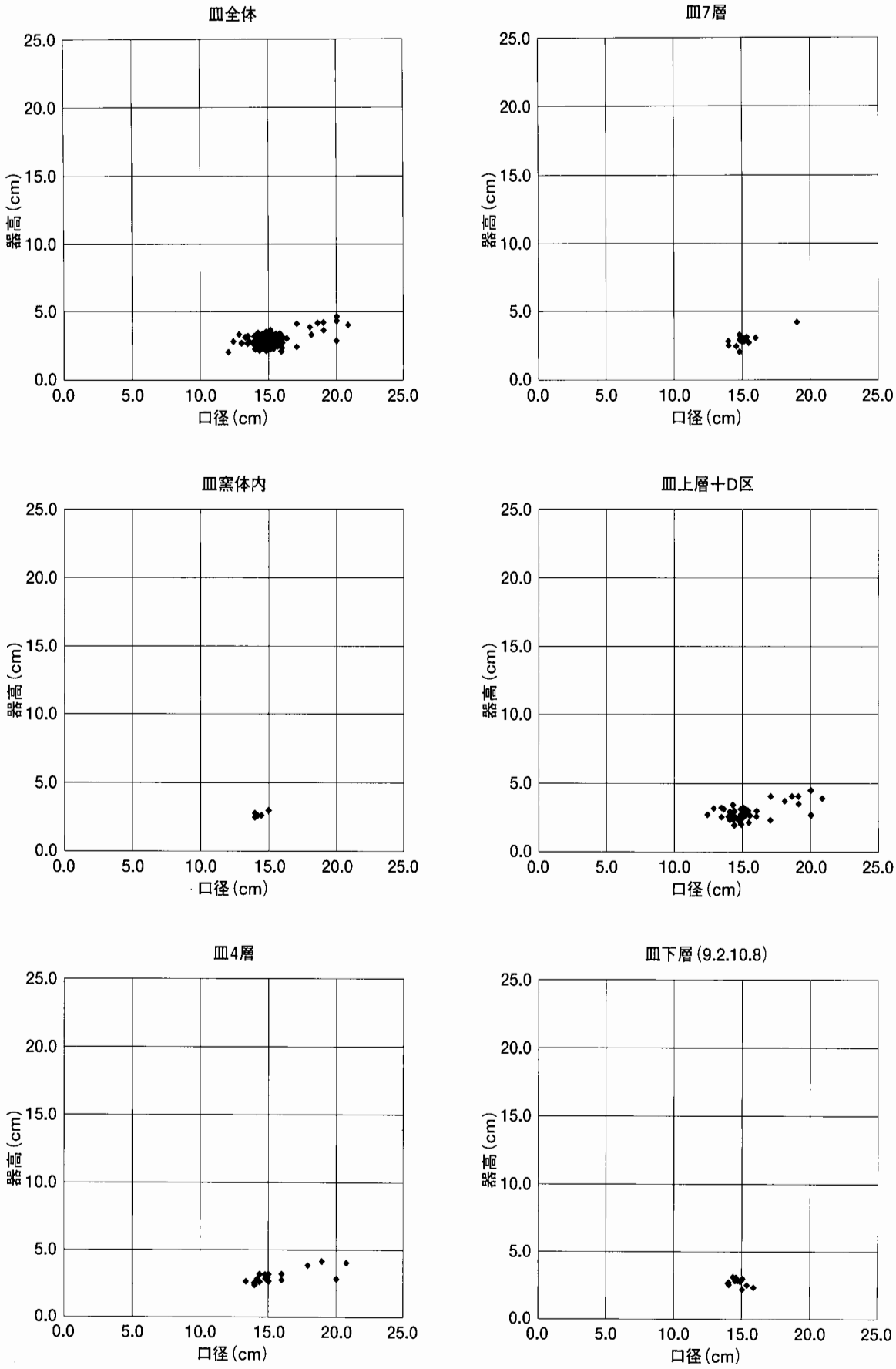

皿全体
皿7層
皿窯体内
皿上層＋D区
皿4層
皿下層(9.2.10.8)
器高(cm)
口径(cm)
0.0
5.0
10.0
15.0
20.0
25.0

図268　皿法量グラフ

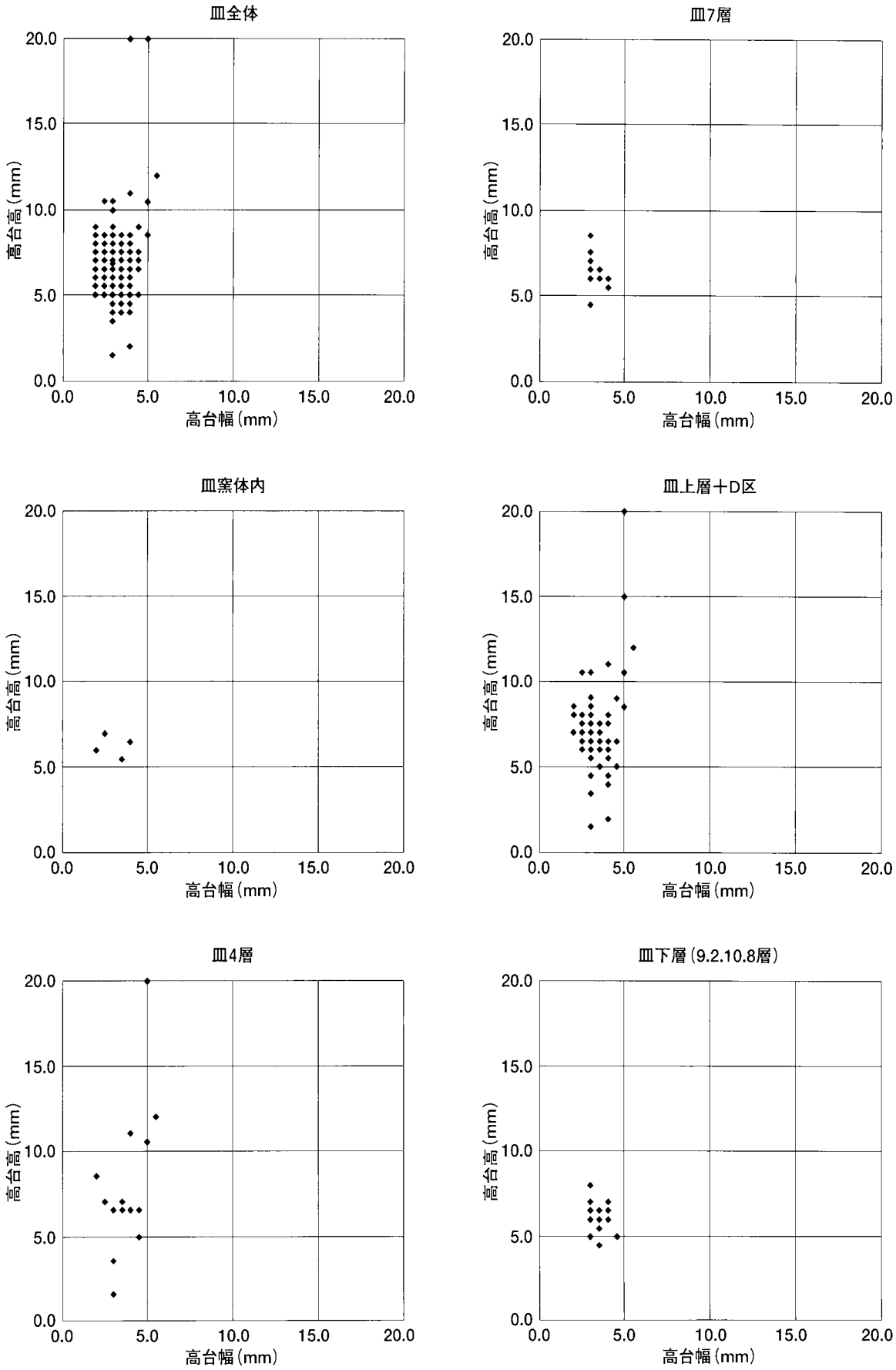


図269　皿高台法量グラフ

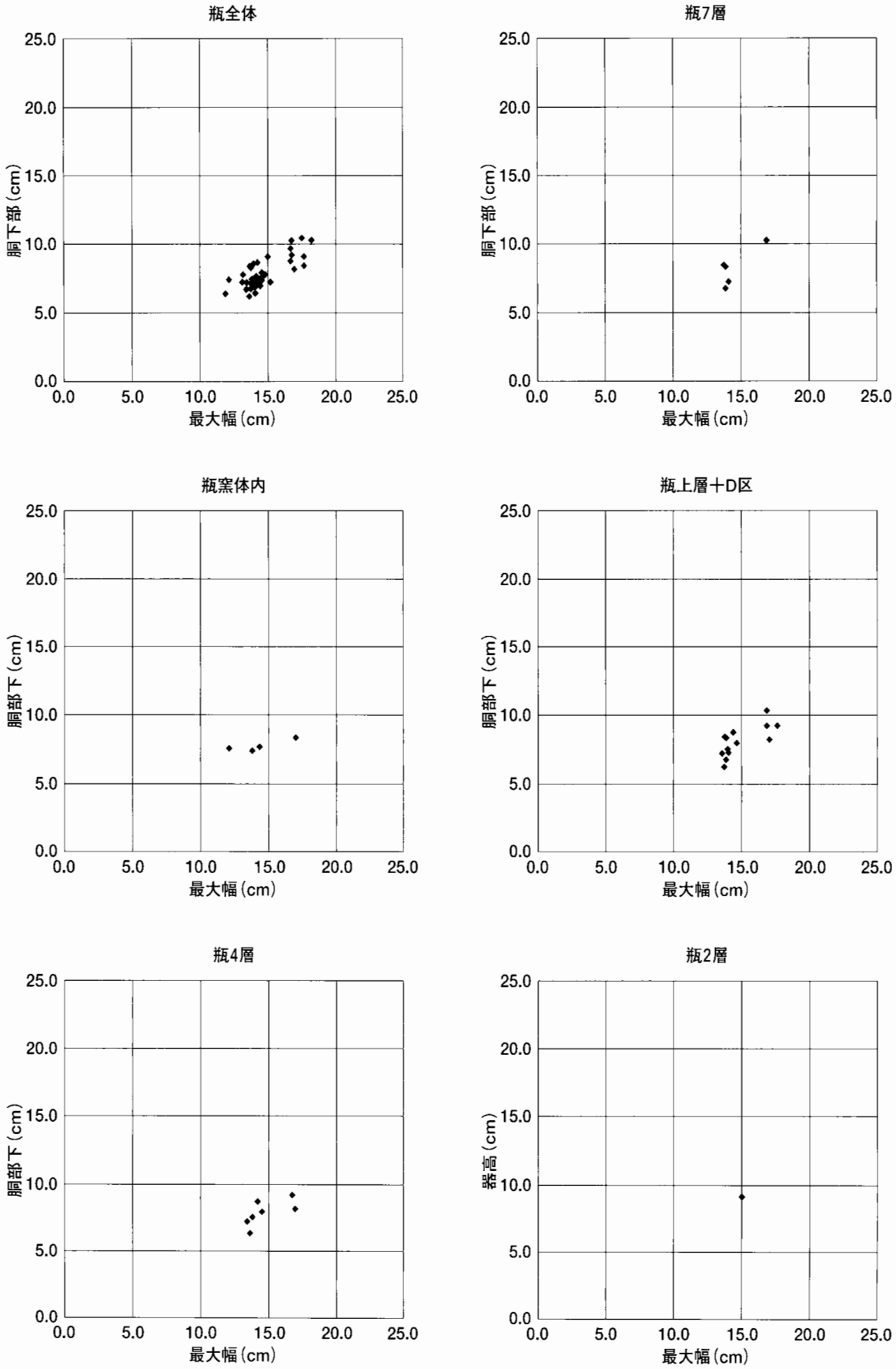

瓶全体
瓶7層
瓶窯体内
瓶上層＋D区
瓶4層
瓶2層
胴下部(cm)
胴部下(cm)
器高(cm)
最大幅(cm)
0.0
5.0
10.0
15.0
20.0
25.0

図270　瓶法量グラフ

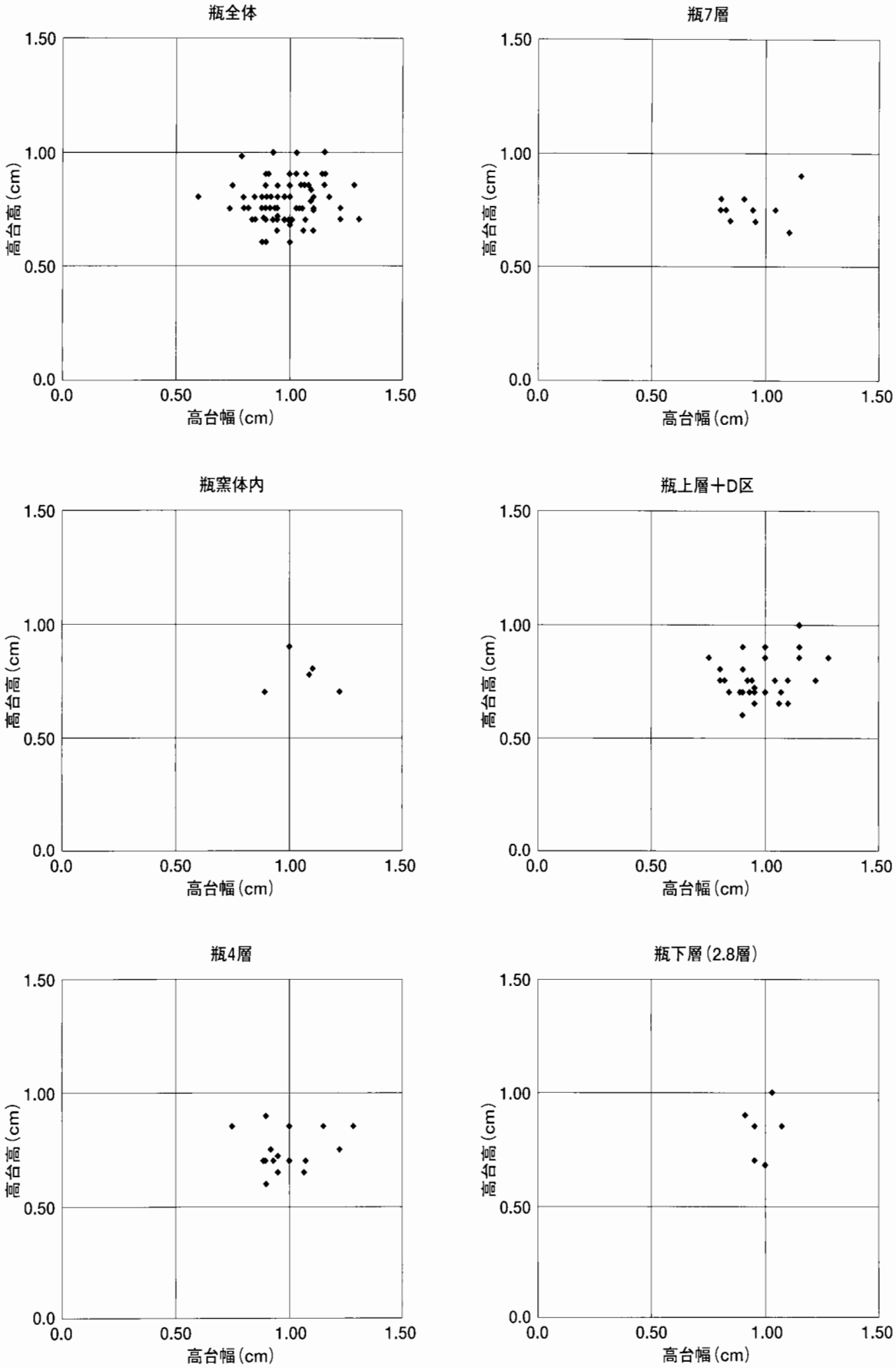


図271　瓶高台法量グラフ

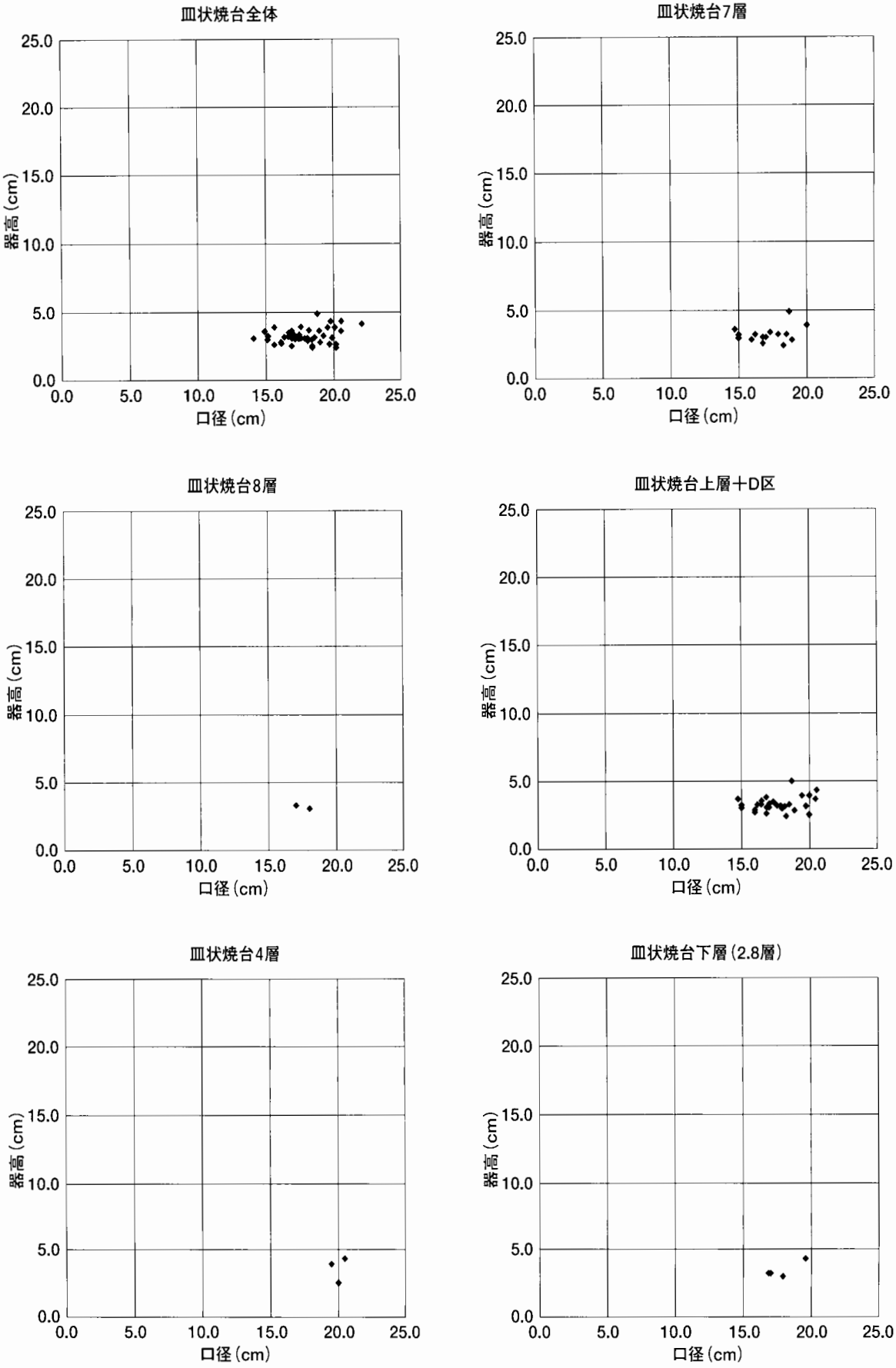


図272　皿状焼台法量グラフ

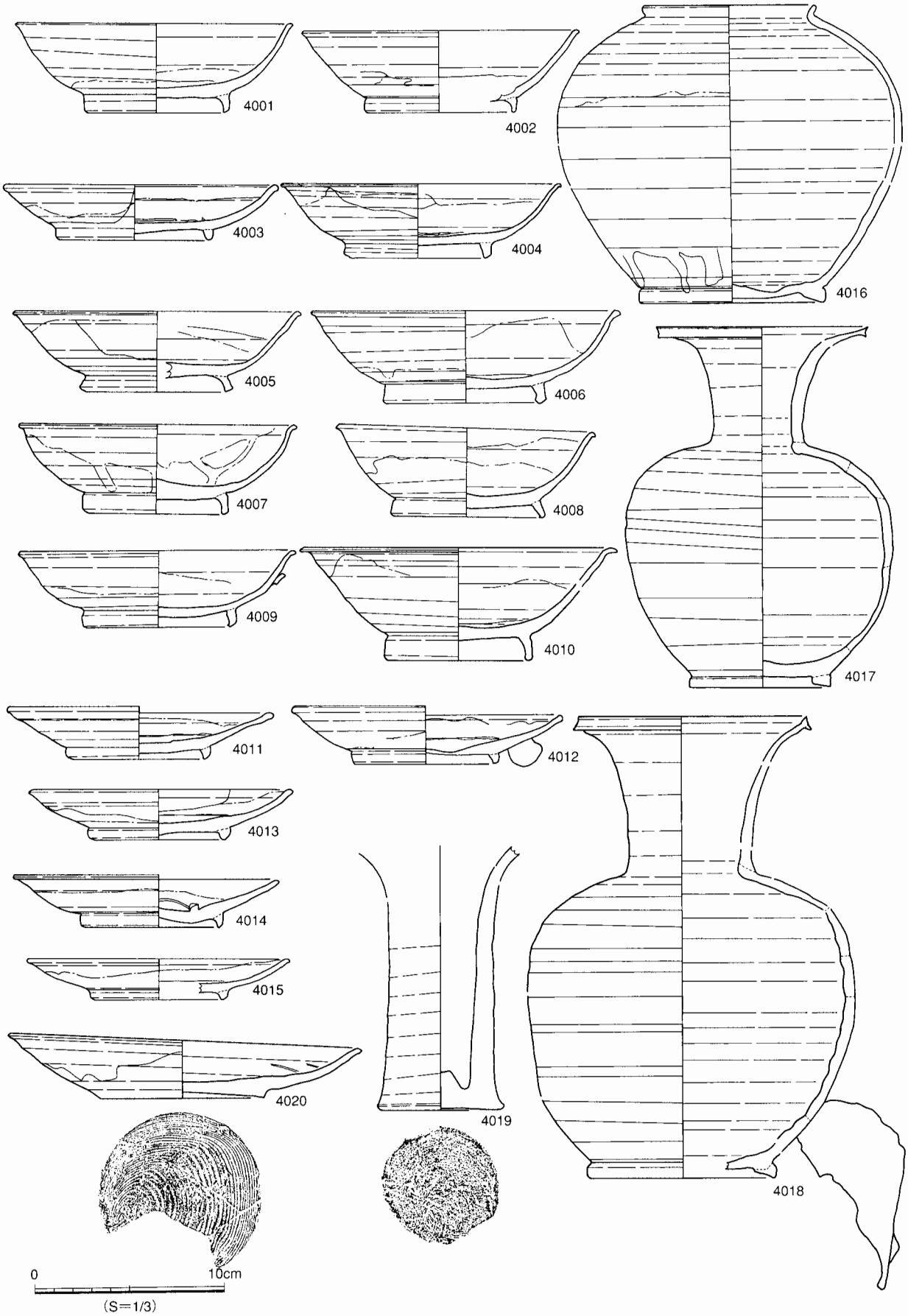


図273　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物①燃焼室・焼成室・煙道部（S=1/3）

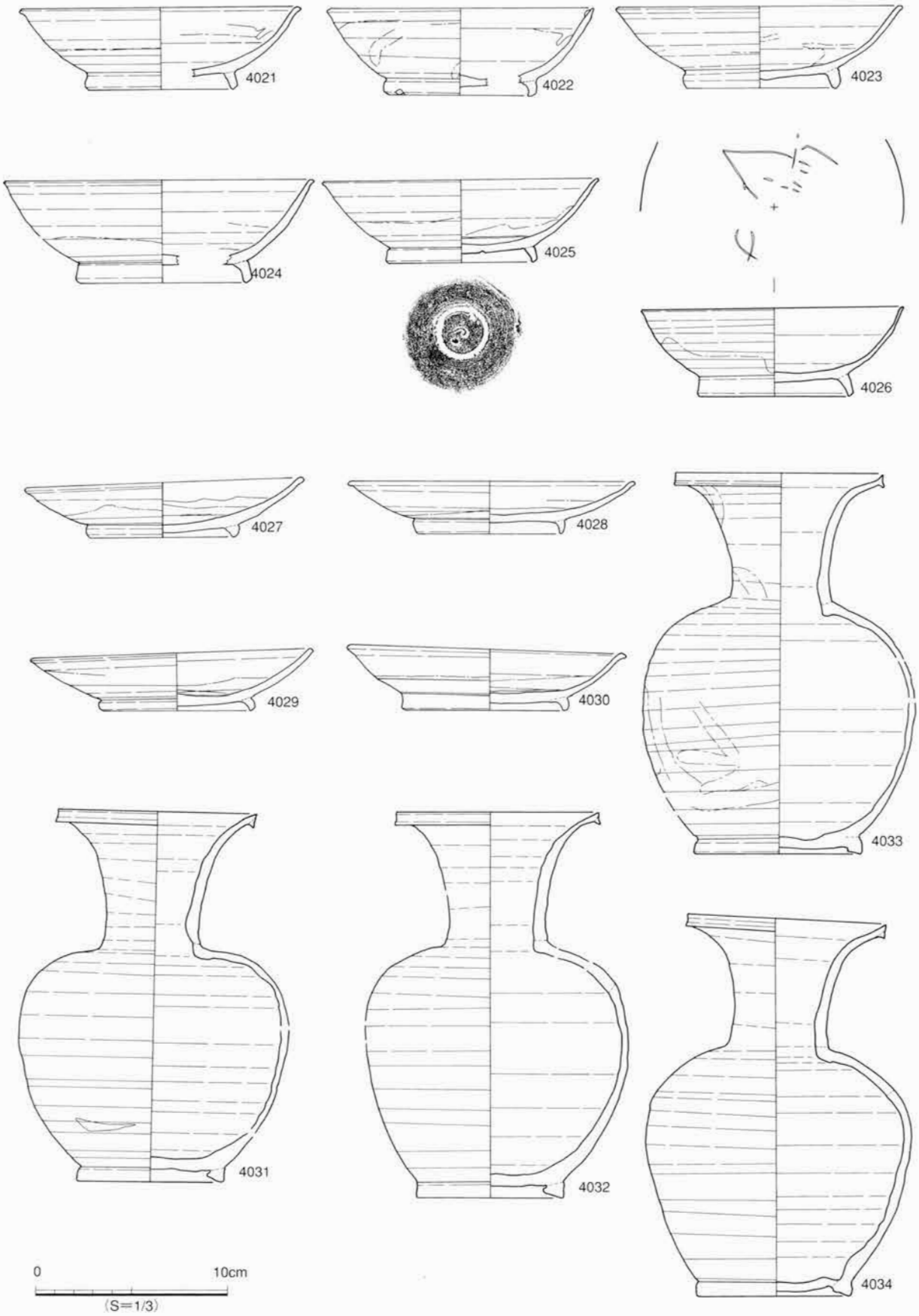


図274　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物②SK1（S=1/3）

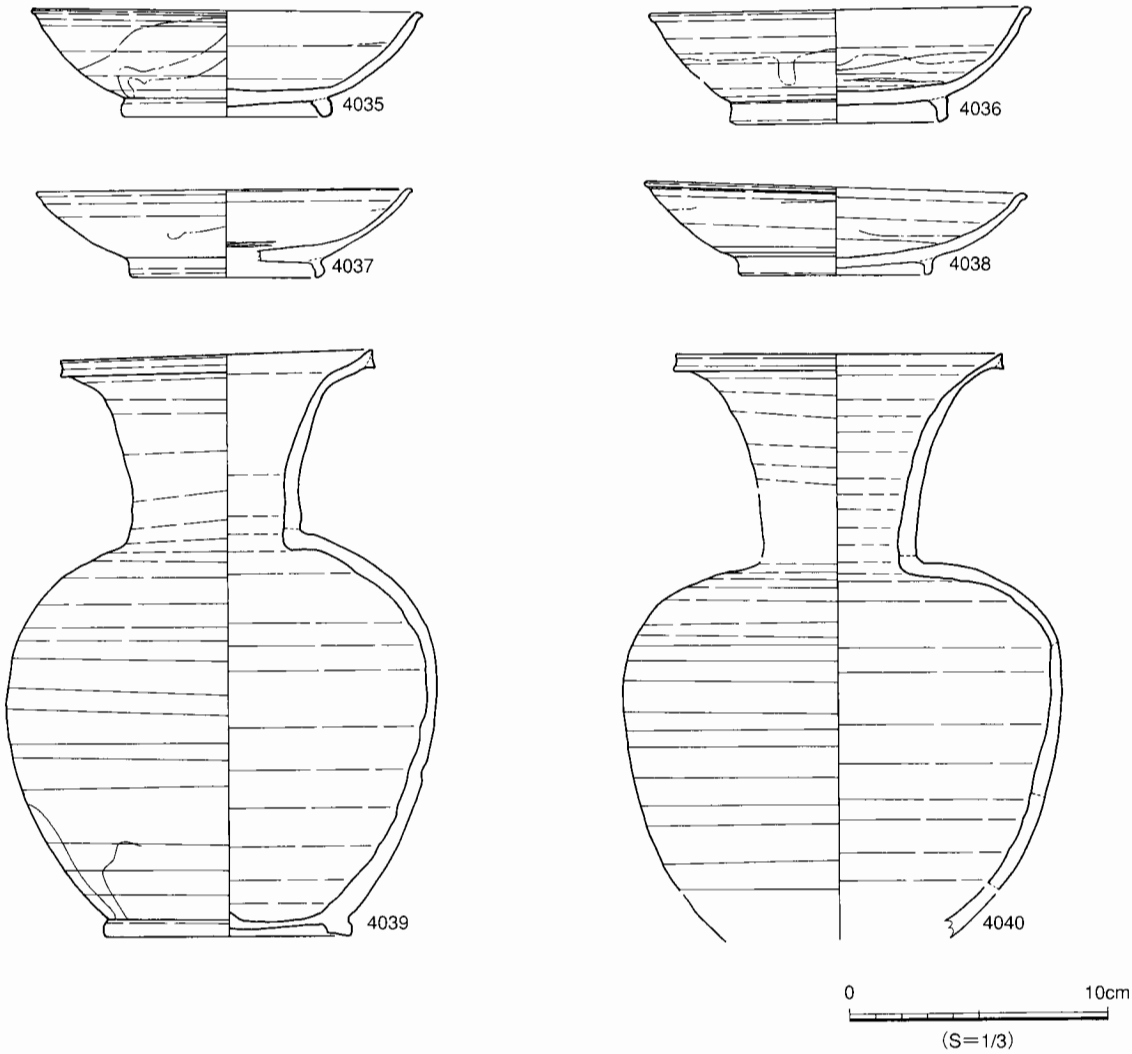


図275　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物③SK2（S＝1/3）

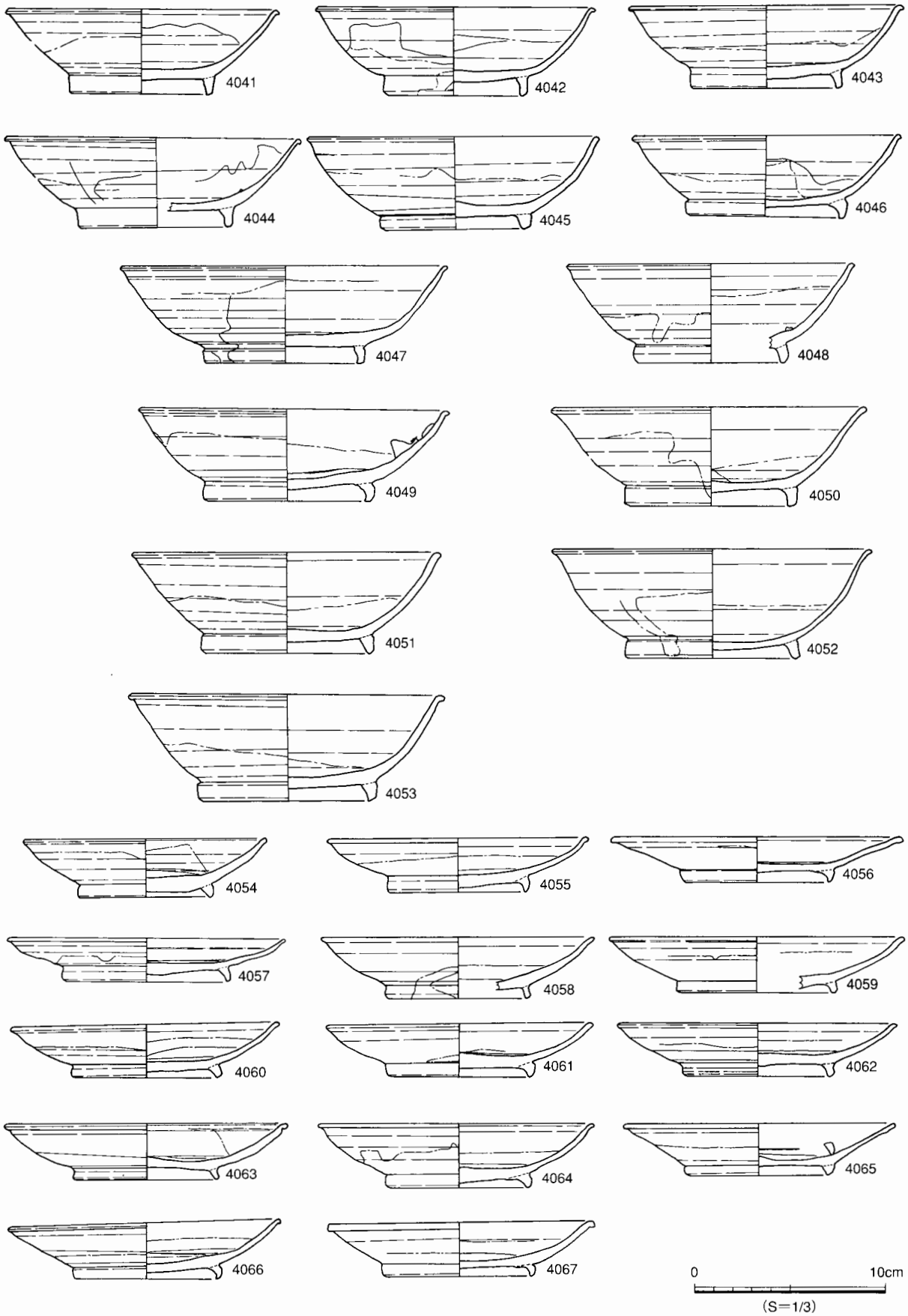


図276　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物④SK3（S=1/3）

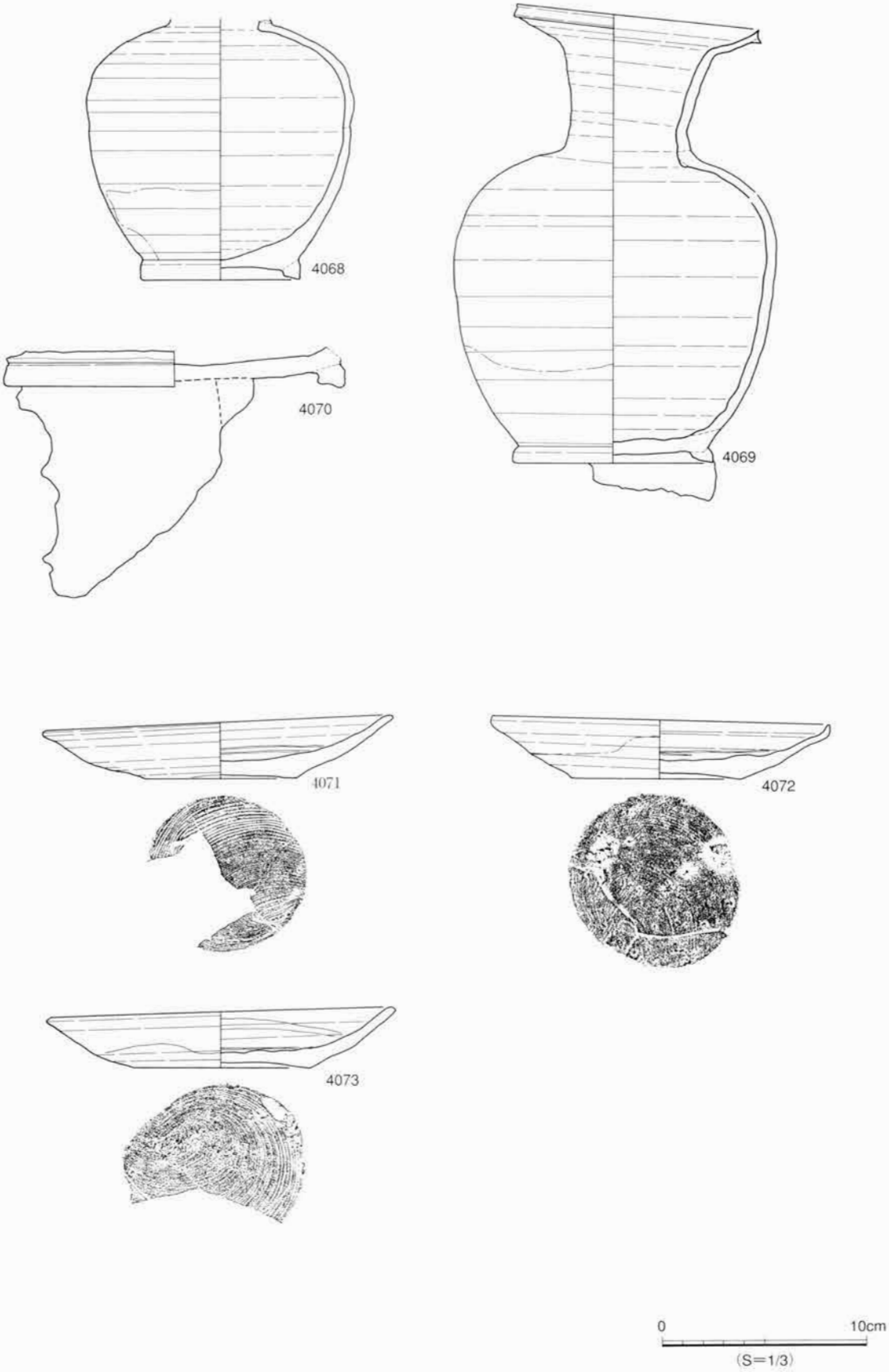


図277　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑤SK3（S=1/3）

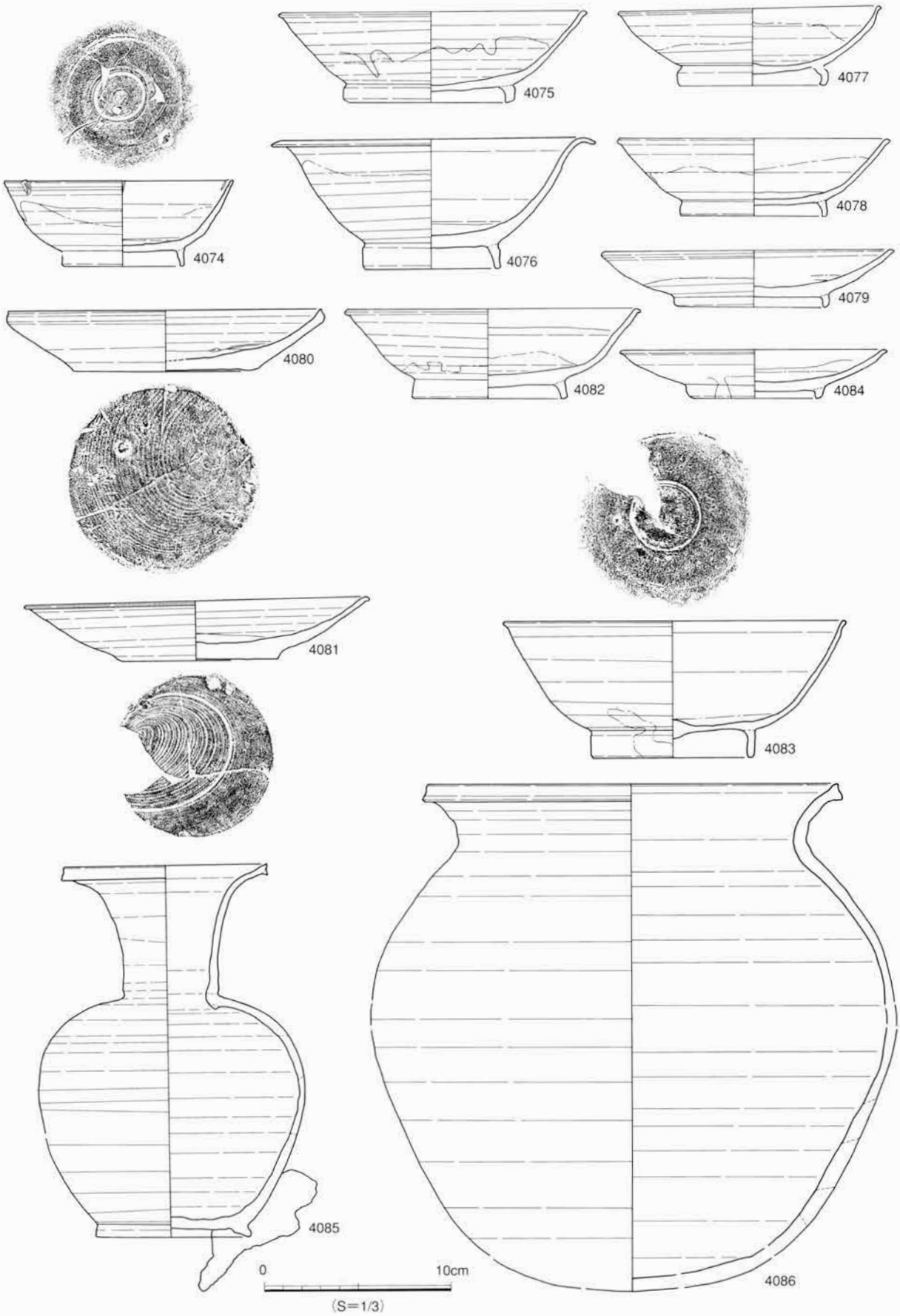


図278　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑥SK1、2、3接合、SK4、SK5（S=1/3）

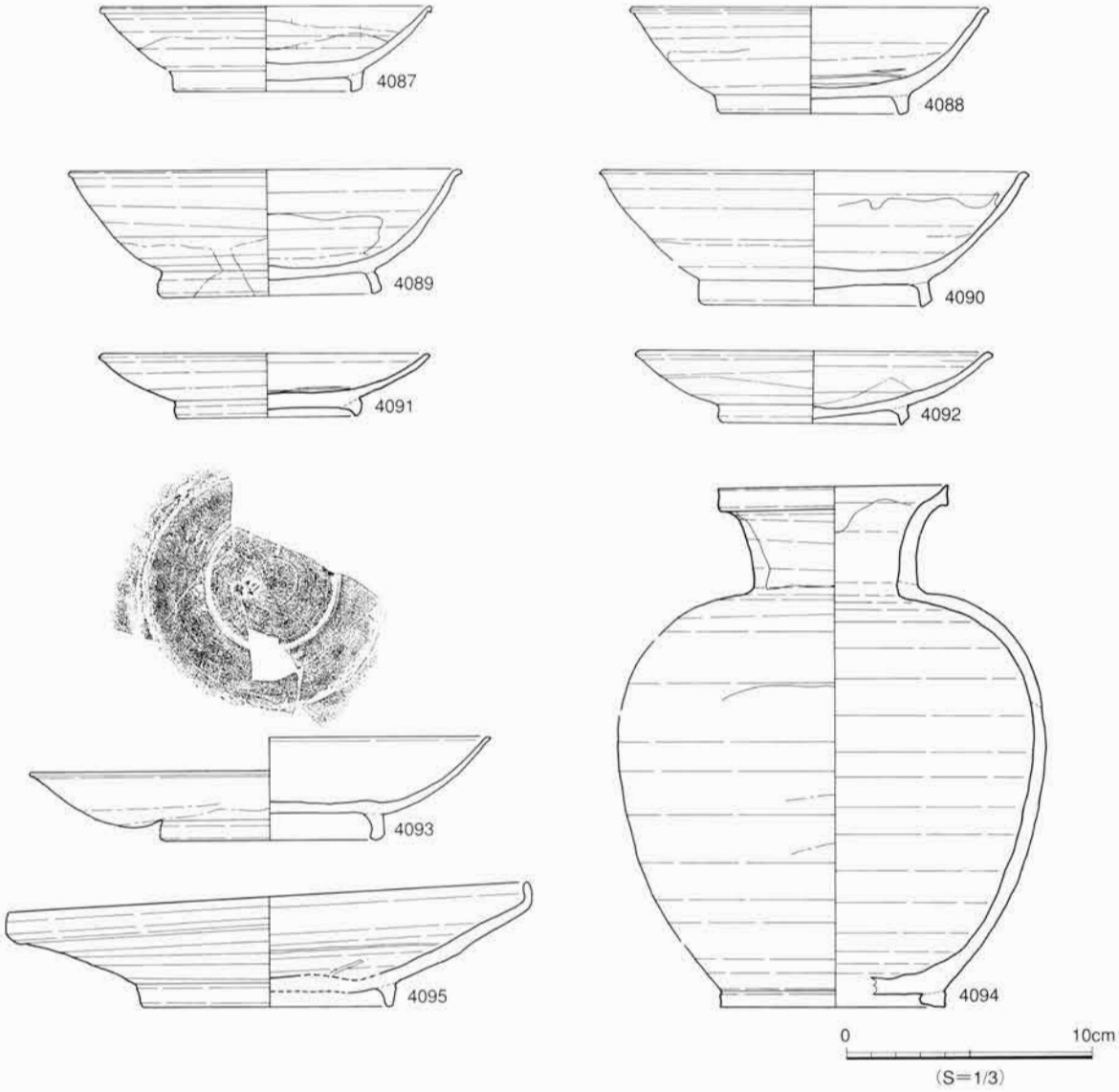


図279　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑦SK4～8周辺（S=1/3）

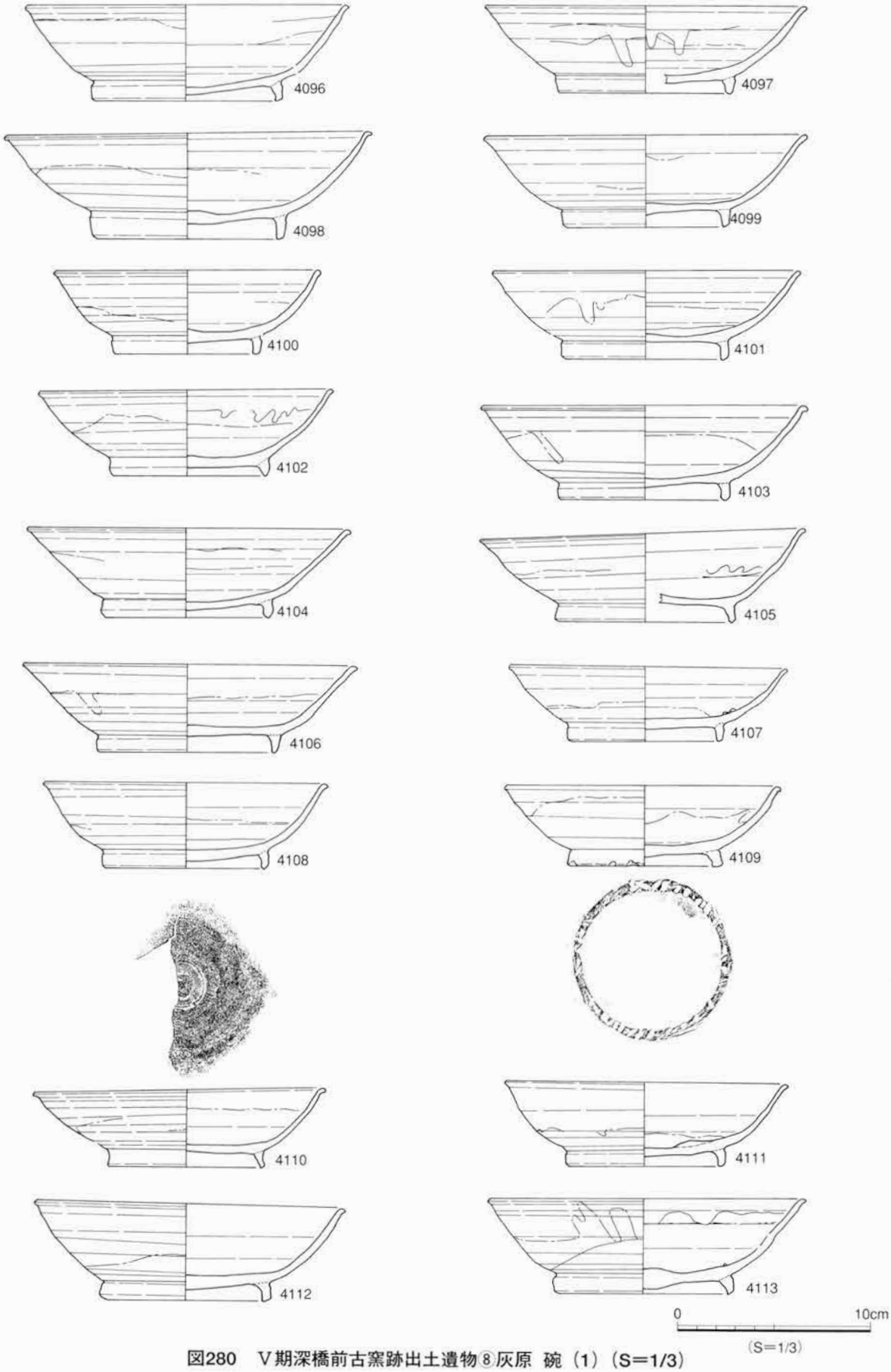


図280　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑧灰原 碗（1）（S=1/3）

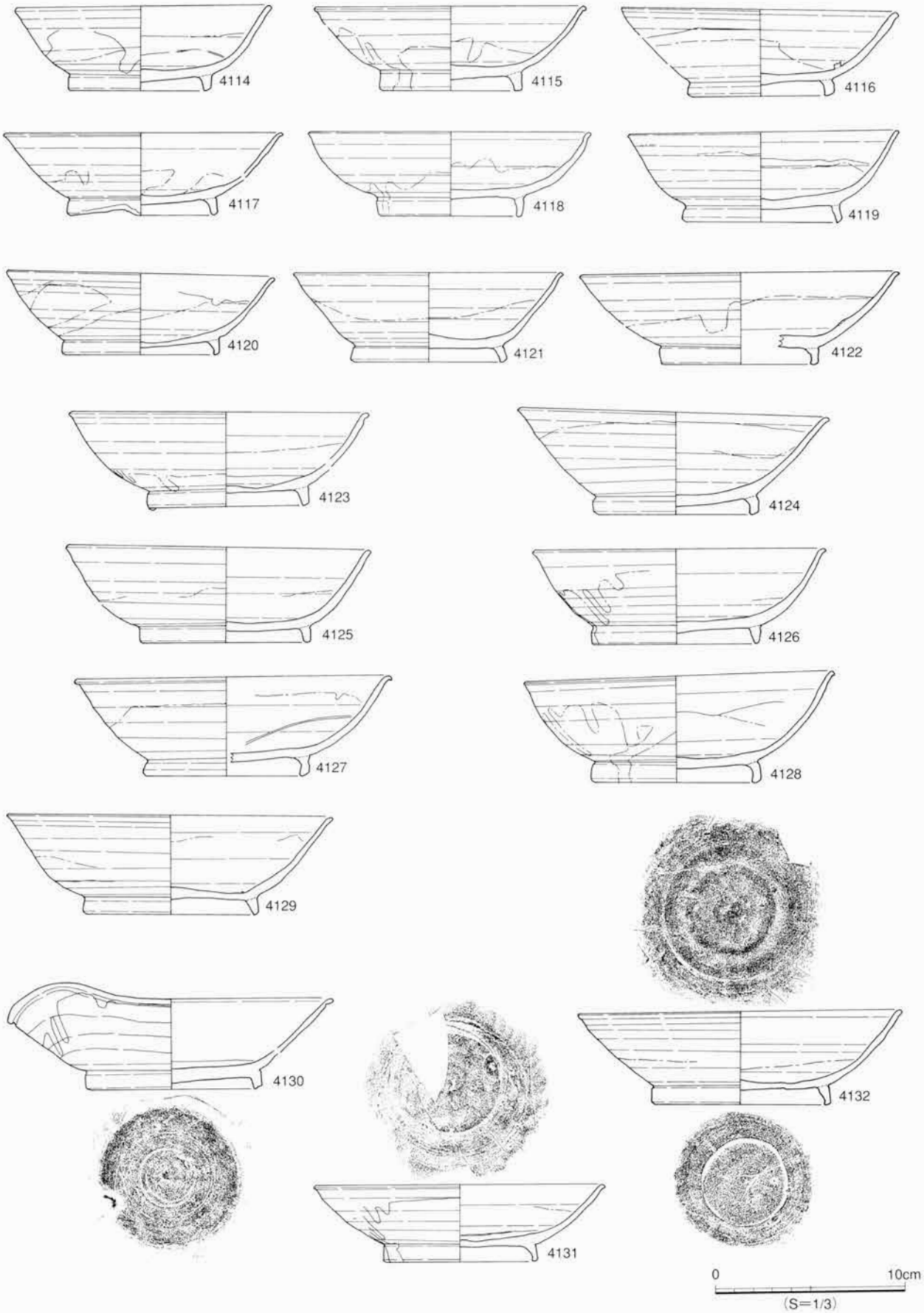


図281　V期深橋前古窯跡出土遺物⑨灰原 碗（2）（S=1/3）

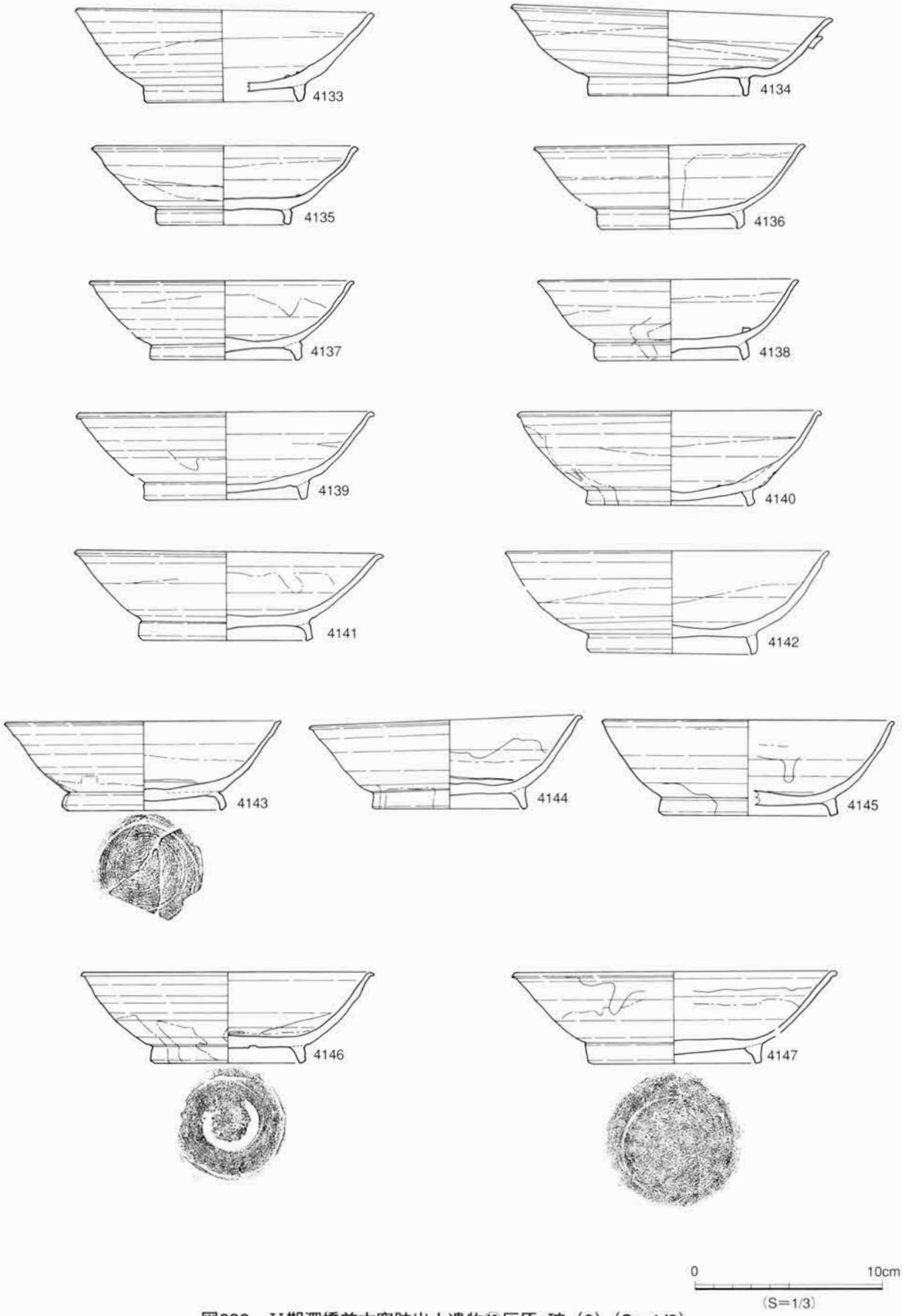


図282　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑩灰原 碗（3）（S=1/3）

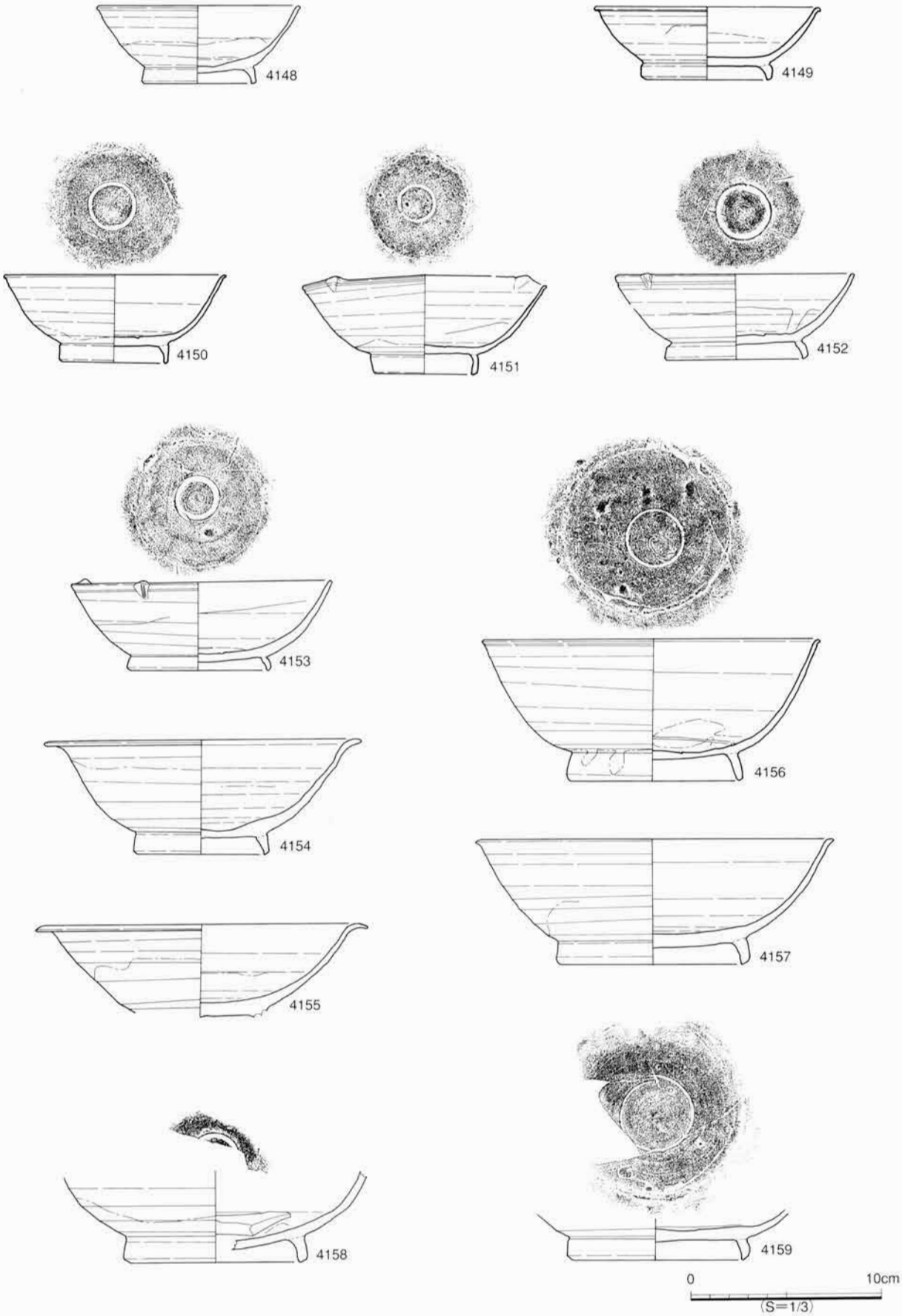


図283　V期深橋前古窯跡出土遺物⑪灰原 小碗・輪花碗・深碗（S=1/3）

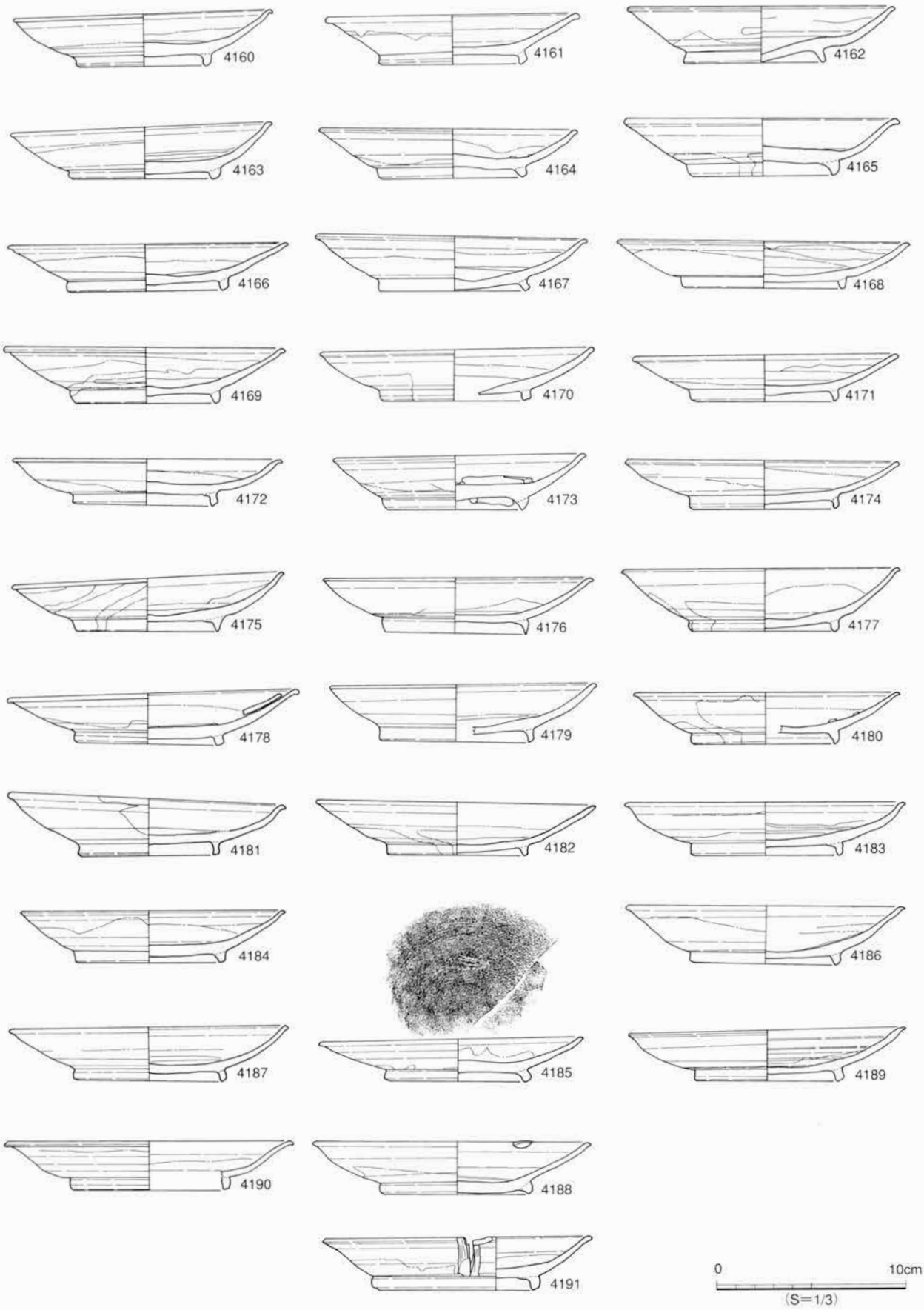


図284　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑫灰原 皿（1）（S=1/3）

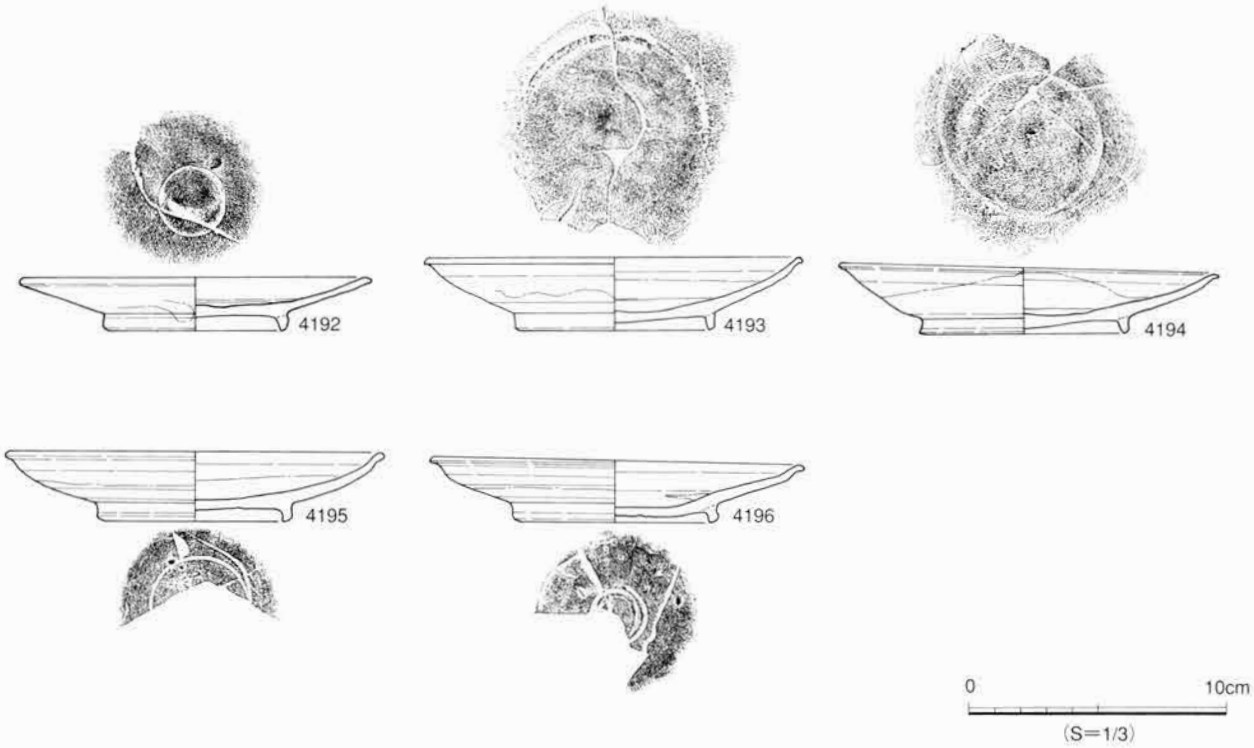


図285　V期深橋前古窯跡出土遺物⑬灰原 皿（2）（S=1/3）

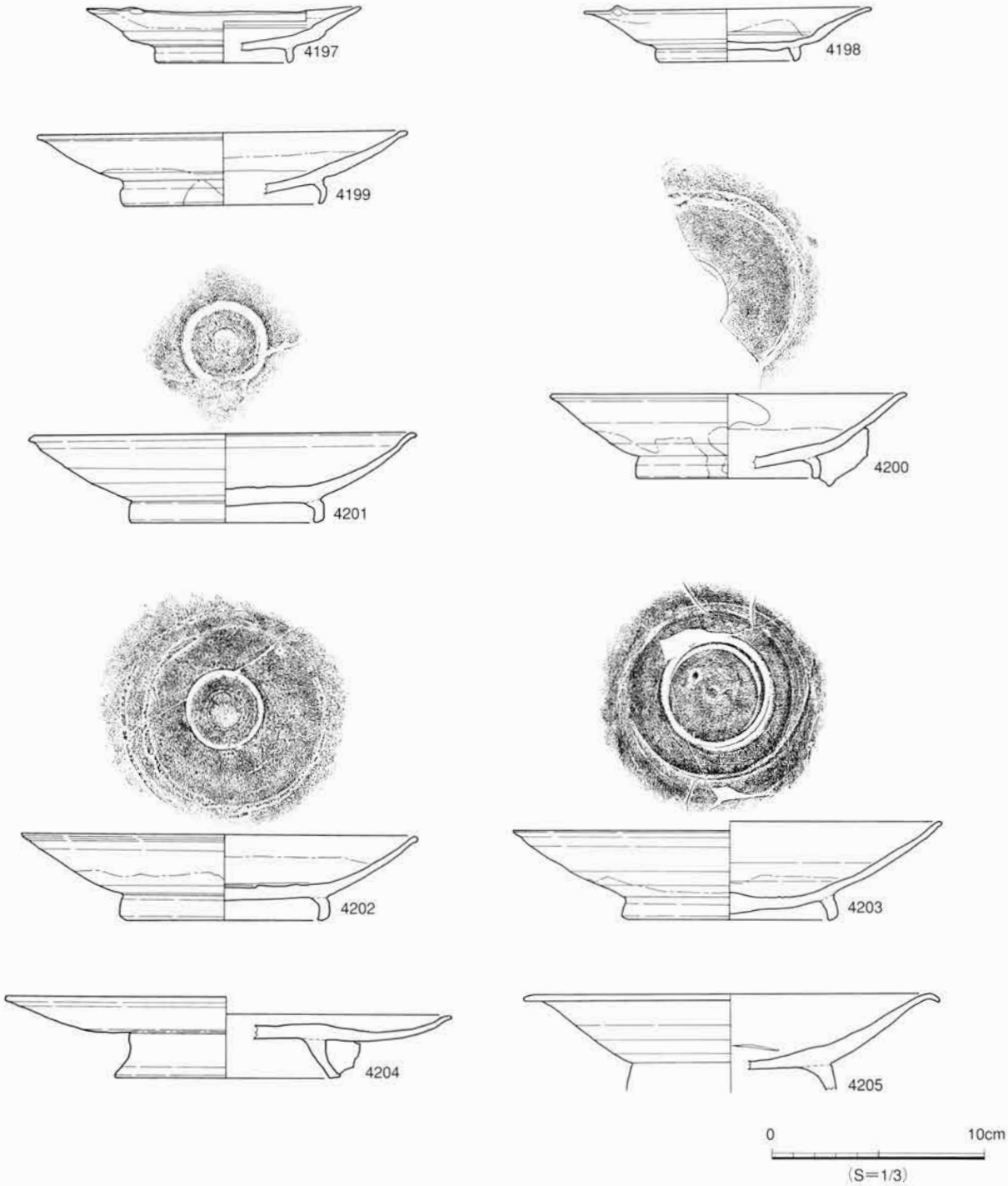


図286　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑭灰原 輪花段皿・大皿・有台皿（S=1/3）

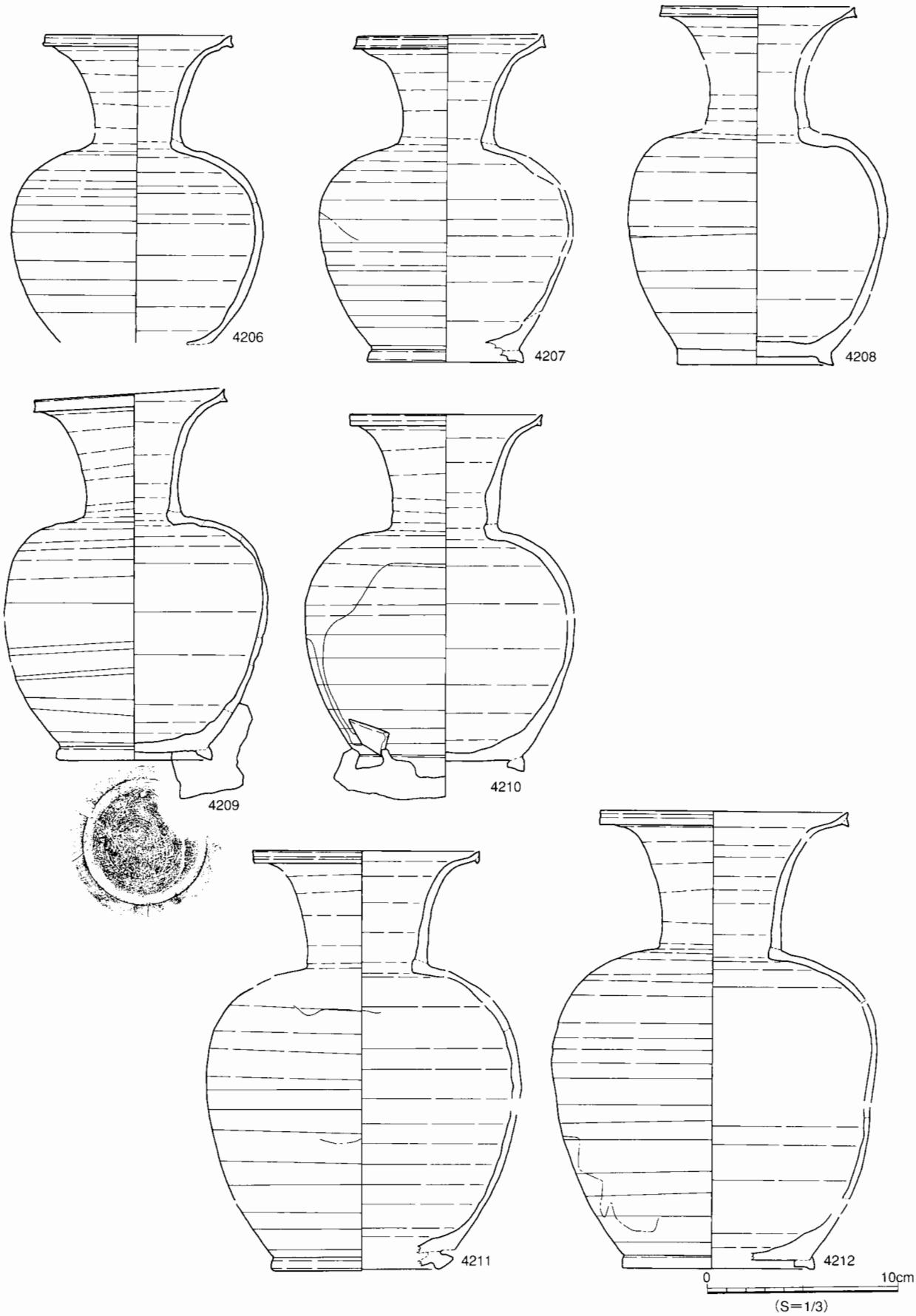


図287　V期深橋前古窯跡出土遺物⑮灰原 長頸瓶（1）（S=1/3）

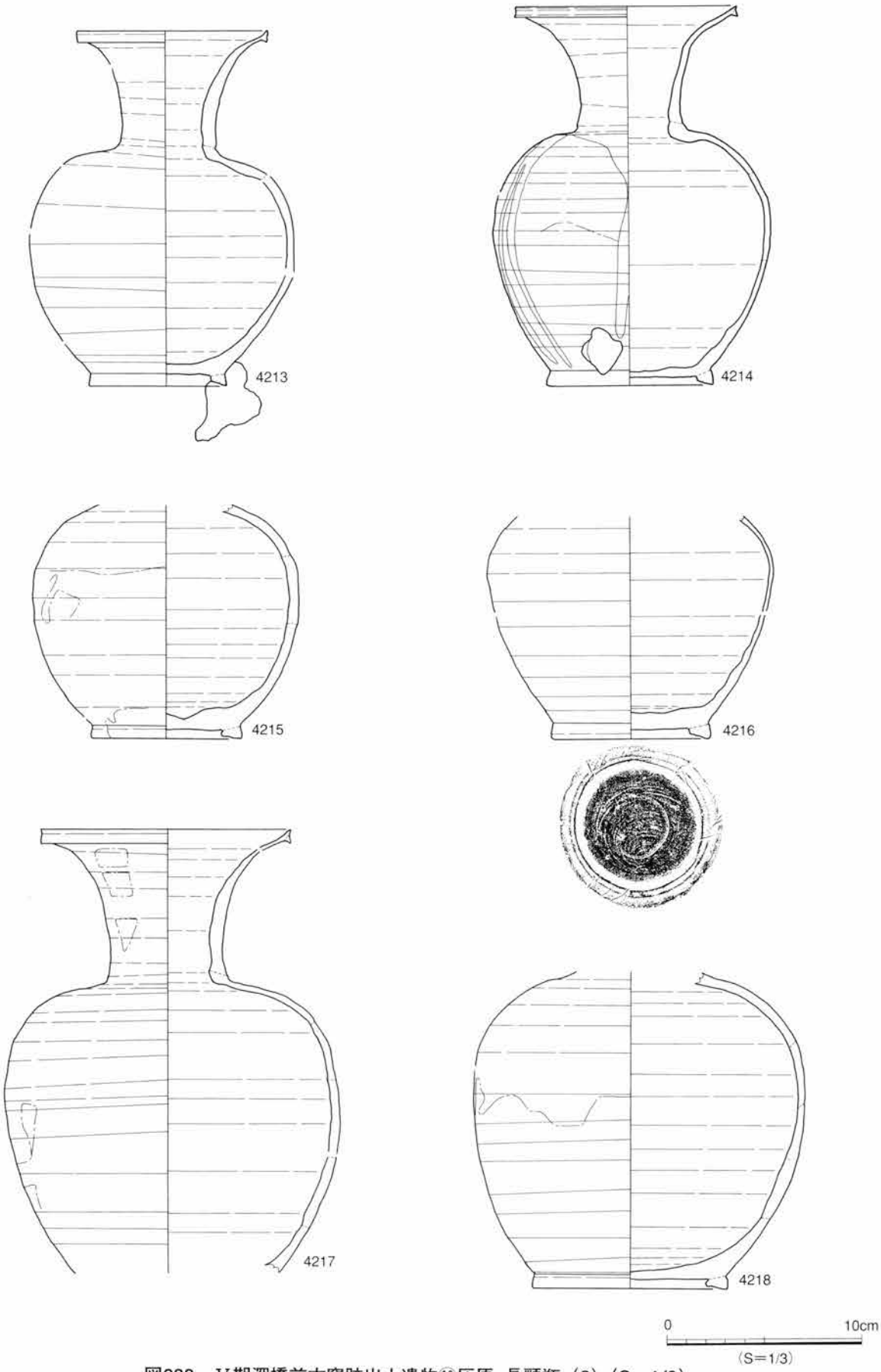


図288　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑯灰原 長頸瓶（2）（S=1/3）

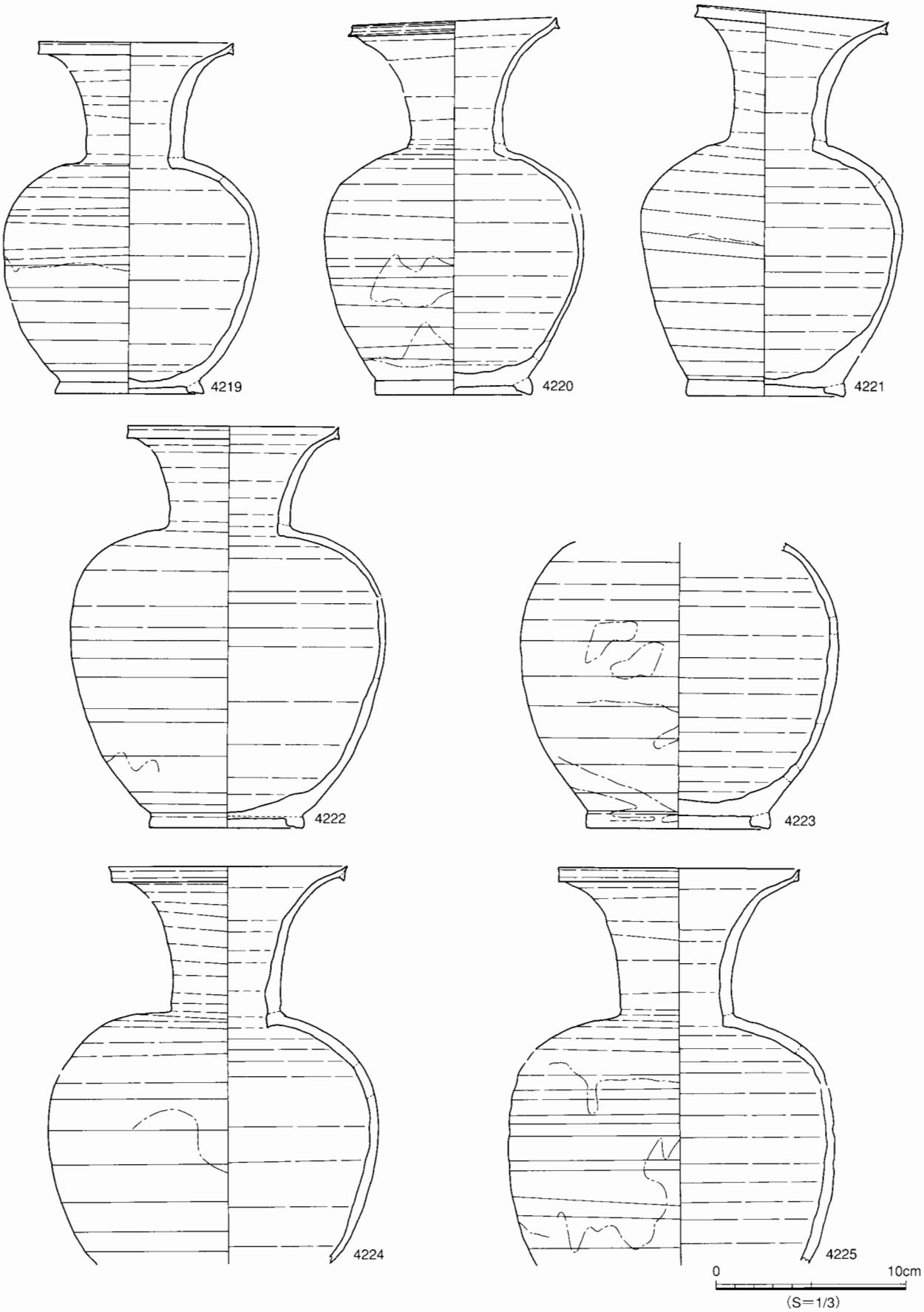


図289　V期深橋前古窯跡出土遺物⑰灰原 長頸瓶（3）（S=1/3）

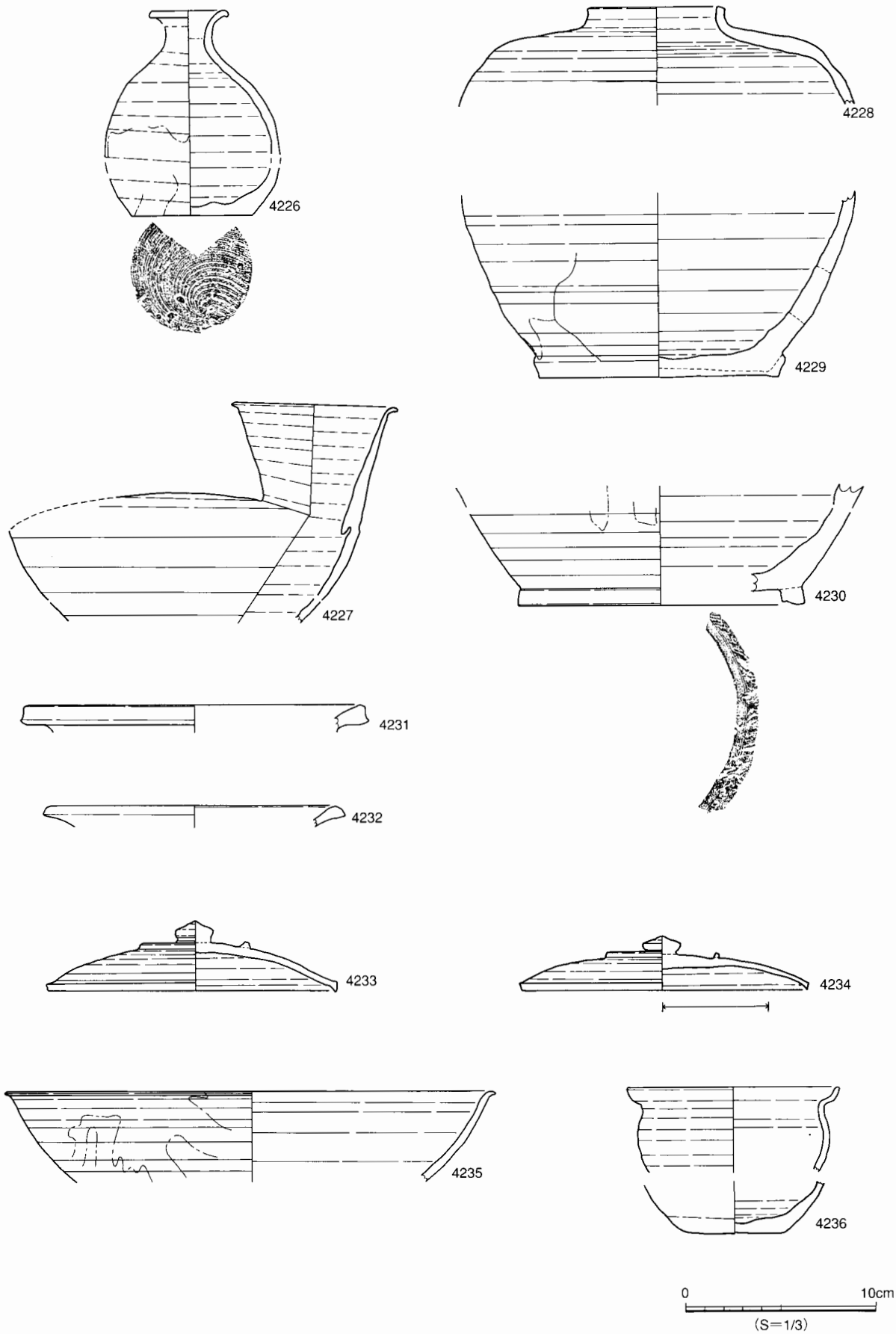


図290　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑱灰原 壺・甕・蓋・鉢（S=1/3）

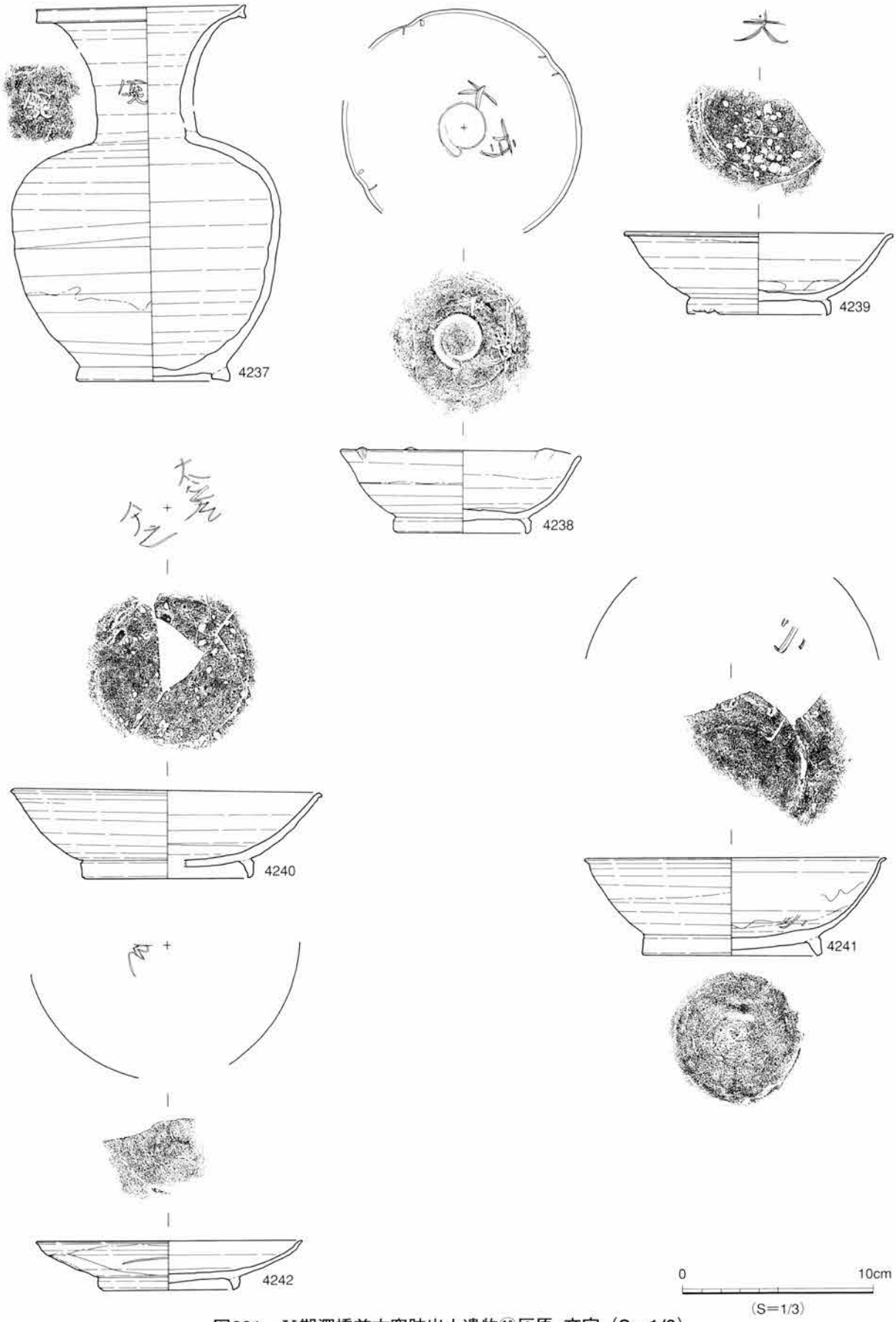


図291　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑲灰原　文字（S=1/3）

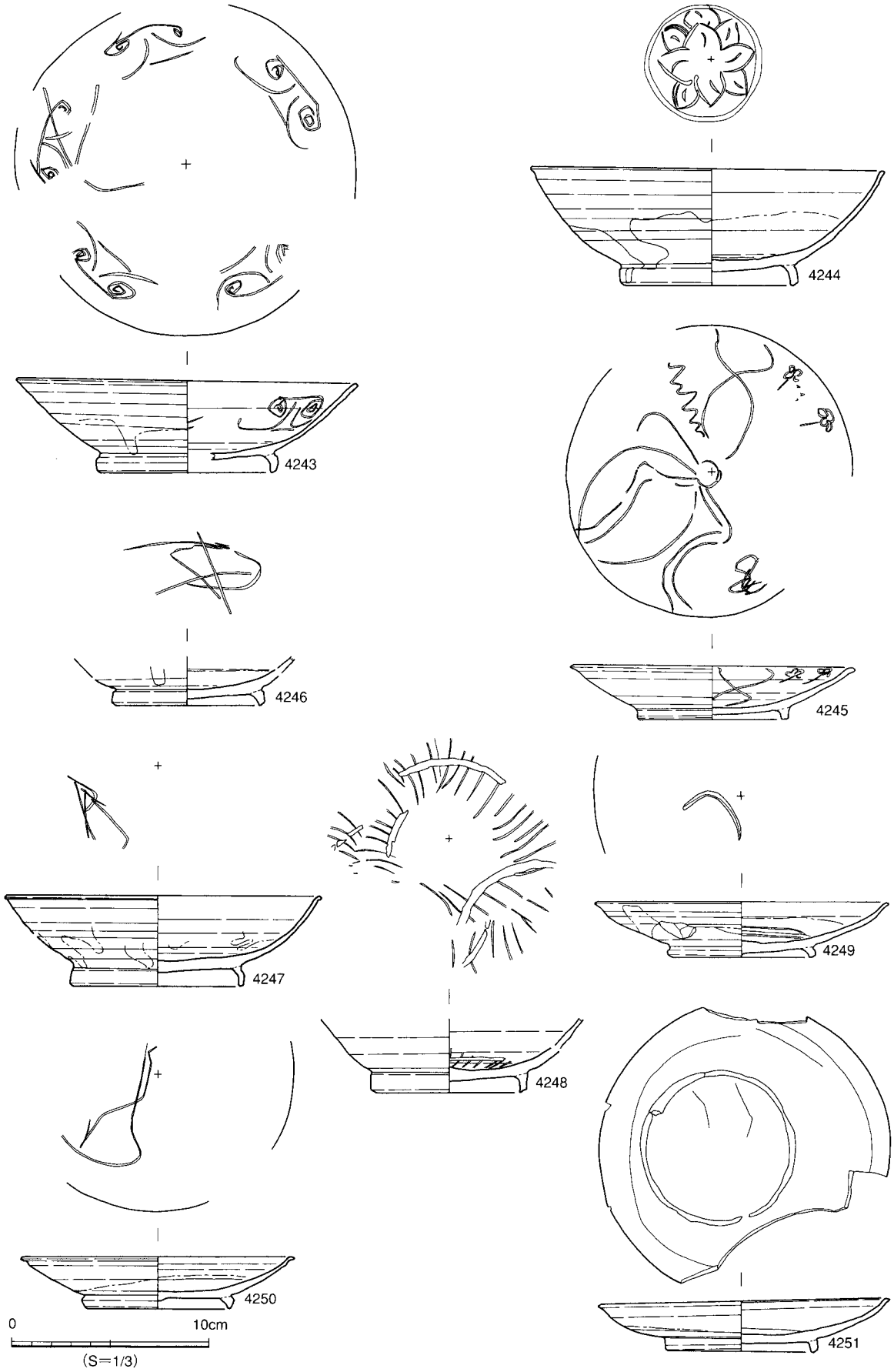


図292　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物⑳灰原 絵・線刻（S=1/3）

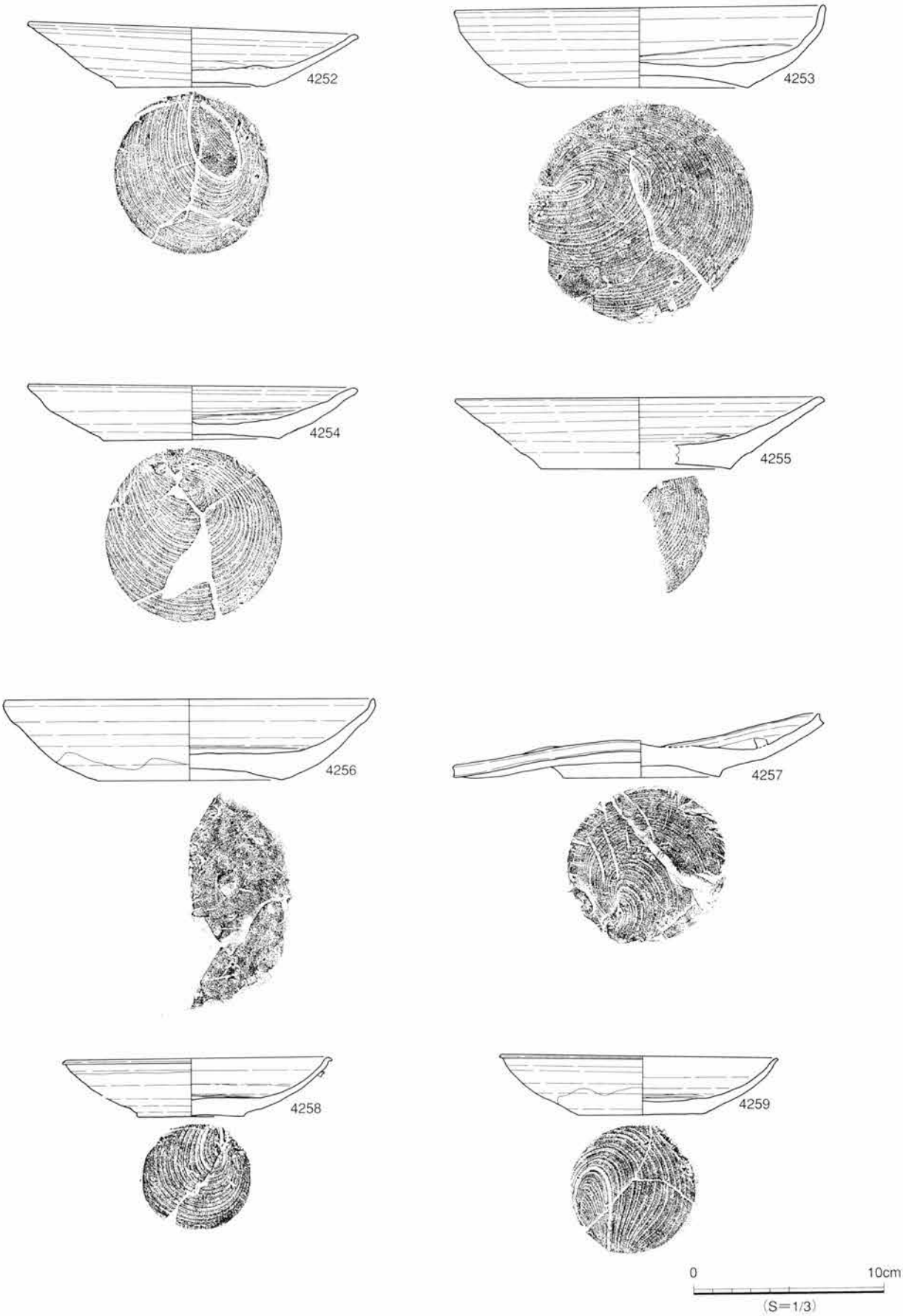


図293　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物㉑灰原 皿状焼台（1）（S=1/3）

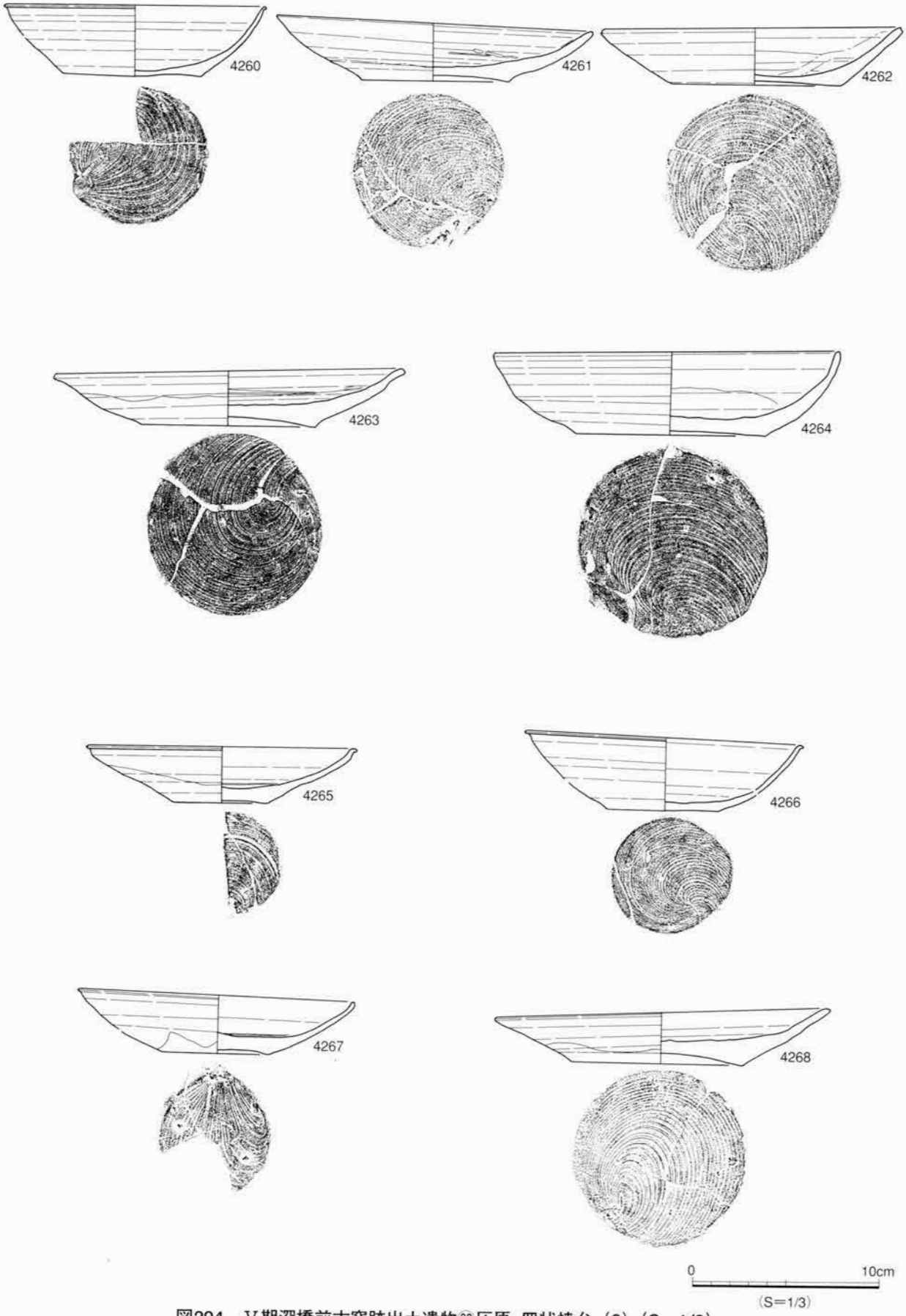


図294　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物㉒灰原 皿状焼台（2）（S=1/3）

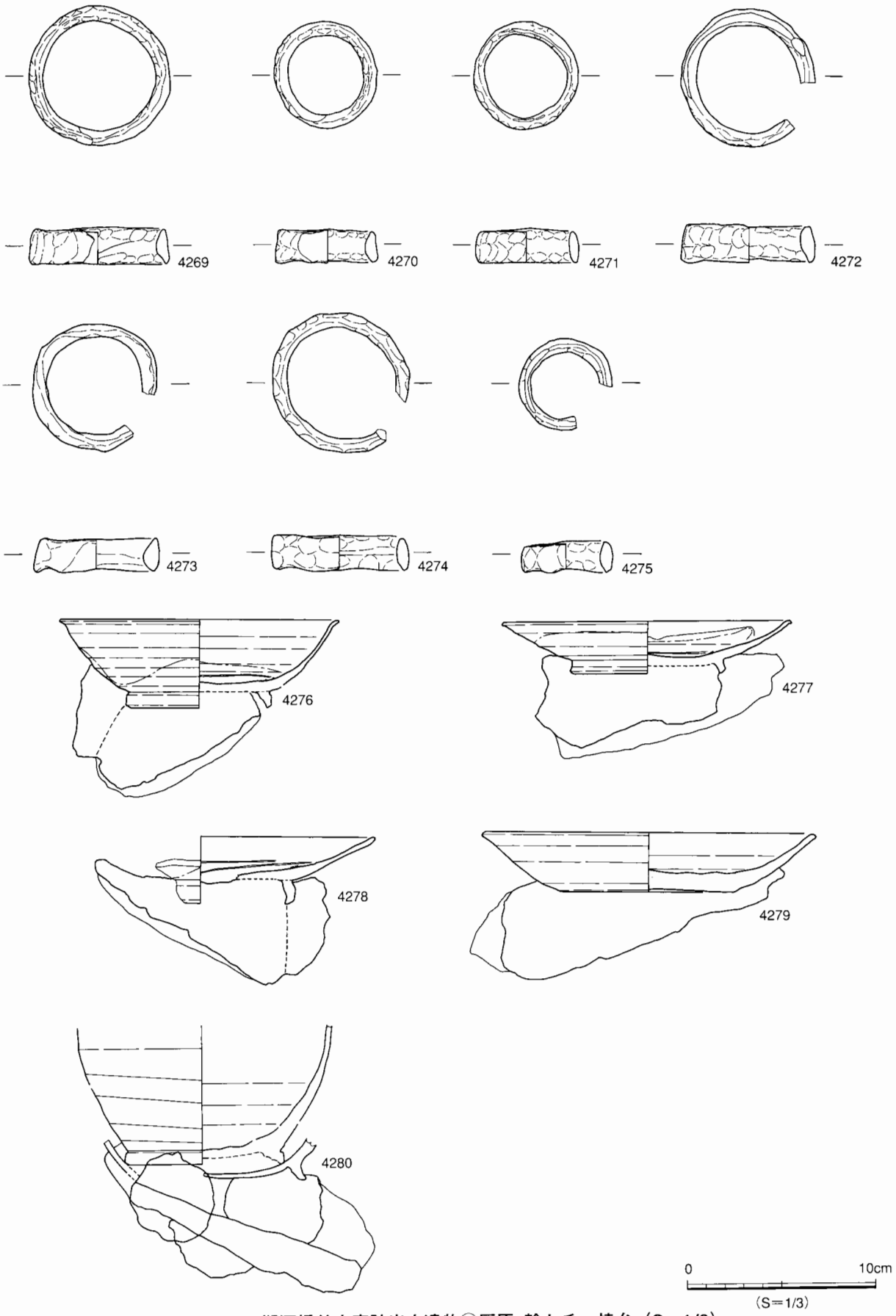


図295　V期深橋前古窯跡出土遺物㉓灰原 輪トチ・焼台（S=1/3）

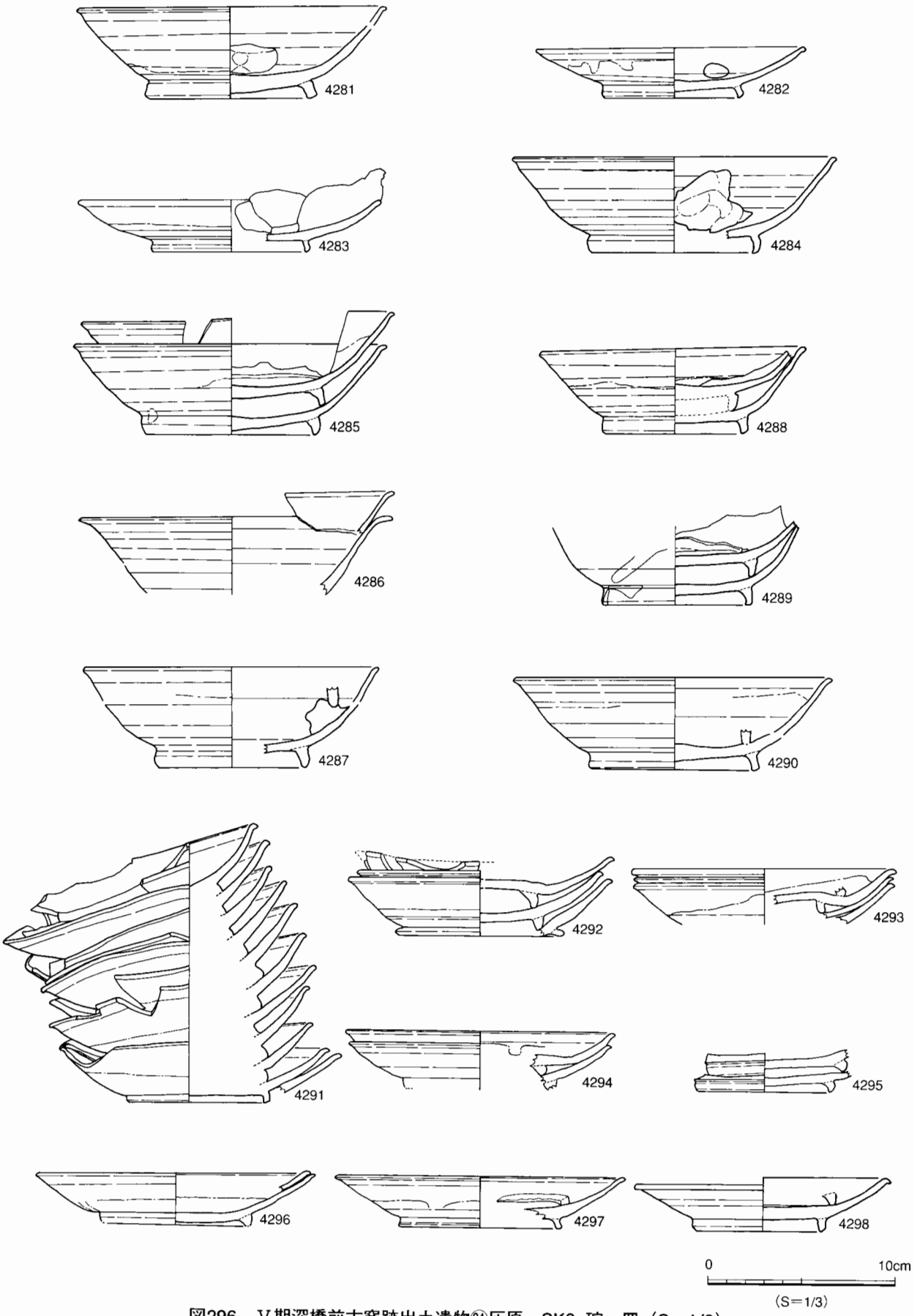


図296　Ⅴ期深橋前古窯跡出土遺物㉔灰原、SK3 碗・皿（S=1/3）

第５節　９・10世紀の祭祀遺構

灰釉陶器を伴う土坑墓が６基と、９世紀の須恵器を伴う土坑墓１基が、Ｄ区の一つの小さな谷から固まって検出している。

SXD13（第298図）

３Ｘ、４Ｘ、３Ｙ、４Ｙ（Ｄ区）で検出された。約３ｍ×３ｍの竪穴住居跡で、山側に浅い排水溝も付いている。本遺跡で検出した弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡と構造は変わらないが、床面直上から２点の須恵器が出土した。須恵器は９世紀前半の鈕付きの坏蓋（3016）と、碗の底部を加工し、形状が皿のようになったもの（3017）である。坏蓋の内面には墨が付着し、底部を加工したものも糸切り痕の残る底部外面側が転用硯として利用されているようで摩耗している。住居跡の一部は平安時代（10世紀）以降のSRD02に切られている。固い床面に近い埋土は全面にわたって細かい炭が混じっている。また、薪を燃やしたと思われる土坑が２箇所確認できた。一つはほぼ中央に１×0.5ｍの大きさで楕円形をし0.15ｍと浅いもの、もう一つは左下隅に1.2×0.7ｍの大きさで深さ0.3ｍの土坑で、被熱し炭を伴う。土坑の中の炭化材の樹種同定を行ったところ針葉樹のアカマツと広葉樹のクヌギがほぼ同量確認された。９世紀前半の遺物や遺構は他に確認されていなかったことや、竈がないこと、尾根頂部に近く見晴らしもよく、榿ノ木洞遺跡の方を見渡せることなどから住居跡ではなく墓の可能性が考えられる。人骨に反応しないかと、リン・カルシウム分析を行ったところわずかだがリンの反応がみられた。火葬してそのまま副葬品とともに埋納されている可能性も考えられる。

SXD07（第299・300図）

9Ｘ・Ｙ（Ｄ区）で検出した。薪を燃やしたようで土坑一面に炭化材が広がっている。樹種同定を行ったところ広葉樹のコナラ・クヌギが確認された。SXD08に切られ、SXD08とセットになると思われる。灰釉陶器の小破片が出土している。火葬墓に関係するものかとリン・カルシウム分析を行ったが反応がなかった。4304、4305が出土している。碗であるが器高が低いが口径が広いタイプのものである。4305はSXD08から出土した破片とも接合している。

SXD08（第299・300図）

9Ｘ・Ｙ（Ｄ区）から検出した。検出当初は、消失住居跡かと考え掘削を始めたが住居跡の大きさの床面が検出されなかった。土坑の床にはSXD15と同じような白色粘土が厚さ５cmでひいてあり、そこに深橋前古窯で焼成された灰釉陶器の深碗が２つ固定してあった。この深碗は金属器（仏器）を模倣したような形状をしており、１つは口縁部を上にして（4307）、１つは口縁部を下にして（4308）白色粘土にしっかり押しつけてあり、上向きの碗の中にも白色粘土が入っていた。この２つの碗は口縁部が外に長く開く形をしており底径が小さいのが特徴である。SXD07を切っており、SXD07とセットである可能性が高い。SXD07で火を使う祭祀を行った後にすぐそばのSXD08で地鎮祭祀を行った可能性も考えられる。平安時代の火葬に伴う遺構ではないかと考え、人骨に反応しないかとリン・カルシウム分析を行ったが反応がすくなかった。比較資料として奈良時代の６号火葬墓の炭層も分析しているがこちらはしっかり反応している。直接火葬している可能性は低いようである。SXD15よりも規模も小さく工房跡というよりもまじないを行った祭祀的な性格の方が強いようである。

また、碗の4306と、SXD08土坑上層からは「大」の刻書のある灰釉陶器碗の底部破片が１点出土している（4372）。

SXD15（第301～305図）

10Ｚ・11Ｚ（Ｄ区）から検出した。3.6×3.4m、深さ0.3mの竪穴住居跡の形態をしている。北西の隅は残りが良く南東の隅（谷側）は流失して残りが悪い。竈がないかわりに中央部と北東の隅の２カ所に焼土が楕円形状に検出されているとともに、焼土周辺からはスサの混じった粘土の塊や素焼きで紐状粘土をねじった形のものが多く出土した（図版79参照）。スサの混じった粘土塊は古窯の窯壁に比べるとスサの成分が残っており（第６章胎土分析結果参照）1000℃以上ではあるが窯のような高温では焼かれていないことがわかった。何か火を伴う祭祀を行っていた可能性も考えられる。床面全体には厚さ15cmの白色粘土をひいている。ピットの形状に白色粘土が検出されていない部分もあり、柱穴の可能性もある。床面検出の際に北の壁際に１つ（4312）と西の壁際に１つ（4313）、白色粘土掘削時に西南の壁際に１つ（4314）で、計３つの灰釉陶器の碗が口縁部を上にして白色粘土の中に固定されていた。３つの碗は大きさも形もほぼ同じである。北壁際の碗は炭も伴っていた。おそらく白色粘土の床を張る前に地鎮祭祀で碗を据え、碗を覆うように白色粘土の床が張られたものと思われる。焼土は床を張った後に土坑を掘ってその中で焼いている。この他に深橋前古窯で焼成されたと思われる多量の灰釉陶器が、北東の隅からかたまって出土しており竪穴住居の廃棄の際に捨てられたものと思われる。この遺構は深橋前古窯とは谷を隔てて対岸にあり、日常生活を送る住まいではなく、一定期間使われた古窯に関連する作業場か、祭祀遺構である可能性が高い。窯からこの遺構への移動はＤ区で検出されている道路状遺構を利用しているものと思われる。当初碗が埋められた箇所が３つある点から、土坑墓で被葬者が３人ではないかと考え、人骨に反応しないかとリン・カルシウム分析を行ったが反応は出ていない。

4312～4340はSXD15から出土している。4312～4314は床面に据え置かれた碗、4315～4318は碗で器高が高く口径が広い、4319～4326は皿で4321・4326は底部外面に円文がある。4327～4330は大皿で4329は底部内面に円文があり4330は焼成不良で胴部内面に煤が付着している。4331は有台皿で口縁部の先と脚の先端部が外反している。4332は長頸瓶でSXD15とSXD16と灰原出土の破片が接合している。胴部下半分がSXD15から出土しており上半分が灰原から出土している。4333は壺の底部、4334は子持器台、4335・4337は鉢、4336は鉢でSXD15と灰原が接合している。4338～4340は皿状焼台で4340はSXD15と灰原７層出土の破片が接合している。

以上のことから、SXD15と灰原との接合関係を確認したのは碗・皿以外の器種のみであるが、ＳＸＤ15の北東隅から出土した灰釉陶器は灰原から運ばれたものであると考える。

SXD14（第300・303図）

10Ｚ・Ａ（Ｄ区）から検出した。薪を燃やしたようで、土坑一面に炭化材が広がっている。炭化材の樹種同定を行ったところ広葉樹のクヌギ節が確認された。灰釉陶器の破片が出土している。SXD07に類似しており、SXD07とSXD08のセット関係と同様にSXD15とセットになる可能性も考えられる。4309が出土している。口縁部が外反する皿である。

SXD16（第300・303図）

10Ａ（Ｄ区）から検出した。谷側が流失しており検出状況が悪く、また、浅く検出されており全形

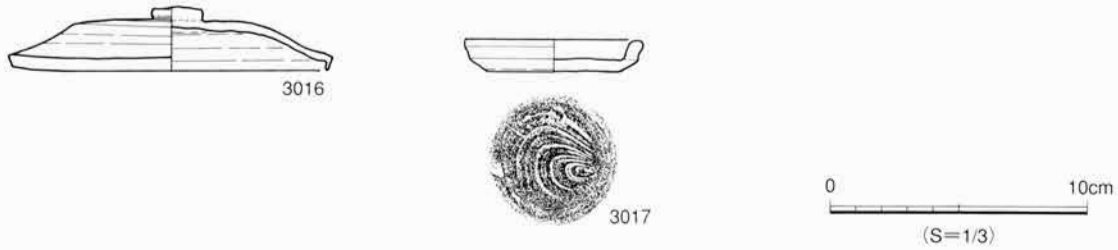


図297　Ⅴ期SXD13出土遺物（S=1/3）

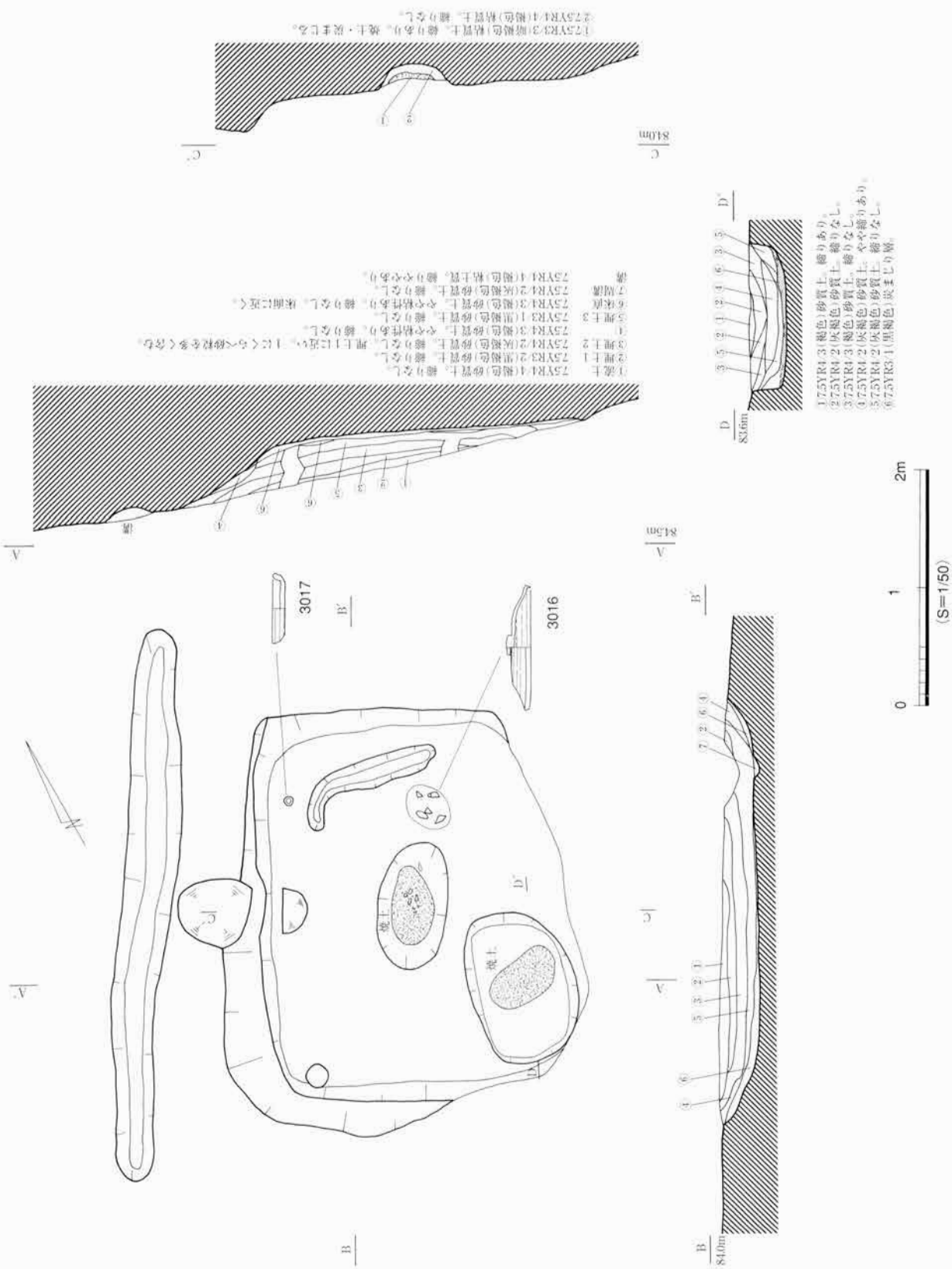


図298　Ⅴ期SXD13平面図・断面図（S=1/50）

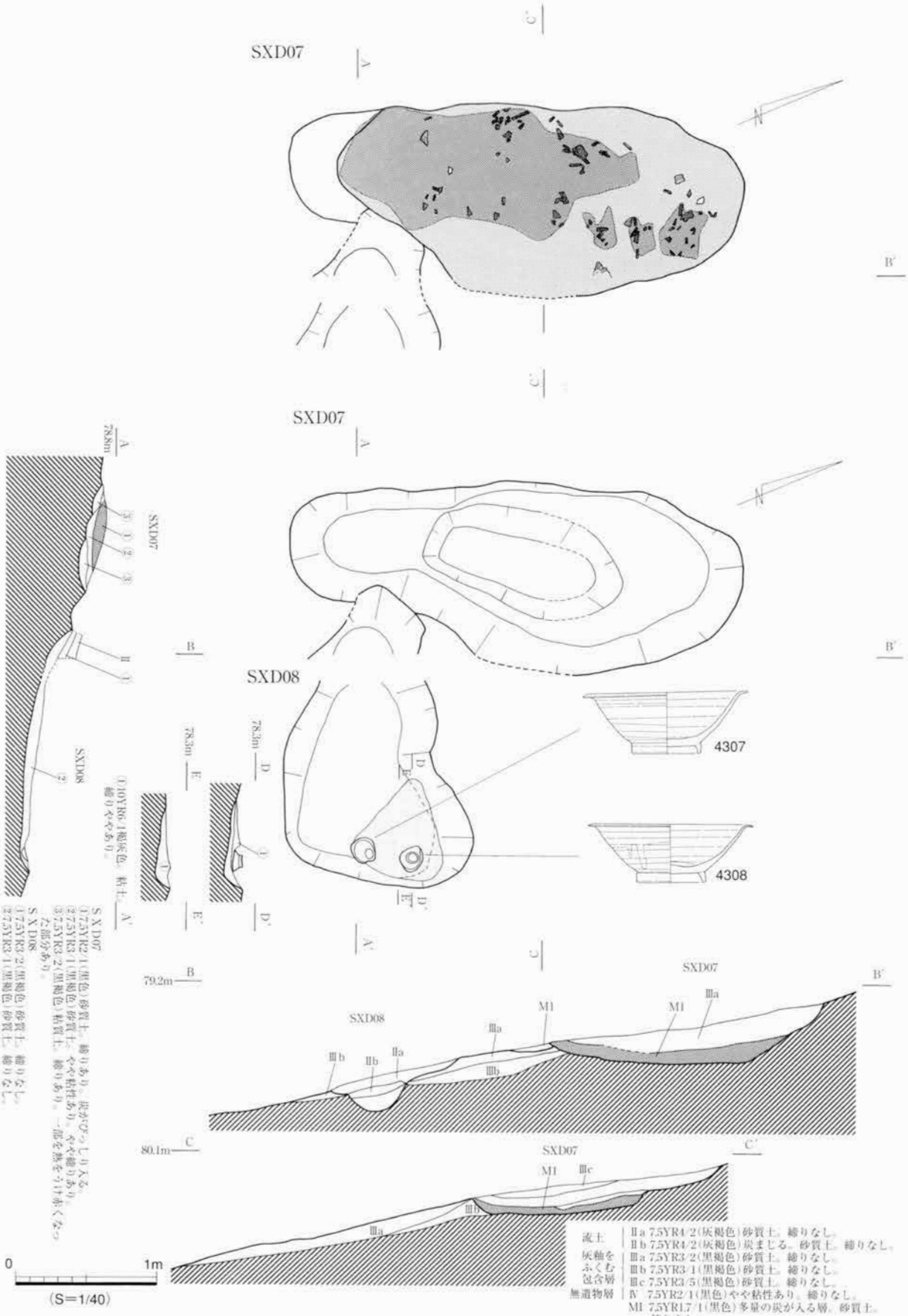


図299　Ⅴ期SXD07、SXD08平面図・断面図（S＝1/40）

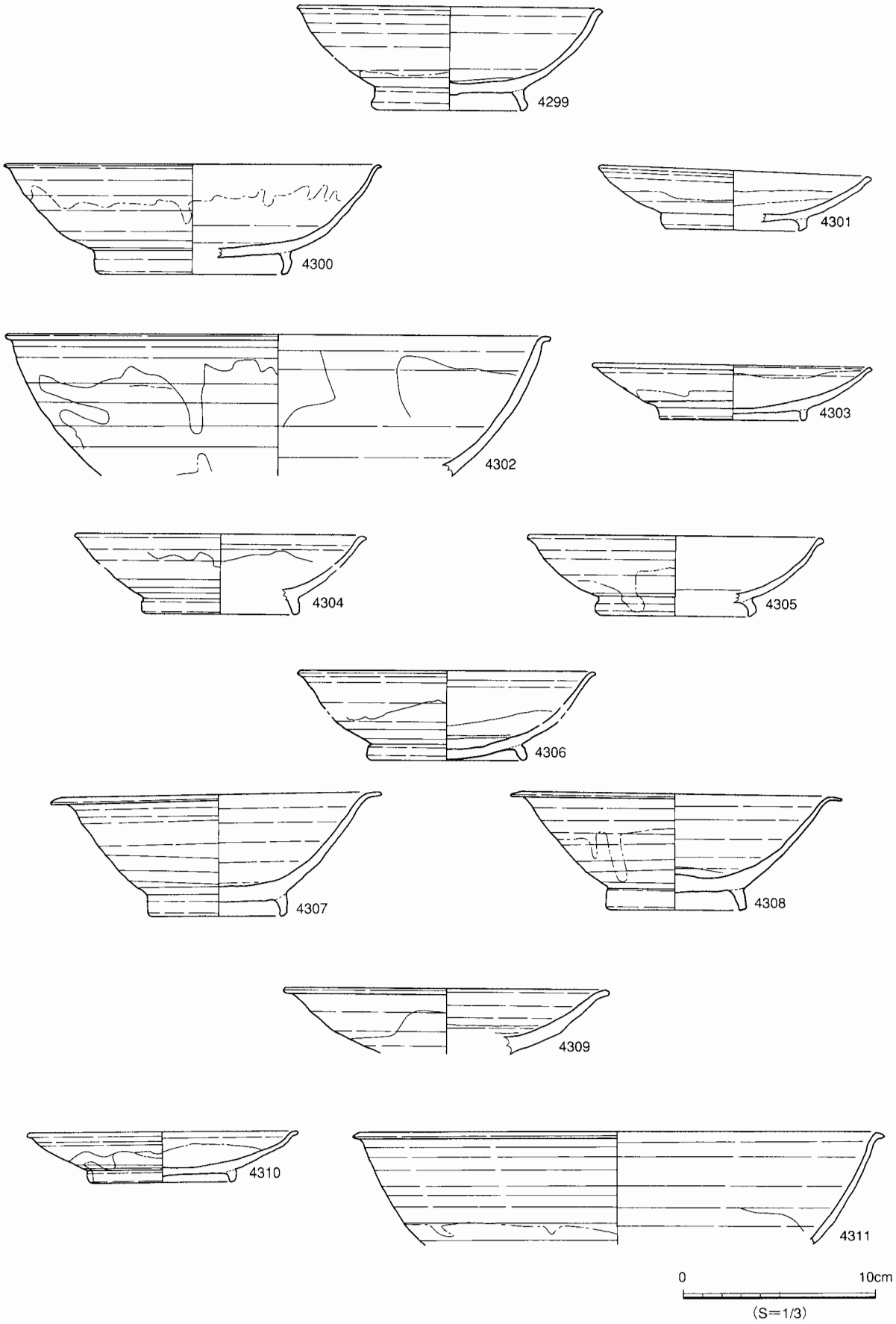


図300　Ⅴ期深橋前古墳・D区遺構出土遺物（S＝1/3）

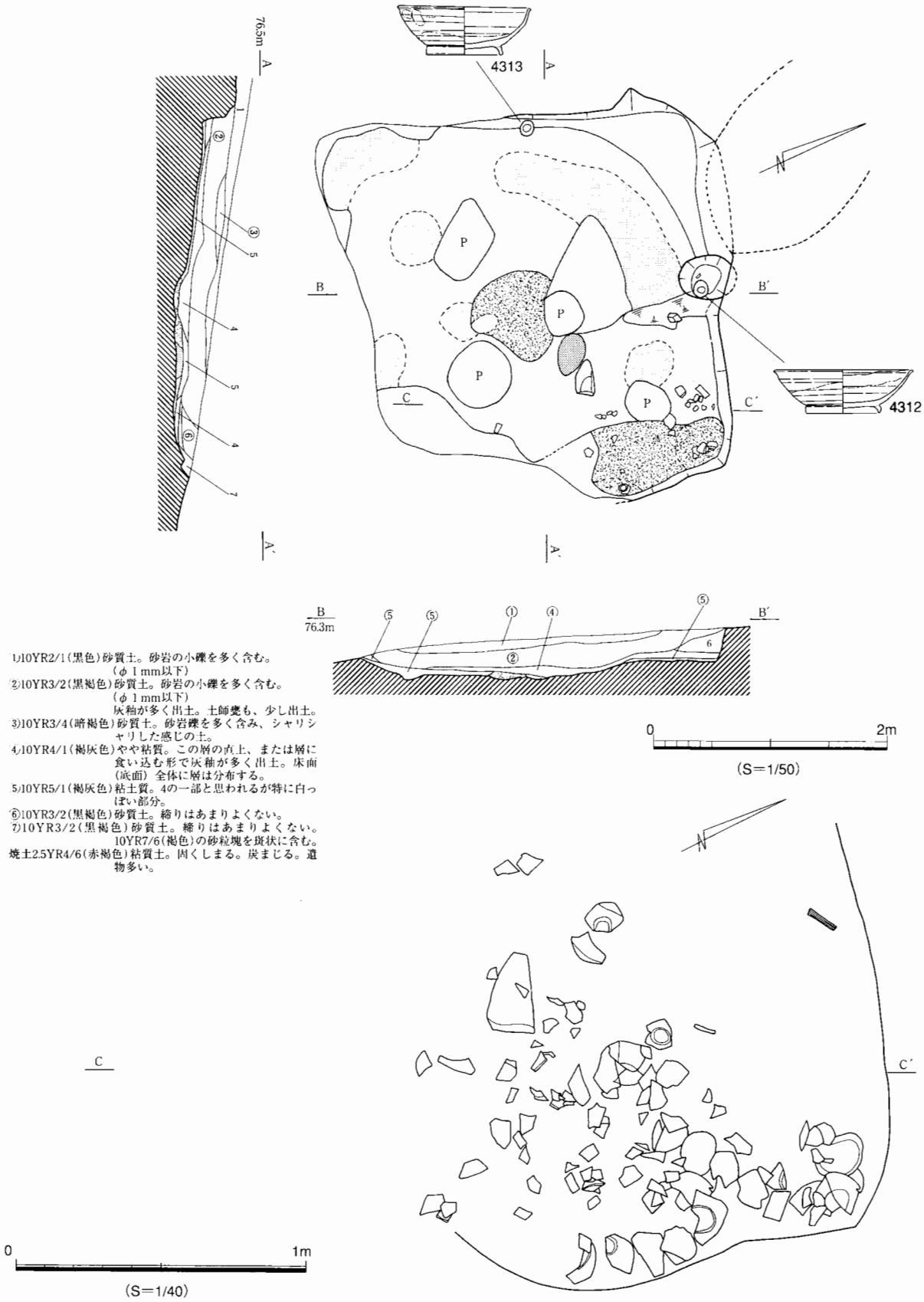
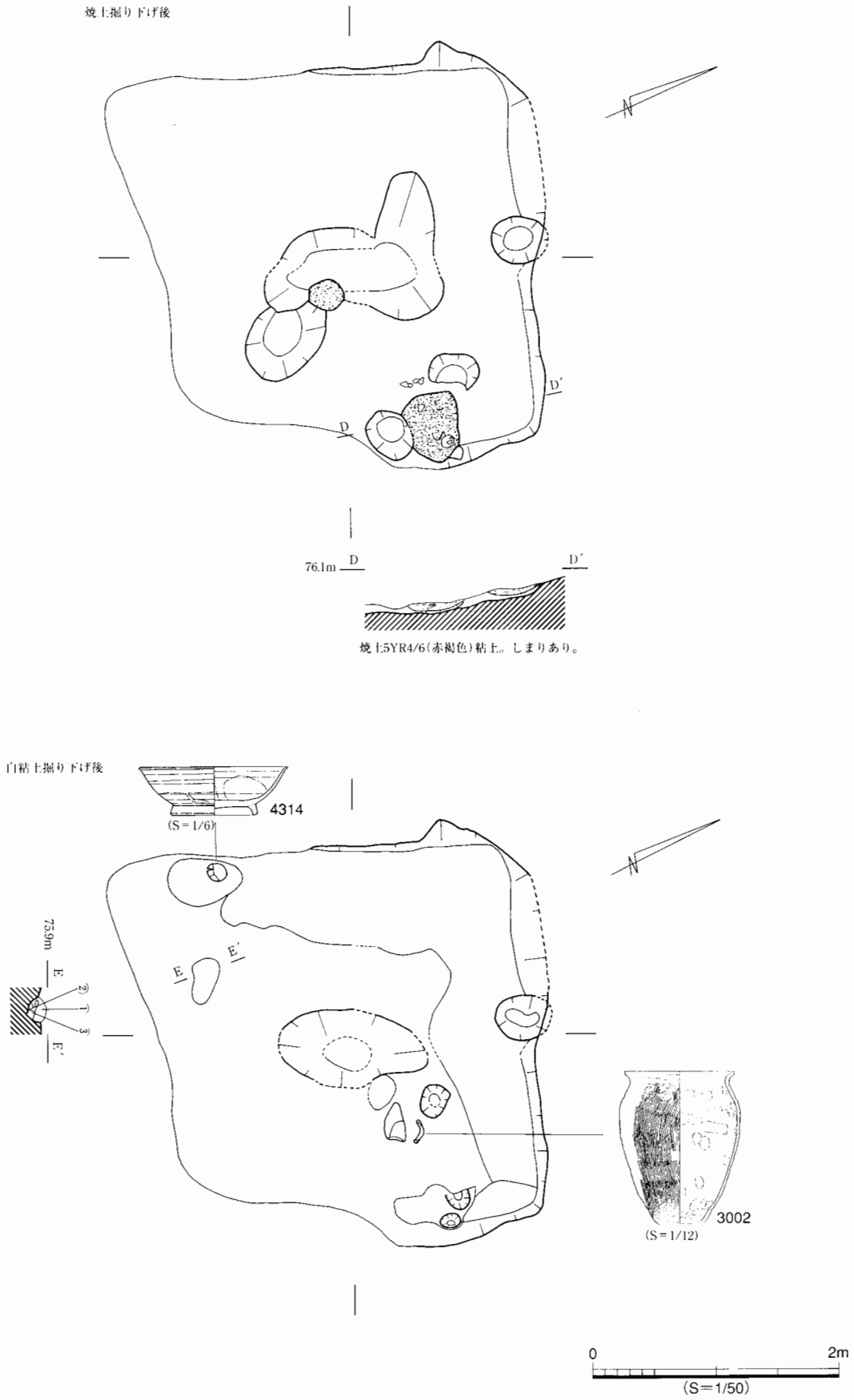


図301　Ⅴ期SXD15平面図・断面図（S=1/50）、遺物出土状況図（S=1/20）



①10YR7/1 灰白色粘土が主で10YR6/1褐灰色粘土が混じる。炭を多く含み、締りよくかたい。砂岩礫も含まれる。
②10YR6/1 褐灰色粘土。上記1の一部と考えてもよい。
③10YR4/2 灰黄褐色土。粘土と恵山の砂粒が混ざったような感じ。締りなくしめっているが、サラサラした感じ。

図302　SXD15平面図・断面図（S＝1/50）

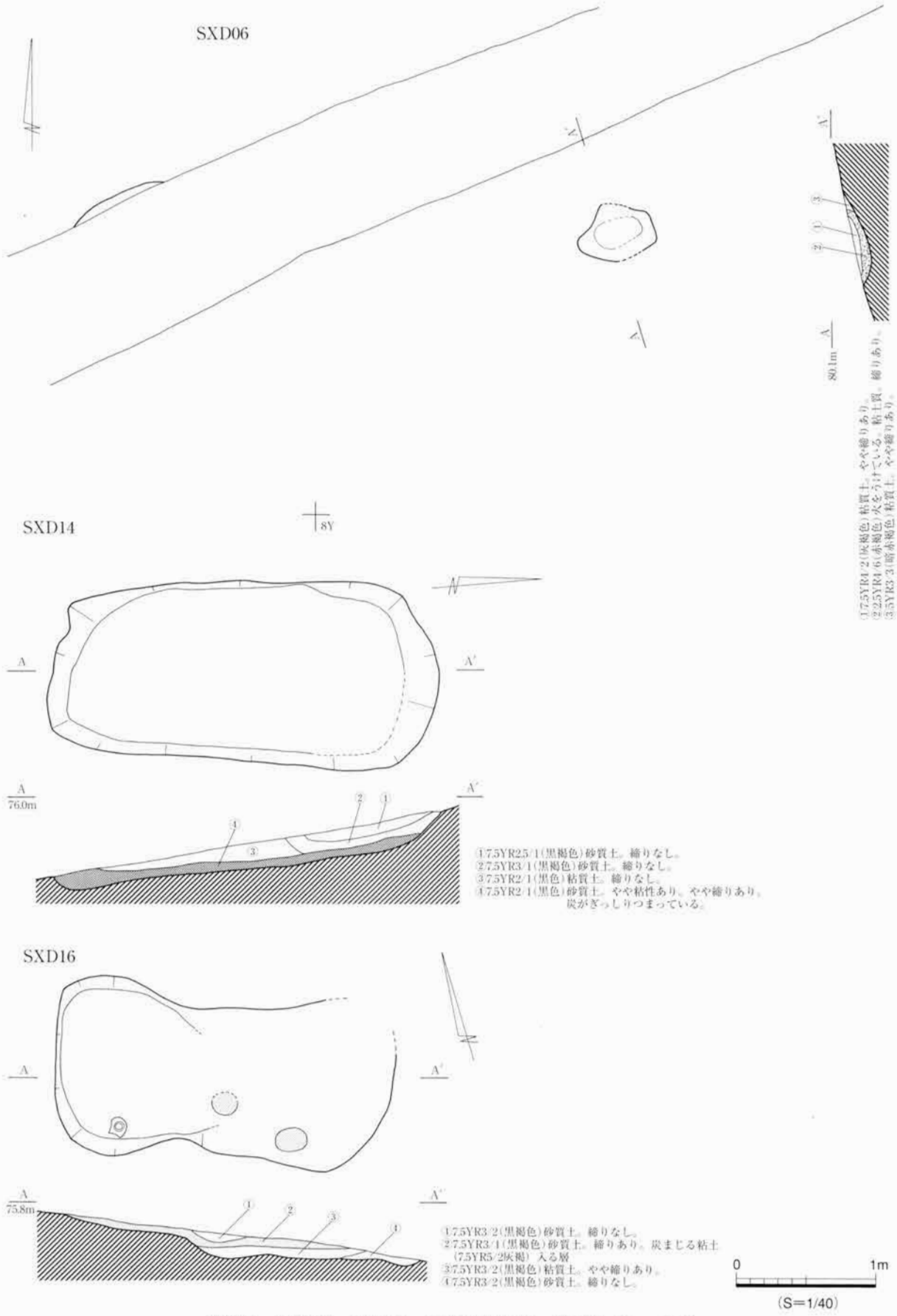


図303　SXD06、SXD14、SXD16平面図・断面図（S=1/40）

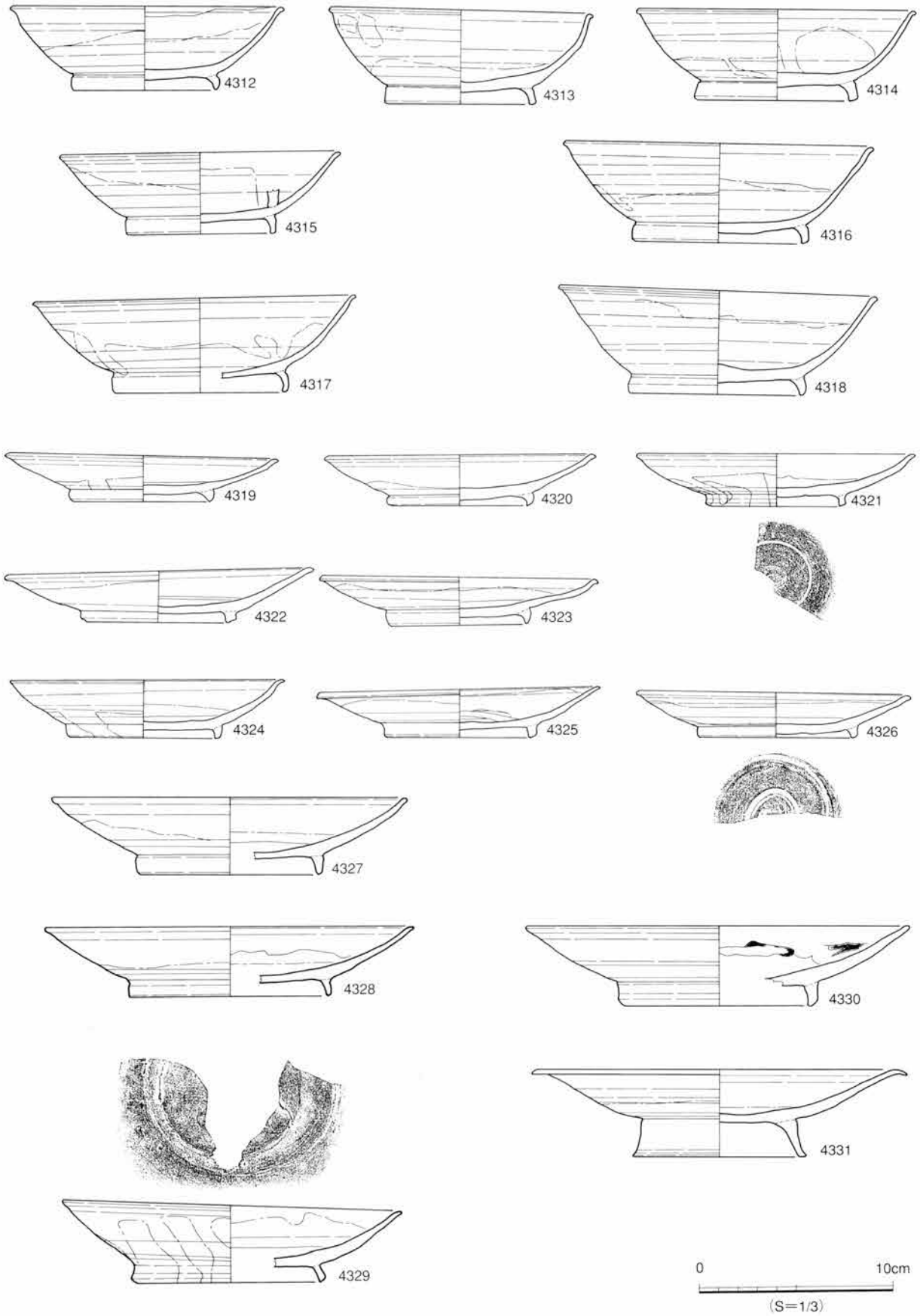


図304　Ⅴ期Ｄ区SXD15出土遺物①（S=1/3）

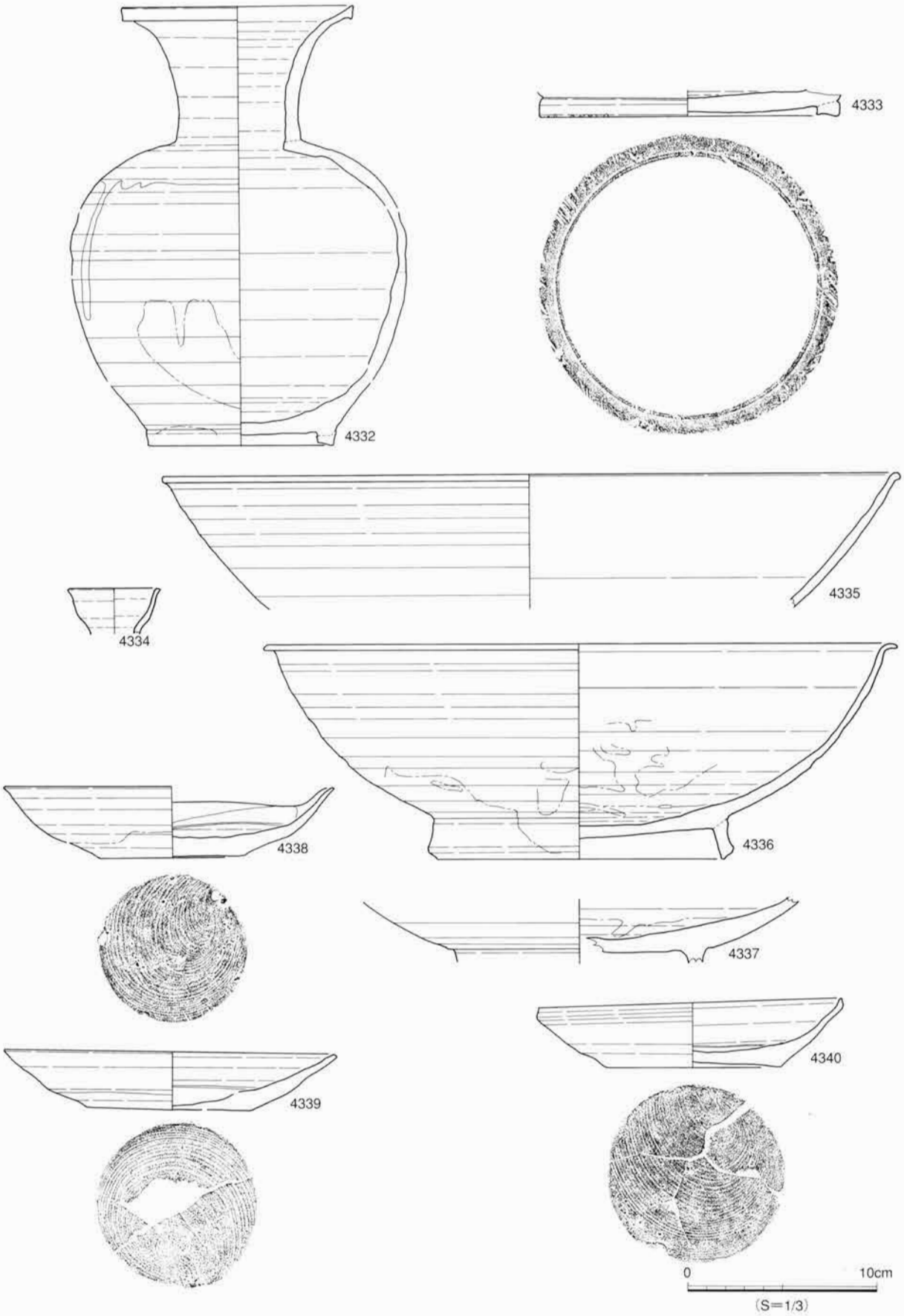


図305　Ⅴ期Ｄ区SXD15出土遺物②（S=1/3）

は不明である。SXD08やSXD5と性格が類似するようで、白色粘土がひかれている。薪を燃やしたようで土坑一面に炭化材が広がっている。灰釉陶器の破片も少し出土している。リン・カルシウム分析ではリンが少し反応している。4310と4311が出土している。4310は皿、4311は鉢である。

SXD06（第300・303図）

８Ｘ（Ｄ区）から検出した。平安時代の祭祀遺構としては一番最初に検出したもので、検出レベルから当初は弥生時代末～古墳時代初めの住居跡の炉跡の焼土を検出したと考えて掘削していたところ、住居跡の床面は検出できず焼土の周辺から灰釉陶器がたくさん出土した。試掘確認調査でＩ－４、Ｉ－６トレンチから多量の灰釉陶器が出土している。リン・カルシウム分析を行ったが反応はなかった。

4301～4303が出土しており、4300はSXD15から出土した破片とも接合している。4300は碗、4301・4303は皿、4302は鉢である。皿はやや深く胴部はまっすぐ立ち上がる。

SXD02（第249図）

Ｂ区25Bで検出した土坑で10世紀の土坑墓と同様に炭化物が多量に入っていた。灰釉陶器等の遺物は出土していない。SXB01のすぐ下（西側）から検出されSXB01を切っているようである。

土坑墓とは断定できないが10世紀の土坑墓に類似している。

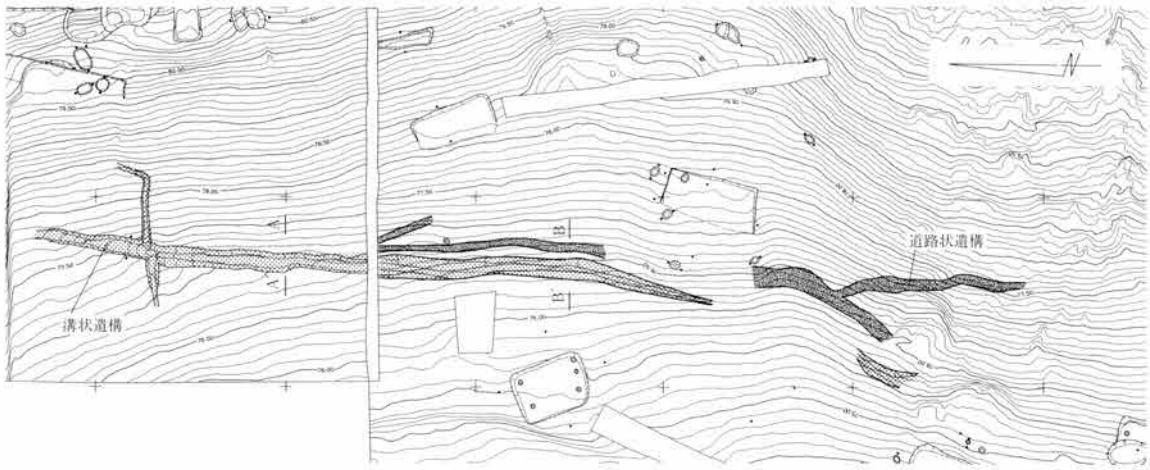
表5 遺構計測表

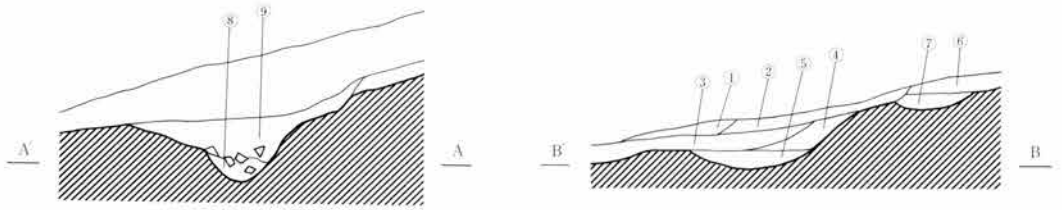
掲載遺構名	グリッド	地区	傾斜角度	海抜m	開放方向	主軸方位	長さ	幅	最大深さ	平面形	時期	掲載スケール	備　考
SXB01	25A,26A,25B,26B	Ｂ区	13.0	79.80	－	N-84°-E	8.25	7.20	0.80	楕円形		1/100	
SXB02	25B	Ｂ区	13.4	78.53	－	N-88°-E	3.95	1.10	0.22	楕円形	SXB01より新しい、SXB03と同じ平安	1/100	
SXB02	26B	Ｂ区	13.0	79.20	－	N-84°-E	1.60	1.40	0.30	長方形	SXB01より新しい	1/100	炭が出土
１号土坑墓	25C	Ｂ区	9.4	77.57	－	N-106°-E	0.61	(0.21)	0.32	楕円形	7C前半？6C前半？	1/20	
深橋前古窯跡	24-27W,X,26V	Ｂ区	19.8	82.61	西	N-84°-E	1.57	5.68	(0.74)	－	10C前半	1/20,200	
深橋前古墳	28-30e-h	Ｃ区	－	104.30	南	N-06°-E	－	－	－	不明	古墳時代末	1/40,200	
深橋前1号火葬墓	7V	Ｄ区	14.5	83.82	南？	N-18°-W	(0.49)	0.92	0.29	方形？	8C中葉	1/20	横瓶、蓋、鉸具、火葬骨出土
深橋前2号火葬墓	5Y	Ｄ区	14.9	81.45	－	N-78°-W	－	－	－	不明	8C中葉	1/10	小壺、蓋、火葬骨出土
深橋前3号火葬墓	2M	Ｅ区	15.7	77.30	南？	N-34°-W	－	－	－	不明	8C中頃以降	1/10	短頸壺、火葬骨出土
深橋前4号火葬墓	7I	Ｅ区	21.8	74.26	南？	N-59°-W	－	－	(0.11)	不明	8C中頃	1/10	短頸壺、蓋出土
深橋前5号火葬墓	7V	Ｄ区	8.1	82.94	南？	N-33°-W	0.40	0.45	0.11	方形？		1/20	
深橋前6号火葬墓	12V	Ｄ区	21.0	80.70	南？	N-21°-W	0.66	1.35	0.51	楕円形？		1/20	
深橋前1号小石室	4O	Ｅ区	10.2	71.05	－	N-48°-W	0.85	0.67	－	方形	7C末～8C前半	1/20	須恵器甕、土師器甕
2号土坑墓	9V	Ｄ区	19.0	82.46	－	N-14°-W	(0.46)	1.03	0.67	楕円形	7C後半	1/20	SBD08を切る、鉱滓出土
SXD06	8X	Ｄ区	19.3	80.01	－	N-18°-W	0.55	0.43	0.20	－	10C前半	1/40	
SXD07	9X,Y	Ｄ区	9.8	79.07	－	N-62°-W	3.26	1.32	0.42	－	10C前半	1/40	SXD08とセット
SXD08	9X,Y	Ｄ区	9.2	78.67	－	N-65°-W	1.37	2.10	0.38	－	10C前半	1/40	SXD07とセット
SXD13	3-4X,Y	Ｄ区	11.9	83.55	東南	N-65°-W	3.60	(2.80)	0.30	方形	9C前葉	1/50	
SXD14	10Z,A	Ｄ区	10.5	75.88	－	N-09°-W	1.31	2.76	0.48	長方形	10C前半？	1/40	灰釉陶器破片出土
SXD15	10-11Z	Ｄ区	7.6	75.89	東南?	N-72°-W	3.50	3.50	0.50	方形	10C前半？	1/50	SXD14とセットか？
SXD16	10A	Ｄ区	8.3	75.17	－	N-75°-W	1.28	2.41	0.34	－	10C前半？	1/40	灰釉陶器破片出土
10号土坑墓	11Z	Ｄ区	－	75.89	－	－	－	－	－	－	7C後半	1/50	SXD15に切られる。土師器甕

第６節 その他の遺構

道跡状遺構（SR01）

等高線に沿って歩いて踏み固められてできた幅50cm程の道路状遺構がＡ・Ｂ・Ｄ・Ｅ区から検出された。道路状遺構の断面は中央部が踏まれて窪んだ状態になっている。Ａ・Ｂ区では、24Ｙからほぼ南の方向に24Ｈまで続いている。ほとんどが24杭列上から検出された。24Ｙから23ｅまでは道跡の谷側に幅50cmの溝が伴いちょうど堤防のような形状になっている。時期は廻間Ⅰ式の住居跡より新しく、窯を使っていた時期と同時期か、それよりも新しい時期のものと考えられる。ちょうど灰原の周辺から始まっていることと、道路状遺構周辺や溝内からは焼台や灰釉陶器が出土していることも興味深い。おそらく窯から谷向のSXD15周辺への移動はこれらの道路状遺構が使われたものと思われる。





①10YR6/8（明黄褐）砂礫を含む。
②10YR4/6（褐）砂質土。締りなし。砂礫を含む。
③10YR3/4（暗褐）砂質土。締りあり。
④10YR5/6（黄褐）砂礫を含む。
⑤10YR4/6（褐）砂質土。締りなし。
⑥10YR7/6（明黄褐）粘質土。締りあり。
⑦10YR4/3（にぶい黄褐）砂質土。締りなし。粘質土塊を含む。
⑧10YR2/1（黒）砂質土。砂礫を含む。焼き台を多く含む
⑨10YR1.7/1（黒）砂質土。砂礫を含む。

図306　道路状遺構実測図

第７節　Ⅵ期の包含層出土遺物

4341～4375はＤ区包含層出土の灰釉陶器で、4376はＥ区包含層出土の灰釉陶器である。4341～4351は碗で、4343は内外面に4346は外面に煤が付着している。4347・4350は底部外面に爪形状圧痕がある。4347は器高が低く胴部は丸みをおびて立ち上がり口径が広い。4351は高台に茎の圧痕がみられる。4352・4353は深碗で両方とも口縁はまっすぐ立ち上がる。4352は底部内面に円文がみられる。4354～4359は皿、4360・4361は大皿の底部で底部内面に円文がみられる。4362～4365は碗か皿か器種不明のもので、口径が広く胴部がやや丸みをもってゆるやかに立ち上がる。皿になると思うが器高が高いものである。4364は底部外面に回転糸切り痕が残存している。4366は壺の頸部、4367は壺の肩部で四耳壺か三耳壺になると思われる。4368は壺の肩部でＤ区とＥ区が接合した。4369は瓶の胴部下半分から底部にかけて、4370は鉢である。4371は碗でＤ区包含層とSRD08が接合している。底部内面に印刻花文がみられ、内面には煤が付着している。4372は碗の底部で底部内面に「大」の文字がみられる。4376は甕の胴部で破片を焼台として利用している。

山茶碗

①小皿（310図）

5006～5009で、22Hなどの灰原周辺から出土している。

②碗（310図）

5001～5005で、23Ｂ・Ｚ、25Ｃ・Ｖ、27Wなどの灰原周辺からと24W、25Wなどの灰原から出土している。5001は白土原１号窯に比定する、底部破片で底部外面には回転糸切りが残り、高台には籾殻痕がみられる。5002～5004は大畑大洞１号窯に比定する。5005は口縁部破片で14、15世紀と思われる。

中近世陶器

5010～5013で、5010はＤ区出土のかわらけで鎌倉時代、5011はＥ区出土で15世紀後半、5012はＡ区出土の灯明皿で幕末～明治時代、5013はＡ区出土で幕末のものである。

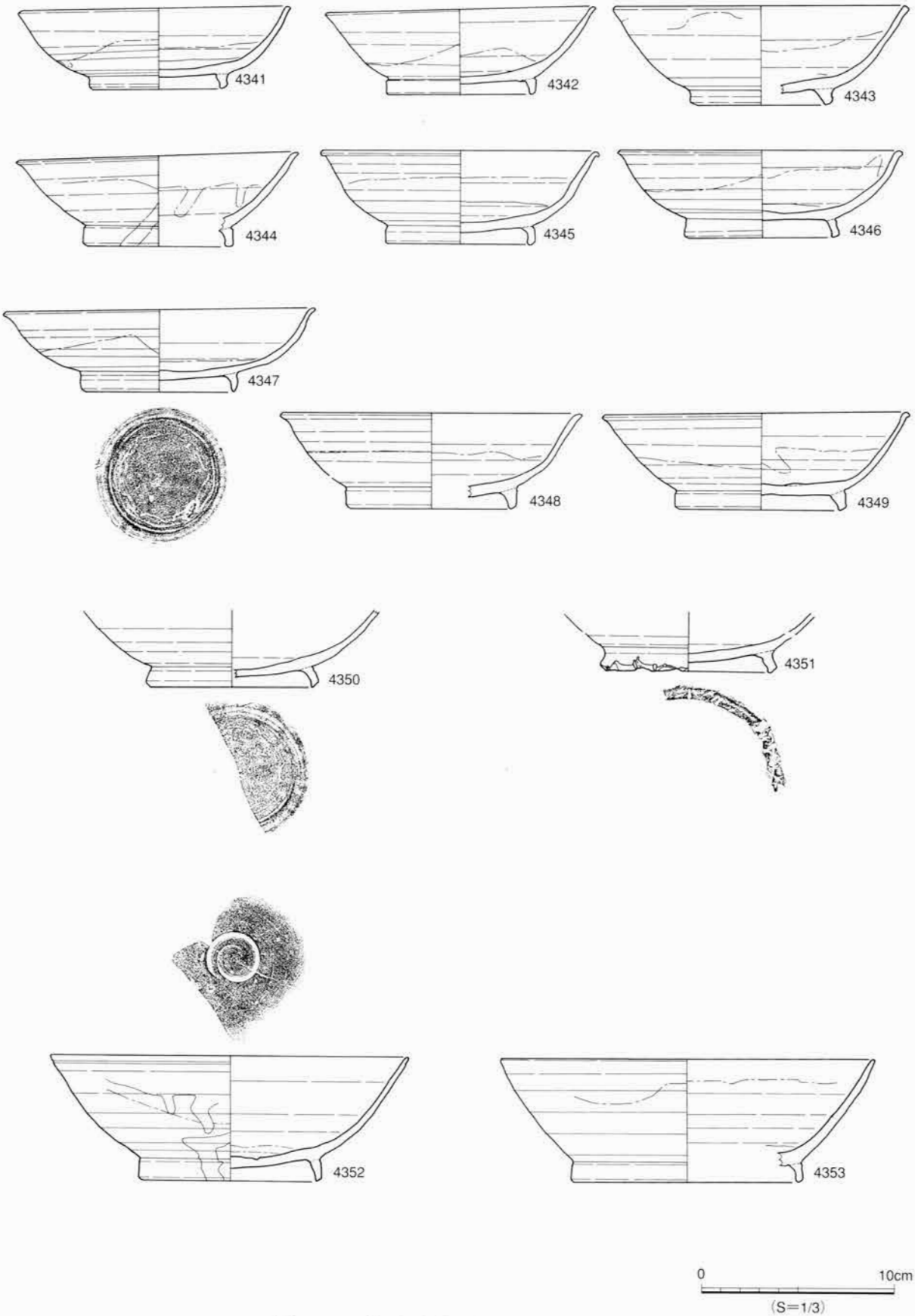


図307　Ⅴ期D区包含層出土遺物①（S=1/3）

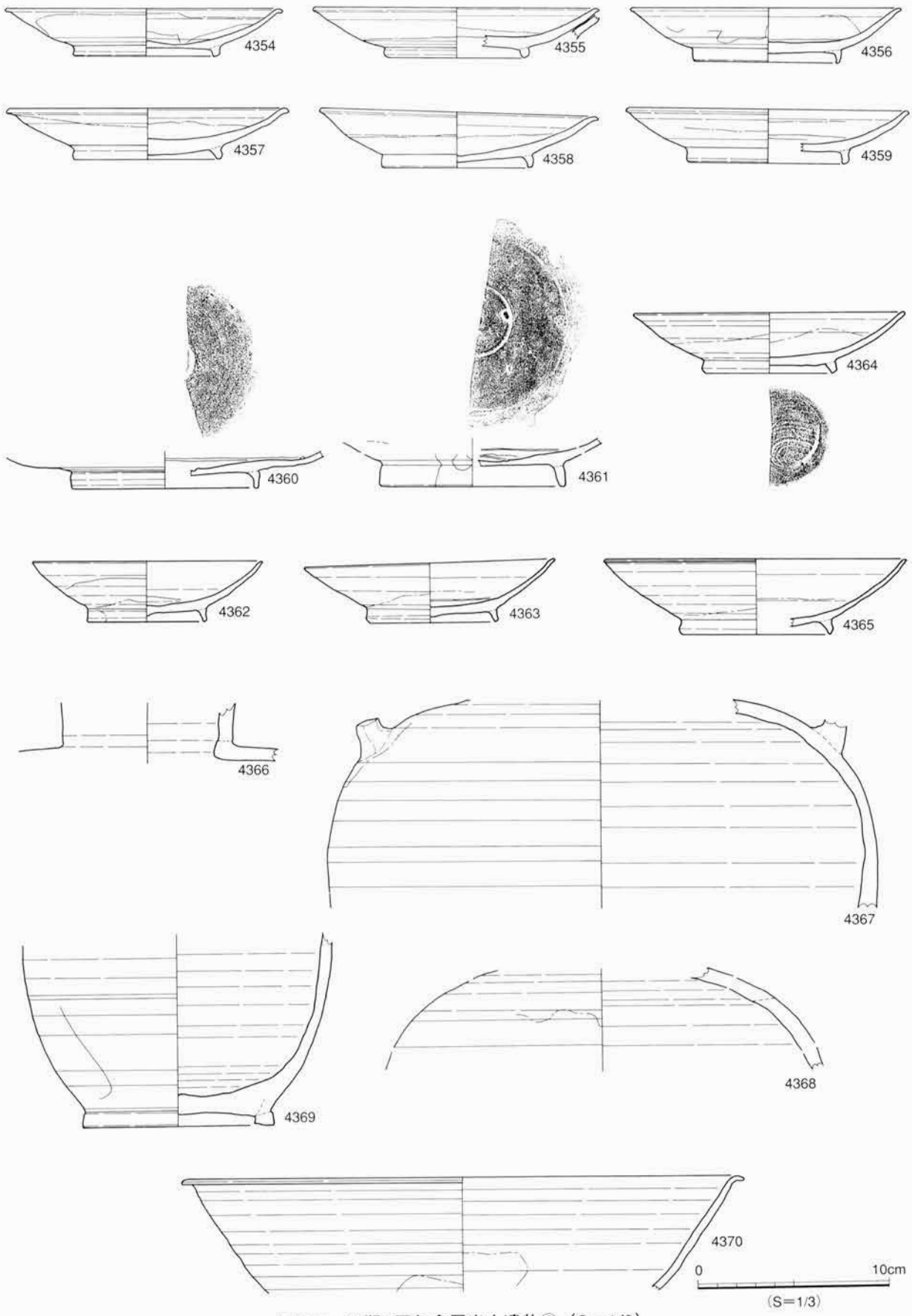


図308　Ⅴ期D区包含層出土遺物②（S=1/3）

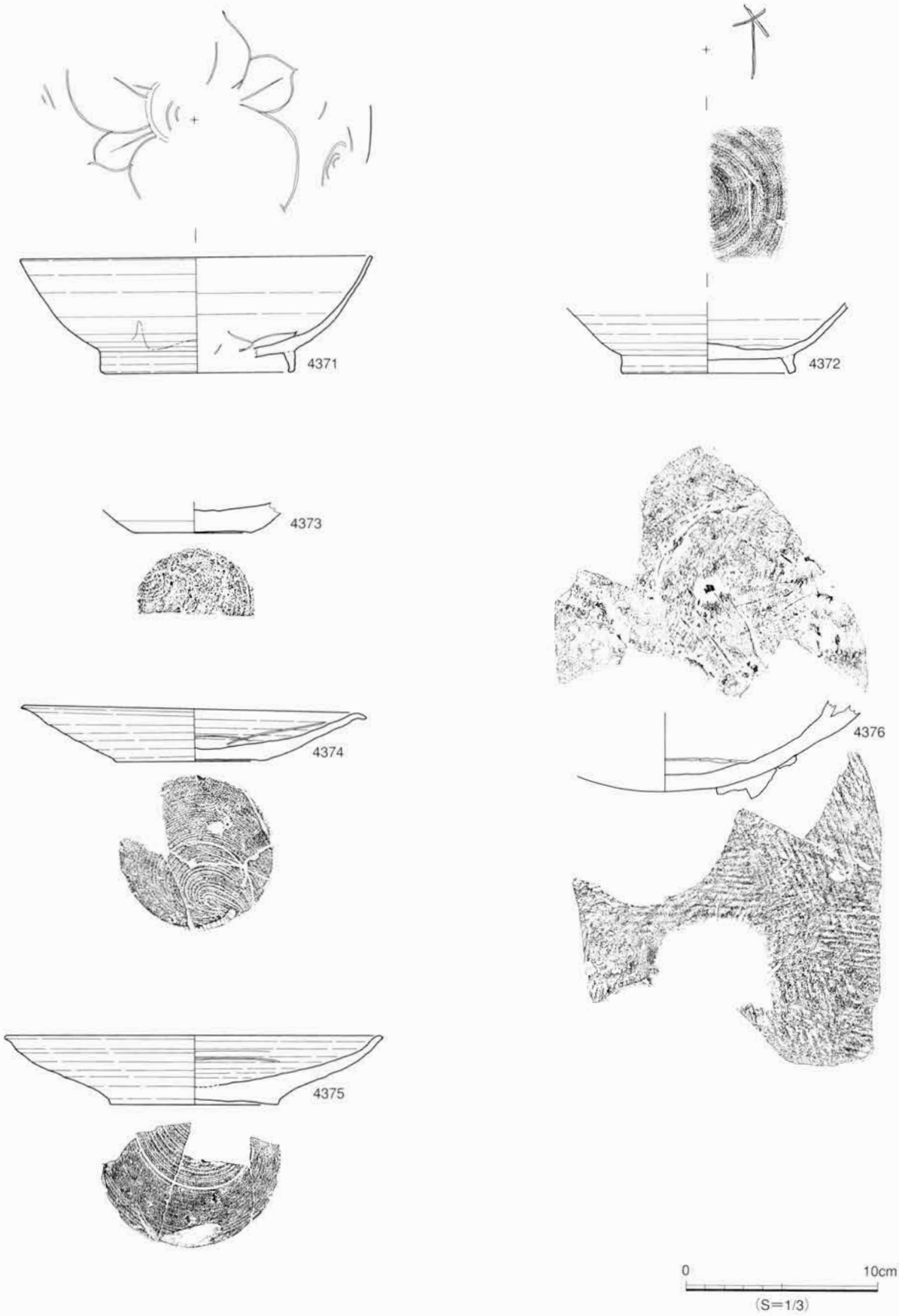


図309　Ⅴ期D、E区包含層出土遺物③（S=1/3）

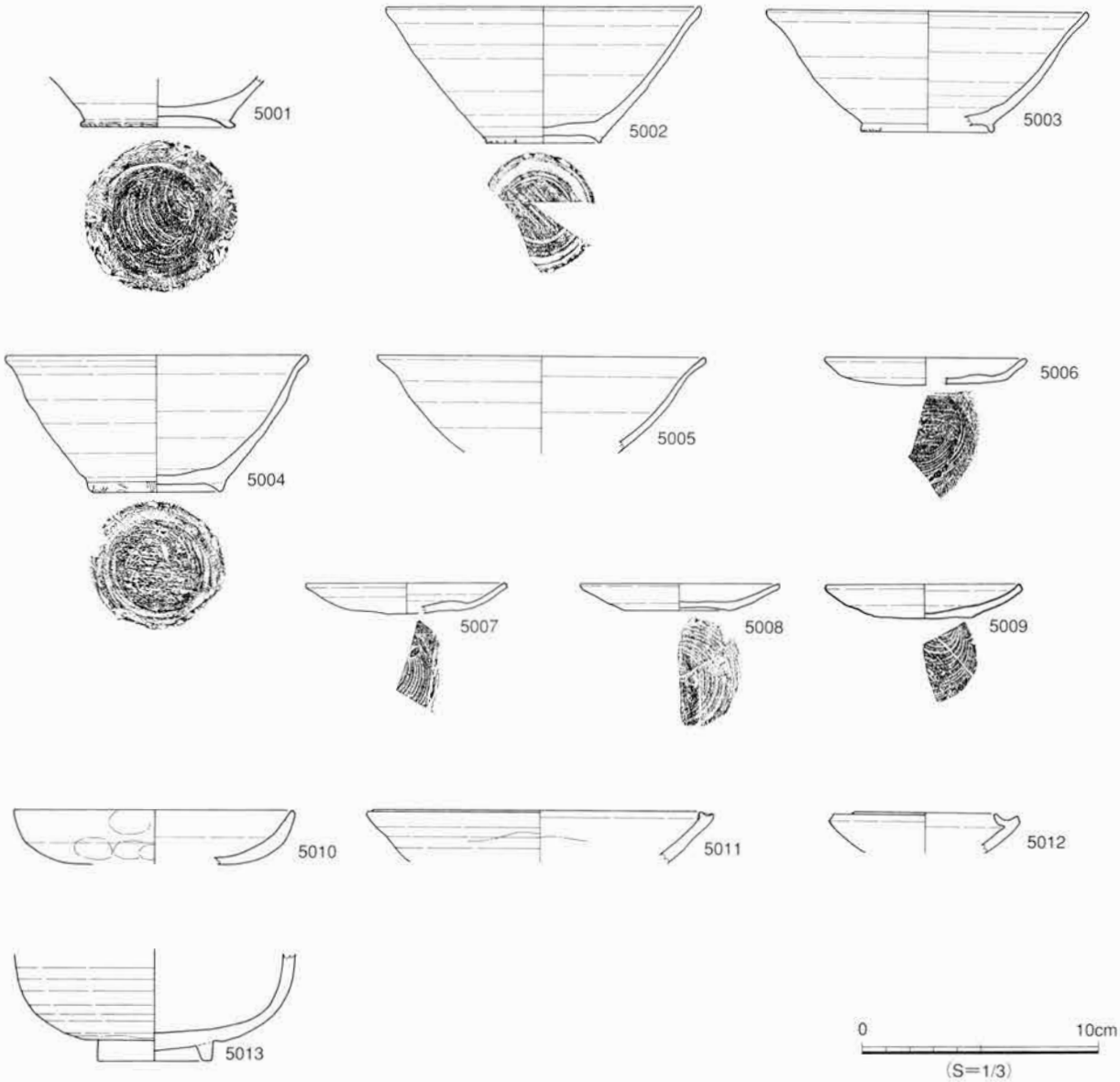


図310　Ⅵ期中近世陶器（S=1/3）

報告書抄録

ふりがな	ふかばしまえいせき
書名	深橋前遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第79集
編著者名	松岡千年　安田正枝
編集機関	財団法人　岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　TEL 058-237-8550
発行年月日	西暦2003年3月20日

ふりがな 集録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
深橋前遺跡	関市下有知深橋前・小和田	21205	09075	35°	136°	1997.4.24～	関テクノハイ
深橋前古墳	関市下有知深橋前	21205	09076	30′	55′	1998.12.10	ランド開発
深橋前古窯跡	関市下有知深橋前	21205	09080	44″	30″		
深橋前 1～3号火葬墓	関市下有知深橋前	21205	09077～ 09079				
深橋前 4～6号火葬墓	関市下有知深橋前	21205	09245～ 09247			12,800m²	

集録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
深橋前遺跡 深橋前古墳 深橋前古窯跡 深橋前1～6号火葬墓	集落跡 古墳 古窯跡 火葬墓	弥生末～平安末	竪穴住居 80軒 方形周溝墓 4基 古墳 1基 古窯跡 1基 小石室 1基 火葬墓 6基 土坑墓 5基	弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 金属製品 石器 石製品	弥生時代末から古墳時代初頭の急傾斜地に造られた竪穴住居跡から、多くの土器とともに、銅鏃・筒状銅製品が出土。須恵器・灰釉陶器を火葬壺とする火葬墓を6基確認。 平安時代後期の灰釉陶器窯跡から線刻の文字・文様を持つ碗などが多く出土。

岐阜県文化財保護センター　調査報告書　第79集

深　橋　前　遺　跡

2003年3月20日

編集・発行　財団法人　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1
印　　刷　槌谷印刷株式会社